

南方（済生会）遺跡

— 木 器 編 —

岡山市教育委員会

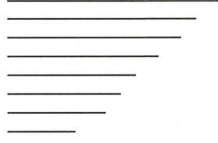
2 0 0 5



1. 赤彩紋高杯(564)



2. 赤彩紋縦杓子(532)



1. 黒漆塗りジョッキ (545)



2. フォーク・さじ



1. 木甲



2. 武器形

南方(濟生会)遺跡

—木器編—

岡山市教育委員会

2005

序

岡山市域の中央に位置します旭川流域は、広大な沖積平野が形成されており、列島社会に稲作文化が伝わって以来、常に豊かな実りを人々に約束してきた地でありました。そのことを示すように、古代以来の人々が生活し、文化を育んできた証であります遺跡の密度は、ずば抜けております。墳長が150mにも達する神宮寺山古墳、地方では極めて稀な壇正積基壇をもちます賞田廃寺などの著名な遺跡も数多くあります。かつて「大和」と匹敵する勢力を誇っていたとされる「吉備」の中心地の一つであることはまちがいありません。

南方遺跡は、ゆくゆくはそういった大きな勢力を、生み出すこととなる母体の一つであり、弥生時代における瀬戸内の代表的な遺跡として、注意されてきておりました。南方(済生会)遺跡は、岡山済生会総合病院の施設建設に伴って、発掘調査されました。多数出土した木製品は、土器や石器だけではわからない弥生時代の生活を、生々しく伝えるものとして注目され、調査中にも幾度となく報道機関にも取り上げられました。

本報告書は、たくさん出土した遺構や遺物の中で、特に木製品を取り上げて報告したものです。弥生時代の人々の生活を明らかにする基本資料として、多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と、見学にお越しのみなさん方に数々のご教示をいただきました。そして、岡山済生会総合病院および関係者のみなさんにもご理解とご協力いただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成17年3月31日

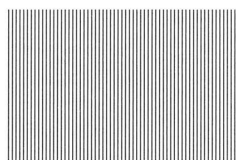
岡山市教育委員会

教育長 玉光 源爾

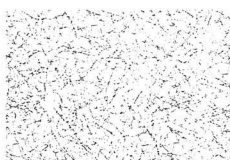
例 言

1. 本書は、岡山市教育委員会が岡山済生会総合病院施設建設に伴い、平成4年度から8年度に行った発掘調査の内、南方(済生会)遺跡の報告書の木器編である。
2. 発掘調査は岡山市教育委員会社会教育部文化課(現 生涯学習部文化財課)が行い、扇崎由・安川 満が担当した。
3. 本書の作成は平成15年・16年度で行い、編集執筆は扇崎が担ったが、調査時における安川との検討や実測図作成時の観察記録が土台となっている。
4. 木製品の実測は上地洋子・風早さゆり・木寅厚子・小宮山泰子・西本尚美・延原経子・山元尚子・安川・扇崎が、浄書は上西高登・平野晶子・石井・扇崎が行い、岡山顕子・加藤美穂の協力を得た。
5. 木製品の保存処理は吉田生物研究所に依頼し、併せて樹種同定も行った。また、大型品・いわゆる製品以外の木製品・未処理の木製品については藤井裕之氏(京都大学大学院生)に依頼している。
6. この報告書に掲載していない木製品についても本書の刊行とともに公表したものと見なす。
7. この報告書に関わる出土遺物・実測図・写真などは、岡山市教育委員会にて保管している。

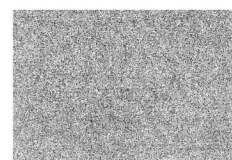
凡 例



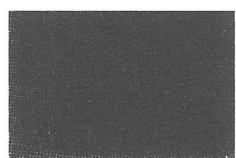
欠損



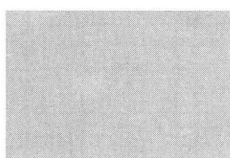
炭化



樹皮



黒漆



赤漆

目 次

1. 木製品の概要と調査の方法	1
2. 報告書の作成	2
3. 工具	3
4. 農具	11
5. 紡織具	55
6. 漁労具	57
7. 武器	65
8. 服飾具	87
9. 食器具・容器	89
10. 楽器	125
11. 祭祀具	127
12. 雑具	129
13. 建築部材	160
14. 用途不明品	205

挿 図 目 次

第1図 斧直柄(1)	3	第18図 曲柄鋏(5)	25
第2図 斧直柄(2)	4	第19図 曲柄鋏(6)	26
第3図 斧直柄(3)	5	第20図 曲柄鋏(7)	27
第4図 斧直柄(4)	6	第21図 泥除(1)	29
第5図 斧膝柄(1)	8	第22図 泥除(2)	30
第6図 斧膝柄(2)・のみ形	10	第23図 組合せ鋤(1)	32
第7図 直柄鋏(1)	12	第24図 組合せ鋤(2)	33
第8図 直柄鋏(2)	13	第25図 組合せ鋤(3)	34
第9図 直柄鋏(3)	14	第26図 組合せ鋤(4)	35
第10図 直柄鋏(4)	15	第27図 組合せ鋤(5)	36
第11図 直柄鋏(5)	17	第28図 組合せ鋤(6)	37
第12図 直柄鋏(6)	18	第29図 組合せ鋤(7)	38
第13図 直柄鋏(7)	19	第30図 組合せ鋤(8)	39
第14図 直柄鋏(8)・曲柄鋏(1)	21	第31図 一木鋤(1)	40
第15図 曲柄鋏(2)	22	第32図 一木鋤(2)・掘り棒	41
第16図 曲柄鋏(3)	23	第33図 一木鋤(3)	42
第17図 曲柄鋏(4)	24	第34図 柄(1)	43

第35図	柄(2).....	44	第82図	合子(2).....	106
第36図	白(1).....	46	第83図	深型容器.....	108
第37図	白(2).....	47	第84図	皿(1).....	109
第38図	白(3)・杵(1).....	48	第85図	皿(2).....	110
第39図	杵(2).....	49	第86図	皿(3).....	112
第40図	杵(3)・横槌(1).....	50	第87図	皿(4).....	113
第41図	横槌(2)・木鎌(1).....	52	第88図	皿(5).....	114
第42図	木鎌(2).....	53	第89図	皿(6).....	115
第43図	コテ・ソリ・作業台・田下駄.....	54	第90図	皿(7).....	116
第44図	紡織具.....	56	第91図	皿(8), 槽・盤(1).....	117
第45図	網杵(1).....	58	第92図	槽・盤(2).....	118
第46図	網杵(2).....	59	第93図	槽・盤(3).....	119
第47図	網杵(3).....	60	第94図	槽・盤(4).....	120
第48図	網杵(4)・ヤス.....	61	第95図	槽・盤(5).....	121
第49図	櫛(1).....	62	第96図	槽・盤(6).....	122
第50図	櫛(2)・弓(1).....	63・64	第97図	底・蓋ほか.....	123
第51図	弓(2).....	66	第98図	台.....	124
第52図	弓(3).....	67	第99図	琴.....	126
第53図	木甲(1).....	70	第100図	祭祀具.....	128
第54図	木甲(2).....	71	第101図	箱(1).....	130
第55図	楯(1).....	73	第102図	箱(2).....	131
第56図	楯(2).....	75	第103図	箱(3).....	132
第57図	楯(3).....	76	第104図	箱(4).....	134
第58図	楯(4).....	77	第105図	箱(5).....	135
第59図	楯(5).....	78	第106図	箱(6).....	136
第60図	楯(6).....	79	第107図	腰掛け・机.....	137
第61図	武器形(1).....	80	第108図	ハケ・ヘラ状.....	139
第62図	武器形(2).....	81	第109図	叩き板状(1).....	140
第63図	西川津遺跡出土鐔形土製品.....	82	第110図	叩き板状(2).....	141
第64図	武器形(3).....	84	第111図	火きり臼・杵.....	142
第65図	棍棒(1).....	85	第112図	把手.....	143
第66図	棍棒(2).....	86	第113図	すくい具(1).....	144
第67図	服飾具.....	88	第114図	すくい具(2).....	145
第68図	さじ(1).....	90	第115図	すくい具(3).....	146
第69図	さじ(2).....	91	第116図	すくい具(4).....	147
第70図	さじ(3).....	92	第117図	自在鉤(1).....	149
第71図	杓子(1).....	94	第118図	自在鉤(2)・鉤状木製品.....	150
第72図	杓子(2).....	95	第119図	多枝付木製品.....	151
第73図	杓子(3).....	96	第120図	竿受け(1).....	152
第74図	ジョッキ(1).....	98	第121図	竿受け(2).....	153
第75図	八日市地方遺跡のジョッキ.....	99	第122図	竿受け(3).....	154
第76図	ジョッキ(2)・コップほか(1).....	100	第123図	竿受け(4).....	155
第77図	コップほか(2).....	101	第124図	竿受け(5).....	156
第78図	高杯(1).....	102	第125図	竿受け(6).....	157
第79図	高杯(2).....	103	第126図	竿受け(7).....	158
第80図	高杯(3).....	104	第127図	器具部材.....	159
第81図	合子(1).....	105	第128図	はしご(1).....	161

第129図	はしご(2)	162
第130図	扉板	163
第131図	建築部材(1)	164
第132図	建築部材(2)	165
第133図	建築部材(3)	166
第134図	建築部材(4)	167
第135図	建築部材(5)	168
第136図	建築部材(6)	169
第137図	建築部材(7)	170
第138図	建築部材(8)	171
第139図	建築部材(9)	172
第140図	建築部材(10)	174
第141図	建築部材(11)	175
第142図	建築部材(12)	176
第143図	建築部材(13)	177
第144図	建築部材(14)	178
第145図	建築部材(15)	179
第146図	建築部材(16)	180
第147図	建築部材(17)	182
第148図	建築部材(18)	183
第149図	建築部材(19)	184
第150図	建築部材(20)	185
第151図	建築部材(21)	187
第152図	建築部材(22)	188
第153図	建築部材(23)	190
第154図	建築部材(24)	191
第155図	建築部材(25)	192
第156図	建築部材(26)	193
第157図	建築部材(27)	194
第158図	建築部材(28)	195
第159図	建築部材(29)	197
第160図	建築部材(30)	198
第161図	建築部材(31)	199
第162図	建築部材(32)	200
第163図	建築部材(33)	201
第164図	建築部材(34)	202
第165図	建築部材(35)	203
第166図	建築部材(36)	204
第167図	桶状木製品(1)	206
第168図	桶状木製品(2)	207
第169図	透かし入り鋤状(1)	209
第170図	透かし入り鋤状(2)	210
第171図	透かし入り鋤状(3)	211
第172図	透かし入り鋤状(4)	212
第173図	透かし入り鋤状(5)	213
第174図	透かし入り鋤状(6)	214
第175図	有孔板(1)	216

第176図	有孔板(2)ほか	217
第177図	不明(1)	218
第178図	不明(2)	219
第179図	不明(3)	221
第180図	不明(4)	222
第181図	不明(5)	224
第182図	不明(6)	225
第183図	不明(7)	226
第184図	不明(8)	227
第185図	不明(9)	228
第186図	加工棒(1)	230
第187図	加工棒(2)	231
第188図	加工棒(3)	233
第189図	加工棒(4)	234
第190図	加工棒(5)	236
第191図	加工棒(6)	237
第192図	加工棒(7)	238
第193図	加工棒(8)	239
第194図	加工棒(9)	241
第195図	加工棒(10)	242
第196図	加工棒(11)	243
第197図	加工棒(12)	244
第198図	加工棒(13)	245
第199図	加工棒(14)	246
第200図	加工棒(15)	247
第201図	加工棒(16)	248
第202図	残核	249
第203図	土器(1)	296
第204図	土器(2)	297
第205図	土器(3)	298
第206図	土器(4)	299
第207図	土器(5)	300
第208図	土器(6)	301
第209図	土器(7)	302
第210図	土器(8)	303
第211図	土器(9)	304
第212図	土器(10)	305
第213図	土器(11)	306
第214図	土器(12)	307
第215図	土器(13)	308

表 目 次

木器観察表251

土器観察表309

図 版 目 次

卷頭図版 1-1	赤彩紋高杯(564)	10-4	組合せ平鋤(199)出土状況
1-2	赤彩紋縦杓子(532)	10-5	組合せ三又鋤(214)出土状況
卷頭図版 2-1	黒漆塗りジョッキ(545)	10-6	えぶり(89)
2-2	フォーク・さじ	図 版11-1	泥除未成品(152)
卷頭図版 3-1	木甲	11-2	織機(314)
3-2	武器形	11-3	白(252)出土状況
図 版 1-1	北東部全景	11-4	白(253)出土状況
1-2	北西部全景	11-5	竪杵(281)出土状況
1-3	南東部全景	11-6	竪杵(283)出土状況
図 版 2-1	南西部全景	図 版12-1	木鎌(307)
2-2	鍬(52)出土状況	12-2	木鎌(307)拡大
2-3	鍬(56)出土状況	12-3	櫛(340)出土状況
図 版 3-1	鍬(65)出土状況	12-4	櫛(343)出土状況
3-2	一木鋤(218)出土状況	12-5	弓(350)結び目
3-3	一木鋤(219)出土状況	12-6	弓(350)骨角器
図 版 4-1	櫛(327)出土状況	図 版13-1	木甲(369)
4-2	戈の柄(443)出土状況	13-2	木甲(370)
4-3	戈の柄(443)出土状況細部	13-3	木甲(371)
図 版 5-1	楯(421)出土状況	13-4	木甲(376)
5-2	コップ(559)出土状況	13-5	木甲(372)
5-3	皿(608)出土状況	13-6	木甲(379)
図 版 6-1	竿受け(773)出土状況	13-7	木甲(378)
6-2	建築部材出土状況 1	13-8	木甲(380)
6-3	建築部材出土状況 2	13-9	木甲(382)
図 版 7-1	建築部材(866)出土状況	図 版14-1	木甲(383)
7-2	建築部材(884)出土状況	14-2	木甲(404)
7-3	棚	14-3	楯(416)表
図 版 8-1	編物出土状況	14-4	楯(416)裏
8-2	つる出土状況	図 版15-1	石鍬の刺さった楯(434)表
8-3	土器・木器出土状況	15-2	石鍬の刺さった楯(434)裏
図 版 9-1	斧直柄(3)	15-3	槍形(445)
9-2	斧膝柄(23)	15-4	戈形(442)
9-3	斧膝柄(29)	15-5	戈の柄(443)装着部
9-4	のみ形(34)	15-6	鉄剣形(446)
9-5	直柄広鍬未成品(38)	図 版16-1	剣形(444)表
9-6	組合せ鋤未成品(166)	16-2	剣形(444)裏
図 版10-1	直柄広鍬(77)出土状況	図 版17-1	刀形(447)
10-2	曲柄平鍬(92)出土状況	17-2	刀形(450)
10-3	曲柄二又鍬(117)出土状況	17-3	銅剣形(451)

	17-4	銅剣形(453)	25-3	威儀具(672)下
	17-5	銅剣形(454)	25-4	威儀具(672)上
	17-6	銅剣形(455)	図 版26-1	威儀具(673)
図	版18-1	剣把(457)	26-2	威儀具(674)
	18-2	剣把(458)	26-3	威儀具(675)
	18-3	衣笠(479)	26-4	陽物形(677)
	18-4	棍棒(459)	26-5	箱の蓋(683)
	18-5	棍棒(464)	26-6	刳抜式箱(684)
	18-6	棍棒(465)	26-7	刳抜式箱(691)
図	版19-1	かんざし	26-8	刳抜式箱(689)
	19-2	かんざし(468)	図 版27-1	組合せ式箱(695)
	19-3	さじ(481)	27-2	組合せ式箱(696)
	19-4	さじ(497)	27-3	組合せ式箱(699)
	19-5	さじ(490)	27-4	火きり臼(737)
	19-6	フォーク(496)	27-5	腰掛け(706)
図	版20-1	縦杓子(525)	図 版28-1	ヘラ状(720)
	20-2	縦杓子柄(526)	28-2	ヘラ状(716)
	20-3	赤彩紋縦杓子(532)	28-3	ヘラ状(724)
	20-4	異形杓子(557)	28-4	すくい具(747)出土状況
	20-5	黒漆塗りジョッキ(545)外	28-5	すくい具(747)
	20-6	黒漆塗りジョッキ(545)内	28-6	すくい具(752)
図	版21-1	ジョッキ(546)外	28-7	多枝付木製品(769)
	21-2	ジョッキ(546)内	図 版29-1	自在鉤(759)
	21-3	ジョッキ(546)出土状況	29-2	自在鉤(761)
	21-4	コップ(559)	29-3	はしご(809)出土状況
	21-5	脚付カップ(560)	29-4	栓(924)
	21-6	コップ(563)	29-5	竿受け(771)出土状況
図	版22-1	合子蓋(584)外	29-6	竿受け(774)出土状況
	22-2	合子蓋(584)内	図 版30-1	榎状木製品(1027)
	22-3	合子(581)外	30-2	建物線刻板(1169)
	22-4	合子(581)内	30-3	透かし入り鋤状(1034)
	22-5	合子(585)外	30-4	有孔板材(893)出土状況
	22-6	合子(585)内	30-5	編物出土状況
図	版23-1	高杯(578)出土状況	30-6	編物出土状況
	23-2	皿(609)出土状況	図 版31-1	つる出土状況
	23-3	皿(607)	31-2	つる出土状況
	23-4	皿(612)	31-3	つる出土状況
	23-5	皿(619)	31-4	つる出土状況
	23-6	大皿(626)	31-5	壺
図	版24-1	大皿(628)	31-6	壺
	24-2	赤彩紋皿(629)	図 版32-1	壺
	24-3	脚付盤(634)	32-2	壺
	24-4	底(659)	32-3	甕
	24-5	琴(670)表	32-4	壺・甕・高坏
	24-6	琴(670)裏	32-5	壺・台付鉢
図	版25-1	威儀具(672)表	32-6	石器
	25-2	威儀具(672)裏		

1. 木製品の概略と調査の方法

調査区の北側と南側とに微高地があって、北側を微高地 1 南側を微高地 2 と呼称、この間が浅い谷状になっていた。この谷状部分に急激に水が流れたことにより河道(河道 1)に変わったとみられる。大半の木製品は河道 1 が流路変化後(河道 2)、埋没過程の中で南方遺跡の中心部となる微高地 2 側からの投棄によるものである。このほか数は少ないが、河道 1 埋没にさかのぼる木製品として微高地 2 沿いに掘られた溝群 S D 162・249・550・551 や貝層下の土坑 S K 562 から出土している。

調査区を 4 分割して調査を行った事による各小調査区間の土層の対応関係の把握は、不十分である。当初河道 3 ととられていた部分について、河道 1 の下流部分であることが判明した事による河道の上流下流の関係、また、細かな層位からなる貝層をはさんでの対応関係など、出土物に裏付けされた形での整理はようやく土器の洗浄が終了した現段階では大きな課題として残っている。大まかな時期観は 12 層が弥生中期後半、13 層・河道 3 上部・河上層・河中层が中期中葉から後半、14 層・河下層が中期中葉に相当する。なお、本書の終わりに完形に近い土器を参考として掲載した。

調査は木製品の現場での乾燥を防ぐために取り上げを重視し、全体での検出状況の写真撮影や図化は行わず、組み合って出土しているものや取り上げ後の維持の困難なものについて個別的に図化・写真撮影を行った。掘り上げた木器類については、調査区にわき出る地下水を利用して掘り下げと平行して洗浄作業を行い、製品・加工痕のあるもの・加工痕のないものに大まかに分類し、製品・加工痕のあるものを持ち帰った。

出土した木製品は、斧直柄・斧膝柄・のみ形などの工具、直柄鋏・曲柄鋏・泥除・組合せ鋤・一木鋤・掘り棒・柄などの農耕土木具(本書では農具の中に一括)、杵・横槌・木鎌・コテ・ソリ・作業台・田下駄などの農具、織機の部材・かせ・糸巻きなどの紡織具、網杵・ヤス・櫂などの漁労具、弓・木甲・楯・武器形・棍棒などの武器・武具、かんざし・衣笠状木製品などの服飾具、さじ・杓子・ジョッキ・コップ・高杯・合子・深型容器・皿・槽・盤・底・蓋・台などの食事具・容器、琴、威儀具・陽物形木製品などの祭祀具、箱・腰掛け・机・ハケ・ヘラ状・叩き板状・火きり臼・火きり臼杵・把手・すくい具・自在鉤・多枝付木製品・竿受け・器具部材などの雑具、はしご・扉板・柱・横架材・垂木・板材などの建築部材、樋状木製品・透かし入り鋤状・有孔板などの用途不明品などが出土している。

このなかで、コップやジョッキといった深さのある容器は、外形や器壁の薄さとあわせて刳物技術の高さを物語っている。大小そろった四角や丸形の皿・さじ・コップ・ジョッキといった種類の豊富な食器は、当時の食事内容・食事形態を考える意味でも重要である。南方(済生会)遺跡出土の木製品は、別に改めて報告する骨・角・貝製品とあわせて、弥生中期における中部瀬戸内での有機質遺物の大要をつかむことができるものと思われる。

木製品の種類や部分名称については、基本的には『木器集成図録 近畿原始編』⁽¹⁾(以下、木器集成と略)によるが、同書にない木製品や名称は適宜追加し、一部改めた部分がある。全般的な記述に当たっては、『木器集成』および『考古資料大観』⁽²⁾によるところが大きい。

2. 報告書の作成

平成15・16年度に本書作成のため、岡山済生会総合病院の経費負担により、未洗浄であった土器の洗浄・復原・実測、木器の整理・実測を行った。

報告書の作成体制は以下の通りである。

教 育 長	玉光源爾
生涯学習部次長兼文化財課長	出宮徳尚
文化財専門監兼埋蔵文化財センター所長	根木 修
調 整 主 幹	小林好美(平成15年度)
主 査	神谷正義(平成15年度)
文化財副専門監	神谷正義(平成16年度)
主 任	福永みどり
主 任	扇崎 由
文化財保護主事	安川 満
嘱 託	石井亜希子(平成16年度)

調査・報告書の作成に当たっては多くの方々にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略)

浅岡俊夫 阿刀弘史 阿部芳郎 荒井 格 飯塚武司 石井扶美子 石川日出志 石野博信
伊藤健司 伊東隆夫 稲田孝司 井上智博 岩永省三 上原真人 内田律雄 大谷弘幸 大塚和義
大橋隆司 岡田文男 岡部裕俊 岡村道雄 小川一洋 小田富士雄 甲斐昭光 甲斐博幸
笠原 潔 狩野 久 神谷正弘 亀山行雄 北浦弘人 喜谷美宣 木村紀子 木村有作 久々忠義
葛原克人 久保弘道 工楽善通 黒崎 直 桑原久男 高妻洋成 河本 清 甲元眞之 小林青樹
小林謙一 小山田宏一 近藤 敏 近藤義郎 斎野裕彦 坂井秀弥 佐々木由香 佐藤浩司
佐原 真 清水玲子 高垣陽子 高谷和生 武末純一 田崎博之 谷口 肇 都出比呂志
坪井清足 寺沢 薫 中川正人 中川 寧 中川律子 新納 泉 西尾太加二 西川 宏
西原礼之助 瀬川佳男 橋 雅子 橋本達也 橋本正博 春成秀爾 樋上 昇 比佐陽一郎
福岡澄男 福永伸哉 福田さよ子 藤井裕之 藤尾慎一郎 藤丸詔八郎 別府洋二 細見啓三
穂積裕昌 本田光子 マーク・ハドソン 間壁忠彦 松井 章 松木武彦 松永通明 水内昌康
光谷拓実 宮野淳一 宮崎泰史 村上由美子 望月由佳子 森 格也 森田翠玉 森田 稔
山口譲治 山口松太 山下平重 山田昌久 山本悦世 湯村 功 吉田 広

3. 工具

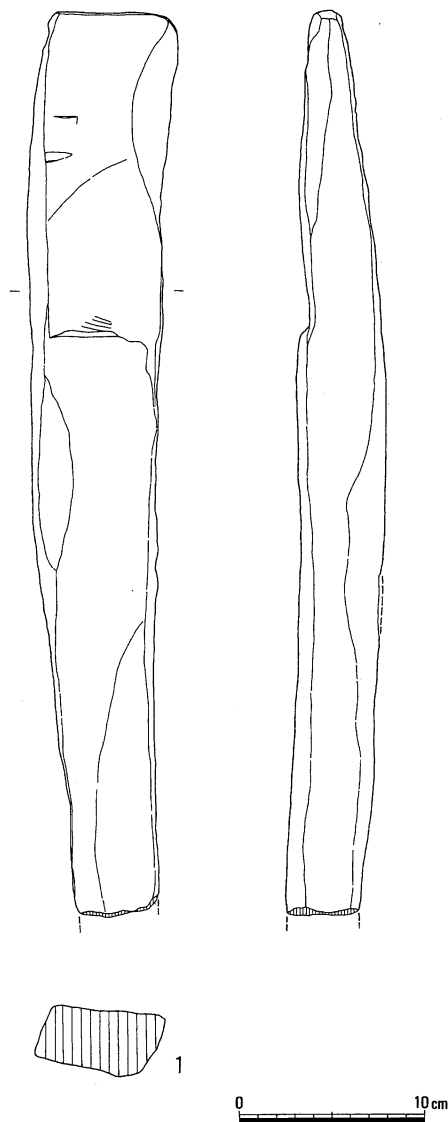
工具には石斧の直柄・膝柄、鉄斧の膝柄、のみ形がある。後述のように南方(済生会)遺跡では木器未成品も出土していて、集落内で木器製作を行っていたことは確実で、それに見合う各種の石器が出土している(写真図版参照)。しかし、それを装着する柄の方はといえば、柱状片刃石斧・方柱状石斧の柄が出土しておらず、また扁平片刃石斧の柄も必ずしも十分ではない。また、精巧品⁽³⁾については細部の工程で鉄器が使用されたことは十分想定できるし、出土したのみ形の鉄器⁽⁴⁾もそれを裏付けるものであるが、それに見合う柄も出土していない。

斧直柄

斧の直柄は樹種が判明しているものではカシの柾目材を用いて作られていて、西日本での通有のあり方を示している。この柄には蛤刃石斧が装着されるが、未成品を除くと全形がわかるものはない。南方(済生会)遺跡出土の斧の直柄の中で、頭部の全形が判る資料で見ると、装着される石斧の幅は頭部長の1/2か、それをやや下回る程度である。出土した直柄は蛤刃石斧出土資料のうち、最も点数の多い幅5~8cmの石斧が装着すると見られる。幅5cm未満の小形石斧や10cmを超える大形石斧の成品・未成品も出土しているが、それに見合う直柄は出土していない。

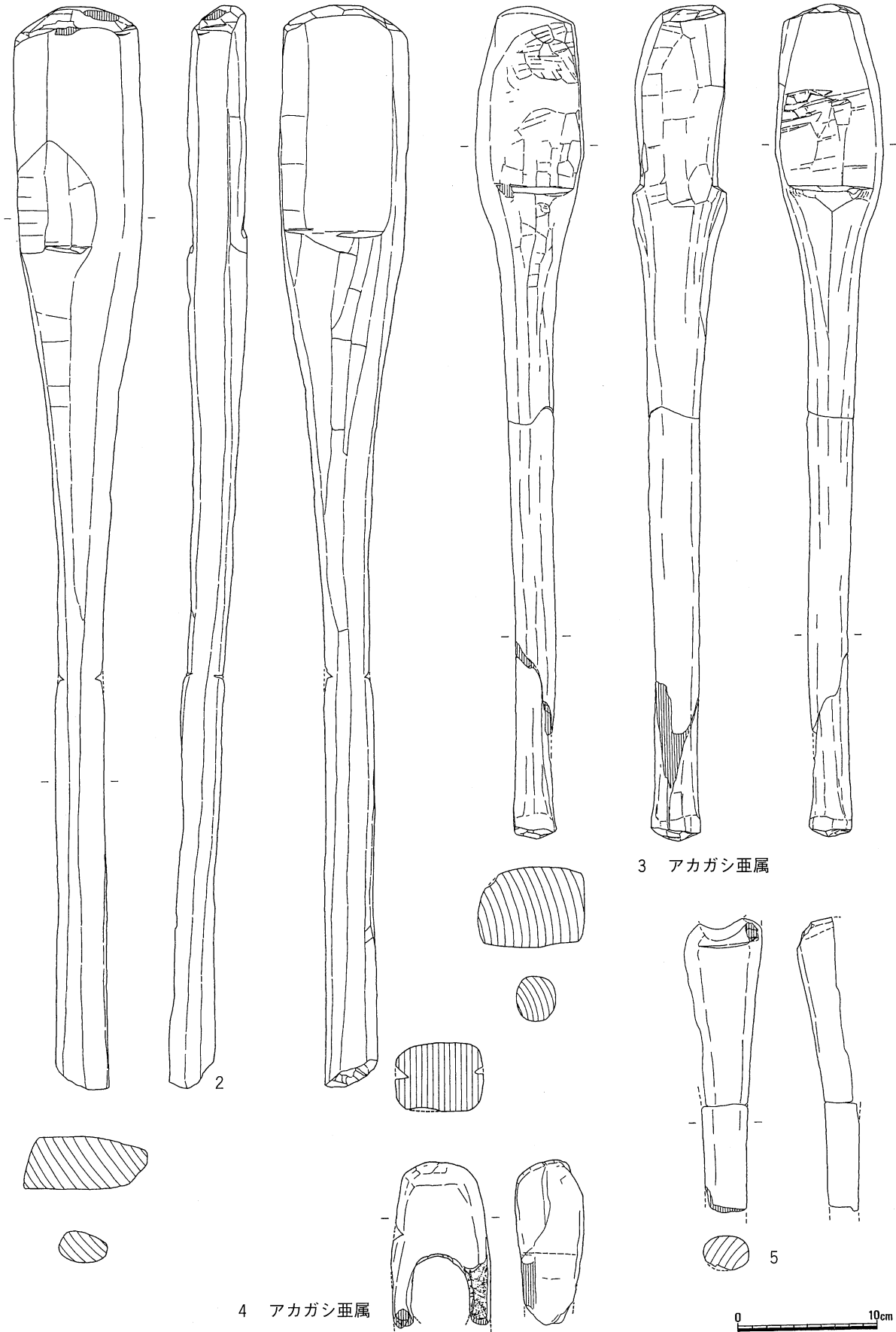
頭部長と石斧幅(装着孔長)の関係からすると、直柄の全長は石斧幅6~8cmのもので63~76cm(2・14・16からの復原値)、石斧幅5~6cmのもので59~66cm(3・7・9からの復原値)となる。頭部の形状は、禰宜田佳男氏の分類⁽⁵⁾によるII A類・II B類が出土しているが、II B類が大半で、II A類は6・15の2点が出土しているもののみである。また、7や9のようにII B類でも拡張部⁽⁶⁾の発達が弱くII C類に非常に近いものもみられる。

1は拡張部を作り出した段階の未成品とみられ、握りの部分はまだ四角く面を持ったままで、端部は欠損している。頭部は片側の拡張部が欠損していて、厚さ5cmになっている。2は頭部下面を加工中の未成品の完形品で、全長は76.9cm



第1図 斧直柄(1)

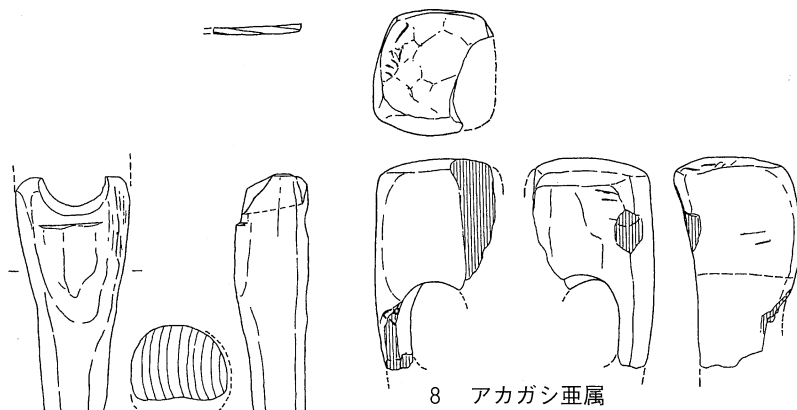
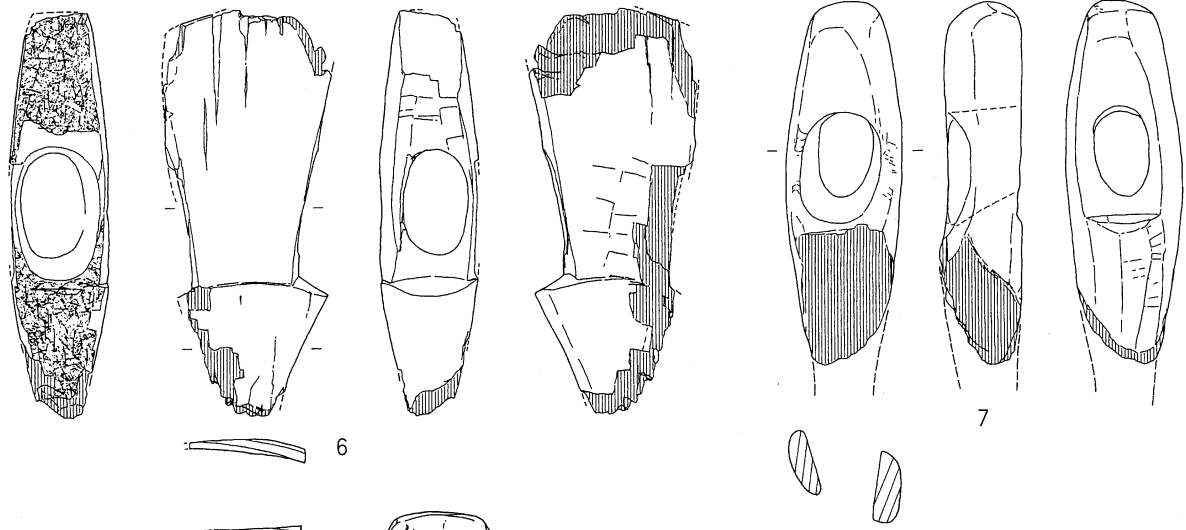
3. 工具



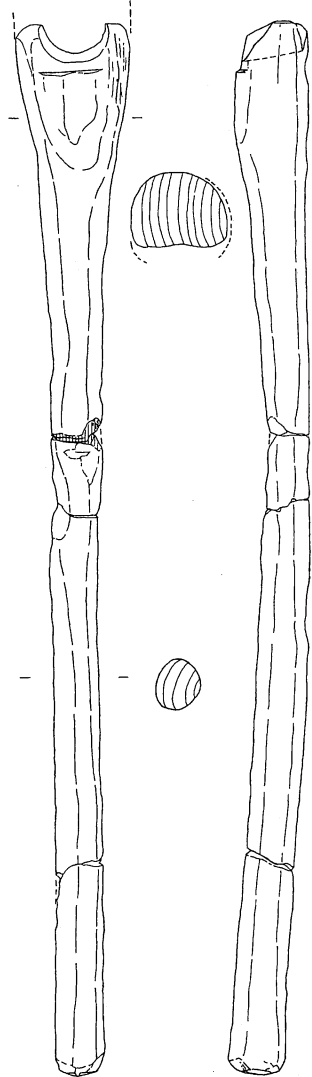
4 アカガシ亜属

3 アカガシ亜属

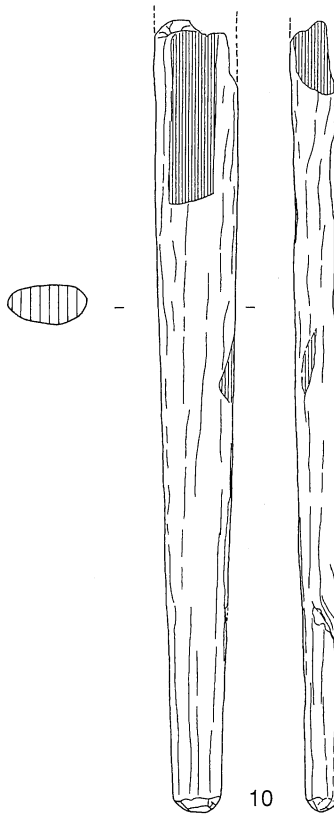
第2図 斧直柄(2)



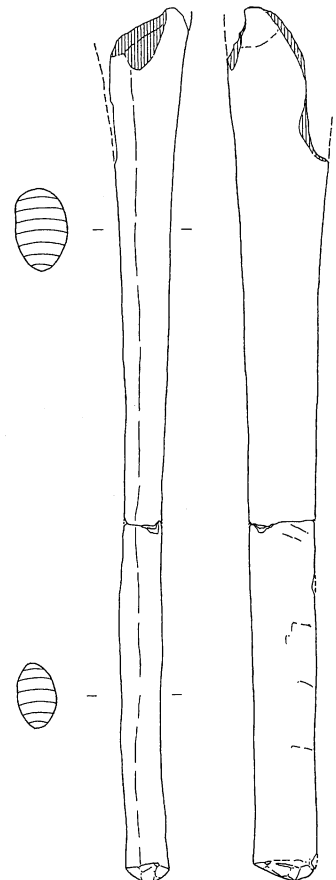
8 アカガシ亜属



9 アカガシ亜属



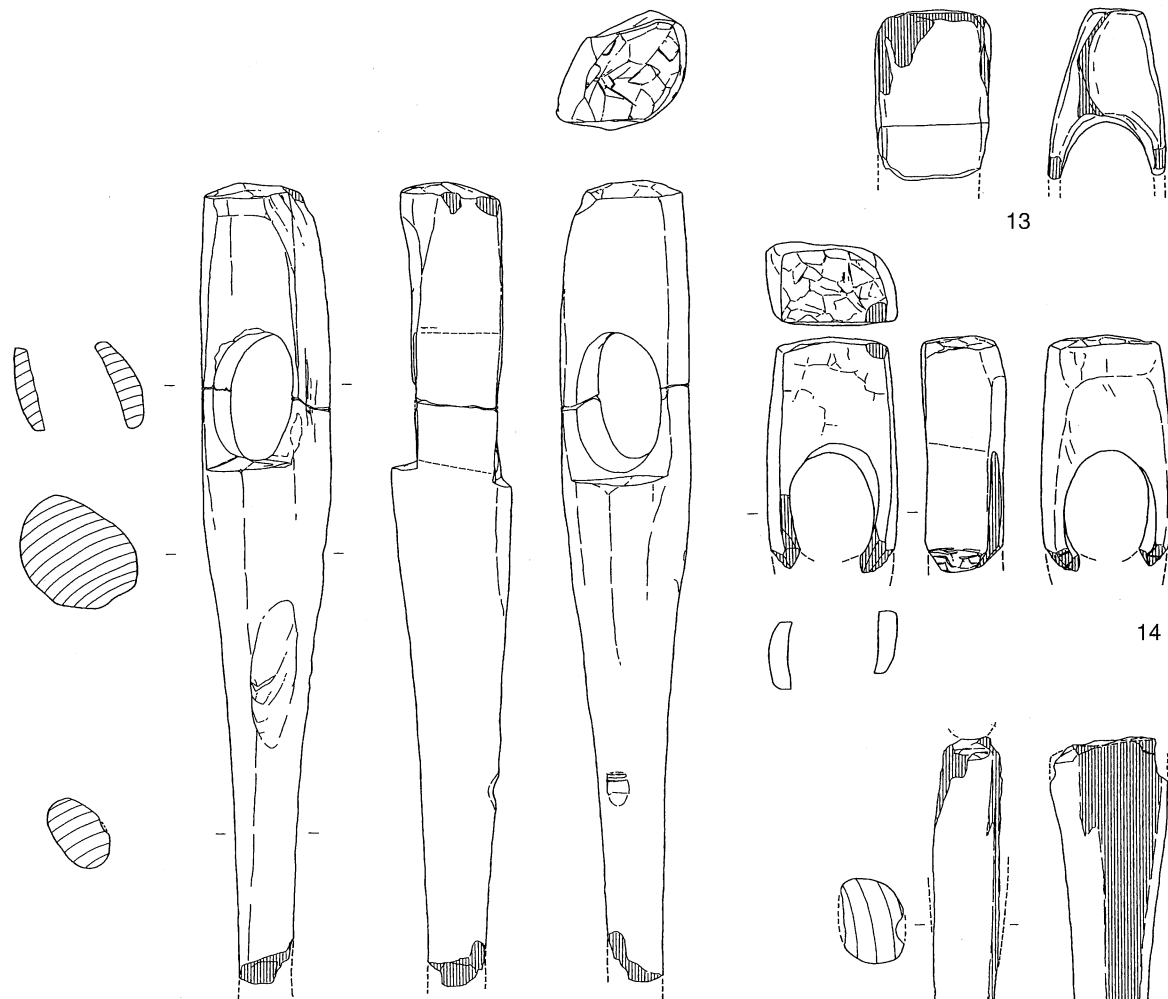
10



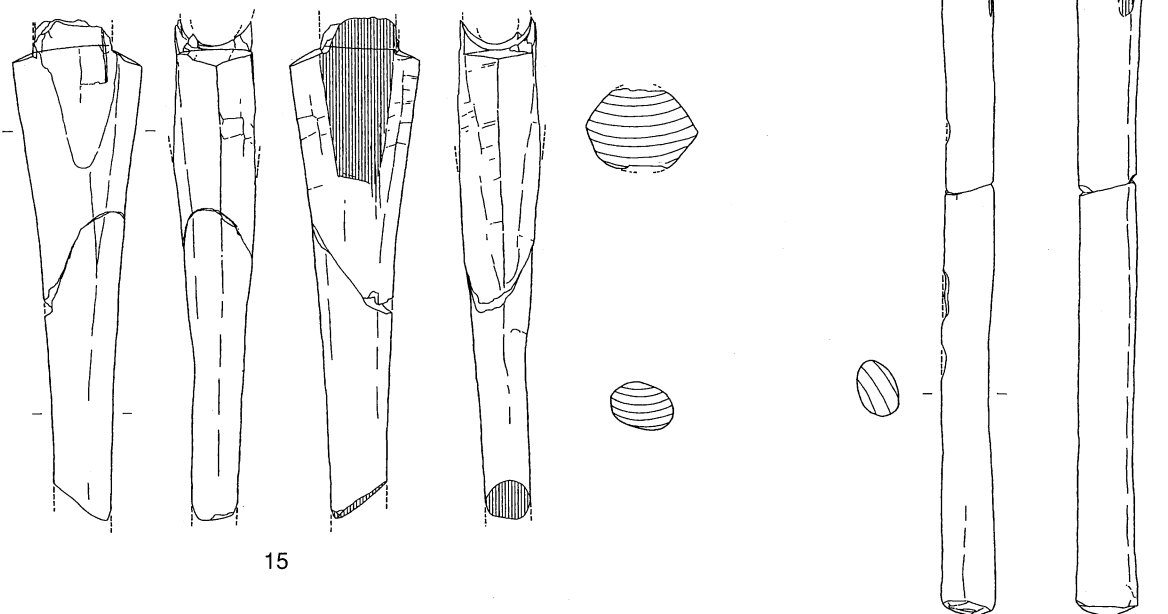
11 アカガシ亜属



第3図 斧直柄 (3)



12 アカガシ亜属



15

16 アカガシ亜属



第4図 斧直柄(4)

である。全体の大まかな形は取れていて、頭部先端も丸く加工されているが、握りの基部端面には切断痕が残っている。頭部長は16cmあり、幅7～8cmの蛤刃石斧が装着されるものと見られる。3も完形の未成品であるが、2よりも加工がすすんでいる。握りも断面が丸くなり、グリップエンドも意識されていて、基部端面にも加工が及んでいるが、装着孔は未加工のままである。頭部は長さ13cmであるから幅5～6cmの石斧の装着が想定できる。全長は59.6cmである。4は装着孔から上の破片で、破損部に炭化がみられる。5は装着孔から下部の破片で、破損した装着孔の周辺を再加工しており転用が図られている。第65図の462と同様に棍棒として使われた可能性もある。

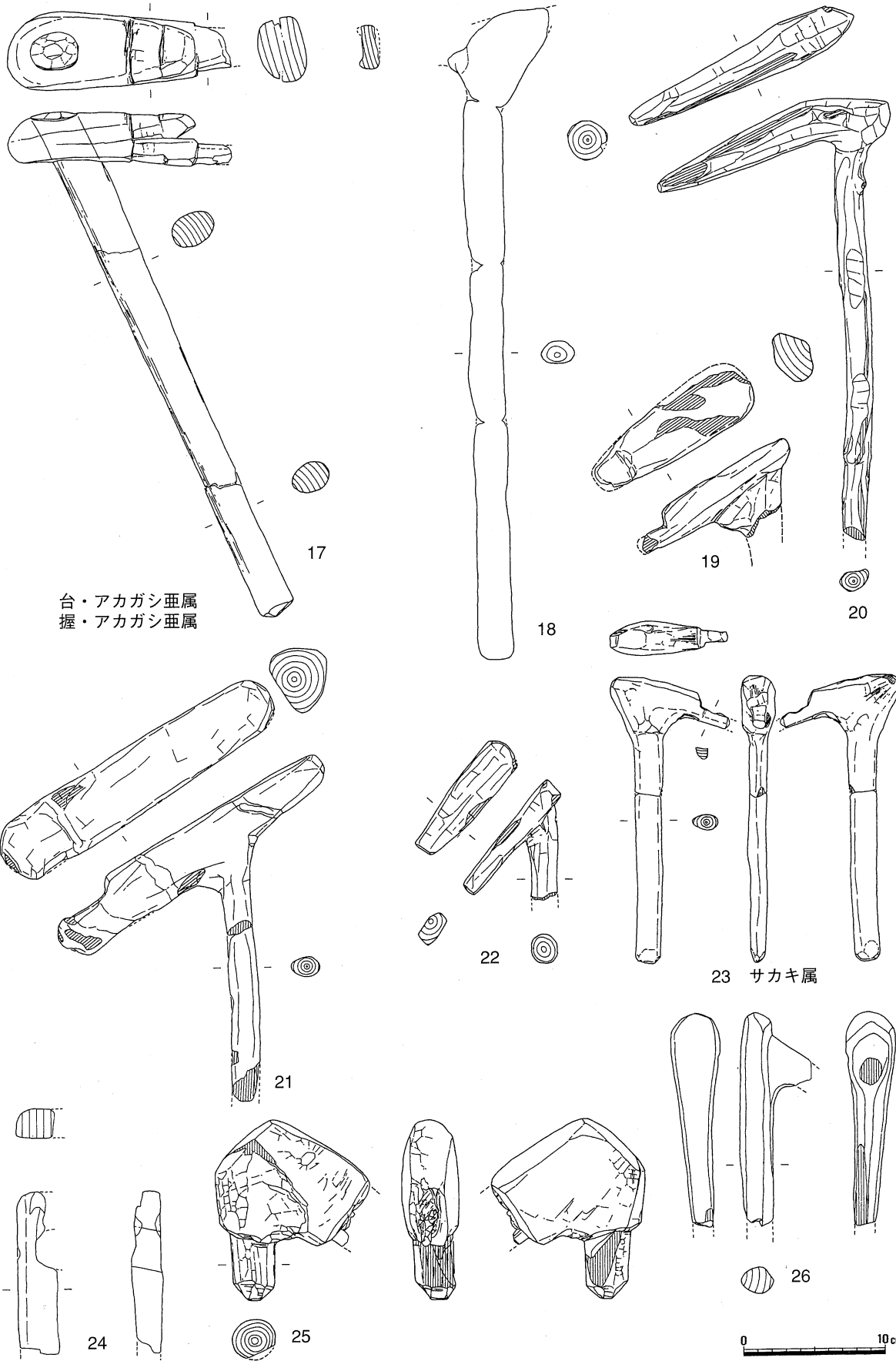
6はS D550から出土した頭部の破片で、先端が撥形に開いていて、握りとの段差が大きい点など前期的特徴がみられる。装着孔は長径5.6cm短径3.4cmの楕円形で、やや小さめの石斧が装着されると見られる。全体に焼け焦げている。7は頭部の長さ11.5cm幅6cm厚さ4.1cmで、頭部先端の開きもなく、握りとの境の段差もごくわずかである。装着孔は上端面側に細くなるので、装着される石斧は基部が小さくなるタイプである。8は装着孔から上の破片である。9は装着孔から先端側を欠損しているが、現存長が56.4cmあって、残存する頭部の幅や装着孔からすると幅6cm以下の石斧が装着されるとみられる。10は握りの基部側の破片で、断面形は扁平な楕円形をしており、基端部は面を持ちつつも丸く加工している。11は装着孔のやや下から握り基部にかけての破片で、断面がやや扁平な楕円形の握りの端部は、10と同様に面を持たせつつ丸く加工している。

12は頭部から握りの中程までの破片で基部を欠く。握りと頭部の段差は1～1.4cmで、装着孔は7.1×4.5cmの楕円形である。頭部先端には加工痕が残っている。13は頭部先端の破片で装着孔の大きさからみると幅6～8cmの石斧がつくとみられるが、やや小型の石斧が装着される6・7のように先端で幅が狭くなる。14は装着孔から上の破片で握り側の割れ口には再加工痕がある。装着孔部分にひび割れなどの損傷が起きたためその部分で切断し、握り部分の転用をはかった残りともみられる。15は装着孔下端から握りにかけての破片で、頭部と握りとの段差は1.5～2cmあって大きく、頭部側の握りの側面には稜がある。16は装着孔から握り基部の破片で基部端面は丸く加工している。残存長は51.7cmである。

斧膝柄

斧の膝柄には石斧用と鉄斧用の双方があって、枝分かれの部分を利用して斧台と握りを一体で作る一木式と別材を用いる組合せ式とがある。出土した17点のうち組合せ式は2点で残りは一木式である。一木式では27にコナラ節が使われるのを除くと、樹種の判明している3点はサカキないしサカキ属を用いている。この点は鉄の膝柄にもサカキが選ばれている点と用材が共通する。石斧用の斧柄はいずれも扁平片刃用であって、柱状片刃用の斧柄は出土していない。鉄斧の柄は6点あり、装着される斧身の幅は大小あるがいずれも縦斧である。

17は斧台と握りを組み合わせて作っていて、斧台・握りともにアカガシ亜属製である。長さ13cm幅5.4cmで基部を丸く加工した斧台に幅3cm長さ2.5cm以上の装着部が付く。斧台が裂けて別の木が挟まっているが、裂け目をうめるためにくさび状にいれたものか混入かは判断がつかない。ただし、装着部との段の上に紐かけが作られていて、これは斧身の緊縛用ではないので裂け目の生じた斧台の補修をはかったものとみられる。そうすると挟まっている木は混入と見た方が良さそうである。握りは長径3.1cm短径2.2cmの楕円形で長さ38.5cmある。18は斧台がほとんど欠損していて装着される斧身の材質・幅については不明である。握りは端部まで残存しており長さが40.5cmある。19は握りを



第5図 斧膝柄(1)

根元から欠損している。装着面は先端がなくなっているが、わずかに先細りぎみの形状で残存長2.2cm幅2.2cmである。

20は握りの一部に樹皮が残存している。自在鉤の可能性もあるが、鉤部分が幅広で幹と枝の使い方が一般的な自在鉤の作り方とは逆なので斧の未成品と考えた。現存長は30.7cmで斧台の長さ17.2cm幅3.3cmである。21は斧台が22.2cmと長い、装着面は4.8cmと斧台の割に短い。装着面の幅も4.5cmあって、装着面はほぼ正方形に近い。握りも断面が 2×1.5 cmの楕円形で17や18に比べるとやや細めである。22は握りが欠損しているが、斧台の長さ10.6cm幅2.2cm厚さ1.2cmで細部加工用の斧柄である。装着部を明瞭に作り出していないので未成品とも見られる。

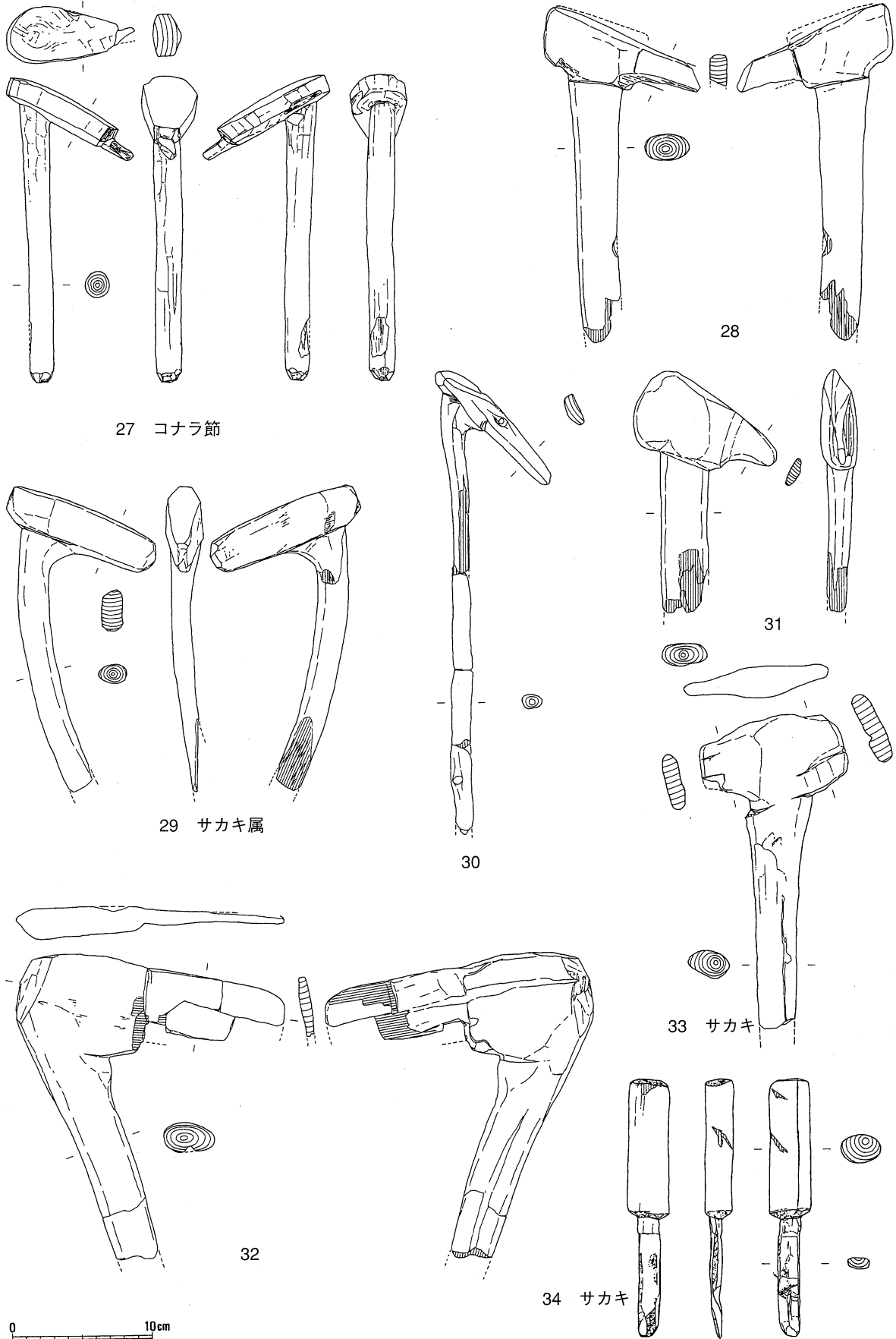
23は装着面の一部を欠くがほぼ完形の細部加工用の手斧の柄である。装着面は長さ1.8cm幅8mm握りの長さは17cmで、樹種はサカキ属を用いている。24は縦半分に割れて装着部も欠いているが、組合せ式膝柄斧の斧台とみられる。残存長10.8cm幅2.8cmである。25は鉄斧の柄で装着部は欠損しているが幅は4.5cmである。握りは切断されていて、組合せ式の斧柄などに転用されたのだろう。26は装着部と握りを欠く。斧台の残存している先端部分の幅が1.5cmであるので細部加工用と見られる。握りの付け根から斧台残存端部まで9.5cmあって、完形であればもっと長くなるので、コップやジョッキなどの内割りの深い容器の加工に用いられたと思われる。27はコナラ節の枝分かれ部分を利用した一木作りの細部加工用の柄の完形品で、長さ7.8cm幅3.9cmのやや縦長で卵形の斧台に長さ2cm幅1cmほどの装着部が付く。握りは直径1.7cm長さ19.2cmである。

28は鉄斧が装着される膝柄縦斧で、握りの基部や装着部の先端などを欠く。装着部の幅が2.5cmであるので伐採用というよりも加工用と考えられる。29は鉄斧の膝柄縦斧で、柄の先端を欠損する。斧台は長さ11.2cm幅2.8cm厚さ1.4cmで先端に向かって徐々に側面から細くなっていて装着面との明瞭な段を作らない。未成品の可能性もある。握りは19cmが残存していて斧台側に湾曲している。樹種はサカキ属である。30も29と同じく装着面を明瞭に作り出しておらず未成品の可能性もある。斧台は全長11.1cm幅2.2cmで、握りは30cmほどが残存していて23や27に比べると細く長い。31は斧台の残りが悪く装着部はやせているが、鉄斧の膝柄縦斧である。装着部の幅は根元で3cmである。32も鉄斧の膝柄縦斧で、斧台は長さ19cmあって、装着部は長さ9.7cm幅5.3cm厚さ8mmである。装着部の長さからすると板状鉄斧が付くと見られる。15cmほどが残っている握りはわずかながら斧台とは反対方向に反っている。33もサカキを使った鉄斧の膝柄縦斧で、装着部はやせて残りが悪いが、根元で幅3.7cmある。握りと斧台の角度は 82° である。

のみ形

34は全長18.1cmでのみないしヤリガンナに形状が似ている。明瞭な段がついた装着部を持たないので、実用ではなく模倣品の可能性が高い。長さ9.6cmで 2.8×2 cmの楕円形の握りが付く。サカキの心持ち材を使っている。

3. 工具



第6図 斧膝柄(2)・のみ形

4. 農具

農具には鋤・泥除・鋤・臼・杵・横槌・木鎌・コテ・ソリ・田下駄・作業台などがある。鋤や鋤は農作業だけに特定されず、土を掘る土木作業全般に使用されたとみられる⁽⁷⁾。

直柄鋤

鋤には直柄鋤と曲柄鋤とがあり、直柄鋤には諸手鋤・狭鋤・広鋤・又鋤・えぶり・横鋤がある。用材はアカガシ亜属の柾目材が使われるが、諸手鋤のみアカガシ亜属の板目材が用いられている。ほかに例外としてエノキ属を用いた広鋤70が1点のみ出土している。製作工程を示す未成品として原材段階の資料が出土しているが、すでにこの段階で1枚分の大きさに分割されていて、連続製作を示す未成品は出土していない。

諸手鋤は、完形品は出土していないが、着柄孔を中心に湾曲しているものを諸手鋤としている。出土した3点はいずれも内湾側に流線形の着柄隆起がついている。上述のように他の鋤と異なって板目材を用い、外湾面を樹心側に木取りを行っている。また、このような木取りを行うため、直径の小さい部分を使っている点も異なっている。

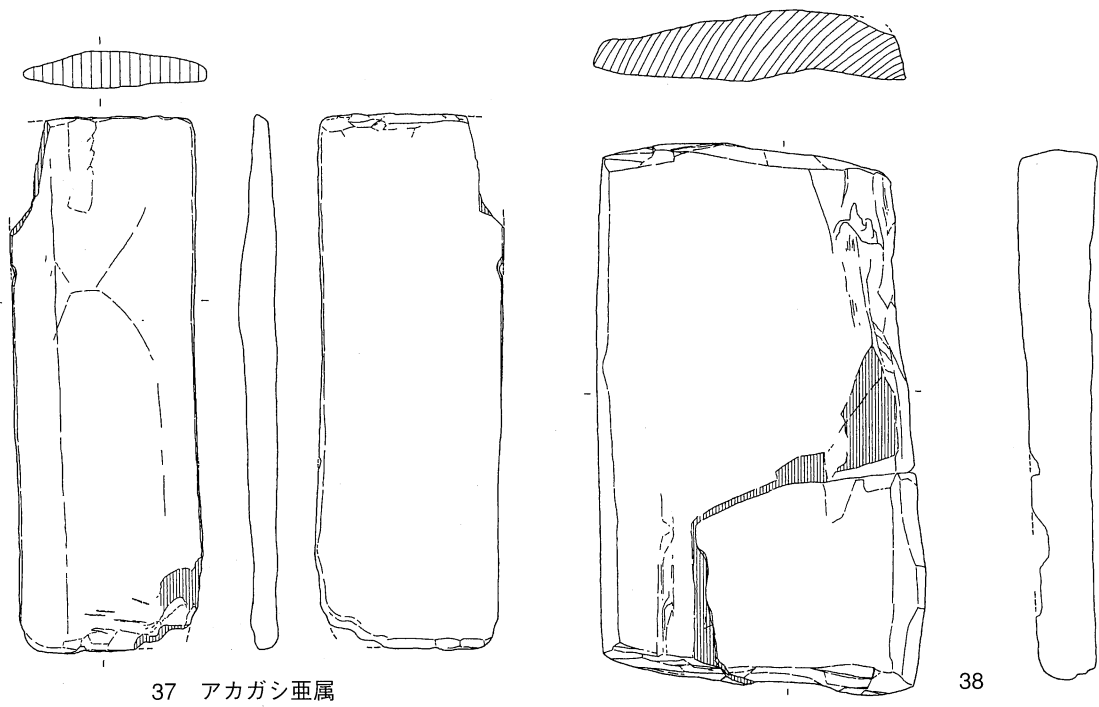
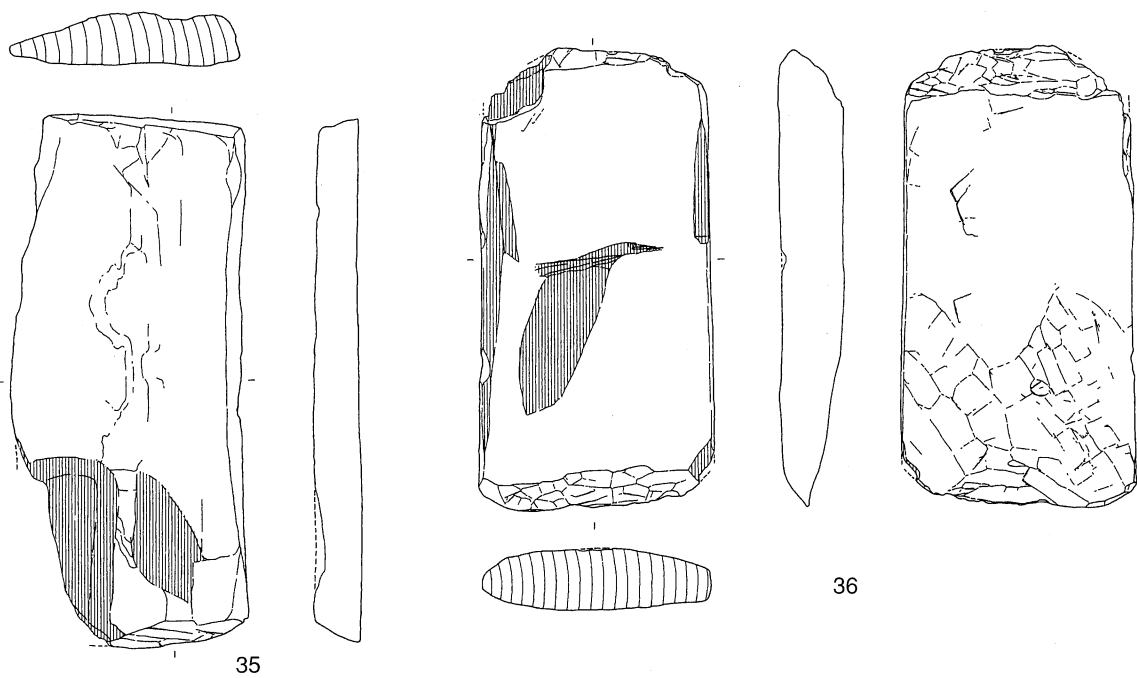
ほかの鋤や鋤と異なって、諸手鋤のみが板目材を用いることについて、合理的な説明は用意できていないが、大きく湾曲した縦断面形をしているため、柾目取りをすることによって刃部が横割れすることを嫌って板目材を使ったと思われる。しかし、九州地方でも柾目取りした諸手鋤が出土しているので、この見解も必ずしも妥当とは言い切れない。42は着柄孔から下半の破片で、唯一刃部形状がわかるもので、刃部先端は丸みを帯び、刃部幅は11.2cmで狭鋤の幅と同じである。

狭鋤は身の中央か、それよりも上端よりに着柄孔を設けている。着柄孔の形状は、43・49～51のように円形と、44～48のように方形に近いものがある。着柄隆起は顕著ではなく周囲から漸次厚くなっている。刃部先端は身幅とほぼ同じ幅で平坦なもの丸みを帯びたものがあり、別に先端が尖るものがある。

広鋤は部分属性をみると、上端面、側面、着柄隆起、刃部先端の段の有無、泥除装着装置の有無などに違いがある。その中で、南方(済生会)遺跡出土の直柄広鋤の特徴として、刃縁に段を持つ個体が多く見られることが上げられよう。刃縁の段は両側面に及ぶ1類と両側を残しコの字に付ける2類とがある。段の位置は刃縁から1～1.5cmと刃縁に近接し、段上部の厚みが1.5～2cmある。段から下部を装着部として別の刃器を付けるのならばよいが、このままでは段が作業の障害となるように思える。出土例の有無は別として、仮にこれに装着されうる刃器を考えると、U字形鋤先の側部を切り取って装着部の両側が解放された、中国の一字形鉄器のような形となろう。ただし、この場合は、装着部分の奥行きが1～1.5cmと狭いものを想定せざるを得ず、装着時の安定性に欠けるものともなろう。

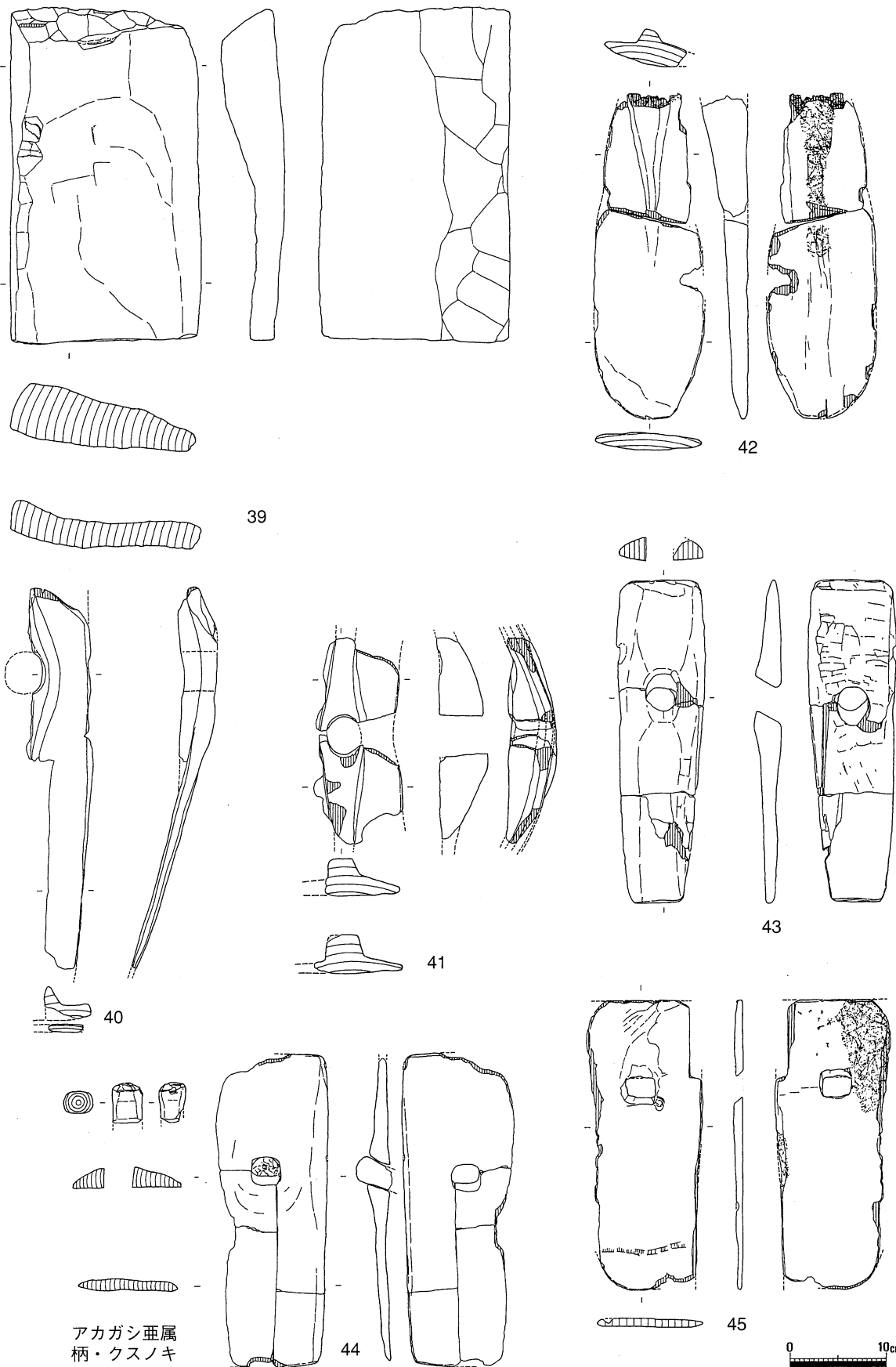
35～39は1枚分に切断した板材である。35は1枚分の長さに切断し、樹皮側の厚みを少し取った段階で、長さ42.5cm幅18.4cm厚さ4.1cmである。図の上端面は整えられているが、下端面には切断痕が残っている。36はほぼ完形の未成品で左右の厚みが整えられていて、さらに、図の後面側の下端から厚みをとる加工が始められている。上端部・下端部に切断痕が残っていて、長さ36.8cm幅18.7cm厚

4. 農具



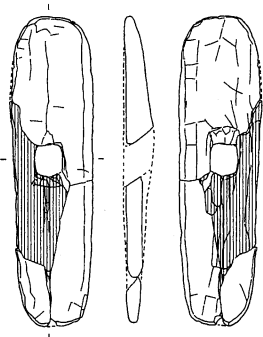
0 10cm

第7図 直柄鍬(1)

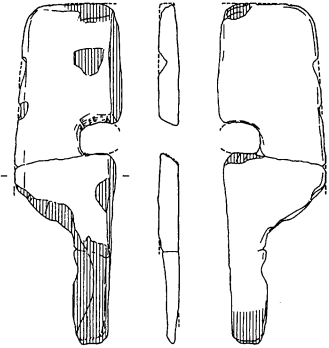


第8図 直柄鍬(2)

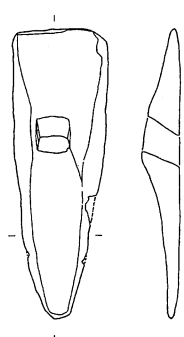
4. 農具



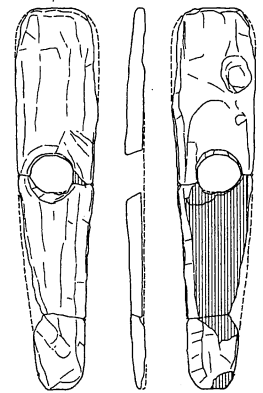
46



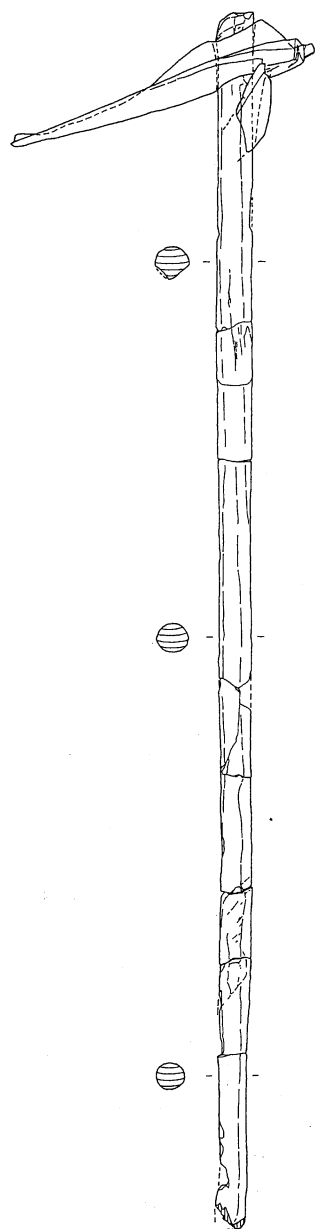
47



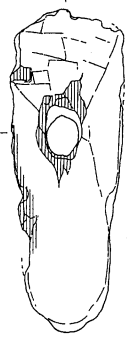
48



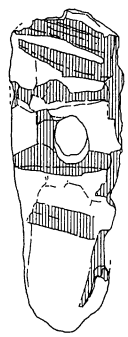
49



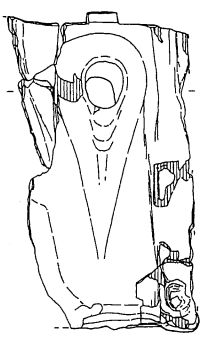
52 シイ属



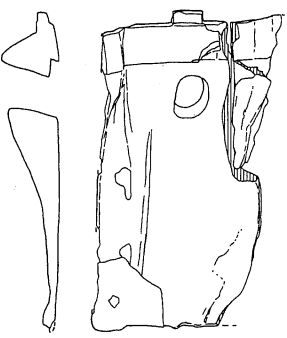
50



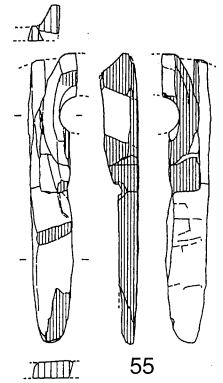
51



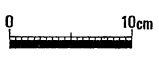
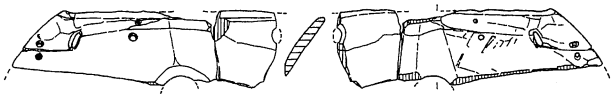
53 アカガシ亜属



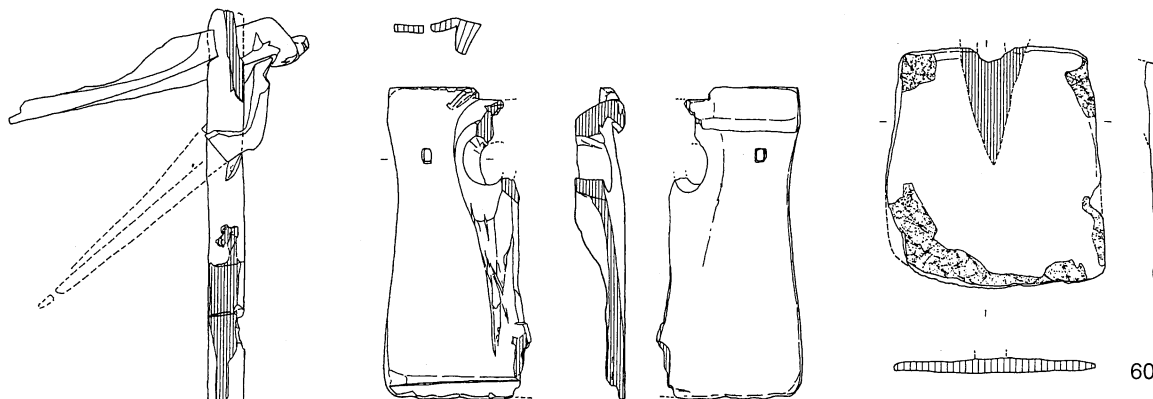
54 アカガシ亜属



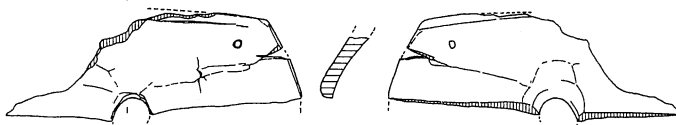
55



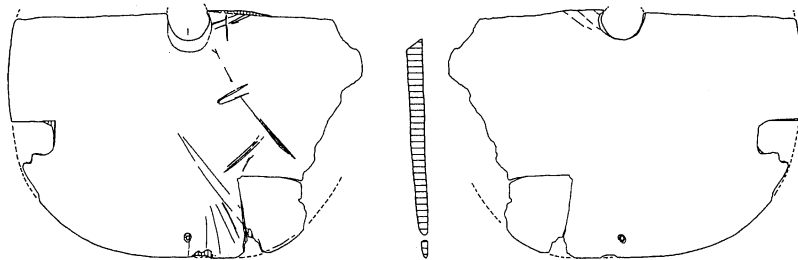
第9図 直柄鍬(3)



57 アカガシ亜属

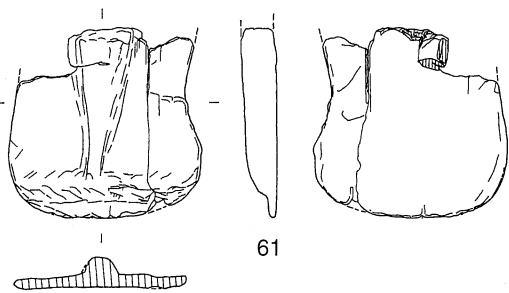


58 アカガシ亜属

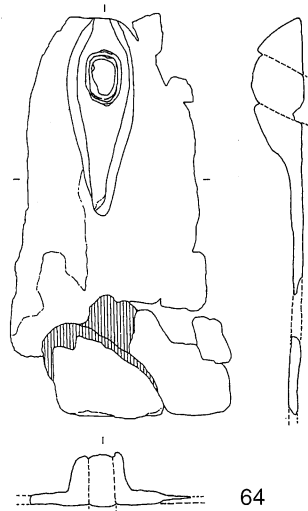


59 アカガシ亜属

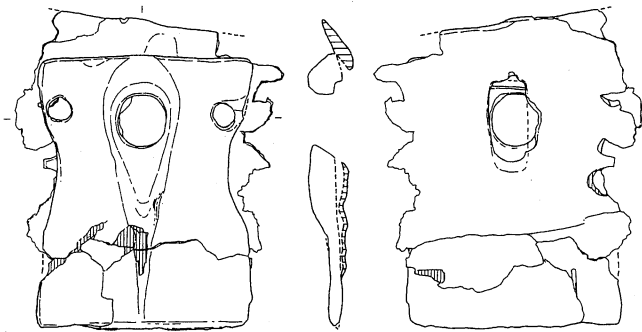
56 アカガシ亜属



61



64



62・63



第10図 直柄鋤(4)

4. 農具

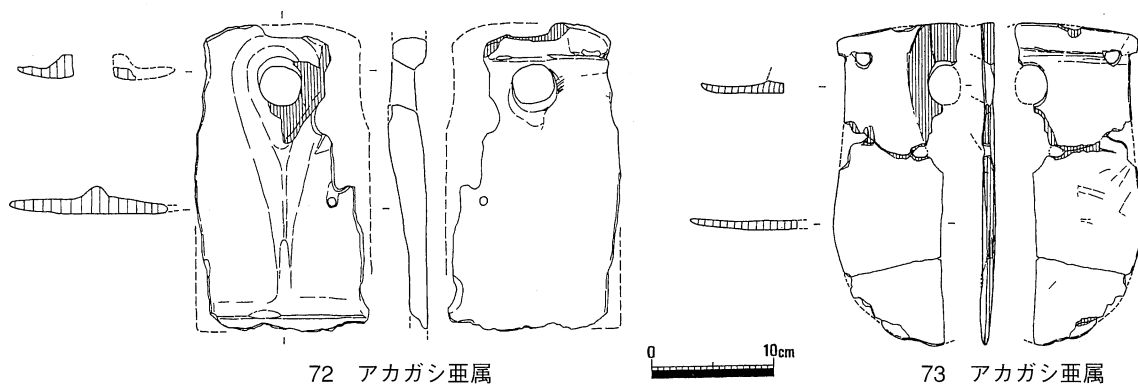
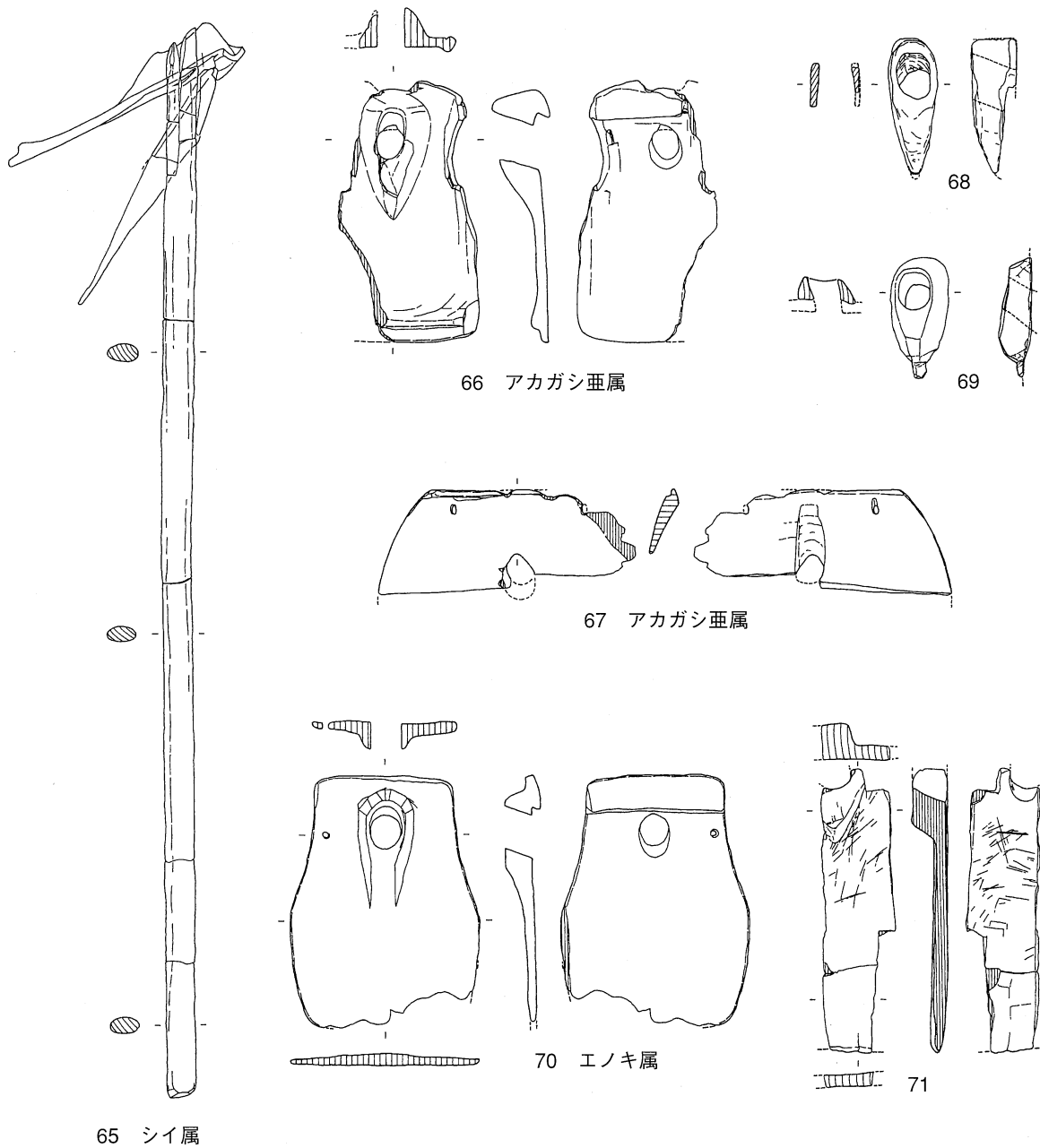
さ5.1cmである。37は長さ42.8cm幅14.6cmのほぼ完形の狭鋏未成品で、柄孔は未穿孔であるが柄孔周りの緩やかな隆起は作られている。38は1枚分の長さに切断し、樹皮側の厚みを少し取った段階の未成品で、長さは44.1cmで幅26.1cm厚さ5.7cmである。樹心側の側面(図の右側面)にはみかん割りした時の断面が残っている。39もほぼ完形の広鋏未成品で、上端面は着柄隆起の長さに相当する部分が未加工に近く端面に切断痕が残っているのに対し、下端面は直線的に成形し刃部側を薄く削り始めている。横断面で見ると、中央部分から薄くして、側縁には厚みを持たせている。裏面は樹皮側を削っている。長さ34.1cm幅19.5cmである。

40~42は諸手鋏である。40はアカガシ亜属材を板目に取ったことにより縦割れした右側の破片で、片側の刃部を欠く。内湾側に舟形隆起を持つ。41も内湾側に舟形隆起を設けた中央部の破片で、柄孔部分でさらに横割れしている。42は湾曲もなく柄孔も焼損しているが、板目材を使っており諸手鋏と見てよからう。

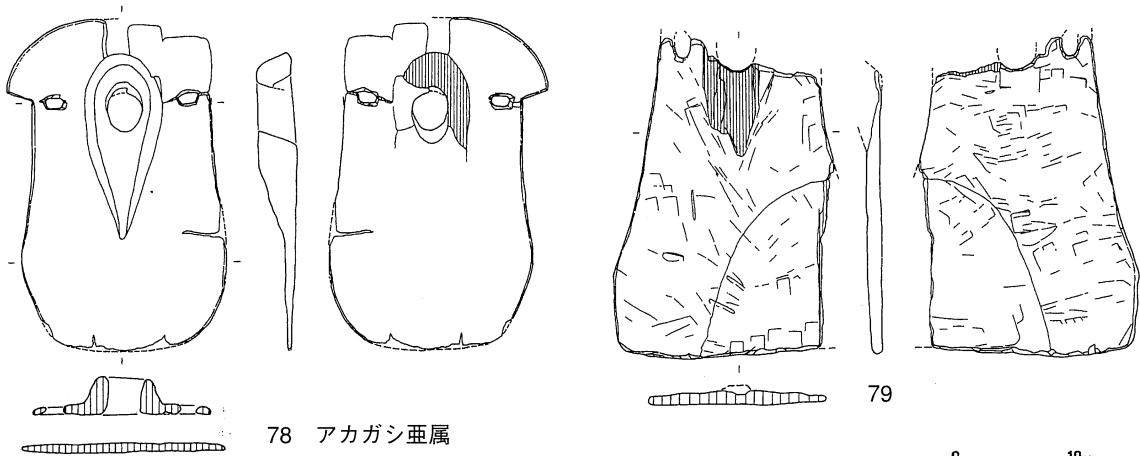
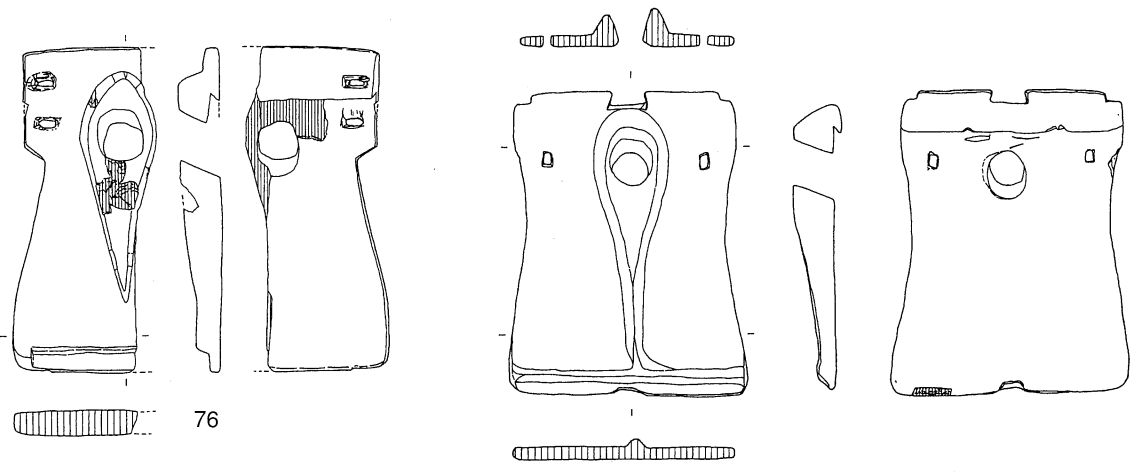
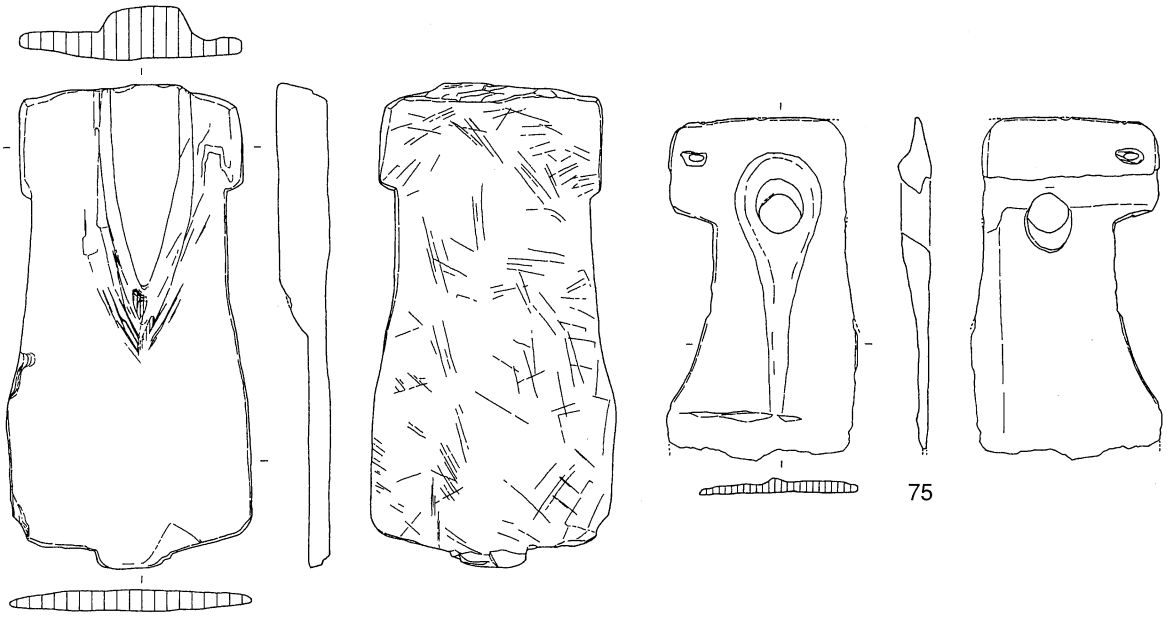
43~51は狭鋏である。43は円形の柄孔を持つほぼ完形品で、刃縁で幅がやや狭くなり角張っている。長さ33cm刃縁幅は5cmである。44は隅丸方形の柄孔にクスノキ製の柄の頭部が残っている。左側部に痛みがあるがほぼ完形で、全長は32cmである。45は後面左肩部と右側部が炭化している。柄孔は隅丸方形で周囲の隆起がほとんどなく、前面と後面の区別が付かない。全長29.6cmである。46はほぼ完形で、方形に近い柄孔は身のほぼ中央にある。刃縁は直線的であるが、角が取れてやや丸みを帯びている。全長24.95cm幅6.7cmである。47は縦割れしている上に刃縁がほとんど残っていないので確実ではないが、右肩部の開きからすると刃縁の幅が少し広くなると見られる。48はほぼ完形品で平面形は刃縁が細くなる三角形状を呈する。柄孔は方形で周囲の隆起は3cmと他と比べて顕著に厚い。全長23.4cmで頭部の幅が7.8cmある。49もほぼ完形品で柄孔周囲の隆起はほとんどない。最大幅6cmと細身で、同じく細身の46と同様に柄孔がほぼ中央にあけられている。全長は30.3cm刃縁の幅3.5cmである。50は円形の柄孔を持つ。刃縁は多少の傷みがあるが丸形である。全長は26.1cmである。51はほぼ完形であるが、全長19.3cmと使用に伴い短くなっている。刃縁で最大幅となる。

52~83は広鋏である。52・53・54は鋏身・泥除が柄に装着状態で出土した。52の柄はシイ属の柾目材を断面円形に加工したほぼ完形品で、全長は97.2cmある。53は泥除装着装置を持つ広鋏で、刃縁には段を持ち着柄隆起は段の手前まで及ぶ。上端面には着柄隆起上方に方形突起を持つ。54の泥除には広鋏との緊縛用の円孔とは別に補修孔がある。56・57・58・59も鋏身・泥除が柄に装着状態で出土した。56の柄はアカガシ亜属製のほぼ完形品で、全長は102.8cmあって、断面楕円形に加工している。57は右半分を欠くが刃縁には1類の段を持つ広鋏で、柄孔側方には6×9mmの方形孔を持つ。上端面には柄孔上部で欠込を持つ。刃縁は直線的で角張っている。全長24.8cm。58・59の泥除は柄孔部分で折れているが同一個体である。60は柄孔から折れた下半部の破片で、着柄隆起も脱落している。一部に炭化がみられる。61は刃縁から1.6cmのところの高さ1.3cmの1類の段がある。刃縁の両角がとれて丸形である。62は泥除63が密着して出土した。柄孔横の側縁沿いに直径2.3cmの円孔が1対ある。着柄隆起は刃部の段にまで及び、刃縁は段の部分で折損している。側面は円孔の下部で内湾する。全長21.8cm幅17.2cmである。64は柄孔に柄が残存している。

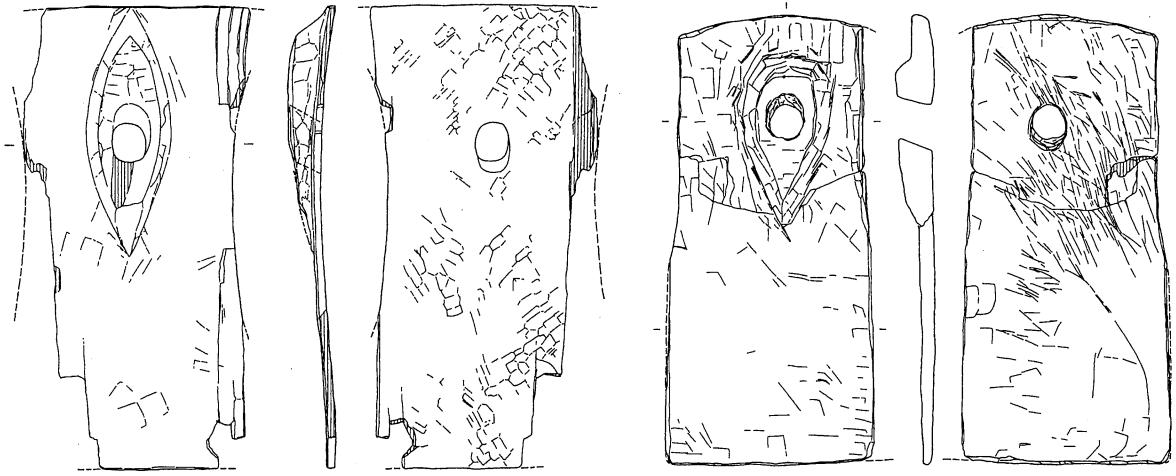
65・66・67も鋏身・泥除が柄に装着状態で出土している。65の鋏柄はほぼ完形で全長が95.2cmあって、シイ属の柾目材を用いる。断面形は楕円形である。66の鋏身は刃縁に1類の段を持ち、上端面には着柄隆起上に欠込がある。全長23.1cmである。67は泥除の上端側の破片で、対応する鋏の泥除



第11図 直柄鍬(5)

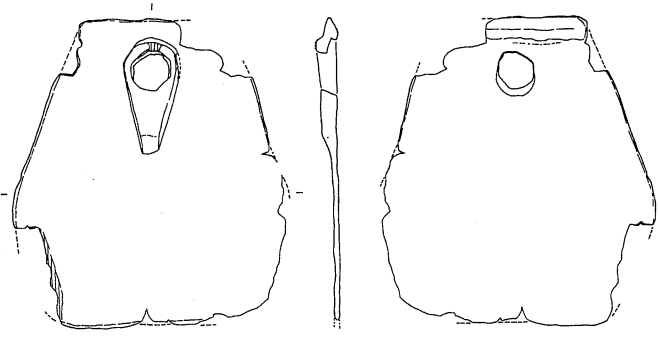


第12図 直柄鍬(6)

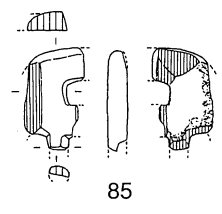


80

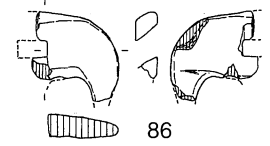
81 アカガシ亜属



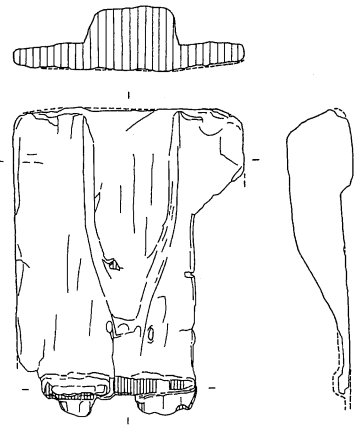
82



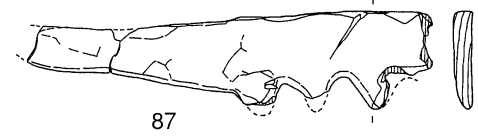
85



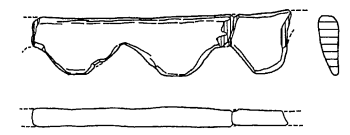
86



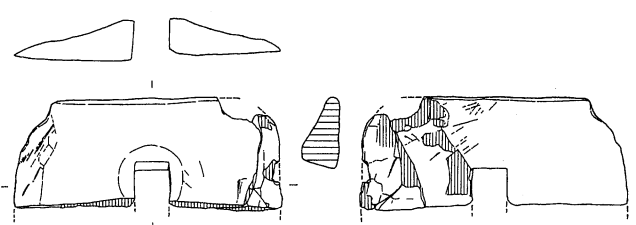
83



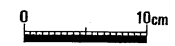
87



88



84



第13図 直柄鋤 (7)

4. 農具

装着装置端部がつく段を持つ。69は着柄隆起部の破片で、刃部側に幅1.2cm長さ1.4cmの舌上の隆起が残る。70はエノキ属の柁目板を使用した広鋏で、形状ではほかの広鋏と別段変わった点はみられない。右側縁の泥除装着装置の下に円孔が1つあけられている。泥除の緊縛用であれば数が不足しているため、未成品か追補の可能性もある。刃縁が破損しているため使用・未使用は不明である。72には刃縁に1類の段があって着柄隆起の端部が段までのびている。73は顕著な丸形の刃縁を持つ。

74は直柄鋏未成品で全体の形はできているが、上端面が平滑になっていない、着柄隆起が上端部に接している、刃縁中央に突起状の残存部分がある、柄孔はあけられていないなど、未処理部分が残っている。全長は38.6cmである。75は側面が柄孔の横で大きくくびれる。泥除装着装置の上部に円孔をあけているから、泥除の緊縛はこのくびれを利用したと思われる。76も平面形は75に似るが75ほどはくびれない。頭部の両側に泥除装着装置を挟んで上下に緊縛用の方形孔がある。刃縁の段は2類である。全長26cmである。77は完形品で、上端面には着柄隆起に接する台形状の欠込が、両肩にはL字状の欠き落としがある。刃縁上部に1類の段があり着柄隆起の下部につながる。全長24.4cm幅18.9cmである。78は上端面が弧状を呈する半月形の頭部を持ち、上端面中央には着柄隆起に接する幅1.8cmの欠込がある。柄孔の左右には方形孔がある。80は平面形は上端と刃縁が直線的で、側面が柄孔の横でくびれる。平鋏では唯一流線型の着柄隆起を持つ。泥除装着装置はない。全長36.8cmである。81は完形で着柄隆起をはじめ加工痕が明瞭で、仕上がり直前の未成品とみられる。泥除装着装置を持たない。全長35.8cmである。83は広鋏未成品で、着柄隆起の成形段階である。柄孔は未穿孔で、刃縁から1.5cmのところ幅2.2cm高さ1cmで突帯状の1類の段がある。

直柄又鋏は2点出土しているが、どちらも柄孔部分で折れている。柄孔は方形とみられ、周囲の隆起は顕著ではない。柄孔との位置関係からすると85は4本刃、86は3本刃とみられる。刃の断面形はどちらも円形に近い。

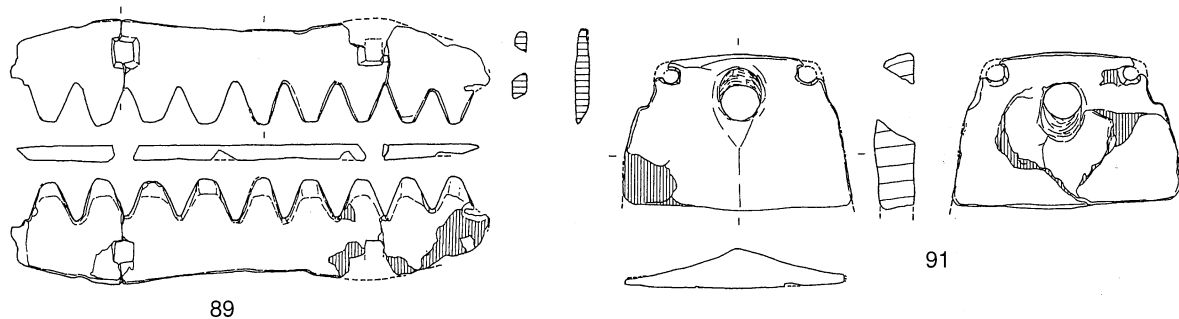
えぶりは3点出土している。87は端部が細くなっていて、山形の歯は中央にのみ作られている。88は低い山形の歯が3つ残る。89は約1.5cm角の小さな方形柄孔が20cm離れて2つあけられていて、Y字形の柄がつけられたと見られる。山形の歯は9本残っているが、両端の欠損部分を復原すると11本になる。刃先は前面が使用による摩滅が著しい。背部は柄孔上部が緩く山形に高くなっている。

84・90・91は横鋏である。柄孔は方形と円形の双方があり、周囲の隆起を持たないか徐々に高まるものである。90は平面隅丸方形の完形品で、柄孔周囲には隆起はない。全長17.9cm幅18.8cmである。91には左右の肩に円孔がある。

曲柄鋏

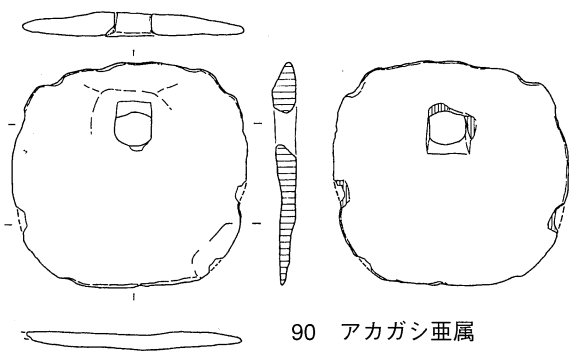
曲柄鋏には平鋏と又鋏があって、アカガシ亜属の柁目材が用いられる。着柄軸の形状は様々で、顕著な紐かけを持たないもの、頭部や肩上部に段を作って紐かけとするもの、いわゆるナスビ形⁽⁸⁾などがある。又鋏の又部の形状には角形・丸形・尖形の3者があり、尖形が最も多い。

92は幅8.2cm全長58.5cmと細身の完形品である。着柄軸も細長く頭部に紐かけを作るが、そのほかには明瞭な紐かけはない。93も着柄軸は幅3cmで細長く、刃部長が41cm以上と長大である。94は着柄軸頭部側面にはわずかに段をもつが、明瞭な紐かけが作られていない。刃縁は使用により変形している。全長36.2cmである。99は着柄軸中央部の屈曲部がすこし強調されて紐かけになっている。紐かけから下は肩部まで直線的である。軸頭下部・中位の紐かけ・肩部直上に緊縛痕がある。100は99ほど着柄軸の屈曲部が強調されていない。101は着柄軸の根元から折れた刃部の破片で、刃縁は丸形

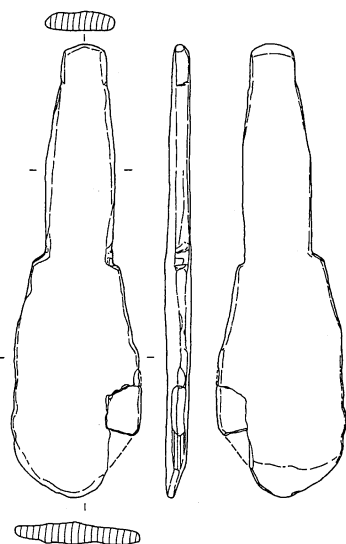


89

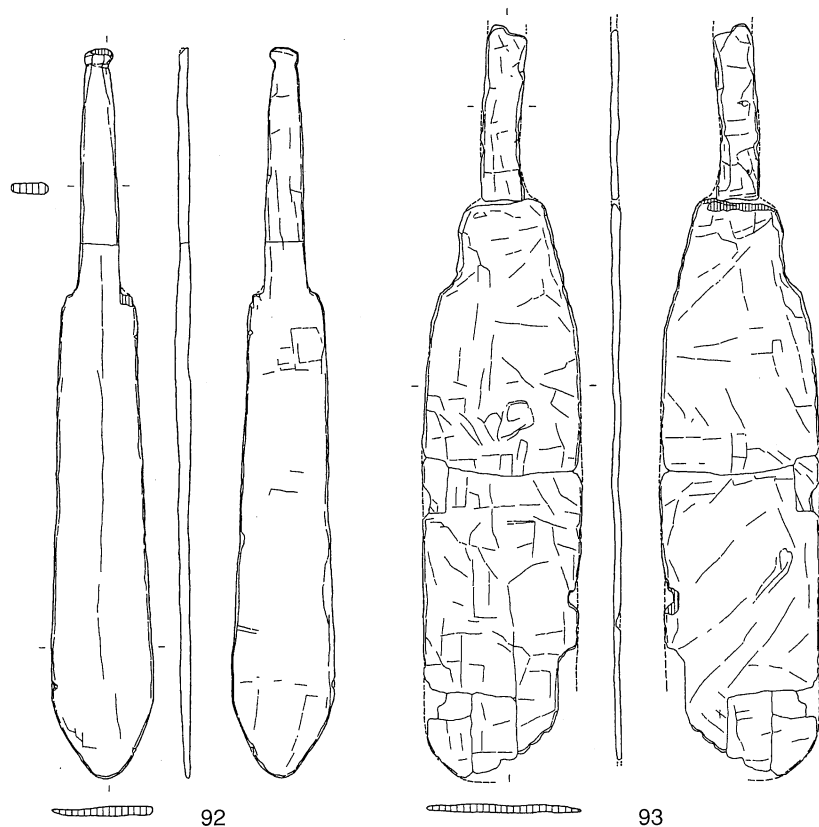
91



90 アカガシ亜属

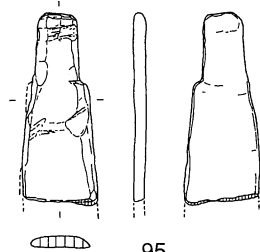


94 アカガシ亜属

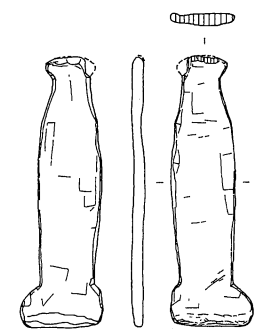


92

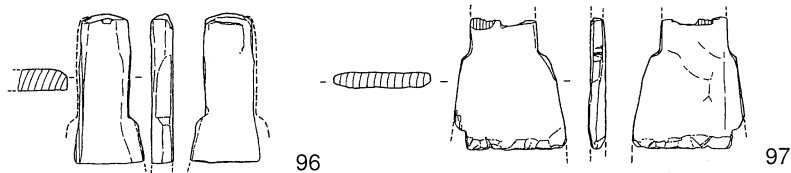
93



95



98



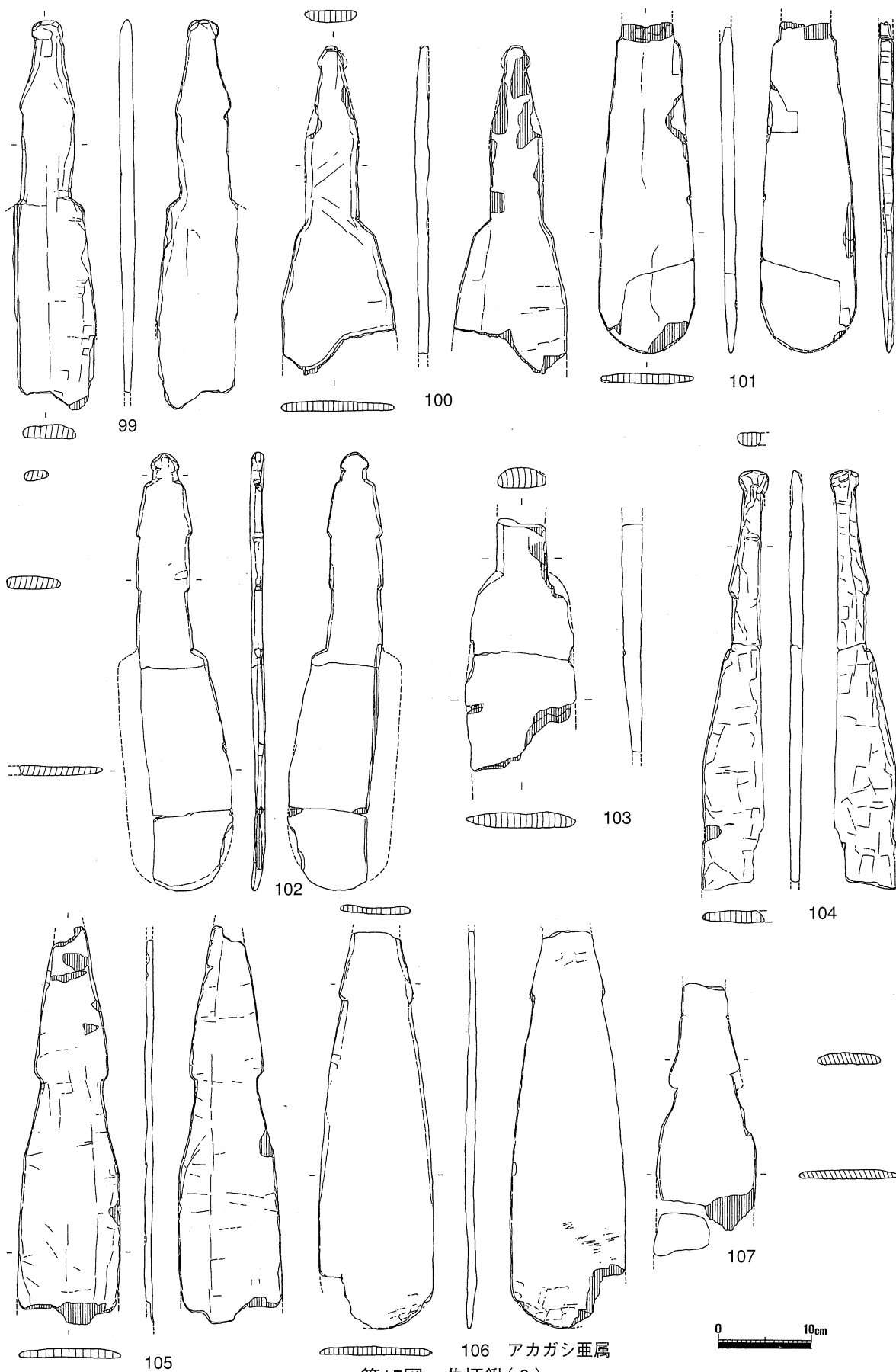
96

97

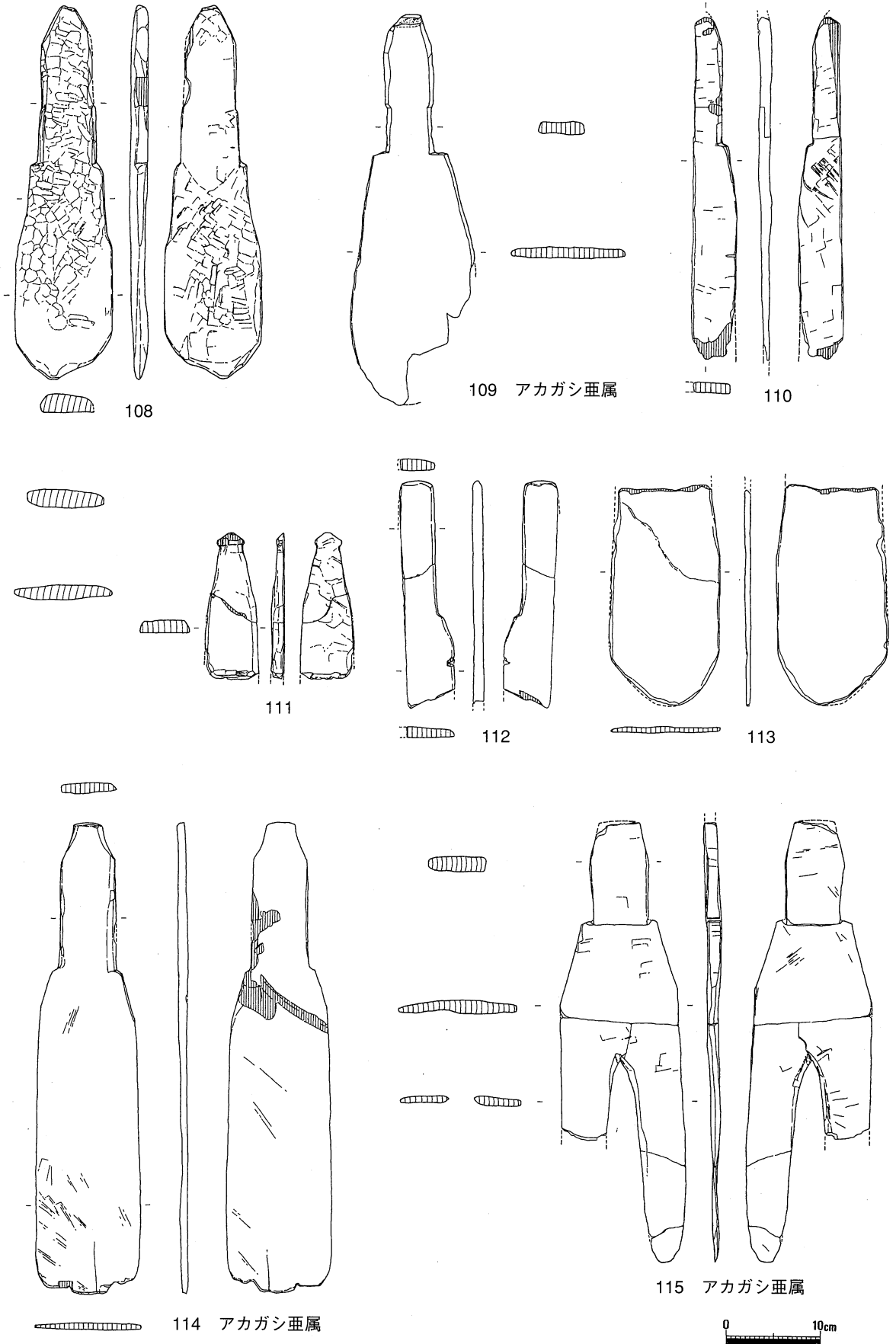


第14図 直柄鋤(8)・曲柄鋤(1)

4. 農具

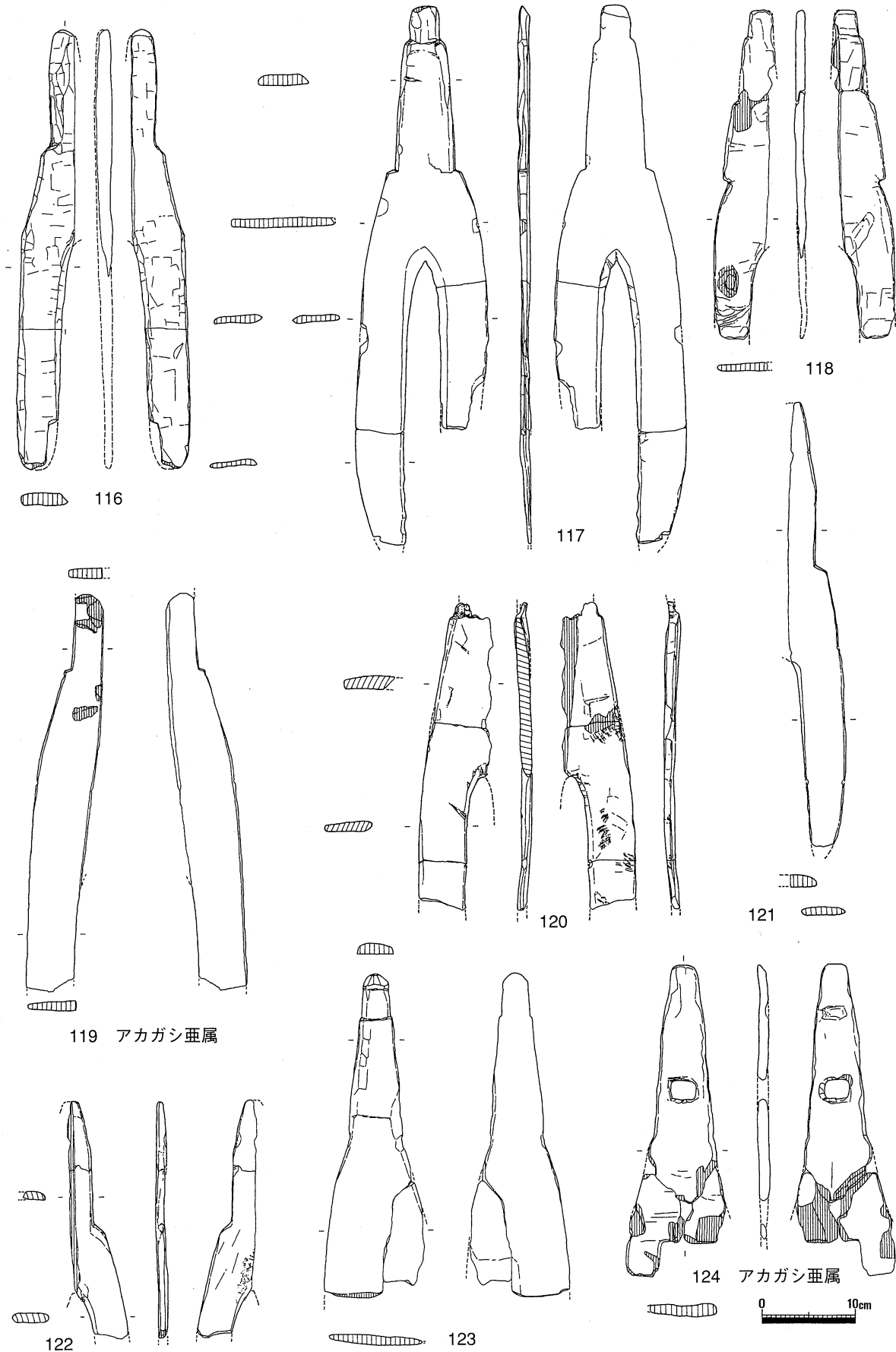


第15図 曲柄鍬(2)

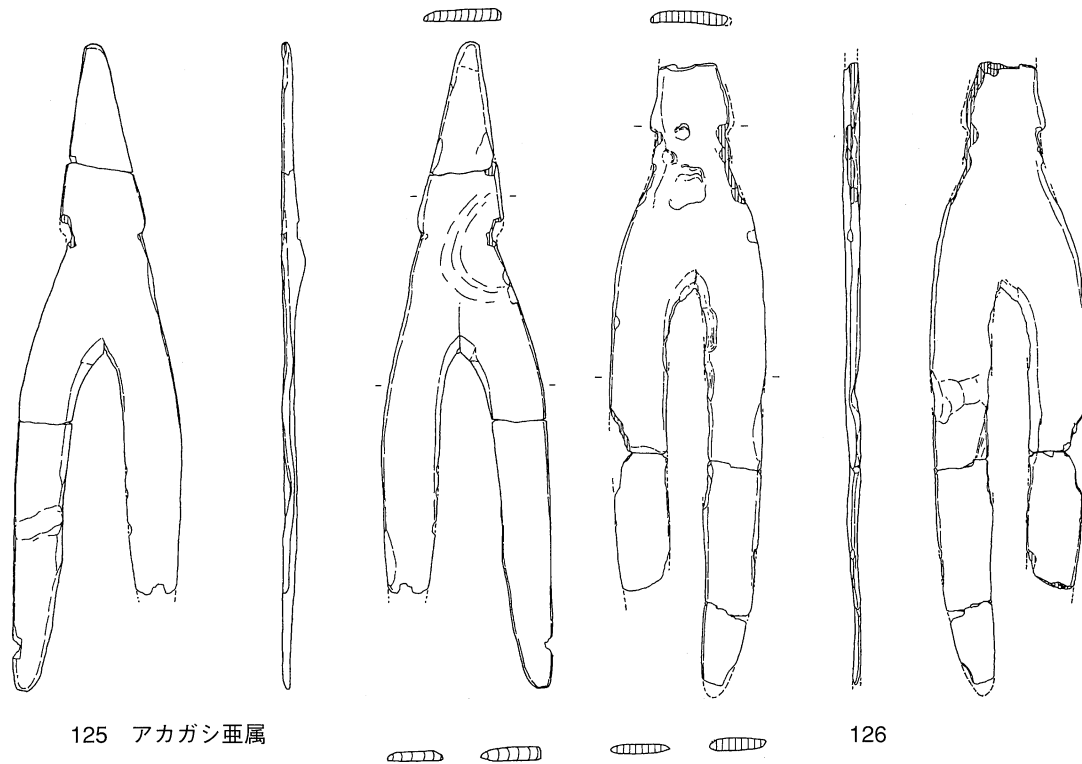


第16図 曲柄鍬(3)

4. 農具

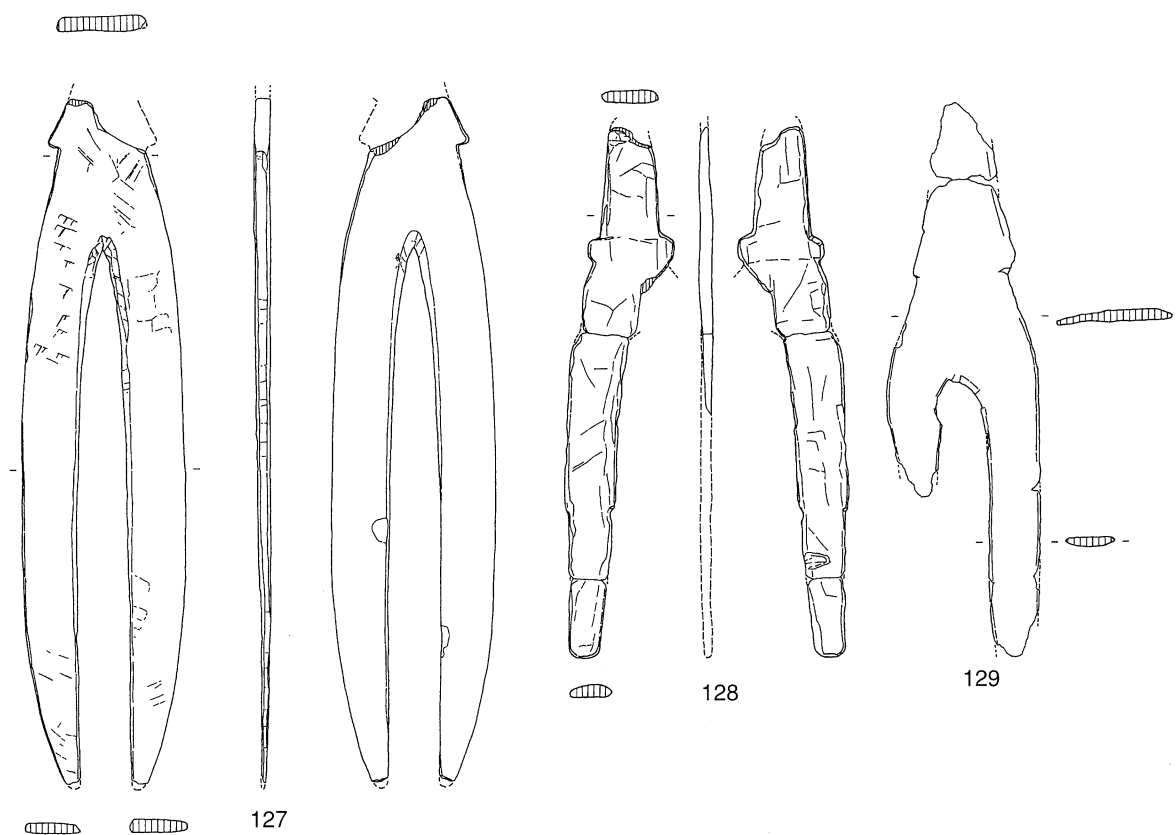


第17図 曲柄鍬(4)



125 アカガシ亜属

126



127

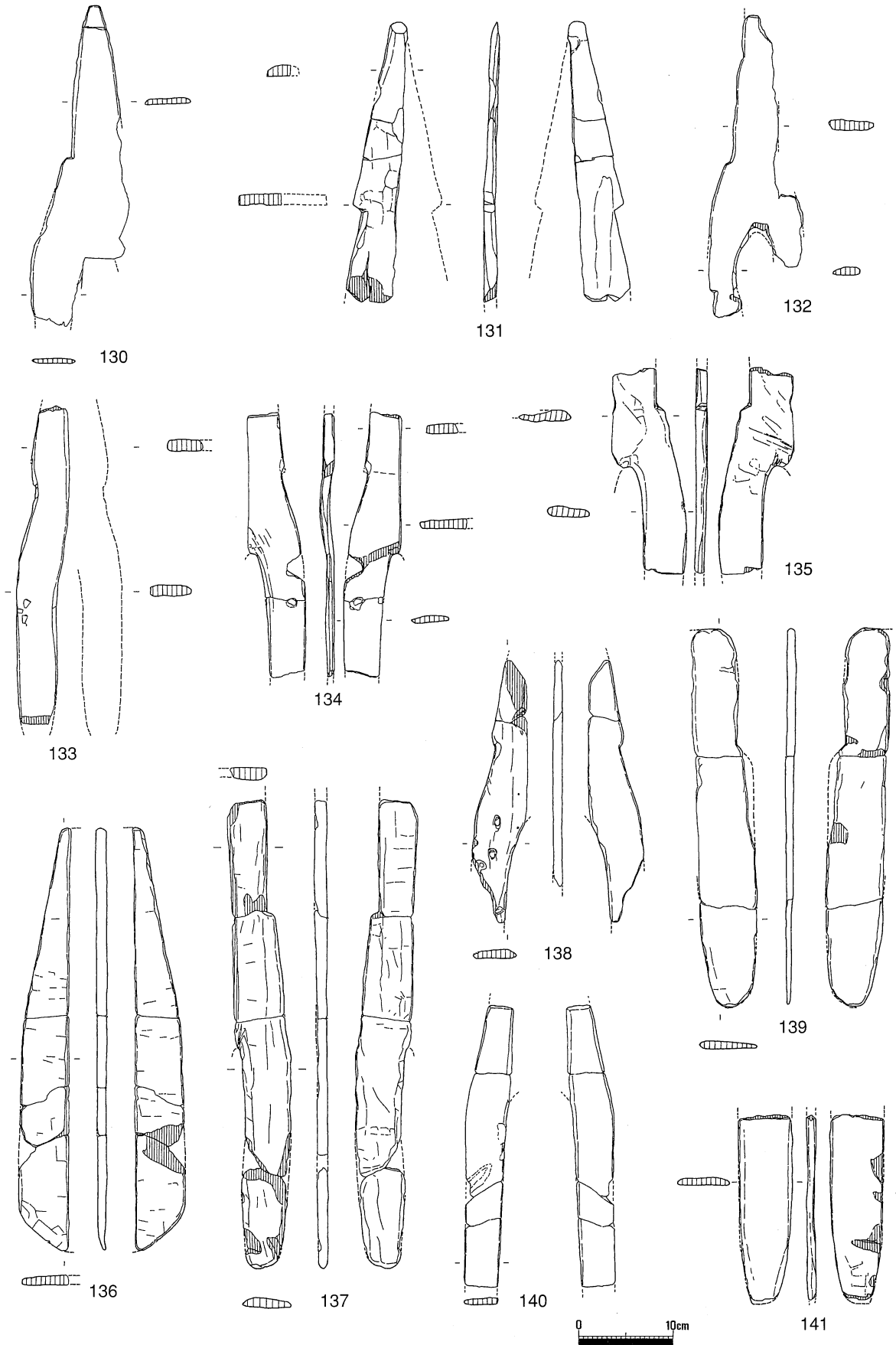
128

129

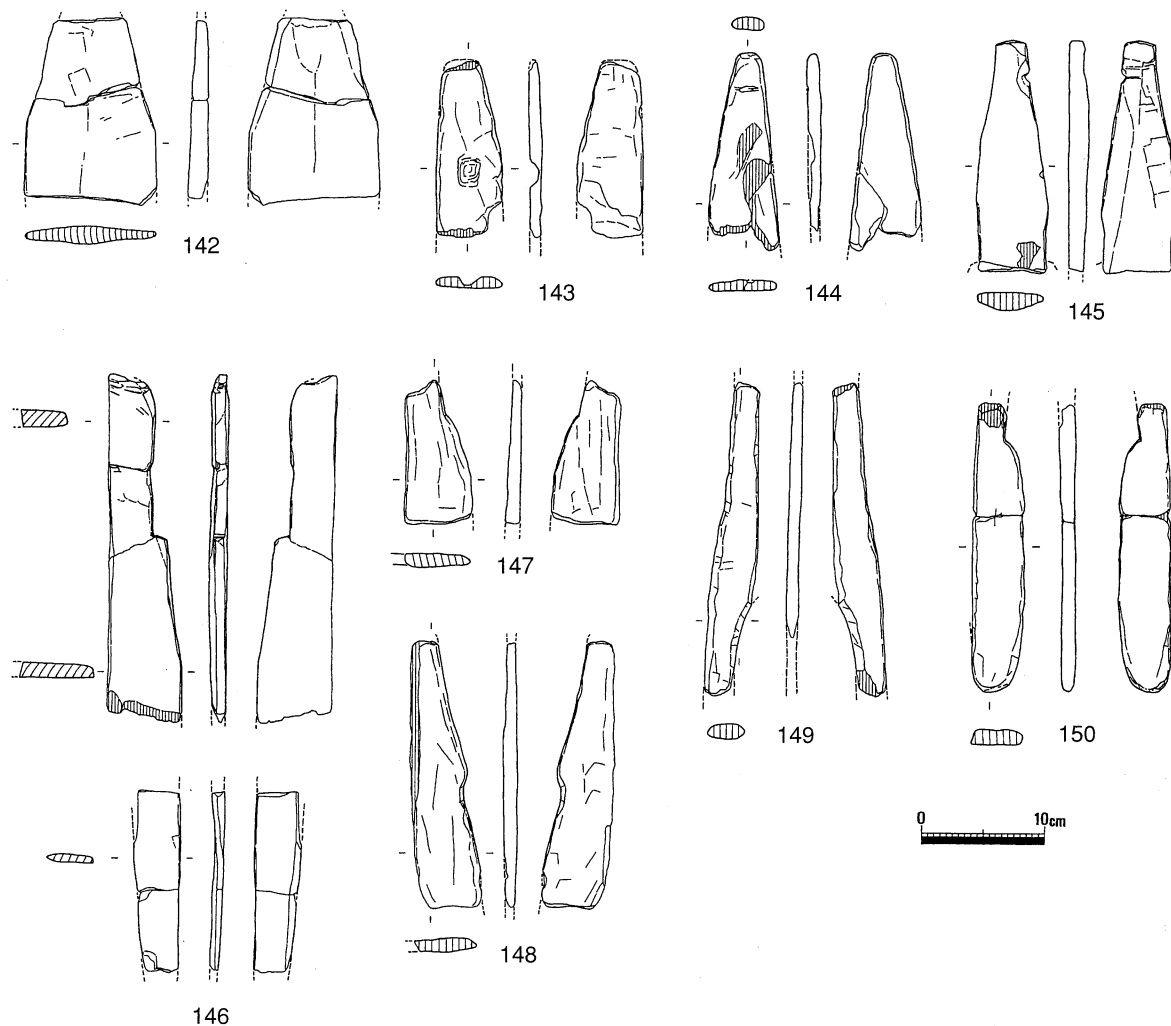


第18図 曲柄鍬(5)

4. 農具



第19圖 曲柄鍬(6)



第20図 曲柄鍬(7)

である。102は三角形の軸頭で、着柄軸の中間にはほぼ等間隔で2箇所の段がある。刃縁は丸形で、全長45.9cmである。104は着柄軸の形状は99に似るが、より紐かけが強調されている。

105～107はナスビ形鍬で、106は紐かけの下に肩も持たないが、107では紐かけが強調され肩が明瞭である。108は軸頭を台形状にせばめ、軸部には緊縛するような段や抉り込みを持たない。刃部は磨滅していて表面には明瞭に加工痕が残る。全長39cm幅10.3cmである。109は着柄軸頭部を台形状にするが紐かけは作らない。下部は肩部の上長さ5cmにわたり両側面から切り込みを入れて紐かけとする。114は完形の曲柄鍬未成品で、着柄軸の形状は108と同様である。刃縁には切断痕が残る。全長49.3cm幅11cmである。115は二又鍬で、着柄軸中央で最大幅を持ち上下に細くなる。尖形の又部をもつ。117は軸頭を側面から削って幅を狭め紐かけとしている。又部は尖形である。118はナスビ形であるが、着柄軸頭部は117と同様にしている。

121の着柄軸は長い菱形状で、115の着柄軸を細長くしたような形。123は着柄軸頭部に紐かけ用の溝を作る。124は着柄軸部に方形のほぞ孔を持つが明瞭な紐かけがない。角形の又部である。125は左の刃部先端を欠くがほぼ完形のナスビ形である。着柄軸頭部には紐かけを持たない。127は又部

4. 農具

から下の長さが42.5cmある。128には着柄部と刃部の境に横突起を持つ。129は丸形の又部である。130は着柄軸が途中から先端に向け細くなり、端部には紐かけの浅い段をつける。又部は角形。

泥除

泥除はアカガシ亜属の柾目材を横木取りして製作される。2点出土した未成品には側面に切断痕が残っているので、泥除も分割製作を行ったとみてよからう。

151は柄孔周囲の隆起を作り出しているが、後面の内削りは施されていない。上辺は直線的で刃部側の角を落として丸みを持たせている。側面に切断痕が残る。残存長30.3cm幅35cmである。152は151より加工が進み、柄孔は未穿孔であるが周囲から徐々に高まりを作ってほぼ位置決めがなされている。後面は成品の薄さには及ばないが、周縁を残しながら内削りも進められている。周縁の加工や柄孔の穿孔は最終段階にされるものとみられる。全長29.1cm幅29.3cmである。

153・154・163は柄孔部分から横割れした下端側の破片である。いずれも下端中央に小孔がある。製作時から破損による補修かは別として泥除には上下2つの部品を組み合わせて使うものがある。この場合、下半の部品は上半の部品と緊縛するにしても、さらに紐などにより柄から吊り下げる必要がある。この小孔はそれに使われたと思われる。155～162は柄孔から上端側の破片である。鋏との結合のため上端の両角に孔をもうけるが、156・161のように上端面前面に鋏の泥除装着装置端部がつく段をもつものもある。157・158・159には下半の部品との緊縛用の小孔がある。162は外面柄孔上部にはしっかりとした樋があり、柄は断面方形と推測できる。

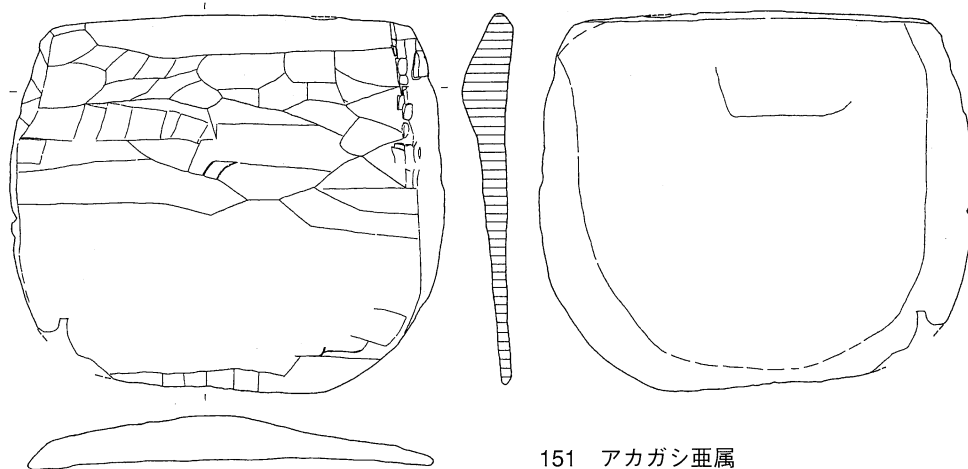
鋏

鋏には身と柄を別材で作る組合せ鋏と一体で作る一木鋏とがあるが、組合せ鋏の柄を別にするといずれもアカガシ亜属の柾目材が使われている。

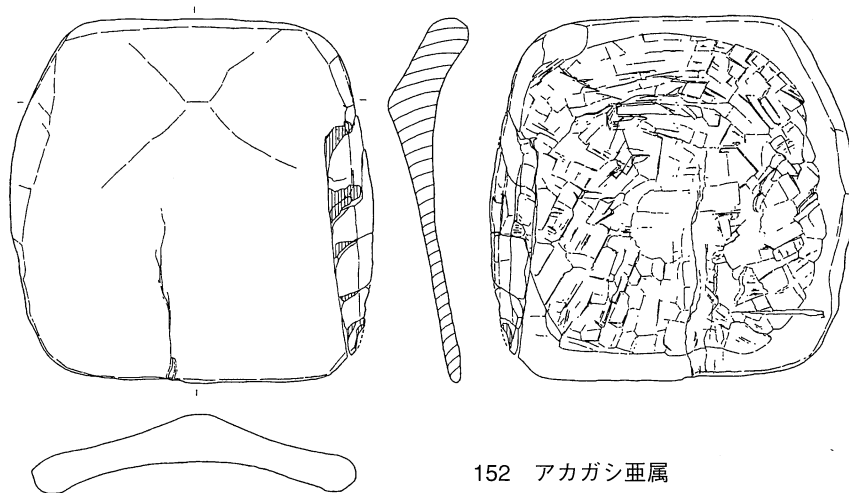
組合せ鋏の未成品には板材段階のもの(164～166)と加工が進み仕上げが近い段階のもの(167・168)が出土している。164は残存長61.9cm幅20cmの板材で、小口から10cm離れて1箇所と折損側の端部にかけて1箇所楕円形のくぼみ加工がみられる。小口から2つのくぼみ加工の間までの長さが46cmあって、166の44cmに近い長さであるので分割前の未成品と考えられる。165は長さ39.7cm幅16.5cmの板材で、一方の短辺は薄くはなっているが切断痕が残り、他方は端面に加工を施してはいるものの厚みを残していることからすれば、端面加工を施している側が上部になるとみられる。166も同様に、長さ44cm幅18.7cmの板材の上端面は、平らに加工しているが厚く縁状に残している。刃縁側の端部には切断痕がそのまま残っている。

167は長さ7.5cm幅4.5cm厚さ3.3cmと長く太い軸部をもつ。後面の上端に縁を残して段状にしていることからすると、すくい具の未成品の可能性も残る。ただ、直柄鋏未成品39(第8図)や泥除の未成品152(第21図)で見てきたように、周縁を残して内部を薄く削り込んでいくので、167も上端部に周縁がまだ残っている状態と見ることもできる。168は後面の中央上部に舟形隆起状の削り残しがある。直柄鋏の未成品とも思えるが、軸部を持つことや舟形隆起状の削り残し以外の横断面形状からして組合せ鋏の未成品と考えられる。全長27.4cm幅18.4cmである。

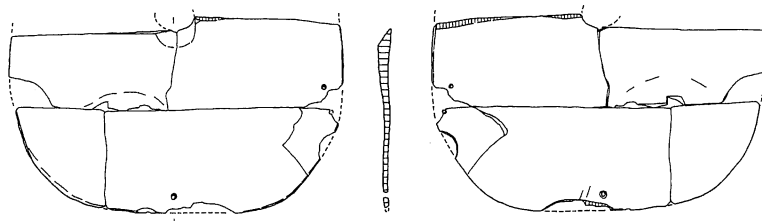
組合せ鋏には平鋏と又鋏とがあるが、柄の装着方法には3者がある。1類は柄の装着溝が前面で袋状になふくらむもので、169が1点のみ出土している。2類は装着溝両側で上端面よりに1対の孔を持ち、これにより紐で柄を緊縛固定するもので、3点出土している。完形品の170では軸部が小さくなって半ば形骸化している。3類は太くてしっかりとした軸部を持つもので、もっとも出土数が



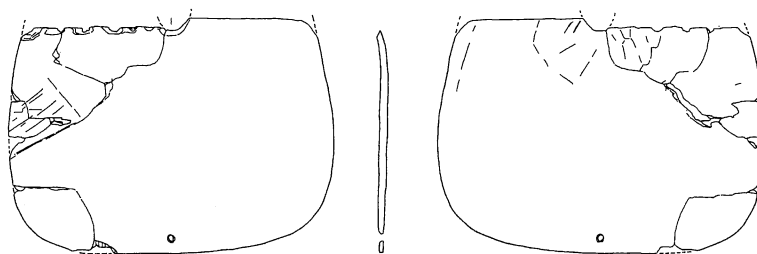
151 アカガシ皿属



152 アカガシ皿属



153 アカガシ皿属

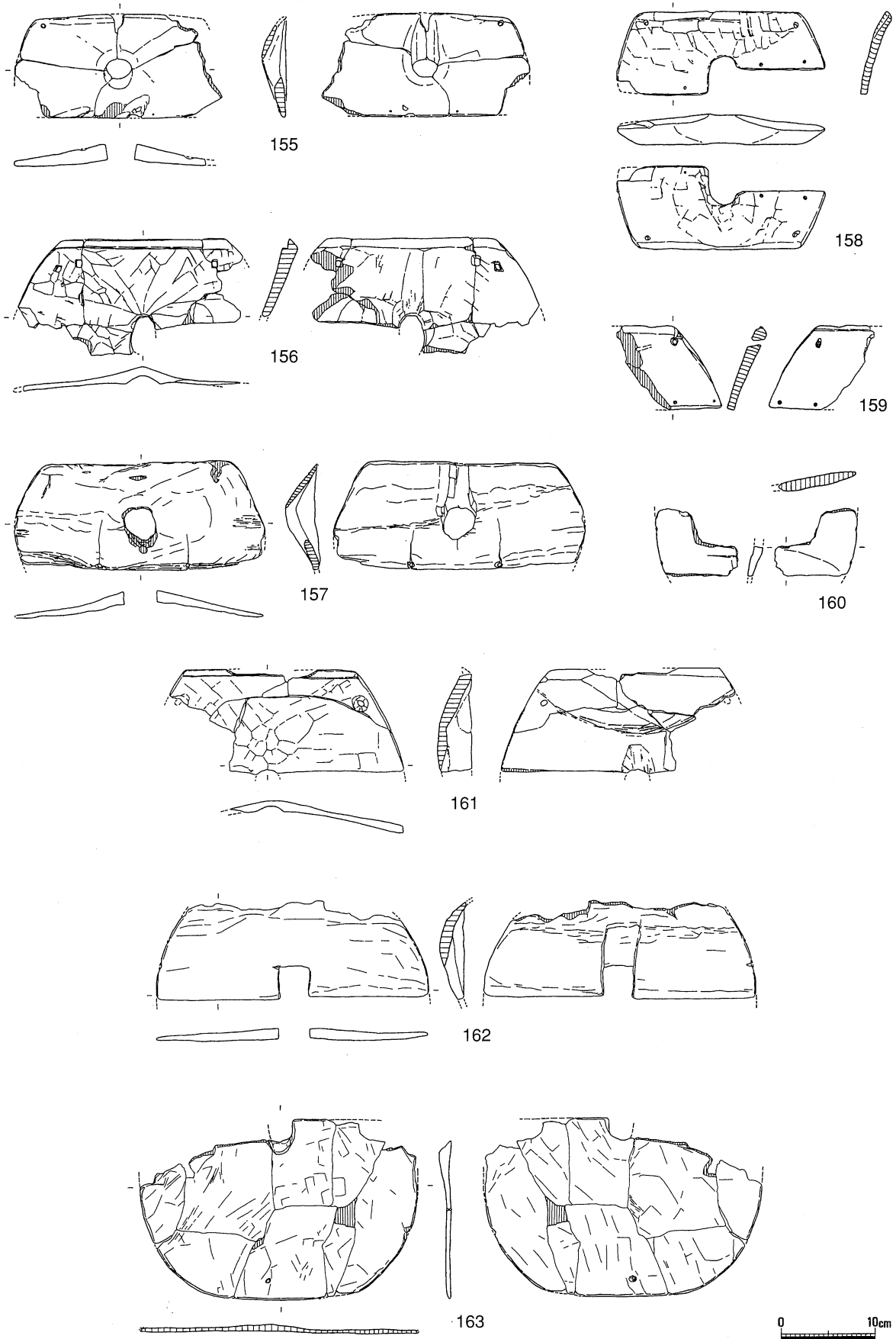


154 アカガシ皿属



第21図 泥除(1)

4. 農具



第22圖 泥除(2)

多い。部分的属性でみると、軸部では紐かけを強調するものとそうでないもののが、肩部ではいかり肩・平肩・なで肩が、肩端部の突出のある・なしが、刃部先端では角形と丸形とがある。又鋤には二又と三又とがあるが、又部の形状は曲柄鋤でみられた角形や丸形はみられず、いずれも尖形である。

169は軸部や袋部を欠くが柄孔が上端面に接し、前面で柄孔周囲の厚みが増すことから1類と考えられる。袋部は欠損しているものの周囲の盛り上がりが少ないことからすれば、装着される柄の先端は平たく加工されていたと思われる。肩部では幅が12cmと狭く、緩やかに広がって刃部中央で最大幅となる、胴張りした平面形も他とは異なっている。170～172は2類である。170には柄の先端が残っていた。柄はツガの心持ち材を使い断面方形にしている、柄孔との掛かりのための段がある。端部は装着時に身の前面から突出しないように加工されている。身の着柄軸は先述のように幅2.3cm長さ2.5cmと小さく、軸頭の紐かけもしっかりしていない。全長33.8cm幅17.5cmである。171は着柄軸が欠損しているが刃部長42.5cmと長い。170の着柄軸の長さ2.5cmを付加すれば板材の長さとはほぼ符合するので、使用に伴う損耗が進んでいないとみてよからう。これに対し172は21.8cmと短くなっている。刃縁の形状は171が丸形、172は角形である。

175は着柄軸が太くしっかりしていて、軸頭の紐かけは前面から側面に及ぶ。176・177は顕著ないかり肩で、177は着柄軸が7.5cmと長い。179・180は着柄軸が短く、前面に屈曲している。189は肩の側方への突出が大きい。199は刃縁で幅が狭まり逆三角形状を呈する。着柄軸は長さ7cmとやや長い。全長29.4cmである。201は完形品で、右の刃縁が著しく片減りしている。全長28.5cm幅17.9cmである。209は柄孔から刃縁までは3.8cmしかなく、使用に伴う損耗が著しい。全長16.5cm幅16.0cmである。

178・189・196・206・210・212～217は又鋤である。178・196・210・217でみると、二又の組合せ鋤は又部の幅を一木鋤と異なり狭く作っている。210は又部が中軸から右に偏っており、平鋤を二又鋤に転用している。全長31.6cm幅19cmである。212は組合せ三又鋤で、刃部は又部から先端までの長さが、わずか7cmと短くなっている。全長22cm幅17cmである。214は三つ又鋤で柄が樹皮で緊縛されたまま残っている。

一木鋤にも平鋤と又鋤があって、把手の形状は三角形とT字形がある。また、小型一木鋤では把手が小さな頭部状のものと、円盤状のものがある。218は二又一木鋤で刃の1本を中ほどから欠くがほぼ完形である。柄は断面形が隅丸の長方形で、把手の形状は三角形である。全長126.7cm刃部幅15cmである。219は刃縁の幅が狭くなる逆三角形状を呈するとみられる。身は上半部で湾曲し明瞭に上側面を作り出している。側面から見ると柄は上側面全体からのびている。把手の形状はT字形で、断面円形の柄は長さ65.5cmである。220は顕著ないかり肩を持つ。224・225は身の縦断面が湾曲する小型の一木鋤である。224の柄は全長17cmで端部は小さな頭部状を呈する。225には直径6.5cmの大きめな円盤状のグリップエンドがつく。227・228は身の縦断面が湾曲しない一木鋤で、228は叩き板状の形状をしていて全長33.5cm幅10.2cmである。

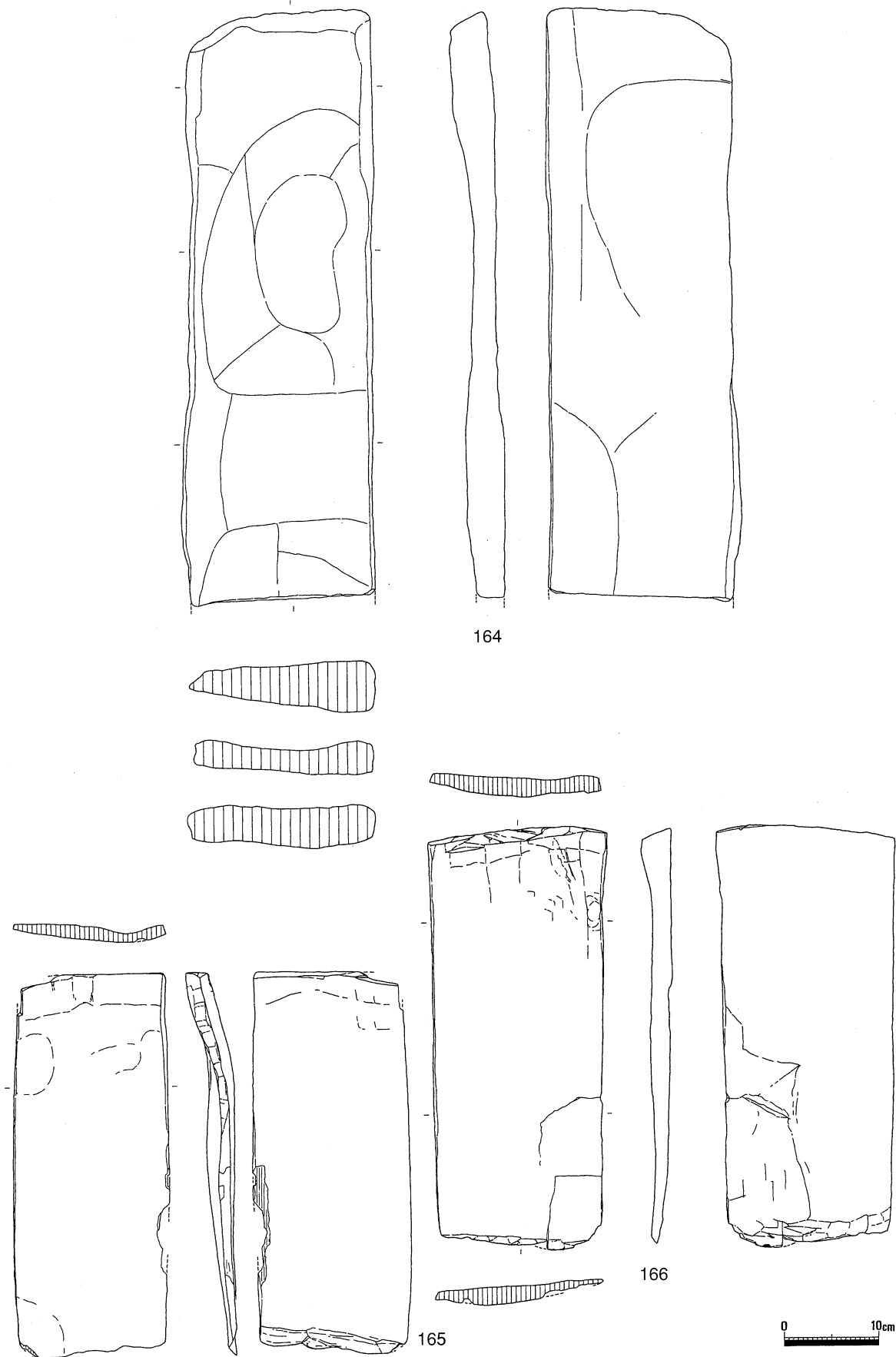
掘り棒

掘り棒は1点出土している。222は幅9cmの楕円形の身を持つ。柄と身は直接接合しないが同一個体とみられる。柄は断面楕円形で、端部はわずかに直径が大きくなっている。残存長85.9cmである。

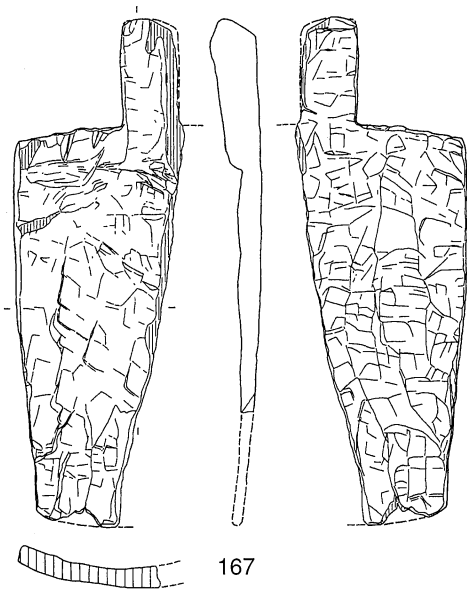
柄

柄には鋤の膝柄・反柄、組合せ鋤の柄などがある。装着部分が破損して棒との区別の付かないもの

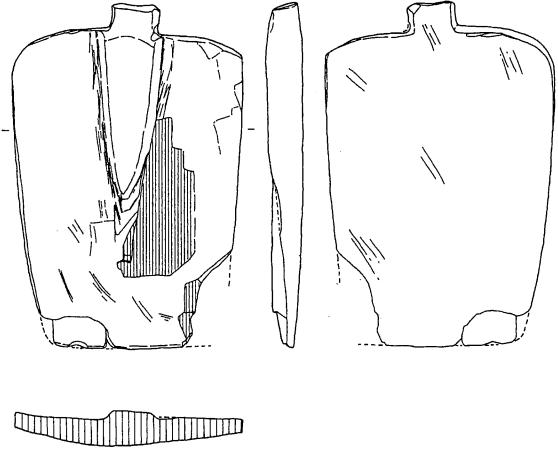
4. 農具



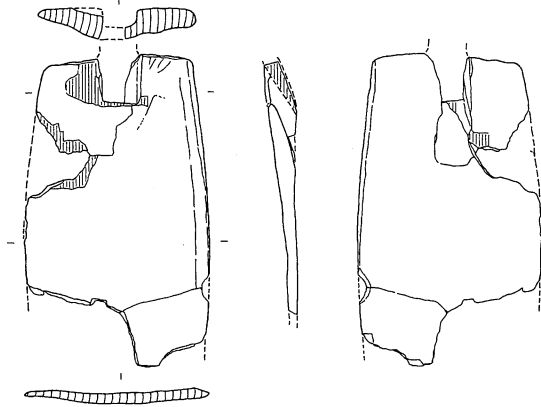
第23図 組合せ鋤(1)



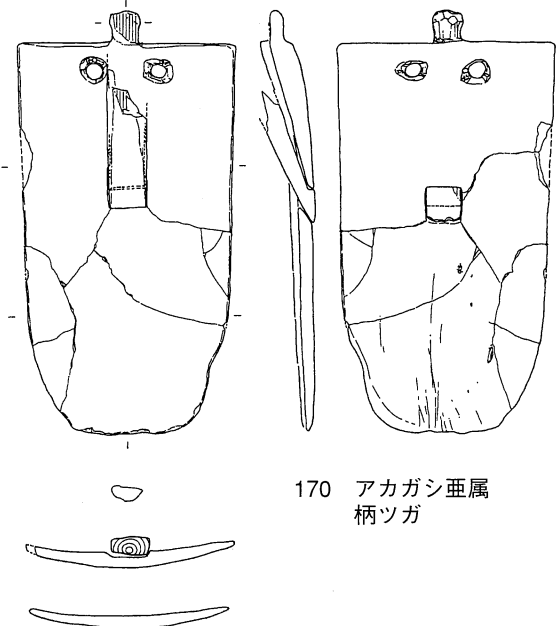
167



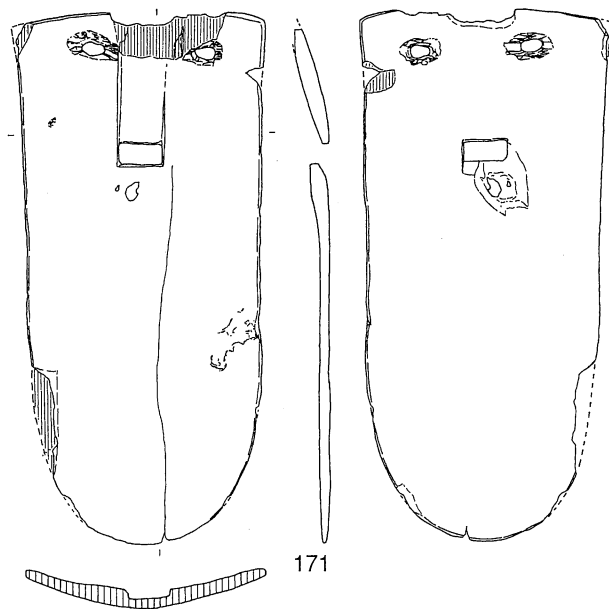
168 アカガシ亜属



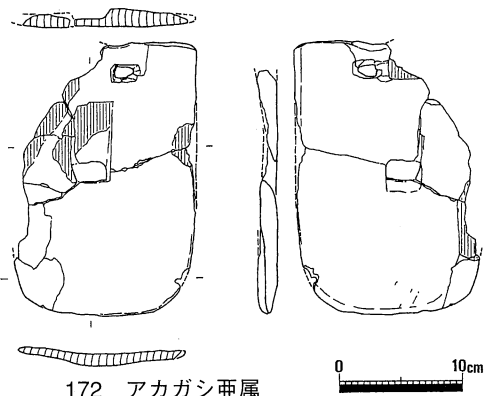
169 アカガシ亜属



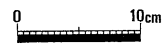
170 アカガシ亜属
柄ツガ



171

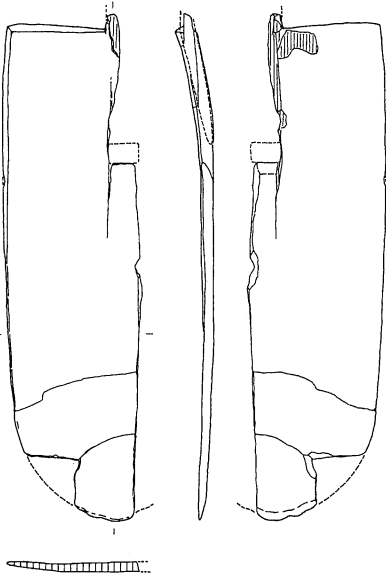


172 アカガシ亜属

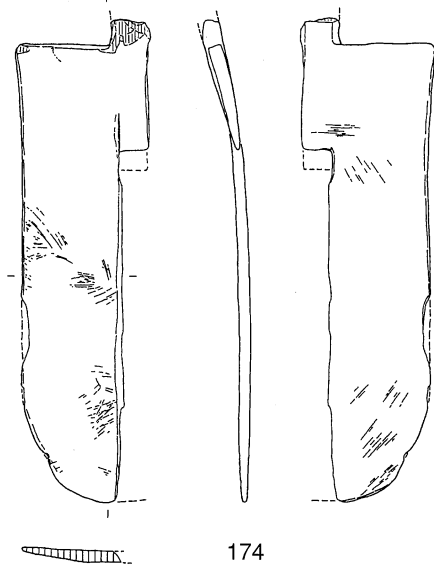


第24図 組合せ鋤(2)

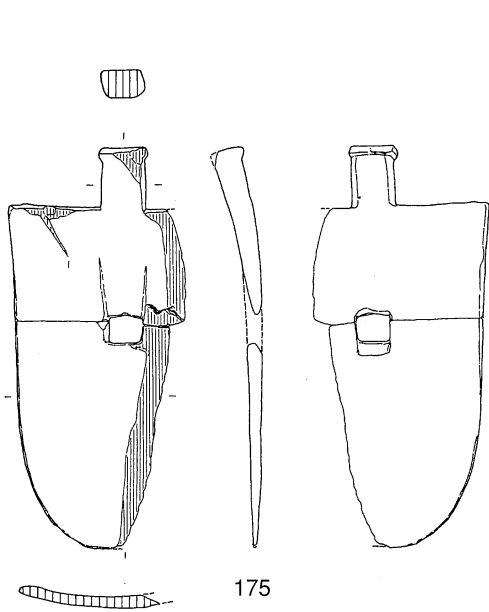
4. 農具



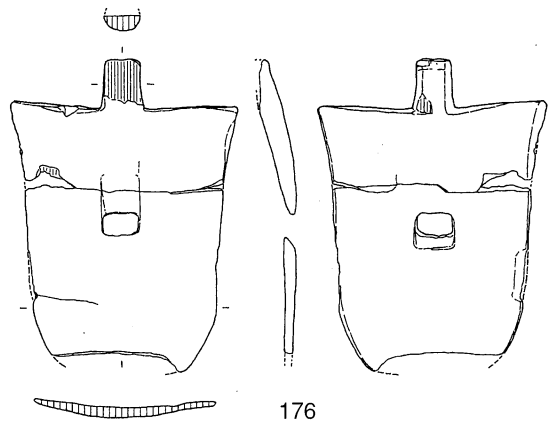
173 アカガシ亜属



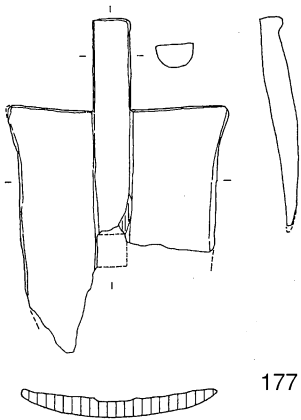
174



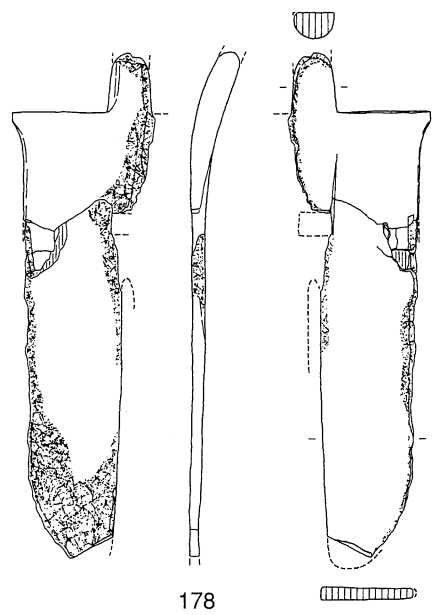
175



176



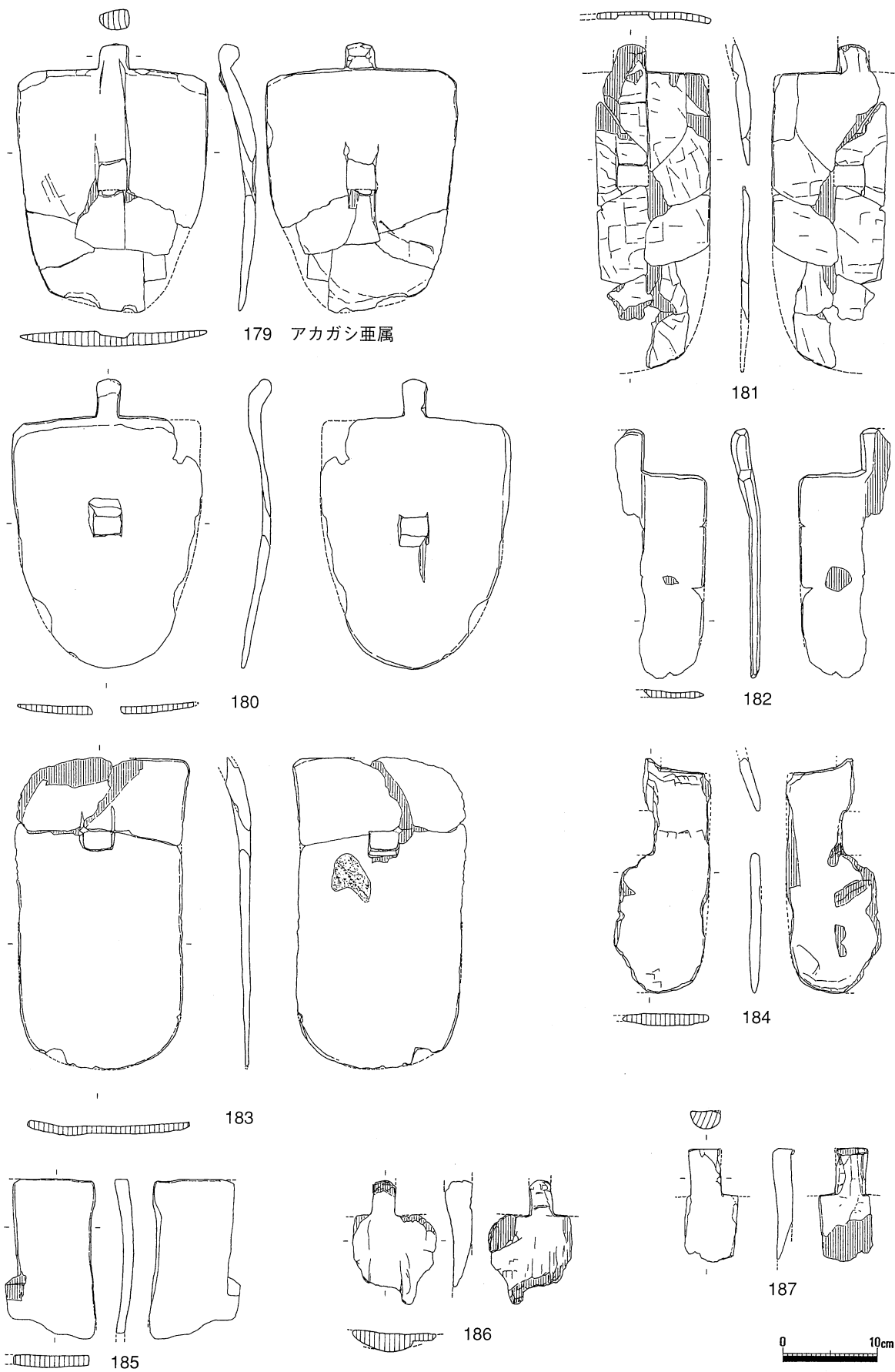
177



178

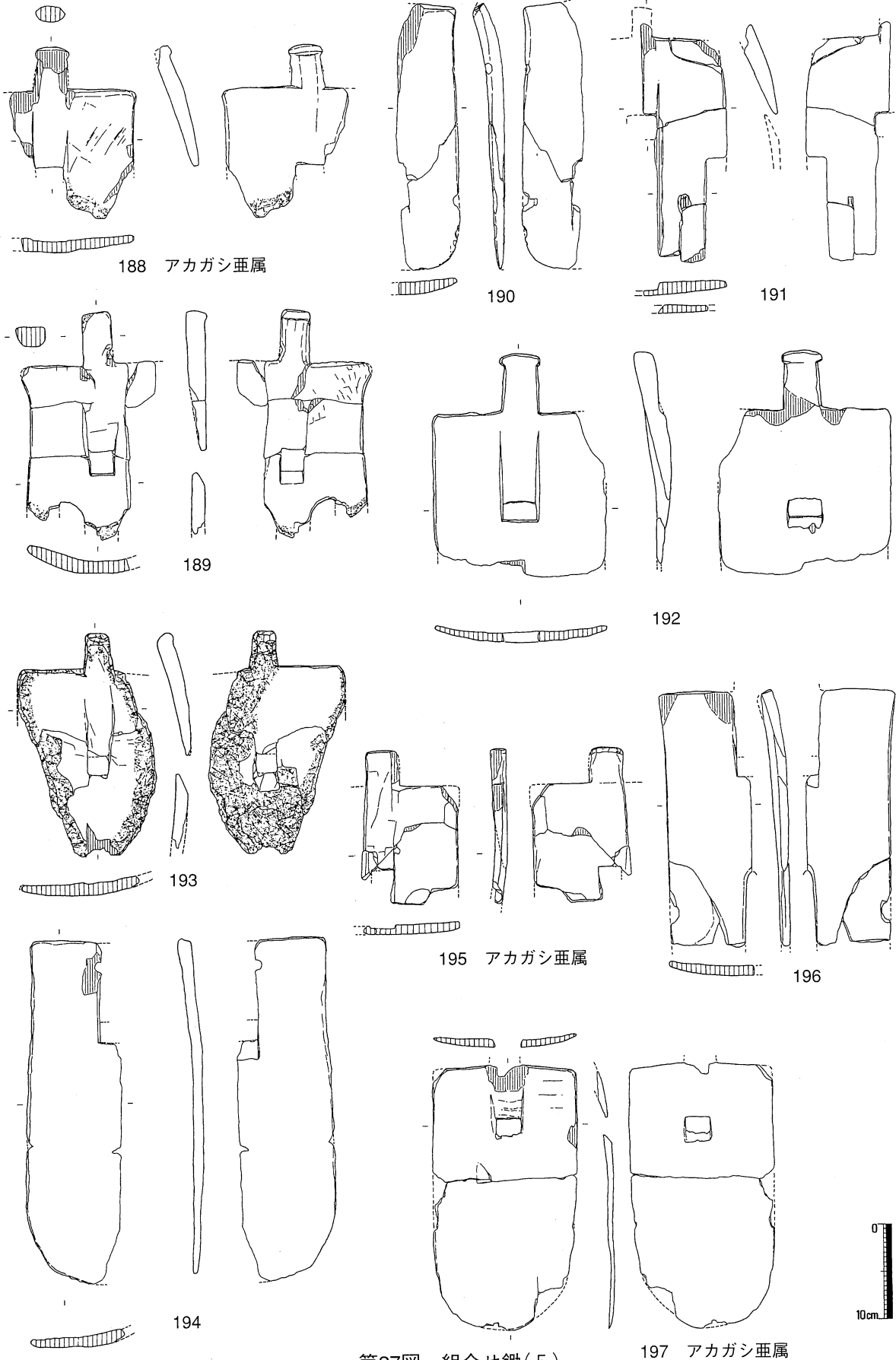


第25図 組合せ鋤(3)

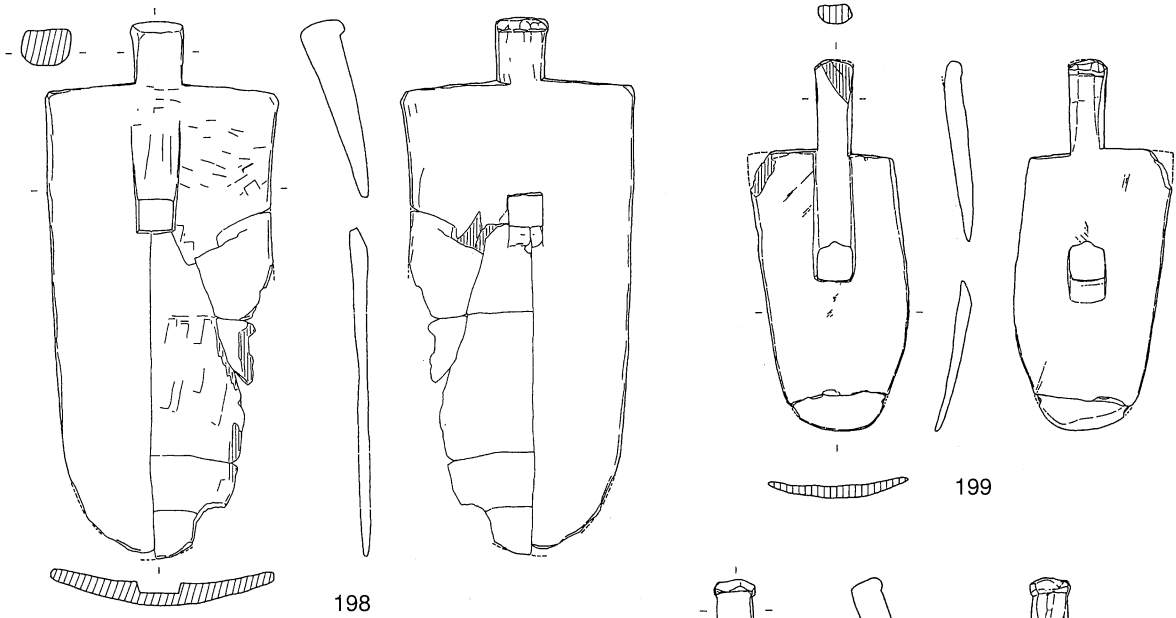


第26図 組合せ鋤(4)

4. 農具

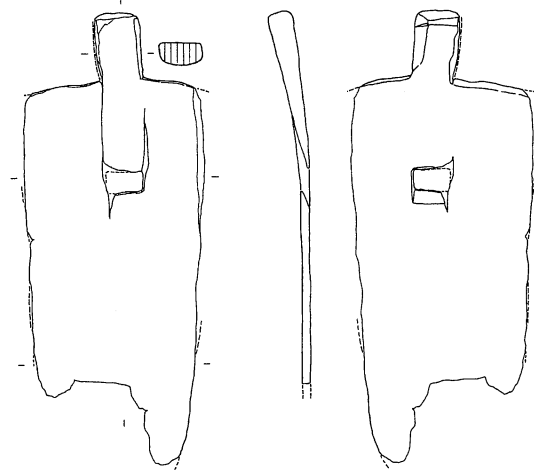


第27図 組合せ鋤(5)



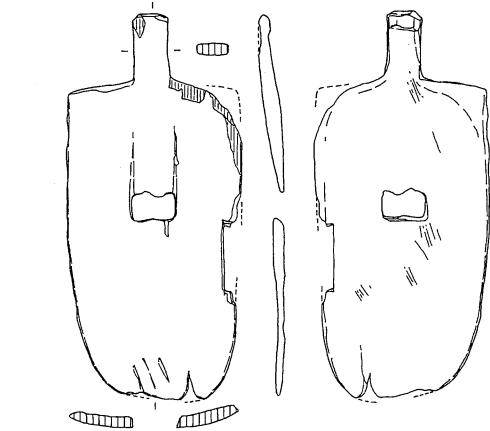
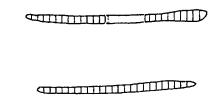
198

199



200

201 アカガシ亜属



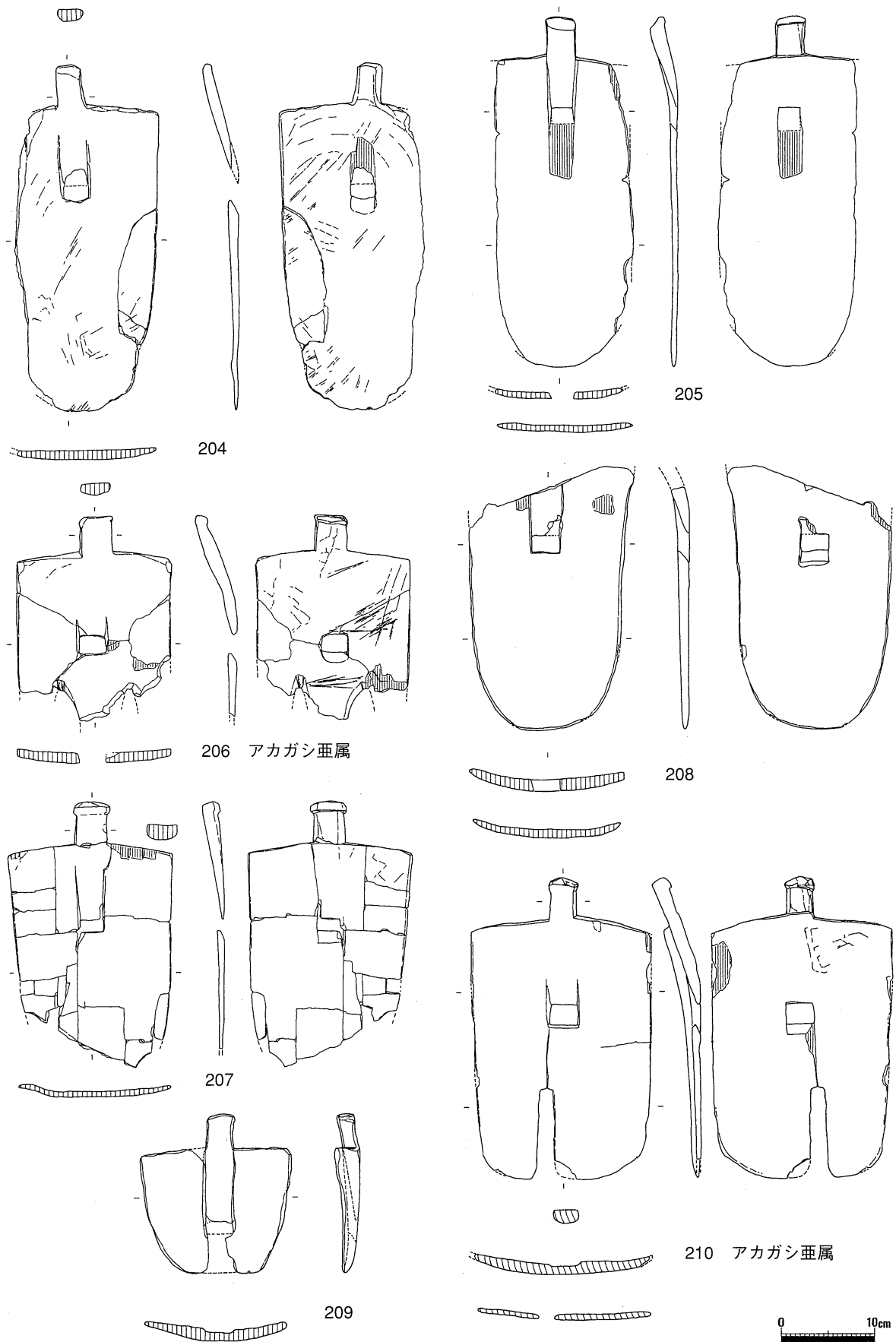
202 アカガシ亜属

203



第28図 組合せ鋤(6)

4. 農具



204

205

206 アカガシ亜属

208

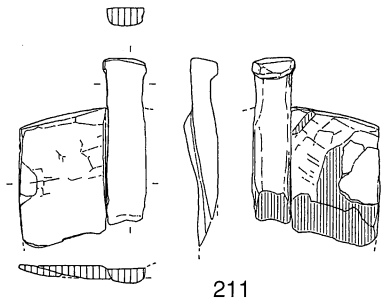
207

210 アカガシ亜属

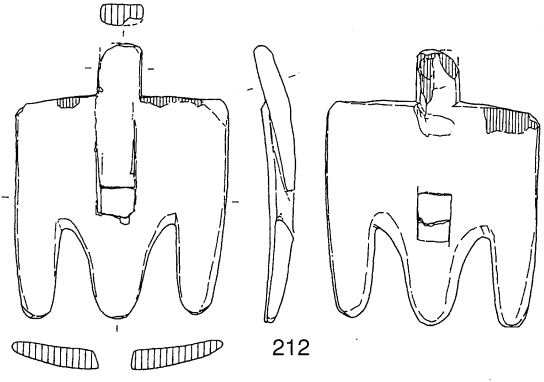
209

第29図 組合せ鋤(7)

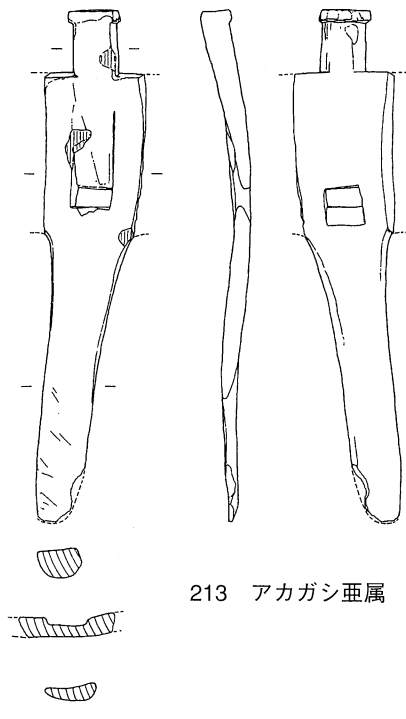
0 10cm



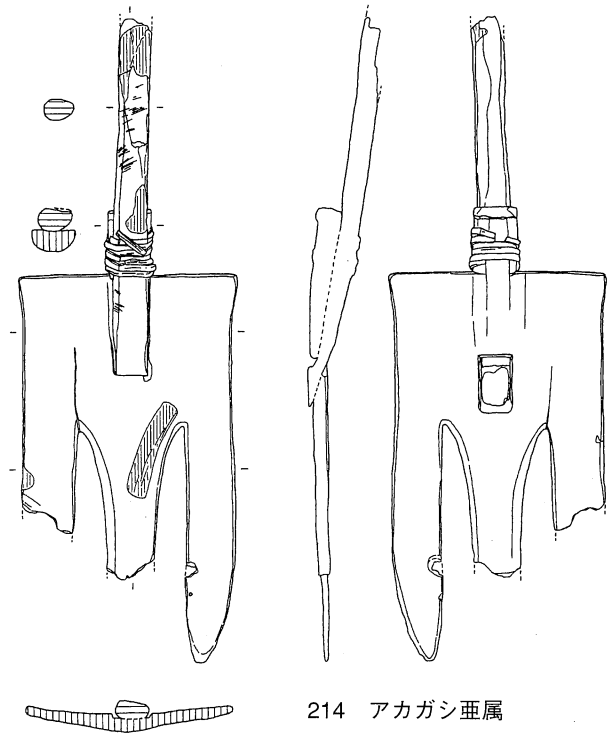
211



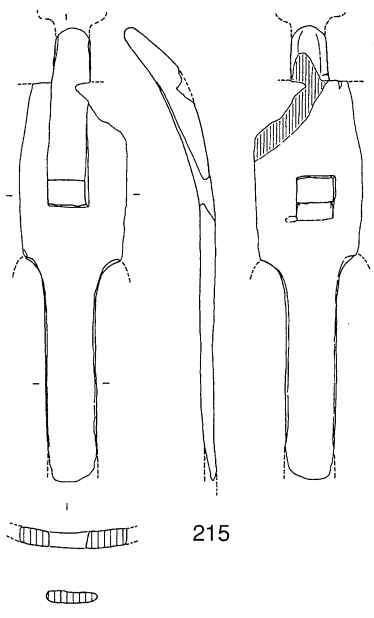
212



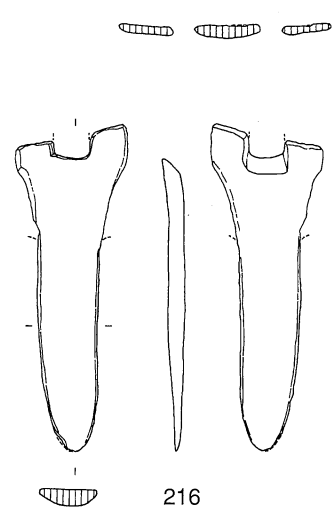
213 アカガシ亜属



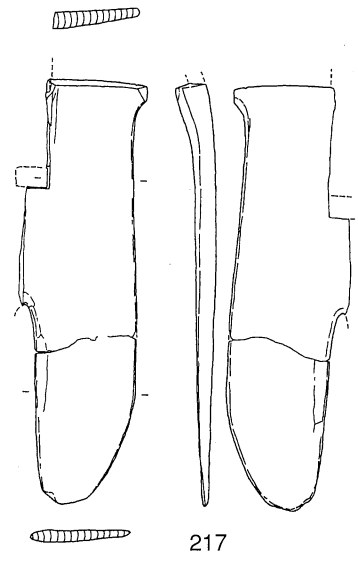
214 アカガシ亜属



215



216

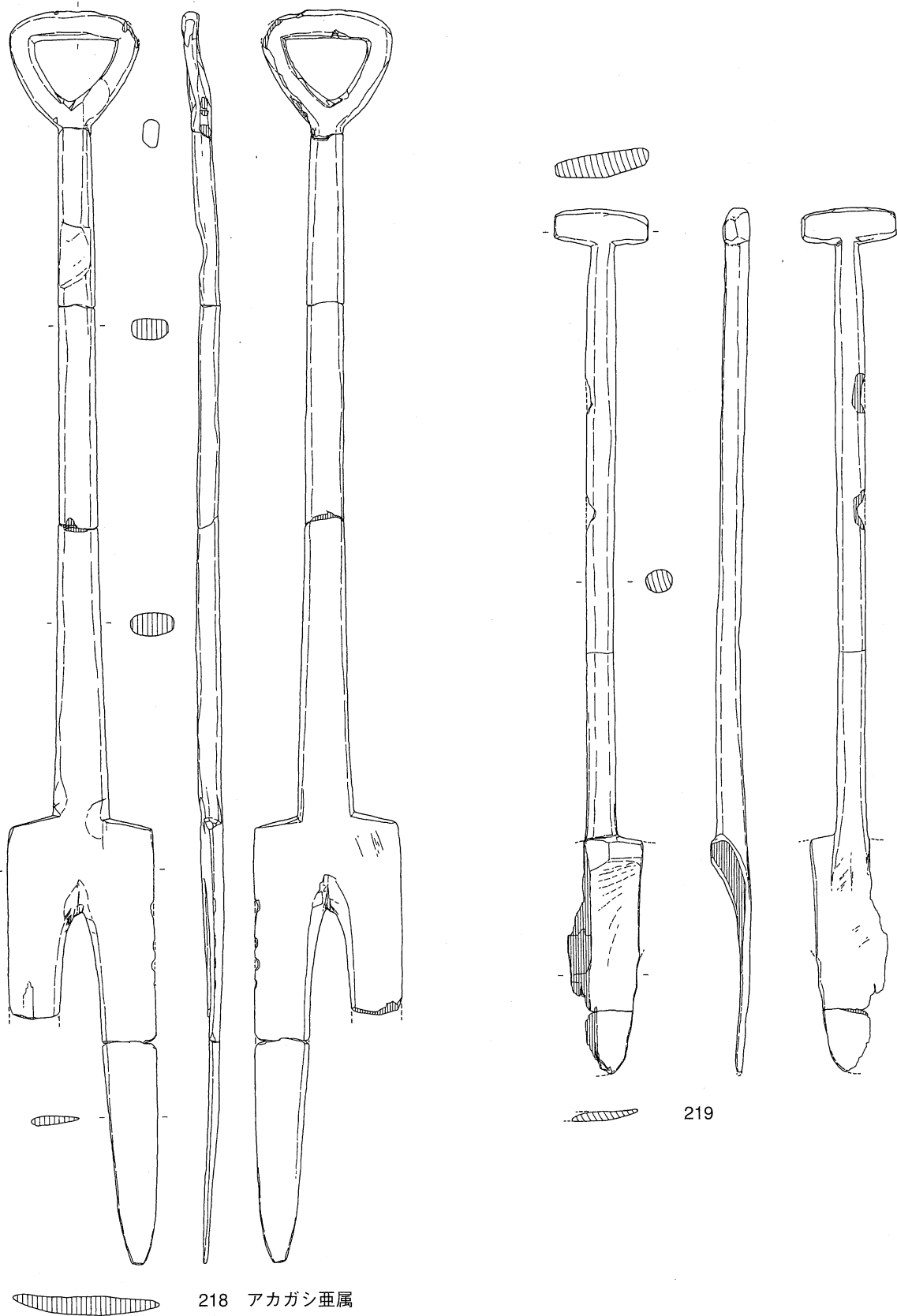


217



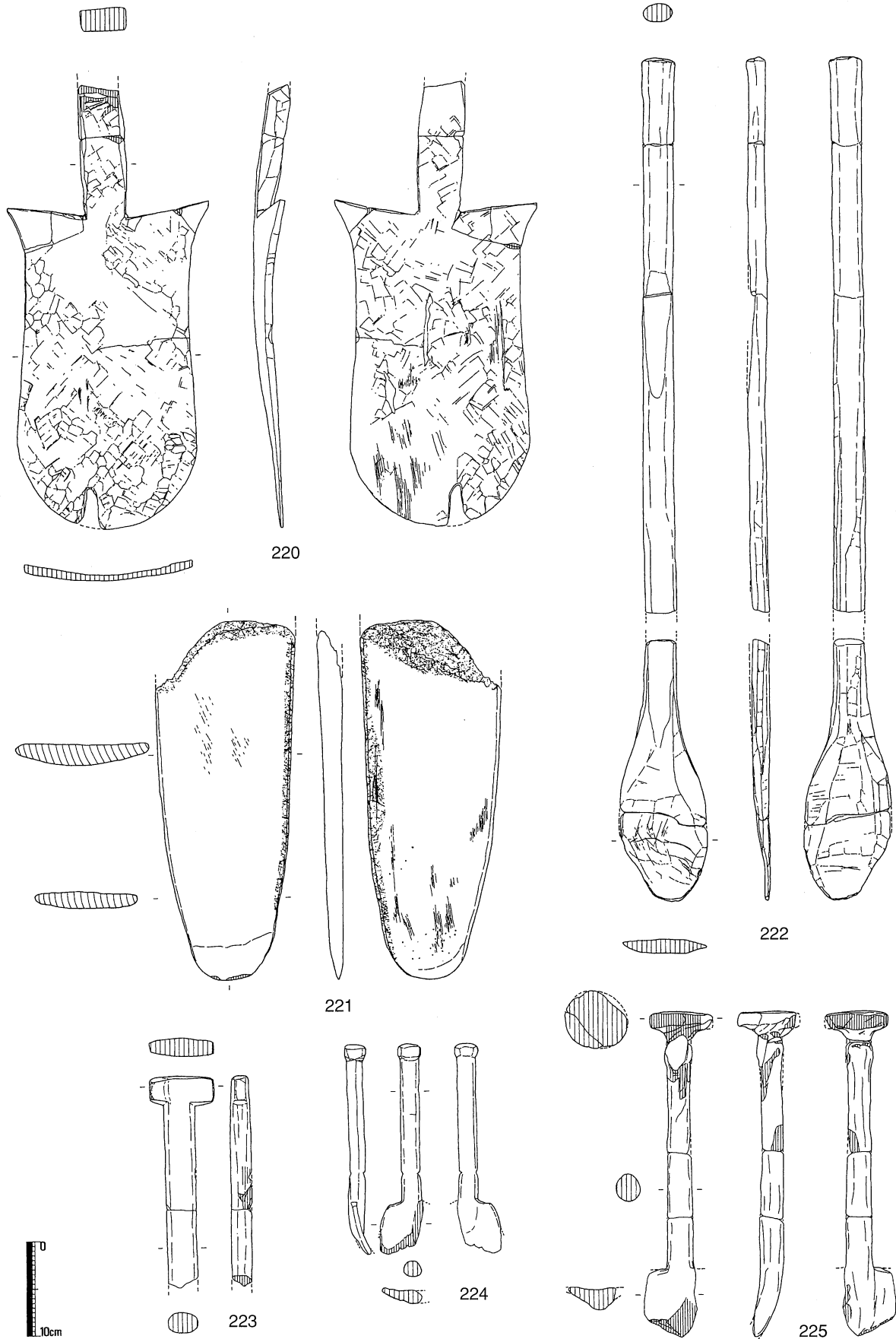
第30図 組合せ鋤(8)

4. 農具



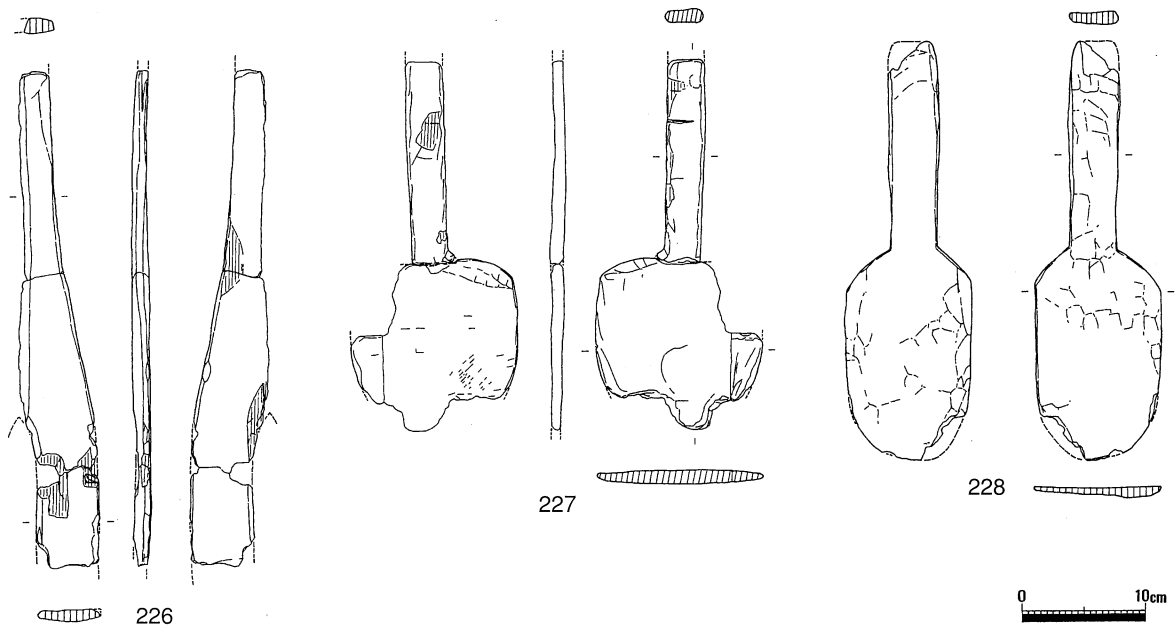
0 10cm

第31図 一木鋤(1)



第32図 一木鋤(2)・掘り棒

4. 農具



第33図 一木鋤（3）

があるが、端部の加工のしっかりしているものや割材を使用しているものを取り上げた。

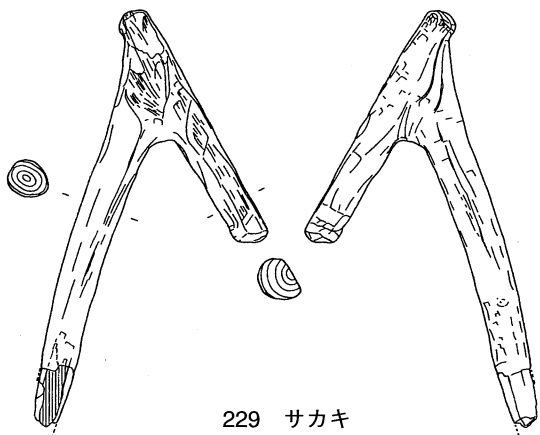
229～231は鋤膝柄でいずれも装着面の幅は3cm前後である。229には台前面の上端・下端に紐かけがあって、サカキの枝分かれ部分を使用している。231もサカキを使った鋤の柄である。鋤台上部の紐かけが不明瞭で、鋤台前面の加工からすると紐かけの間隔は6cmである。232・233は鋤反柄で装着面は湾曲し平坦面を作らない。232は鋤台上下の紐かけは脆弱であるが、233はしっかり作っている。233の樹種はサカキ属である。234は図の上端部を断面長方形に加工している。235・236は図の下端部を細くし端面を丸く加工している。

237・238は組合せ鋤の柄で先端は断面方形にして次第に厚みを減じ、端部を三角形に落とす。着柄孔への掛かりの小さな段がつく。237は残存長72.5cm幅2.6cmで、完形の238は長さ46.5cm幅2.8cmである。239・247・249には円形のグリップエンドを作っている。242は針葉樹柾目材で残存長74.6cm直径5.0cmあって、柄にしてはやや太すぎるかもしれない。

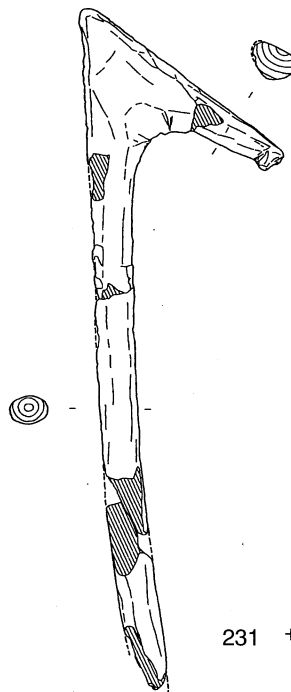
臼

臼は大形と小形に大別される。大形臼は完形品がなく断片ばかりであるが、広葉樹の心持ち材を剥り貫いて作っていて、樹種の判明している252はクスノキ製である。把手を持つ資料が5点出土しているが、1個体での把手の数が不明でもあり、中には同一個体が含まれている可能性もある。搗き面の高さがわかる資料はないが、255・258でおよその推測ができる。255では約5cm、258では10cm以下となる。これに対し252では、搗き面が中央部で急に深くなる事がない限り、搗き面の高さは20～25cmと高く復原できる。臼の搗き面の高さや堅杵の長さの関係を明らかにした村上由美子氏の研究⁹⁾にしたがうと、255・258には握部までの長さが50～60cmの280や283の様な長い堅杵が、252では30～40cmまたはそれ以下の短い杵が用いられたと推測される。

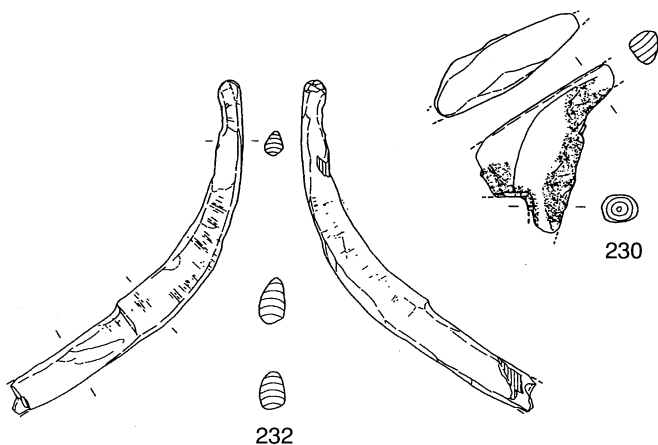
小形臼には平面形が円形・楕円形双方があって、底部も平坦か上げ底気味に加工して据わりのよ



229 サカキ

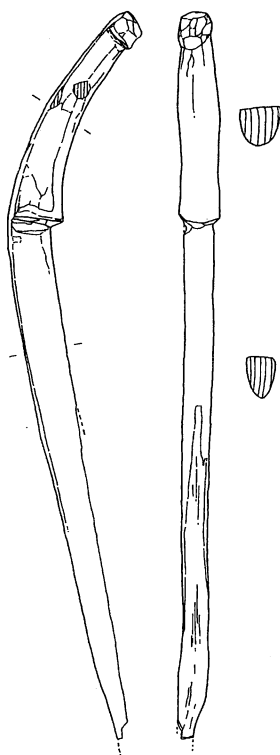


231 サカキ

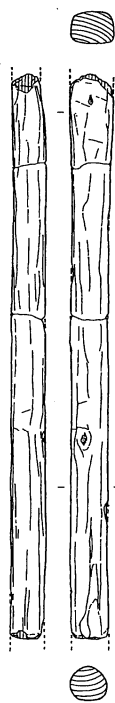


230

232



233 サカキ属



234



235

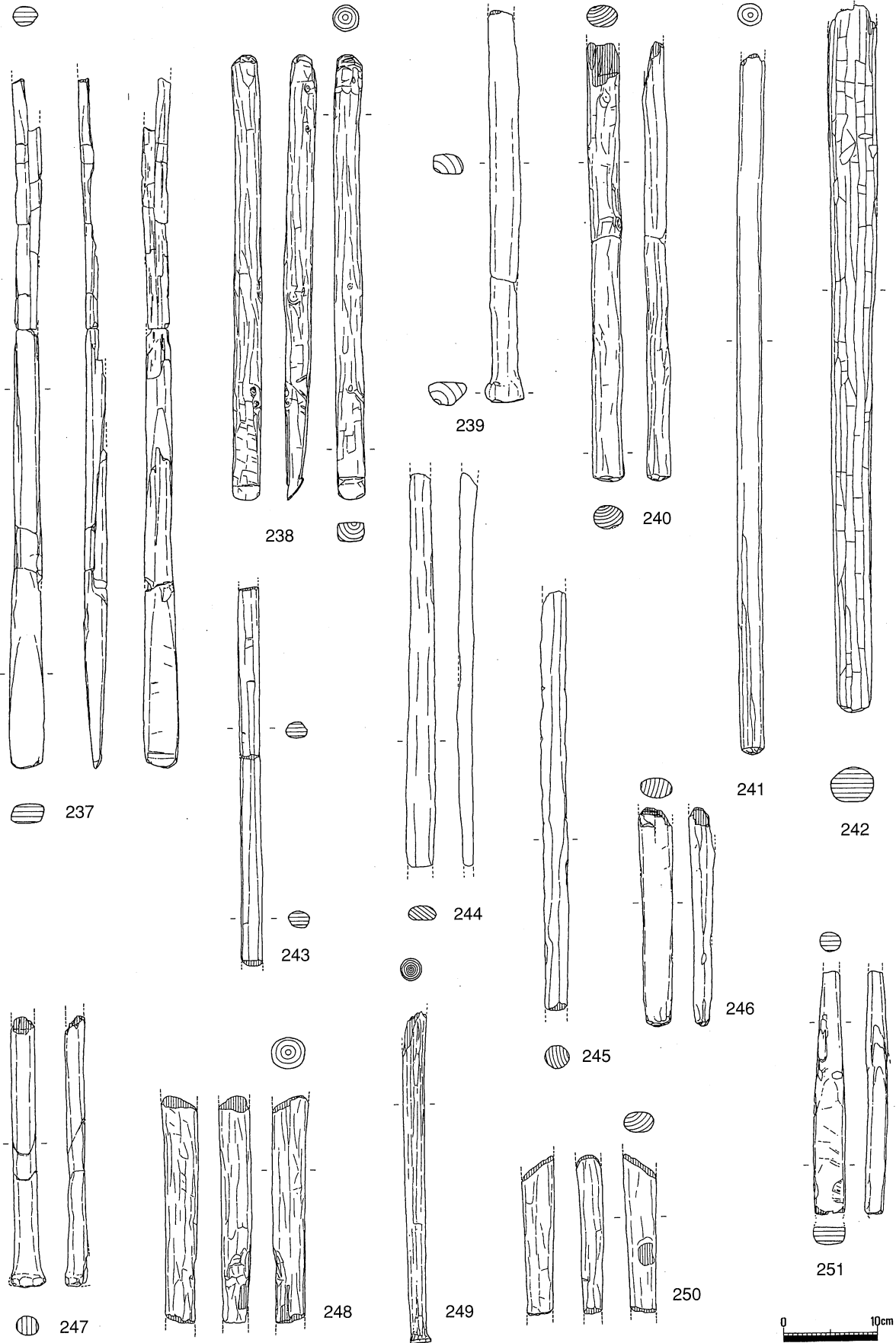


236

第34図 柄(1)



4. 農具



第35圖 柄(2)

いものと、中心部が突出して据わりが悪いものがある。据わりの悪い臼は台座の上に乗せられたのだろう。用材は心持ち材・割材が使われていて、判明している樹種はクスノキ・ヤブニッケイ・エノキ・エノキ属である。

252～259は大形臼である。252はかるうじて全形が推測可能な資料である。直径50cm高さ46.8cmに復原でき、搗き面の深さは不明であるが、把手を4本持つとみられる。253は把手の部分の破片で、高さ48.6cmである。255は接合しない3破片からの復原である。256は高さ48.8cm、257は高さ44.4cmである。259は鼓形を呈する臼の底部の破片で、外面には加工痕が顕著に残っている。内面は剥落していて搗き面の高さは不明である。

260～273は小形の臼である。搗き面の深さが4cmに満たない浅めの臼と、それを越える深めの臼とがある。260は底部の小片であるが、クスノキ製である。261は未成品で、上面から搗き面を1cmほど彫り込んだ段階。上面に3×2.5cmの突起が残り、側面及び底部の加工痕が顕著である。底部はとがり気味のため安定が悪い。直径22.6cm高さ11.3cmである。263は平面楕円形で内面中央は磨滅している。264は土圧によりやや変形しているが、ヤブニッケイの心持ち材を使っていて搗き面の深さは6.2cm、高さ13.4cmである。265は内面が平滑で外面には加工痕が明瞭に残る。エノキ属を使って、高さ19cmで搗き部の深さ15cmである。266はほぼ完形品で、搗き面は深さ4cmとやや浅め。直径21.5cm高さ13.5cmである。267は266と同じく浅めで、心持ち材を使う。搗き面は炭化して上端部は欠損している。直径19.4cm高さ18.6cmである。270は上端部を欠くが現状で搗き面の深さが6.5cmあり深いタイプである。271も高さの割に深さがある。273は搗き面の深さ1.6cmとごく浅い。樹心の部分は抜け落ちていて残り具合はあまり良くない。エノキの心持ち材を用いている。高さ6.7cm復原直径12.3cmである。

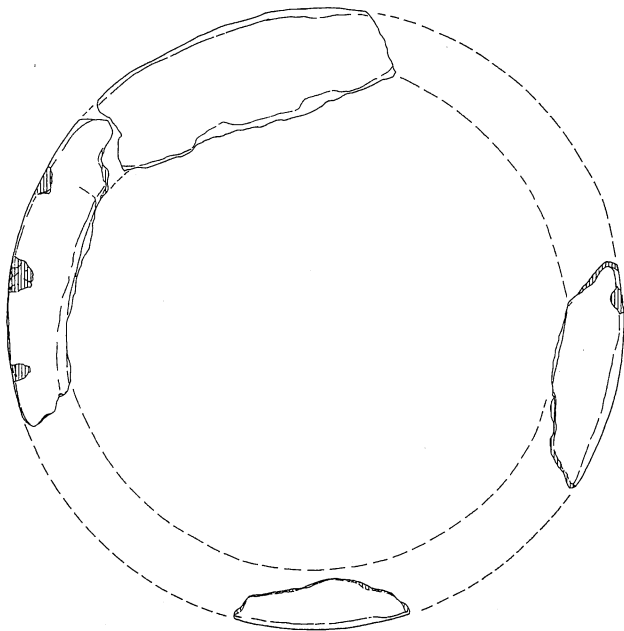
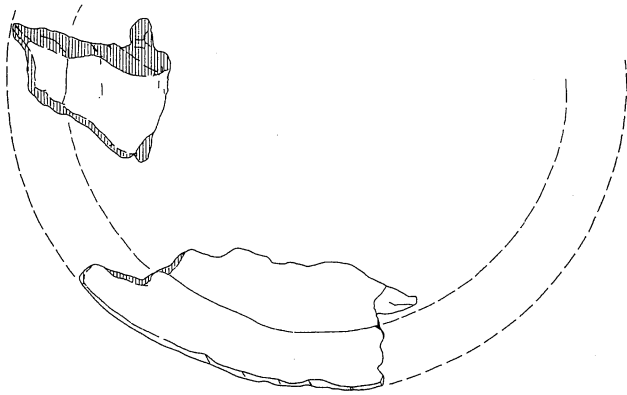
竪杵

竪杵には全長1m以上搗き部直径7cm以上の大形と、それ以下の小形とがある。大形の杵でも広葉樹の心持ち材を用いるものがほとんどであるが、284は広葉樹の割材を用いている。大形の杵では握部に算盤玉形の節帯を1つ持つが、小形の274・275・277・278では搗き部が片方にしかない横槌と同じ形状をしている可能性がある。樹種は大きさを問わずツバキ属の心持ち材を使うものが多いが、ツゲも1点ある。

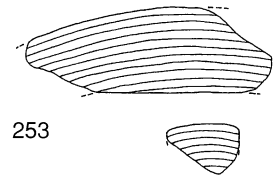
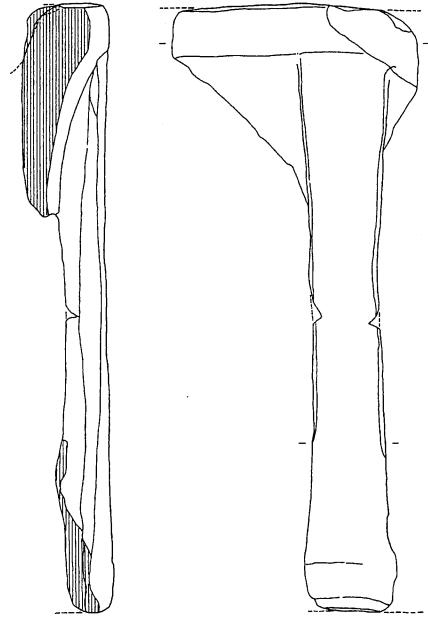
274は小形の竪杵の握部から半分以下の破片である。搗き部から握部には1段もうけて境を明らかにして、撞き部端は円形である。残存長37.8cm直径5cmでツゲの柁目材を使っている。275は心持ち材製の小形杵であるが、握部で折損している。搗き部端の形状は丸い。276は大形の杵の1/2弱の破片で、残存している搗き部端は平坦である。残存長42.2cm直径7.6cmでツバキ属の心持ち材を使用している。277は握部なかばで折損しているが、握部残存長が12cmあるので節帯を持たないか、横槌形をしているとみられる。搗き部端は平坦で、残存長54.8cm直径5.6cmである。279はミニチュア杵の形をしているが、撞き部端は使用されており両方ともやや円形である。握部には算盤玉形の節帯が付く。ツバキの心持ち材を使い、全長20.8cm直径2.6cmである。

280は大形の完形品で、握部には隆起の低い算盤玉状の節帯を持つ。搗き部端は一端が平坦で他端は丸い。表面は長軸方向の細長い加工痕が顕著である。ツバキ属の心持ち材を使い、全長134.6cm長径7.8cmである。281もツバキ属の心持ち材製の大型の完形品で、握部に隆起の低い算盤玉状の節帯を持つ。搗き部は一端が平坦で他端がややとがり気味で、搗き部と握部との境には段がある。表面は

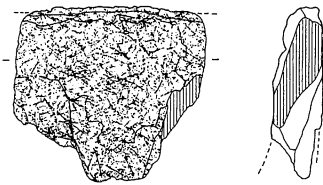
4. 農具



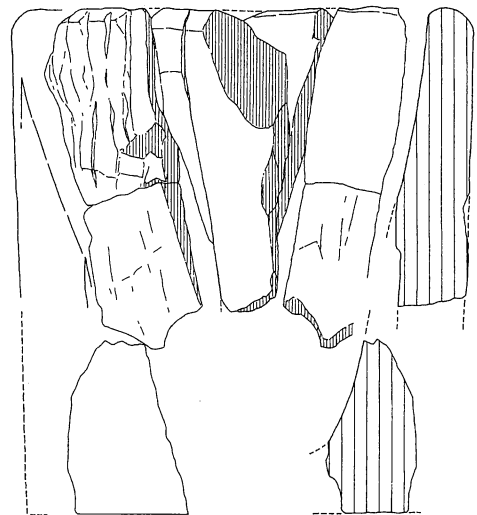
252 クスノキ



253



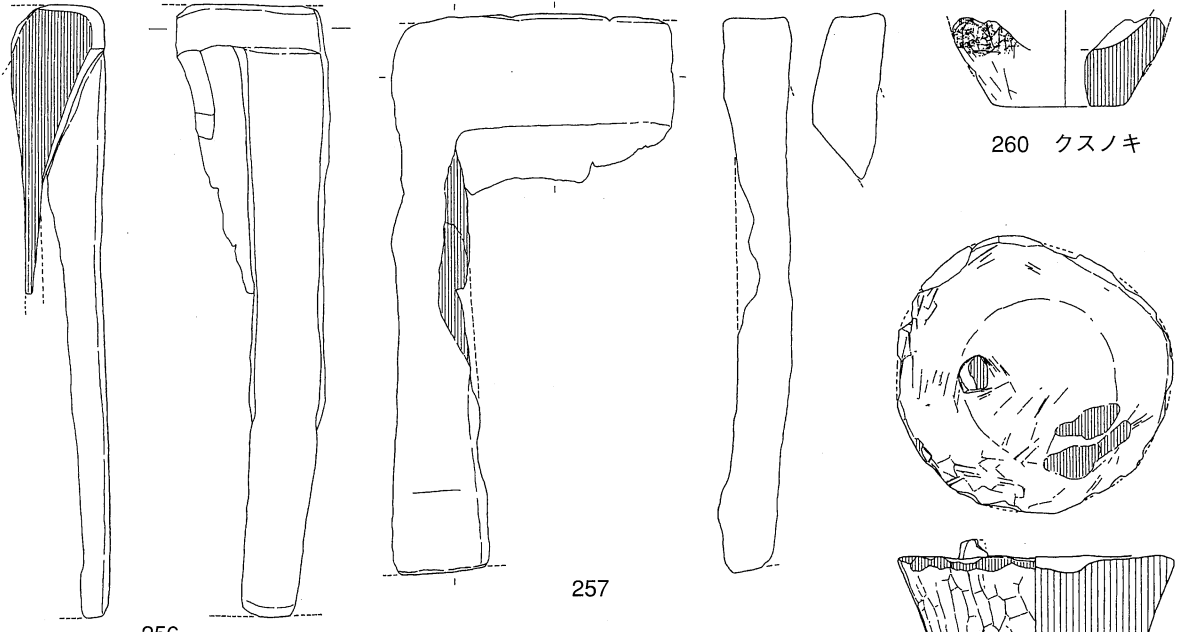
254



255



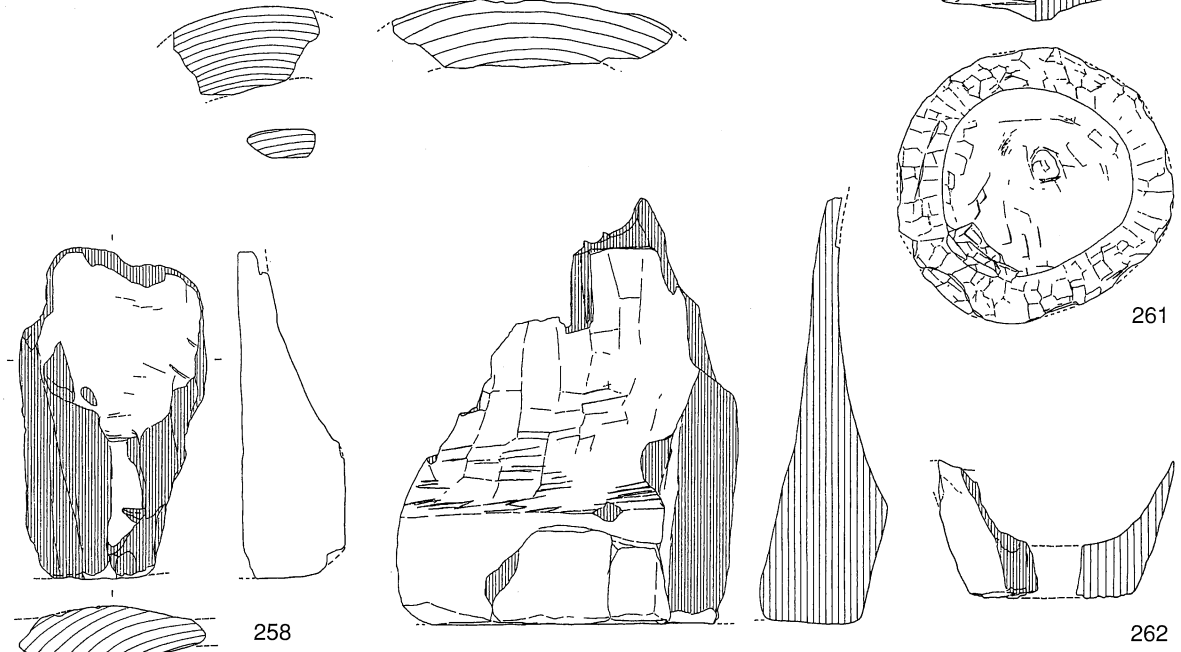
第36図 白(1)



260 クスノキ

256

257

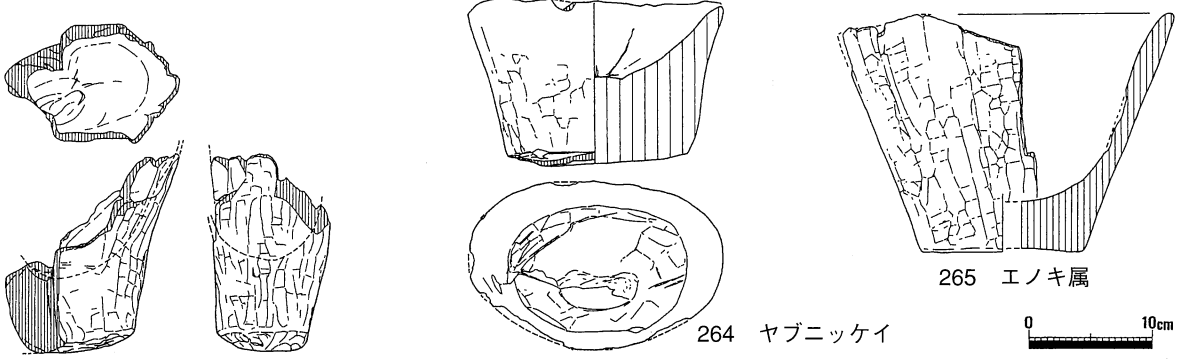


258

259

261

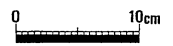
262



263

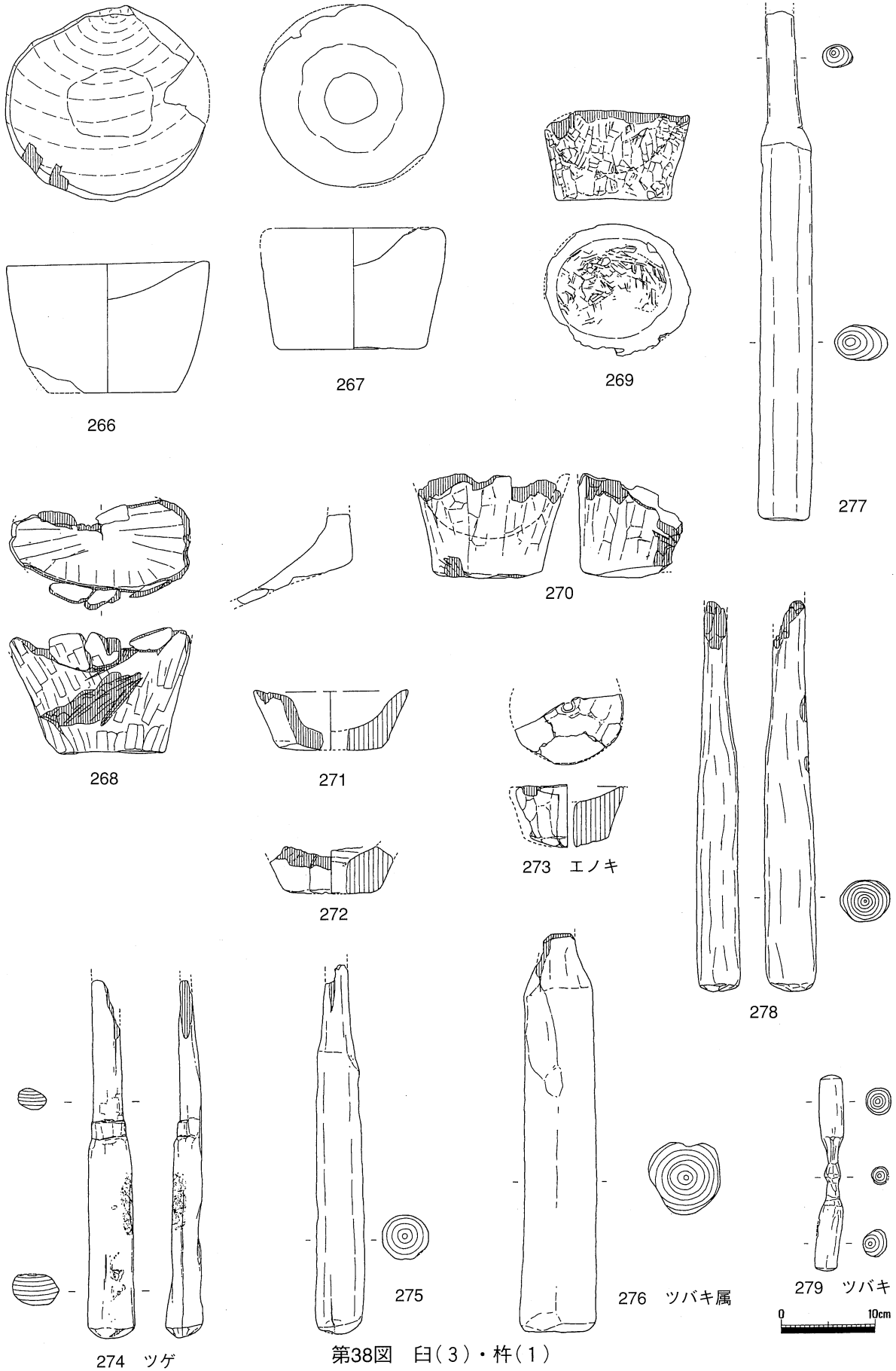
264 ヤブニッケイ

265 エノキ属

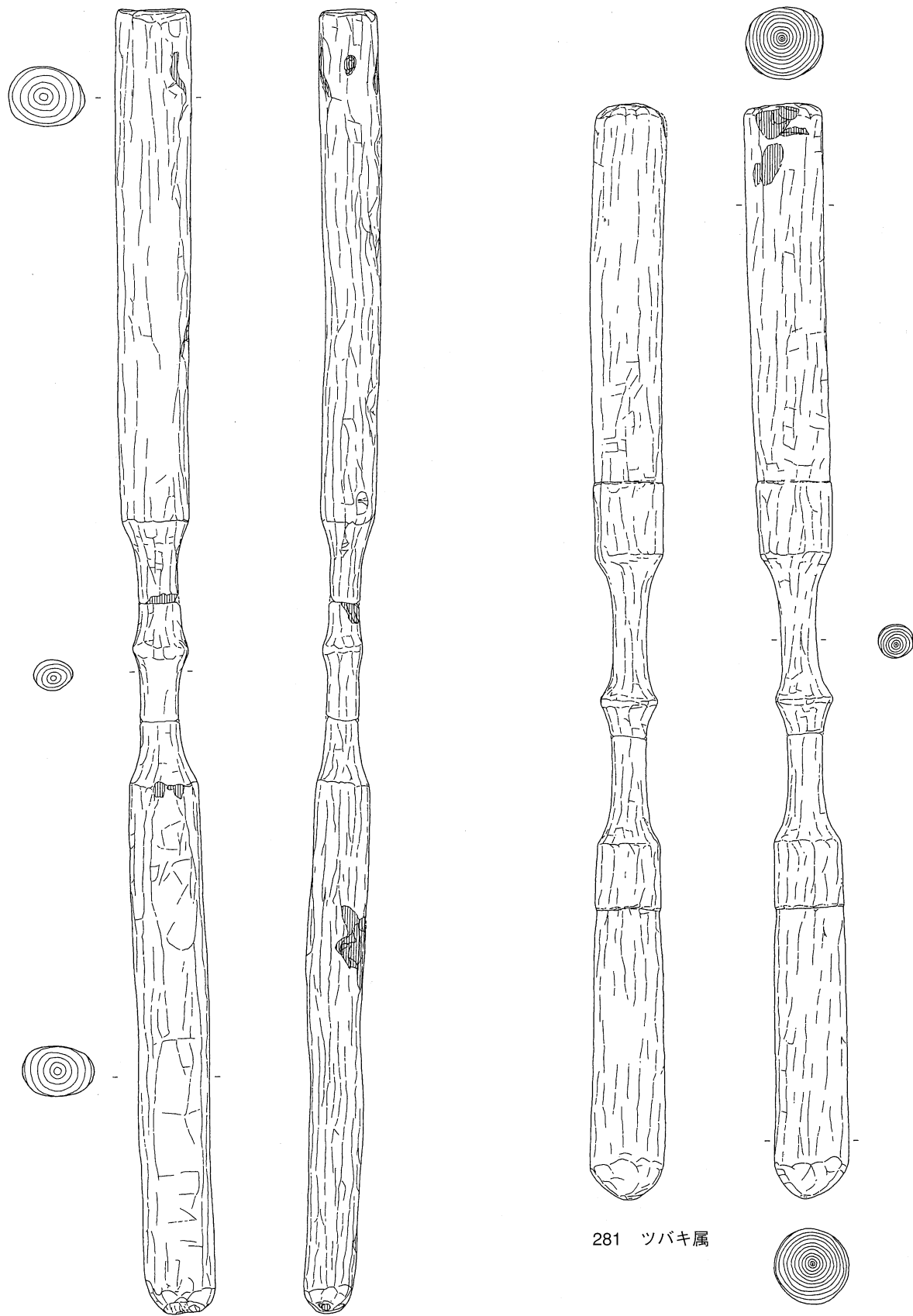


第37図 白(2)

4. 農具



第38図 白(3)・杵(1)

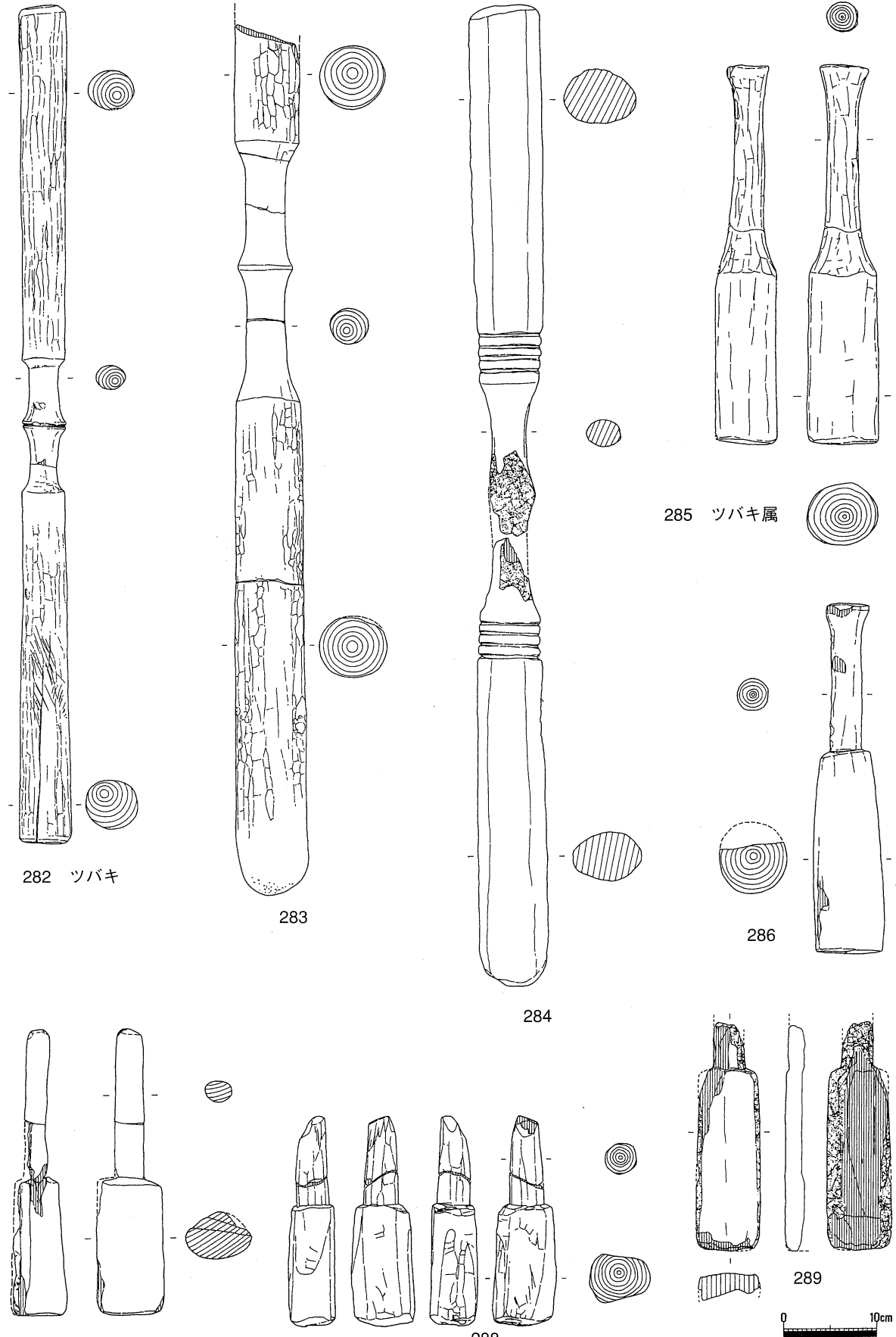


280 ツバキ属

281 ツバキ属

第39図 杵(2)

4. 農具



282 ツバキ

283

284

285 ツバキ属

286

287 アカガン皿属

288

289

第40図 杵(3)・横槌(1)

0 10cm

長軸方向の細長い加工痕が顕著である。全長113.6cm直径7.8cmである。282はツバキの心持ち材を使った、全長88.8cm直径5.5cmの小形の完形品。握部中央の節帯頂点には1条の沈線が彫られている。搗き部端はともに平らである。表面には、仕上げの際の幅5～8mmの細長い加工痕がみえる。283は片方の搗き部の大半を欠くが、復原全長が133cm直径7.8cmとなる大形の杵である。握部に節帯が一つあって、節帯の頂点は幅3～5mmで面取りされている。残存している搗き部端は円形である。表面には仕上げの際の細かい加工痕がある。広葉樹の心持ち材を使用している。284はほぼ完形品であるが、握部で焼けて2つに別れ接合しない。別々に検出したが同一個体と思われる。握部との境には幅広の沈線を4条刻んでいる。搗き部端部は丸と平の双方の形状がある。広葉樹の割材が用いられていて、残存長は153.7cm直径7.5cmである。

横槌

横槌には身と握りの境に明瞭に段を持たせるものとそうでないものがある。用材としてはツバキ属の心持ち材を使うものやアカガシ亜属の割材・クスノキ属の心持ち材を使うものがある。

285はほぼ完形品で身と握りの境には段を持たない。握りの端部を大きく肥厚させてグリップエンドとする。ツバキ属の心持ち材で、全長39.9cm身の直径7.6cmである。286は身の1面が欠損しているが全形のわかる資料である。身と握りの境には段があって、握りの端部は285と同様に肥厚させる。心持ち材を使っていて全長37.1cm身の直径7.5cmである。287は身の先端がやや太いが長径7cm短径5cmの楕円形で長さが14.5cmあり、身と握りの接点の大半を欠く。アカガシ亜属の割材を使っていて全長30cm身の直径7cmである。288は握りの先端を欠損する。心持ち材を用い、身と握りの境に明瞭に段を作っている。289も同じく身と握りの境が明瞭に区分されている。広葉樹の割材を使っていて、表面は炭化している。290は握り端部が欠損している。身と握りの境には段が無く、身の中央に両面ともに使用痕状のへこみがある。291は身の端部で直径が大きくなっていて、身と握部の境は明瞭である。一部炭化している。293は残存状態が悪いがクスノキ属の心持ち材が使われている。

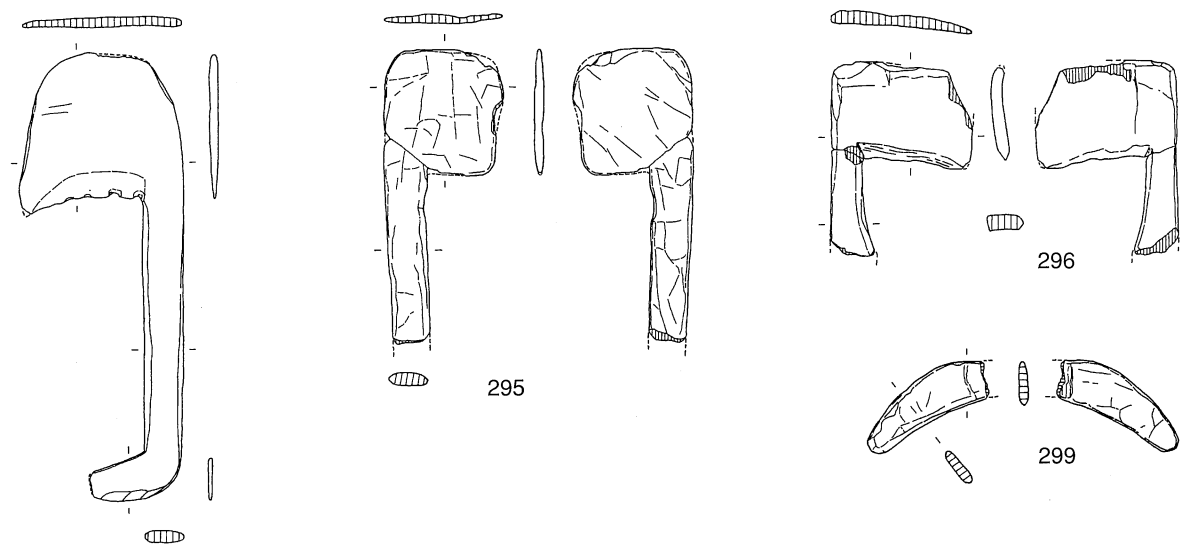
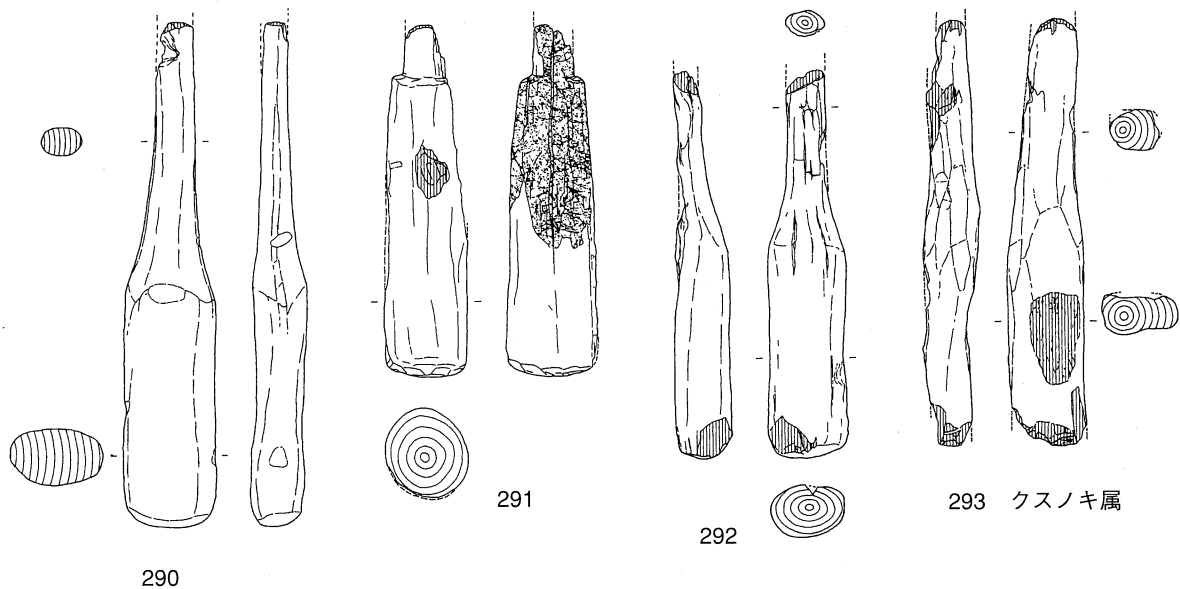
木鎌

鎌形の形状をした木製品であるが、使用方法は明確ではない。ただ、294や306には刃こぼれができていたので、実際に使用されたのは間違いなく、幅1cm程度かそれ以下のものが対象であったとみられる。刃部と柄の角度は70°から90°で、刃部の付け根は角も持つものが大半であるが、305は丸みをもたせている。柄は厚さが1.5～2cmの厚手のものと、5mm～1cmの薄手のものがある。柄の基部は通直のものと刃部側に屈曲するものがある。樹種の判明しているものではアカガシ亜属の柁目材が使われている。

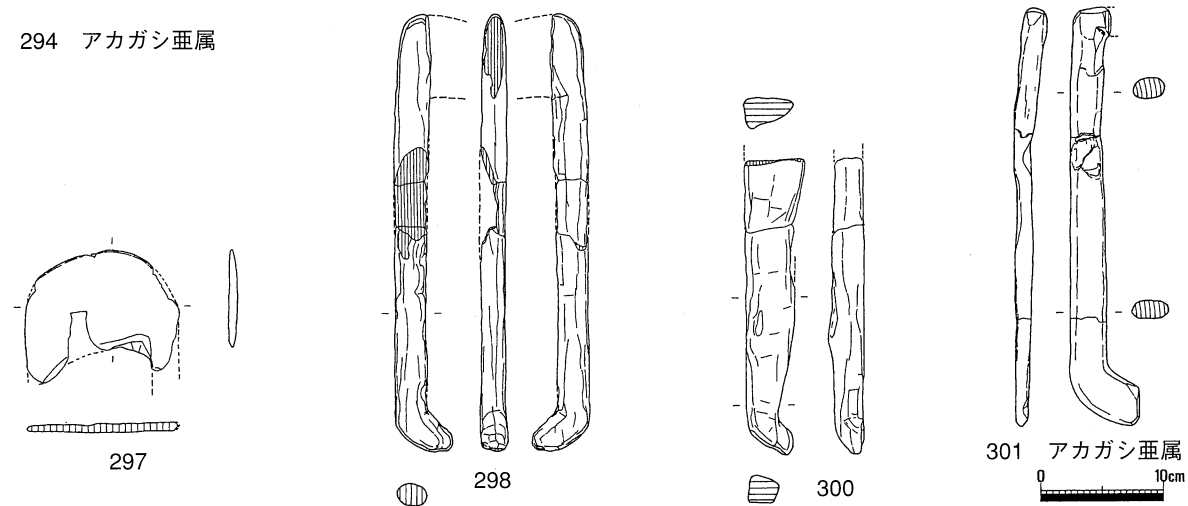
294は身の上部及び先端をわずかに欠くがほぼ完形で、刃こぼれが4箇所ある。柄は薄手で基部を鉤状に内側に曲げている。アカガシ亜属製で、全長35.7cm幅13.1cmである。296は柄を欠損しているが、残存部分で太くなっているため、短い柄の基部付近とみられる。298は刃部を根元から欠損しているが、刃部幅は6.5cmとわかる。全長39.8cmである。299は鉄鎌状の細い身の破片で、明瞭な刃部を持たない。300は一端が鉤状に曲がっているため木鎌の柄の基部未成品と見たが、他例に比べ形がそろわず別物の可能性もある。

301は鉄鎌の柄のほぼ完形品で、頭部にはわずかに装着のための削り込みがある。基部は鉤状に曲がっている。アカガシ亜属の柁目材で、全長32.8cmである。302は木鎌未成品か。木鎌状だが身が小さい割に柄が太く長いので木鎌とは異なる可能性もある。残存長は41.4cmで身の幅が14.5cmある。

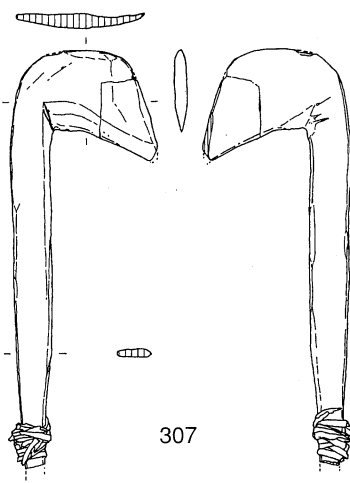
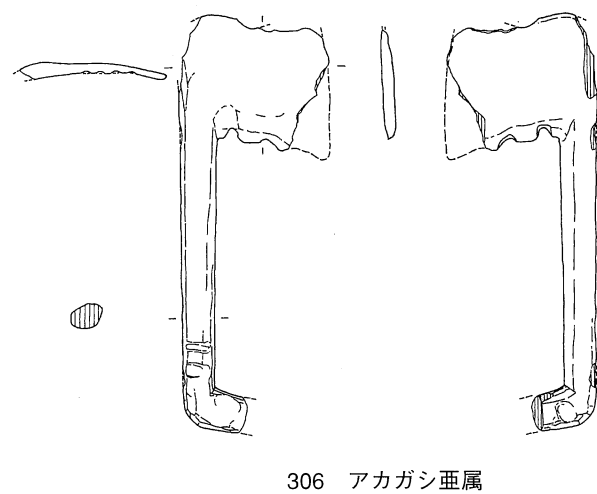
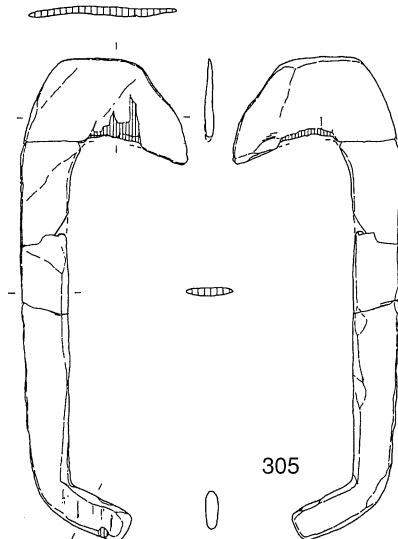
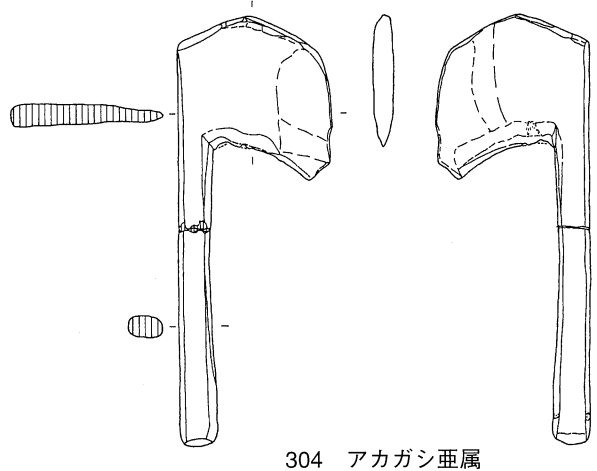
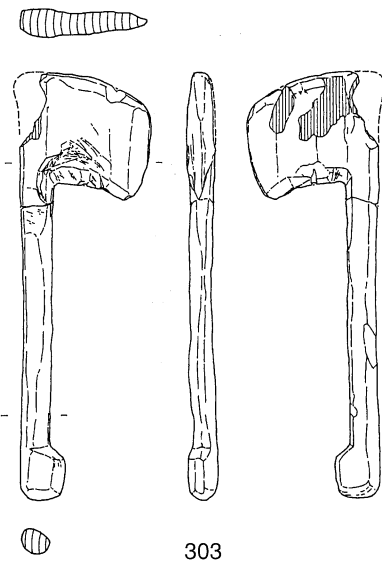
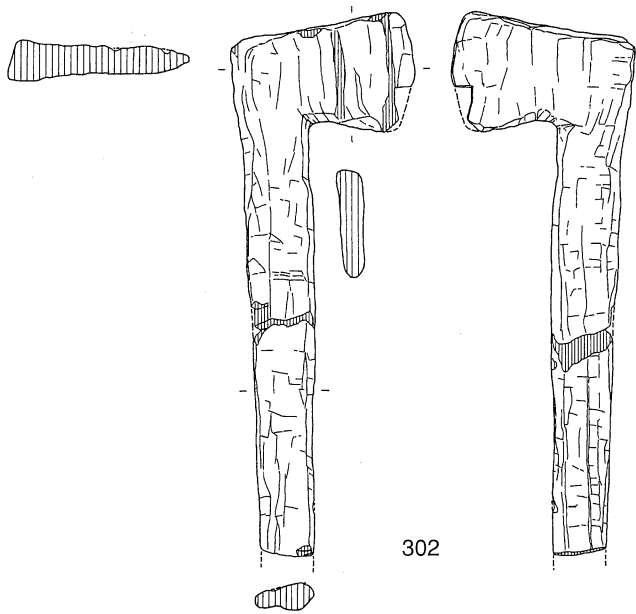
4. 農具



294 アカガシ亜属

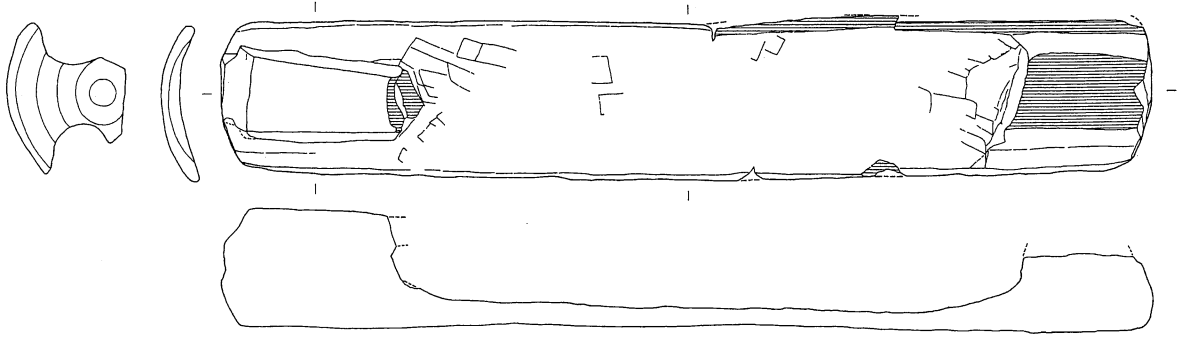


第41図 横槌(2)・木鎌(1)

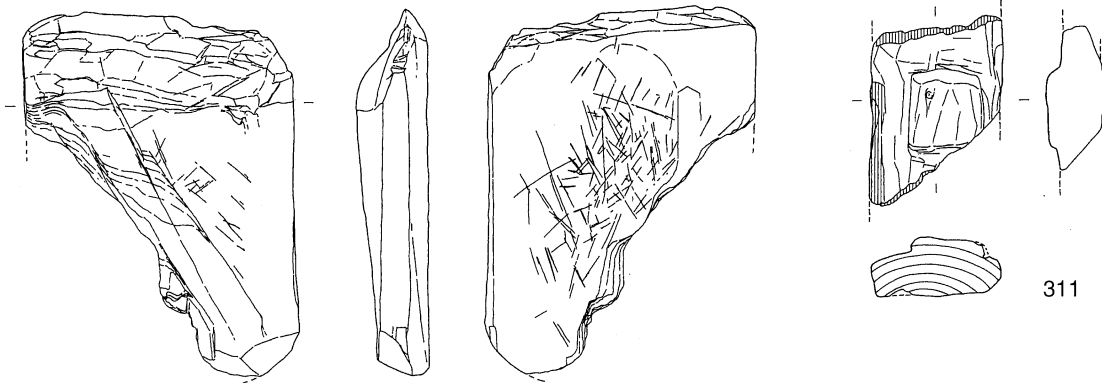


第42図 木鎌(2)

4. 農具

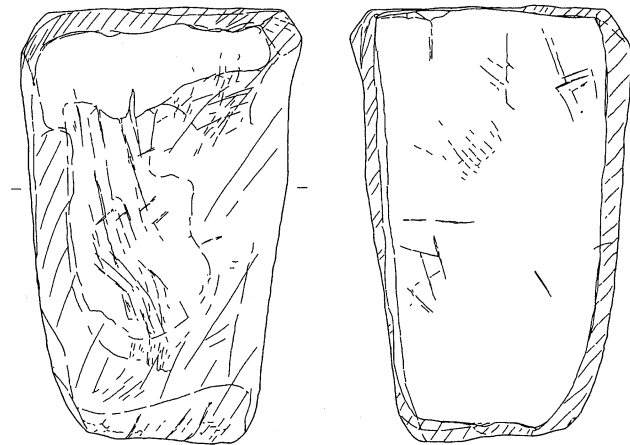
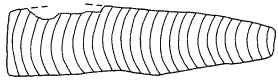


308

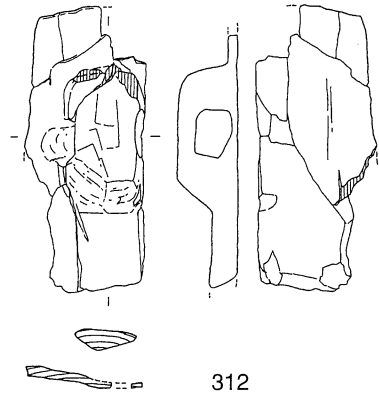


309

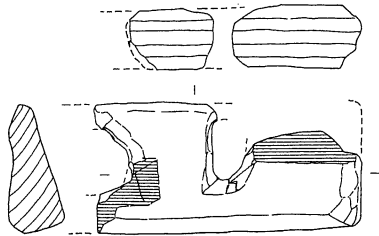
311



310



312



313



第43図 コテ・ソリ・作業台・田下駄

303はほぼ完形品で、柄は厚手で基部を内側に曲げている。全長33.9cmで身の幅10.6cmである。304もほぼ完形品である。刃部は両刃で付け根部分にやや歯こぼれがある。厚手の柄の基部には拡張がみられない。アカガシ亜属の柁目材を使い、全長34.5cm身の幅12.3cmである。305も完形品で、身は細めで付け根部分が丸い。柄は厚さ5mmと薄く、基部を内側に拡張している。全長38.8cm身の幅13.5cmである。306は身の残りが悪いが、両刃の刃部には大きな歯こぼれが2箇所ある。厚手の柄は基部を内側に曲折していてアカガシ亜属の柁目材を用いている。全長32.2cm。307は薄手の柄の基部を欠くが、基部付近に扁平な紐状の植物繊維を巻き付けている。刃部は両刃で柄との付け根部分に小さな刃こぼれが2つ確認できる。残存長33.1cmで身の幅が11.8cmある。

コテ・ソリ

308・311・312はコテあるいはソリの破片とみられる。308は隆起部分の基部で折れているとみられる。全長50.1cmで心持ち材を使っている。311は4cm四方の方形隆起を持つ。コテかソリの隆起部分の破損品とみたが小片のため別の製品の可能性もある。312は把手状の部分に2.6×2cmの方形孔を持つ。

作業台

309・310は作業台で、双方とも刃物痕跡が多数ついている。308は柁目材で残存長19.6cm幅14.7cm。309は周辺部が焼損している。板目材を使っている全長23.4cm幅15.1cm厚さ7cm。

田下駄

313は厚みのある細長い板材に複数の穴をあけている。田下駄の縦枰板と考えたが、別物の可能性もある。

5. 紡織具

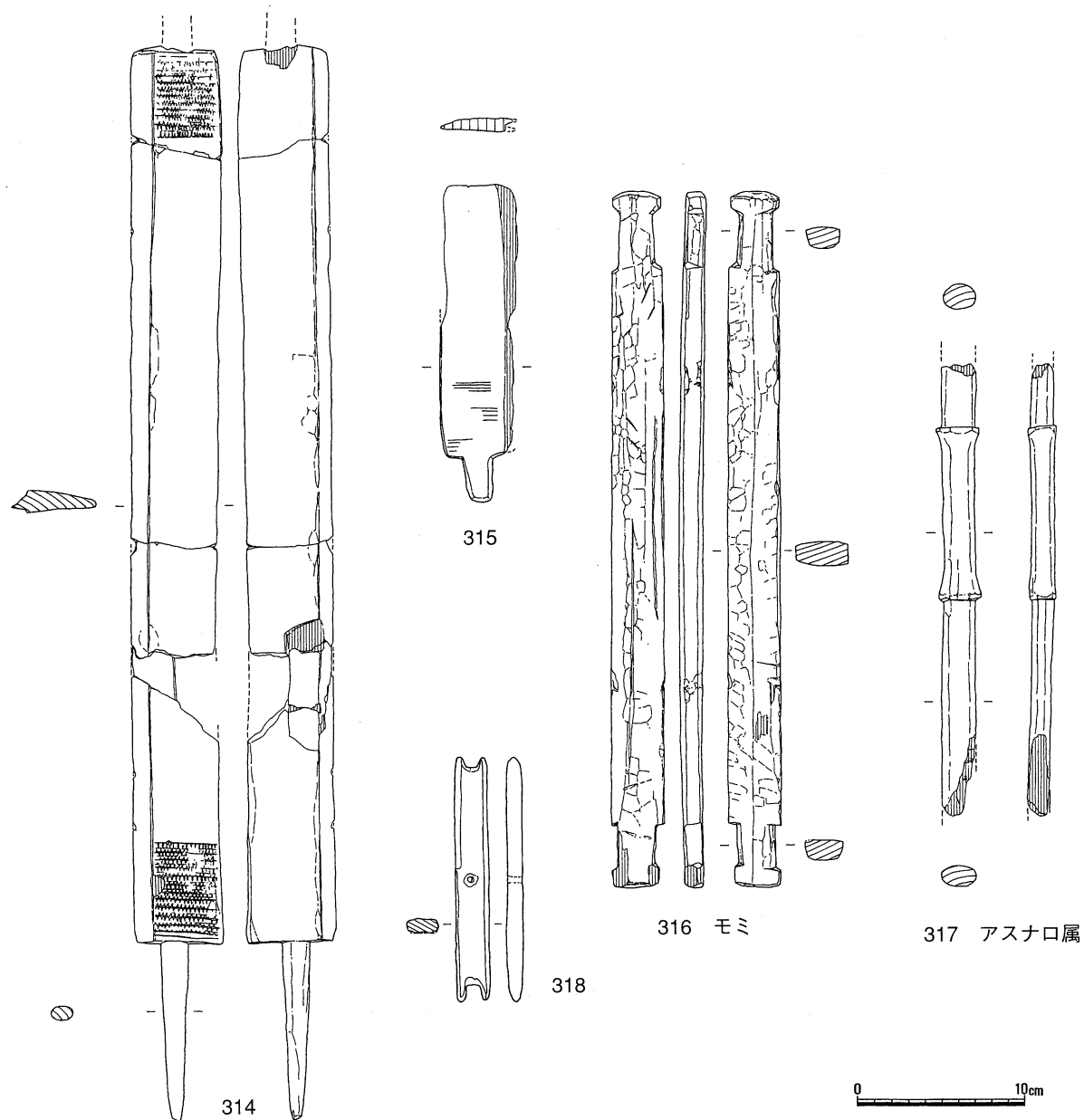
紡織具には、織機の部品・かせ・糸巻きが出土している。織機の部材については、後述の用途不明品の中に該当品を収めているものもあるかもしれない。

織機

314・315は断面くさび形の細長い板の両端に棒状の把手がつく。314の長辺の一方が段をつけて断面三角形状になるのに対し、315ではV字型の切れ込みとなる。兵庫県玉津田中遺跡⁽¹⁰⁾や石川県八日市地方遺跡⁽¹¹⁾では両者がセットで出土しているので、両者は組み合って使用されたとみられる。314は両端に刻み目紋様が施されている。残存長63.5cm幅5cm。315は端部の破片であるが314と同様に細かな刻み目が施されている。316は完形品で経(布)巻具ないしは腰当て具とみられる。モミの板目材を用いており、加工痕が明瞭に残っている。全長41.3cm幅3.1cm。

かせ

317はかせの握部付近の破片で、アスナロ属の割材を使っている。握部は楕円形の断面で長さは10.3cmである。



第44図 紡織具

糸巻き

糸巻きは1点出土している。形状だけでは紡織に使われたものか、釣り糸など別の糸を巻いたものかは断定できない。318は両短辺にえぐりをつくり、中央に糸通し穴をあけている。長さ4.5cm幅2cmで板目材を用いている。

6. 漁労具

漁労具には網杵・ヤス・櫂を取めた。櫂は舟の付属物であるので本来は運搬具として取り上げる必要がある。アカトリについては後述のように雑具に一括して収めている。

網杵

網杵には枝分かれ部分を利用して網杵部分と柄を一体で作る手網と柄を持たず杵木単体からなるものに分かれる。二材を合わせる組合せ式の手網は出土していない。弓との区別が困難な部分もあるが、湾曲の内面を削っていたり、枝の根元がわずかに残っていたりして全体に加工が粗いものを網杵としている。端部の形状には、平面円形のもの、レの字状の欠込を施して頭部とするもの、細く薄くするものがある。

319は手網で、腕木の1本は先端まで残っている。柄は表面を長く細い幅で丁寧に削っている。残存長は121.0cmで柄の直径は2.7cmである。320は両端は切り込んで折り取っていて、表面は枝の付け根部分を残して表面は加工しておらず網杵の未成品とみられる。U字型に曲げたために、外湾部が割れ裂けを起こしている。長さ111.4cm直径2.5cmの心持ち材である。

321・325・330・332は平面円形の端部を持つ。321は表面全体を加工しているが、湾曲の内側を平坦にしている。残存長は60.8cmで直径1.85cmの心持ち材である。325は端部近くを断面半円形状に削り、端部は半球状の頭部を作り出している。心持ち材で残存長66.6cm直径2.2cmである。330は平面円形の頭部を作って、内湾側の面を平らに削っている。半裁材を使って残存長35.2cm直径1.5cmである。332は球形に近い端部の破片であるが、小片のため網杵とは別物の可能性もある。

326・327は1面からレの字の加工を施して頭部を作る。326は332と同様に別物の可能性もある。327は326に比べると深くてしっかりとしたレの字の加工を行っている。残存長75.0cmで、直径2.0cmの心持ち材を利用している。322・323・324・333は明瞭な頭部を持たないが、もう一方の端部との重ね合わせのために端部を細く薄く加工している。

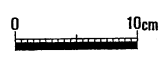
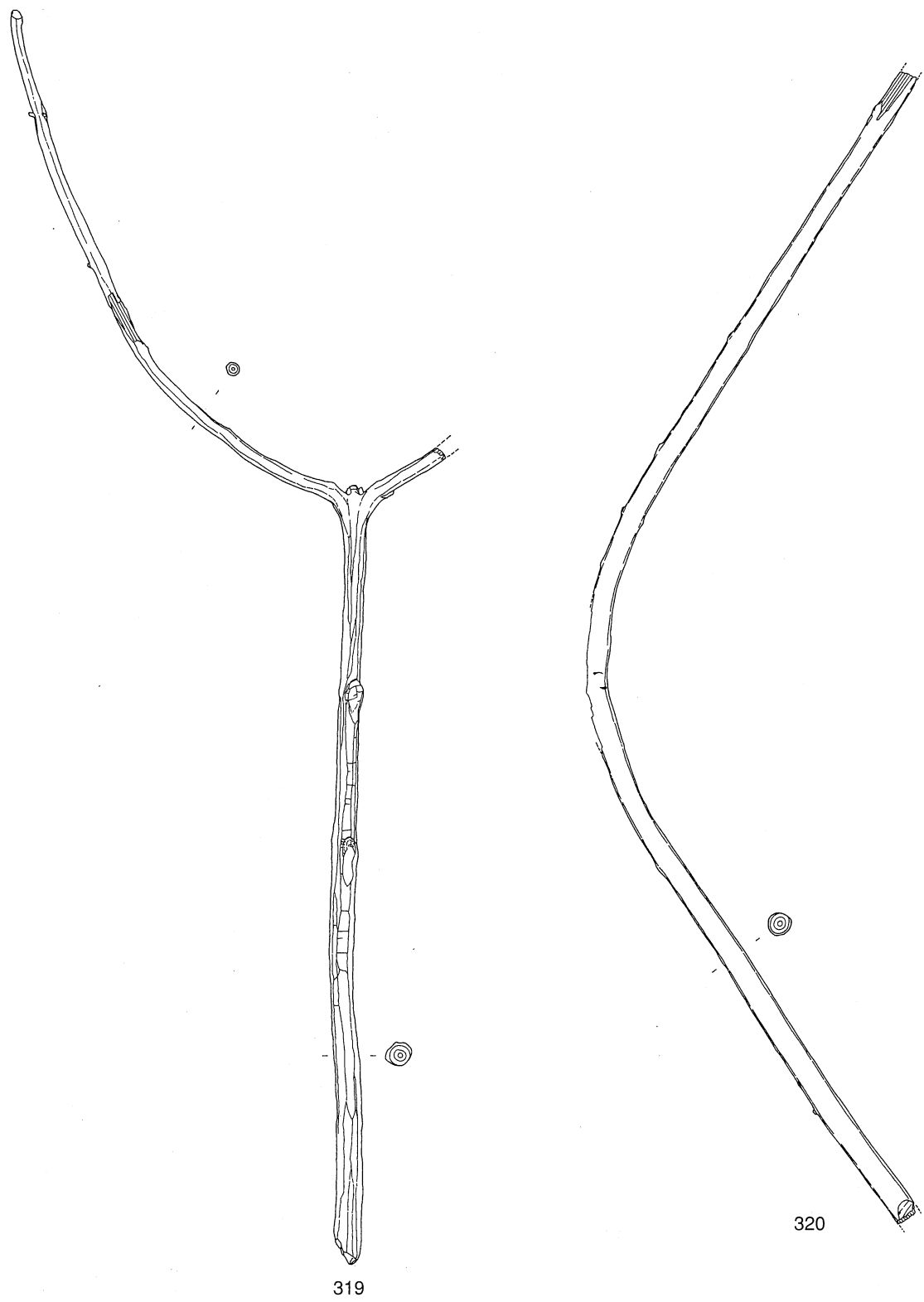
ヤス

細長くて身と茎との境がないか、あっても茎がごく短いものをヤスとしたが、木鏝の可能性もある。3点出土していて、いずれも割材を利用している。337は身と茎との境には段を持たないが区別はつく。全長8.6cm直径6mmである。338には身と茎との境には明瞭な段があって、全長10.9cm直径8mmである。339は337と同様に身と茎の境には段がないが、337と違って身と茎の境の区別が付かない。全長11cm直径7mmである。

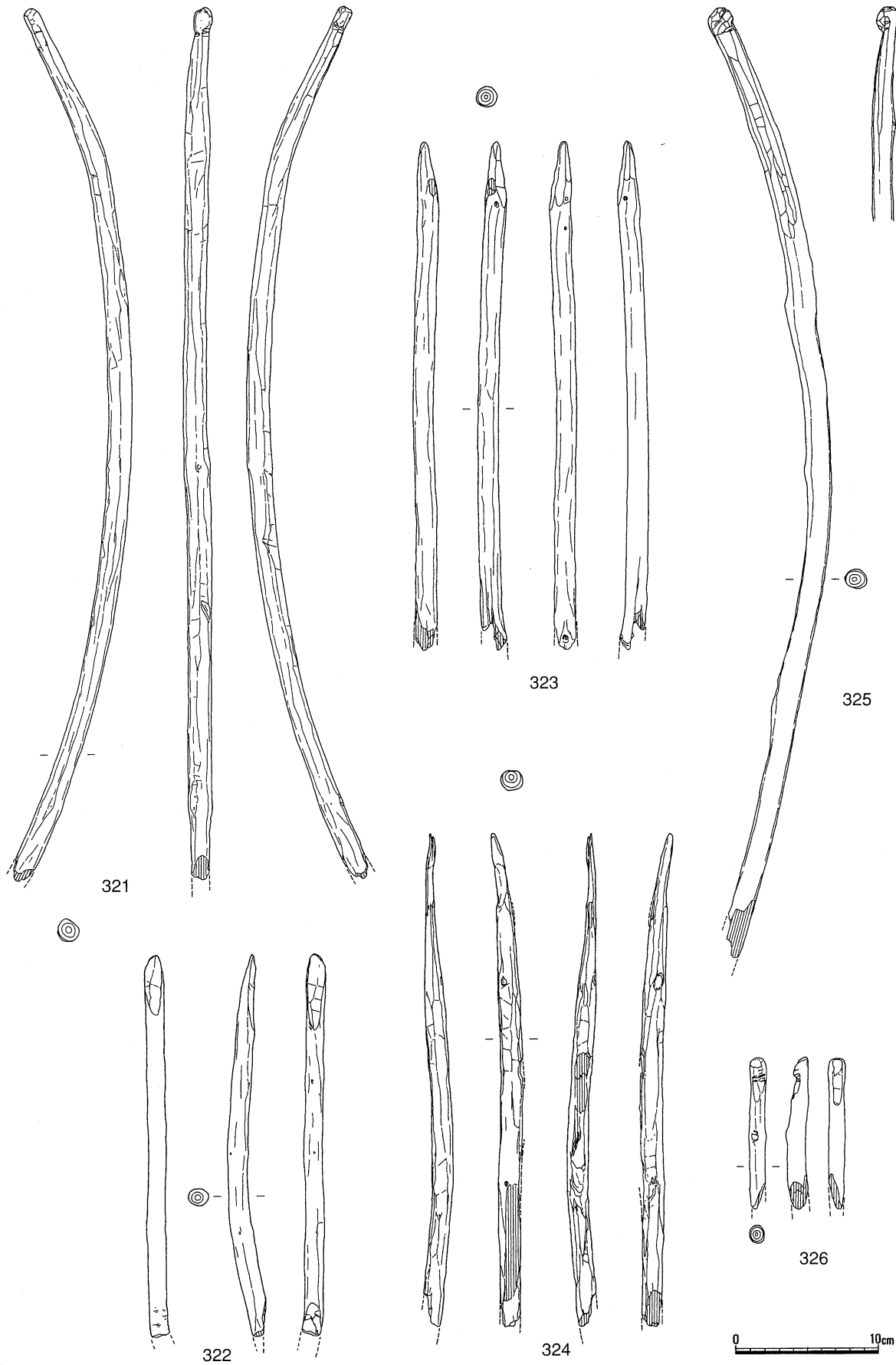
櫂

櫂は8点出土していて、すべてが一木式で明らかに組合せ式の櫂といえるものはない。身の形状は平面が細長い木の葉形と角形とがあり、木の葉形では身と柄の境が明瞭ではない。横断面形は木の葉形の身では紡錘形、角形の身では山形となる。樹種の判明しているものではアカガシ亜属が使われている。

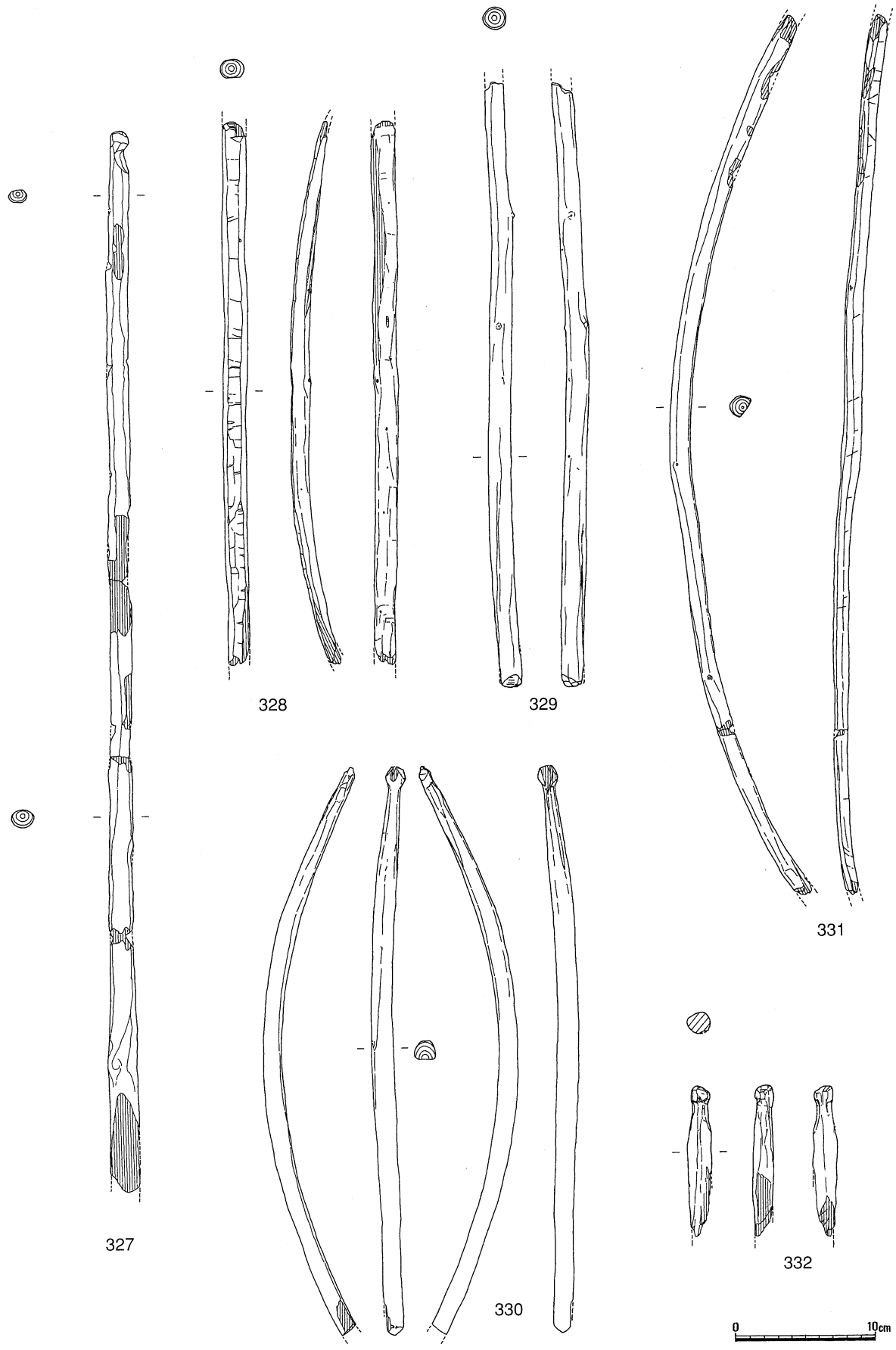
340は柄の頭部を欠く。平面角形の身は肩の下方で一面からわずかに段をもうけて薄くする。反対面には稜が走るのので、横断面形は山形を呈する。残存長108.5cmで身の幅10.7cm、柄の直径3.2cmであ



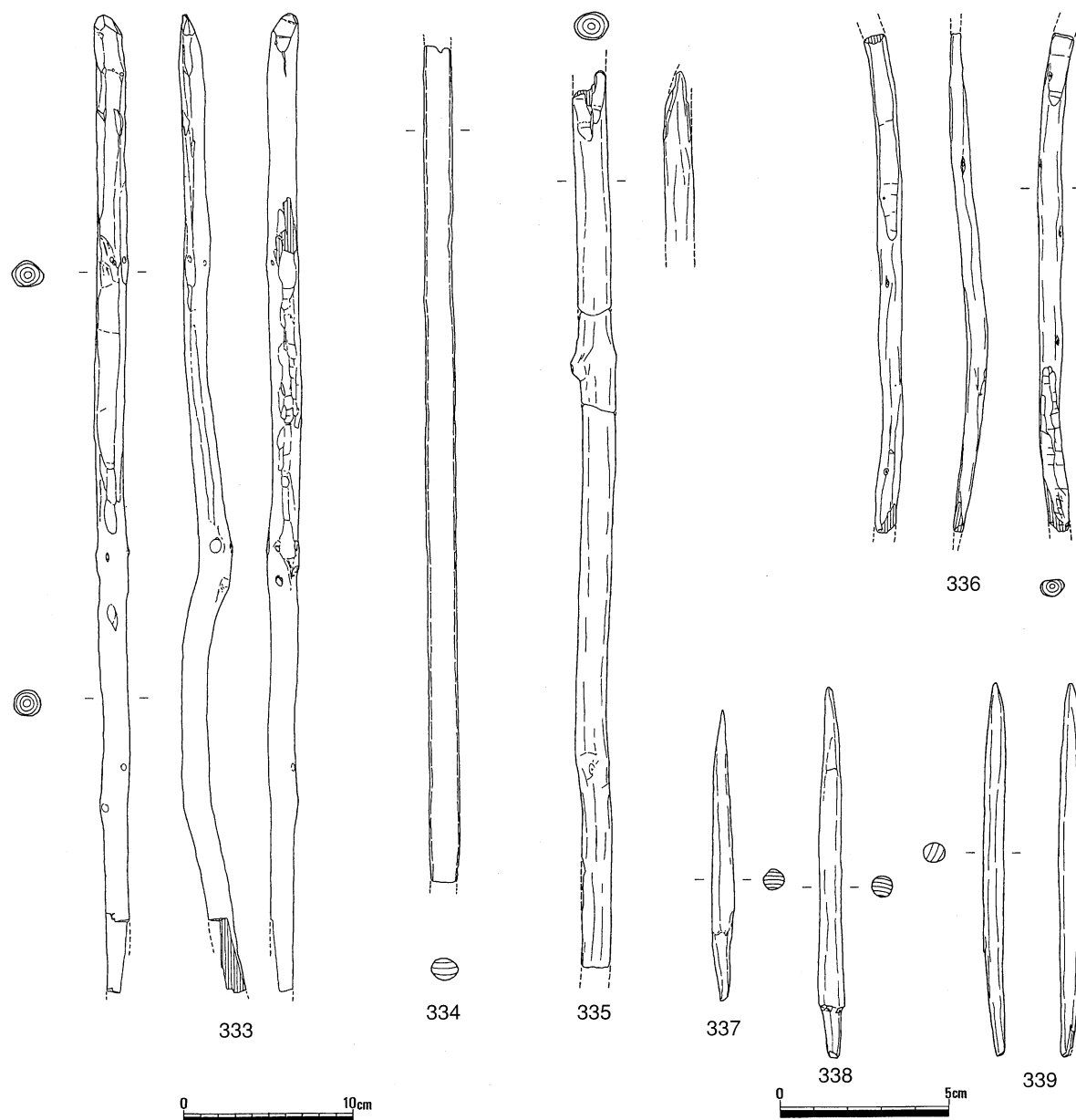
第45圖 網杵(1)



第46図 網杵(2)

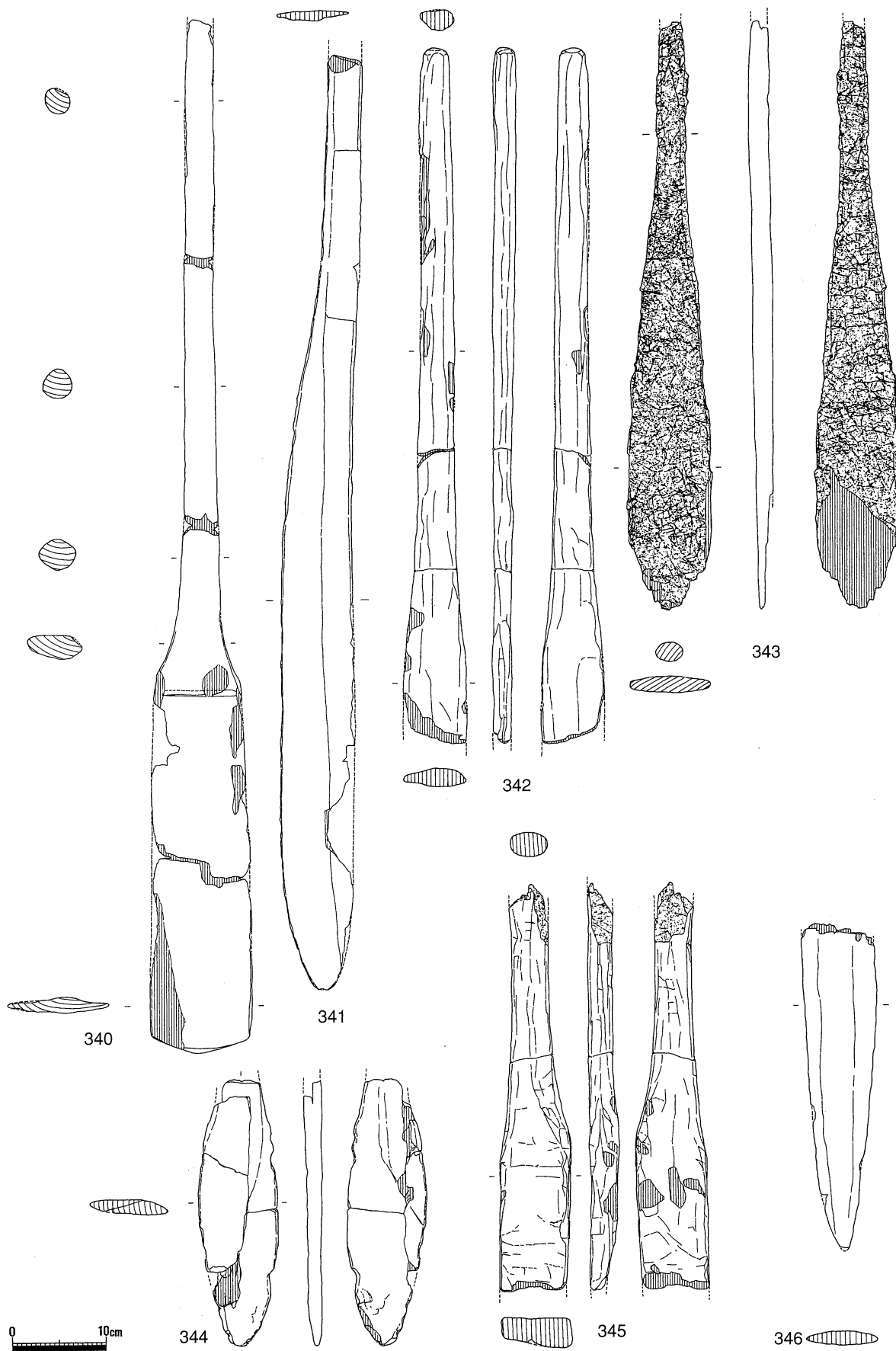


第47図 網杵 (3)

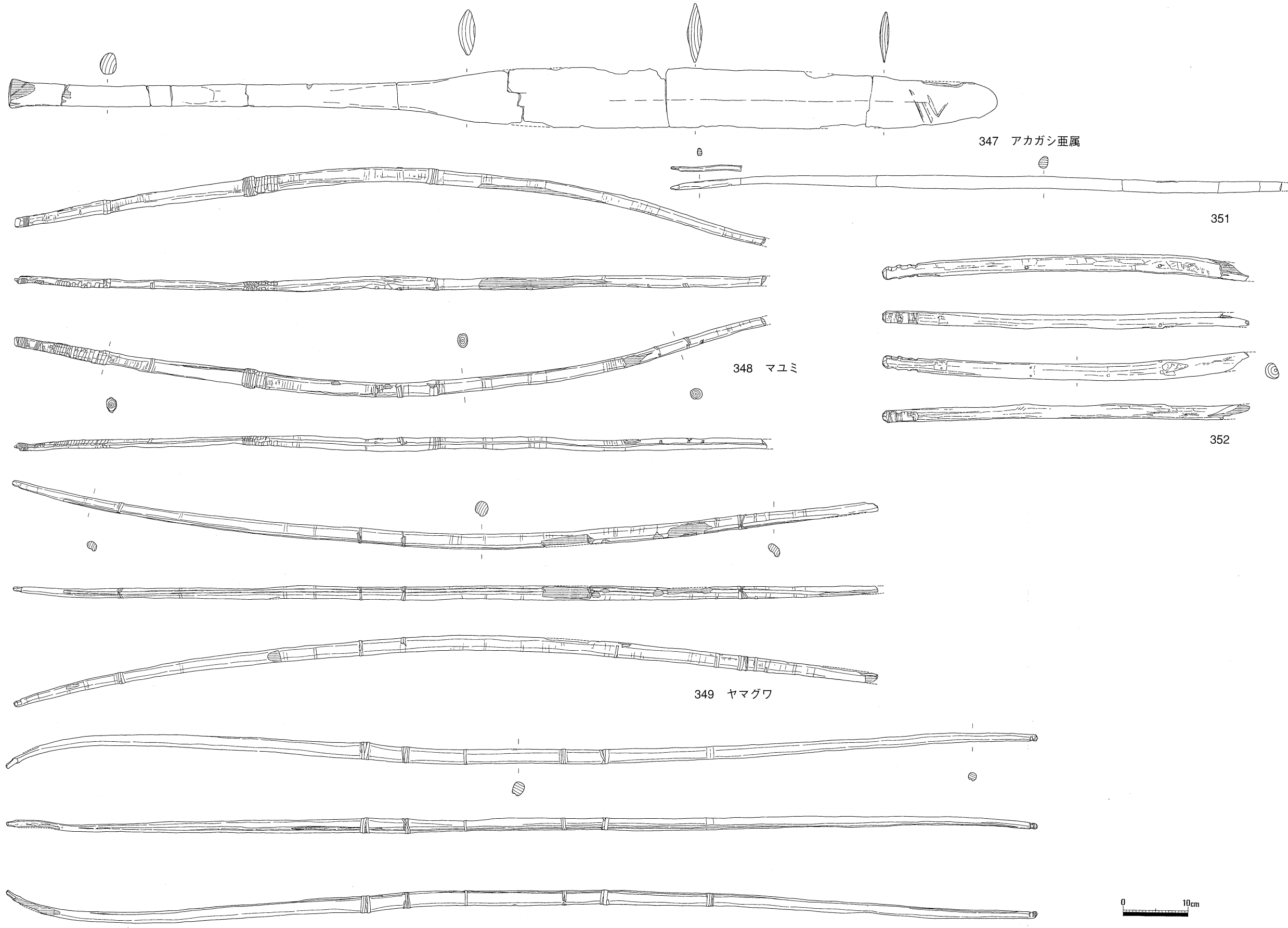


第48図 網杵(4)・ヤス

る。341も柄の頭部を欠損しているが、身の平面は刀形あるいは変形の木葉形をしている。残存長98.3cmで身の幅は7.4cmである。342は身の先端を欠損しているが、柄の基部が残っていて特に拡張させることなく丸く収めている。343は木の葉形の身で、全体が焼けている。344も木の葉形の身の破片。345は幅7.4cm厚さ3cmの身に楕円形の柄が付く。身の横断面形が四角く厚さもあるので未成品と見られる。347は唯一の完形品で、身の平面は木の葉形で断面はレンズ状を呈する。身は特に長く全長の $1/2$ ほどある。柄の断面は楕円形で端部は肥厚させてグリップエンドとする。アカガシ亜属製で全長が151.3cm身の幅9.2cm柄の直径が2.6cmである。



第49圖 櫂(1)



第50図 櫛(2)・弓(1)

7. 武器

武器には弓・木甲・楯・武器形木製品・棍棒を収めている。

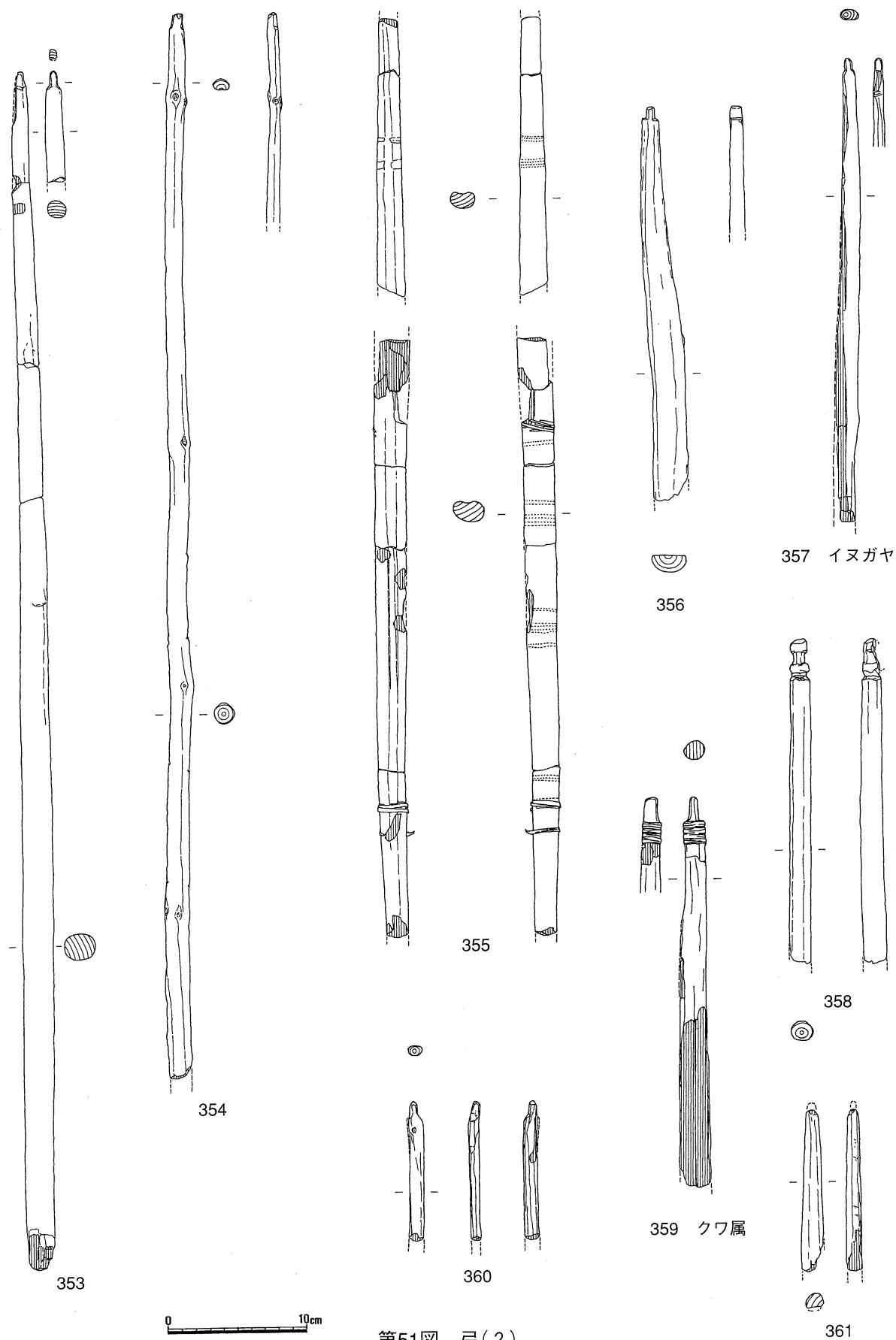
弓

弓には短弓と長弓とが出土している。完形品は長弓の350が1点出土しているだけであるので、そのほかの弓は直接全長では分類できないが、最大直径がおよそ1～1.5cmを短弓、2cm前後からそれを越えるものを長弓と区分している。樹種が判明しているもので見ると短弓はイヌガヤの心持ち材を使い、特に飾り立てをしていない。短弓は樹種や直径からみても網杵と区別が付かないこともあるが、ここでは表面の加工が丁寧で弭の残っているものを取り上げている。長弓は樹種の判明しているものではマユミ・ヤマグワ・エノキなどの広葉樹の割材を使っているが、未同定の弓では針葉樹の心持ち材もある。棒樋が切られている弓もある。また、樹皮紐を結んだり巻き付けたりするものや、黒漆塗りを施すなど加飾している弓もある。武器の分類に入れたが、多くは狩猟と共用であったと考えている。中には武器に特化した弓もあると思われるが、それを明確にすることは困難である。

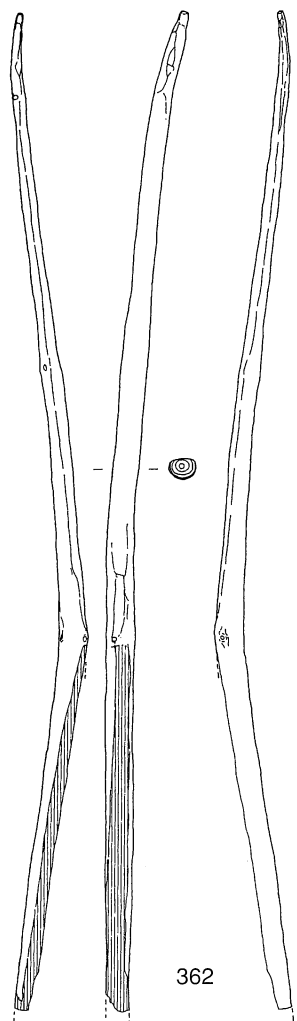
348～353・355・356・359・363・365は長弓で、広葉樹は割材を使い針葉樹は心持ち材を用いている。348は黒漆塗りの弓で、両端部を欠損しているが、マユミの割材を使っていて残存長115.8cm直径2.3cmである。棒樋が施されていて、黒漆塗りの上からさらにほぼ全面にわたって樹皮が巻かれていたが、検出・取り上げ時に多くが脱落した。349は弭に弦かけ溝を作っていて、棒樋も切られている。樹皮紐を縛った箇所は痕跡も含め24箇所ある。ヤマグワの割材を使用していて、残存長133.2cm直径2.3cmである。350はエノキの割材を使った唯一の完形品で、全長159.2cm直径2.6cmである。弭の形態は両端で異なっていて、一方は弦かけ溝をつくり他方は側面から長方形に削りだしている。樹皮の紐を縛った箇所が6箇所ある。棒樋が切っており、樋にはどのような使い方をされたのかわからないが、骨角器が固定されている。骨角器は鹿角製で、全長14.2cm中央の広いところで幅5mmあって、両端は側部から削ってとがらせている。351は直径1.8cmの割材を使い、残存する弭は両側面から方形に削りだしている。93.9cmが残存している。352は一端が欠損しているものの56.0cmが残っていて、弭は両側面から弦かけを3段に加工している。内湾面を平坦加工しているが、直径1.9cmの心持ち材を使用しているので長弓とみられる。

353も直径2.1cmの割材を用いており85.2cmが残存している。長弓とみられるが棒樋は切られていない。残存する弭は両側面から方形に削りだしている。355は直径2.3cmの割材を使っていて、接合しないが同一個体とみられる。樹皮紐を結んだ箇所は痕跡を含め12箇所あって、棒樋も切られている。356は直径2.5cmの心持ち材を使っていて、中央の太い部分は断面半円形に削っている。端部の形状はほかの弭と同様であるので弓とみてよからう。359は弭の基部に樹皮が巻かれている。クワ属の割材を使っていて残存長27.8cm。363は直径2.5cmのイヌガヤの心持ち材製で長弓とみられる。弭は側面の二方から削り出している。残存長46.3cm。365は側面から方形に削りだした弭の下に、側面から前面にかけて節帯5条を作り、やや間隔をあけてさらに5条削りだしている。棒樋と樹皮紐痕跡がみられて、直径1.8cmの割材が用いられている。36.4cmが残存している。

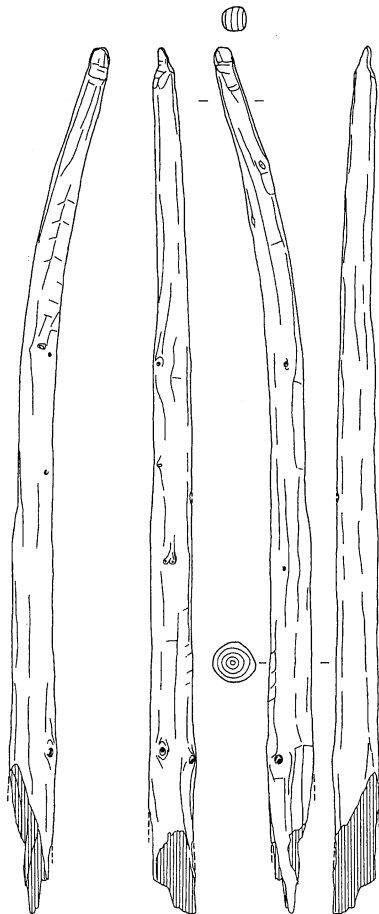
7. 武器



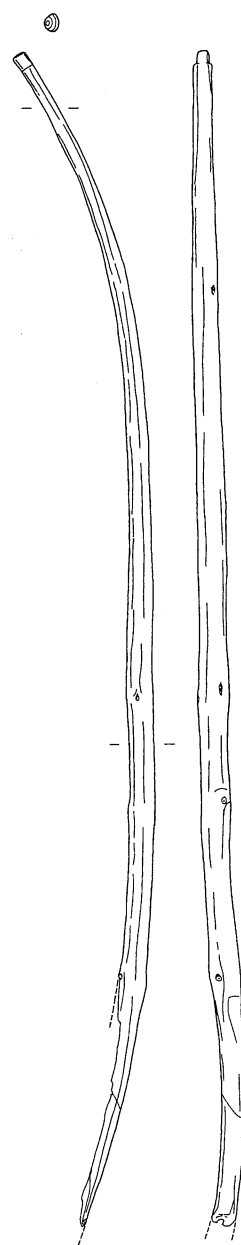
第51図 弓(2)



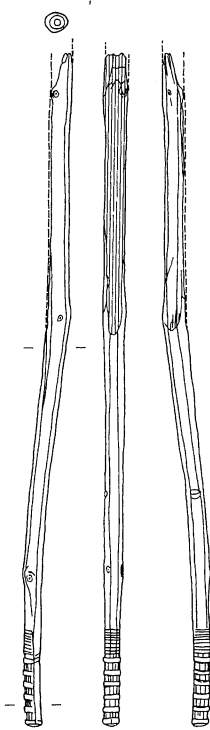
362



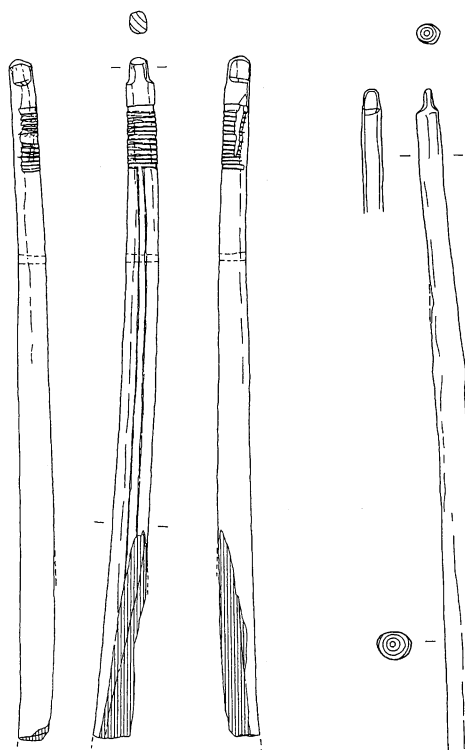
363 イヌガヤ



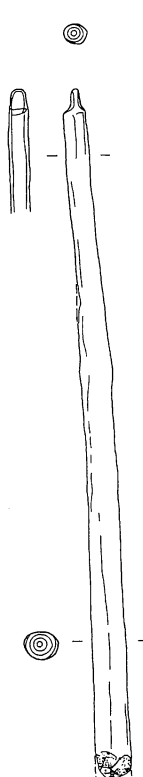
367 イヌガヤ



364



365



366 イヌガヤ



368 ムラサキシキブ属

0 10cm

第52図 弓(3)

7. 武器

354・357・358・360～362・364・366・367は短弓である。354は直径1.7cmの針葉樹の心持ち材で、弭は端部から1cmを両側面から削り断面方形にしている。残存長75.7cm。357はイヌガヤの心持ち材で、直径1.6cm。弭は側面の二方から薄く削りだしている。358の弭部分には中央に節帯を1つ作り、弦かけを2つにしている。心持ち材で直径は1.5cmである。362は針葉樹の心持ち材を用いた短弓とみられる。直径1.5cmの心持ち材で53.5cmが残っている。364は端部に等間隔に切れ込みをいれて、2本分を切り取り次の1本を残し、これを繰り返して弦かけ溝をつくって弭としている。針葉樹の心持ち材で、直径1.2cm残存長35.8cm。366はイヌガヤの心持ち材を使った短弓と思われる。弭は側面の二方から薄く削りだしている。一端は焼損している。367は直径1.4cmの短弓とみられる。イヌガヤの心持ち材で残存長62.8cm。

368は弓とは断定できないが、ムラサキシキブ属の心持ち材に樹皮を巻き付けている。太さが異なっているが、348と同様に樹皮巻きであるので、ここで報告する。残存長は8.8cm直径1.0cmである。

木甲

木甲には、複数の小片を組み合わせる組合せ式⁽¹²⁾と前胴後胴からなる一木式とが出土している。弥生時代の組合せ式木甲は長崎県原の辻遺跡・里田原遺跡、佐賀県生立ヶ里遺跡、愛媛県阿方遺跡、岡山県百間川兼基遺跡、石川県八日市地方遺跡などから前期ないし中期の資料として出土している。このなかで生立ヶ里遺跡例だけは黒漆が塗られておらず白木のままである。生立ヶ里遺跡や南方(済生会)遺跡ではある程度まとまって出土しているが、それでも1領を復原するには部品が不足しているし、他の遺跡例で補足しようとしても、複数形式が存在する可能性もあって復原は困難である。組合せ式木甲の利点は薄板材を使うことによる軽量性と機動性、そして規格的な部品を組み合わせる事による生産の効率性であろう。板の薄さに伴う強度不足については、必ずしも単体での着用を考える必要もなく、革製の內衣を着るあるいは內衣に縫いつけるといったことも想定してよいのではなかろうか。

南方(済生会)遺跡出土の組合せ式木甲は、厚さ3～5mmで長方形や台形の広葉樹の板材を用い、相対する2辺に綴じ合わせ用の小孔をあけている。また、これとは別に上下の板とをつづる飾り紐を通す孔がある。表面には黒漆が塗られているが、甲片の重なり部分や綴じ紐の部分を見ると組み合わせたあとで漆を塗布したことがわかる。全部で35点出土しているがすべてが同一形式のよろいの部品となるのか、複数形式のよろいの部品が混在しているのかは判断がつかない⁽¹²⁾。ただ374から403までは1箇所集中して出土しているので同一個体の可能性がある。検出時には黒漆の膜面のみしか残っていないものもあった。

各部品は全体の中での部位がわかるものは少なく、天地も判断がつかないものが多い。369については岡山県百間川兼基遺跡でほぼ全形のわかる類例が出土しており、それによるとおよそ全長18cm全幅12cmに復原されるので、前後はわからないが胴の中央あたりを構成する部品と思われる。370は前身でたとえると左肩から脇にかけての部品と推定され、長崎県原の辻遺跡出土例に近い。漆の塗布は綴じ紐にそって漆が盛り上がって残っている箇所があるので、各甲片を綴じ合わせた後で行なわれたことがわかる。上下の端部の漆の残りからみると、上下の甲片の綴じ合わせは上端部と下端部を重ね合わせるものと接するものがあるようだ。内面の上端ないし下端に面取りを施している甲片が少なからずある。これは前後方向の動きを持たせるためとも思われるが、綴じ合わせてから漆を塗るのでは意味をなさない。甲片の形状や部位は厳格に伝えられてはいるが、工夫の意図や製

作手順までは正確には伝えられていない事も考えられる。綴じ孔とは別に飾り紐を通す孔があつて、上下の飾り紐間には紡錘形に黒漆の光沢が変化した部分があつて、漆の塗布後に飾り紐がかけられていたことがわかる。なお、図の上下は必ずしも使用時の上下を示すものではない。樹種はクワ科・クワ属・アカガシ亜属・サクラ属・ニレ科・ムクロジが使われている。

369は方形の甲片の左半分の部品で外面と上端面・側面には黒漆が塗られている。上下の辺に紐綴じ孔があり、上辺の孔列間では紐にそって漆が浮き上がっている。下辺の孔列上端から下は漆が剥落している。左辺に上下を通す飾り紐の孔があつて、上下の孔間に紐の当たった痕跡がみられる。クワ属の厚さ4mmの柁目板で全長18.7cm残存幅6.3cmである。370は左胸から脇にかけての部品で、下半の脇へ回る部分を欠く。上辺中央には小孔が縦に2つ並んであつて肩ひもを通すと見られる。下辺には綴じ孔が6つあけられている。また、脇繰り部分の綴じ孔2つが残存している。外面は黒漆塗りで左側面や下辺の綴じ孔の下にも黒漆が残っている。器壁は中央がやや厚く、内面下端には面取りがある。クワ属の柁目材で全長17.5cm残存幅6.5cm厚さ5mmである。371は平面が上に開く台形を呈する。綴じ孔は上辺に5つ下辺に3つ、中央やや上と右下に1つずつある。外面は黒漆塗りで上端面や両側面にも漆が付いているが、下辺は綴じ孔の上部から下が露胎している。左上から右下へ通す飾り紐孔がある。アカガシ亜属の柁目材で全長6.9cm幅5.4cm厚さ3mmである。

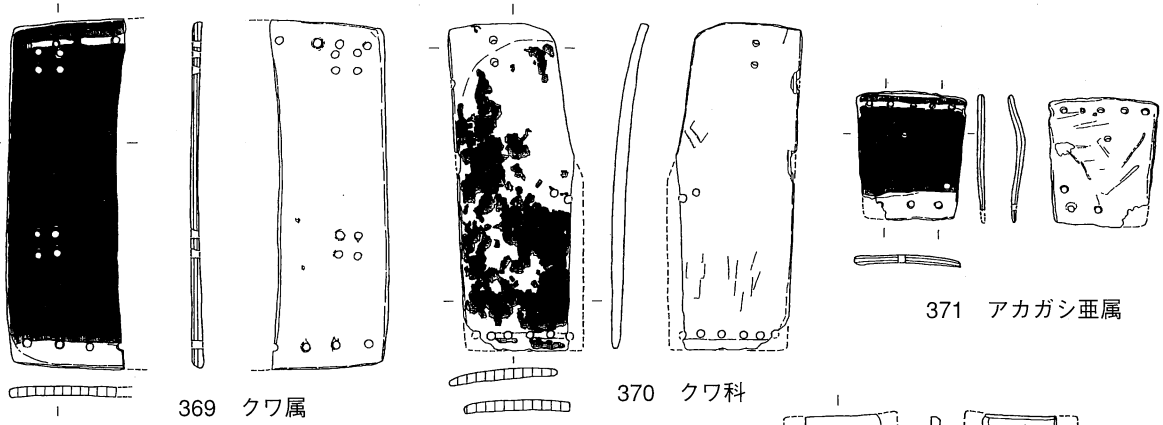
372は他の甲片が縦長の長方形か正方形に近い平面形であるのに対し、372のみ横長の長方形である点が異なっている。両長辺に綴じ孔があり、綴じ孔間は漆がはがれているが、上下の端部には残っている。アカガシ亜属材で残存幅12.1cm長さ8.0cm厚さ5mmである。373は長辺を欠くが、綴じ孔は4つ以上あったとみられる。外面の黒漆は上端の綴じ孔列の下端線から上には塗られていない。下端面にも漆が残っている。内面には粗い加工痕が残っていて、上端部は面取りをしている。クワ属の柁目材で、全長13cm残存幅5cm厚さ5mmである。

374～377は平面が上に広い台形で、下辺の綴じ孔列の上端から下方には漆が塗られていない。横列の綴じ孔とは別に飾り紐孔がある。内面は上端・下端とも面取りがされている。374はサクラ属の厚さ4mmの柁目板で、左上から右下方向へ通す斜めの飾り紐孔がある。黒漆は上端面と左側面にも付いている。全長6.1cm幅5.1cmである。375は飾り紐孔が右上部に逆三角形に3つある。サクラ属の柁目材で全長6.2cm幅4.6cm厚さ4mmである。376は綴じ孔の他に飾り紐孔が7つある。上部中央の飾り紐孔と右側辺の孔との間に黒漆膜の変質がみられるので、少なくともこの2孔には飾り紐が通されていたとみられる。サクラ属の柁目材で全長6.1cm幅5.1cm厚さ4mmである。377は上部にハの字形に飾り紐孔が4つある。サクラ属の柁目板で全長6cm幅3.8cm厚さ5mmである。378はサクラ属の柁目材で全長5.9cm幅3.2cmとほかの甲片に比べて小さい。厚さ4mmである。

の両短辺には綴じ孔が3つずつがたれているが、下辺の綴じ孔列では綴じ紐幅で漆がはがれている。右下辺には飾り紐孔4つが方形に配置されている。アカガシ亜属の柁目材で全長9.6cm幅4.7cm厚さ4mmである。

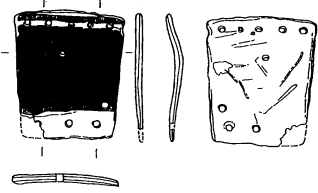
380・383・384・390～392・397～399は幅は異なるものもあるが、長さは12.3～12.5cmとほぼそろっている。380は飾り紐孔が右下端に6つ、右長辺中央に小孔1がある。ムクロジの柁目材で全長12.4cm幅6.3cm厚さ4mmである。381はサクラ属の柁目板。382は短辺が湾曲していて下端面には漆が残っている。襟ぐりや脇繰り部分かとも思われるが、下端に綴じ孔列がないので確証がない。ニレ科の柁目材で全長10.5cm幅7.2cm厚さ4mmである。383は飾り紐孔が右下端に6つ、右長辺中央に小孔

7. 武器

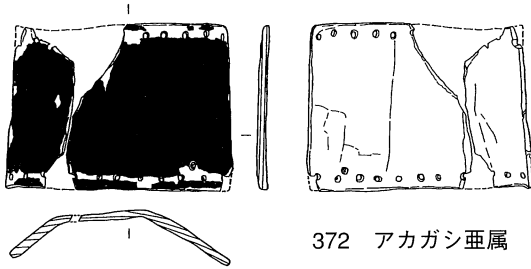


369 クワ属

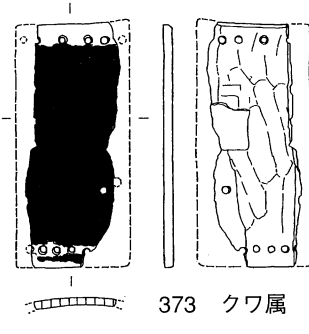
370 クワ科



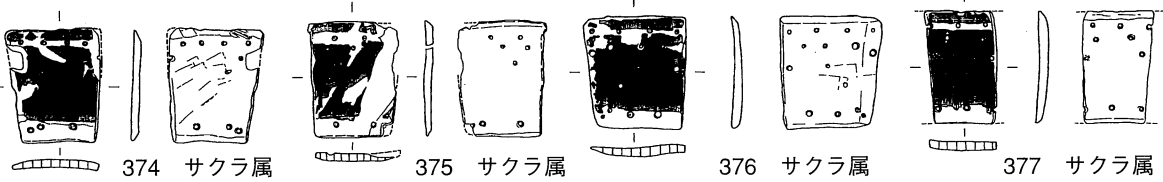
371 アカガシ亜属



372 アカガシ亜属



373 クワ属

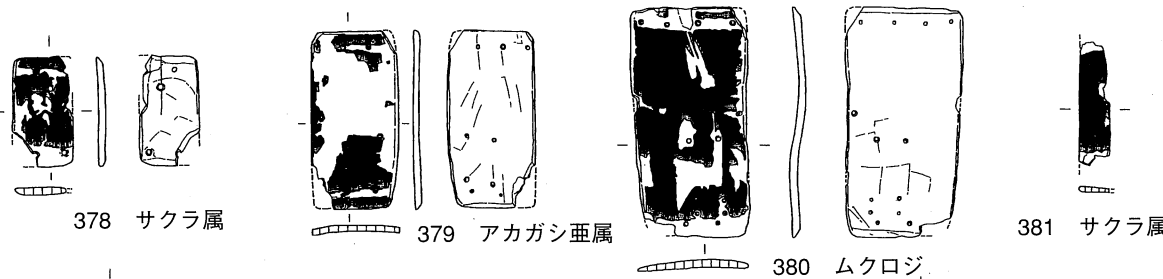


374 サクラ属

375 サクラ属

376 サクラ属

377 サクラ属

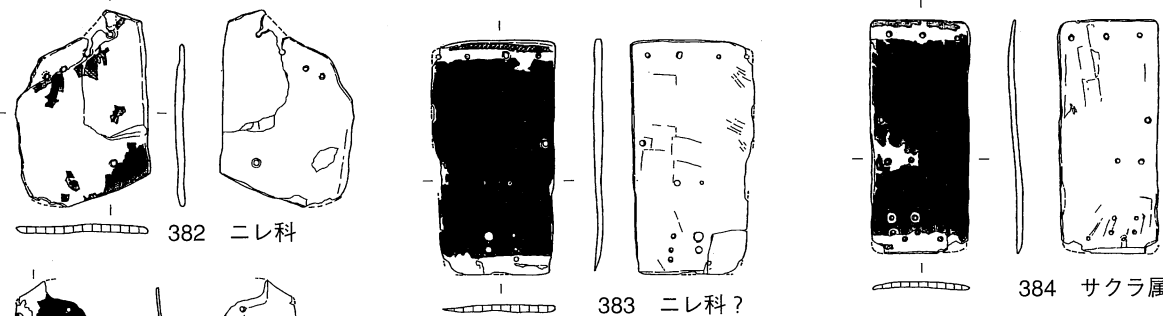


378 サクラ属

379 アカガシ亜属

380 ムクロジ

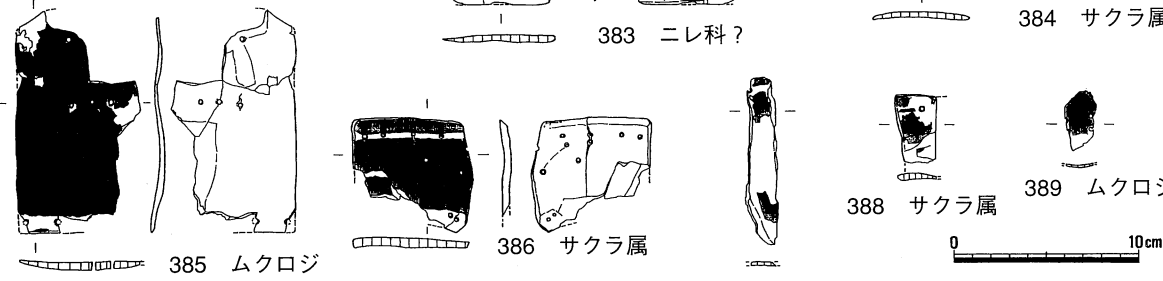
381 サクラ属



382 ニレ科

383 ニレ科?

384 サクラ属



385 ムクロジ

386 サクラ属

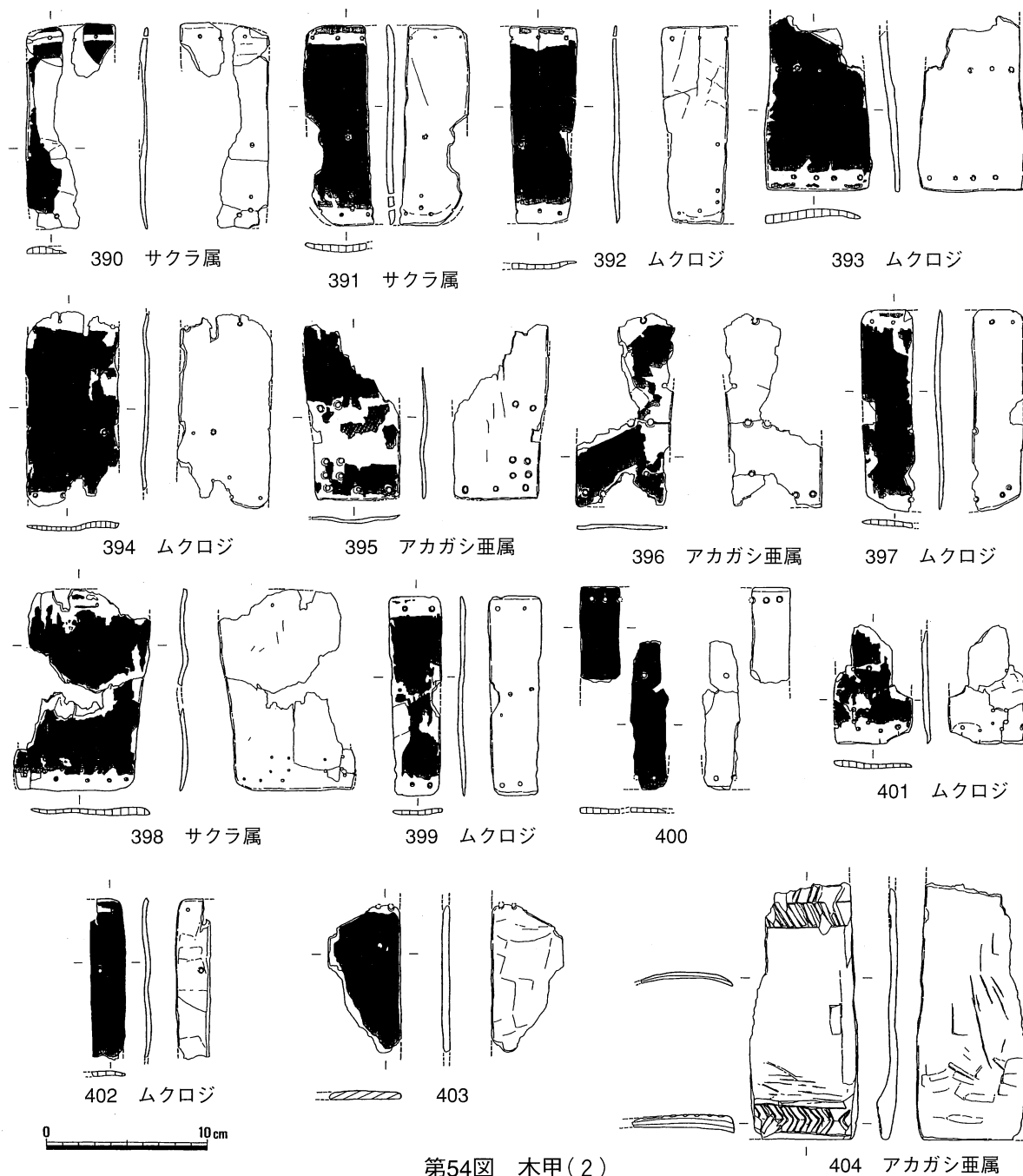
387 サクラ属

388 サクラ属

389 ムクロジ



第53図 木甲(1)



第54図 木甲(2)

が1つある。飾り紐孔周囲には円形に膜面の変化部分があるので、飾り紐に結び目を作っていた可能性がある。ニレ科?の柁目材で全長12.5cm幅6.7cm厚さ5mmである。384はほぼ完形品。綴じ孔は両短辺に3つ、飾り紐孔は左下端に6つある。飾り紐孔に接して円形に漆膜の変化部分がある孔がみられる。左長辺中央に小孔1あり。サクラ属の柁目材で全長12.4cm幅5.2cm厚さ3mmである。385は上辺・下辺1側辺を欠くため全形は不明であるが、下辺には4以上の綴じ孔があげられていたと思われる。中央やや上辺よりには小孔3つが1cm間隔であけられ、左端の小孔には上3.4cmの位置に対応すると思われる小孔が見られる。当初と比べ厚さが減じられていると見られる。ムクロジの柁目材で残存長11.9cm幅6.7cm厚さ3mmである。386・387・388はサクラ属の柁目材で、389はムクロジの柁目材である。

7. 武器

390は1側辺部がほぼ完存する破片で、幅は推定値である。上辺・下辺の綴じ紐孔のほか、上下の甲片との綴り紐用の小孔も右下部に2みられる。サクラ属の柁目材で、全長12.5cm幅5.5cm厚さ4mm。391は綴じ孔は両短辺に3ずつ、飾り紐孔は中央下端に3つある。上2つの飾り紐間には漆膜面の変化がみられ、同じ孔の周囲にも円形の変化部分がある。サクラ属の柁目材で全長12.3cm残存幅4.4cm厚さ4mmである。392は縦割れして綴じ孔は短辺に3ずつ残存し、飾り紐孔は中央下端に3つある。ムクロジの柁目材で、全長12.2cm幅4.1cm厚さ4mm。393は下辺に綴じ孔が4つ、飾り紐孔が中央長辺よりに横並びに3つある。ムクロジの柁目で全長10.8cm幅6.6cm厚さ5mmである。

394は両短辺に欠損部があるが、綴じ孔2以上がある。右下側部には飾り紐孔がある。ムクロジの柁目材で長さ11.9cm幅5.7cm、厚さ2mmにやせている。395は綴じ孔は下端に3つ、飾り紐孔は右下端に6つある。アカガシ亜属の柁目材で長さ10.7cm幅5.9cm、厚さは2mmにやせている。396は横綴じ孔は推定5つで、飾り紐孔は4つが残存する。ほかに左長辺中央に小孔1あり。アカガシ亜属材で長さ11.9cm幅6cm厚さ2mmである。397は一方の短辺が弧状になる。ムクロジ材を使い全長12.4cm幅3.2cm厚さ3mmである。398は飾り紐孔が4列ある。ムクロジ製で長さ12.5cm幅8.4cm厚さ5mmである。399は上辺・下辺に綴じ孔それぞれ2つと中央部に小孔3がある。ムクロジの柁目材で全長12.3cm残存幅3.2cm厚さ3mmである。401・402はムクロジ製である。

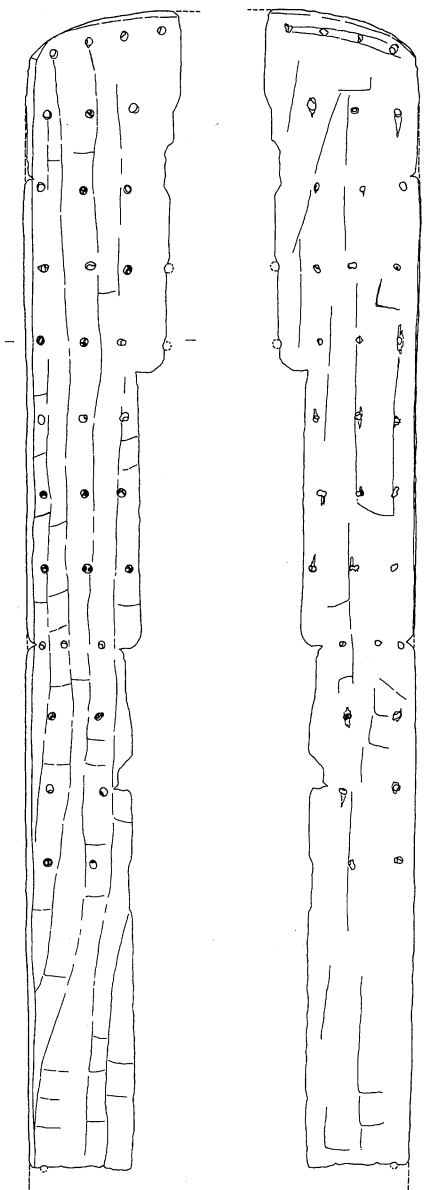
404は一木式の木甲とみられる。下縁の小片で、下端と上端破損部に横綾杉紋を方向を違えて彫刻している。無紋様部分に赤色顔料がついている。アカガシ亜属材で残存長15.8cm幅6.7cm厚さ3.5mmである。

楯

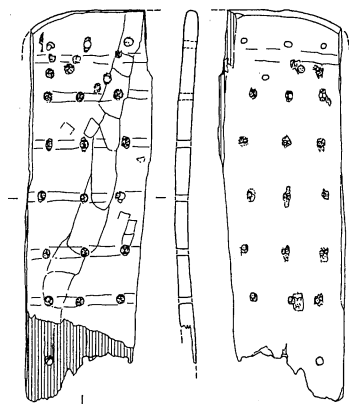
楯はモミ属の板目材を使用し、当間隔に紐綴じ用の小孔が多数あけられているが、横の間隔よりも列間が広いものが多い。出土点数は多いが、この小孔のため小片に割れていて、全形は言うまでもなく全長や全幅がわかる資料もない。天地もほとんどが不明であるが、小口面と側面とでなす角を落として小口面を弧状にしている側が上端面とみられる。また、端面が平坦で小孔列が少ない側が下端面と考えられる。出土資料中最も残存長の長い408をみると小口面から離れると小孔列がまばらになるので、中間部では小孔列を密に施さないものもあるようだ。こういった部分の破片は不明品中の有孔板の破片と区別が付かない。各小孔間は、種不明だが蔓植物を紐として通している。416では出土時に下面となっていた裏面につるが残っている。また、小孔内につるが2本残っている例も多いが、つるが残っていないとも小孔間がつるのあった部分のみ周囲より白く色落ちしている例も多い。厚さは5～12mmの幅があるが、7～9mmが最も多い。

405は小口面が湾曲しており上端部と見られる。小孔列は上端部の湾曲に沿って1列と、その下に水平方向に列間ほぼ4cmで11列があって、その下端から破面となっている次の小孔列まで16cm間隔があいている。小孔内には紐が残っているものもある。板目材で残存長61.9cm幅8.2cm厚さ1.2cmである。406も上端部の破片で角がやや丸い。小孔には蔓が1本ないし2本残っていて、横の小孔間は表裏面ともに筋状に日焼けを免れている。モミ属の板目材で残存長20.8cm幅6.8cm厚さ8mm。407は上下の端部を欠く中間部の破片である。列間4cmの小孔列が17列残存していて、小孔間には色落ちした紐痕跡がある。モミ属の厚さ8mmの板目材製で長さ74.8cm幅15cmが残っている。

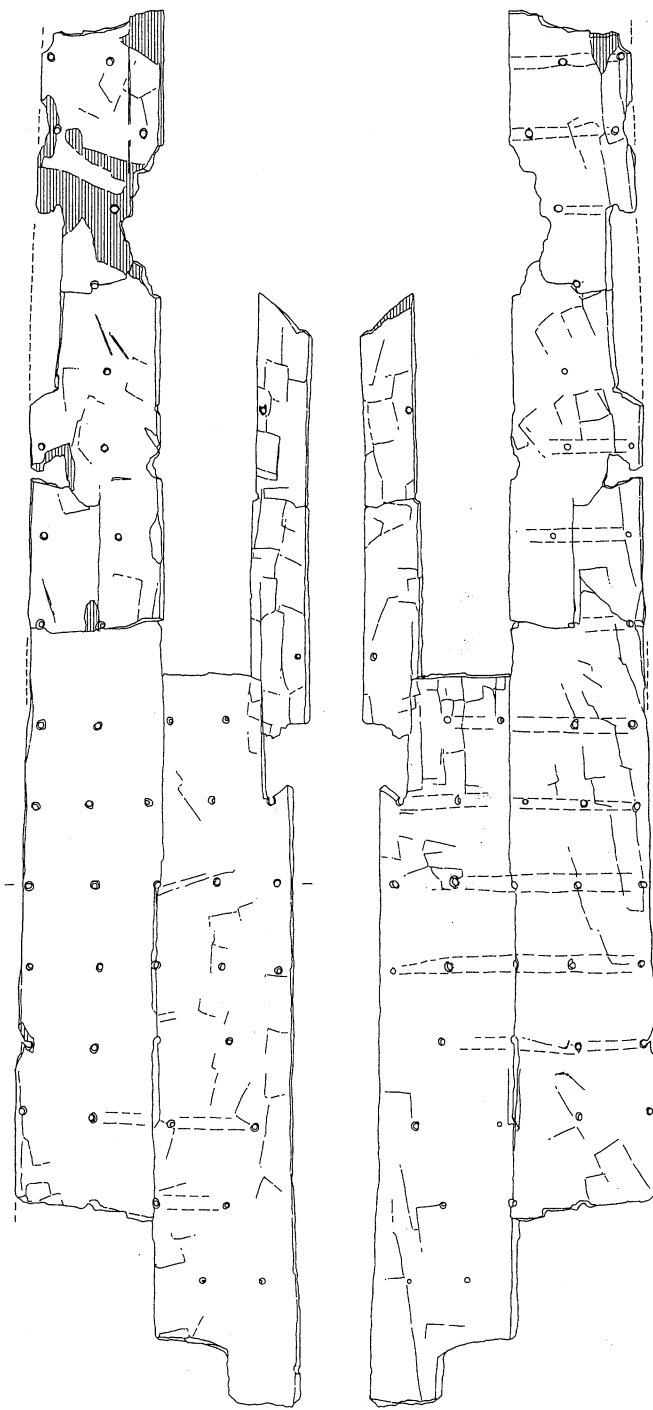
408は横幅の残りは悪いがもっとも長い資料で残存長が87.4cmある。幅が5cmほどしか残っていないが、小孔は縦方向にもそろっておらずまばらである。厚さ8mmのモミ属の板目材である。409は上端



405



406 毛ミ属



407 毛ミ属



第55図 楯(1)

7. 武器

部の破片で、側辺との角は丸みを持たせている。小孔列が12列残存していて、上の2列は近接しているが、あとは3.5cm間隔でほぼ均等に配置されている。小孔内にはつる状の紐が残っている。厚さ1.2cmの板目材で、残存長40.3cm幅11.3cmである。410は小口側に2.5cm間隔で小孔列が2つあって次の小孔列とは間隔が28.5cmあいているので、こちら側が下端と思われる。残存長40.8cm幅9.5cmで、厚さ1cmの板目材を使っている。411は直交する2辺と小孔列7列が残る。厚さ1cmの板目材を用いており、長さ26.5cm幅7.3cmが残っている。412は小孔が縦に3つあるが、間隔が6cmあるので中間部のまばらな箇所とみられる。厚さ9mmの板目材である。413は上端部の下5cmに小孔列があってそこから下端部の小孔列までは15cm離れている。414は上端が弧状で、近接する小孔列が2列ある。以下列間4～5cmで9列あるが、4列目と5列目は16.5cmあいている。また、縦方向には互い違いに孔を配置している。残存長は58.6cmで幅6.2cm厚さ8mmである。

416は小孔列が7列残っているが、上の2列は接近しているので端部が近いと思われる。表面の小孔列間には色落ちした紐痕跡があって、裏面では小孔列間に2本をねじった紐が残存する。厚さ1cmの板目材で、長さ21.5cm幅11.5cmが残存している。419は小片ばかりで接合しないが同一個体と思われる。420は3.5cm間隔の小孔列が13列残るが、中央は15cm間隔があいている。一部が焼損している。板目材を使っていて残存長58.4cm幅7.3cm厚さ9mmである。421は厚さ7mmの板目材を用いている。上端に小孔列が2列1.5cmと近接してあるが、縦方向は互い違いにしている。下方には5cm間隔で5列あり、さらに15cm離れて1列ある。長さ46.4cm幅12.3cmが残っている。422は小孔列間が7cmあいている。424は端部付近の小孔列をやや密に配置するが、縦方向の通りが悪い。小孔にはつる状のものが2本残っている。

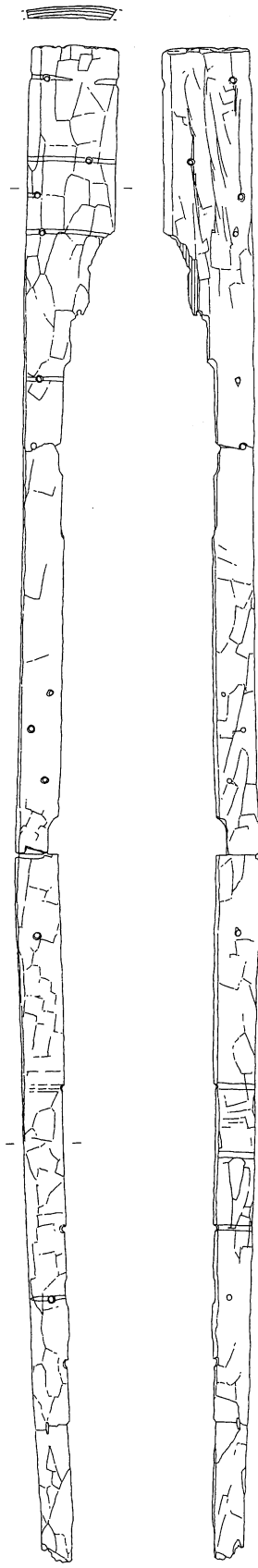
425は上端部を両面から削って薄くし、数mmの刻みを密に施している。小孔列間は2.5cmで、小孔間も1.5～2.5cmと密にしている。小孔間には紐痕跡がある。他に接合部不明の破片6点がある。残存長48.0cm幅11.8cm厚さ7mmである。428は縦4～8cm横2.5～3.5cmで小孔列が6列あり、小孔内にはつる状の紐が2本残っている。431は厚さ1.0cmのモミ属製の板目材を使った上端部の破片で、小孔列13列が残っていて上辺の2列は幅1cmと接近し、他は3.5～4cm間隔でほぼ均等である。残存長43.15cm幅6.2cm。432は下端部の破片と思われ、角に小孔4を方形に配置する。小孔列は9cmの間隔で2列ある。

434は残存長22.7cm幅4.3cmの小片であるが、中央に打製石鏃が刺さっている。5cm間隔の小孔列が4列あって、厚さ8mmの板目材を使っている。438は小孔がまばらで、縦方向の通りも悪い。439は小孔が多数あけられているが、縦横どちらの方向にも列をなさない。440・441は小片だが、表面に赤色顔料が塗られている。

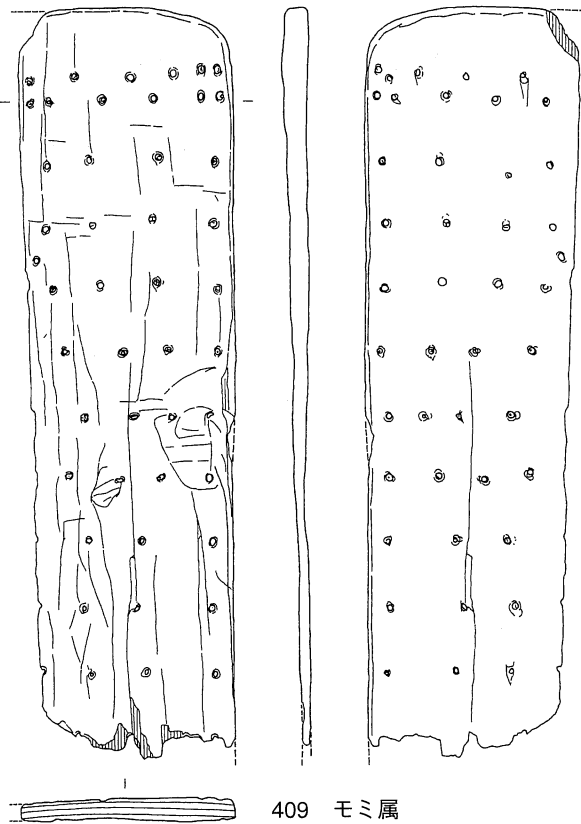
武器形木製品

武器形木製品には戈形・剣形・刀形・槍形・鏃形などがある。

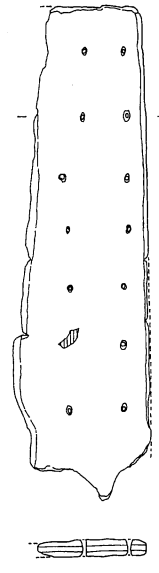
442はクスノキの柁目材を使った残存長91.6cmの巨大な戈形木製品で、鋒部分を欠く。基部がわずかに左右非対称のため戈形と考えられる。鋒と基部に刃部表現があるが、身の中央部は断面四角形で刃部を表現していない。443は黒漆塗りの戈の柄である。戈の装着部分に茎孔と溝がきってある。装着溝の中間からやや上にあけられた長方形の茎孔は、手前で5×0.7cm奥で4×0.7cmで奥に長さが短くなっている。装着溝は長さ15cmあるが溝底は必ずしも平らではない。装着部側面には横位の綾杉紋が間隔を置いて3条施されている。綾杉紋の上下には3～5mm幅の漆の剥落部分があって、木甲の綴じ紐部分の剥落状況とよく似ている。頭部は弧状に湾曲していて、湾曲の内側に円孔が2つ



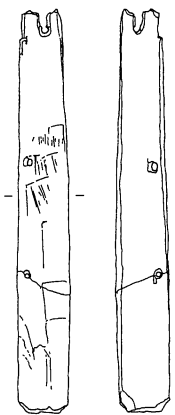
408 モミ属



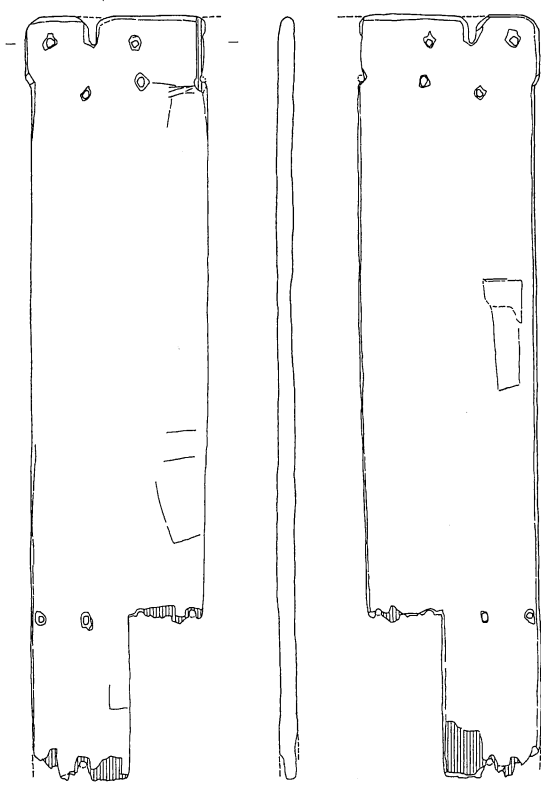
409 モミ属



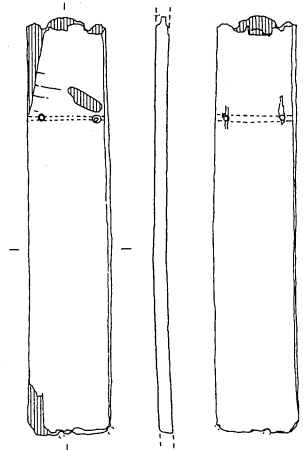
411



412



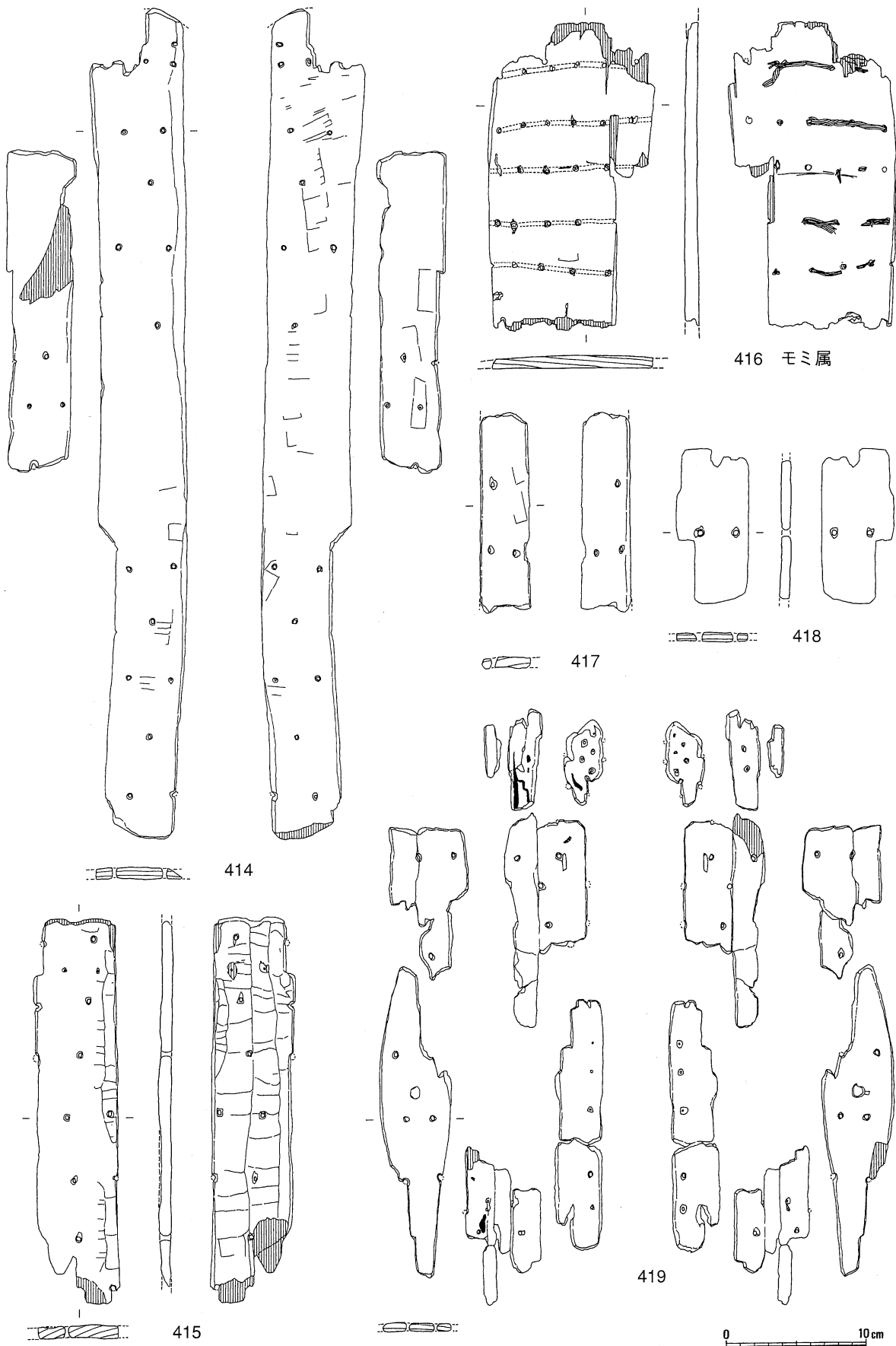
410



413



第56図 楯(2)



416 モミ属

417

418

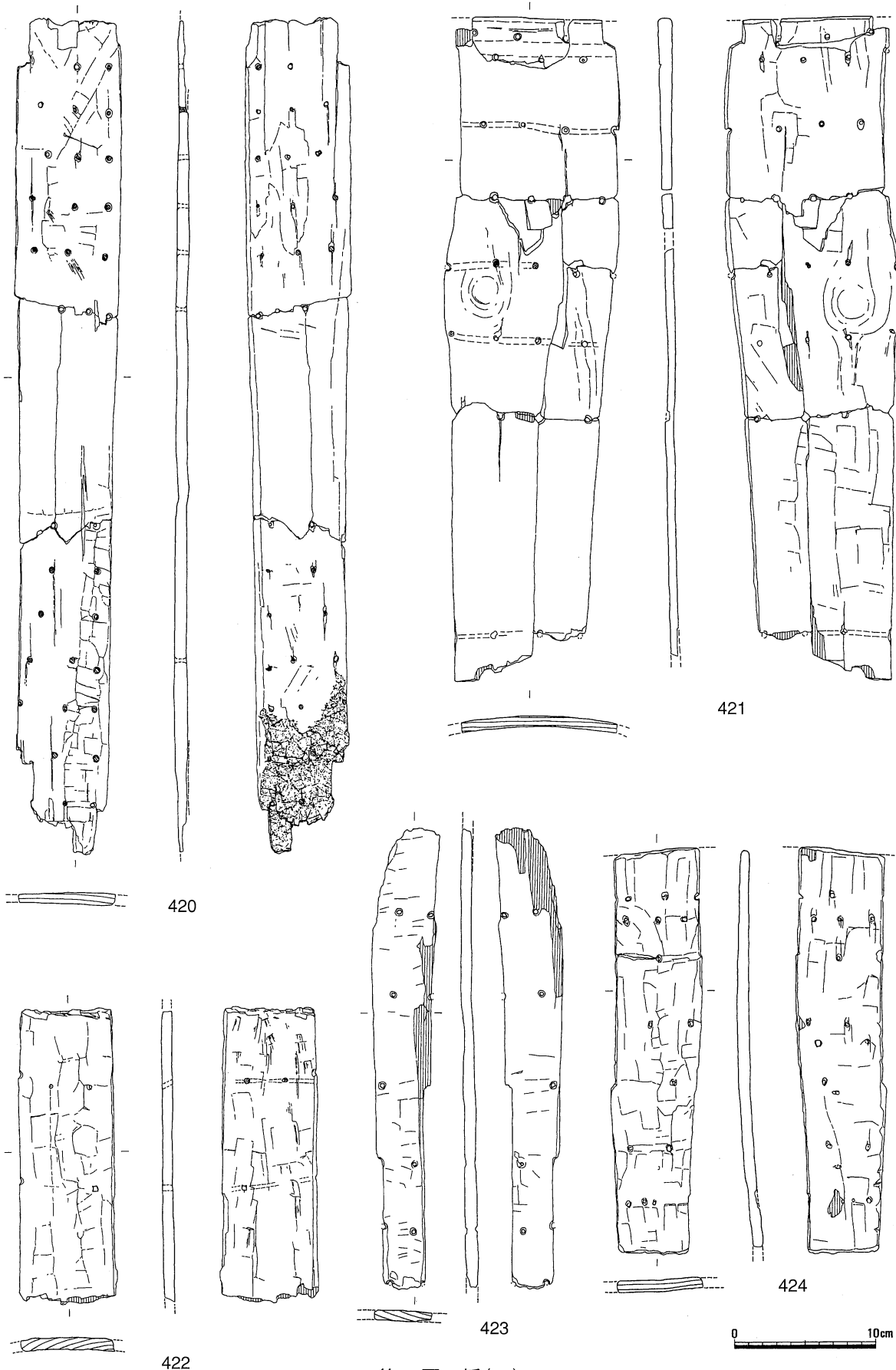
414

415

419

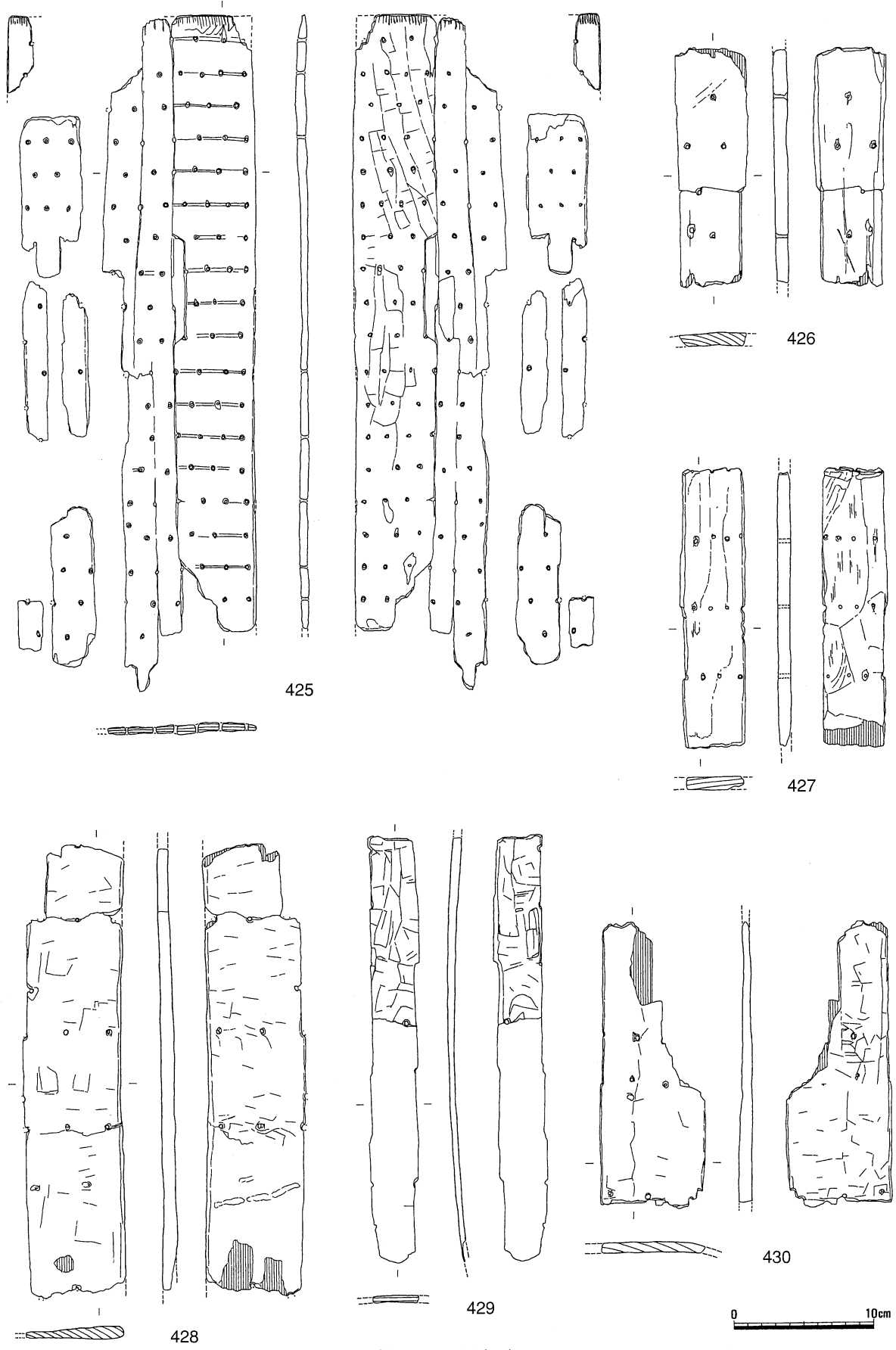
0 10cm

第57図 楯(3)

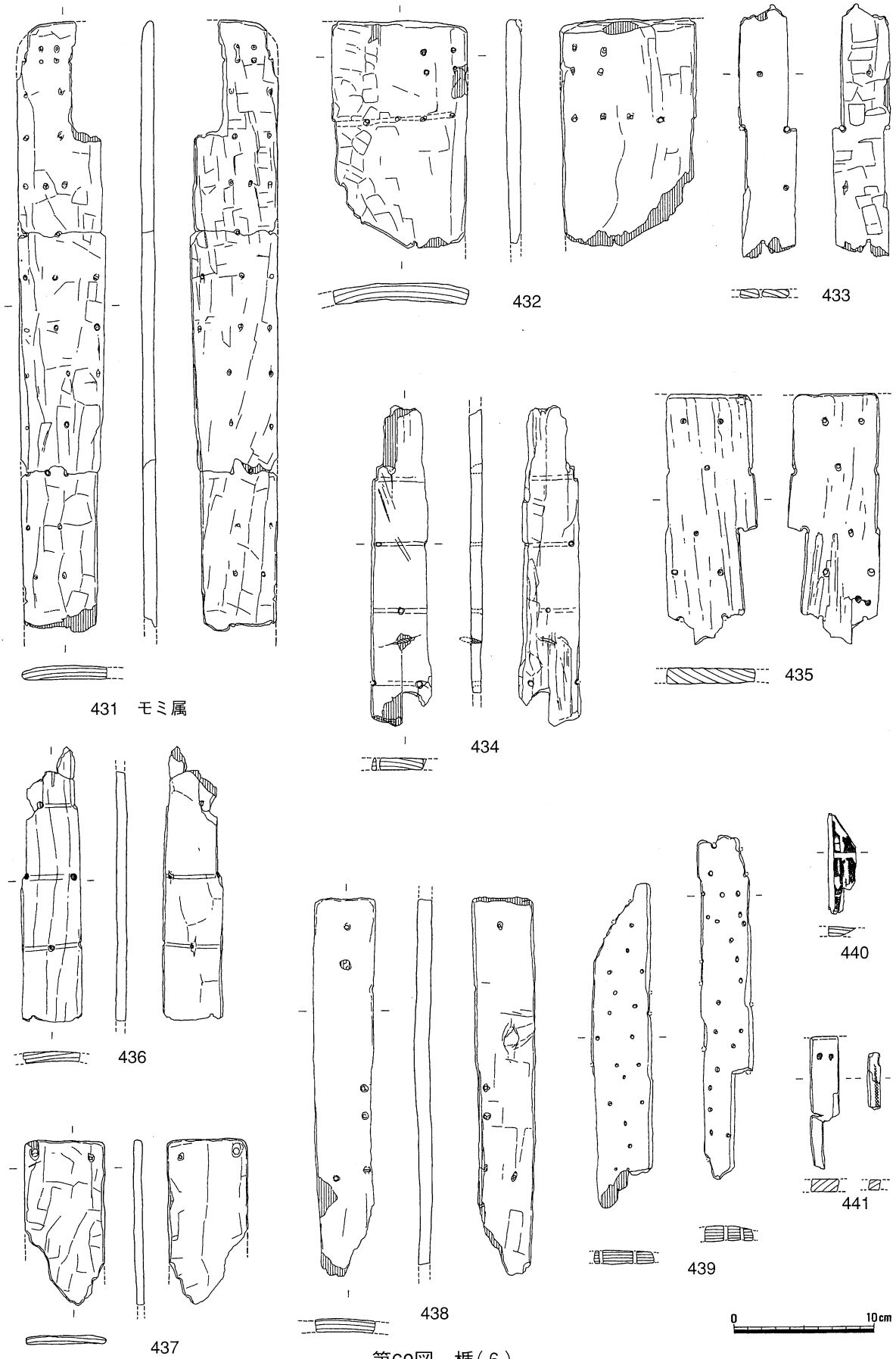


第58図 楯(4)

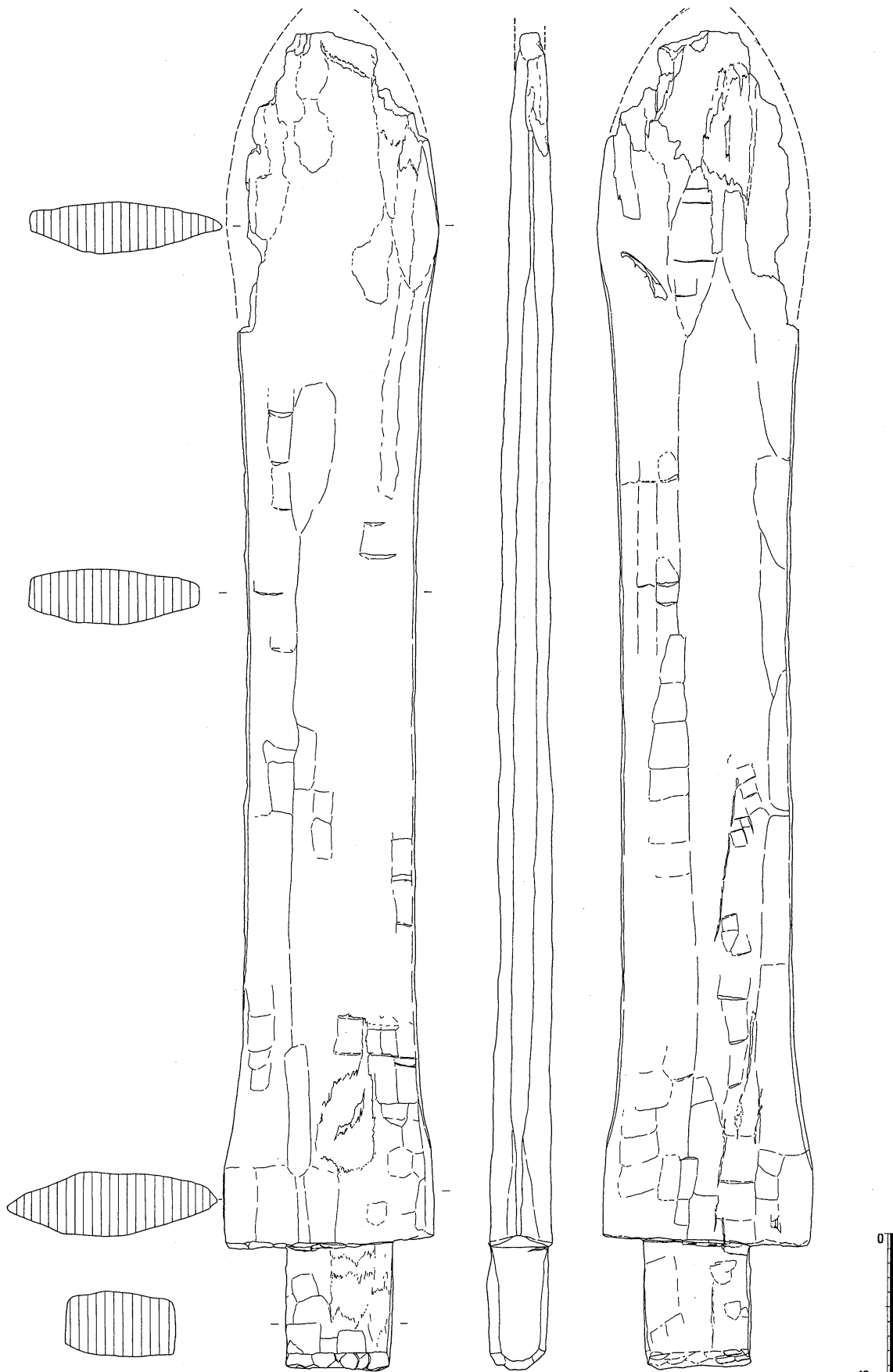
7. 武器



第59图 楯(5)

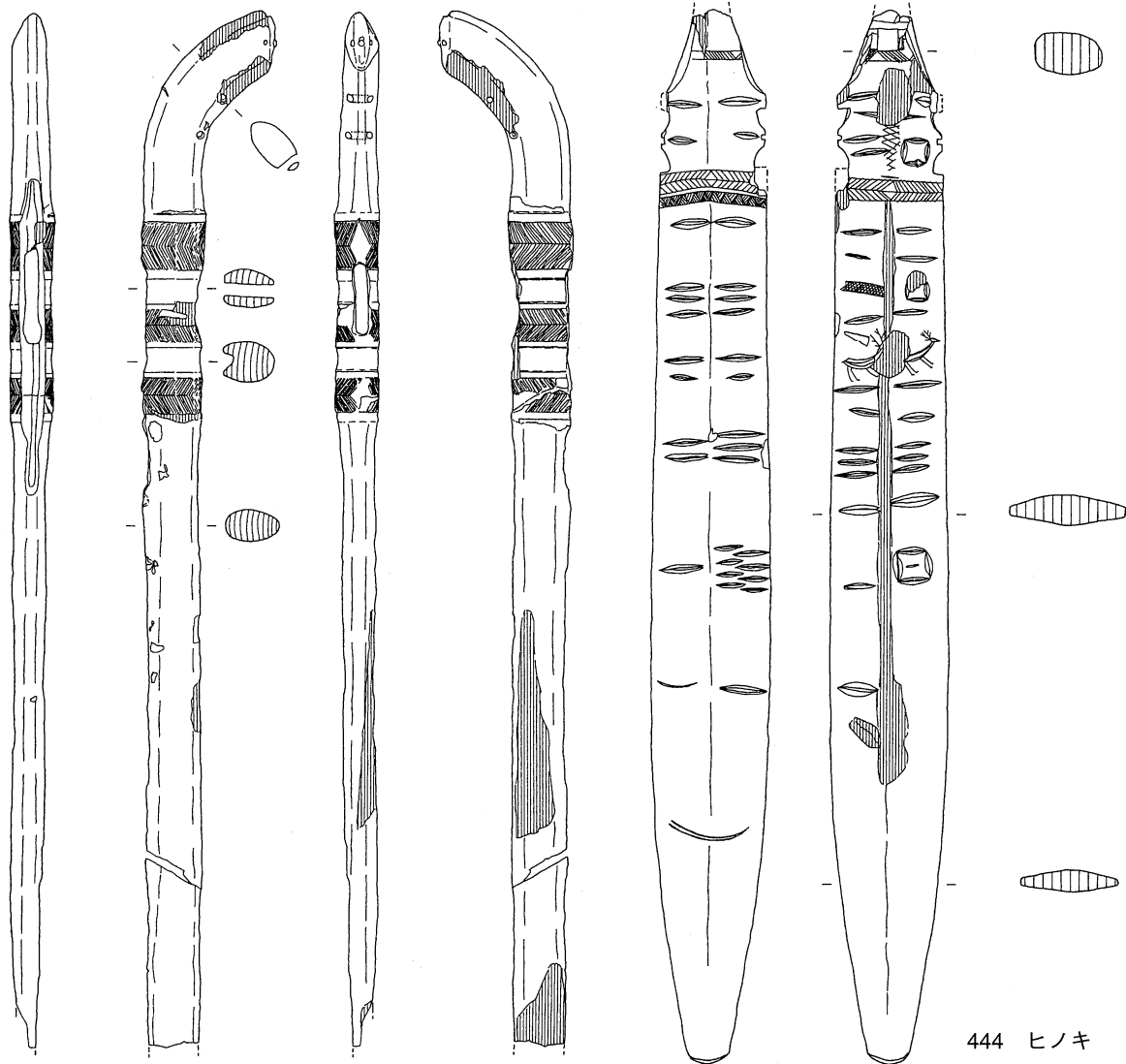


第60図 楯(6)



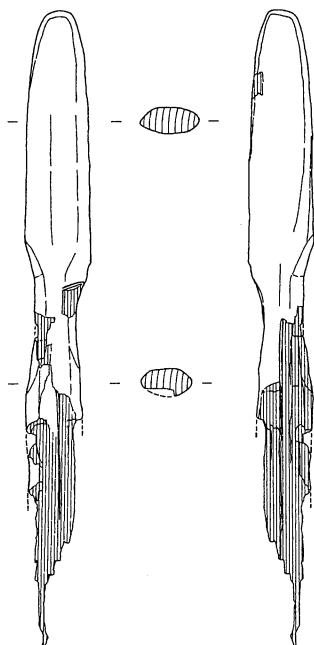
442 クスのキ

第61図 武器形(1)

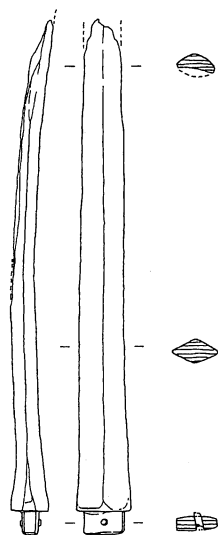


444 ヒノキ

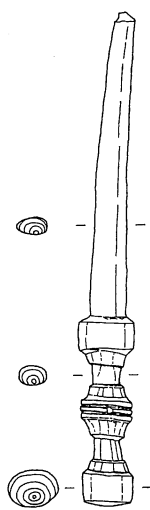
443



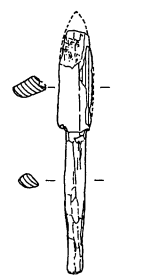
445 アスナロ属



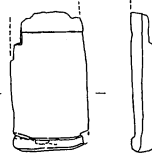
446 ヒノキ属



447 クスドイゲ



448 ヒノキ



449 カヤ属



第62図 武器形(2)

7. 武器

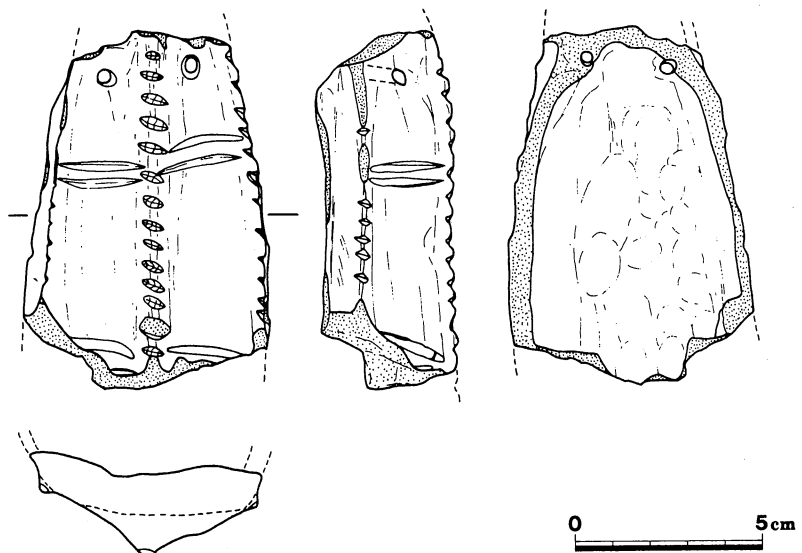
あけられている。房垂らしのためとみられる。戈の装着は湾曲の外側面になる。残存長57.2cmである。この柄に装着された戈は、黒漆塗りの木戈で、太く台形状の茎が中心よりやや上に付いていて、柄とは6箇所で緊縛されたと考えている。さらに、柄との一体性を重視するならば戈にも柄から連続して綾杉紋が施されていたと想定している⁽¹³⁾。

444はシカや木の葉状の彫刻や線刻を表裏両面に施した剣形木製品である。ヒノキの柾目材製で、柄の側が欠損して残存長58.3cm幅6.5cm厚さ2.3cmである。身は一応両刃であるが、鑄は緩く刃部は面取りされていて、鋒は丸くなっている。柄は側面が緩く内湾し、厚みを増しつつのびていて前面には幅1.3cm深さ5mmの方形彫り込みがある。この方形彫り込みに別作りの把が装着された可能性も考えられる。身と柄の境には側面からレの字状の切れ込みを上下対照形に施し、1cmある切れ込みの間には2mm幅で溝を彫り込んでいる。

複合鋸歯紋・綾杉紋・斜格子紋などの細線紋様のやシカや木の葉状の彫刻には鋭利な金属器が用いられたことは明白である。細線紋様は基本的には全幅にわたって施されているが、半分幅の斜格子紋や鑄部分に施された斜格子紋のような例外もある。シカや木葉状の彫刻は外側を垂直に内側を斜めに刃物を入れてレの字状に彫って輪郭を取っている。シカは鑄をはさんで2頭が右向きに彫られていて、鑄部分の傷のため損傷を受けているが角の刻線が残っていて2頭ともオスであることがわかる。角と両脚は細線で描かれていて、足先を前方にまげてかぎ状に表現する点などは土器絵画と共通している。

木葉状の彫刻は鑄を軸として1・2・4・5・6・9の単位があり、多くが数に違いはあっても、表裏同じ位置に施されている。表面の方が彫刻が多いが裏面との対応関係を重視するとすれば、多い分については追加的のものとも見える。木葉状の彫刻を四角に組合せたものも単位の1つとみることができよう。この単位を持った彫刻は、文字や数字といった記号のようなもので、この剣形木製品は記録物として使われたのであろう。

この剣形木製品444の類例は管見の限り知られていないが、西川津遺跡出土の鐸形土製品⁽¹⁴⁾に共通性を見ることができる。鐸形土製品は、弥生前期の貝塚の直上から出土していて、長さ9.5cm最大幅6.5cmで上下・両端とも欠損しているが、外面中央の稜に刻み目刺突文が施されている。残存部の中央やや上にこの稜をはさんで2個1対でヘラ描き沈線が施されており、下端の破損部にも同様の沈線が3つ見られる。破損部を含めて2単位が残っているだけで、確かなことはわからないがこの鐸形土製品も記録物として製作されたのではなかろうか。



第63図 西川津遺跡出土鐸形土製品

445は槍形の木製品で、鋒は丸くてとがっていない。身は長さ15cm幅3.5cmで1.4cmの厚さがある。柄は付け根部分のみ残っている。アスナロ属の柁目材を使い、残存長34.1cmである。446はヒノキ属の柁目材を用いた鉄剣形木製品で、鋒を欠いていて現存長27.5cmである。身の断面は幅2.5cm厚さ1.3cmの菱形である。長さ1.3cmの方形の茎には中央に目釘が残っている。447は刀形木製品で、鋒は折れているが断面三角形の身に節帯を3つ持つ把がつく。中央の節帯の頂部には沈線が2条刻まれている。イイギリ科クストイゲの心持ち材が使われていて、残存長26.4cmである。448は7.5cmと長い茎を持つ木鏃で、鋒及び左側部を欠いていて身の断面形は菱形である。ヒノキの柁目材を用いていて、残存長は13cmである。450は黒漆塗りの刀形木製品である。身は4.5×3.0cmの楕円形で、鋒を欠損している。身と茎の間に4.5×3cmで幅1.5cmの楕円形の鏝を持つ。茎は丸く加工された先端に向け幅を減じる。鏝上面は漆がはがれていて、茎の根元部分にも漆が残っている。サクラ属の柁目材で残存長42.5cmである。

451～455は銅剣形木製品である。模倣の忠実度の順に並べると451→455→454→452・453となる。451は細形銅剣を樋・刳方・脊やその研ぎの表現など細部まで忠実に模倣していて、各地から出土する銅剣形木製品の中でももっとも忠実度の高い資料である。鋒はやや痛んでいる。関の上部、脊の両脇に1対の円孔を持つ。断面円形の茎は根元部分で直径1.5cmあってやや先細りとなる。長さは2cmである。モミ属の板目材製で、全長26.5cm刳方下部で幅3.9cm厚さ1.9cmである。452は銅剣形木製品であるが、451と対照的に鏝や刳方などのない扁平な形をしている。関部には円孔を2つ持つ。茎は長さ1.5cmと短い。アカガシ亜属の柁目材が用いられ残存長15.8cm幅4.0cm厚さ6mmである。453も452と同様に身・茎とも扁平できわめて簡素な形態である。スギの板目材を使い残存長17.4cm幅3.2cm厚さ8mmである。454は刳方や脊などの表現を欠くが、身の断面形や円孔横から関にかけて幅が狭くなる点など銅剣模倣の意識がみられる。モミ属の板目材で残存長15.6cm幅3.1cm厚さ1.3cmである。455は451について忠実度が高い。鋒を欠き、基部に2孔をうがう。身と刳方の境を意識しているのが分かる。茎は断面円形である。二葉マツ類の柁目材を使い、残存長17.2cm刳方下部で幅4.1cm厚さ1.2cmである。

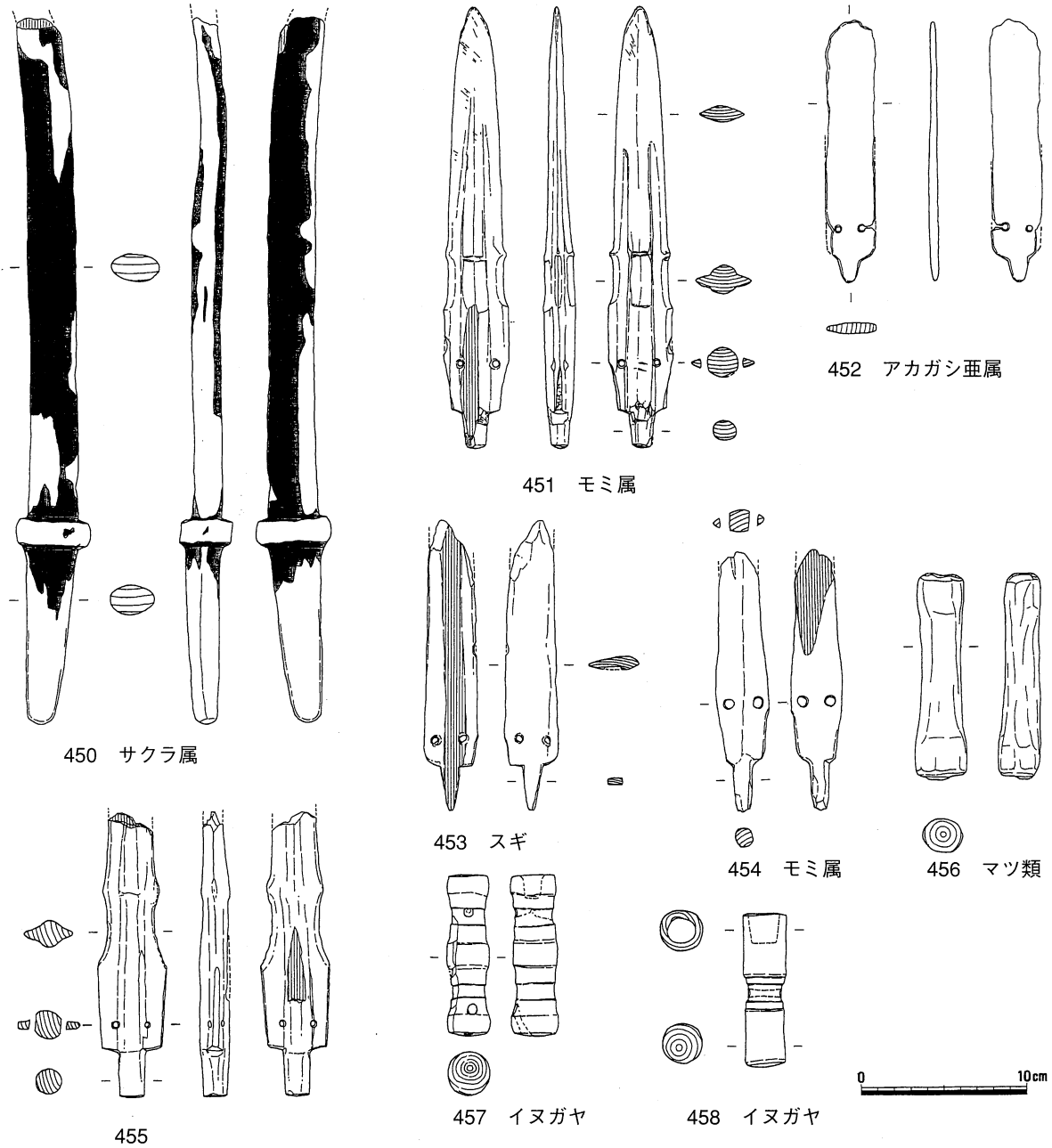
鞘

鞘は1点のみ出土している。449はカヤ属の板目材で、両小口に縁を作りわずかに厚みを持たせている。側辺は面を作らず薄く削って仕上げられている。上下2枚を組み合わせて使用すると思われる。全長7.5cm幅4cm厚さ4mmである。

剣把

剣把は未成品を含め3点出土している。直径2.5cm程度長さ8.3～12.4cmのイヌガヤなどの針葉樹の心持ち材を用いる。刀形木製品447の把ほどの加工はされていないが、2ないし3の節帯や房垂らし用の円孔を持つ点などが共通している。また、茎孔は円形であるので、銅剣あるいは銅剣形木製品に装着されたとみられる。

456は剣把の未成品で、両小口部分を節帯となるように太くしているが、茎孔や円孔はあけられていない。直径2.5cmの心持ち材で長さ12.4cmである。457も剣把未成品で、両端と中央に低い節帯を持つ。一方の小口中央には直径1.2cm深さ1.5cmの穴をあけている。また、その下で端部から2.4cmの所には両側から円孔を開けかけているが貫通していない。下端の節帯には斜めに円孔が開けられていて、房垂らし用と見られる。イヌガヤの心持ち材で、長さ9.7cm直径2.5cm。



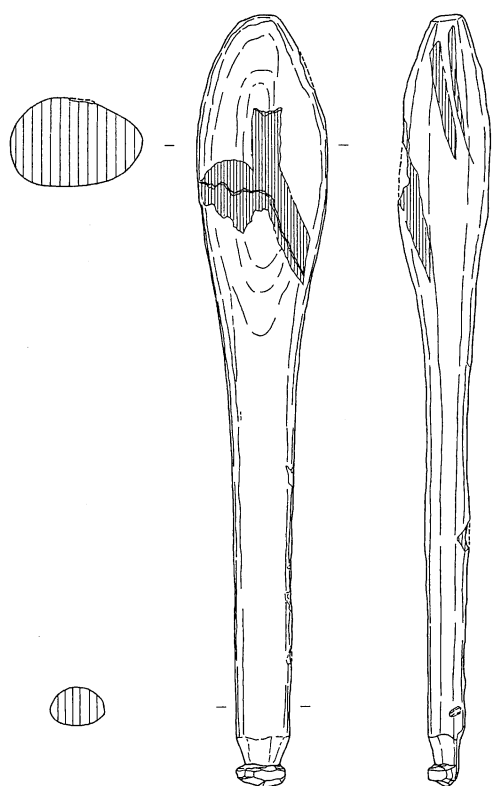
第64図 武器形(3)

458は剣把の完形品で、中央くびれ部に円孔がある。茎孔は深さ1.7cm直径1.5×1.7cmの楕円形である。イヌガヤの心持ち材を使っていて長さ8.3cm直径2.6cmである。

棍棒

アカガシ亜属などの堅い木を使った棒状品で、明らかな握部を作っているものを棍棒とした。狩猟漁労およびそれに伴う宗教的行為にも使われたものがあると思われるが、ここでは武器として一括して取り上げた。

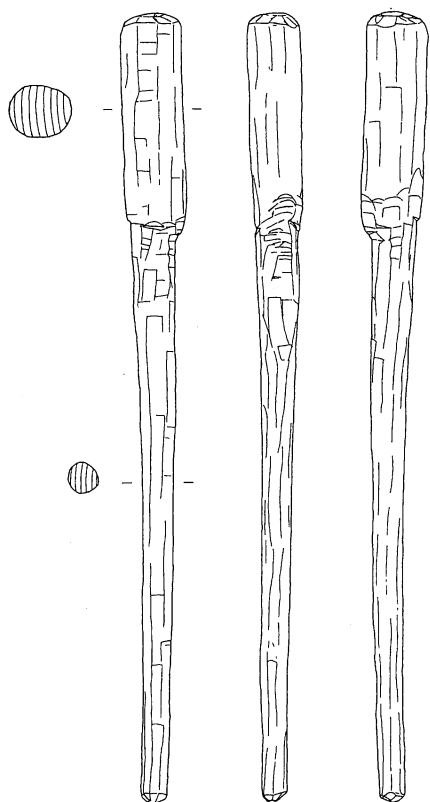
459はアカガシ亜属の柁目材を使ったほぼ完形品で、身は平面楕円形で、握部には紐かけを持つ。全長41.2cmである。460は直径3.9cmの心持ち材を使っている。加工痕がよく残っていて特に握部は顕著であるが、枝の根元の加工が粗い。全長44.4cmである。461も全長42.3cmの完形品である。他の棍



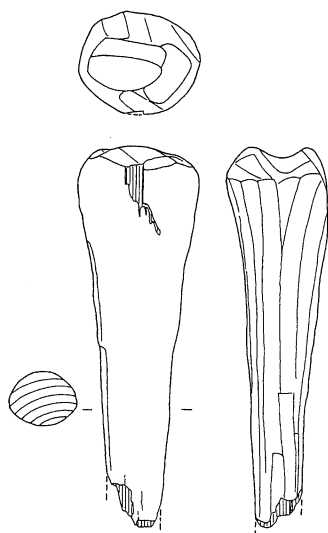
459 アカガシ亜属



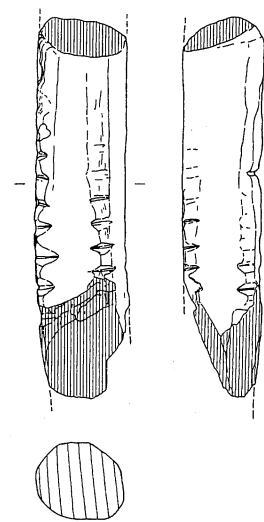
460



461 クワ属



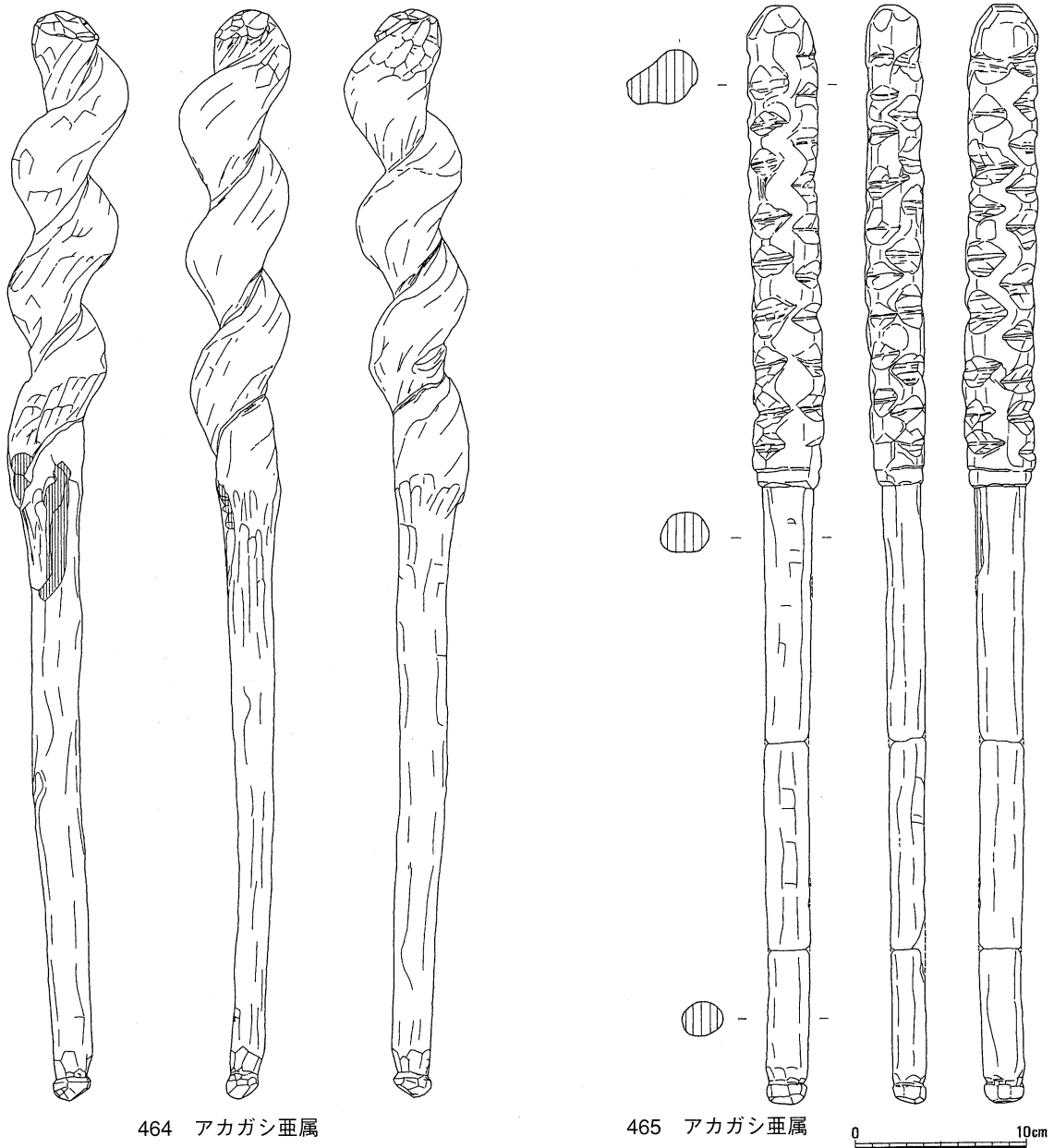
462



463

第65図 棍棒(1)





464 アカガシ亜属

465 アカガシ亜属

第66図 棍棒(2)

棒と違い身は11.5cmと短く、徐々に細くなった握部端には紐かけを作らない。身の太い部分を握って指揮棒の様な使い方をしたかもしれない。クワ属の柁目材を用いている。462は装着孔から折れた石斧直柄を利用して、装着孔の折損部分を面取りしている。

463は20.3cmしか残っていないが、太さが4.8cmで断面が方形の身の四方の角に刻みがあって、いわゆるささら状木製品と似ている。465との類似性から棍棒に含めた。464は身がねじれた形をしていて、蔓が巻き付いてできた部分を利用したと思われる。握部端は平面5角形のグリップエンドにしている。ほぼ完形品でアカガシ亜属の心持ち材を使っている。全長63.2cmである。465もアカガシ亜属の柁目材を使った完形品で、身の4角に大きな刻みを交互に9ないし10段いれている。握部端には紐かけを作っている。全長63.8cm身の太さは4.1cmである。

8. 服飾具

服飾具にはかんざしと衣笠状木製品がある。かんざしには1本歯と2本歯とがあるが、歯の先端や断片では木針との区別が付かないが、明確な木針が出土していないのでかんざしに含めている。

かんざし

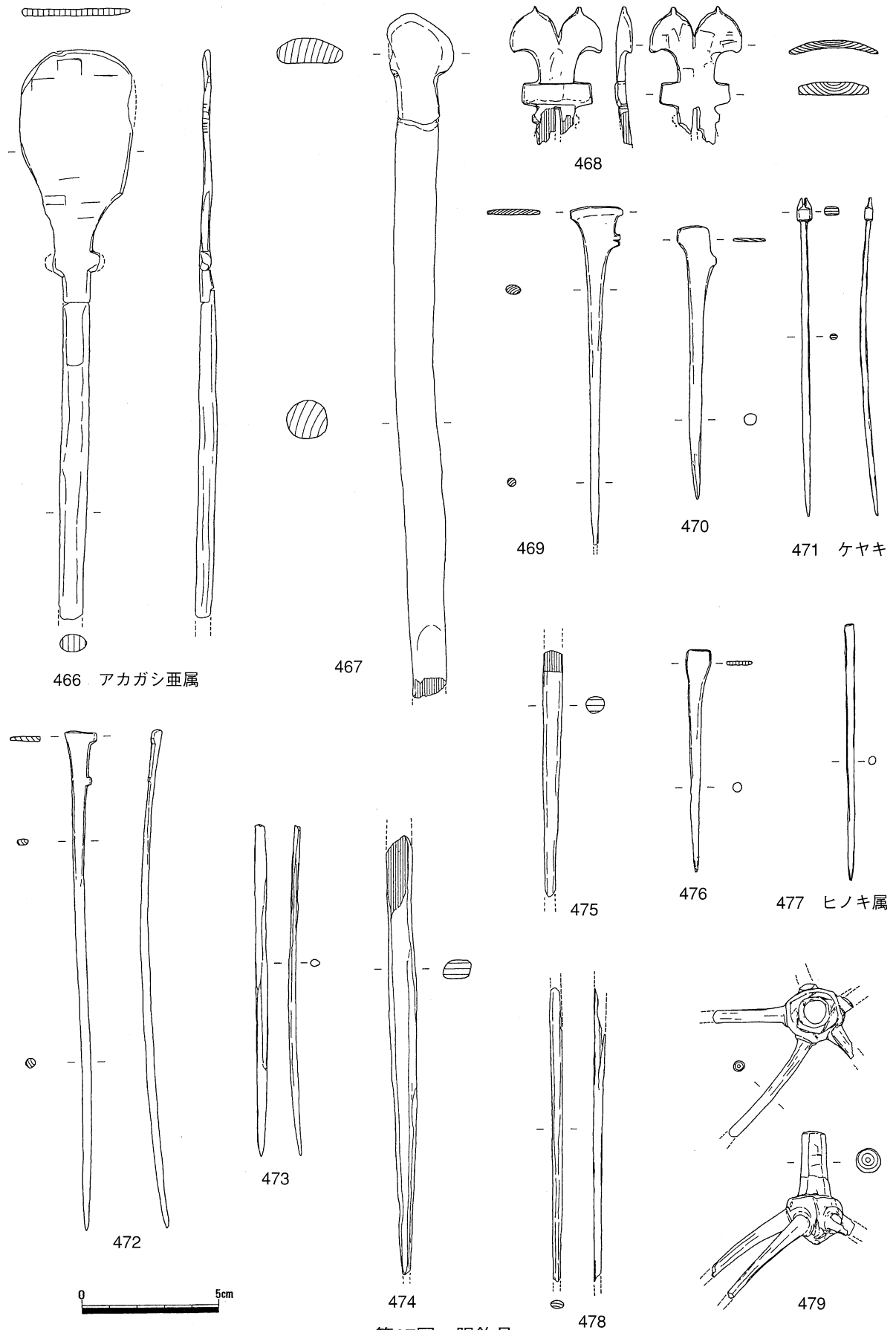
かんざしは13点出土していて、そのうち2本歯は1点である。先端の欠損している466や、やや太い467はかんざし以外の製品の可能性もある。469・470・472・476の頭部は、南方(済生会)遺跡から出土している骨角器のかんざしと類似した形状をしている。骨角器では先端の摩滅しているかんざしと類似した形状の穿孔具・刺突具があるが、木製品ではあきらかに摩滅しているものがないので、かんざしと考えておきたい。

466は断面楕円形の軸部に扁平な隅丸方形に近い頭部を持ち、頭部と軸部の境には棘突起が両側につく。アカガシ亜属の柾目材を用い、残存長20.5cmで幅4cm厚さ6mmである。467は直径1.5cmの軸部に幅2.4cmでやや扁平な半円形の頭部を持つ。柾目材を使っていて残存長24.6cmである。468は唯一の2本歯のかんざしである。頭部は乳房を2つ連ねた様な形状で、厚さ3mmと薄く内湾させて仕上げている。板目材を使っていて、残存長5cm頭部幅3.3cm厚さ5mmである。469は先端が折れているが、撥形に開く頭部の片側面に中央に刻みを入れる方形の突起が付く。柾目材を使い残存長12.3cm頭部幅1.9cm厚さ3mmである。470は469と類似した頭部を持つ。469には横突起の頂部に刻みがあるのに対し470には刻みがない。柾目材を用いていて全長9.9cm頭部幅1.4cm厚さ4mmである。471は完形品で、頭部には2つの角状の突起が付く。ケヤキの柾目材を使っていて全長11.5cm太さ2mmである。472は469や470に類似した頭部を持つ完形品である。柾目材で全長18cm頭部幅1.1cm厚さ4mmである。473は厚さ2mmと薄く扁平な歯である。476は完形品で、円形の軸部と扁平でやや方形に近い頭部とからなる。柾目材を使い全長8.1cm頭部幅9mm厚さ3mmである。477も完形品であるが頭部を作らない。直径3mmのヒノキ属を使っていて全長8.3cmである。

衣笠状木製品

479は小形の衣笠状木製品で、中心から均等に分岐する5本の枝を利用している。枝が下に開くとすると、軸部は独楽のようになっており、下端は円錐状になり上部は直径9mm長さ2.3cmのつまみ状になる。浅岡俊夫氏の多枝付木製品I類にあたる⁽¹⁵⁾。

8. 服飾具



第67図 服飾具

9. 食器具・容器

杓子形・さじ・縦杓子・横杓子・ジョッキ・コップ・高杯・合子・鉢・皿・盤・槽・蓋・台などは、食器具・食器・容器に当てはめようとする、それぞれの境界が不明瞭な部分が多々あるので、ここでは一括して取り上げた。これらの中には、表面が黒色化していて柿渋などの漆以外の樹脂が塗布されたと思われるものもある。

杓子形

480は杓子形木製品の完形品で、身の平面形が楕円形に近く周縁が薄くなっている、しゃもじ形をしている。柾目材が使われていて全長29.3cm身の幅6.2cm厚さ1.1cmである。

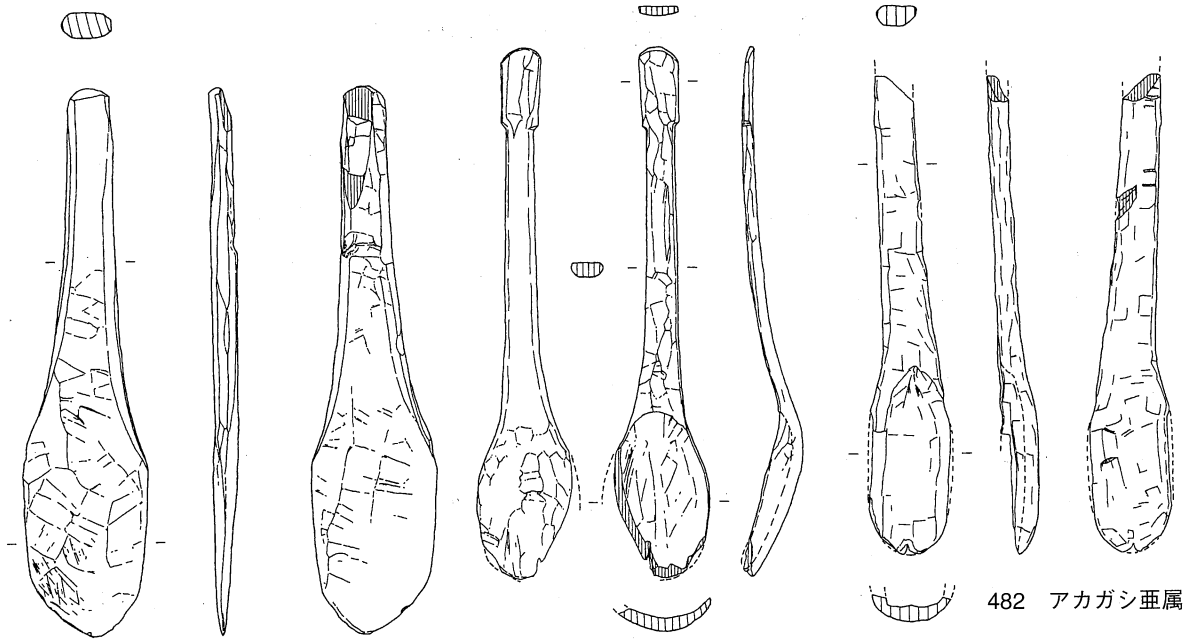
さじ

さじは身の口縁と柄の付け根が段差を持たずに直線的につながるものと、身と柄が角度を持ってつながるが柄に反りが無いもの、身と柄が角度を持ってつながり、身の先端から柄の基部までの側面観がS字状をなすものに分かれる。身の長さは3.5cmと小さなものから15cmに復元できる大きなものまでであるが、10cm前後が最も多い。樹種はカヤ・イヌガヤ・アカガシ亜属・ツバキ属・スダジイ・ヤマグワ・シキミ・サカキ・ツゲ・シャシャンボなど種類が多い。

食器具としてのさじの評価は、佐原真氏は出土数の少なさや定形化されていないことを持って、食具としての一般性を否定された。しかし、最近では石川県八日市地方遺跡や鳥取県青谷上寺地遺跡でもさじが多数発掘されていて、再評価されるべきと考える。

481は身の先端および左側部を欠いていて、残存長28.4cm身の残存長9cm幅8.8cmである。イヌガヤの柾目材を使っていて、内外面には細かな加工痕が残っている。側面はS字形で柄が身の付け根からわずかに外湾しつつのび、方形の基部を作り出している。482は柄が身の付け根から直線的にのびていて、全体に雑に削られているので未成品の可能性もある。アカガシ亜属の柾目材を使っていて残存長25.5cmである。483は身の成形を始めた段階の未成品で、細かい加工痕が顕著に残っている。心持ち材を使っていて全長24.6cm幅6.0cmである。484は身の先端と柄の基部を欠く。身は円形に近く、柄はほぼ直線的にのびる。ツバキ属の柾目材で残存長12.2cm身の幅4.9cmである。485は柄の短いさじで、長さ14.3cm身の幅5.4cmが残っている。加工痕は明瞭で、刃線痕もきれいに見える。身の内面には加工により毛羽立った部分があるので未成品である。カヤの板目材が用いられている。486は柄の先端を欠くが、身は楕円形でやや深みがあり小型の横杓子状の形をしている。内外面の加工痕が顕著で、スダジイの柾目材を使っている。残存長12.8cm身の幅5.2cmである。487は身の先端が欠損していて、残存長9cmである。身の平面形が円形ないし隅丸方形で、長さ3.5cm幅2.9cmほどの特に小さいさじである。柾目材を使っている。488は身の長さが9.8cmであるのに対し柄が6cmと柄の短いさじである。ほぼ完形で、ツバキ属の柾目材を使い、残存長15.5cmである。

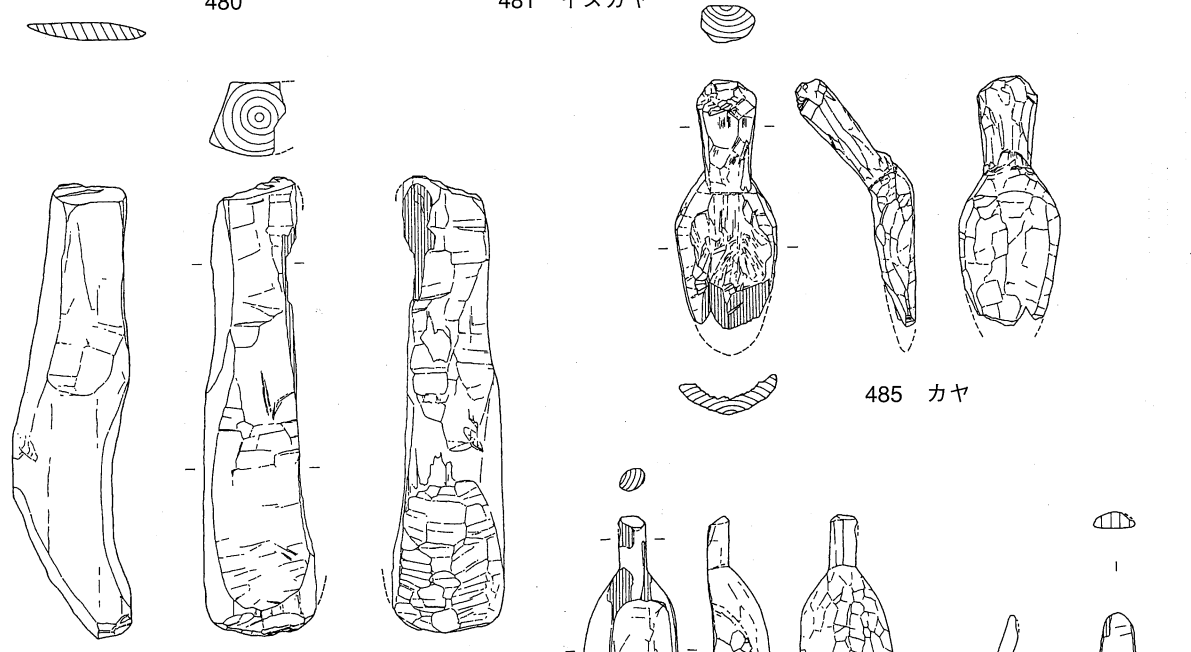
489はヤマグワ属の柾目材を使った完形品で、側面観はゆるくS字状にカーヴする。身は11.2×7.3cmの楕円形である。柄の先端を丸くして、先端から6cmの所に両側からレの字の切り込みを入れて頭部を作っている。全長31.2cm身の幅7.2cmである。490も全長28.8cm身の幅3.8cmのほぼ完形品で、柄の付け根は上部・側部とも身と段差をつけて境を強調している。柄はわずかに内湾しつつのび、少



480

481 イヌガヤ

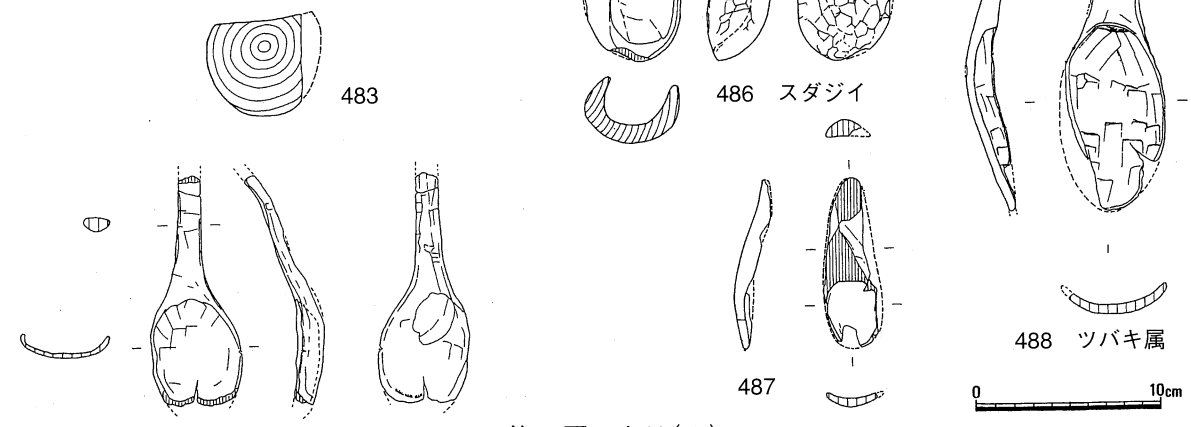
482 アカガシ亜属



483

485 カヤ

486 スダジイ



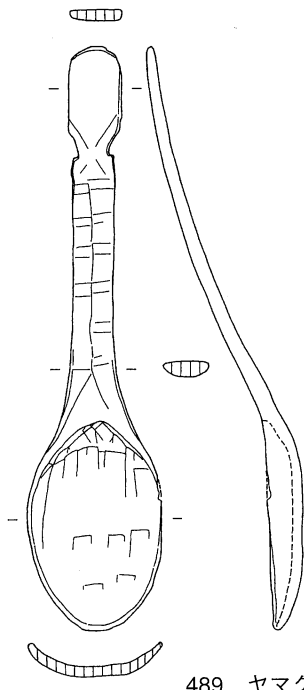
484 ツバキ属

487

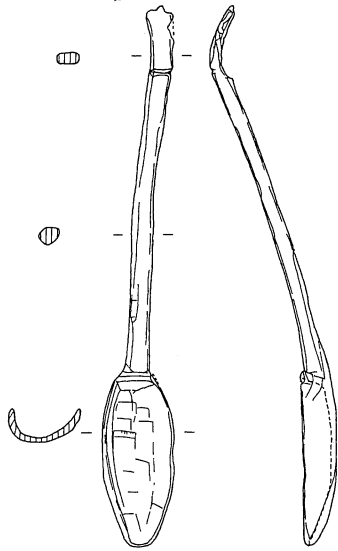
488 ツバキ属

第68図 さじ(1)

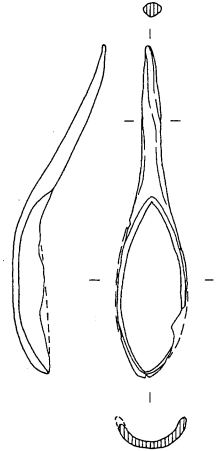




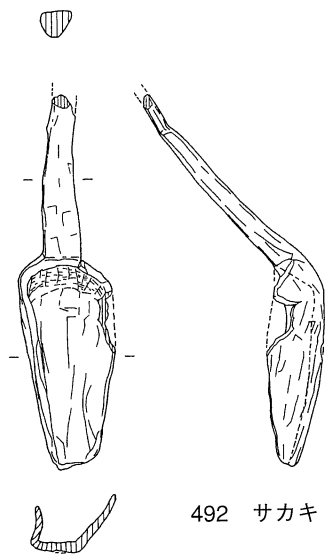
489 ヤマグワ属



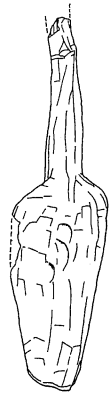
490 シキミ



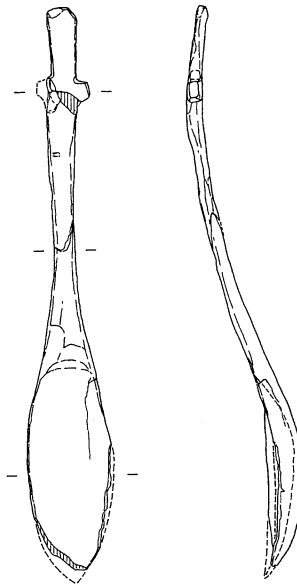
491 サカキ属



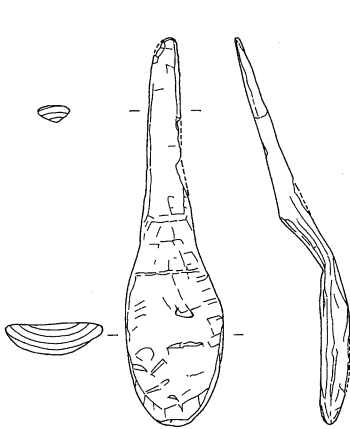
492 サカキ



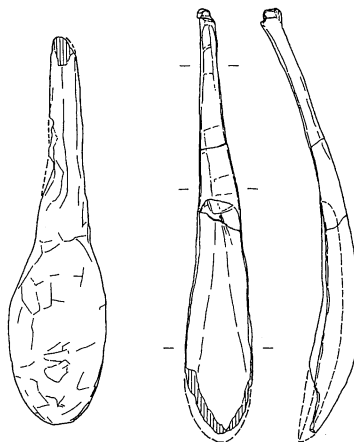
493 ヤマグワ



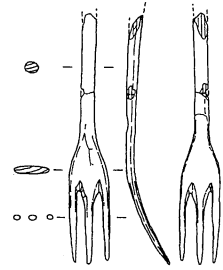
495 ツゲ



494 サカキ



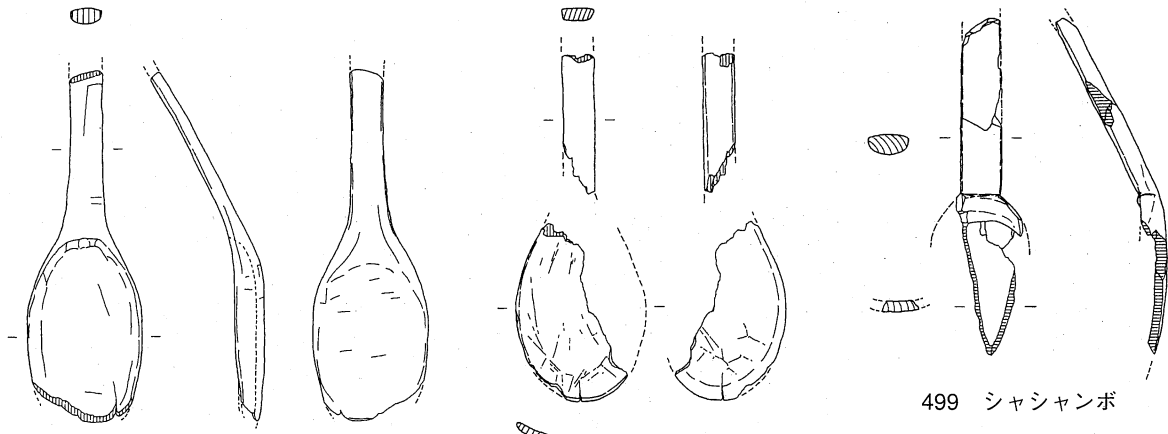
第69図 さじ(2)



496 ムラサキシキブ属



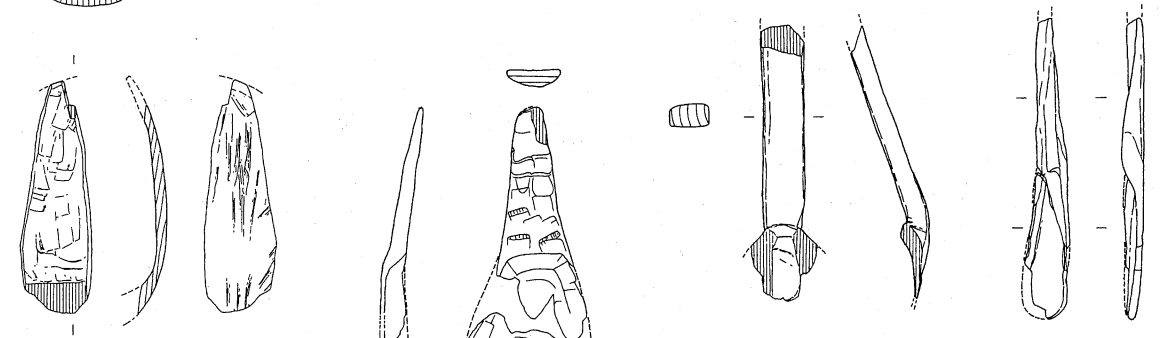
9. 食器具・容器



497 クワ属

498

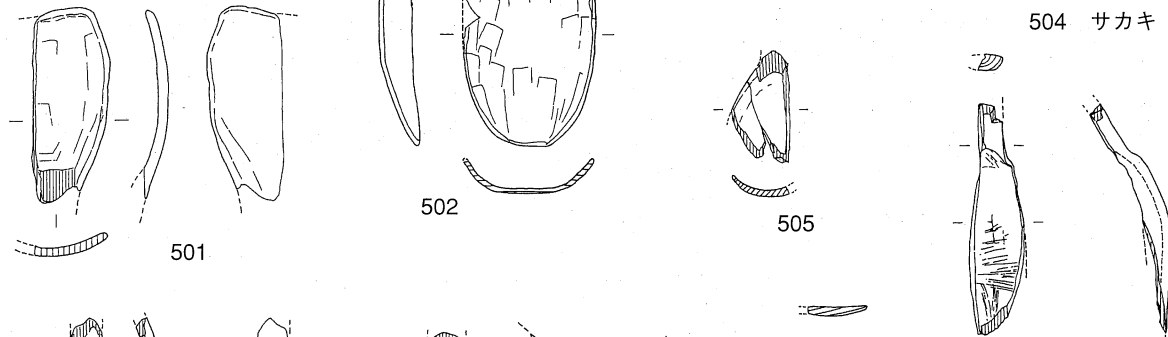
499 シャシャンボ



500 イヌガヤ

503 ケヤキ

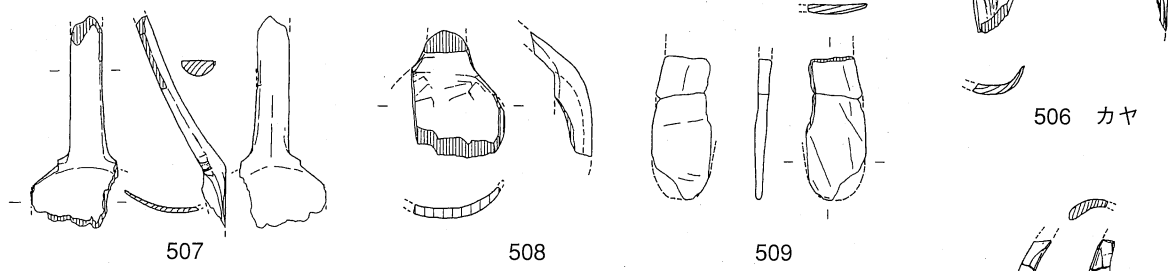
504 サカキ



501

505

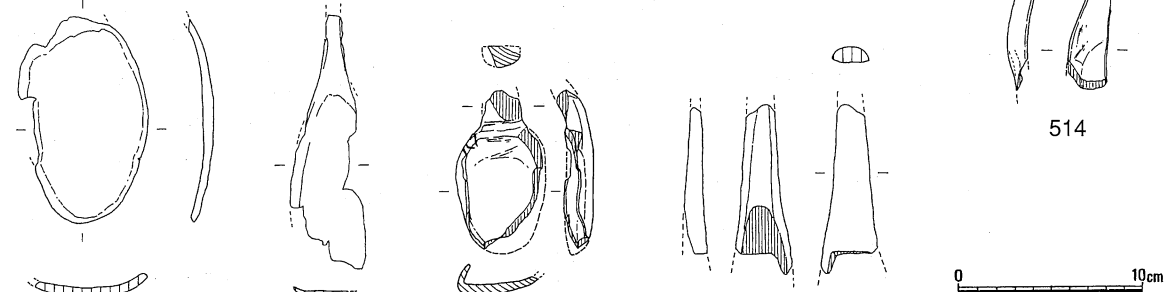
506 カヤ



507

508

509



510

511

512 シャシャンボ
第70図 さじ(3)

513

514



し扁平に削った基部は逆に外湾させている。シキミの柾目材を用いている。491もサカキ属の柾目材製のほぼ完形品である。身は平面紡錘形で、柄の先端をとがらせている。全長17.8cm身の幅3.8cmである。492は平面方形に近くやや深めの身の付け根から、ほぼ45°の角度で直線的に柄がのびている。サカキの柾目材を用いて残存長20cm身の幅5.2cmである。493は先端部をやや欠損しているが完形に近い。基部に横突起があつて、側面観はごくごく緩いS字状をなす。身は復原すると11×4.6cmの楕円形である。ヤマグワの心持ち材を使っていて残存長20cmである。494は全体の形はほぼできあがっているが、身の内部を削っていない未成品である。柄は上面が45°の角度で立ち上がったのち角をつけて立ち上がりを緩くしているが、下面ではほぼ直線的にのびている。サカキの心持ち材で、全長20.8cm身の幅5.2cmである。495は中華料理のレンゲを細くした様な形のさじで、柄の端部に突起がある。側面観はやや内湾している。ツゲの柾目材を使ったほぼ完形品で、長さ22.7cm身の幅3.6cmである。

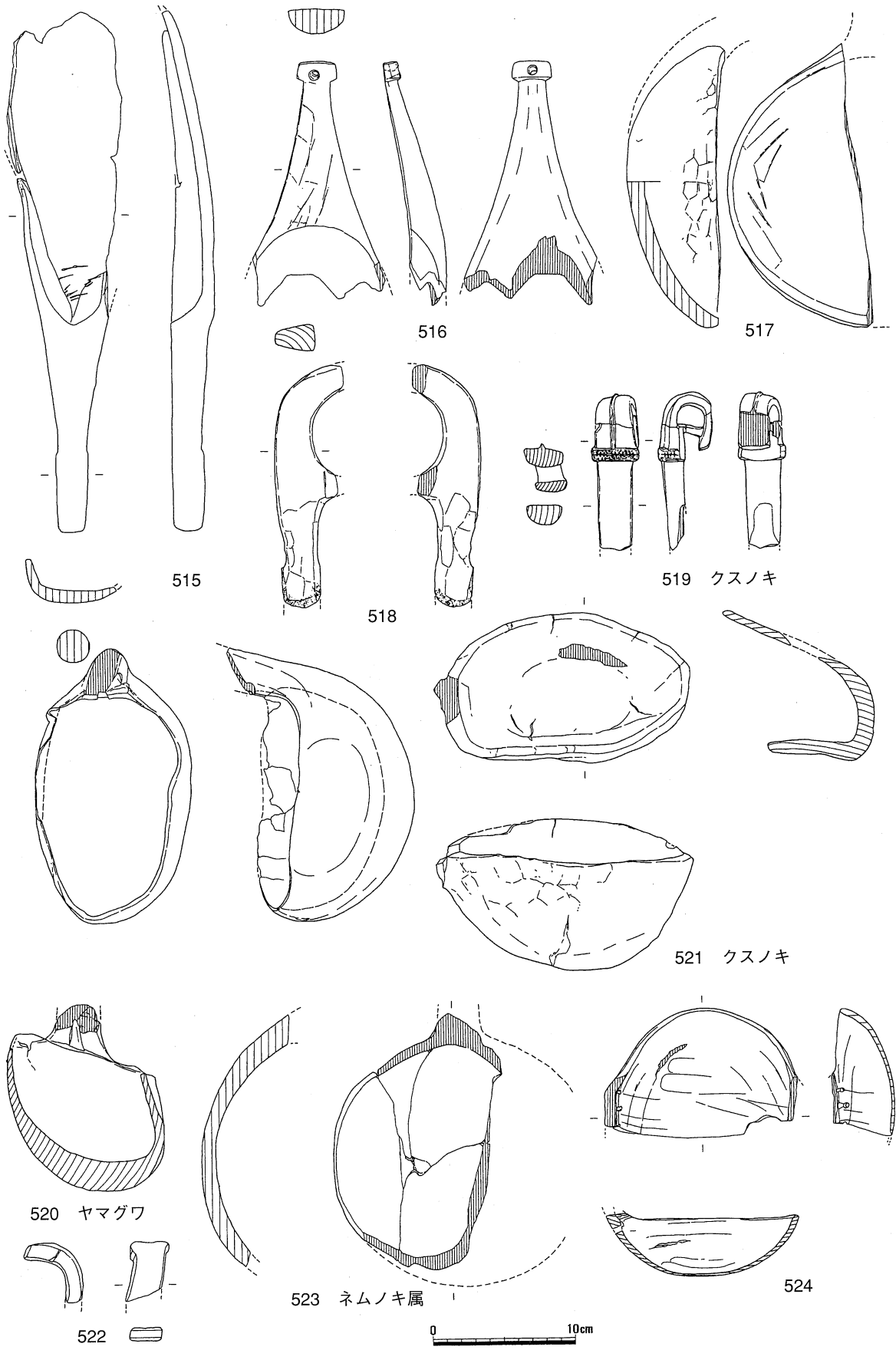
496は3本歯のフォークである。歯の先端はやや丸みを帯びながらもとがっていて、身は柄の付け根部分から先端にかけて湾曲させている。ムラサキシキブ属の柾目材を用いる。残存長13.4cm幅2.1cmである。2本歯のフォークが石川県八日市地方遺跡で報告されている⁽¹⁶⁾。これにもムラサキシキブ属が使われていて、本例と用材が共通する。

497は先端・基部を欠損しているが、全体に仕上げが丁寧なつくりで、クワ属の柾目材を使っている。498は接合しないが同一個体と思われる。499は基部および身部の大半を欠損しているが、柄の付け根部分にやや高まりがあつて柄が直線的にのびる。シャシャンボの柾目材が使われている。502は接合しないが復原すると長さ約15cmになる身の長く、柄の短いさじである。503は身の大半を欠くが、ケヤキの柾目材製のさじである。504は幅が2.5cmほどの細長い身のさじで、サカキ製である。512はカレースプーンくらいの大さきのさじで、柄は口縁部のやや下からのびている。シャシャンボの柾目材を使っている。500はイヌガヤ、504はサカキ、506はカヤを用いている。

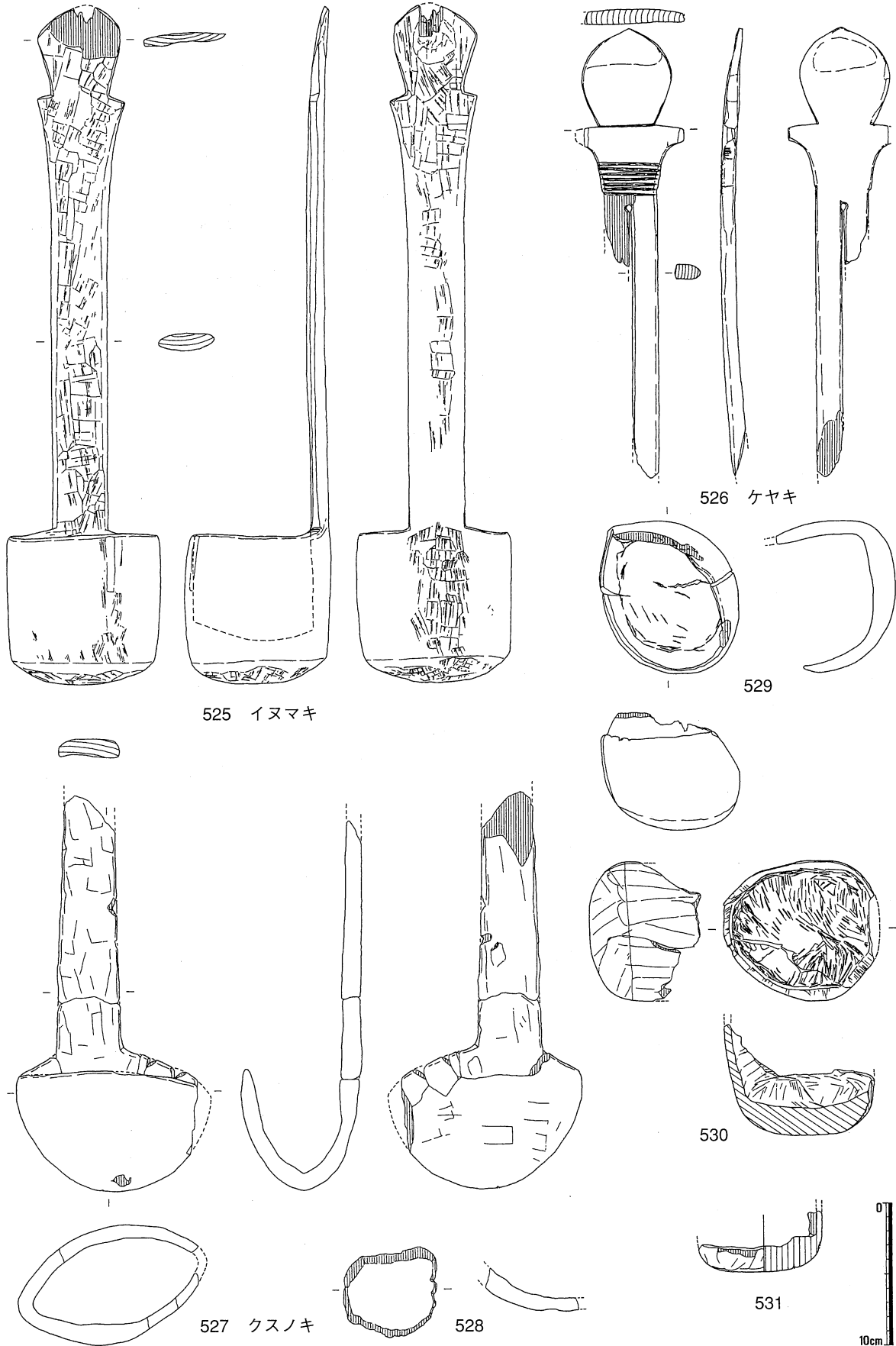
杓子

杓子には身の口縁と平行に柄が付く横杓子と、直角に付く縦杓子がある。樹種はイヌマキ・ケヤキ・ケヤキ属・ヤマグワ・クスノキ・アカガシ亜属・ネムノキ属などが用いられている。柄は通直なものや湾曲するものと両者がある。横杓子の身の形状は楕円形と円形とがあるが、総じて浅いものが多い。椀は小形で平面円形の縦杓子の身とは破片では区別が付かないので、ここで一括して取り上げた。

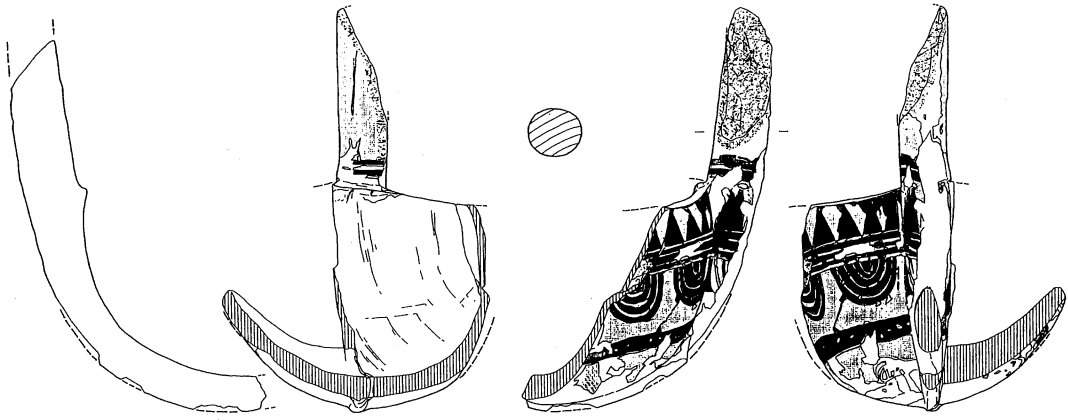
515～517・523・524は横杓子で、518・519・522は横杓子の柄とみられる。515は細長い横杓子で、さじに形態が似るが身の残存長21.5cmと長いので横杓子に収めた。柄の端部から5.5cmのところわずかに段を設けて基部を作る。柾目材を使っていて残存長は36.3cmである。516は身の大半を欠くが楕円形の身が付くと思われる。柄の端部には横長方形の基部を作り中央に円孔をあけている。517は円形で浅めの身の半分ほどの破片で、やや湾曲する柄が付くとみられる。残存長19.7cmである。518は横杓子の柄で、環状の基部は半分折れている。519もクスノキの柾目材製の横杓子の柄で、頭部の側面観は頂点の丸いA字形をしていて、外面に1条の節帯を持つ。基部と断面半円形の握部との境に幅9mmの隆起帯を作り、上面・両側面中央の沈線および沈線の上下と隆起帯両端に線状の刻みを施す。522は環状に湾曲した横杓子の柄の基部の破片で、先端側部にわずかに突起を持つ。523は身の半分ほどの破片で柄の付け根から折れている。ネムノキ属を使っている。524は厚さ2～



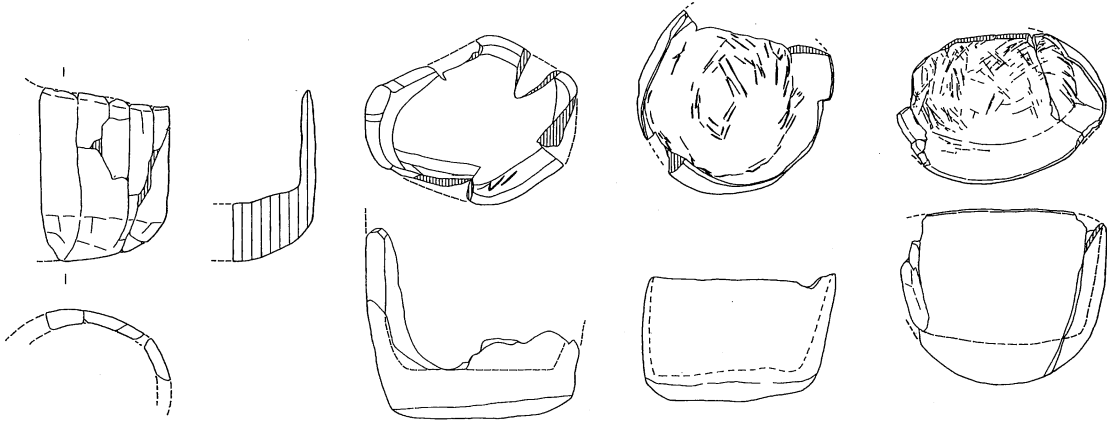
第71図 杓子(1)



第72図 杓子(2)



532 ケヤキ属

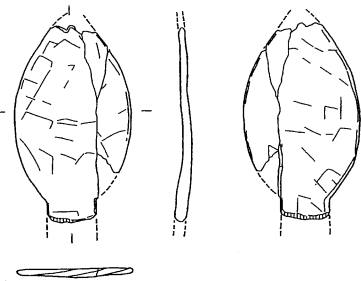


533

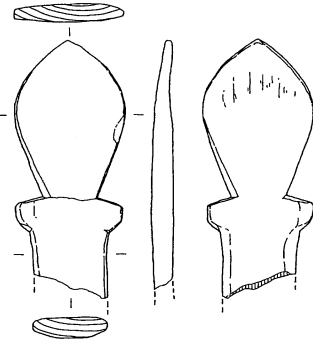
534

535

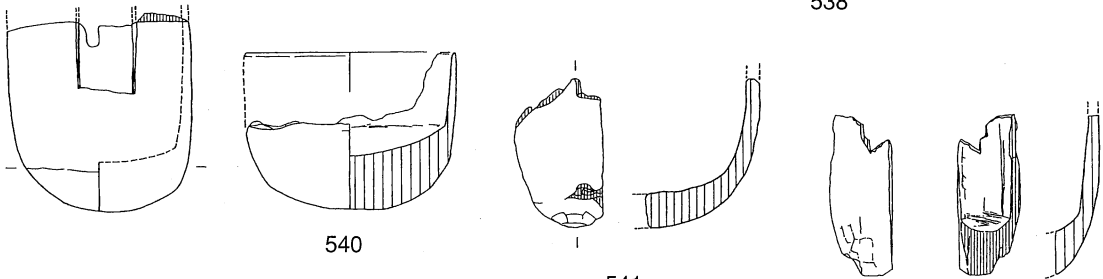
536



537



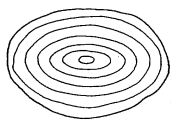
538



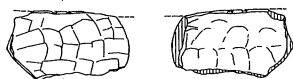
540

541

543



539



542 アカガシ皿属



544



第73図 杓子(3)

3mmのごく薄い横杓子の身で、後補か否かは不明であるが、柄を緊縛するために小孔を3つ設けている。

520・521・525～544は縦杓子である。底部は丸底と平底がある。520・521・532は湾曲する柄を持つとみられる。520はやや横に押しつぶされているが、身は平面楕円形で深さがあり丸底の縦杓子で、柄の上面には溝が切り込んである。ヤマグワ製である。521は520と同様に身はやや横に押しつぶされているが、平面楕円形で丸底の縦杓子でクスノキ製である。525は人形状を呈する基部を持ったほぼ完形の縦杓子である。底部は平底である。身の内面は加工痕が粗く残った未成品で、小さな傷が背面に達して穴があいているため失敗品と見られる。加工痕が顕著に残っていて、刃こぼれ痕も観察できる。イヌマキの心持ち材を使い全長47.3cm身の直径10.9cm高さ10.5cmである。526は525と同様に人形のような形をした縦杓子柄で、頭部背面にくぼみ状の痛みがある。花卉状の頭部の下に肩を作り、胸に当たる部分に7条の沈線を刻んでいる。最下段の沈線の下7mmに径5mmの円孔をあけ、そこから下にスリットが入る。ケヤキ製の精巧品である。527は柄の基部を欠損し身は土圧により変形している。クスノキ製の丸底の縦杓子で、残存長27.85cm身の高さ8.5cmである。529～531は平底で、529は柄を根元から欠損している。530は縦杓子の身あるいは椀で、底部内面に上から当てた加工痕がよく残っている。

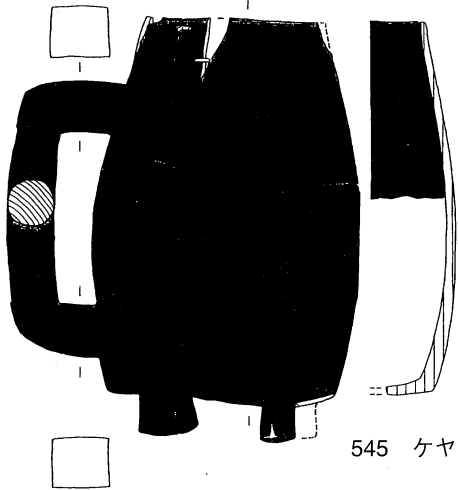
532は赤彩紋を施した縦杓子である。黒漆地に赤漆で鋸歯紋・直線紋・重弧紋・列点紋などを反転させて描いているので、赤漆地に黒漆で施紋しているように見える。柄の付け根は丸底の身の底部まで細くつながっている。柄にも直線紋が施紋されているが大半は焼損している。ケヤキ属の柾目材を使って残存長21.6cmである。537・538は525や526と同様の人形状をした縦杓子柄の基部である。534～536・539～544は縦杓子の身または平底の椀の破片で、536・539は内底面は平たくしているが外面は丸い。いずれもおよそ直径11cm高さ10cmで、542はアカガシ亜属製である。

ジョッキ

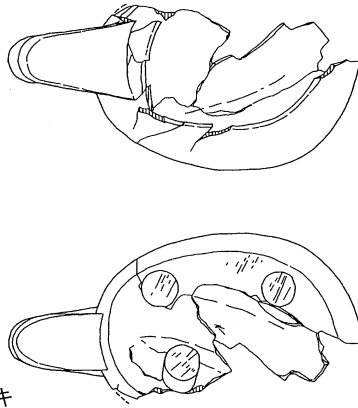
体部の側面に把手の付くジョッキには、円柱ないし方柱状の脚を4つ持つものが多い。樹種はケヤキ・クワ属・サクラ属が使われている。

545はケヤキを使った精巧品である。高さ22.6cmで平面がやや楕円形の身は、底部からやや上で最大径となり口縁ですばまっている。外面及び内面上半には黒漆が塗られていて、口縁部に樹皮による補修がある。把手は大振りに作っている。把手の基部は断面方形で、長さが5.5cmあって側部への出も大きい。握部は断面円形で持ち手にあわせてわずかに湾曲させている。また、握部と基部の境は明瞭に区別されている。体部の曲面は把手の位置にあってもいささかも狂うことがなく、20cmもの深さに刳り込んだ上に器壁を3～5mmに仕上げている、しかも厚みが波打つことなどない。一見した限りでは把手を組み合わせて作っているかのように見えるが、一木づくりである。底部には四脚が付く。

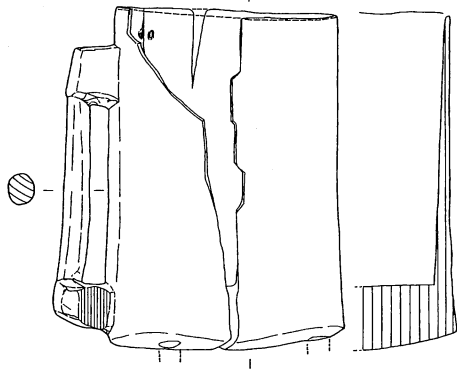
546は四脚を欠損しているが、直径のやや小さめの脚がつく。把手もやや華奢で、基部と握部の境はつけているものの、握部が直線的で側部への出も3cmで少ない。底部は3.5cmほどの厚みを残す。口縁部下に補修孔が1対ある。545に比べると全体に作りが粗い。クワ属の材を使っている。547は口縁部の破片で、把手の上半が残存している。把手は基部と握部の境を作っておらず、握部は直線的である。作りは546よりも丁寧である。548は把手の破片で、基部側面に綾杉紋を刻む。基部との境を明瞭につけた握部は断面円形で、持ち手にあわせてわずかに湾曲させている。クワ属の材を使



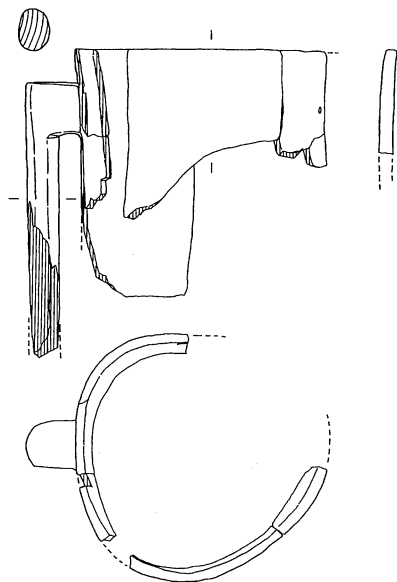
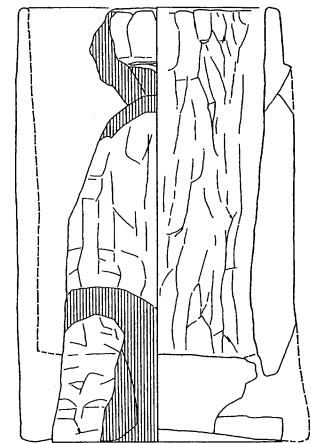
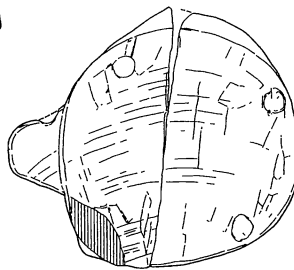
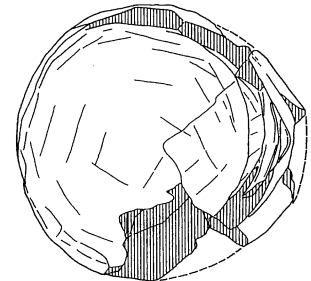
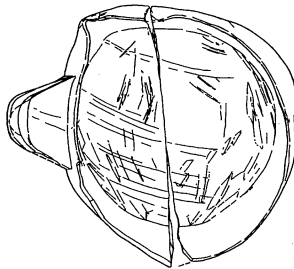
545 ケヤキ



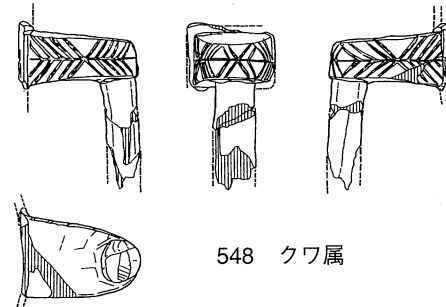
549



546 クワ属



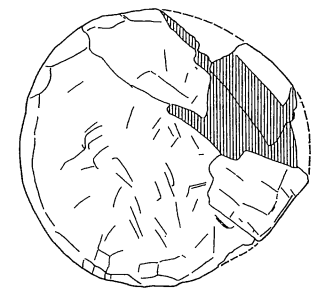
547



548 クワ属

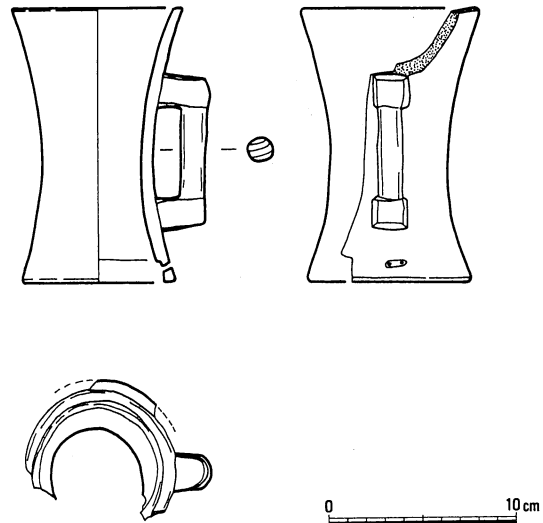
0 10 cm

第74図 ジョッキ(1)



550

っている。549は縦割れした体部の破片で、外面および内面上半に黒漆がぬられている。550は脚の付かないジョッキで、把手を欠損している。体部内面には縦方向の加工痕が粗く残っている。直径15.6cm高さ23.3cmである。554はジョッキの体部の破片で、表面は丁寧に仕上げられている。サクラ属の柾目材が使われている。555はクワ属のジョッキで四脚が付く。把手は基部の付け根から欠損している。作りはやや粗い。556はジョッキかコップの破片だが、厚みを持たない平底の底部からするとジョッキの可能性が高い。558は直径14cmのジョッキ底部の破片で、やや扁平な四脚を持つと見られる。把手の基部と見られる隆起部がある。



第75図 八日市地方遺跡のジョッキ

第75図は八日市地方遺跡から出土したジョッキで、高さが14.5cm口径は8.9cmある。体部中央で細くなる鼓形をしていて、北陸から山陰地方で多用される組合せ式の底板が付く。外形や底板の組合せ・脚の有無などの違いはあるが、把手の作り方に南方(済生会)遺跡出土ジョッキと共通点が見られる。器壁が均等な厚さを持っている点や外面の曲線が把手の付け根部分でも変化がない点は、高い製作技術が駆使された精巧品といえよう。

異形杓子

557は身の一方に真上に延びる柄がつく脚付の杓子形の容器であるが、柄の先端が失われていて柄の全形が不明であることや脚付であることから、杓子とは別の用途であると考え、用途に即した器種名も提示できないので、異形杓子と仮称しておく。ツバキ属の心持ち材製で、残存長20.4cmである。底部には作り出しの脚が3つ付くが1つは欠失する。底部内面には、刃物を上から当てた加工痕跡が残る。

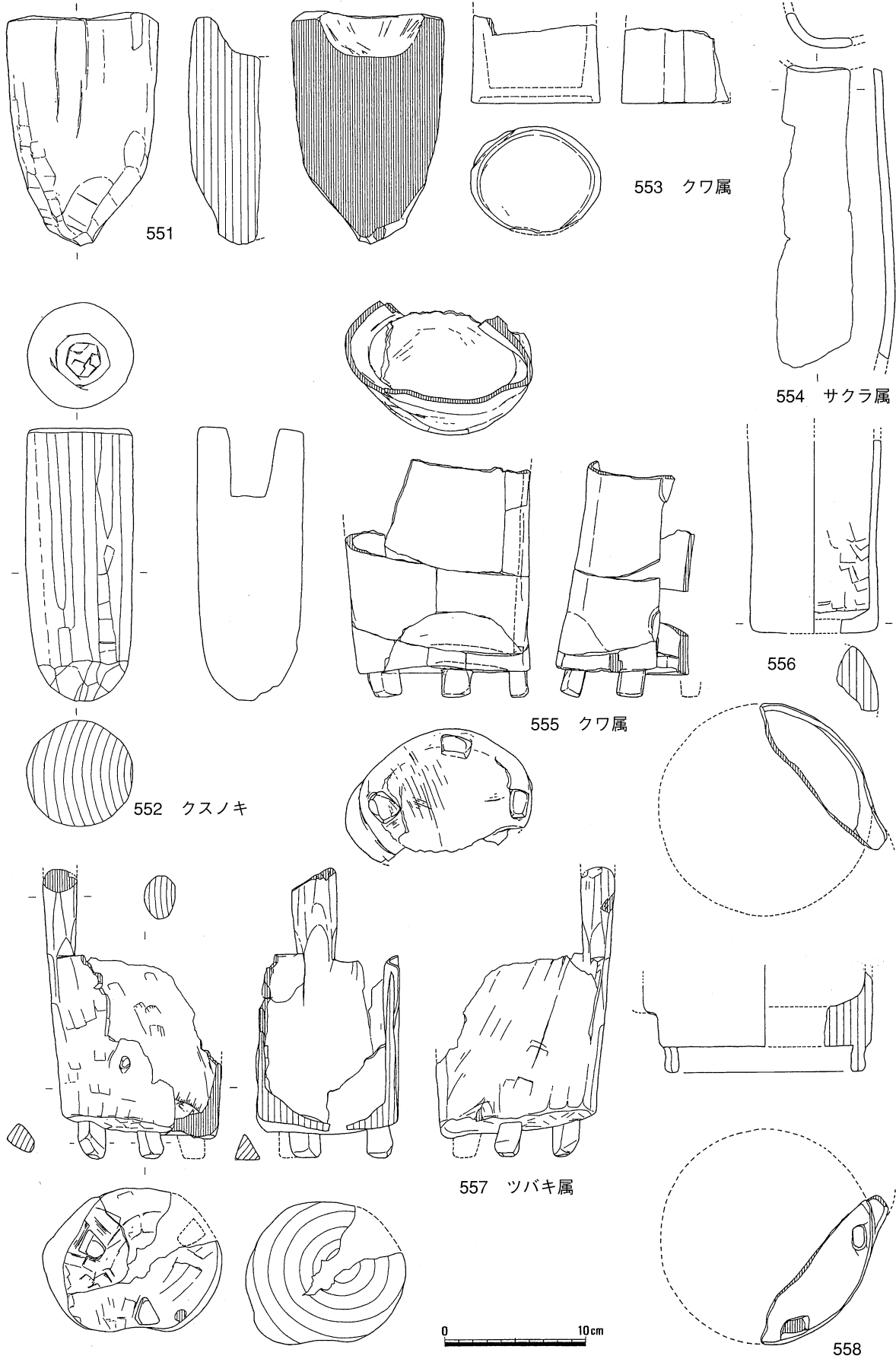
コップ

コップは未成品も含めて6点出土していて、口径7~11cmで高さ14~20cmある。丸底のものが多く、563のように小さな円形の底部を持つものもある。樹種はイチイ・イヌガヤ・クスノキ・クワ属を用いている。

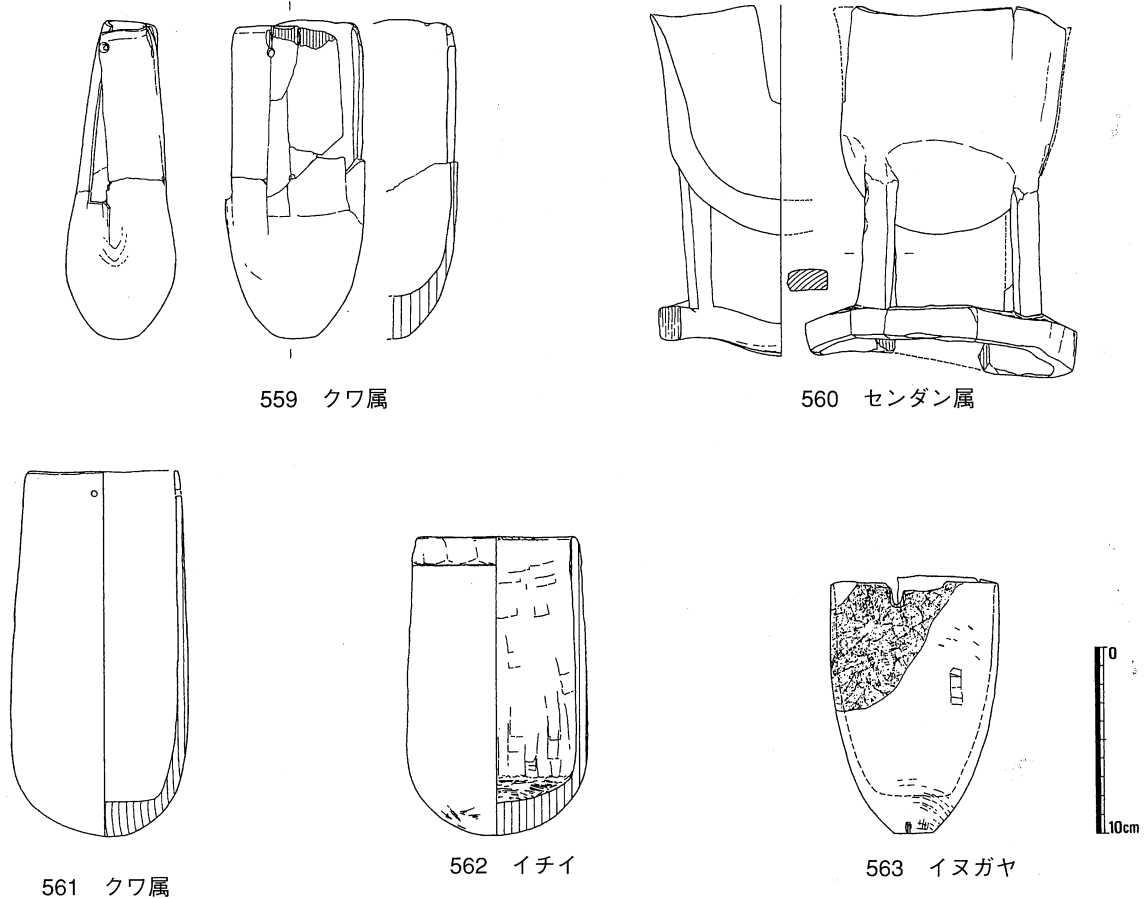
551は縦割れしたコップの未成品で、底部は尖底に削り始めていて、内削りも3cmほど行っている。口径10.8cm高さ16.5cmである。仕上がりは563のような形であろう。552も丸底のコップの未成品で、上部から5cmほど内削りを始めている。クスノキの柾目材で、口径7.5cm高さ19.3cmである。仕上がりは559や561のような丸底で直立するコップになったであろう。553は上面観は楕円形で、長径端は面取りし底面は高台状を呈する。コップと言うよりは小形の合子の可能性もある。クワ属を用いて底部幅9.1cmである。

559は土圧により変形しているが、ほぼ完形品である。丸底で体部の直立する削りの深いコップで、口縁部には補修孔がある。クワ属製で、高さ17cm口径7.5cmである。561も丸底で体部の直立した削りが深いコップで、口径はやや狭くなり8cm、深さは17.6cmで口縁部に補修孔がある。胴部の厚さは中

9. 食器具・容器



第76図 ジョッキ(2)・コップほか(1)



第77図 コップほか(2)

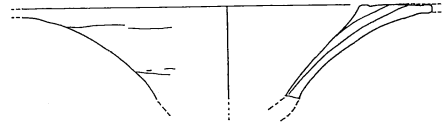
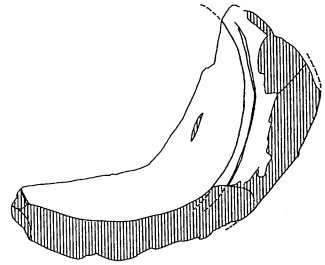
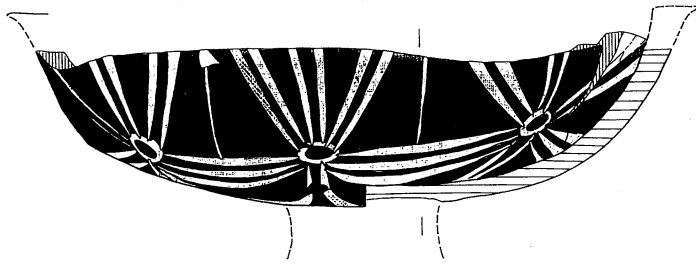
央で5mm。クワ属製で、高さ19.5cmである。562は口縁部下1.3cmに段をもたせて肥厚させ、口縁端部をせばめる。内底面は未調整で、ガザガザと毛羽だったままの状態である。イチイの心持ち材を使い、高さ16cm復原口径8.5cmである。563はほぼ完形のコップで、底部は直径2cmの円形である。土圧による変形を受け、一部に炭化がみられる。イヌガヤ製で高さ13.8cm口径9cmである。

560は脚付カップ形容器である。高さに対し口径の小さいコップとは異なるが、ここで報告する。体部は口径と高さがほぼ等しいカップ形をしていて、環状の脚台に4本の棧がついて丸底の体部とつながる。センダン属を使った一木づくりで、高さ19.9cmである。

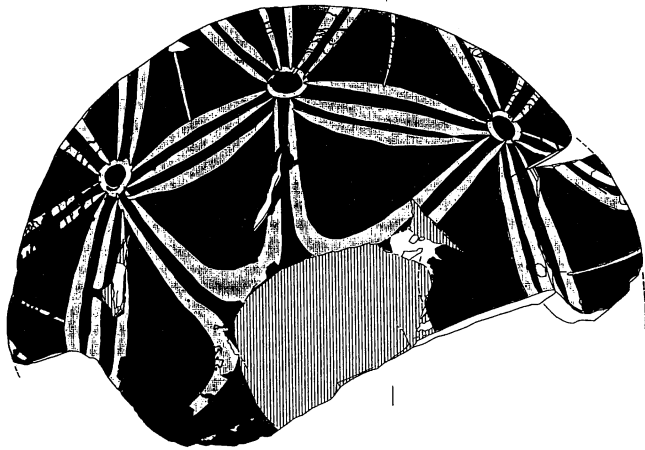
高杯

高杯は口径30cmを越える大形高杯とそれ以下の小形高杯に分かれ、大形高杯には赤彩紋を施したものがある。小形高杯の中にも杯部と脚部を別材で作る組合せ式高杯がある。樹種はケヤキ・クワ属・サクラ属が用いられている。

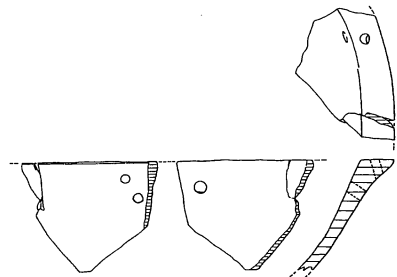
564は大形の赤彩紋高杯で、軸部を根元から欠損しているが組合せ式と思われる。黒漆地に赤漆紋様を施している。赤漆紋様は杯部中央に小円を8つ均等に配置し、各円から軸部方向にU字形に線を引き隣の円と結ぶ。水平方向には3本の線で隣の円と結ぶが、上下の線はそれぞれやや弧状になっている。口縁方向には2本1単位として真上・右上・左上に伸び、また水平線の中央からも他に比べ細い線が1本真上に引かれている。各線は始点と終点がそれぞれ細く中程が広くかかっている。口縁部を欠くが、口縁はわずかに肥厚するものとみられる。ケヤキの横木取りである。565は破片で



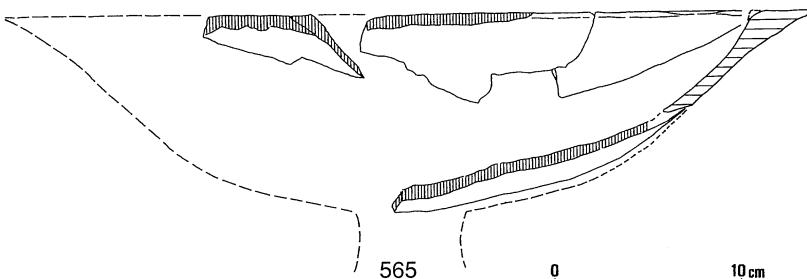
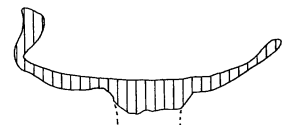
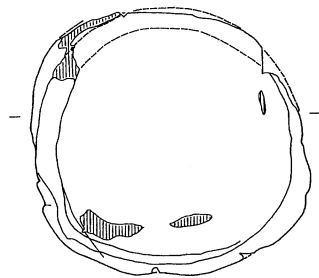
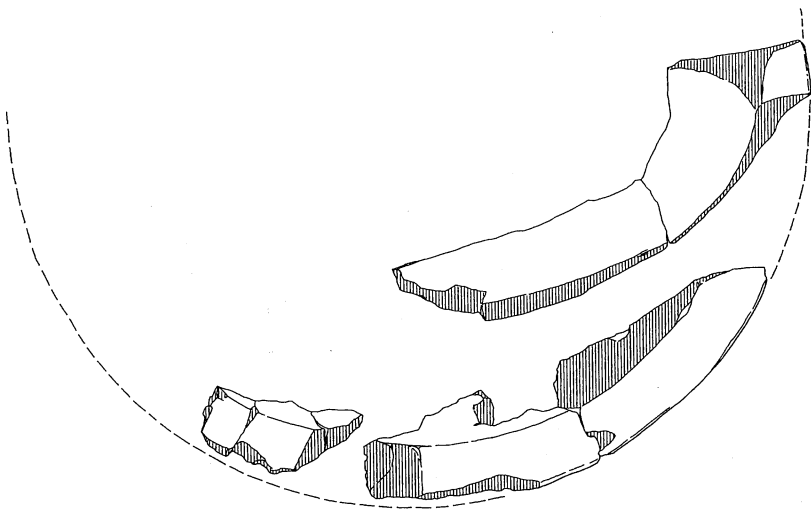
566



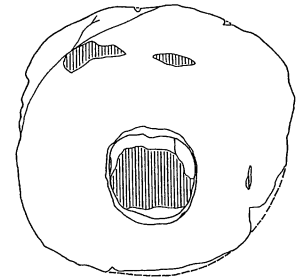
564 ケヤキ



567



565

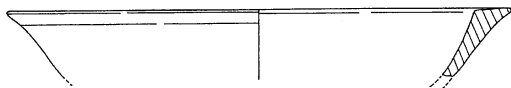


568

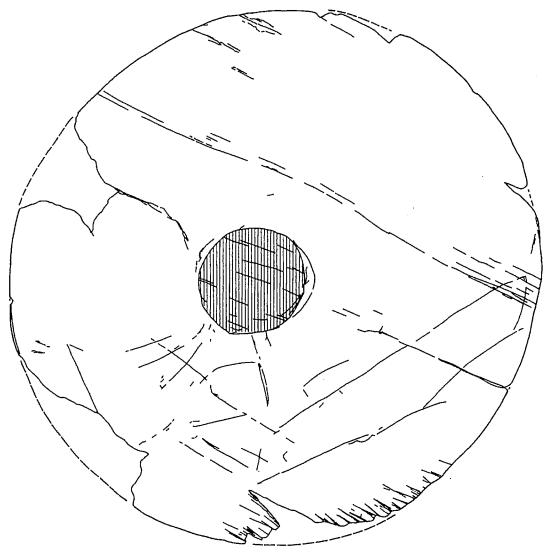
第78図 高杯(1)



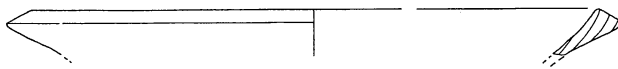
569 クワ属



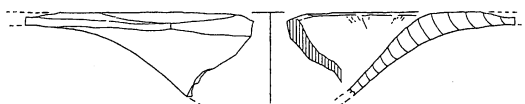
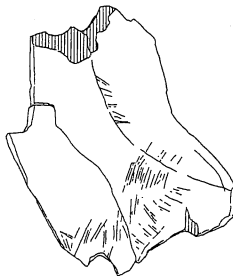
570 ケヤキ



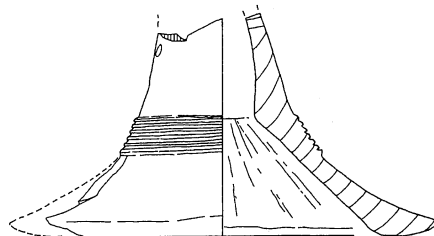
571 サクラ属



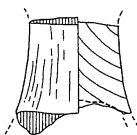
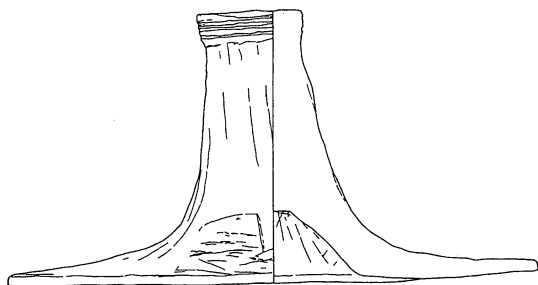
572



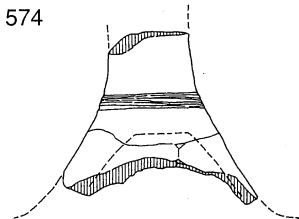
573



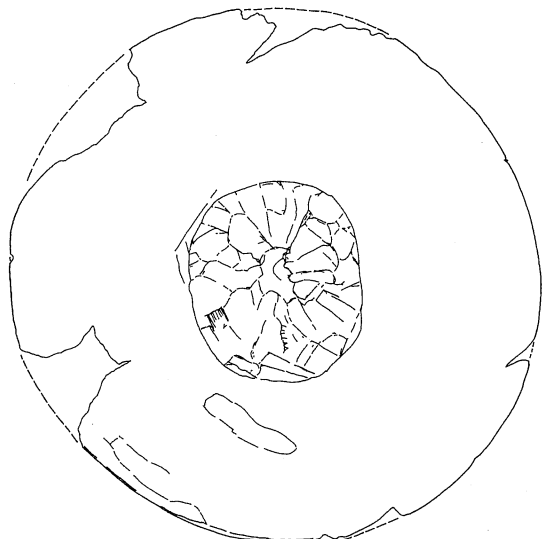
574



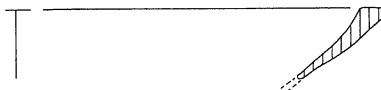
575



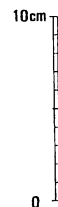
576



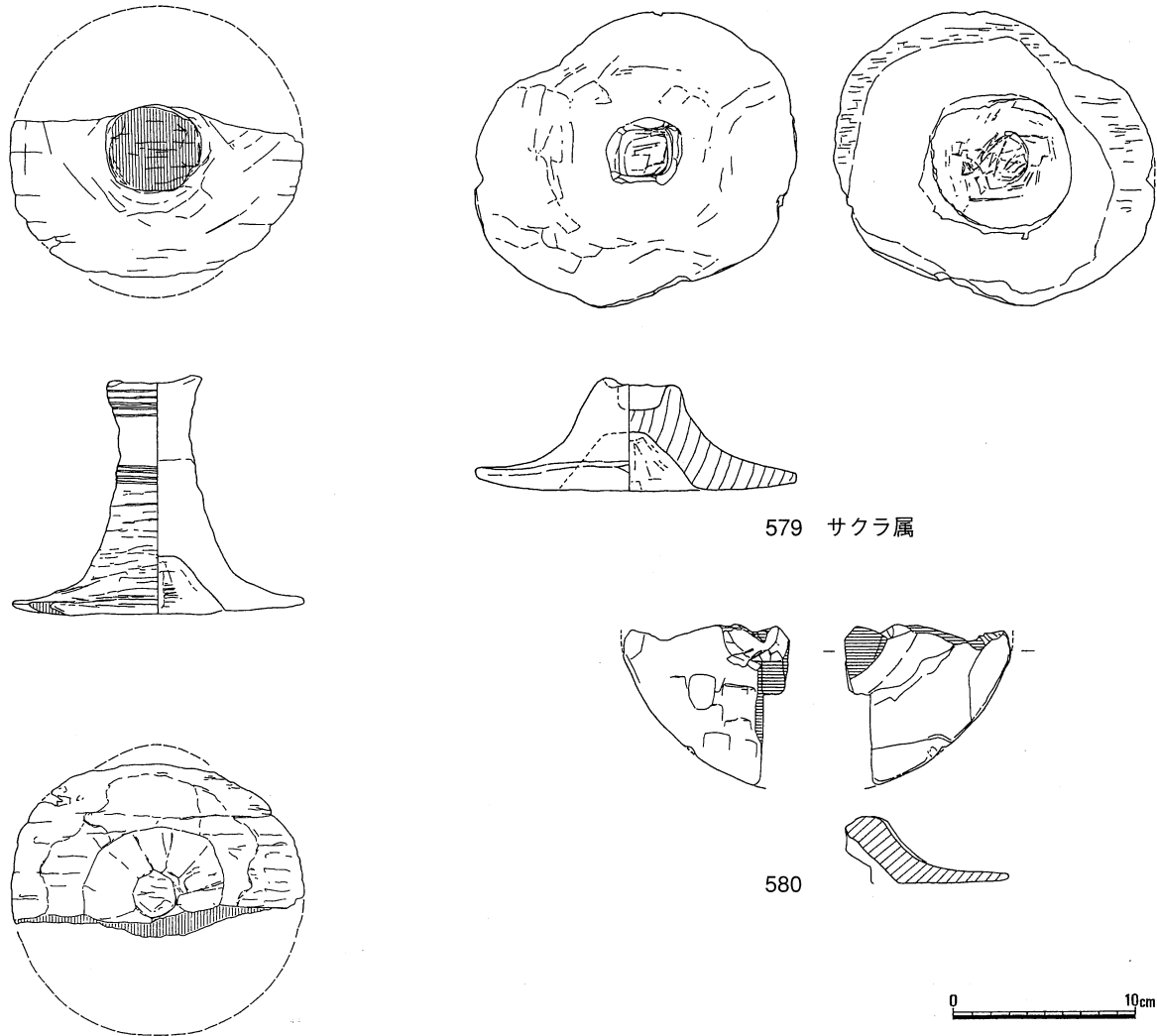
571 サクラ属



577



第79図 高杯(2)



578 クワ属

579 サクラ属

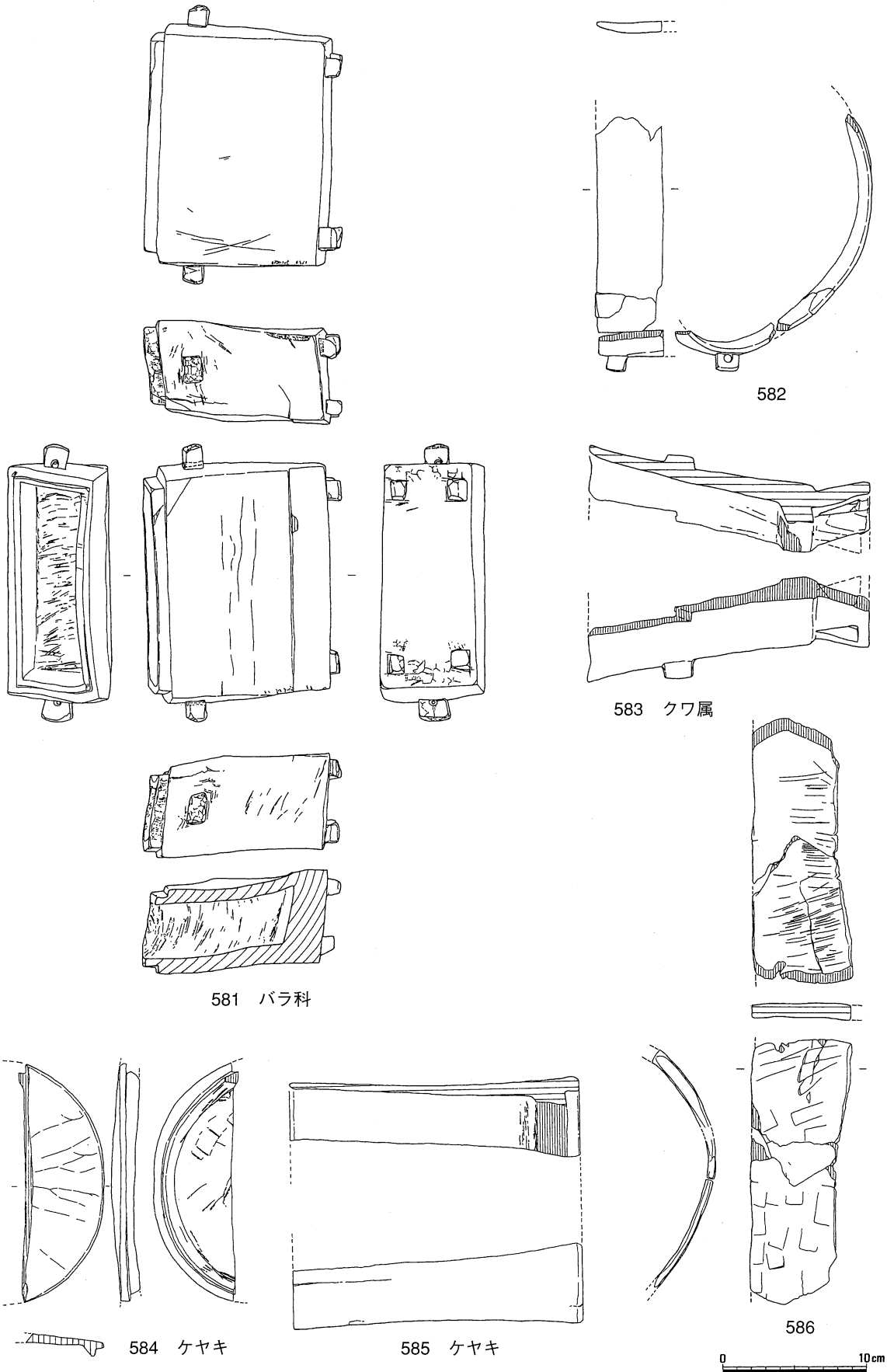
580

第80図 高杯(3)

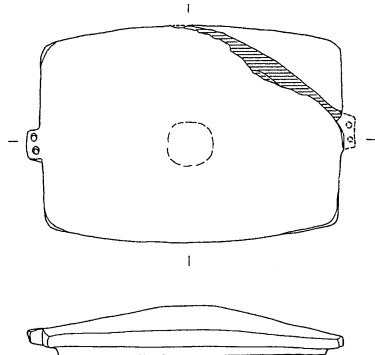
あるが復原口径43cmになる大形高杯である。口縁部は水平にやや肥厚している。566・573は広い水平口縁を持つ小形高杯である。566は水平口縁と杯部上端との境にはわずかに段があるが、573には段がない。

567・569・570・572・577はあまり肥厚しない口縁部の破片である。567には蓋綴じ孔と補修孔がある。569はクワ属製、570はケヤキ製である。568は土圧により変形しているが、小形高杯の杯部が軸上部で折損している、口縁部はわずかに肥厚している。577は復原口径40cmの大形高杯の口縁部の破片で、全体に丁寧な加工をしている。

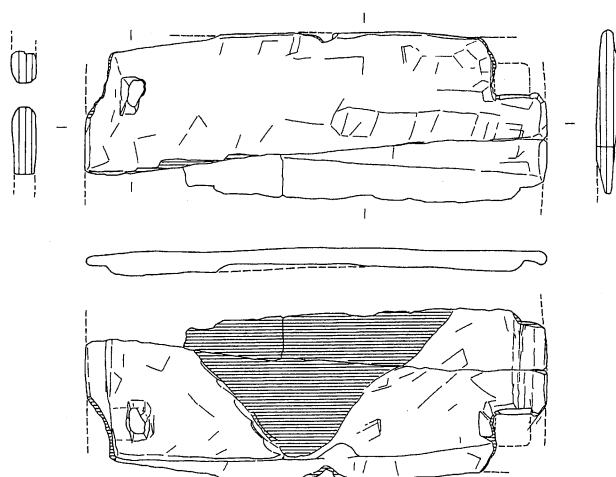
571・574～576・578～580は脚部の破片である。571は径が28.5cmの大形高杯の脚部で、軸部の残存上端には沈線3条が彫られている。脚部内面は9.5×10.5cmの隅丸方形で深さ4cmに削っていて、粗い加工痕が残っている。サクラ属材を用いている。現状で高さが14.5cmあるので、二材の組合せ式と見られる。574は組合せ式の高杯脚部の破片で、残存部分はすべて内削りがされている。軸部上端は欠くが対面する1対の円孔がある。軸部から脚部へ裾広がりになる変換点に6条の低く細い削り出し突帯を持つ。脚部復原径は23cmである。575・576は軸部の破片で、576には沈線が3条ある。578は脚部径15.85cmで、軸部には4条の沈線が2段ある。クワ属製である。579は三材を組合せる高



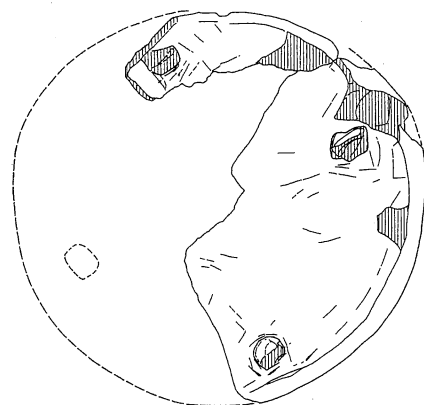
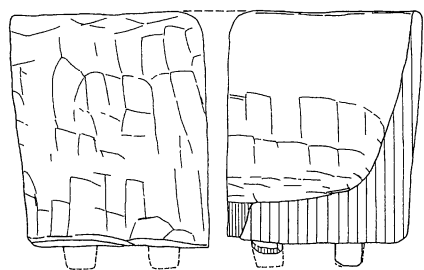
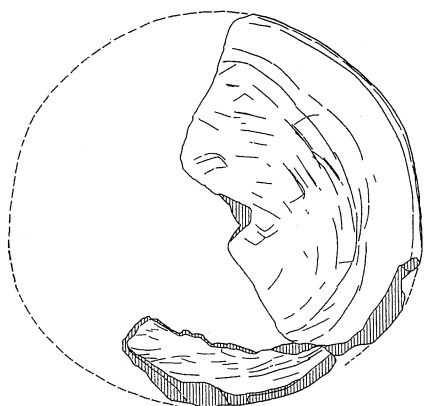
第81図 合子(1)



587 センダン



589



588

杯の脚部で、上端に方形のほぞ孔がある。サクラ属製で脚部径17.5cmである。580は脚部1/4の破片で、復原径は21cmである。

合子

合子には平面形が四角形・円形ないし楕円形のものがある。脚の付くものと付かないものの双方がある。樹種はケヤキ・クワ属・バラ科・センダンなどが用いられている。

581は四脚のつく四角い合子で、短辺上部には円孔を持つ方形の耳が付く。口縁部には蓋受けがあって、印籠蓋が付くと見られる。内面は底部まできっちりと角付けがされていて、内底面には加工痕が顕著に残っている。バラ科の材をつかっていて、幅19.2cm長さ6cm高さ12cmである。

第82図 合子(2)

582は円形の合子の口縁部の破片で、直径5mmの穴をあけた1.3×1.5cmの方形の耳を持つ。583の体部は底部から口縁部に向けて直線的に開く。底部から小さな段をもうけてやや下に開く脚台部には三角形の透かし孔を持つ。体部中央やや上に方形突起

が付く。クワ属製で高さ19.4cmである。585は全周の1/8程度が残存している精巧品で、厳密には円形か楕円形かは不明である。体部は中程でやや細くなっていて、高さ1cmの脚を作りつけている。ケヤキ製で高さ20cmである。586は円形合子の口縁部の破片で補修孔がある。588は底部の1/2を欠損しているが、1.5cm四方の小さな脚が3つ残存しており、四脚であったと見られる。胴部内外面や脚周囲には加工痕が顕著に残っている。直径21.4cm高さ13.5cmである。

584・587・589は合子の蓋である。584は円形ないし楕円形の蓋の1/3程度の破片である。加工痕が顕著に残っていて、特に外面は加工による凹凸が見られるので未成品の可能性もある。ケヤキ製で、残存幅16.3cm高さ2cmである。587は甲盛りのある方形合子の蓋で、長辺はやや外湾する。短辺中央に円孔を2つ持つ紐孔突起がつく。センダン製で、丁寧に仕上げられている。全長17.3cm幅10.8cmである。589は長軸に沿った1/2の破片で、4隅に方形孔を持つ。内面に1~1.5cm幅の段を持たせている。板目材を使い全長24.7cmである。

深形容器

深形容器には尖底容器・鉢形容器などがあるが、尖底容器以外は全形が不明のため深形容器として一括してここに収めた。

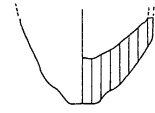
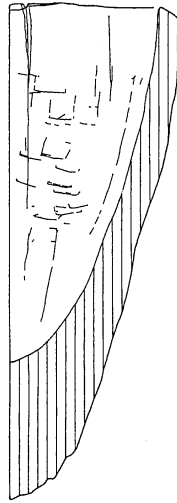
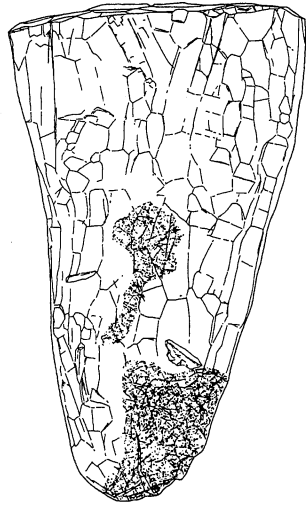
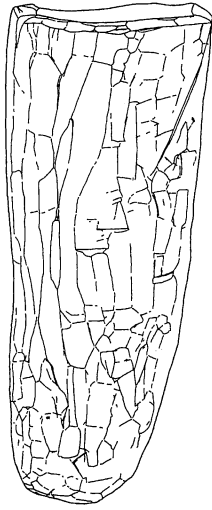
590は尖底気味の丸底の深形容器の未成品で、内削りの途中である。底部は内面まで焼けて炭化しており、外面には加工痕が顕著に残っている。モミ属の心持ち材を使っていて、口径15.8cm高さ26.8cmである。591は尖底容器の底部の破片である。コップの底部の可能性もあるが、ほかのコップに比べて加工が粗いので尖底容器とした。残存幅7.2cm高さ4.6cmである。592は平面隅丸方形の深形容器の上部1/4の破片である。593は波状口縁の鉢形ないし深い皿形である。594は深い鉢形で楕円形を呈し、クスノキ製である。595も平面楕円形ないし隅丸方形深い鉢形である。596は底部を欠損するが尖底の深い鉢形とみられる。復原口径は27.4cmで、全周の1/3が残る。602は深さ7.8cmの円形ないし楕円形の鉢形容器で、こぶのような部分を利用しているようにみえる。

皿

皿には平面形が円形・楕円形・方形・隅丸方形などがあって、高台や脚がつくものと付かないものがある。平面形や深さでは区別しにくい盤・槽もここで一括して紹介する。大きさでは直径ないし長辺が15~50cm以上まであって20cm~35cmが最も多く、たとえば、個別の皿から宴会用の大皿まで各種がそろっている。樹種はサカキ・ケヤキ・アカガシ亜属・クスノキ・ハルニレなどが使われている。

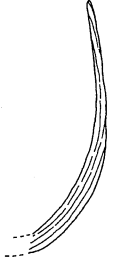
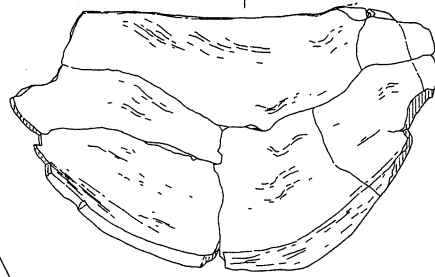
597は二方向に脚を持つ皿未成品の失敗品と見られる。脚付き皿の失敗品とするならば、一方の脚の付け根を取り払っているのも、脚のない皿に転用をしようとしているかもしれない。598は楕円形の浅い皿で、残存長14.1cm幅11.4cmである。599は復原口径約20cm高さ6.8cmの円形のやや深い皿で、外面の焼損が著しい。600も円形の皿で径6cmほどの底部をわずかに作り出している。601はごく低い円形の高台を持つ皿である。

603・604は四脚の付く楕円形ないし隅丸方形の小形の皿で、603はサカキを用いて復原長16cm幅12cm高さ3.5cm、604は復原長18.5cm幅12cm高さ2.4cmである。605・610は長辺にそって細長い脚を2つ持つ皿である。605は縦割れした1/2程度の破片で、全長14.2cm高さ4cm、610は長さ14cm幅1.2cm程度の脚が付く楕円形のケヤキ製の皿で、全長30.5cm高さ7.8cmである。606は長方形の四脚を持つ皿の小片。607はサカキの板目材を使った上に開く角形の皿で、全長23.5cm復原幅11cm高さ3.8cm

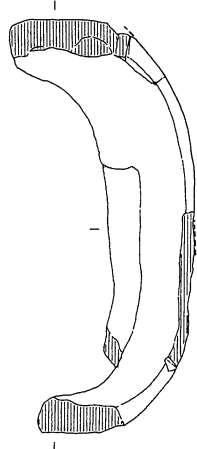
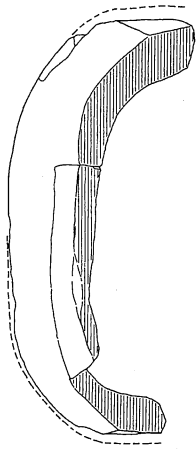


591

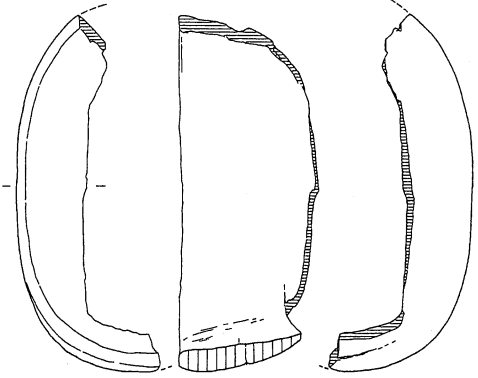
590 モミ属



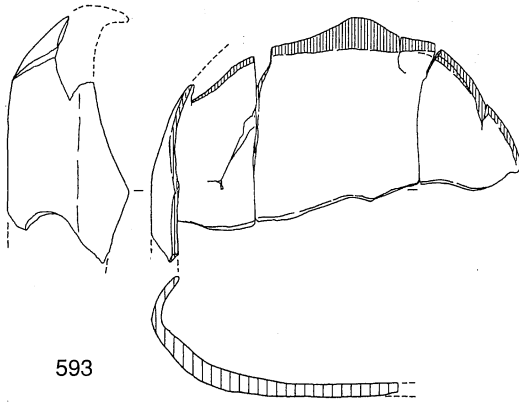
594 クスノキ



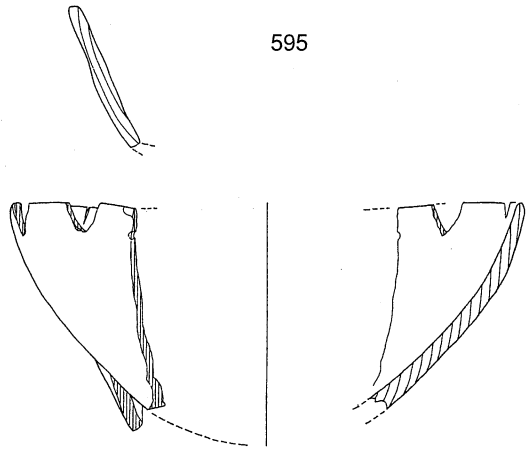
592



595

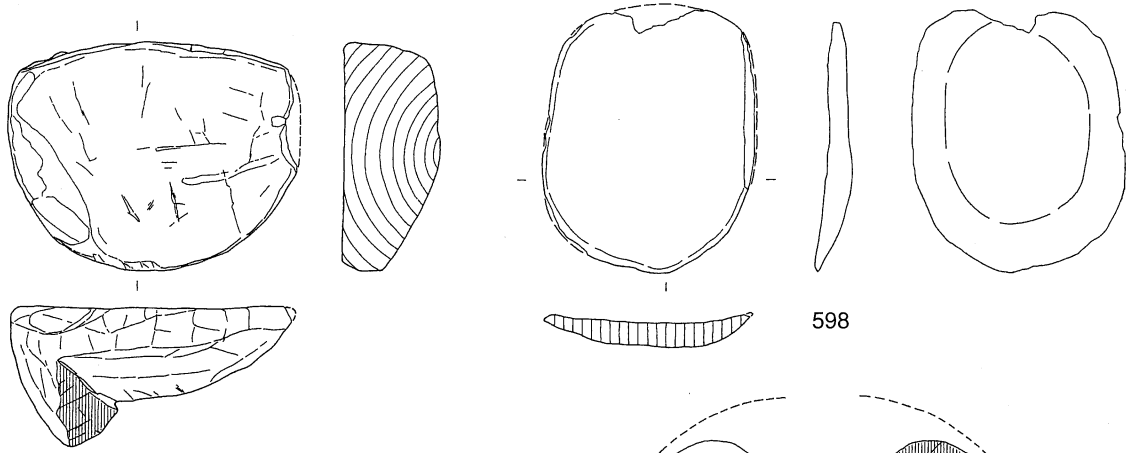


593



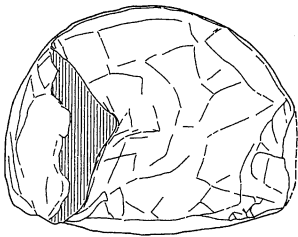
596

第83図 深型容器

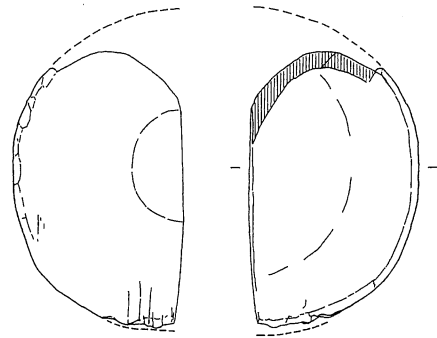


597

598

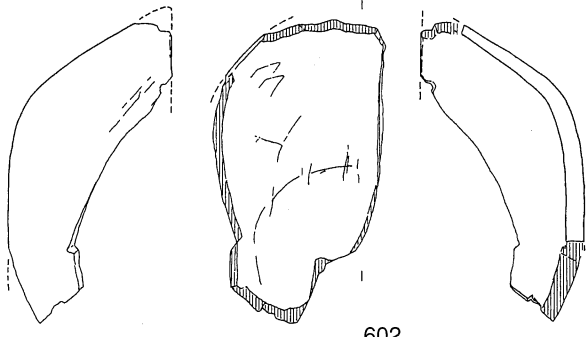
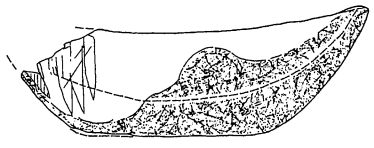


599



600

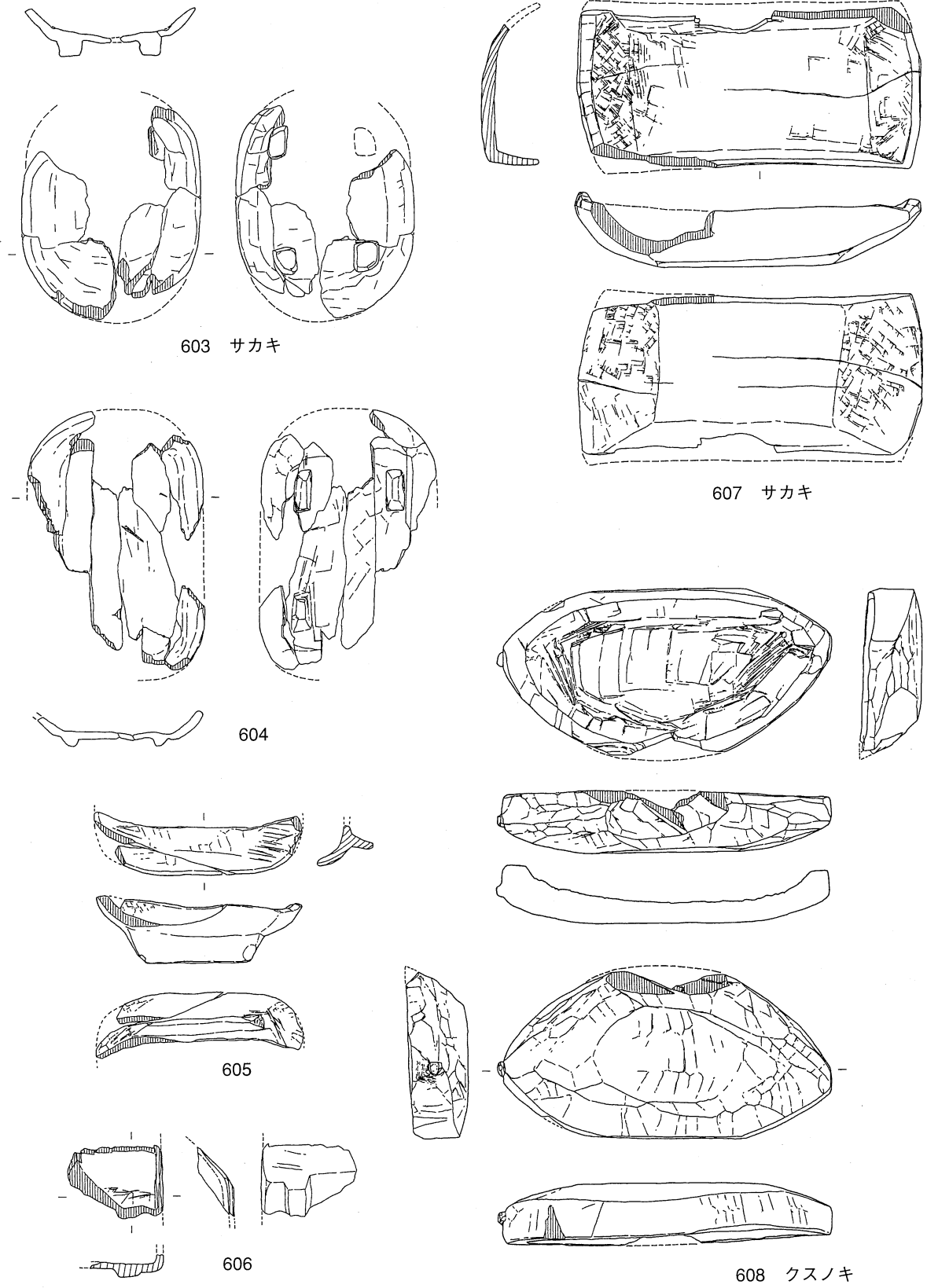
601



602



第84図 皿(1)



0 10cm

第85図 皿(2)

のほぼ完形品である。608もほぼ完形品で、不整形の浅い皿である。加工痕が全体に残っていて未成品と思われる。クスノキ製で全長22.8cm幅11.3cm高さ4cmである。

609は隅丸方形のやや深いケヤキ製の皿。四脚は側面から見ると、小口の立ち上がりにかけて三角形につけられていて、皿の底部も接地する。残存長26.9cm高さ4.5cmである。611・613・614は楕円形の皿の一部で、611の方が613に比べ立ち上がりが緩い。612は角をやや丸く作ったアカガシ亜属製のほぼ完形の皿で、全長26.7cm幅10.3cm高さ4.0cmである。615は隅丸方形の皿で、底部には20.2×10.5cm四方で高さ1mmほどの高台を持つ。全長32.6cm幅14.3cm高さ2.6cmである。616は長方形の皿で、側部は土圧により変形している。長さ34.6cm幅11.7cm高さ4.5cm。617は楕円形ないし隅丸方形の皿で、長軸に沿って半分に割れた破片である。

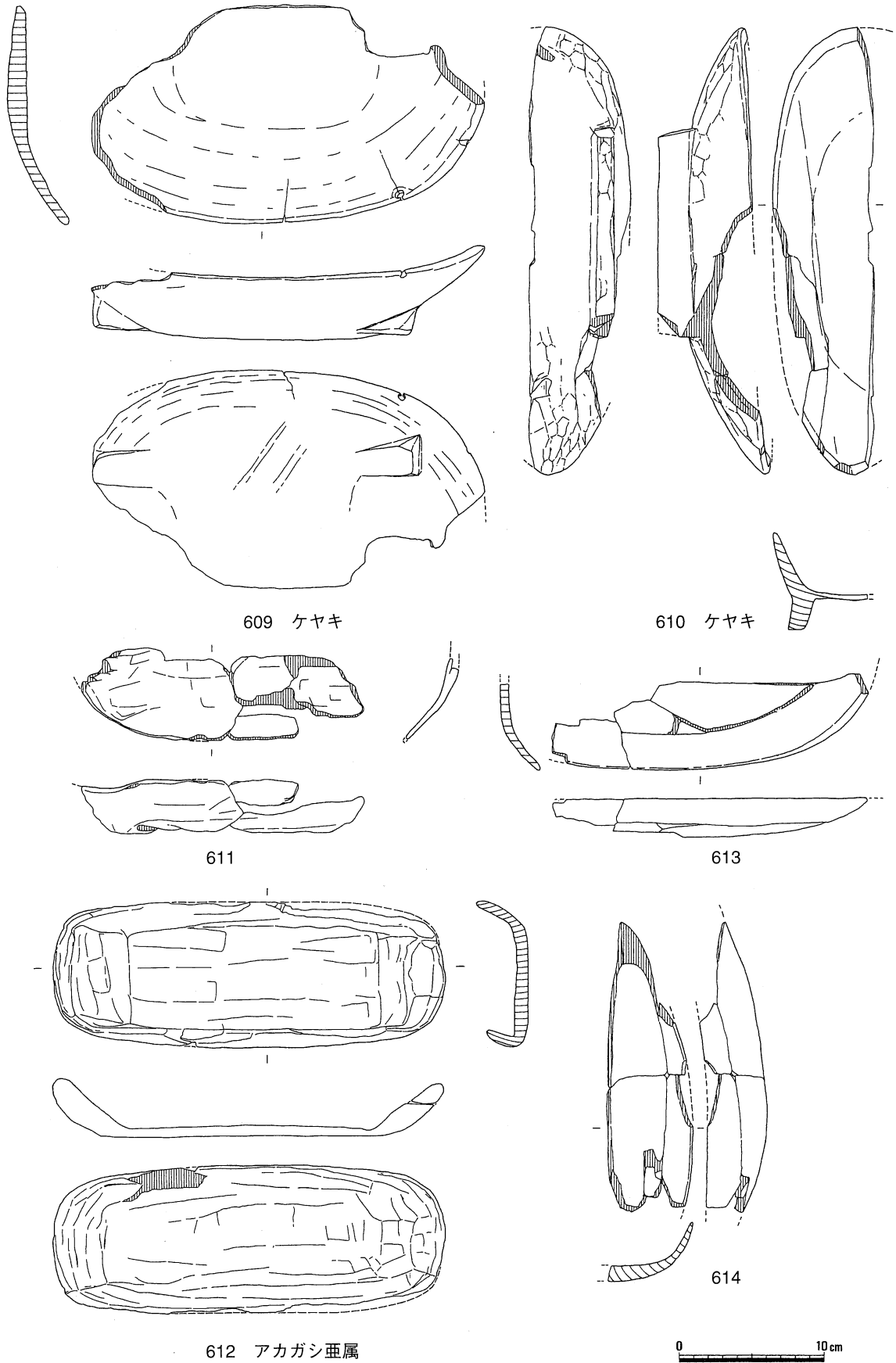
619はアカガシ亜属製の方形の浅い皿で、片側の側部を欠損している。全長27cm残存幅17.2cm高さ4.4cmである。620はクスノキ製の方形ないし長方形の底部に厚みがある皿で、外面や端部に水流穴ができていて表面の残りは悪い。全長28.7cm高さ7.6cmである。622はやや胴張りのする長方形の深皿の小口片で、外面は炭化している。624は断面三角形の高台を持つ皿の破片。

626～628は大形で浅い皿である。626はハルニレ製の円形の大皿で、直径約28cmの底部から斜めに立ち上がる。口縁部は肥厚せずほぼ水平である。直径48cm高さ3.5cmである。627は円形ないし隅丸方形の皿で、輪郭を取っただけのごく低い直径9cmの底部を持つ。628は直径2.5cm高さ1.3～1.5cmの円柱状の脚4つを持つ楕円形の大皿である。長軸方向に中央で割れたため、樹皮紐で緊縛して補修している。クスノキ属製で、残存長51.8cm幅35.2cm高さ7.4cmである。

629は赤彩紋を施した異形の皿。土圧により変形を受けているが、木の葉形の身の頂部に短い把手状の張り出しが付く。把手状の張り出しは片方が残っているが、他方は付け根部分の痛みがあって張り出しがあったかどうかは断定できない。630がその可能性もある。片側の口縁に半円形の突起が2つ付く。外面には黒漆地に赤漆紋様を施すが、剥落が著しく詳細は不明である。ケヤキ属を使い残存長30.6cm幅15.3cmである。630は629の上に乗って出土した。赤漆と黒漆で直線紋を施していて、方形の透かし孔の端部で折損している。632は平面が木の葉形の皿で接合しない複数の破片から復原している。アカガシ亜属製である。

633は634のような脚付盤の脚台で、4本の脚を持つ。丁寧な加工を施した精巧品である。634は脚付盤で、脚を付け根から欠失しているが、細長い接地部の両端と中央からのびた3本の柱が身とつながる脚を2つ持つ。身は楕円形の浅い皿形である。サクラ属を用いていて残存長18.6cmである。635は平面楕円形で丸底気味のクスノキ製容器で、内面に加工痕が残っている。637はハリギリ製の長方形の皿で、縦割れした1/2の破片である。舟形をしていて、短辺の立ち上がりは側面に対しやや緩やかである。丁寧な仕上げを施している。全長26.3cm高さ5.7cm。638は丁寧な加工を施した精製品の中央部の破片。精製の腰掛ともよく似ているが、復原長が26cmとなることから脚付の皿と考えられる。イヌガヤ製である。640は底部から側部にかけての小片で、ハリギリ製の細く浅い皿と思われる。642は幅の狭い舟形容器で、全長17.8cm幅4.5cm。643は小さい皿形であるが、心持ち材を使っていて、さじの身の破片の可能性もある。644はクスノキを使った舟形容器の一部で、部分的に樹皮が残っている。

647は四脚の付く方形の大形の皿で、四脚のうち2つが残っている。クワ属を使って丁寧に加工している。残存長35.6cm高さ8cm。648・650は大形槽の小口の破片である。651は短辺の立ち上がり傾



609 ケヤキ

610 ケヤキ

611

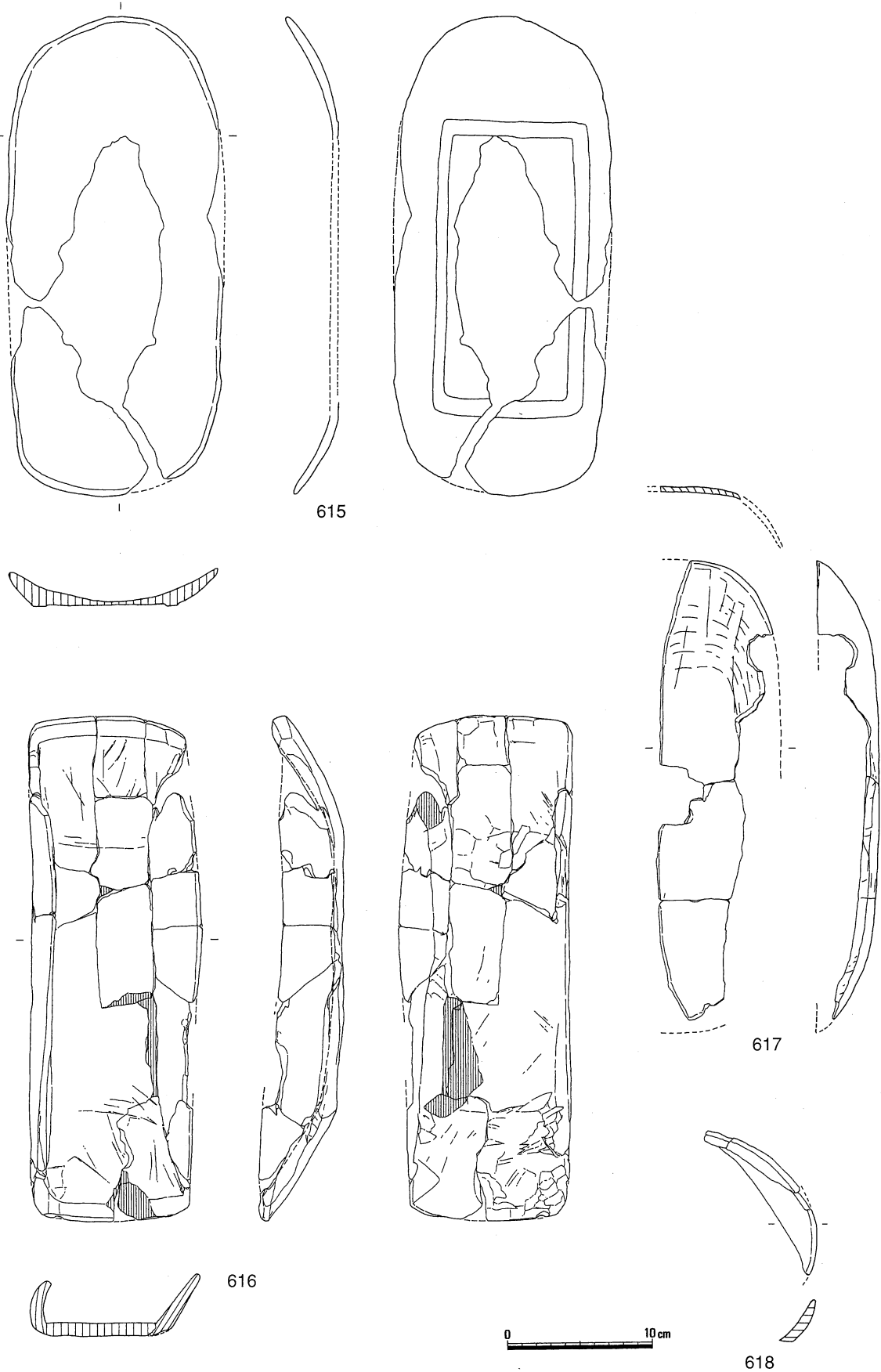
613

612 アカガシ亜属

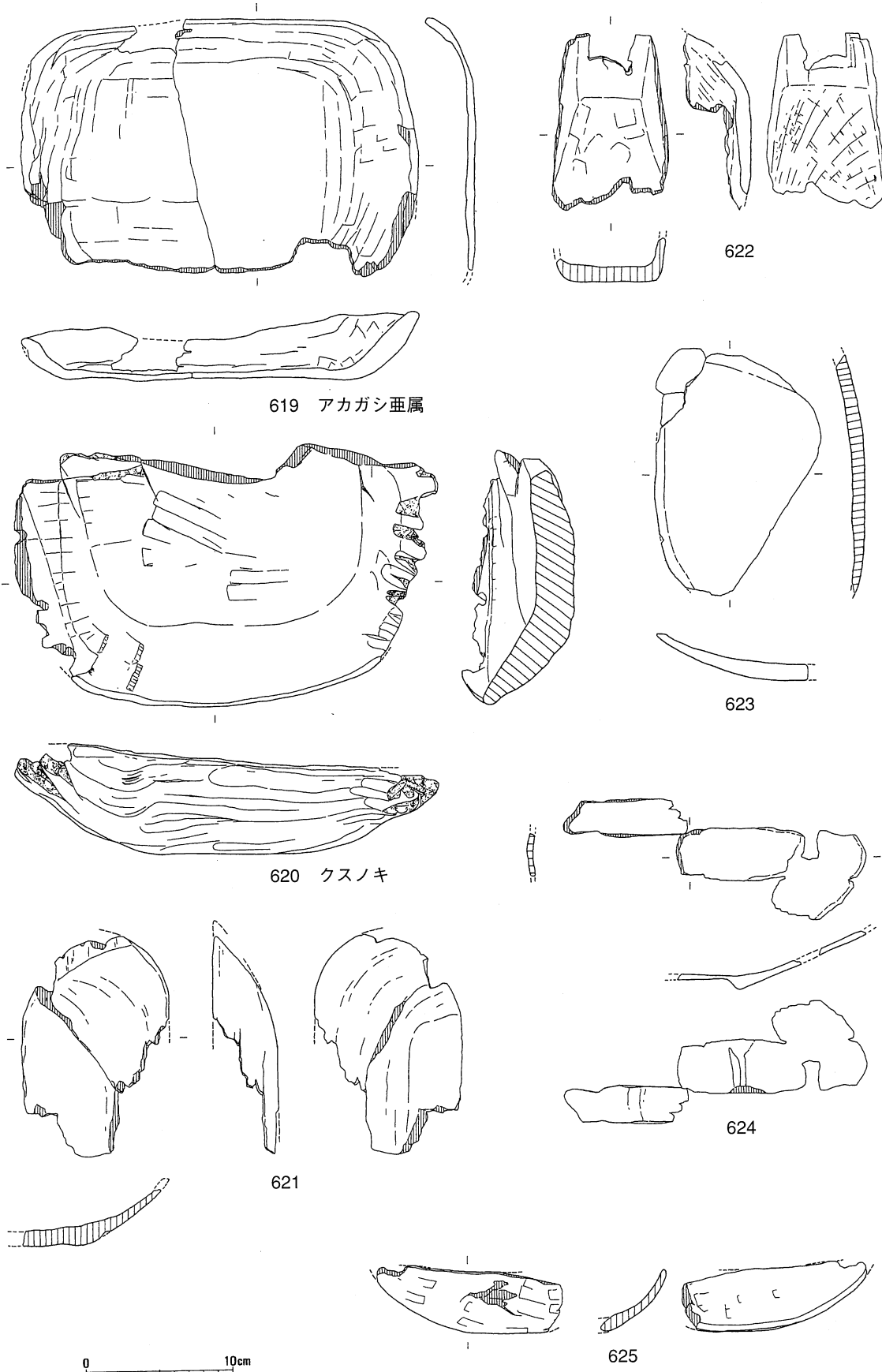
614

0 10 cm

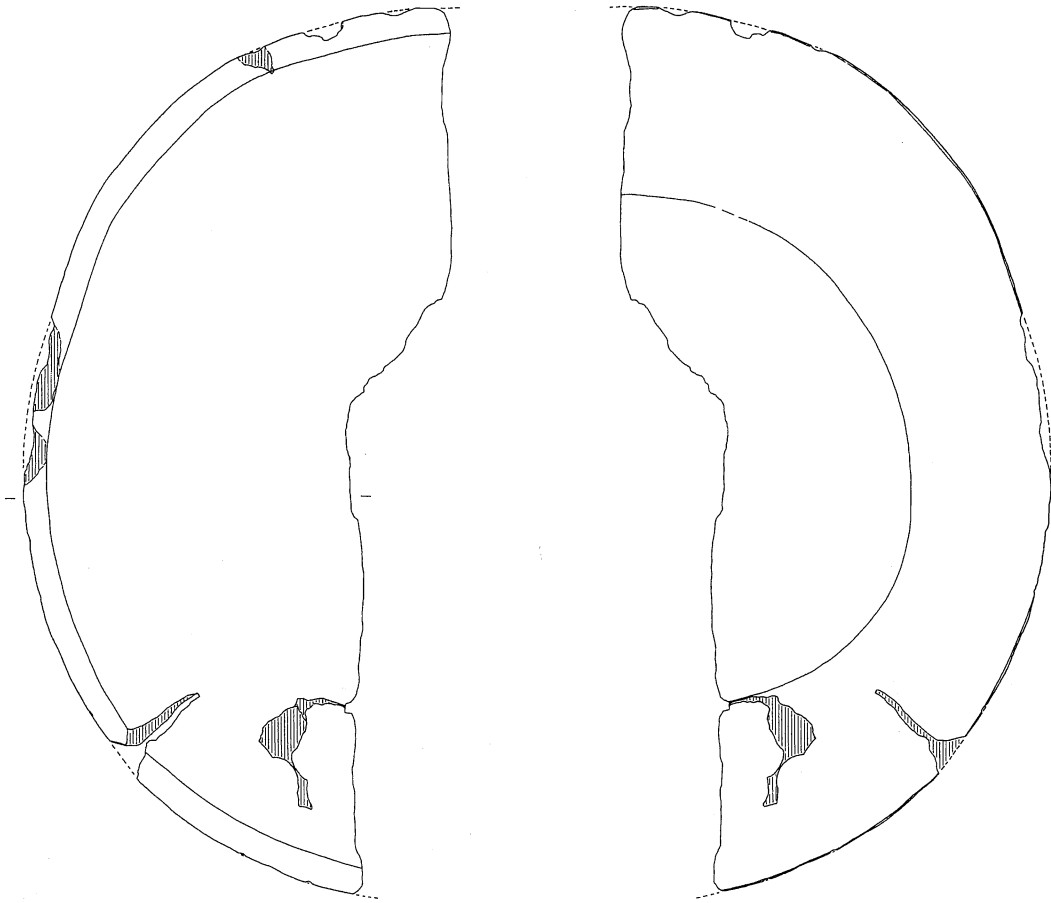
第86図 皿(3)



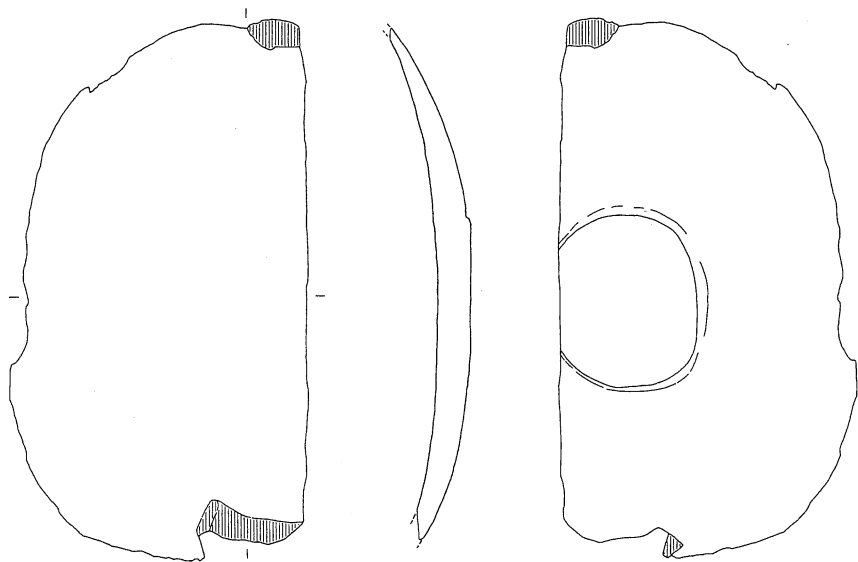
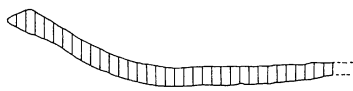
第87図 皿(4)



第88図 皿(5)



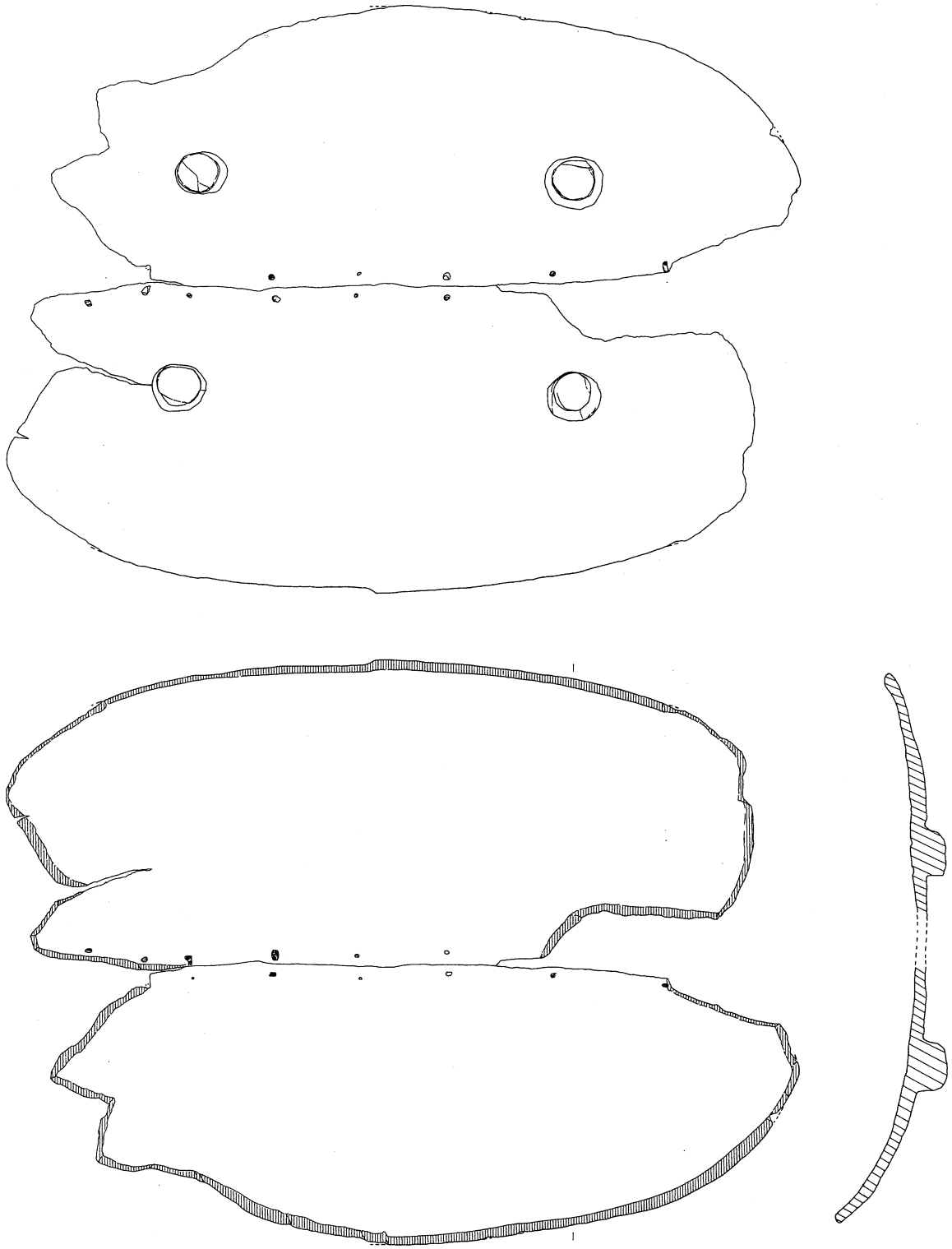
626 ハルニレ



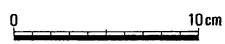
627



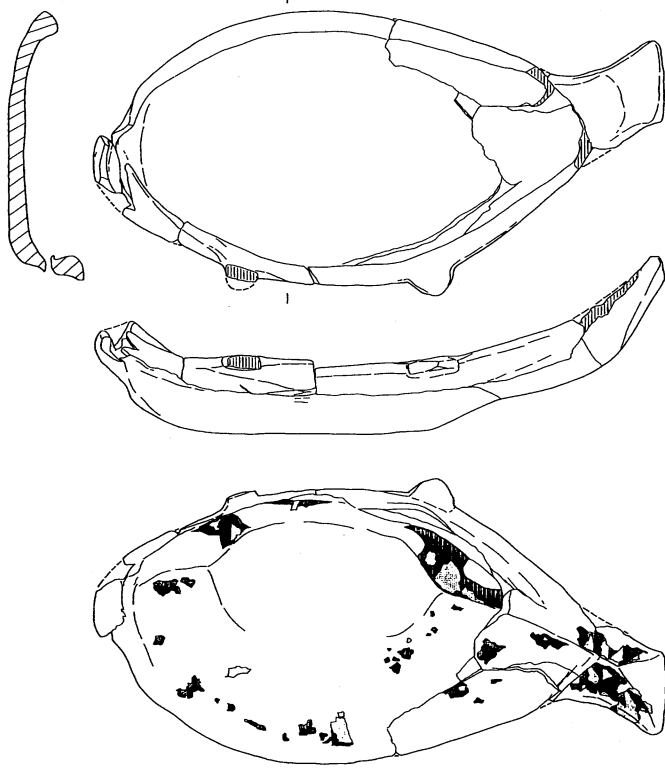
第89図 皿(6)



628 クスノキ属



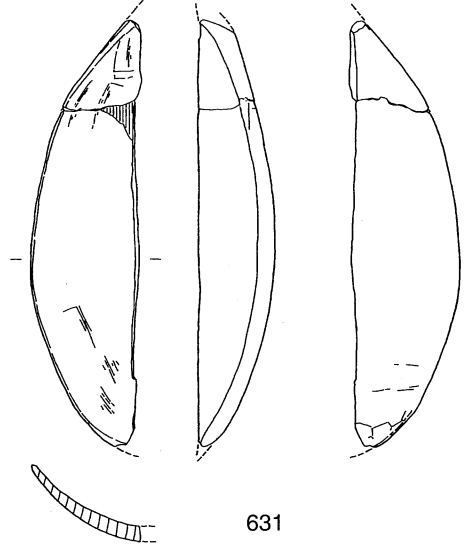
第90図 皿(7)



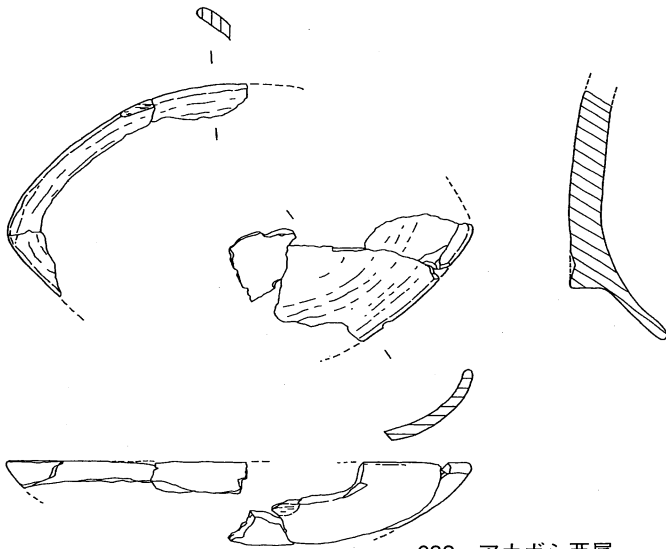
629 ケヤキ属



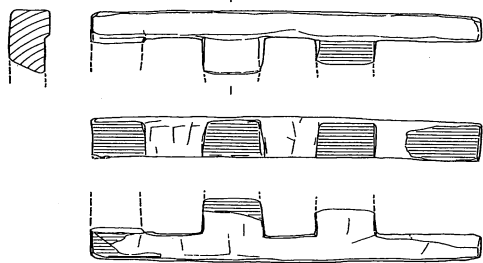
630



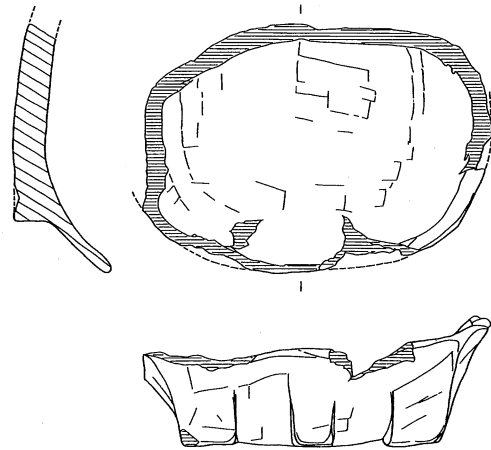
631



632 アカガシ皿属



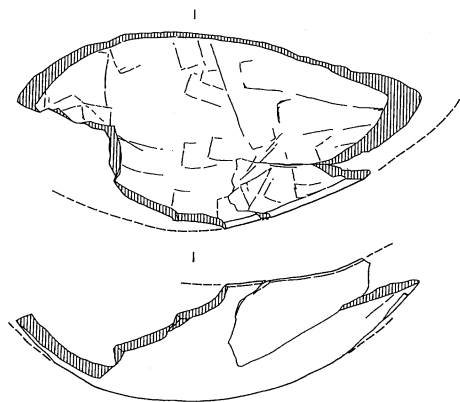
633



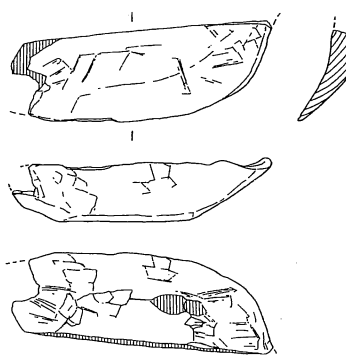
634 サクラ属



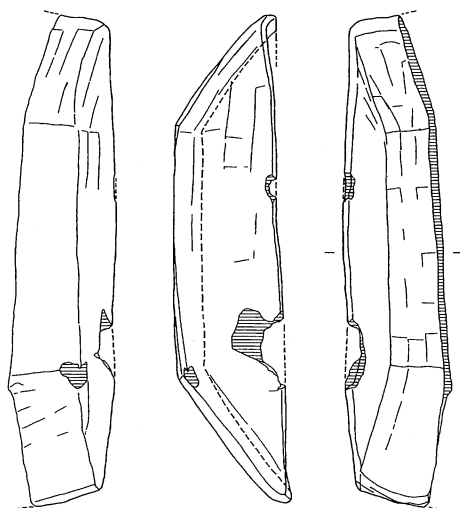
第91図 皿(8), 槽・盤(1)



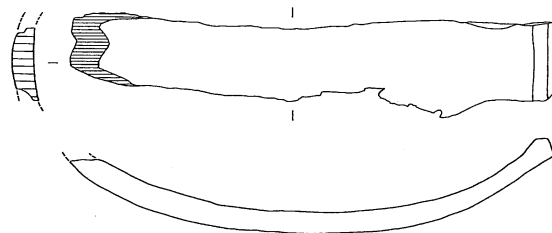
635 クスノキ



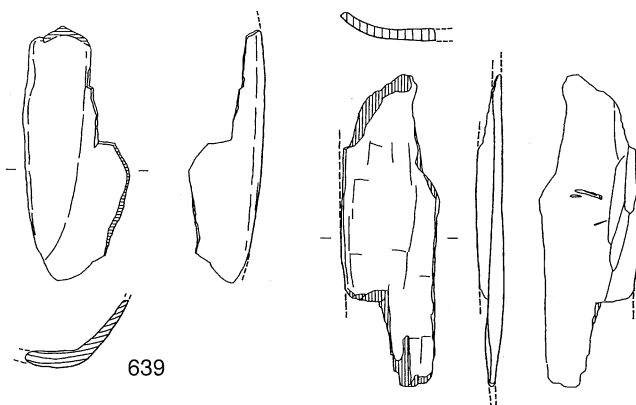
636



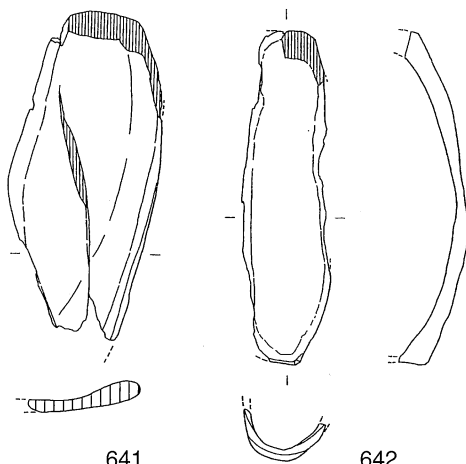
637 ハリギリ



638 イヌガヤ



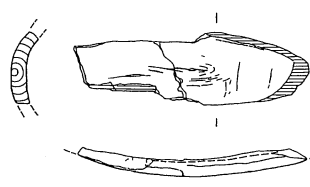
639



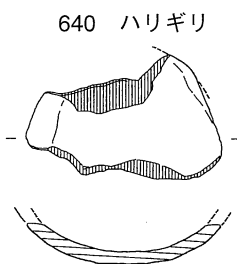
641



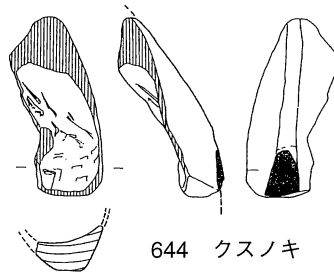
642



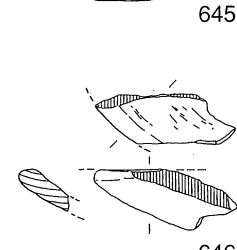
643



640 ハリギリ



644 クスノキ

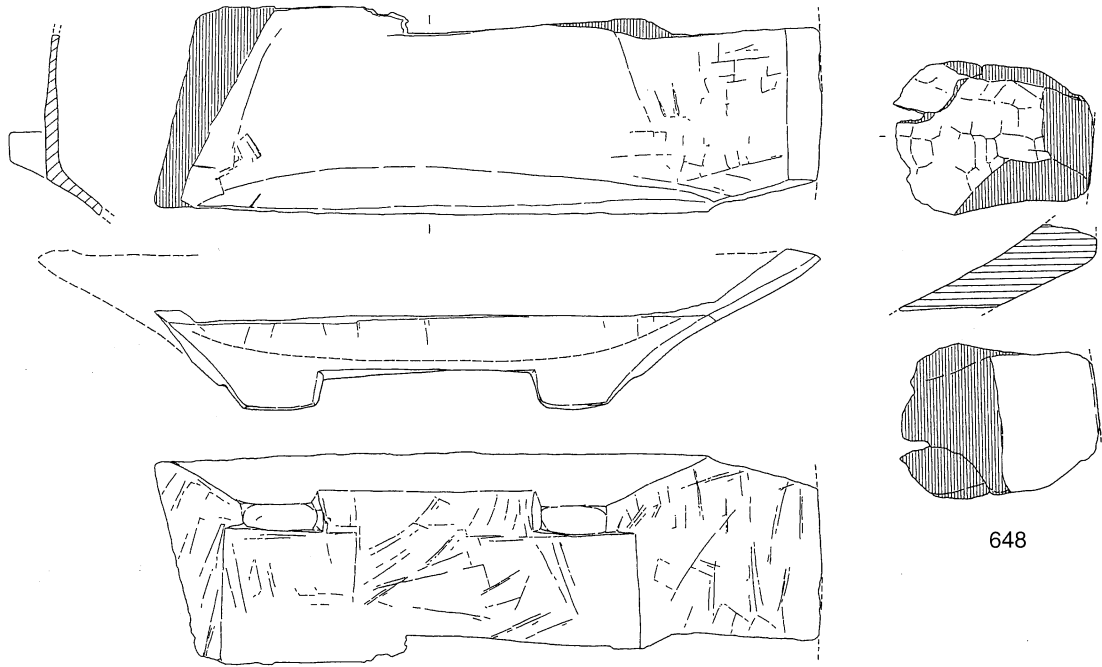


645



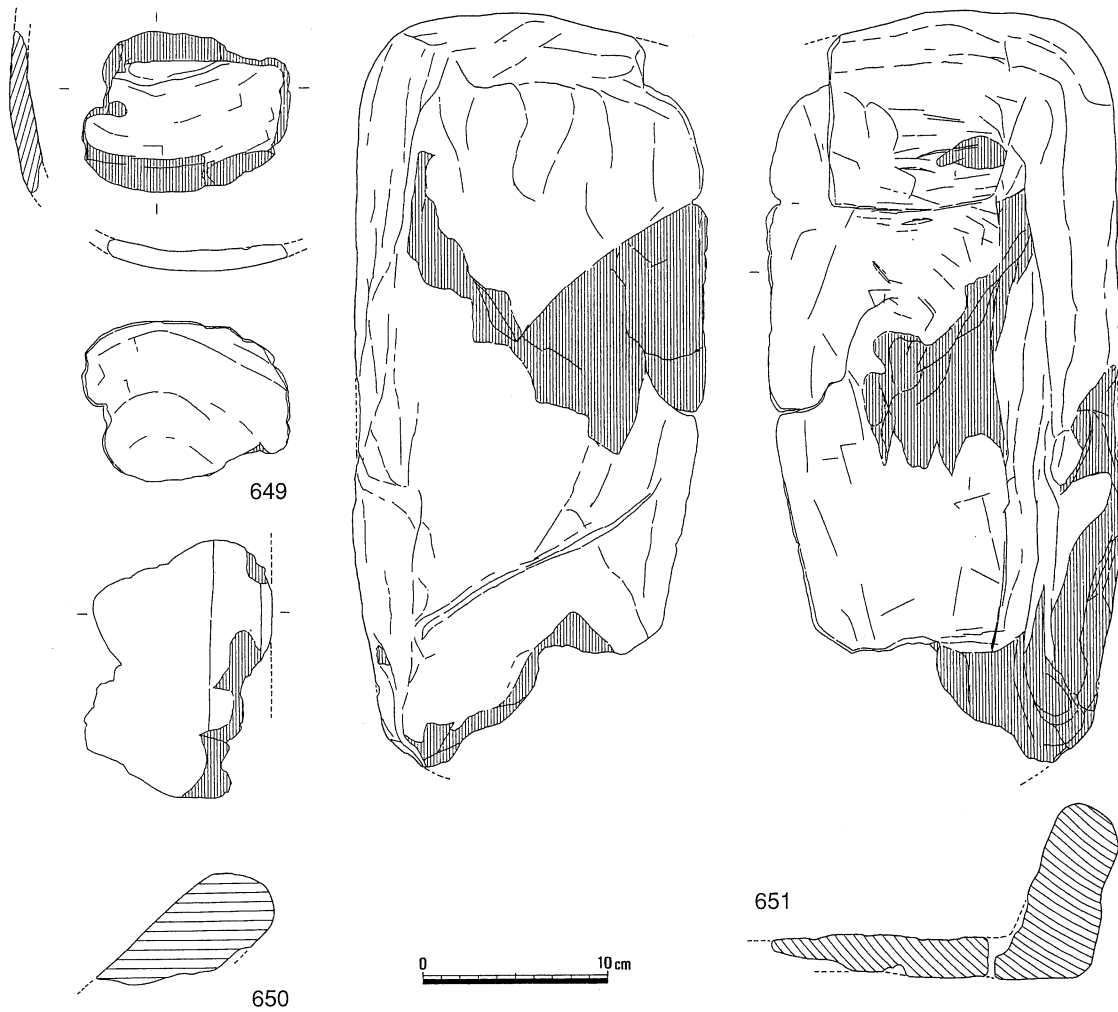
646

第92図 槽・盤(2)



647 クワ属

648



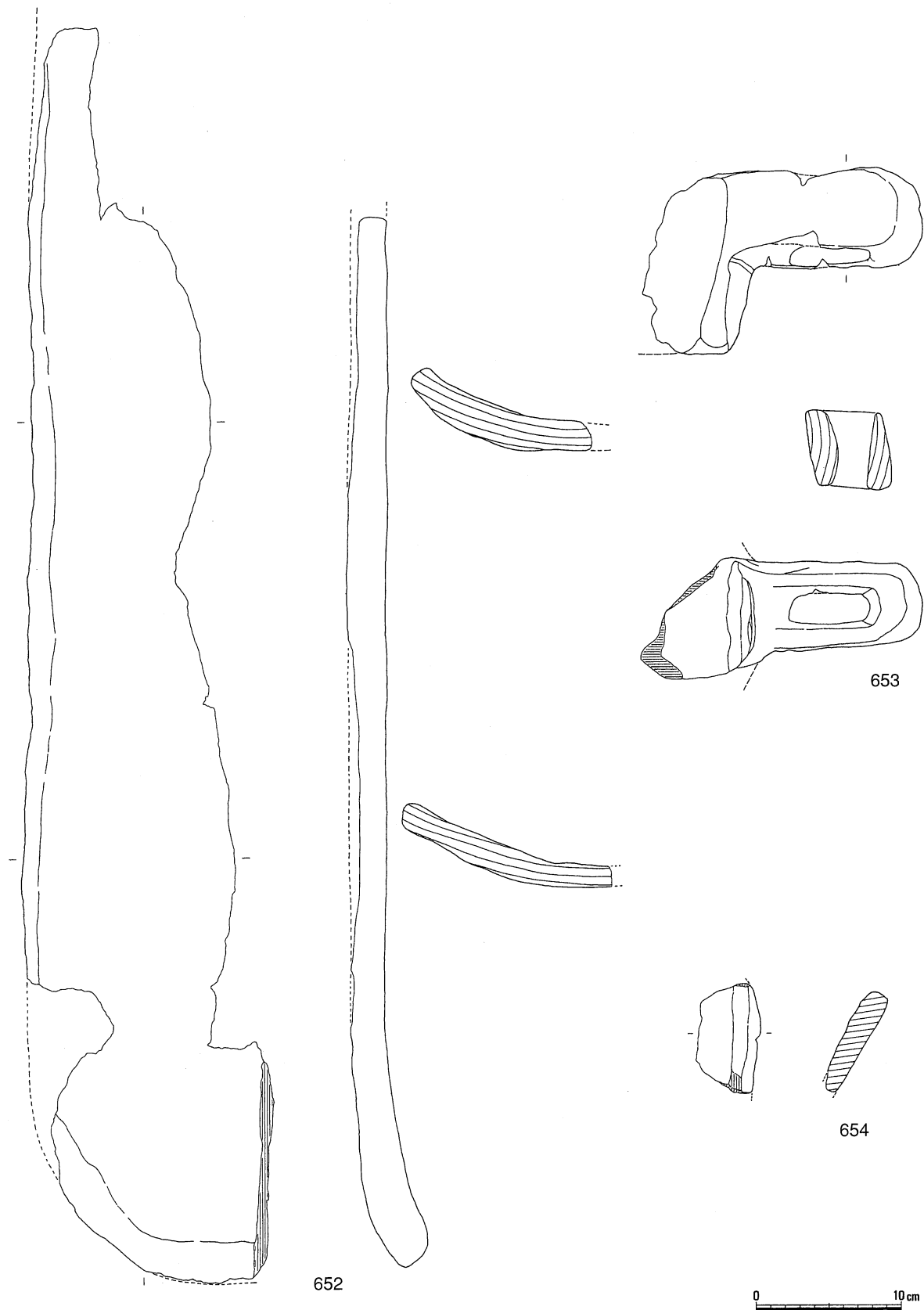
649

650

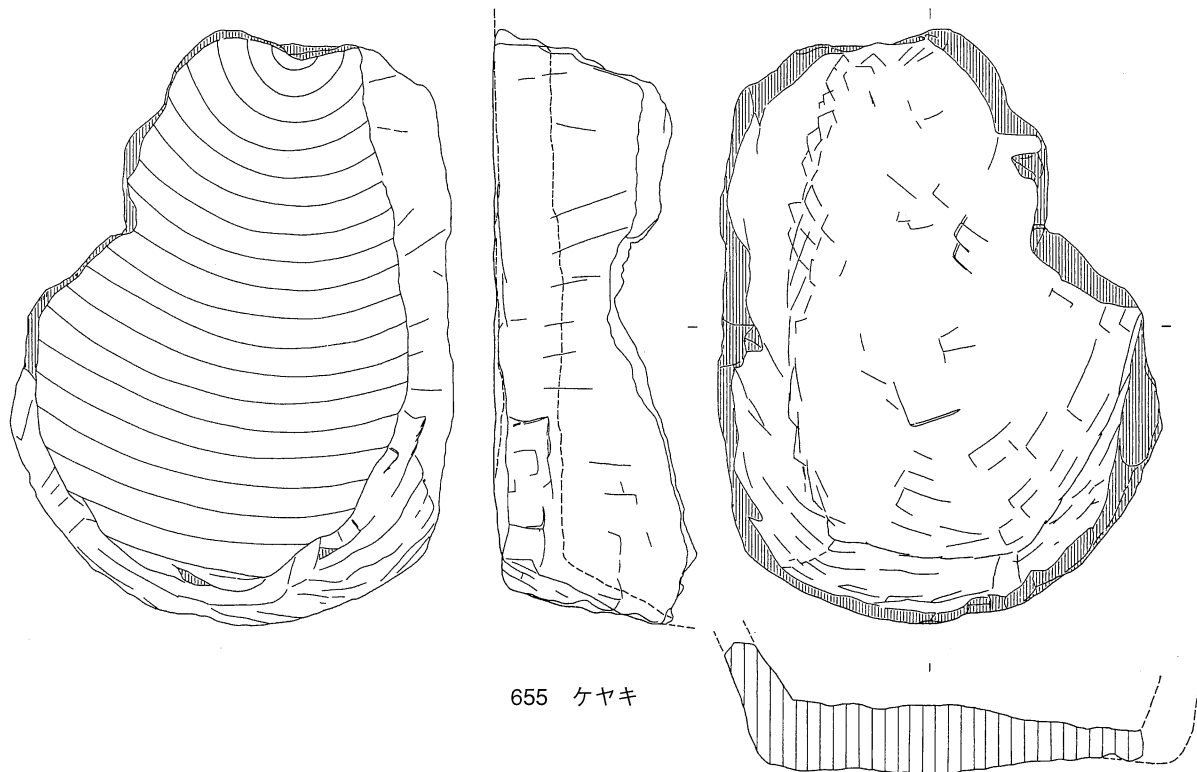
0 10 cm

651

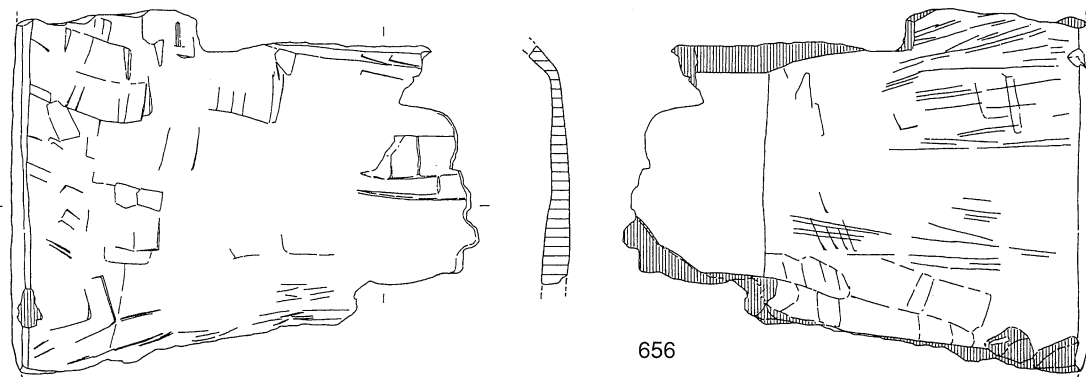
第93図 槽・盤(3)



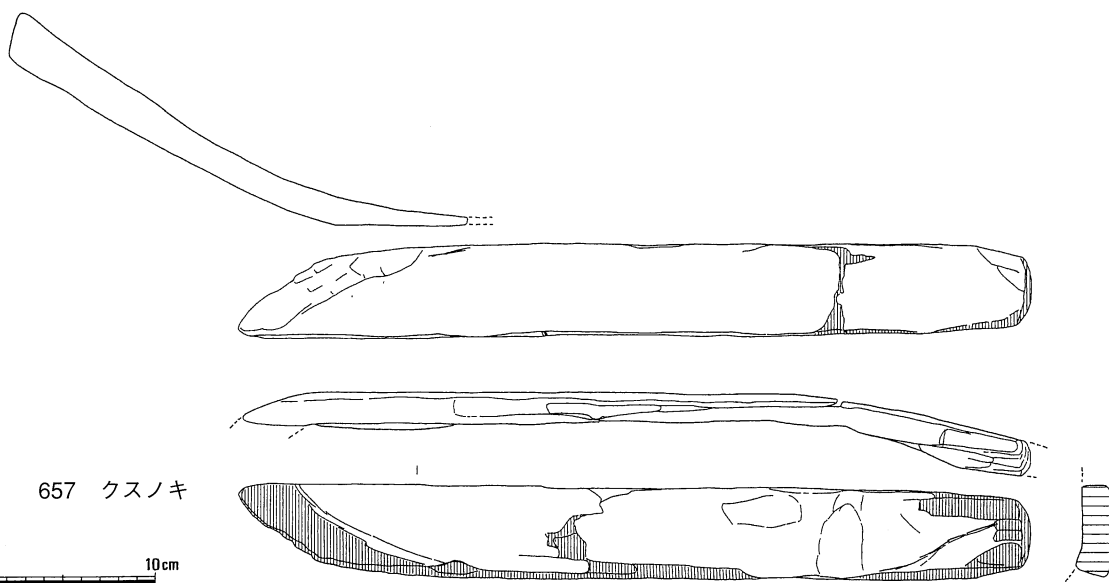
第94図 槽・盤(4)



655 ケヤキ



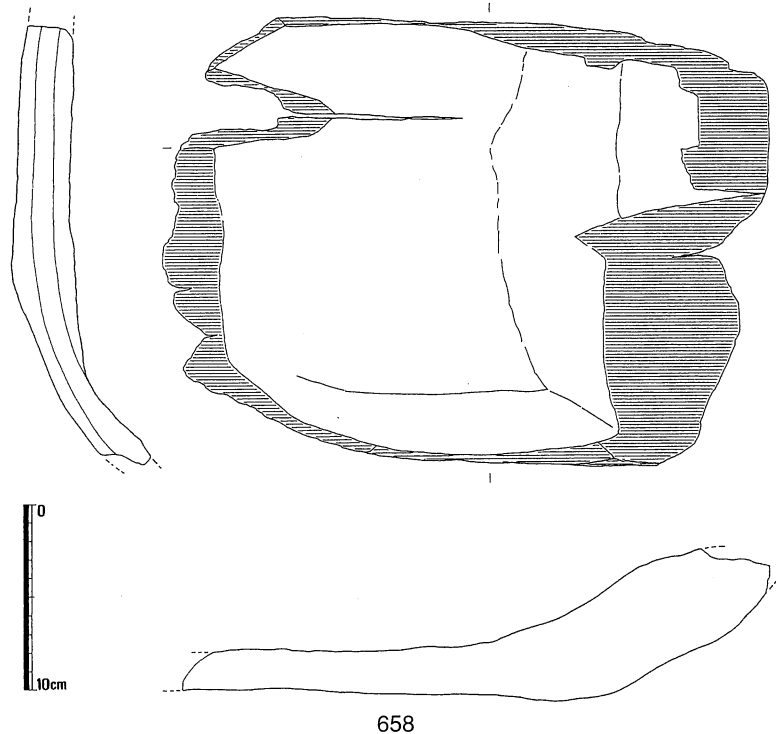
656



657 クスノキ

0 10cm

第95図 槽・盤(5)



第96図 槽・盤(6)

斜のやや緩い長方形の盤で、残存長40cm高さ10.7cmである。652は大形槽の底部の破片で、残存長85.3cmである。653は大形槽の把手の部分で、側面に長さ5.5×2cmの方形孔がある。

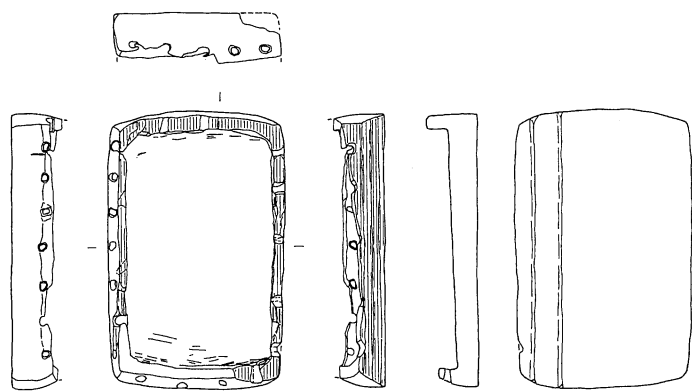
655はケヤキの心持ち材を使った盤で、外側面は大型の工具でバサバサと削っている。残存長31.8cm高さ10.9cm。656は大形槽の小口の破片で、丁寧に加工を施している。657は大形の皿の底部の破片で、クスノキを使っている。残存長42.5cm。658も盤の小口部分の破片で、全体に炭化がみられる。

底・蓋・台ほか

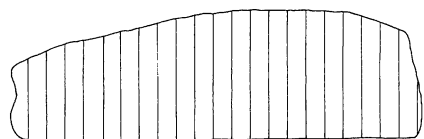
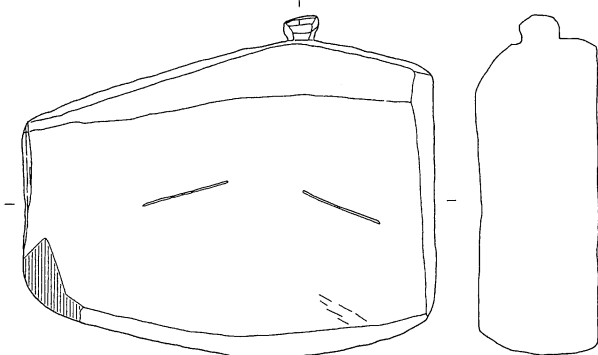
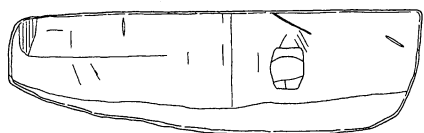
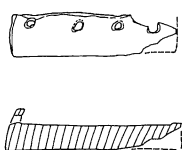
659はニレ属の柾目材を使った容器の底である。底部から1cmほどに立ち上がる体部には長辺で6～7個、短辺で4～5個の小孔をあけている。体部が編物となる容器の底部と見られる。全長14.8cm幅9.4cm高さ2.7cm。

660・662・666は台である。660は小片であるが、方形の低い脚を持つ。662は木の葉形の板の先端部に小さな算盤玉形の頭部をつけている。底部には楕円形の突起を中央で分割して2個1対とした四脚を持つ。サクラ属の柾目材を用いていて、全長15.4cm幅8cm高さ2.5cmである。666は大形の台で一端を欠損している。中央部に小口部分と同じ厚さで長方形の四脚を削りだしている。板目材を使っていて、残存長51.6cm幅18.7cm高さ3.8cm。

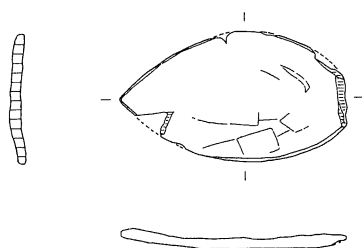
661は容器未成品かもしれない。横長の六角形の頂部に小突起がついている。アカガシ垂属の柾目材が用いられ、残存長18.4cm幅21.5cmである。663は直径9.2cm厚さ5mmの小さな蓋で中心に小孔があって、表裏とも薄く加工痕が残る。クスノキの柾目材製である。664は縦杓子柄の木の葉形頭部に似るが、それにしても薄く、縦断面がわずかに湾曲するので、木葉状皿とみられる。長さ12.2cm幅6.9cm厚さ7mmである。665は長方形の浅い皿形容器の破片か？外形はそれほどでもないが、見込み部分では角をきちんと持たせている。見込み部分の幅が2cmと狭いうえ、側面の立ち上がりも緩く皿以外の可能性もある。



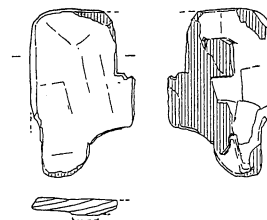
659 ニレ属



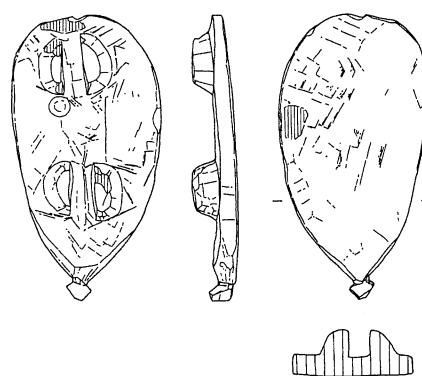
661 アカガン皿属



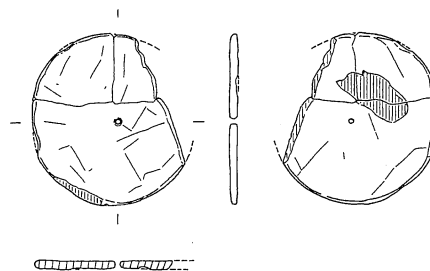
664



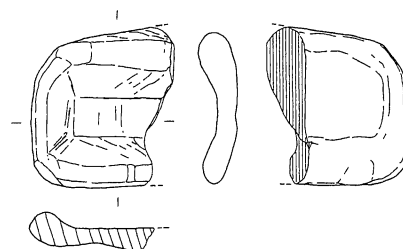
660



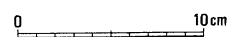
662 サクラ属



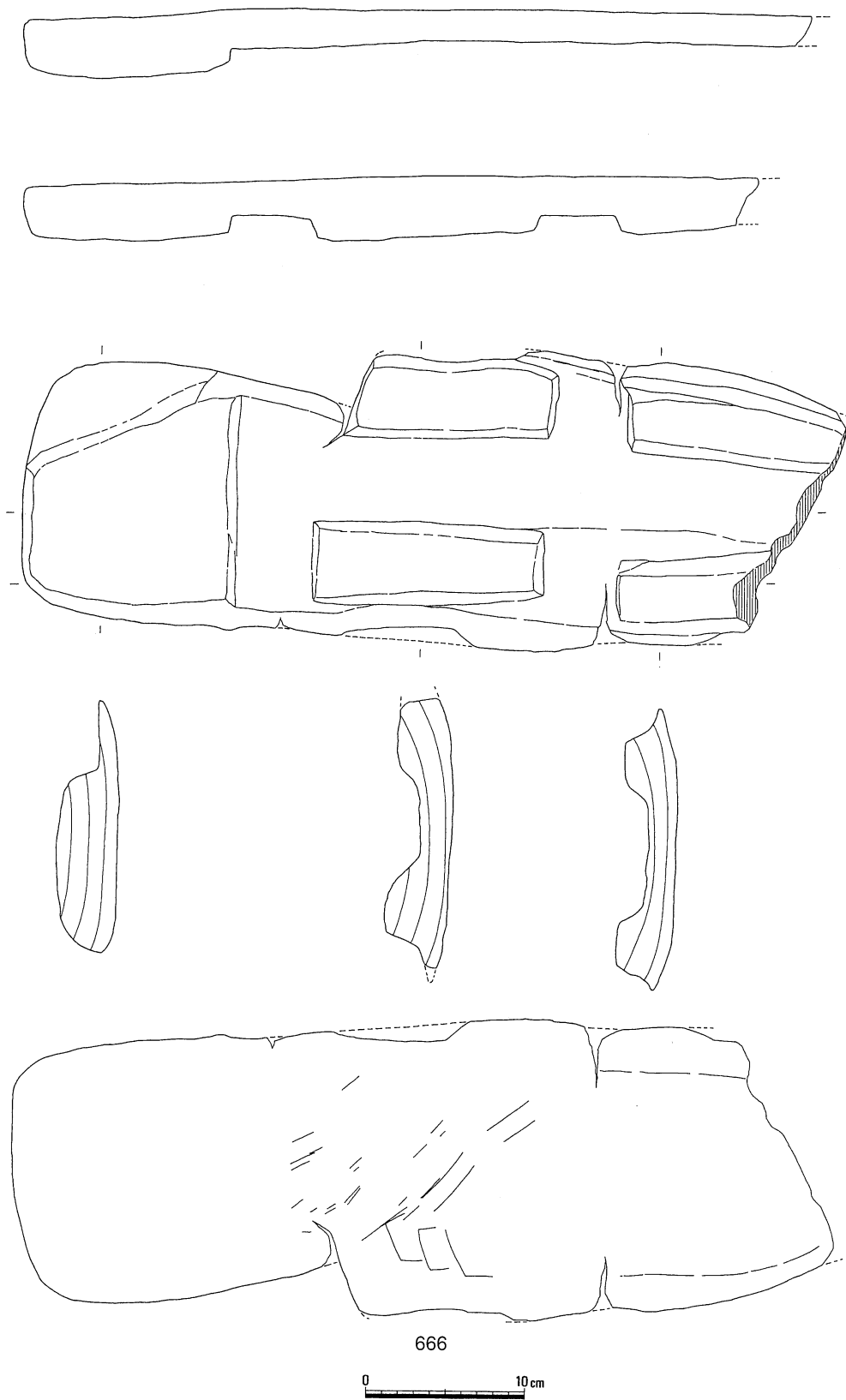
663 クスノキ



665



第97図 底・蓋ほか



第98図 台

10. 楽器

楽器は、板作りの琴と槽作りの琴があわせて5点が出土している。いずれも琴板で、槽作りの琴の底板や側板は出土していない。ただし、後に述べる組合せ式箱の部材の中に琴の底板や側板が含まれていることも考えられる。

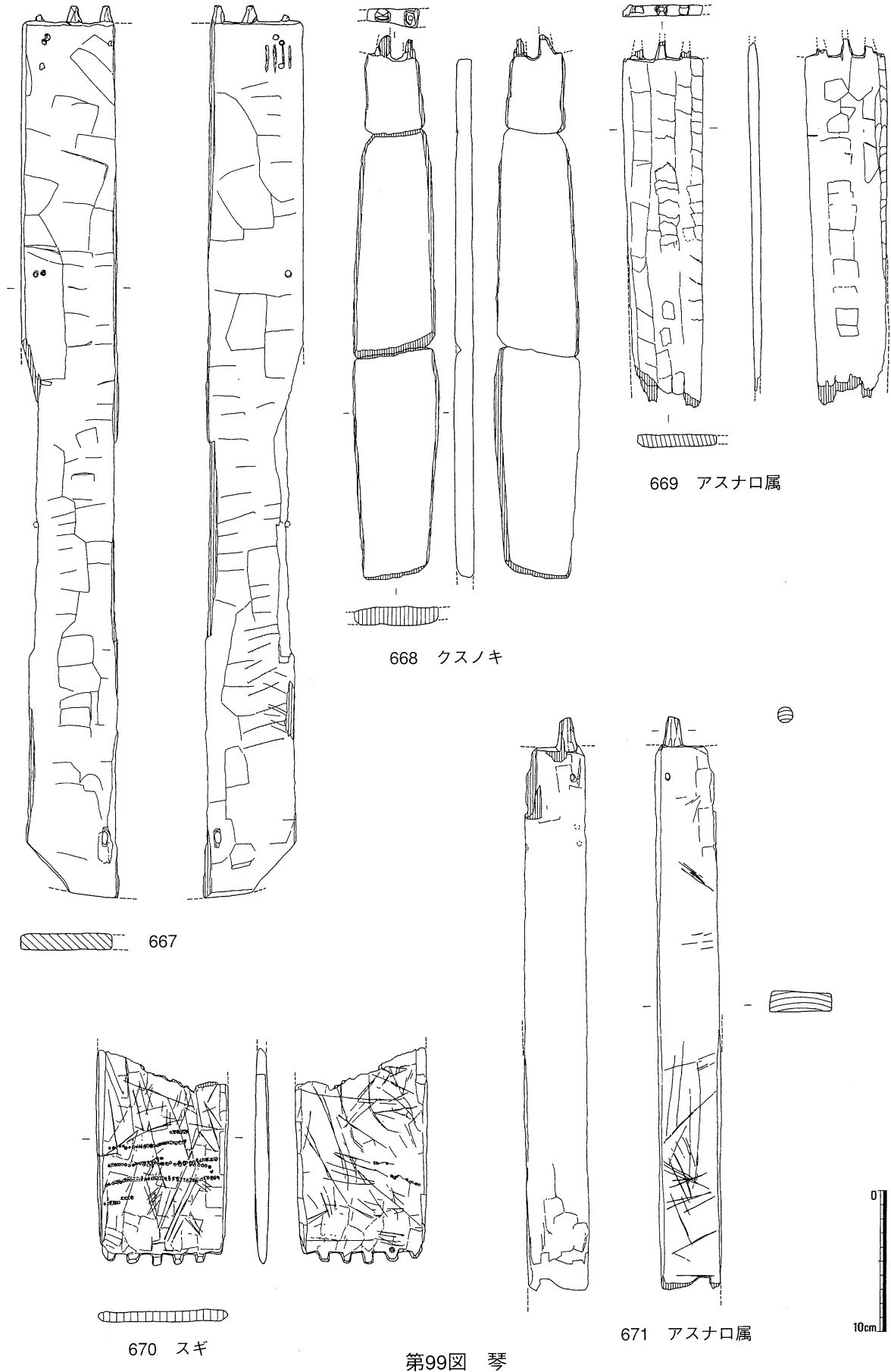
琴

琴は667・671が槽作りの琴、668～670が板作りの琴である。いずれも破片のため全形がわかるものがない。667で全長と復原幅が670で幅がわかる程度である。5点の内4点が截頭円錐形の弦かけ突起を作っていて、残り1点は方形の突起である。

667はほぼ中央で縦割れになっている。頭部側4cmのところ長さ1cm幅4mmの長軸に沿った楕円形の孔があり、集弦孔とみられる。これを元に復原すると、5弦で幅12cmの琴板に復原できる。尾部側の小口板を止めたとみられる釘孔が1つ、側板を止めたとみられる釘孔が3つあり、側板を止めた孔には木釘が残っている。表裏両面には加工痕が残る。針葉樹の板目材を使っていて、全長63.3cm残存幅6.9cm厚さ1.2cmである。

668はクスノキの柾目材製の琴板で、残存部分は長さ39.5cm幅6.4cm厚さ1.3cmである。669はアスナロ属の柾目材を使っていて、表裏両面とも加工痕は顕著に残っている。残存部分の長さ26cm幅5.1cmで、厚さは8mmである。671は残存幅が4.5cmあるが、突起が1つあるだけなので、他の4点に比べて弦かけ突起の間隔が広くとられているとみられる。側縁の短辺沿いに円孔が1つあって、表面には多数の刃物キズもみられる。アスナロ属の板目材が使われていて、長さ40.5cm厚さ1.5cmである。

670は弦かけ突起を5つ持つ板作りの琴である。表面には5～6個を1単位とした小孔が列をなして、1～1.5cmの列間をとって5列あけられている。破損部分にも小孔があるので少なくともこのような小孔列群は2群あったとみられる。小孔列は左右のどちらかが尾部に近く斜めになっていたり、ほぼ均等な列間をとっていることからすると、通常のあり方とは異なるが、この小孔には琴柱が差し込まれたのではなかろうか。スギの柾目材製で長さ15.2cm幅9.4cm厚さ1cmである。



第99図 琴

11. 祭祀具

祭祀具には威儀具・陽物形などがある。676は三角柱状の頭部と考えられ、三角形を互い違いに配した装飾的彫刻がある。全体の形状は不明であるが、祭祀具の一部とみられる。

威儀具

握部を持っていて身に紋様を彫刻した木製品およびそれに形態的に類似する木製品を威儀具とする。

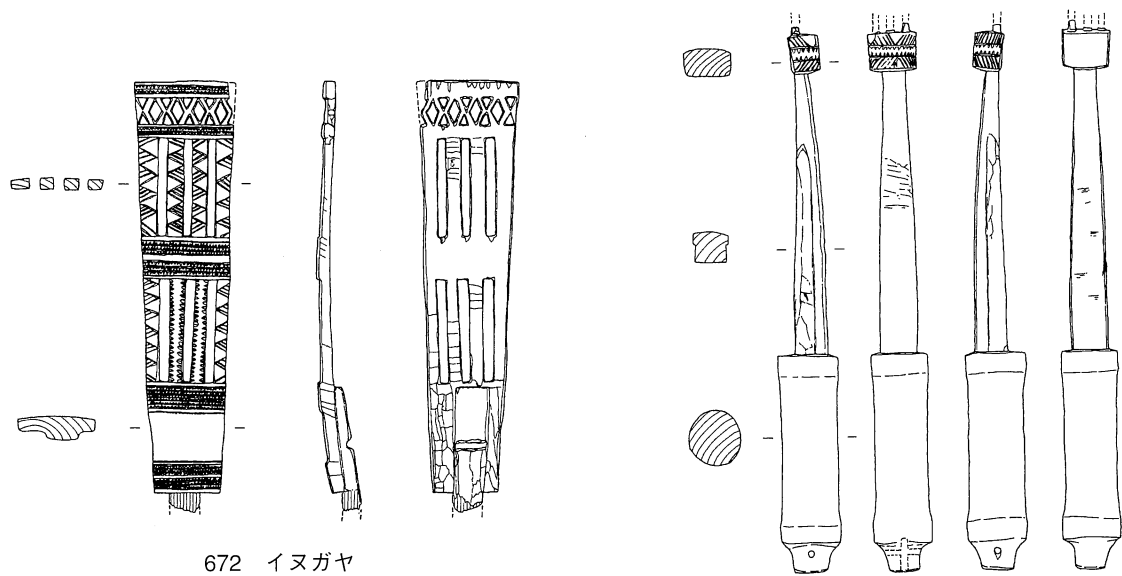
672はわずかに湾曲したイヌガヤの板目板の外側に、幅の狭い帯状で横線と小さな三角形の刻みをいれた部分(刻目紋様帯)と、それよりも一段彫り下げて透かし彫りをいれた広い部分(透かし彫り紋様帯)とを交互に作り出している。刻目紋様帯の横線と三角形の刻みは対になっていて、基本的には文様帯の中央を境に三角形の頂点は上下を向くようになっている。透かし彫りは、上から三角形と菱形・長方形・長方形・なしとなっている。上段の長方形透かし彫りの棧にはいずれも鋸歯紋をいれている。下段では、中2本の棧に側縁に沿って三角形の刻みを、外2本の棧には鋸歯紋をいれている。一番下の透かし彫り紋様帯に透かし彫りが無いのは、裏に柄の根元を作り出しているためである。上端面は削られているが、わずかに残った凹凸から三角形と菱形の透かし彫り紋様帯で折れたものを再加工していることがわかる。裏面上端には切れ込みが8箇所見られる。この切れ込みは糸をかけるためのもので、従ってこの木製品は弦楽器であるとも考えられた。しかし、三角形や長方形の透かし孔の部分にも付いているので、糸かけではなくむしろ透かし孔を彫る際に何らかの理由で付いたものと考えている。柄の根元には端部から3cmの部分に溝が切ってあって、あるいは別材の柄との結合強化を図るためかとも思われる。残存長23cm幅5.3cmである。

673・674は断面円形の握部を持つ。673の頭部は2.5×2cmの方形で、上・下縁に綾杉紋と中央に内向きの三角形刻目を3面に施し、上端には3本の爪が付く。頭部と握部の中間部は側面を裏面側から表面側を5mm程度残して削りを入れている。握部下端にT字型の孔あり、房を垂らすためとみられる。イヌガヤの柾目材を使った精巧品で、残存長29.3cmである。674は残存状態が悪いがイヌガヤの心持ち材製で、握部の両端には斜めや格子の細線を施していて、下端には房垂らし用と思われる円形突起がつく。握部から上には棒状のものが付いているが頭部は欠損して形状は不明である。675はイヌガヤの心持ち材製で、身はやや内湾し基部の中心をさけ外側に接してたちあがる。頭部はやや圭頭状で炭化している。茎は基部のほぼ中心であるがやや内側よりにつく。残存長23.7cm基部幅2.8cm。

陽物形

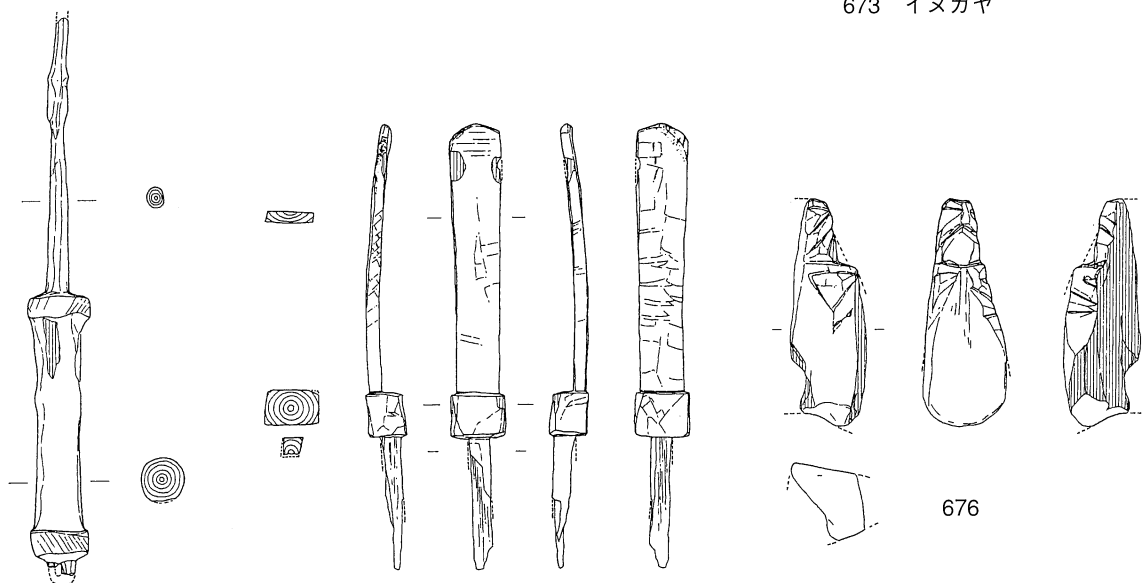
陽物形は3点出土している。677は小形品で、中軸に孔が貫通しているが、樹心が腐朽により抜け落ちたとも考えられる。基部に刳り込みが1周する。加工痕が顕著で、一部には刃先の食い込みや基部では刃こぼれ痕もある。イイギリ属の心持ち材製で、全長8.6cm直径2.9cm。678はクスノキ属の柾目材製で、基部にも段をもち下端ははがれたように見える。転用品の可能性もある。長さ16.6cm直径1.7cm。679はほぼ完形品で、やや扁平で前面観を重視した表現である。677・678と異なり基部を作らない。柾目材を用いていて、全長11.3cm幅4.8cm厚さ2.3cmである。

11. 祭祀具



672 イヌガヤ

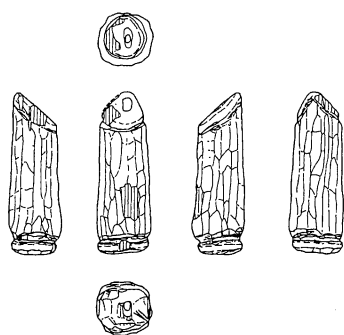
673 イヌガヤ



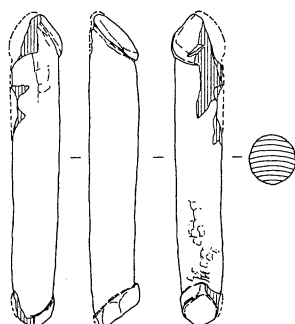
674 イヌガヤ

675 イヌガヤ

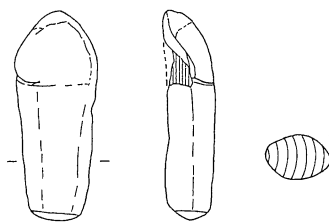
676



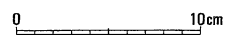
677 イイギリ属



678 クスノキ属



679



第100図 祭祀具

12. 雑具

雑具には箱・腰掛け・机・ハケ状木製品・ヘラ状木製品・叩き板状木製品・発火具・把手・すくい具・自在鉤・鉤状木製品・竿受け・器具部材がある。

箱

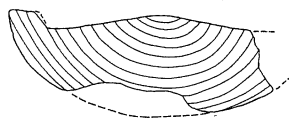
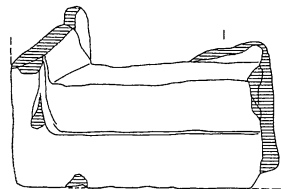
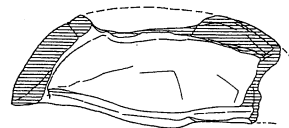
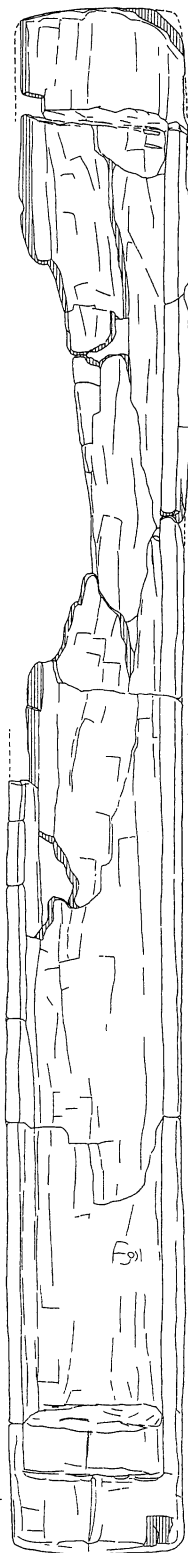
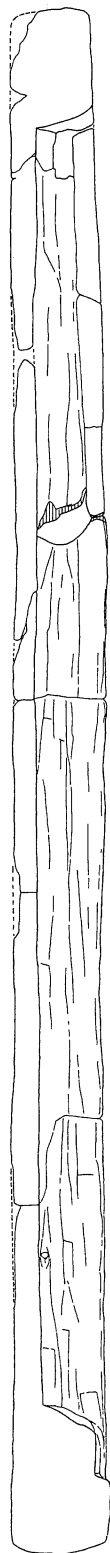
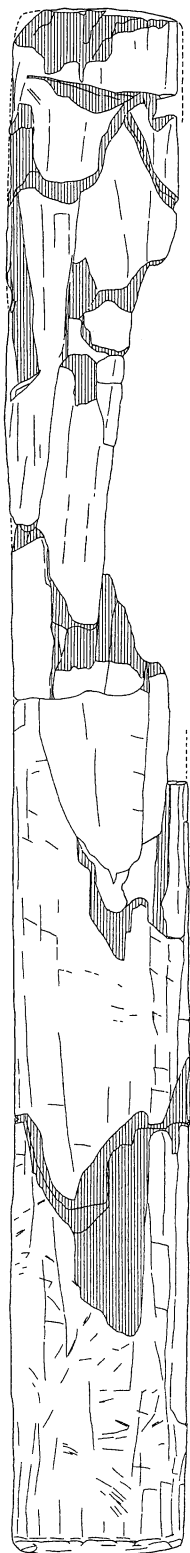
箱には丸底の刳抜式の箱と板材を組み合わせた組合せ式の箱とがある。

刳抜式箱は心持ち材の上面を削って平坦にし、片方の小口から差し入れた蓋を受けるために他方の小口に段を作ったり、内側面上端に蓋の側縁が通る蓋溝を作ったりしているものと、両小口上端面を削り落とすものがある。これに伴う蓋は挿入蓋とあわせ蓋が用いられたとみられる。刳抜式箱のすべてが樹種同定されているわけではないので確かなことはいえないが、オニグルミ製の中広形を除くと、広葉樹製の箱には蓋溝が切られておらず、針葉樹製には蓋溝がもうけられているので、広葉樹・針葉樹で作り分けがなされていた可能性もある。大きさでは小形・中細形・中広形・大形の4者がある。樹種はマキ属・イヌマキ・イヌガヤ属・タブノキ・オニグルミ・サカキなどが用いられているが、あとでも述べるようにサカキ製の小形箱は舟形容器の未成品の可能性もある。

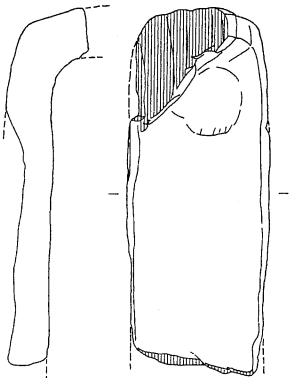
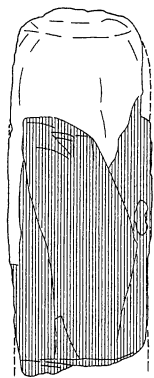
差込式の蓋は、これまでの木の組合せ方法と異なり、組合せのための移動距離が長くなっているため、組合せ部の密着度を高めようとする、加工のより高い達成度が求められることになる。台がんな出現以前にあって、加工精度の高さを内在的に指向する木をスライドさせて組み合わせるという方法は、指物を生み出すものの一つであったと考えられる。

組合せ式の箱では底板・側板・小口板があって、天板は出土していない。底板には側板・小口板を組み合わせる溝が、側板には小口板を組み合わせる溝が彫ってあって、それぞれを木釘で留めている。組合せ式の箱と一括したが、この中には槽作りの琴の部材が含まれる可能性もある。各部材組合せがわかる状況で出土した青谷上寺地遺跡の琴⁽¹⁷⁾で見ると、底板は小口板を受ける溝を付けてはいるが、側板用の溝は彫られていない。699は同様に作られているので、これは槽作りの琴の底板の可能性もある。

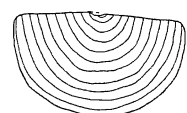
680～694は刳抜式の箱である。680は大形の箱で側内面の蓋溝は持たない。タブノキの心持ち材で全長83.1cm幅9.5cm高さ5.4cmである。681は大形箱の小口部分の小片である。683は唯一出土した刳抜式箱の蓋で、短辺の片方に2.5×2.8cmの方形のつまみをつける。両側縁は上面から斜めに厚さを減じている。カヤ属の板目材で、全長38cm幅9cm厚さ1.5cm。684は中細形箱のほぼ完形品で、内側面上端には蓋溝がある。内底面には加工痕が顕著に残っている。マキ属の心持ち材を使って全長42.5cm幅11.4cm高さ7.3cmである。685は大形箱の長辺口縁部の破片で、直接接合はしないが同一個体と見られる。内面に蓋の側縁が通る溝がある。686は全長60.2cm幅8.85cm高さ7.6cmの大形箱で、土圧により横に変形している。蓋溝は無い。687も大形箱の底部の破片で、片側には小口溝が残る。刳抜式で小口溝を持つのはこの箱だけである。本来、刳抜式であれば小口板を別材で作る必要はないので、破損した箱を短く切って小口を付け直したものと見られる。裏面には加工痕が顕著である。イヌマキ製で、残存長59.7cmである。688は小形の箱で、両小口は四方から凸型に削り落としている。小口上面は双方とも解放しており、蓋はあわせ蓋と考えられる。全長14.3cm幅6.4cm高さ4.5cmである。



681

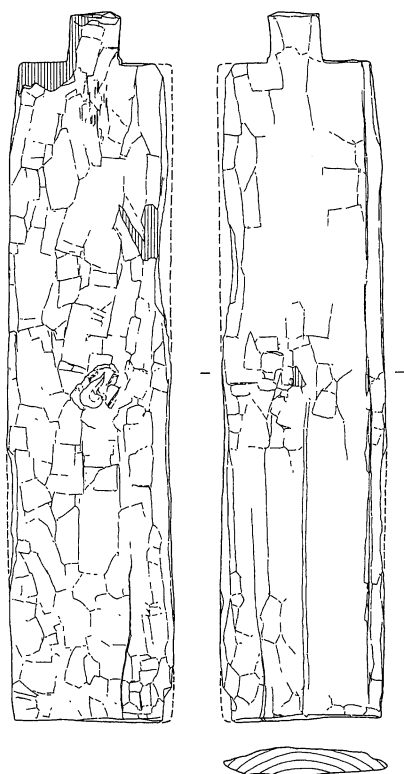


682



680 タブノキ

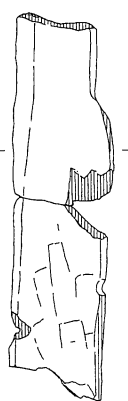
第101図 箱(1)



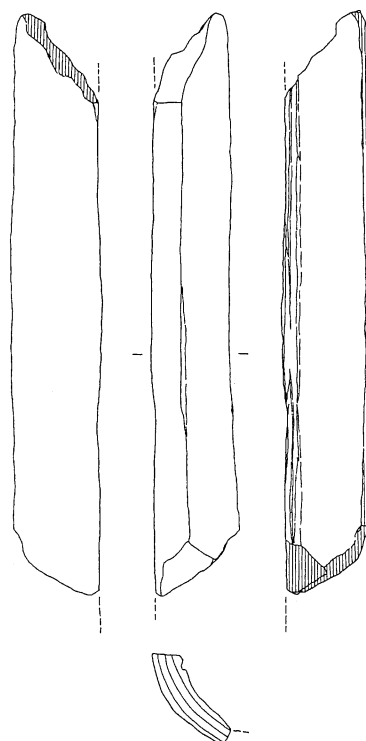
683 カヤ属



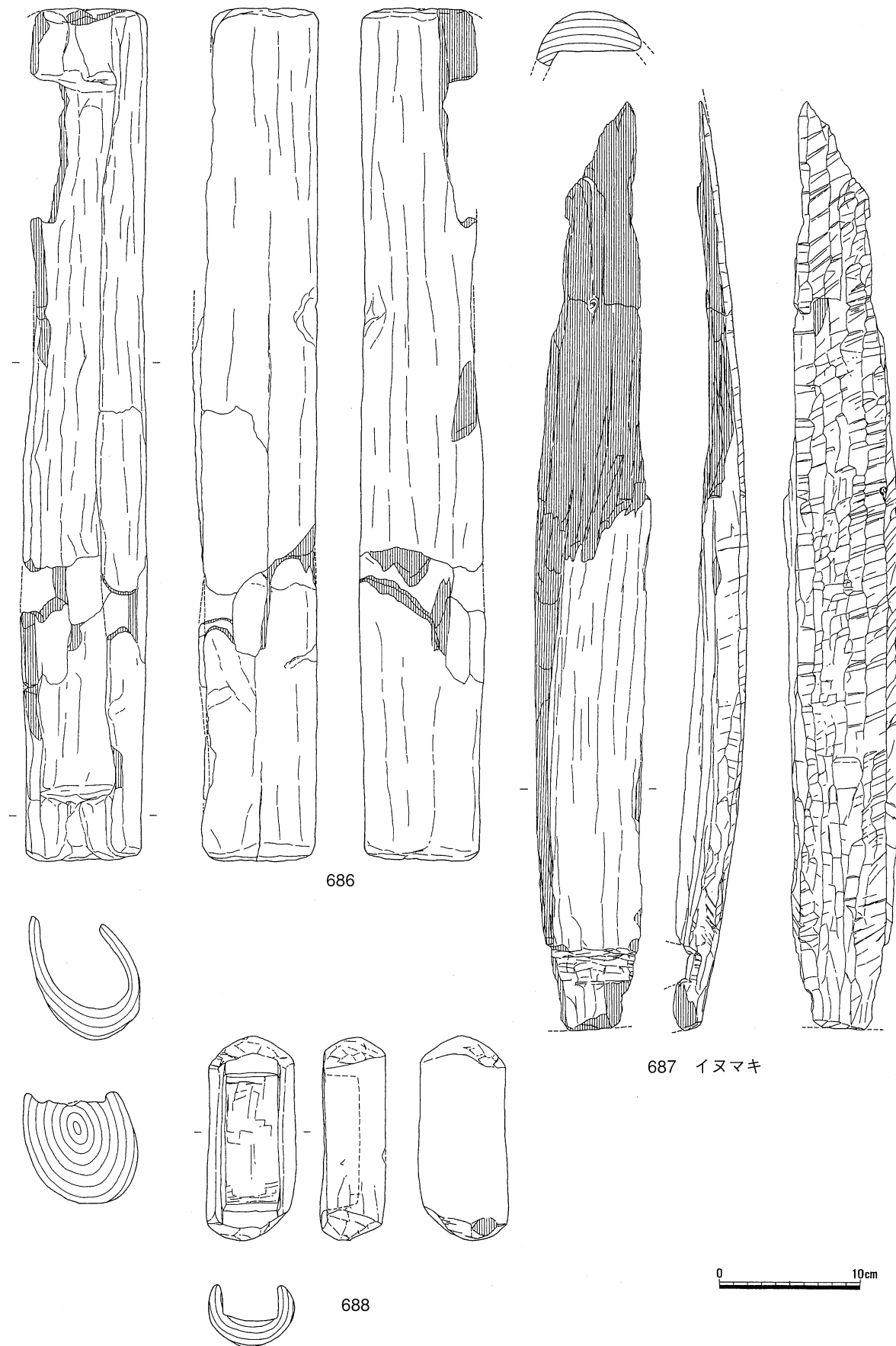
684 マキ属



685



第102図 箱(2)



第103図 箱(3)

689はオニグルミ製で全長49.8cm幅26.5cmの中広形の箱で、蓋溝が内側面にある。土圧による変形が著しい。691は小形の箱で、内側面上端には蓋溝がある。一方の小口内底面に段が残っていて未成品と見られ、内外面の加工痕は顕著に残っている。イヌガヤ属の心持ち材で全長14.5cm幅6.2cm高さ4.9cmである。693・694は小形の未成品である。693は上面を切り落とした状態で内削りは始めておらず、両小口も切り落としたままである。心持ち材を使っている、全長15.9cm幅5.4cm高さ4.2cmである。694は底部の小口側を削っている舟形容器の未成品の可能性もある。全長18.7cm幅6.2cm高さ3.5cmでサカキの半裁材を加工している。

695～704は組合せ式箱である。695は箱の側板で、木釘孔が残っていて小口板とは2本で底板とは3本で留める。小口板と組合せ部分は溝を彫っていないで少しあたりをつけた程度である。天板とは中央付近の2孔で紐止めしたとみられる。モミ属の板目材で、全長38.4cm幅9.5cm厚さ1.5cmである。696はモミ属の板目材製の底板で、幅約1cm深さ5mmで小口板・側板を装着する溝を彫っており、小口板と側板との組合せは小口板を側板が挟む型式である。小口板は木釘2本で側板は3本で止める。木釘孔には1つを除き木釘が残っていて、全長38.9cm幅10.9cm厚さ1.5cmである。697は全長8.3cm幅8.7cm厚さ1.2cmの板目材製の小口板で、2短辺と1長辺にそれぞれ釘孔が2つある。698も小口板とみていたが、他の箱の組合せ方とは異なるので箱以外のものの可能性もある。各辺の中央付近と1つの角に円孔を持つ。モミ属の板目材で、長さ7.6cm幅7.9cm厚さ1cmである。

699は箱底板の完形品で、両小口に小口板を挿す溝がある。小口板・側板結合のための木釘孔が残る。小口板を側板が挟む型式で、先述のように琴の底板の可能性もある。両面とも加工痕が顕著で、ヒノキ属の柾目材が用いられ、全長42.8cm幅13.7cm厚さ1.4cmである。700は針葉樹の柾目材製の側板で、両小口から2.5cmの所に小口板をあわせるための溝をもうけている。底板との結合には約2cmの間隔を持った2対の木釘孔が5組、小口板には溝中央に1つ釘孔が見られる。内外面には細かな加工痕が残っていて全長31.6cm幅6.2cm厚さ8mmである。701は底板で木釘が3つ残存している。702も側板で小口部分に端部まで通らない溝がある。長端面には木釘が3つ残存している。703も箱の側板と思われるが、円孔や小口溝の反対面にも小さな溝状加工を施すなど他の側板とは加工が異なっているので、別の部材の可能性もある。円孔のある長辺に木釘が2つ残っていて、元々2枚あわせかあるいは補修かとみられる。704も側板で、内外面ともに黒漆塗りがされている。漆塗りのない長端面には木釘のあとがある。

腰掛け

一木式の腰掛けが2点出土している。いずれも半裁材を使い、座板を樹皮側にして木取りを行っている。脚はともに座板の縁から内に引いて作り出している。705は方形の平板な座板を持つ腰掛けの縦割れした破片で、小口側の一端も欠く。残存長27.1cm幅11.8cm高さ9.5cmである。706は1/2に縦割れした腰掛けで、楕円形の座板の中央をくぼませている。脚は長さ23cmで一端に直径1.2cmの円孔を持つ。残存長31.6cm幅11cm高さ7cmである。

709は組合せ式の腰掛けの破片で、小口から8cmまでは裏面を削って段を作っている。ほぞ孔部分で切断しているとみられる。残存長15.7cm幅12.7cm厚さ2.2cmである。

机

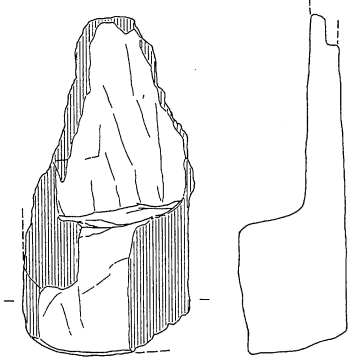
707・708は机の天板とみられる。脚は出土していない。707は復原長85cmの机の天板で、両端の裏面を段状加工した内側に内傾した方形孔がある。丁寧な作りで、表裏とも加工痕が残る。一端は



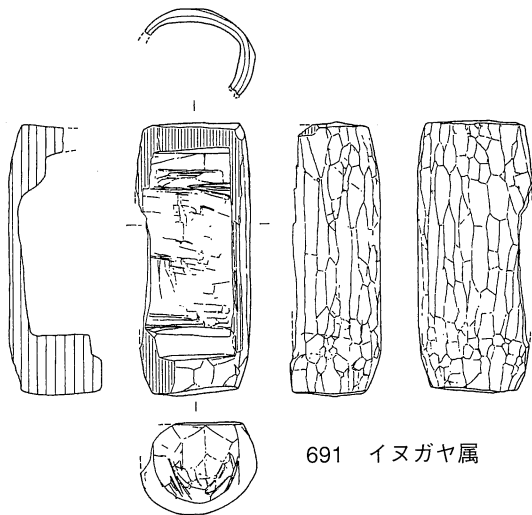
689 オニグルミ



690



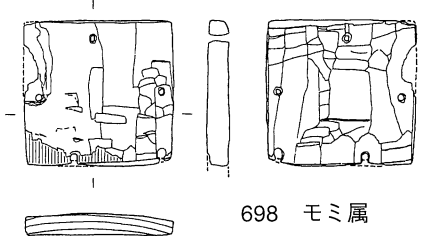
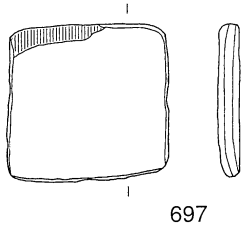
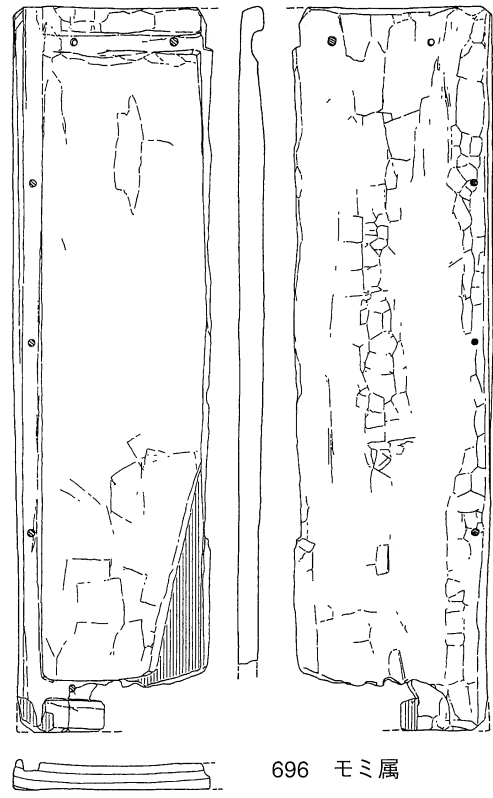
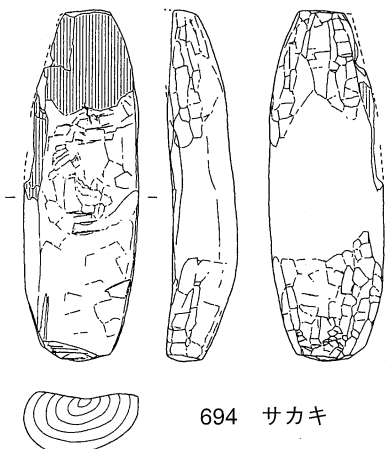
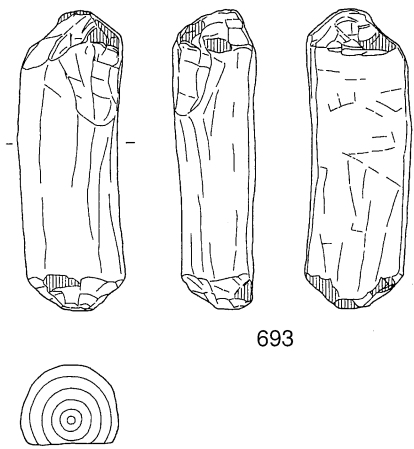
692



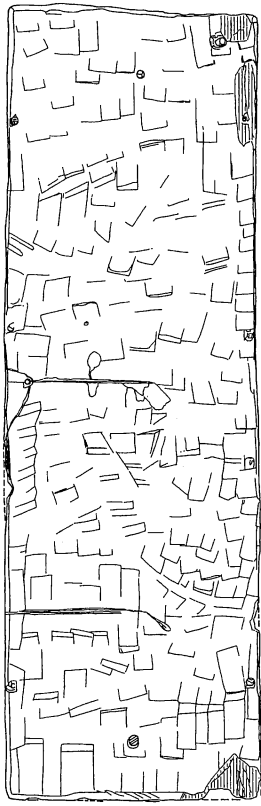
691 イヌガヤ属



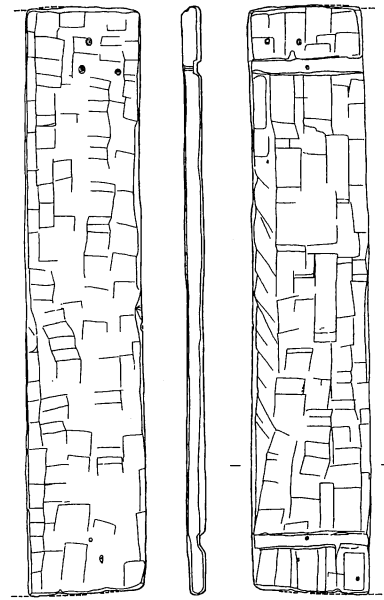
第104図 箱(4)



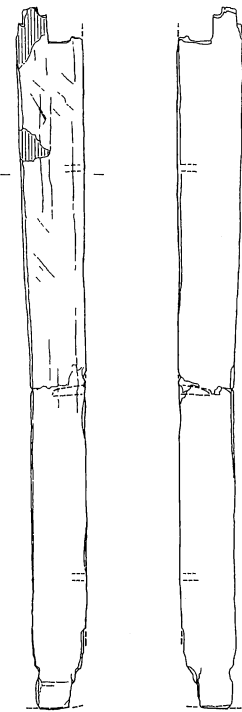
第105図 箱(5)



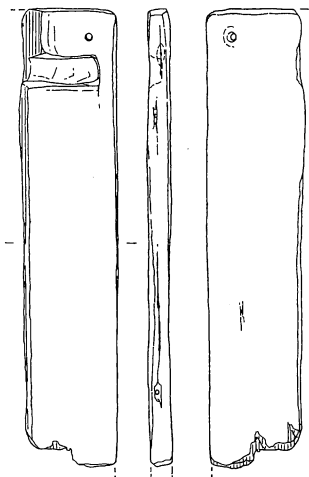
699 ヒノキ属



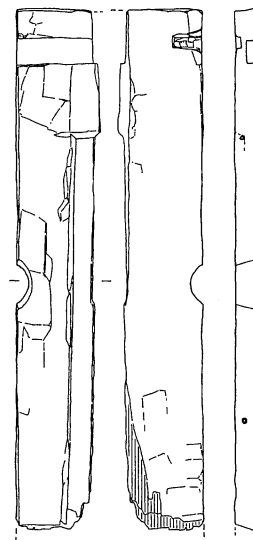
700



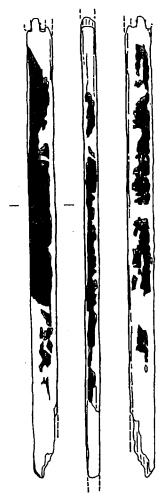
701



702



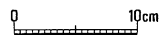
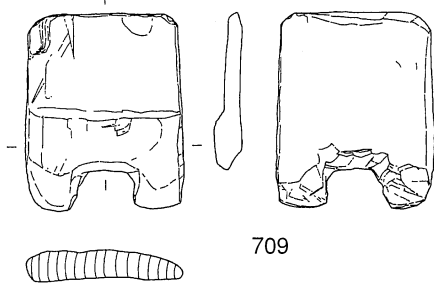
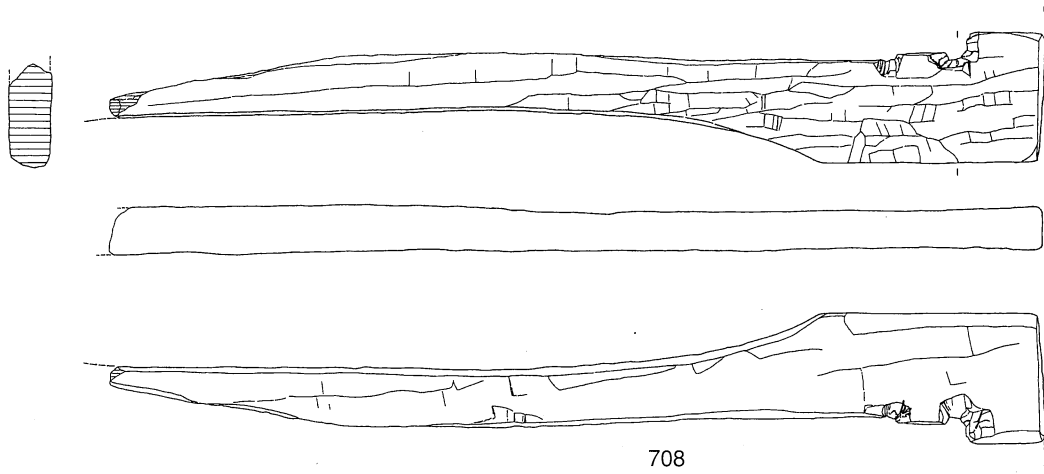
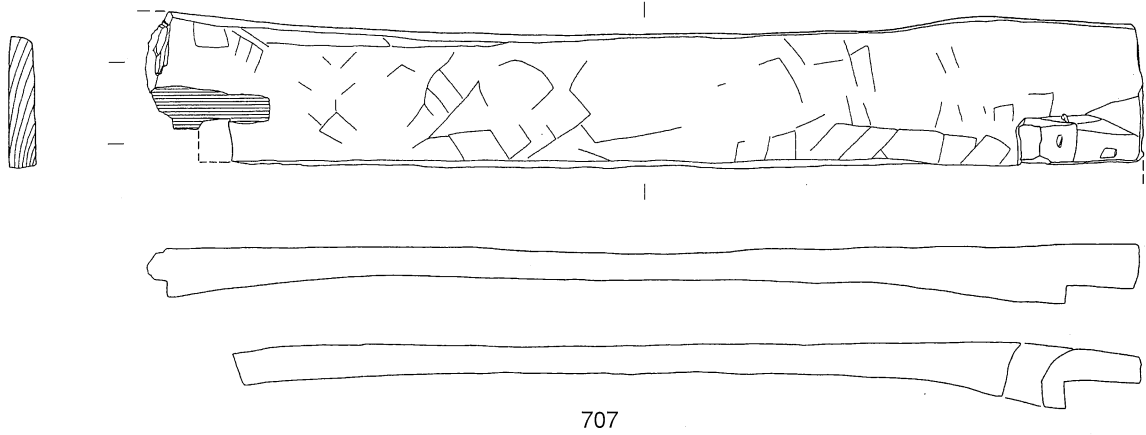
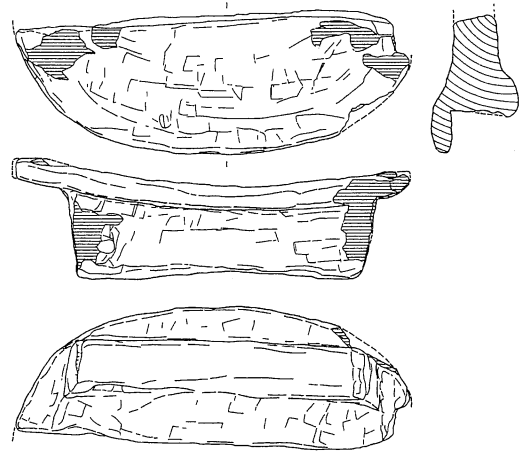
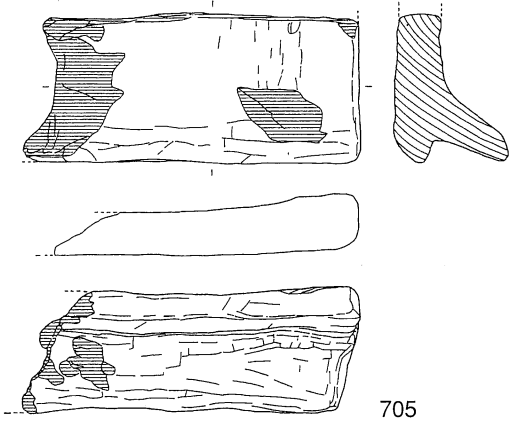
703



704



第106図 箱(6)



第107図 腰掛け・机

12. 雑具

切断されている。板目材を用いていて残存長80cm幅11.9cm厚さ5.3cmである。雀居遺跡出土の雄組合せ式大型機⁽¹⁸⁾では、段状加工の部分で外枠(棧)どうしが組み合い、この部分に彫られたほぞ孔に脚が挿入される。707では段状加工部分にほぞ孔を作っていないので、この加工は組合せのためではなく、意匠的なものと思われる。708は一端を欠くが、長さ74.9cm幅10.4cm厚さ約4cmの広葉樹の柁目材を、側辺中央から弧状に削っている。小口部分には長軸に沿って方形孔を2つあけ、小口面を特に丁寧に加工している。

ハケ状木製品・ヘラ状木製品

710~712・719・721は方形の身に柄が付くハケ状木製品で、713~718・720・722~726はヘラ状木製品である。710は柄の中ほどを欠失しているが、直径1cmの軸に5.4×2.7cmで厚さ5mmの方形の頭部がつく。柁目材を使っていて残存長30.3cm身の幅2.7cmである。711は2.5×1.8cmの楕円形の柄に8×4.7cmの方形状の身がつく。板目材が用いられ、残存長21.3cm身の幅2.8cm厚さ1.9cmである。712は幅2.3cm厚さ9mmの断面方形の柄に8×3.5cmの方形の身がつく。コウヤマキの柁目材を使い残存長25.6cm身の幅3.5cm厚さ1cmである。719は身が断面長方形で柄は扁平な円形を呈する。明瞭な肩を持たず緩やかに幅を減じて柄となる。板目材で、残存長14.2cm身の幅2.9cm厚さ7mmである。721は身の先端を丸くして裏から薄く削っている。長さ8.6cm身の幅3.5cm厚さ8mmである。

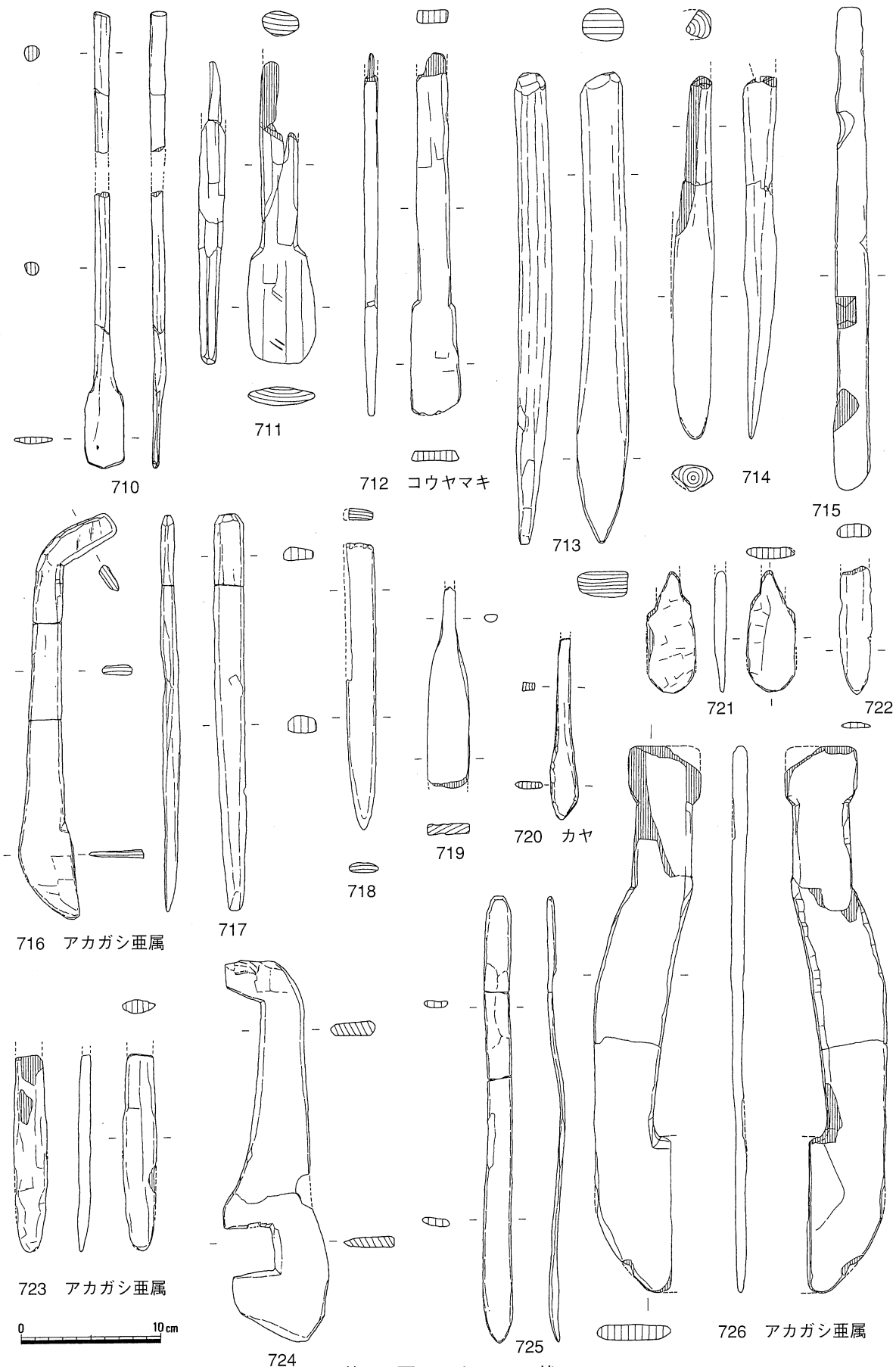
ヘラ状木製品には身が両刃形・片刃形・直線刃形の3者がある。713は両刃形のヘラ状木製品の完形品で、先端は両面から削って薄くしているが側部には面が残っている。全長33.3cm幅3.7cm厚さ2.2cmで板目材を使っている。714は両刃形で、身がやや長くわずかに湾曲させている。心持ち材を使い、残存長25.5cm身の幅2.7cm厚さ1.8cmである。715は柁目材を使った直線形で、残存長39.2cmと長く幅1.5cm厚さ1cmである。716はアカガシ亜属製の片刃形の完形品である。外湾する刃部を持ち、基部は鉤状に曲げている。全長28.6cm幅4cm厚さ5mmである。717は直線刃形で全長28.1cmの完形品で、刃部は片面から薄くしている。幅2.1cm厚さ1.3cmで柁目材を用いている。718は先端が両側から均等に狭まってとがり、竹べらの形によく似ている。板目材を使い全長20.3cm幅2cm厚さ6mmである。

720は小形の片刃形で、刃部はやや鈍く両刃にしている。カヤの柁目材を使い残存長12.9cm身の幅2.7cm厚さ1.2cmである。722は両刃形の先端部の破片で、723も先端が丸いが両刃形でアカガシ亜属の柁目材を使う。724は片刃形で、716とは反対に基部先端を内側に突出させる。身部中央の刃部側に3cm角の欠込がある。ややとがった刃部先端は使用のよると見られる摩滅がある。柁目材で全長27.1cm幅7.4cm厚さ1cmである。725は全長31.6cmと細長い両刃形の完形品で、先端は両側と裏面からとがらせ、基部は両側から幅を狭めながら面を持たせている。柁目材で幅2.6cm厚さ5mmである。726は片刃形であるが、スリットのある曲柄平鋏の転用再加工品ともみられる。アカガシ亜属の柁目材を使い、全長38.7cm厚さ1cmである。なお、後述する第189図1225も刃部側面がやや内湾する直線刃形のヘラ状木製品である。

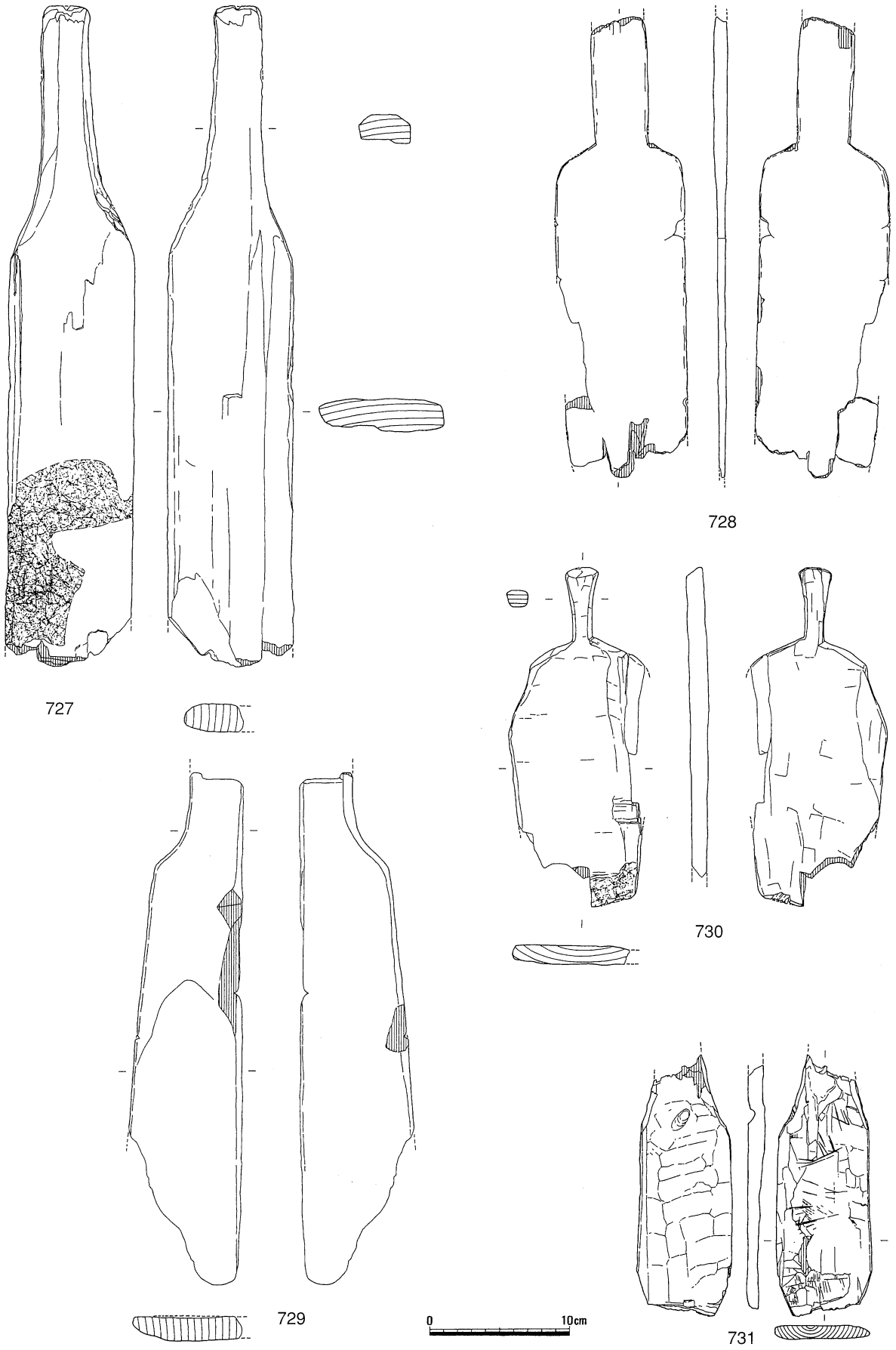
叩き板状木製品

727~734は羽子板に形状が似た叩き板状の木製品である。形態・大きさとも様々で、必ずしも土器製作に用いられたとは限らない。

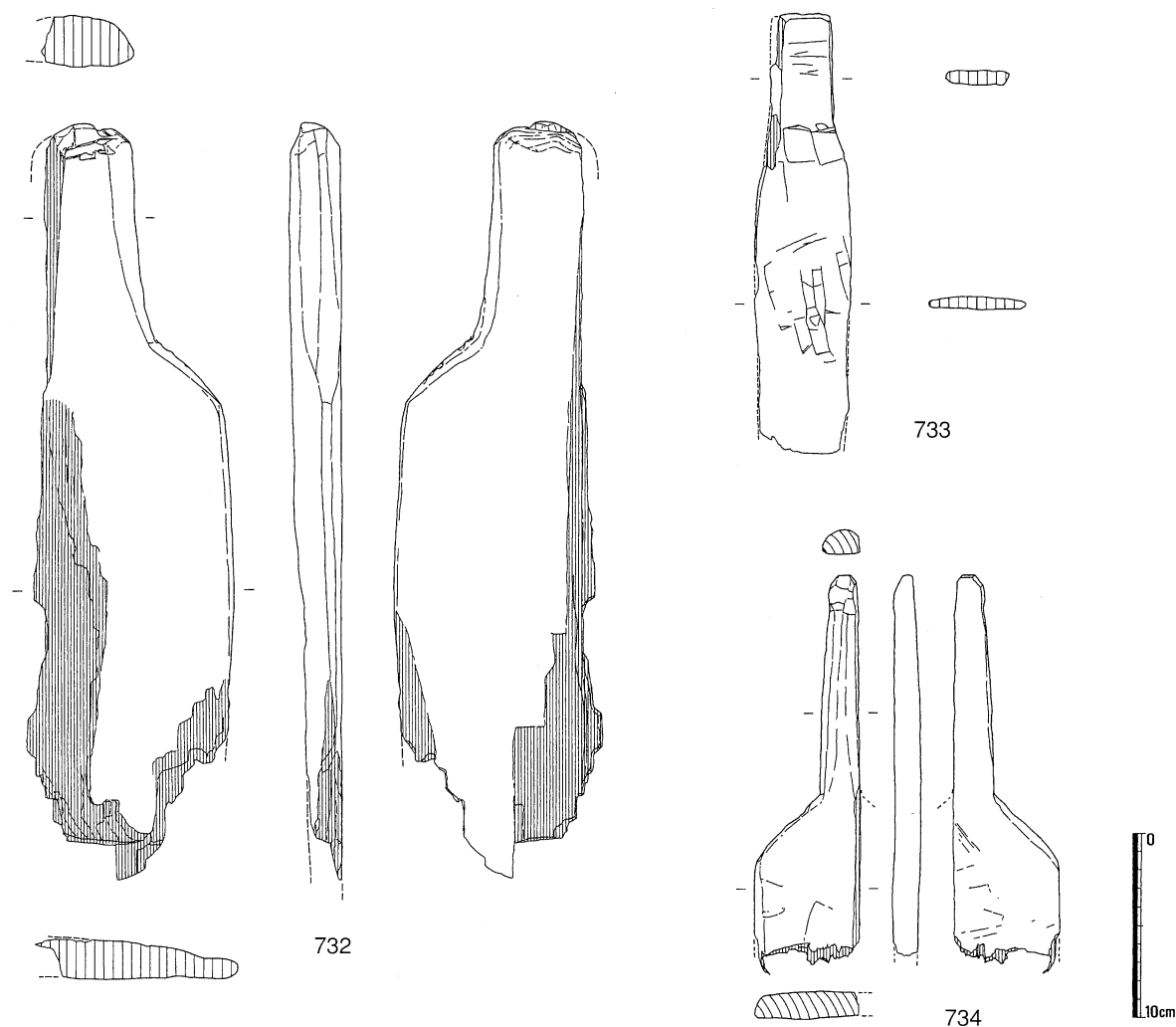
727は残存長46.7cm身の幅9cm厚さ2.4cmで、一部に炭化がみられる。板目材を使っている。728は柁目材を使い残存長48.7cm身の幅13.8cm厚さ1.5cmで、把手の付け根がやや細くなっている。729は縦割れしているが、身が広いタイプ。730は楕円形状の身に、付け根の細くなった短い把手が付く。一



第108図 ハケ・ヘラ状



第109図 叩き板状(1)



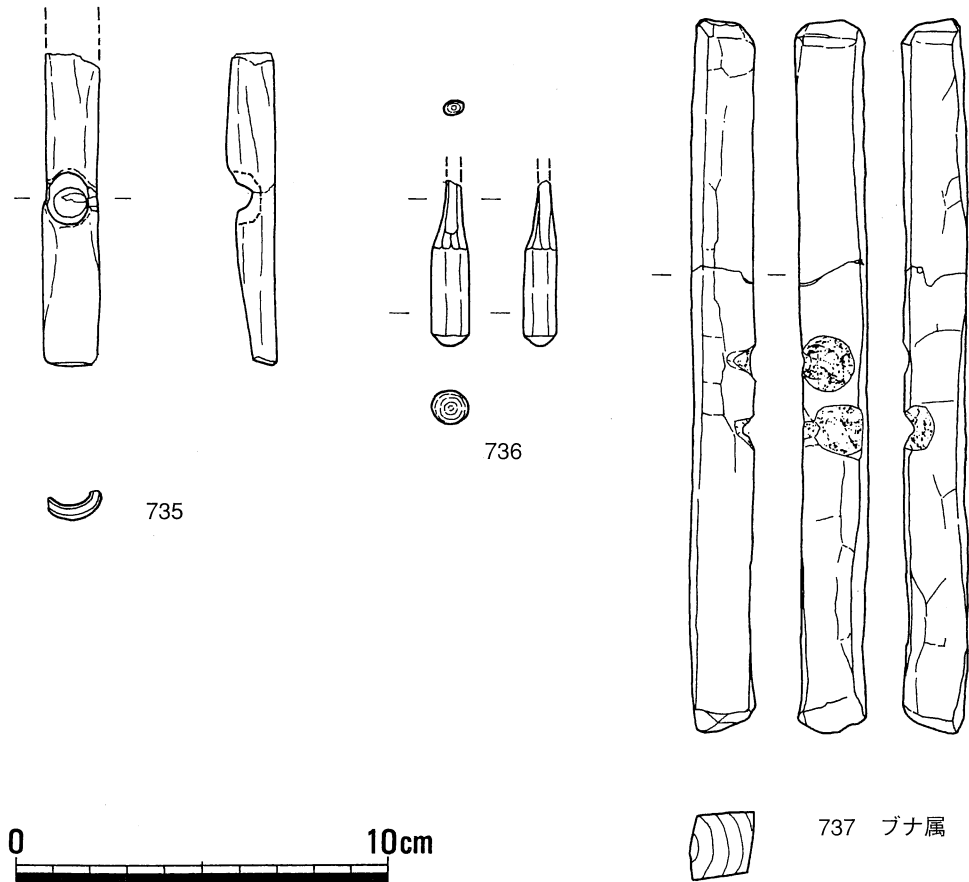
第110図 叩き板状(2)

部炭化した部分がある。板目材を用いて残存長24.1cm幅9.7cm厚さ1.4cmである。731は身の破片で、先端には切れ目を入れ折り取ったような痕跡がある。板目材で、加工痕が明瞭に残っている。残存長18.4cm幅6.8cm厚さ1.2cm。732は縦割れした右1/4の破片で、柁目材を使っている。身は側部に向け薄く加工している。残存長40.6cm幅11.2cm厚さ2.7cm。734は縦割れした左1/4の破片。把手端部に頭部を作る。残存長21cm幅5.7cm厚さ1.5cmで柁目材を用いている。

火きり臼・火きり杵

発火具は火きり臼(735・737)と火きり杵(736)が出土している。2点出土した火きり臼はどちらも火きり穴が1ないし2箇所木片の両側に及んでいて、V字形の刻みは施されていない。小形の携帯用とみられる。

735は火きり穴を中央に1つのみ持つ。心持ち材を使っている、残存長8.2cm幅1.5cm厚さ1.3cmである。737は長さ18.8cm幅1.7cmの四角い棒材を利用し、火きり穴を2箇所持つ。ブナ属の柁目材で全長18.8cm幅1.6cm厚さ1.7cmである。



第111図 火きり臼・杵

736は摩擦部の直径1cmで軸部が細くなっていることから、雇い柄に装着して用いると考えられる。摩擦部が炭化している。心持ち材を使い残存長4.4cmある。

把手

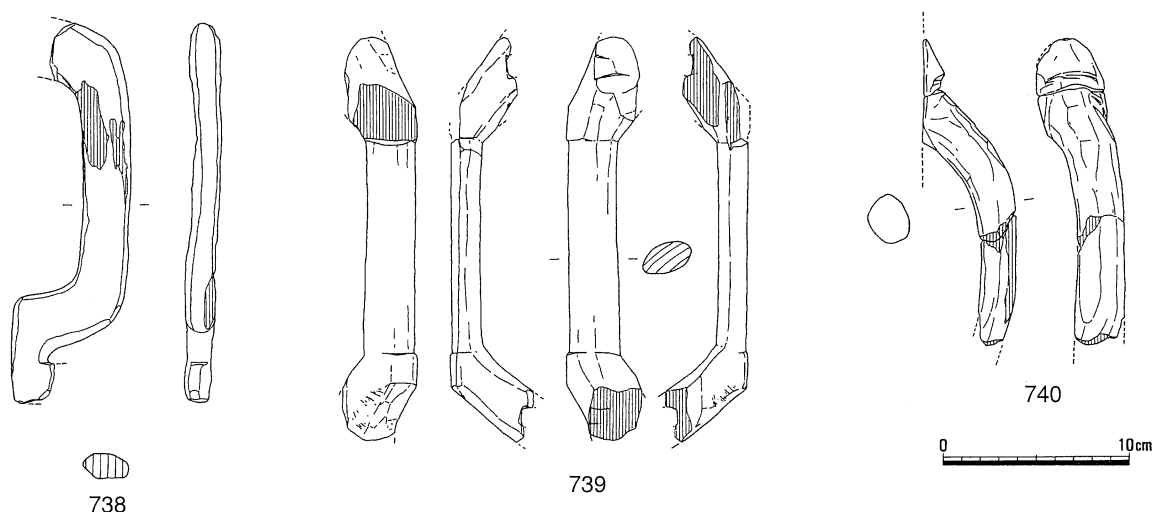
把手は3点出土しているが、何にとりつけられた把手かはわからない。

738はコの字状の把手で、一方の基部を欠くが残存していて基部には紐かけを作る。板目材を使って、残存長22cmである。739は基部の両方もが本体との紐緊縛用の方形孔部分で折損している。握部と基部の角度は鈍角に開いたコの字形である。柁目材を用いていて全長21.5cmである。740は握部が孤状になる把手で、基部には紐かけがある。残存長15.4cmである。

すくい具

ちりとり形の木製品をすくい具⁽¹⁹⁾として掲げる。舟の底にたまった水をくみ出すアカトリと称されることが多いが、深さのあるものは良しとしても、浅いものや側部を持たないものまでもアカトリと言うのは無理があろうし⁽²⁰⁾、身幅の狭いもの以外はきっちりとした平底の舟が前提となろう。アカトリとの区別を決める基準が定まるまではすくい具と総称しておきたい。樹種は判明しているものではクスノキないしクスノキ属である。

741は大形で深みのあるすくい具の未成品とみられる。横断面楕円形、縦断面逆台形で広い小口面に7.5×5×5cmの突起がつく。全体に加工痕は顕著であるが、表面の劣化により観察しにくくなっ

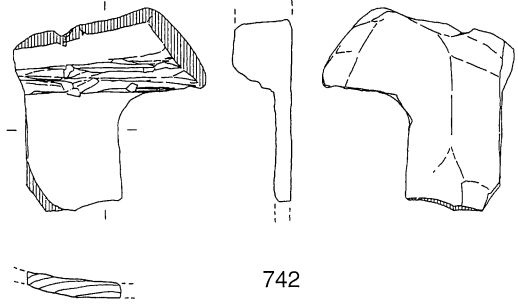
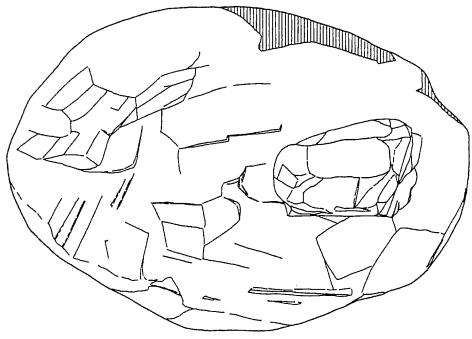


第112図 把手

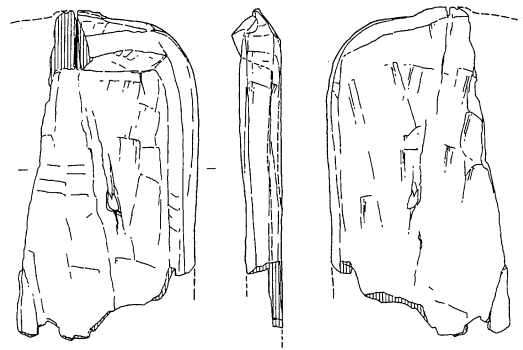
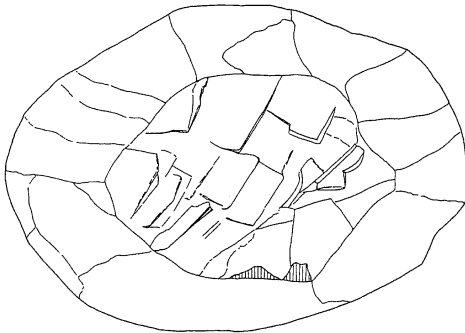
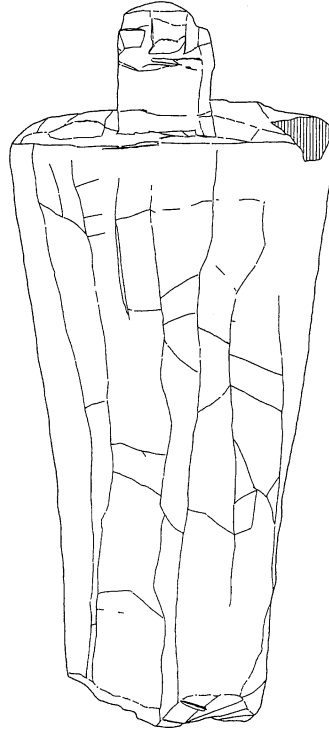
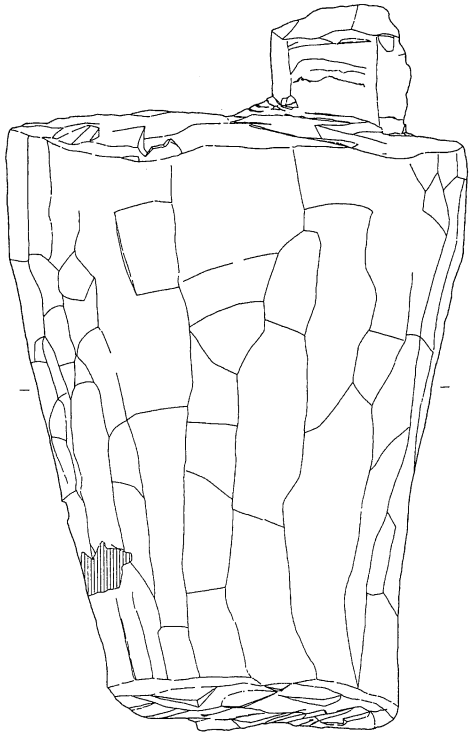
ている。心持ち材を使い、全長39cm幅24.8cm厚さ16.4cmである。742は前端部の小片で、前内側面に加工痕が顕著に残っている。743は身の半分および把手を欠き、残り具合はあまり良くない。クスノキの横木取りで残存長17.5cm幅9.8cm高さ2.6cmである。744・745はほぼ同じ段階の未成品であるが、745には先端に切断痕が残っていて、744の方がより加工が進んでいる。744は外形の粗成形段階。内削りは始めていない。幅4～5cmの加工痕が残る。柁目材を加工していて全長35.3cm幅13.9cm高さ5.8cmである。745はおよそ外形を成形した段階の完形品で柁目材を使い、全長28.8cm幅13.5cm厚さ6.2cmである。

746は前端面上部に方形孔がある。組合せ式の把手をこの孔に差し込むか、あるいはそのまま親指を入れて使用するとみられる。クスノキ製で全長28.5cm幅20.9cm高さ5cmである。747はクワ属の柁目材製の完形品で、高さ2.7cmと身に深さがないので、舟のアカトリではなく固体のすくい具と考えられる。表裏面とも加工痕が細かく残っている。全長28.5cm幅16.4cmである。748は把手を持たない。柁目材が用いられていて全長16cm幅12.3cm高さ5cmである。749は身の基部から把手にかけての破片で、把手端部を大きく円盤状に肥厚させてグリップエンドとしている。身の内法幅が4cmと狭い割りに深さが4.5cmあり、身の中央ではさらに深くなると思われるので、アカトリの可能性もある。クスノキ属材の横木取りで残存長16.5cm幅7cm高さ6.6cmである。750は左側部の破片で把手を欠く。長さ13.3cm幅5.7cm高さ1cmで縦木取りである。

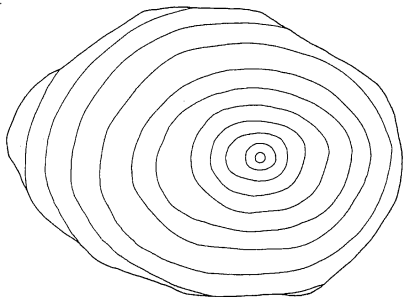
751は側辺のない方形の身に、身の幅から徐々に細くなる把手が付く。ほぼ完形品で身の先端に炭化が見られる。縦木取りで全長31.9cm身の幅13cm高さ1.5cmである。752はちりとり形の小形の完形品である。身は先でやや広がる台形状で深さは基部部分で2.7cmと浅く、長さ3.8cm幅3cmの小さな把手が底部から取り付く。クスノキ属材の縦木取りで全長20.5cm幅11.8cm高さ3.8cmである。753は身の縦半分の破片で、把手を欠き、側辺を持たない。縦木取りで残存長23cm高さ6cmである。754は前面と把手の破片でクスノキ材の縦木取りで残存長13.9cm幅14.8cm高さ5.2cmである。755は小形品で先端が炭化し、側部を持たない。把手の端部には球形の頭部を作る。加工痕が顕著に残っている。縦木取りで全長16.3cm幅10.5cm高さ2.4cmである。



742



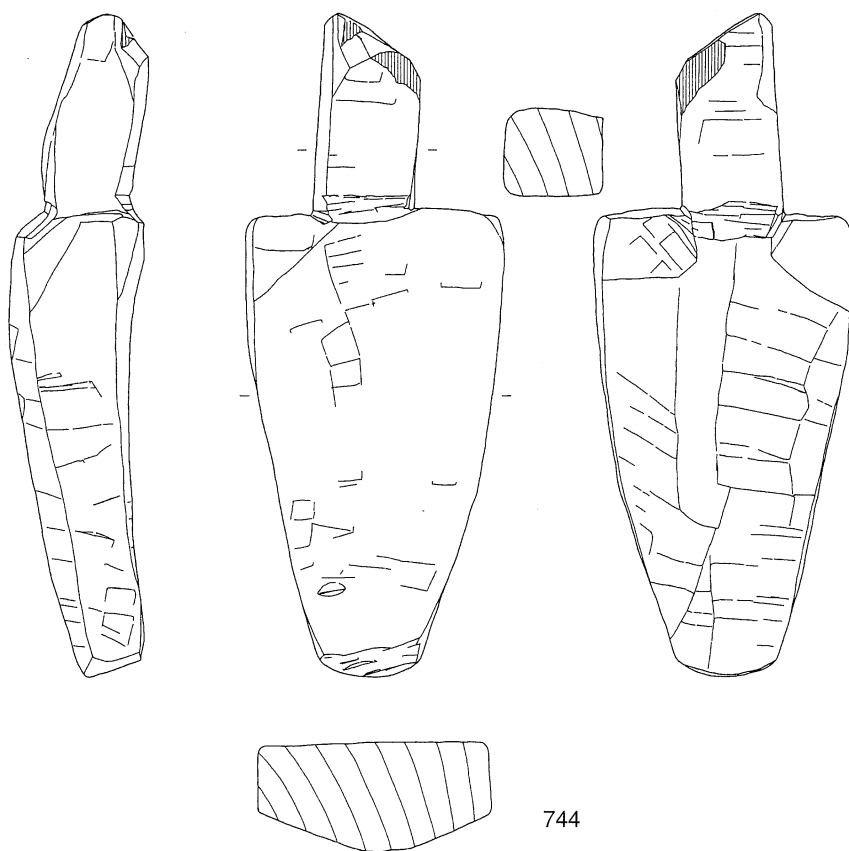
743 クスノキ



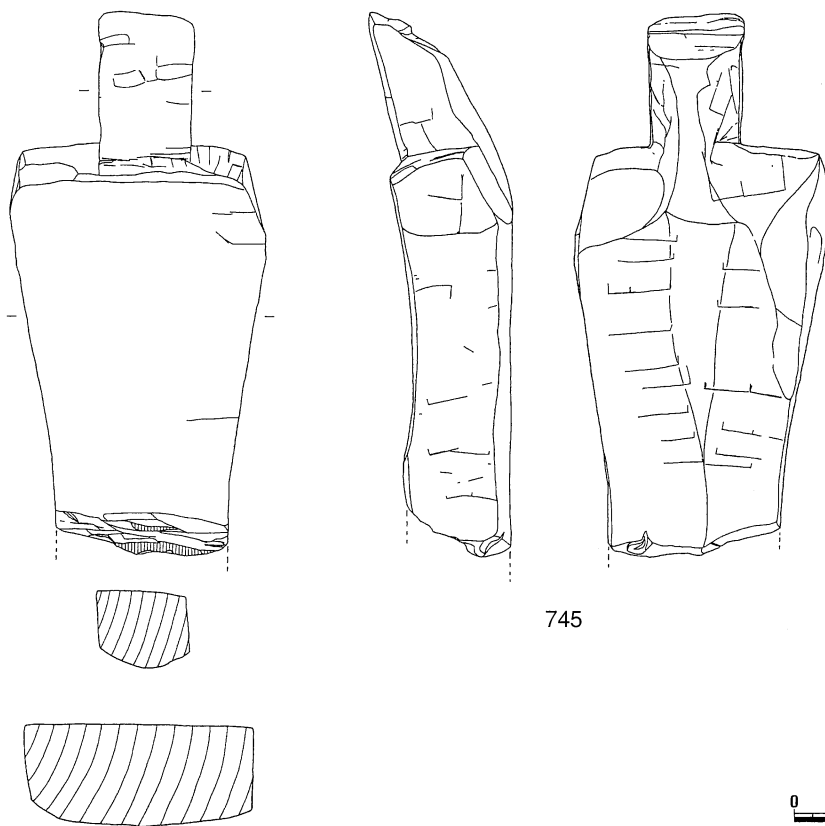
741

第113図 すくい具(1)

0 10cm



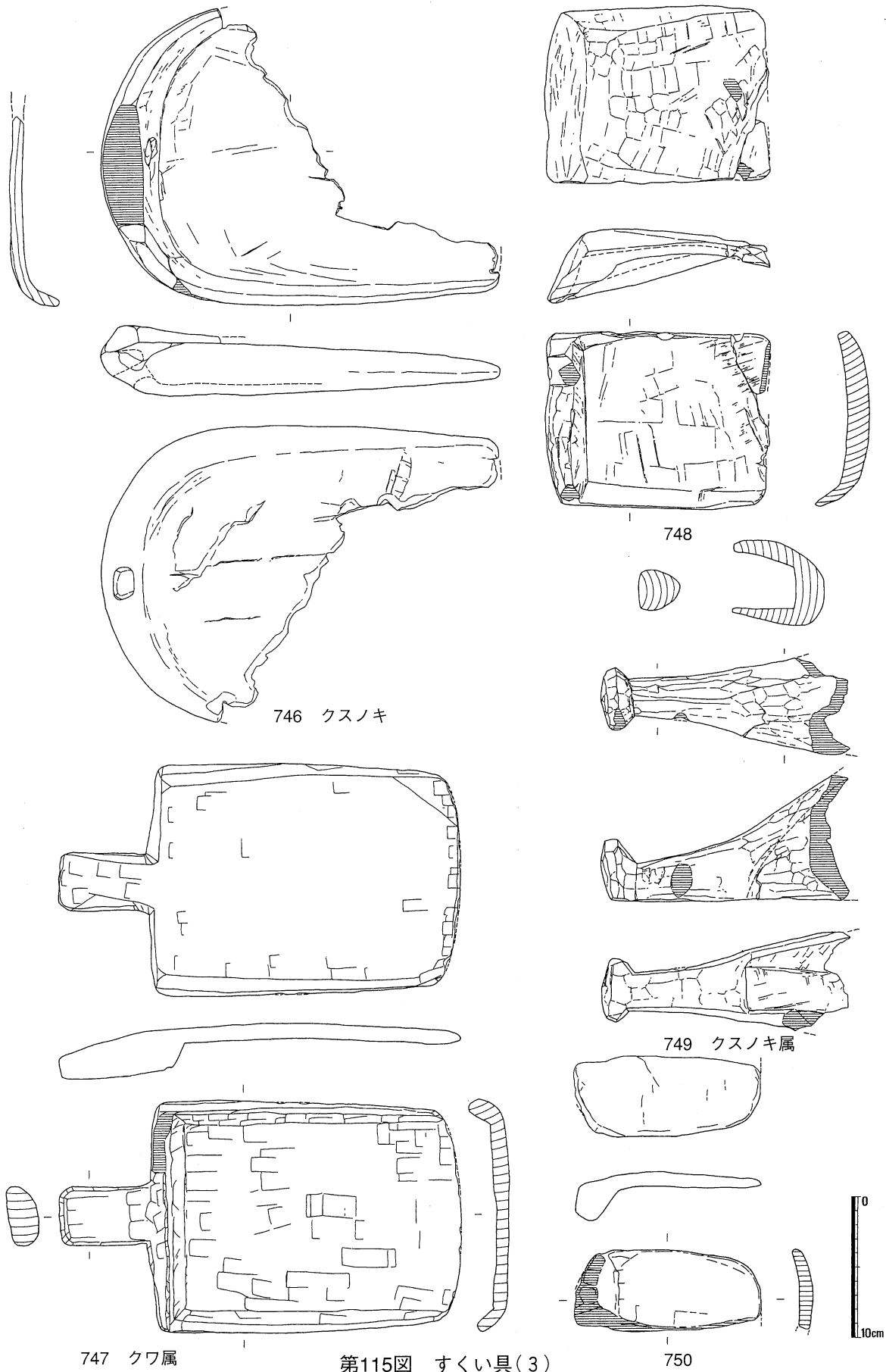
744

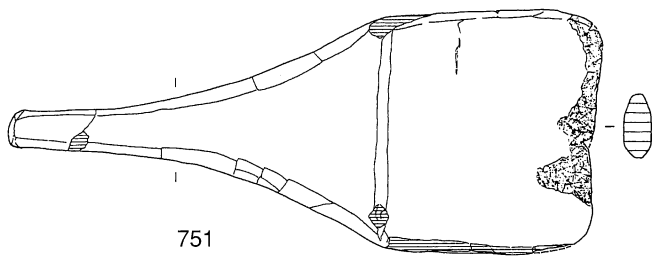
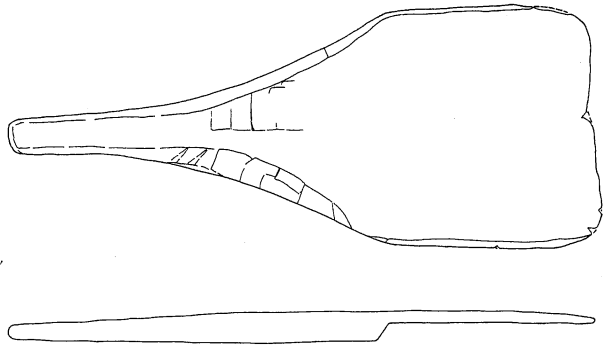


745

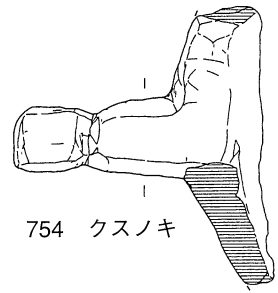
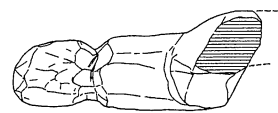
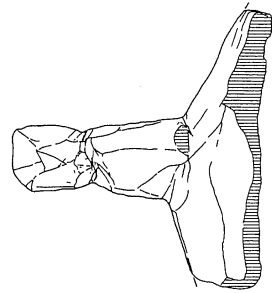


第114図 すくい具(2)

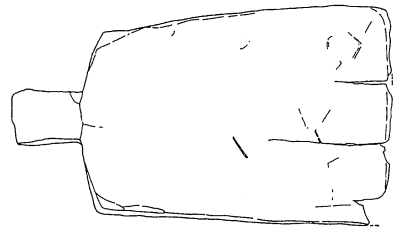
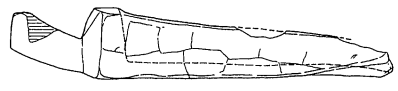
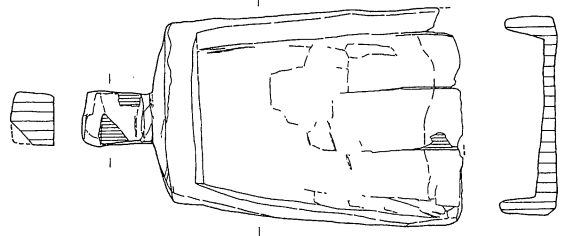




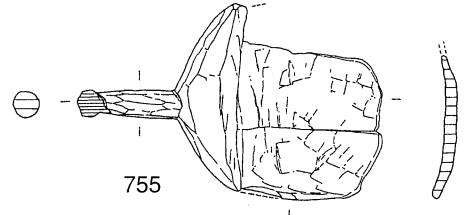
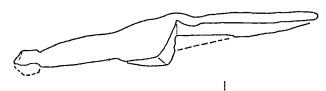
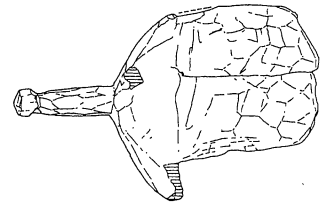
751



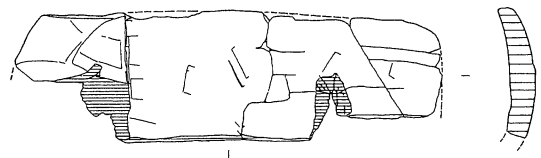
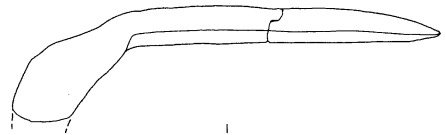
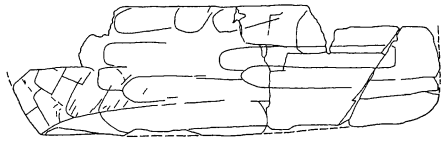
754 クスノキ



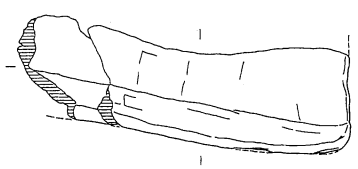
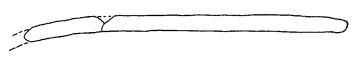
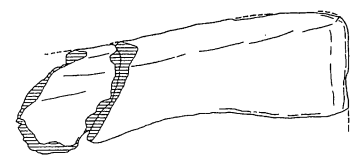
752 クスノキ属



755



753



756



第116図 すくい具(4)

鉤状木製品・多枝付木製品

幹と短く切った1ないし数本の枝を利用した木製品のうち、枝が上に開くものを鉤状木製品、反転させて下に開くものを多枝付木製品とする。鉤状木製品のうち枝が1本のは自在鉤と呼ばれており、ここでもそれに従う。多枝付木製品については浅岡俊夫氏が整理されている⁽²¹⁾。ここでは衣笠とされる。I～III類を除き、別の用途とされる、IV類を取めている。

757～761・765・766は自在鉤である。757は軸部背面を削って面を持たせていて、鉤手の付く面を前面と仮称すると右側面に縄かけ状の加工が一つ施されている。長さ14cmの鉤手は先端をとがらせている。加工痕が顕著に残っていて、軸部中央の節回りや基部の加工は粗い。残存長は44cmあって、軸の太さは3.5cmである。758はほぼ完形品である。通常とは逆に枝を軸部に幹を鉤手にしている。軸部には小さな頭部を削り出して作っていて、鉤手の先端は鉛筆状に削って尖らせている。全長35cmで鉤手の長さ18cmである。759はケヤキを使った自在鉤で、9.5cmと短い鉤手は先を細くして先端は丸い。又部はややすれている。全長28.6cmである。760は鉤手の先端を欠く。軸部には長さ2cmの頭部を作り出し、頭部から湾曲部にかけて外面に面取り加工を施す。残存長19.3cm。761は小形の自在鉤の完形品で、軸部には長さ2cmほどの頭部を作り出し、鉤手先端はとがらせている。全長は21.6cmで、鉤手の長さ11.5cmである。

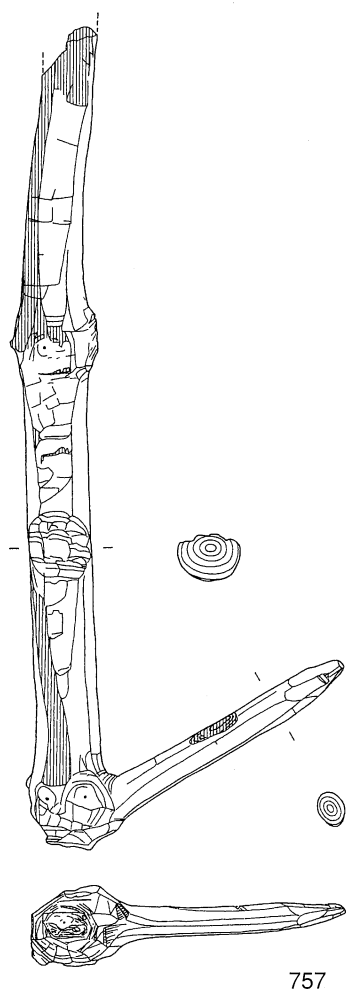
762～764は鉤手が2ないし3つ付く鉤状木製品である。762は上下2箇所には枝分かれ部分を残している。上の枝部は欠損しているが、下の鉤手は長さ9～10cmにして先端を細く加工している。残存長54.6cmである。763は幹と太い枝1本細い枝1本を利用している。細い方の鉤手先端には頭部を作り出しているが、ほかは欠損のため不明である。全体に炭化している。残存長40.5cm、鉤手の長さは太い方が21cm細い方が14cmである。764は平面三角形の頭部を持ち、鉤手は枝3本を利用して先端を尖らせている。全長26.6cmのほぼ完形品で、軸部下端を丸く加工している。

767～770は多枝付木製品である。767・769は後面を面取り加工していて、縄かけを軸部の上・下端部に作っている。767の鉤手は枝3本を利用して先端はとがらせている。加工痕が顕著に残っている。全長25.8cm。769はイヌガヤ属製で全長21.8cmである。768は軸部上端に1.1cm四方の方形孔を持つ。770は1本が折れているが隣り合わせの枝2本を使用していて、全体に加工痕が顕著である。残存長19.5cmで鉤手の長さは12cmである。

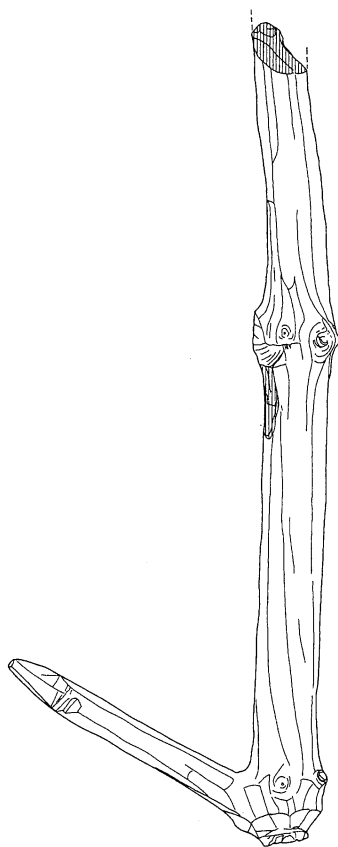
竿受け

竿受けは枝分かれの部分を利用して、軸部に数箇所の縄かけを作っていて、枝分かれの内側に又繰りを施し、左右どちらかの側面に平坦加工を施す木製品である。背負子に形態が似るが、平坦加工を施すならば背負子であれば背中当たる後面にこそ必要であって、側面には必要がない。側面に平坦加工を施した木製品については、柱などに縛り付けて又部に竿などの棒状品をかけて使用する竿受けと考えている。771のように、枝部先端とそれに平行する軸部の縄かけを結んで蔓がかけられた状態で出土した。こうした蔓のかけられ方も、この木製品が背負子ではなく竿受けとして使われた事を示すものと考えられる。この蔓は風などで竿がはずれないようにするためのものであろう。

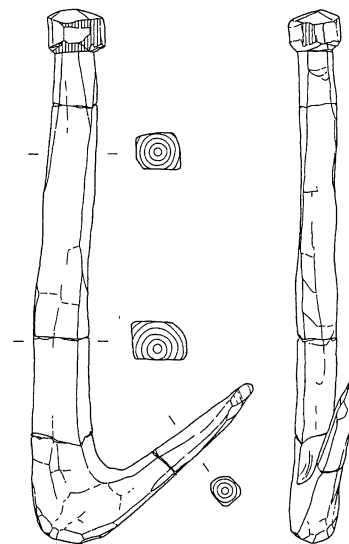
771は完形品で、蔓がかけられている箇所以外では軸部の上・下端および又部と下端中間に縄掛けを作る。半円形の又繰りは小さめで深い。左側面を顕著に平坦加工する。全長66.7cm。772は頭部と枝部先端を欠くが、残存長107.7cmと長い。又繰りは顕著ではなく、左側面を平坦加工する。773は全長97.3cmの完形品である。枝の先端と幹の縄かけを燃ったつる状の紐でつなぐ。縄かけは他に3箇所



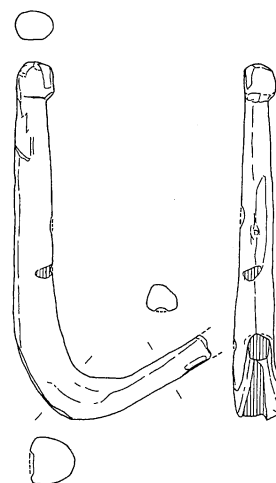
757



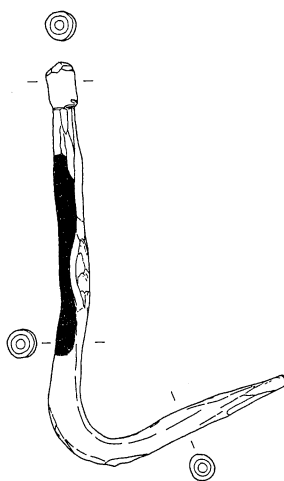
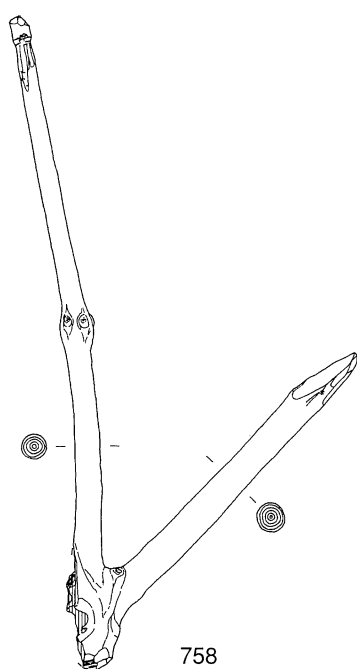
758



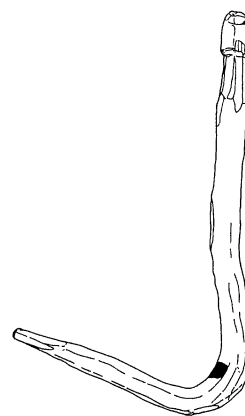
759 ケヤキ



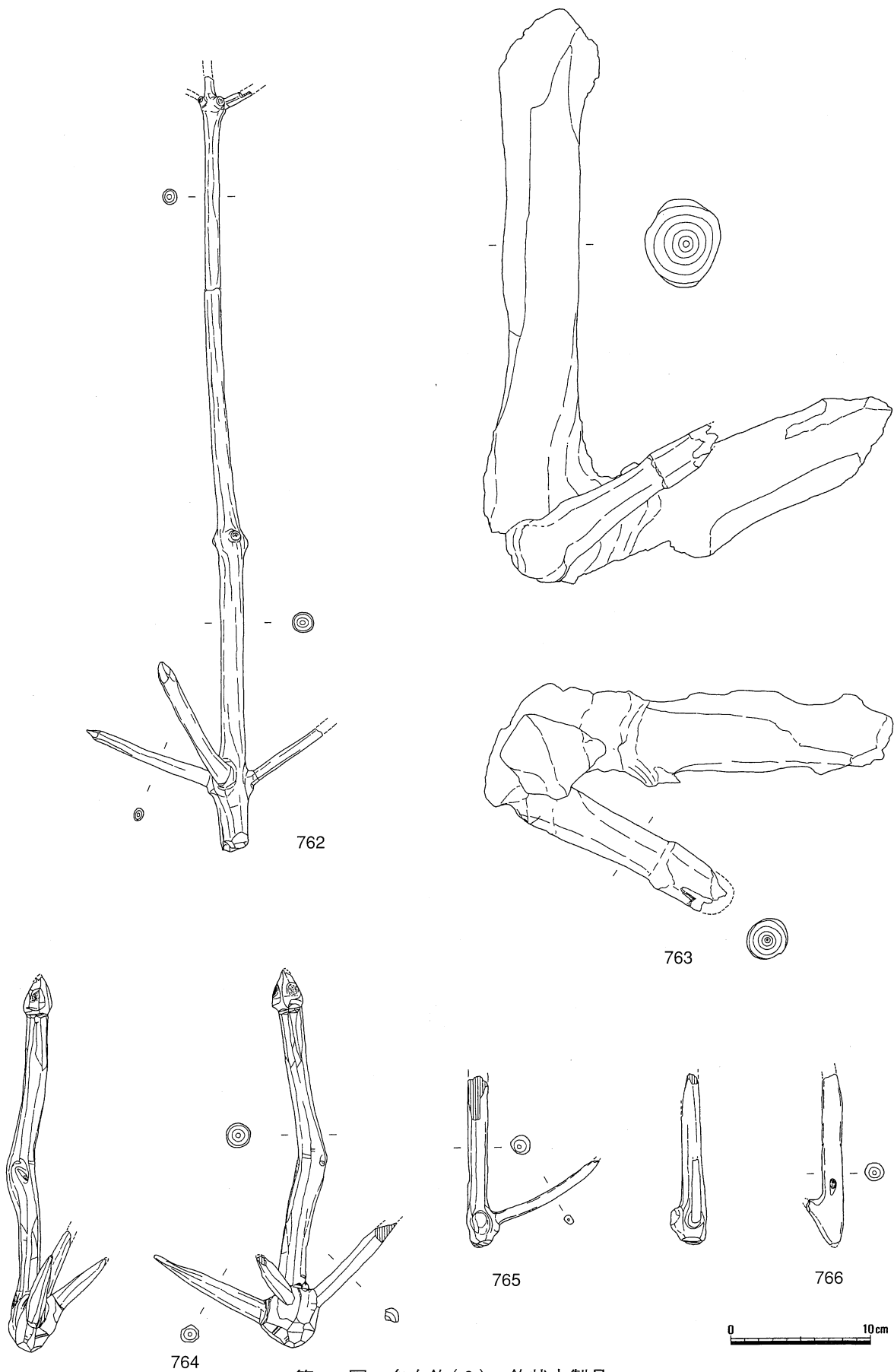
760



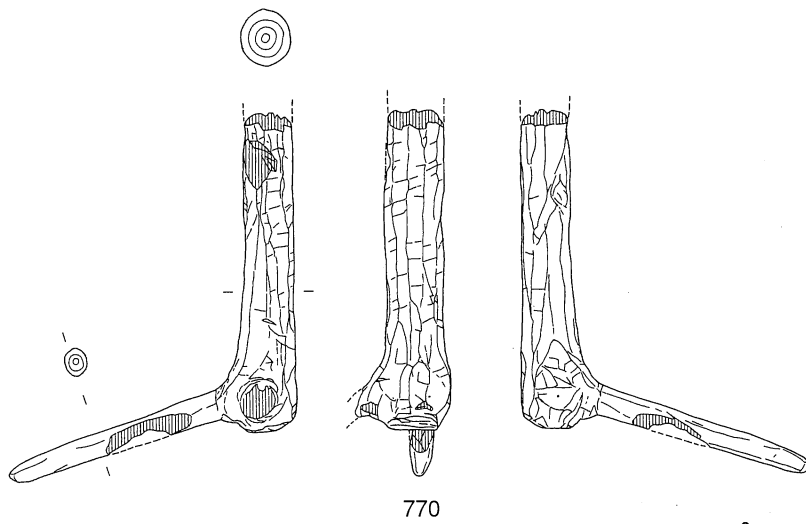
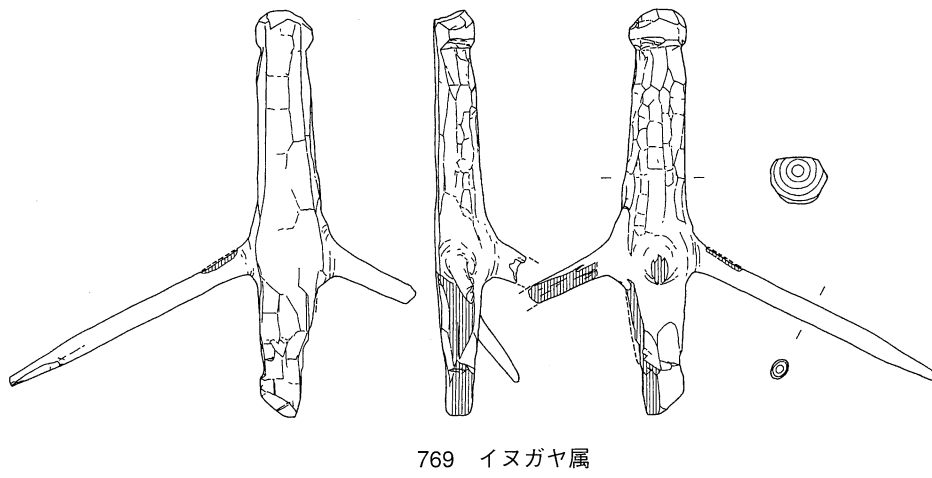
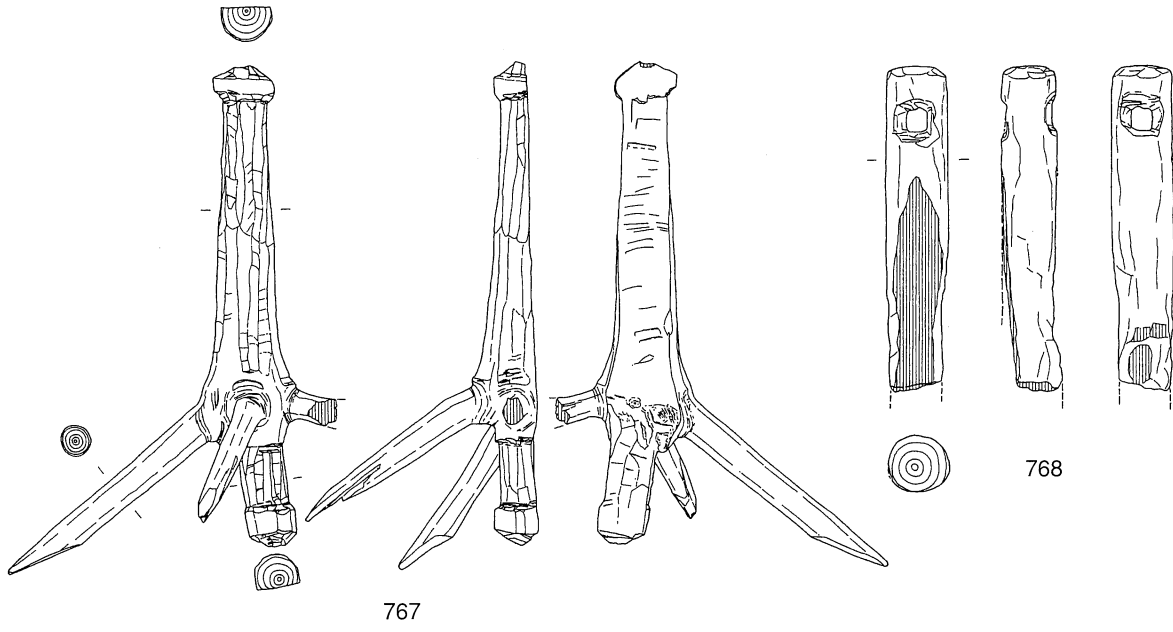
761



第117図 自在鉤(1)



第118图 自在鉤(2)・鉤状木製品



0 10cm

第119図 多枝付木製品

あって、又繰りも行っている。クスノキ科の材を使い樹皮が残る箇所がある。774は771・773と同様に枝の先端と軸部の縄かけをつなぐ撚ったつる紐が残ったほぼ完形品。縄かけは他に2箇所あって、左側面を平坦加工する。又繰りはそれほど顕著ではない。樹種はクスギ節を使っている、全長67.5cmである。775は又部の破片で又繰りがある。枝部先端には3面に縄かけを作り出す。777は軸部上半と枝部を欠くが、左側面を全面にわたって平坦加工を施している。

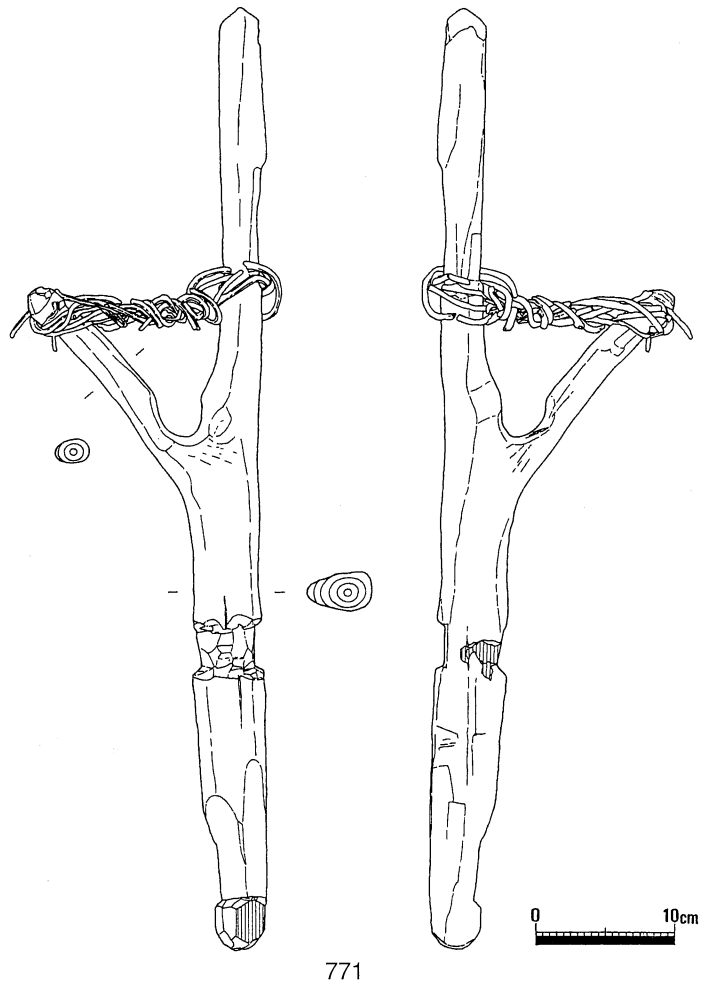
778は全長90.7cmのほぼ完形品である。軸部下半の左側面を平坦加工し、縄かけは5箇所あるが、又繰りはみられない。779は又部から上部の破片で、両端を欠損している。枝部は接合しないが同一個体と思われ、先端に球形の頭部を作り出している。又部には又繰り加工を施している。780は上下両端を欠損していて、枝部先端は球形の頭部を持つ。縄かけは3

箇所あって、又繰りは顕著である。783は右側面を全面にわたって平坦加工し、節帯をつくって縄かけとしている。縦方向の幅の狭い加工痕が顕著に残る。全長73cm。

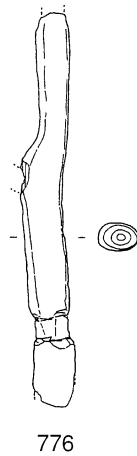
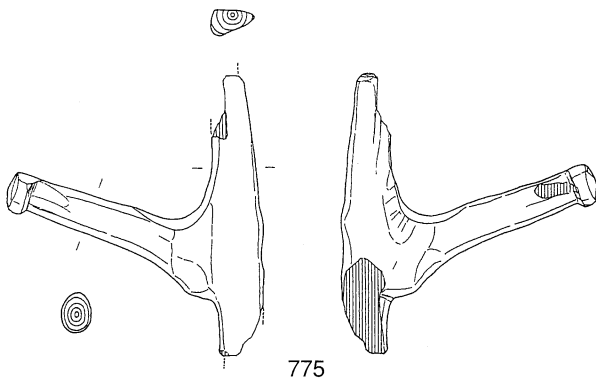
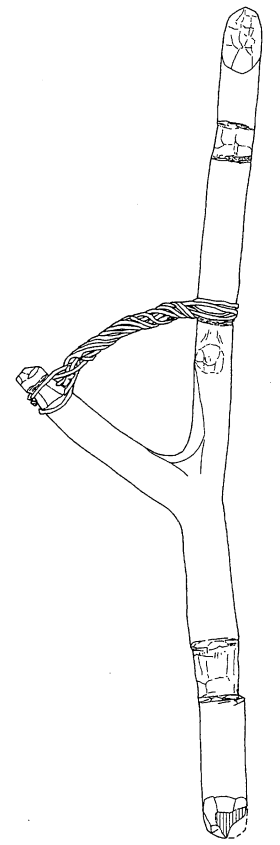
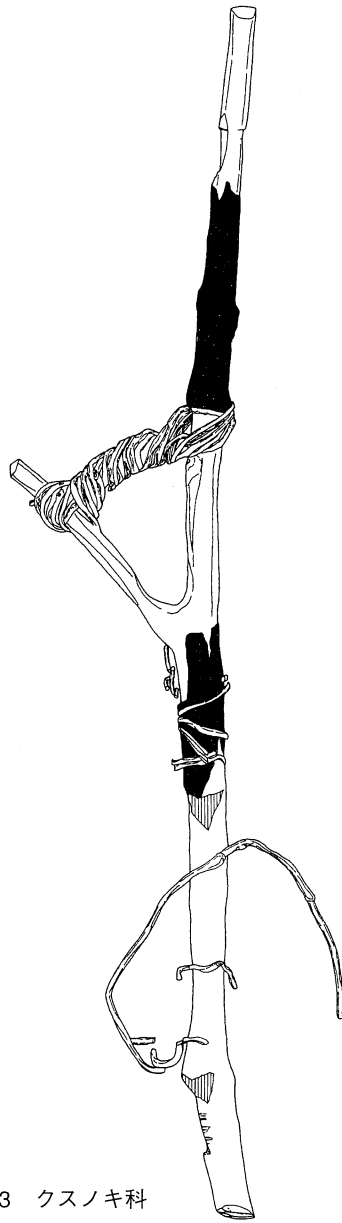
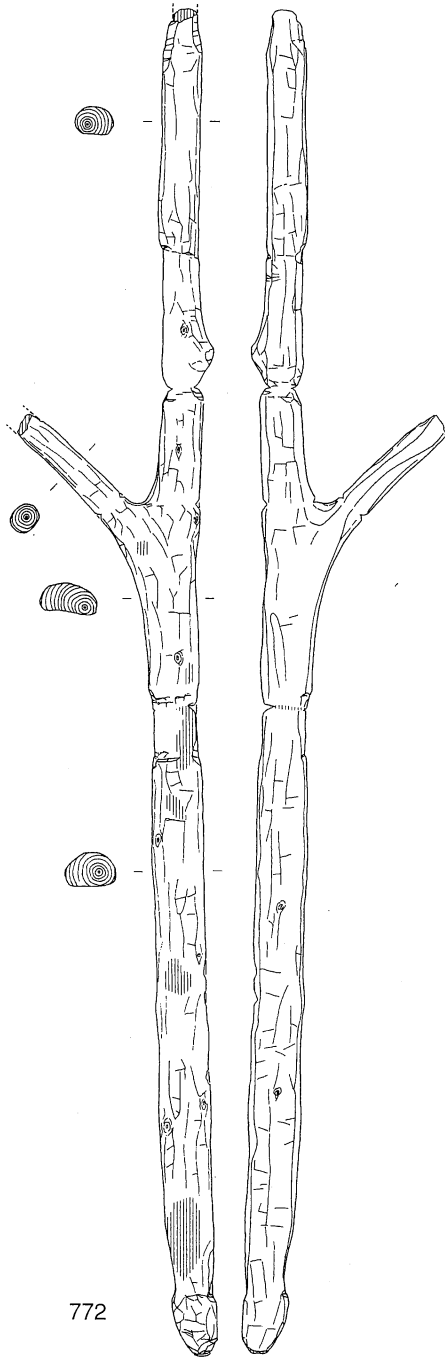
784は他の竿受けよりも太く長い木を使用していて、全体に加工が粗い。径の太い下部には左側面に幅2cm前後の平坦加工をおこなう。全長は130.2cmある。785は上端と枝部を欠損するが、大きな又繰り加工を施していて、縄かけは3箇所ある。右側面の平坦加工は又部の下で顕著である。残存長82.1cm。786は上部・枝部を欠損する。縄かけは3箇所が残存し、又繰りは顕著である。右側面を平坦加工する。

787は右側面を平坦加工する。特に大きな又繰り加工を行い、加工痕が顕著に残っている。又部上部の軸部後面には枝の付け根を残していて、縄かけに使ったとみられる。788は上・下端及び枝木を欠損する。左側面を全面にわたって平滑に加工している。縄かけは3箇所、残存長66cmである。789は縄かけ加工も施されているが、枝が又部をわずかに残しつつも削り落とされていて、竿受けとは異なるかもしれない。樹皮が一部残存していて、残存長は61cmである。790・791は保存状態がよくないが、790では左右両面、791は右側面に平坦加工を施していて、ともに又繰り加工が見られる。792は上端と枝部を欠損しているが、両側面を平坦加工する。

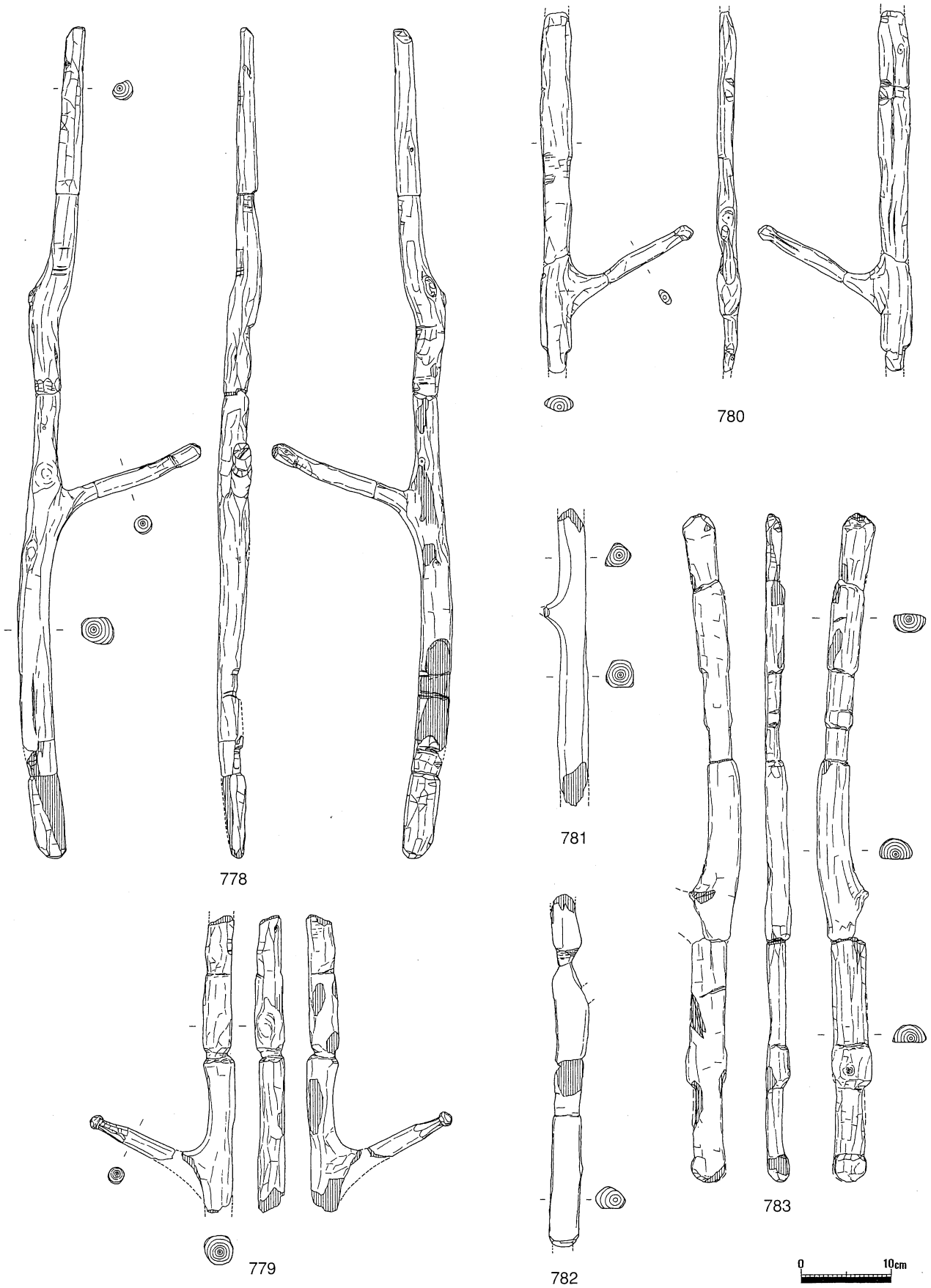
793は上・下端を欠損する。縄かけや左側面の平坦加工はわずかで、残存長は68.3cmである。枝部



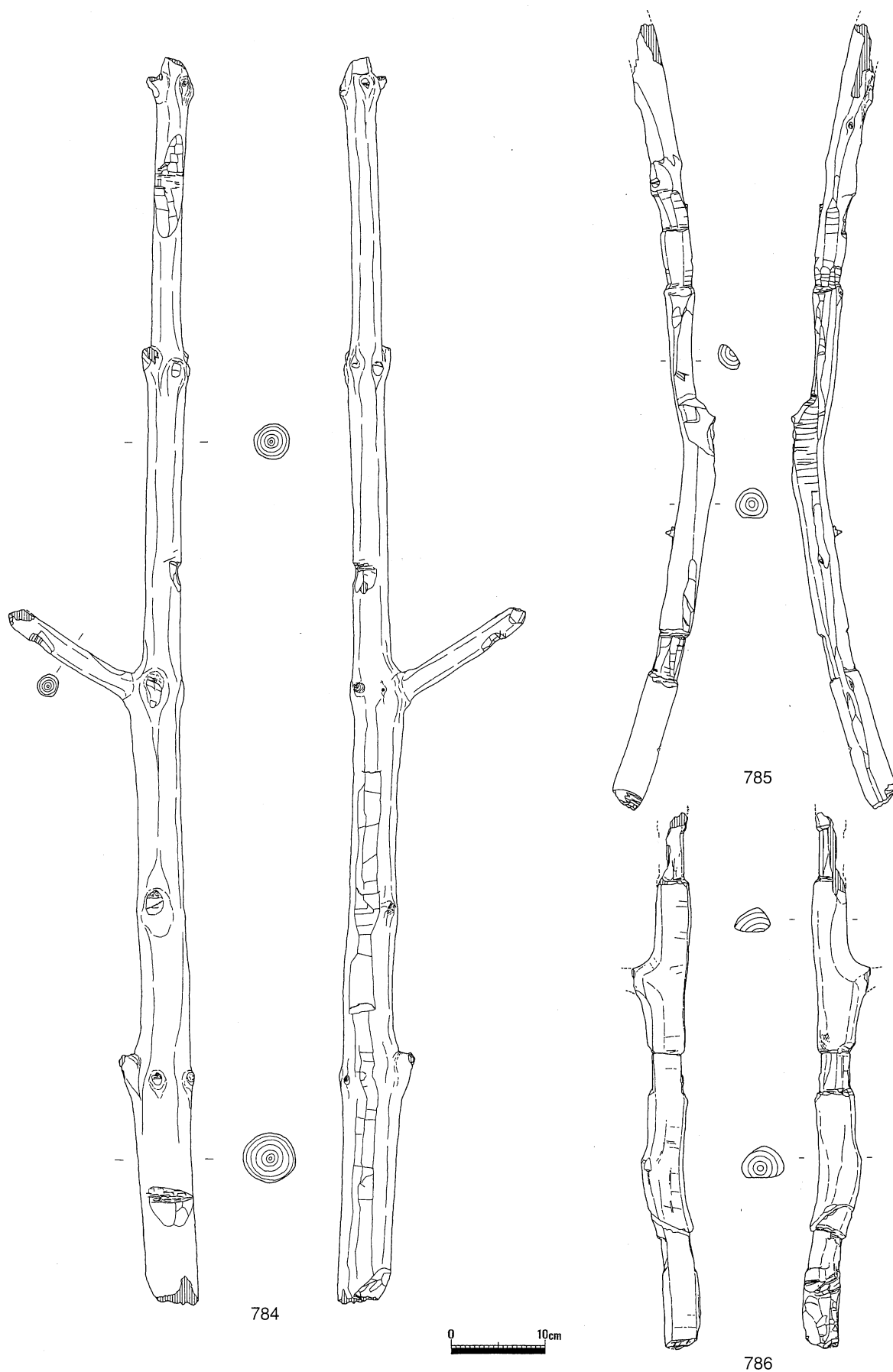
第120図 竿受け(1)



第121図 竿受け(2)



第122図 竿受け(3)

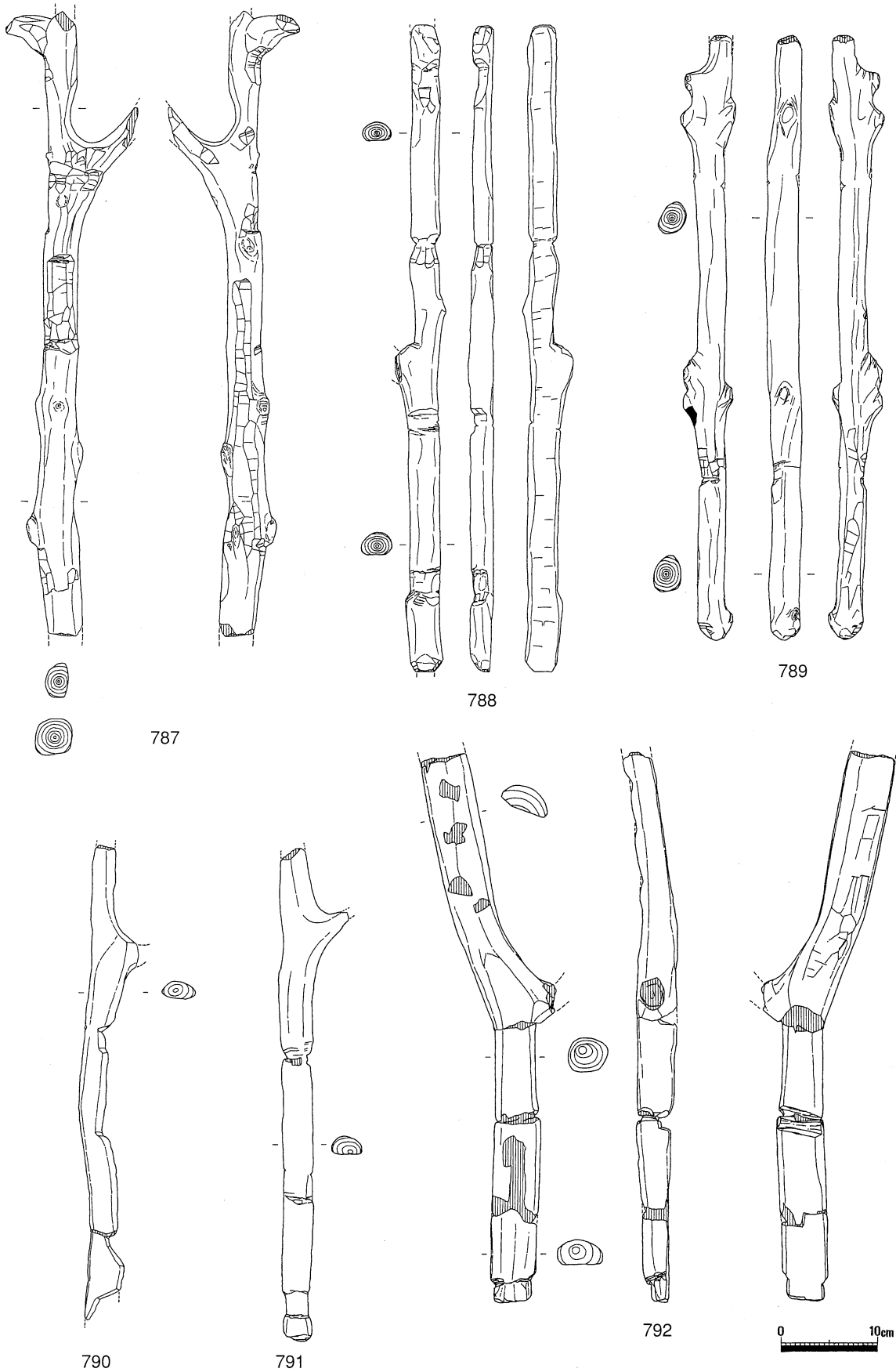


784

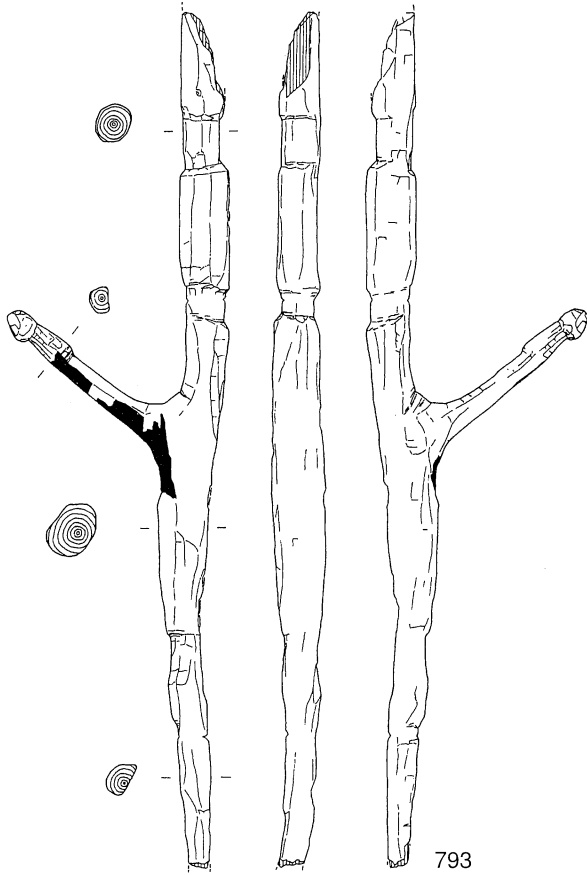
785

786

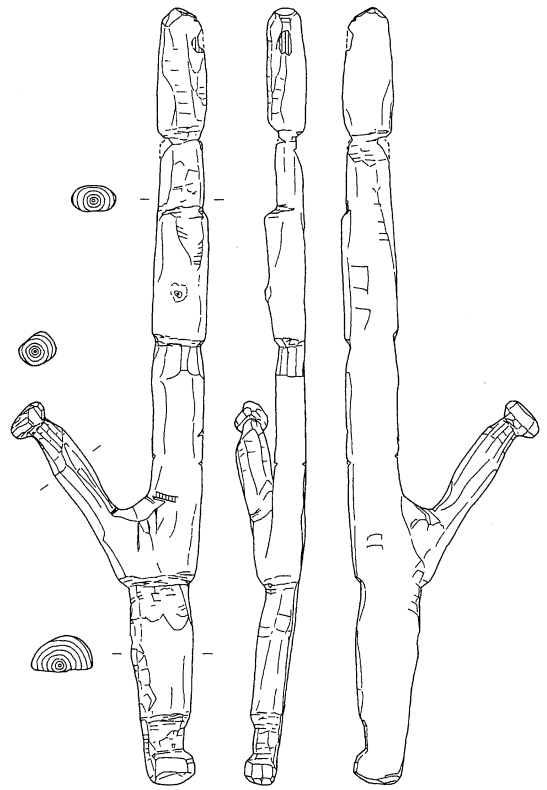
第123図 竿受け(4)



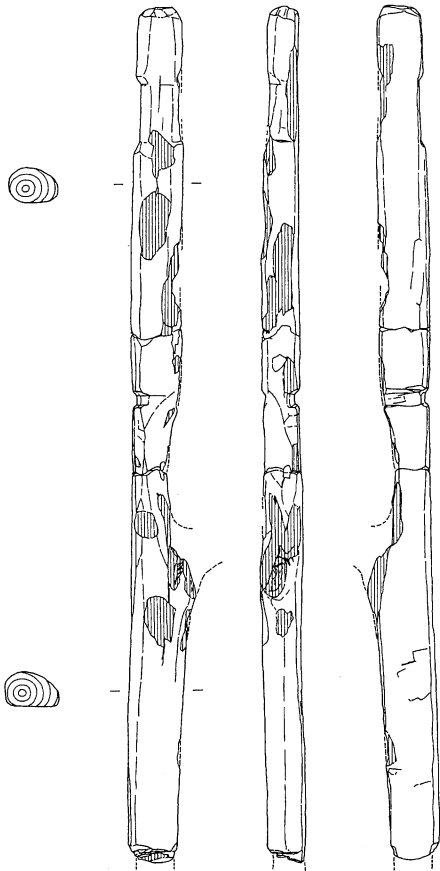
第124図 竿受け(5)



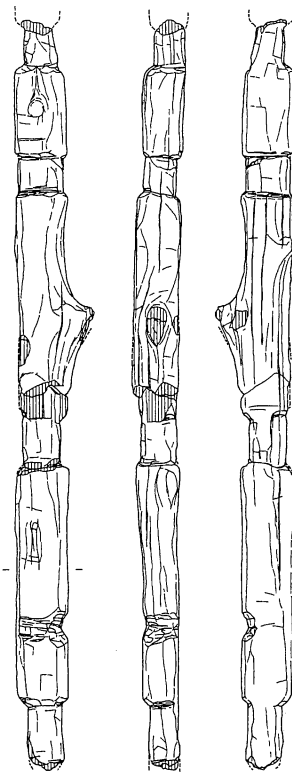
793



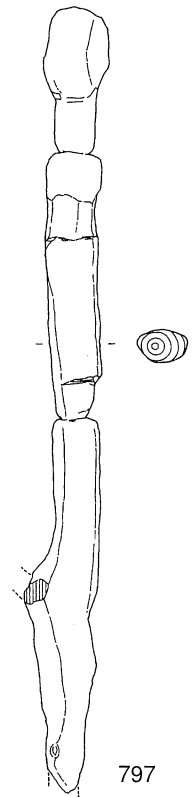
794



795



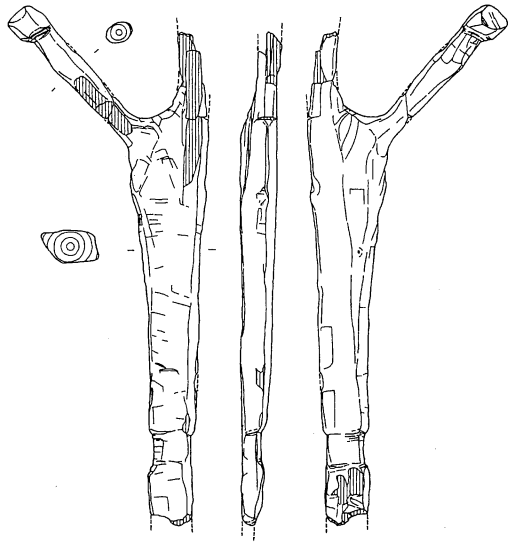
796



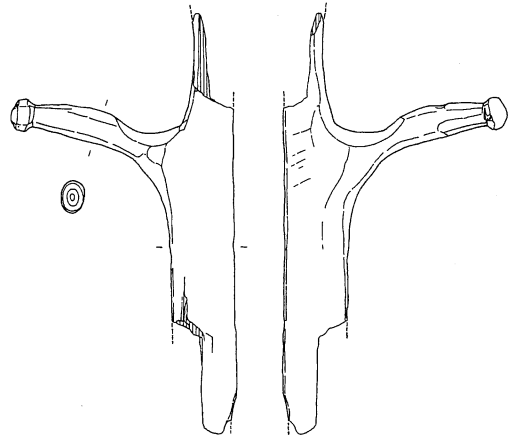
797



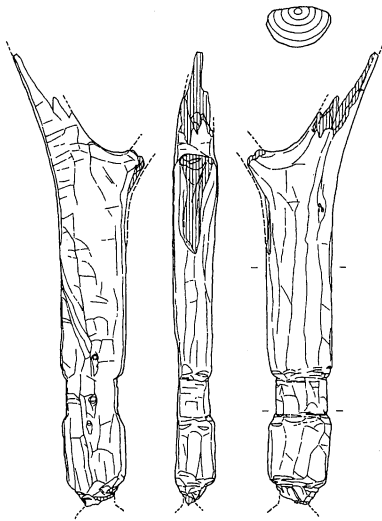
第125図 竿受け(6)



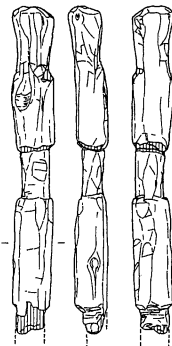
798



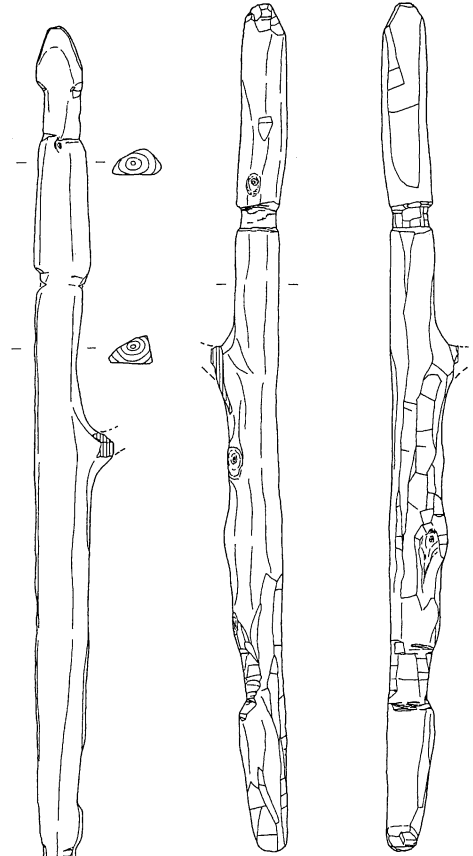
799



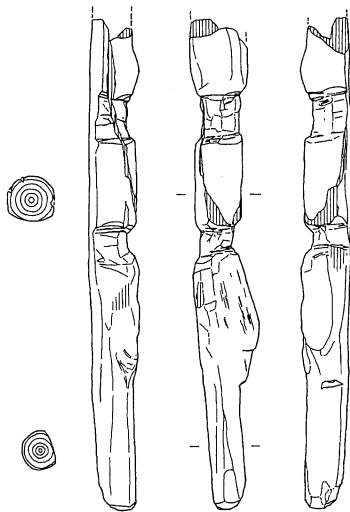
800



801



804



802

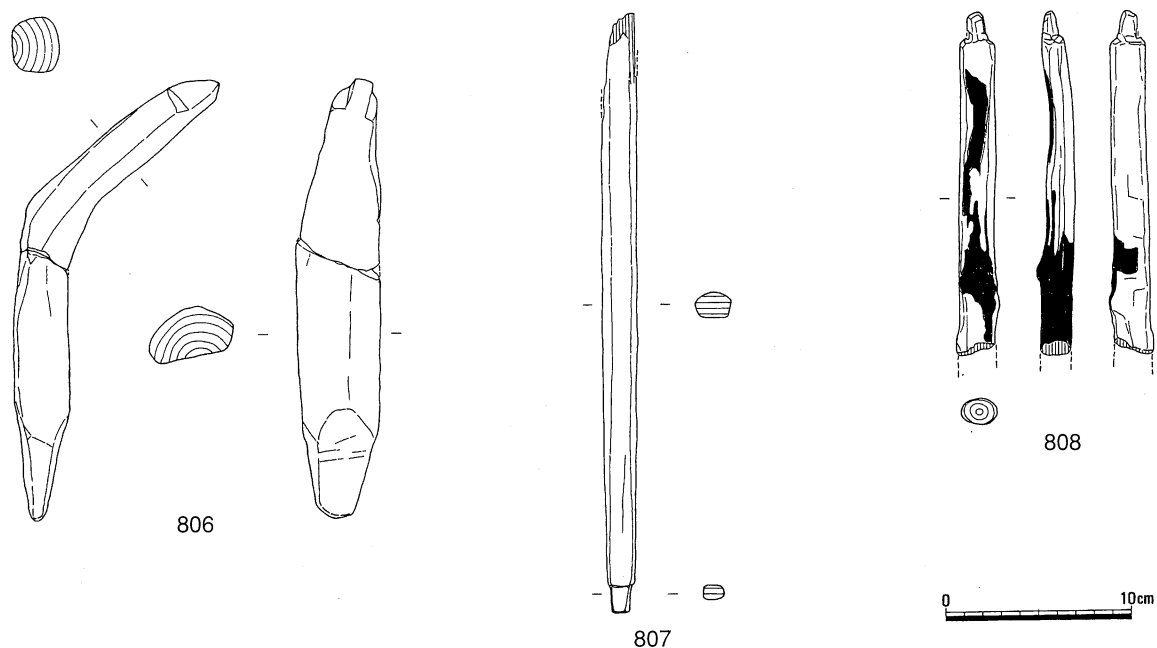


803

805



第126図 竿受け(7)



第127図 器具部材

先端には球形の頭部を作り出し、又繰り加工も行っている。794は全長62cmの完形品で、やや角張ったU字形の又繰り加工している。左側面は全体にわたって平坦加工が施されその平滑度は高い。縄かけは4箇所あって、枝部先端には円盤状の頭部を作っている。795は下端と枝部を欠損している、縄かけは2箇所残存する。右側面を全面にわたって平坦加工する。796は両端及び枝部を欠損している。縄かけは5箇所あって、右側面を平坦加工をする。798は丸形の顕著な又繰り加工があって、又部の下は左右両面とも平坦加工を施す。

器具部材

806～808は端部にほぞ加工が施されていて、何らかの器具の部材とみられる。後に掲げた不明品や棒の中にも器具の部材が含まれている可能性もある。

806は緩い山形の形状をした完形品で、一端は側面からほぞをつくり、他端は断面方形で尖り気味にしている。とがり気味の端部は転用に伴う切断の可能性もある。全長は23.5cmである。807は断面五角形の棒状品の端部にほぞを設けている。柾目材を使っていて残存長32.3cm幅1.9cm厚さ1.4cmである。808は端部に丸形のほぞ加工を施し、一部に樹皮が残っている。残存長18.35cm直径2.15cmである。

13. 建築部材

建築部材には、はしごや扉板・柱・桁材・垂木などのように大きさや形状・仕口などから使用部位をある程度把握できるものの他に、何らかの器具や器材だと想定しづらいものや素材・残材も含んでいる。

はしご

はしごは半裁材を加工して作られている。完形品はなく、足かけが4段残っているものが一番長い。また、縦割れしているものがほとんどで、幅のわかるものは815の1点のみである。上端部の残っている813では最上段の足かけの上部に円孔をあけている。使用時あるいは保管時の引っかけに使われたとみられる。下端部は二又に分けている。

809は縦割れのため左側が欠損しているが、残存長が163.3cmあってもっとも長く残っている。下端は二又にしていて、足かけは43~45cm間隔で4段ある。下から2段目の足かけの上部に方形孔と円孔がつけられている。810・811・812は足かけ部分の破片である。813は縦割れした左側上部の破片で、足かけは2段が残っていて間隔は43cmある。最上段と上端面の中央に円孔がある。残存長122.4cm。814は下端部の破片で、下端は809と同様に二又になる。足かけは2段残って間隔は45cmで、99.9cmが残存している。815は唯一全幅のわかる資料で、16.5cmある。直接接合はしないが同一個体と思われ、残存長122.2cmである。上端部には813のような円孔はつけられていない。

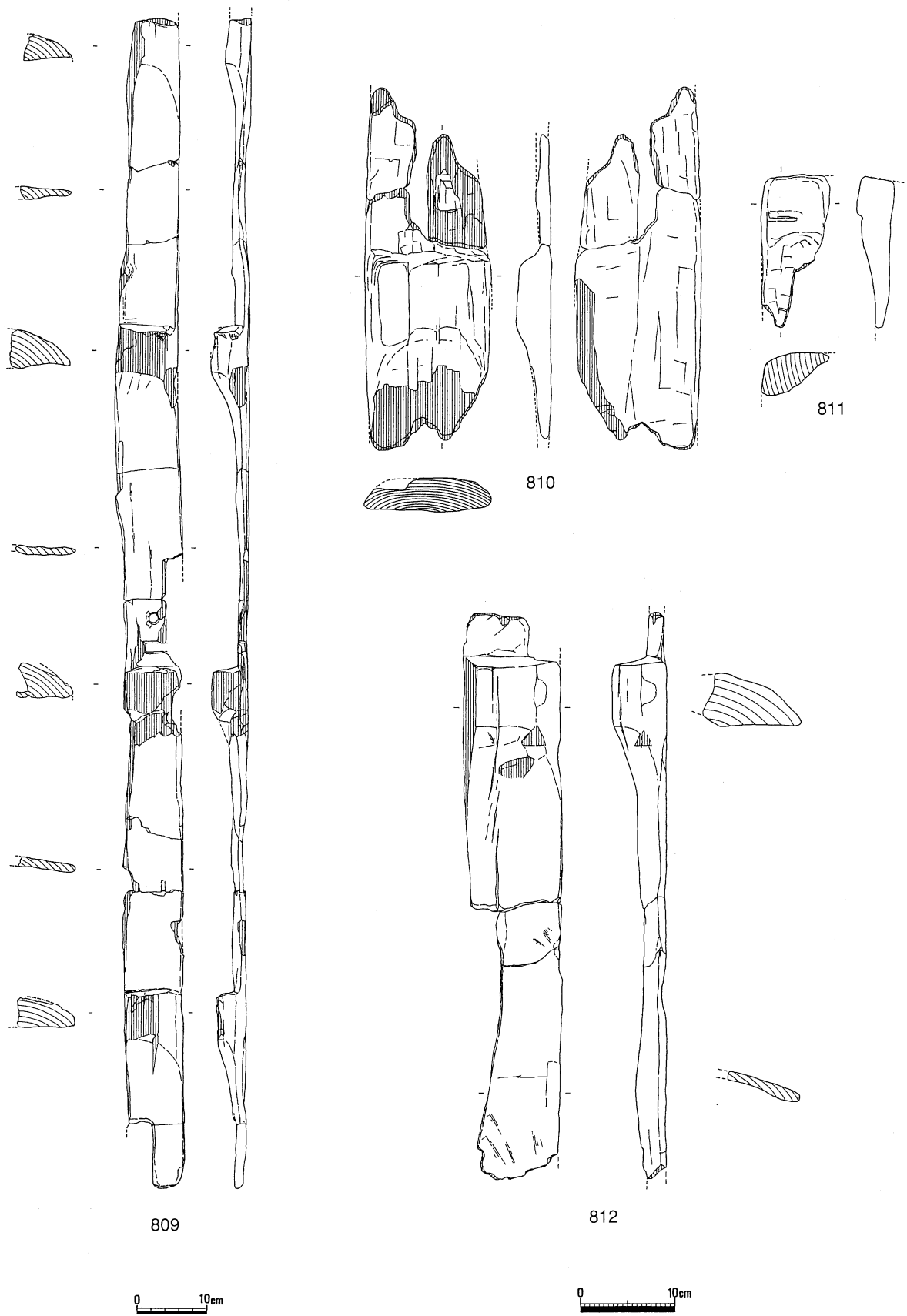
扉板

扉板は1点出土している。816は幅36cm現存長1.4cmの軸部を持つ。軸の長さからすると下辺とみられる。軸のある側面と反対の破面に長さ7.5cm幅1.5cm以上の方形孔がかかっている。これが扉の開け閉めときに手を入れるためのものと思われる。板目材で、残存長90.1cm幅21.6cm厚さ3cmである。

柱

柱は上端の桁材を乗せる部分を、木の枝分かれ部分をそのままあるいは加工を施して利用する柱と、上端面に断面コの字形の加工を施す柱がある。横断面が円形の円柱が多いが、柱の転用・再加工とみられる材の中に1辺の長い材があるので、方形柱もあったのではないと思われる。直径は10~16cmのものが多く、明らかに20cmを越える柱は出土していない。

817~822・824・826・827は又部を利用した柱である。817は又部上部の幹側内面を長さ12cm幅6cmでレの字状に切り落として、桁材を受ける面を作っている。又部の下10cmのところに幅4.8cm、又部の幹側の上15cmのところに幅3cmの縄の緊縛用と思われる欠込がある。残存長99.2cm直径14cmである。818は又部の破片で、又部の幹内側を幅3.8cm長さ14.4cm以上にL字型に切り落とす。残存長41.5cm直径14cm。819は直径8cmの丸柱で、又部の幹側を角に加工している。67.4cmが残っている。820は直径6cmとやや細めの材を使っていて、節の部分は未加工のままである。残存長が122.5cmある。821は直径12.9cmの柱で、又部は幹側をL字形に加工する。下端は切断されていて残存長は90.5cmである。822は樹皮が残されたままである。又部の加工はわずかで、残存長96cm直径9cmである。823は直径13cmの柱材で、一端は切断されている。824は細い枝別れ部分を利用して、又部から18~30cmの所に深さ1cm前後の欠込がある。直径10cmで、下端は焼けている。



第128図 はしご(1)



第129図 はしご(2)

825は図の上部側が炭化し細くなっている、炭化部に3.5cm角の欠込がある。直径12.4cmの材を使っている。827は上端・下端とも切断していて、転用をはかっている。828には一端に切断痕があって、樹皮がついたままである。残存長121cmで直径13.6cmである。829にも樹皮が残っている。830は直径12.8cmの材で、全体に炭化している。

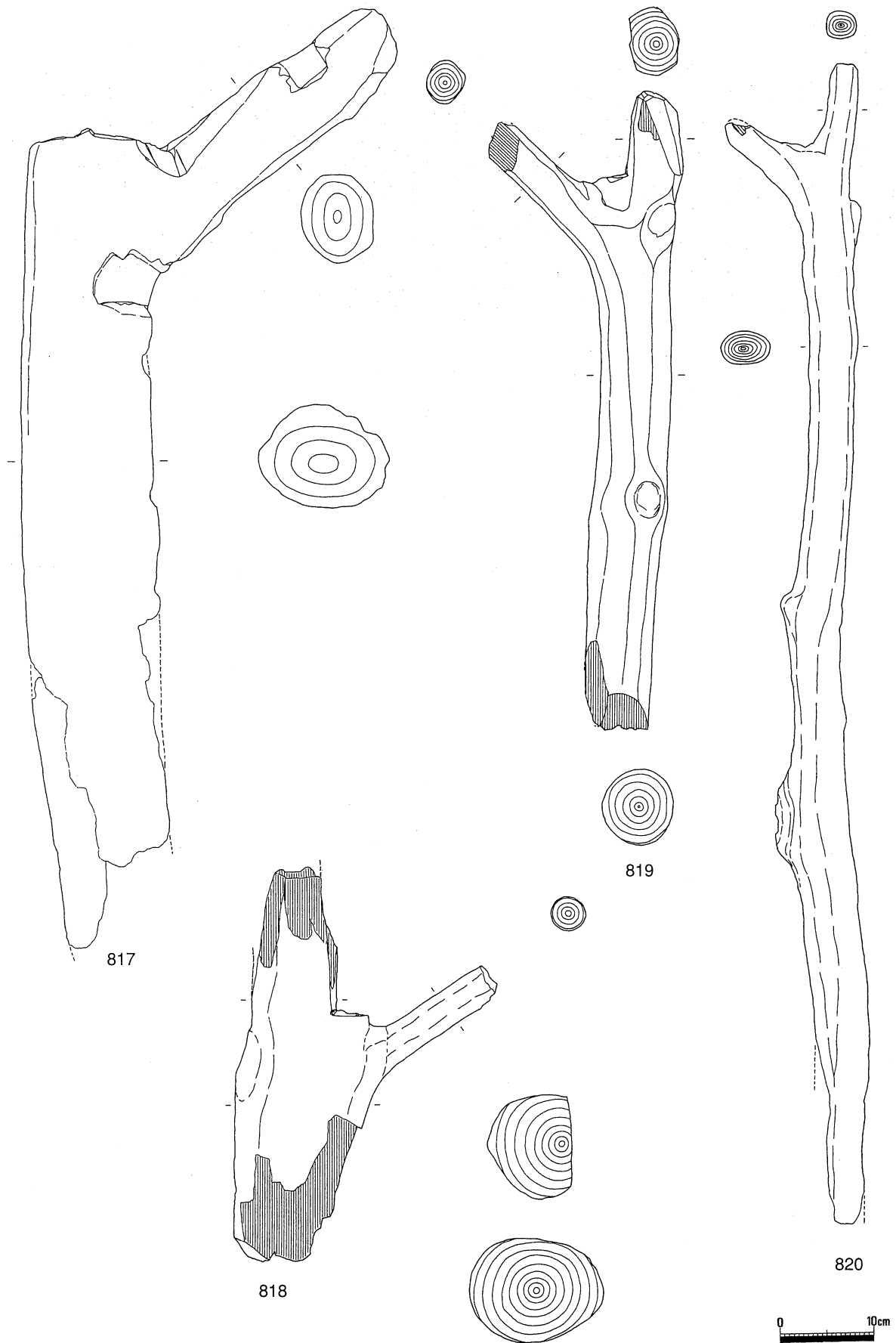
831は桁材を受けるために上端を幅8cm深さ6cmでコの字形に加工している。下端は転用のため切断されている。残存長67.4cm直径19.7cm。832は欠込が施されている。833は上端が幅4cmの貫穴ないし輪薙込の部分で欠損している。直径7.5cmの材である。834は直径12cm残存長148.8cmの柱材で、一部炭化している。835は転用のため切り取られた残りと思われる、残存部分の表面には加工痕が残る。直径を復原すると約27cmとなって、唯一20cmを超える可能性のある資料である。残存長173.3cm。

横架材ほか

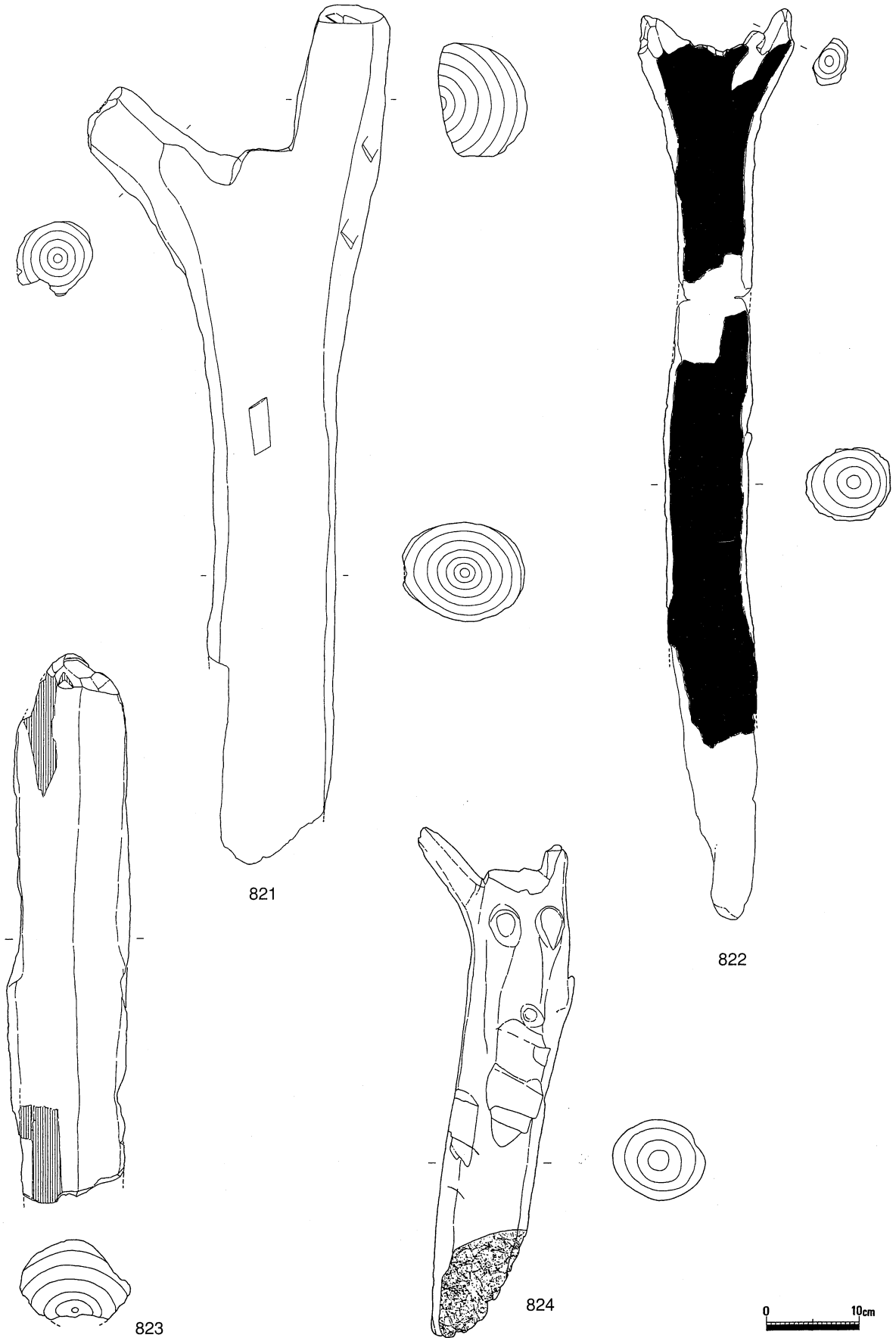
836～859は桁や梁などの横架材などである。836は幅11.8cm厚さ1.9cmの樹心を残した柵目板で、幅5～6cm長さ9～10cmの方形孔を83cmあけて2つ設けている。一方の小口を斜めに切断していて、残存長は125.3cmである。837は幅8cm厚さ4cm残存長137.7cmの柵目の角材である。838にも836と同様に5×9cmの方形孔が2つあるが、その間隔は51cmである。柵目材で残存長83.2cm幅8.6cm厚さ2.9cmである。839は一端が方形孔の部分で折損していて、13cm離れて片側穿孔で円孔があげられている。840には幅7cm深さ3.5cmのコの字状の欠込を施している。841は小口から10.5cmのところに長さ5.8cmの方形孔がある。柵目材で残存長73.4cm厚さ1.9cm。842にはコの字状の欠込が2つ、レの字状の欠込が1つ施されている。枝払いなどの表面加工は雑で、残存長82.7cm直径4cmである。843は直径5cmの心持ち材を使い一端に幅1.8cm深さ1.5cmの欠込を作っている。残存長116.5cm。844も直径5cmの心持ち材を使っていて、一端に幅4.5cmで段状加工を行っている。残存長は121.1cmである。845は両端に



第130図 扉板

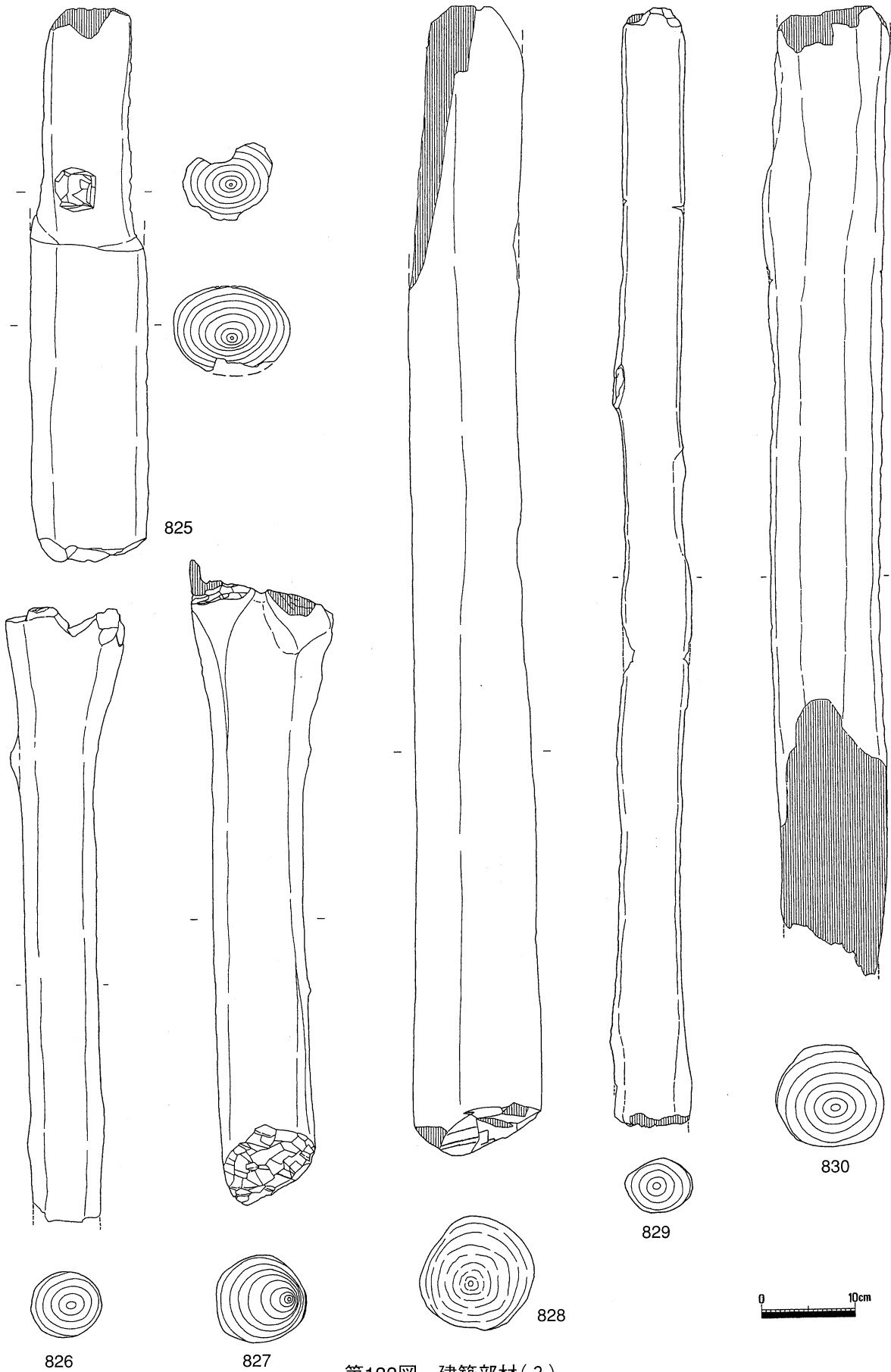


第131図 建築部材(1)

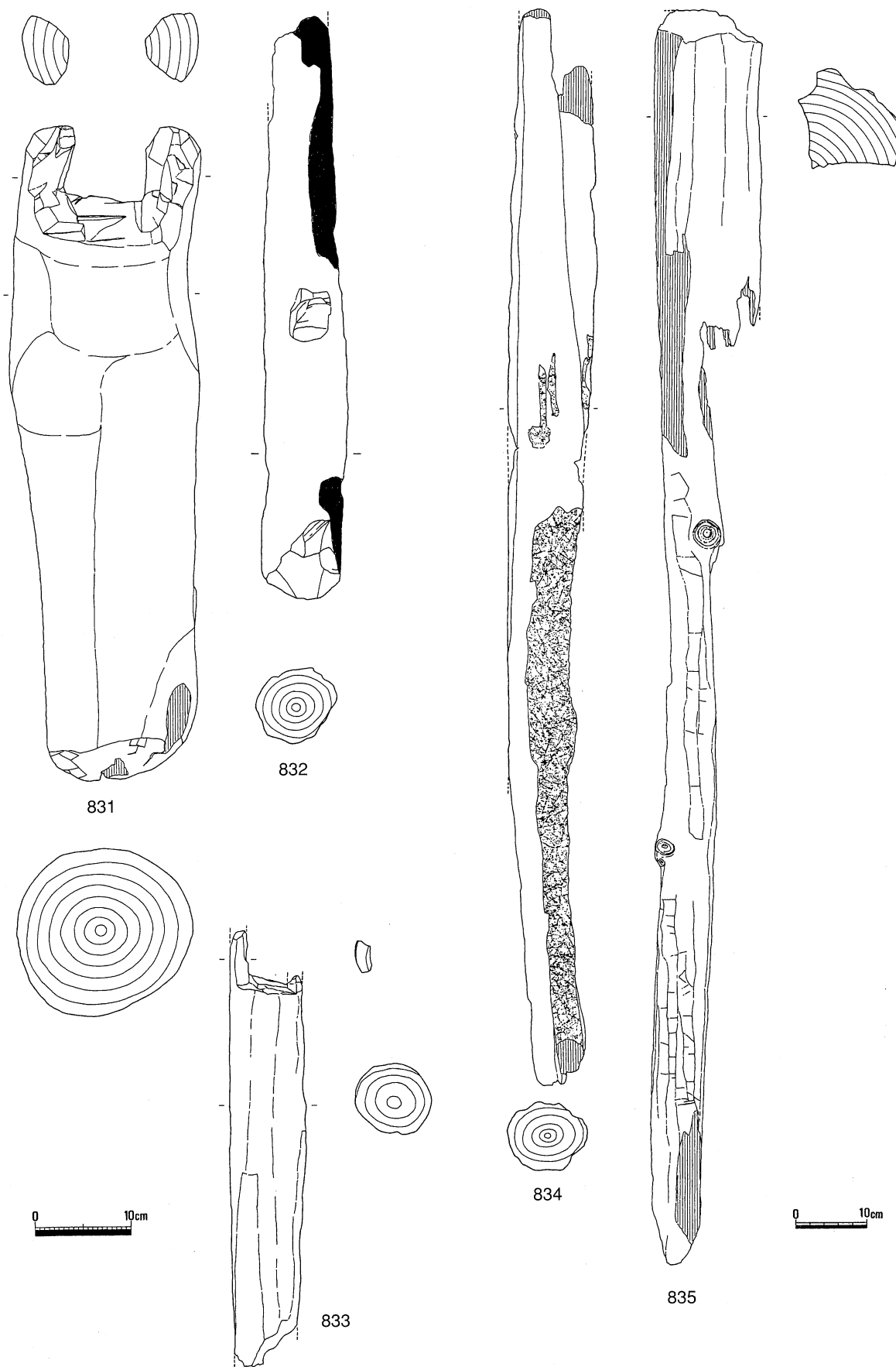


第132図 建築部材(2)

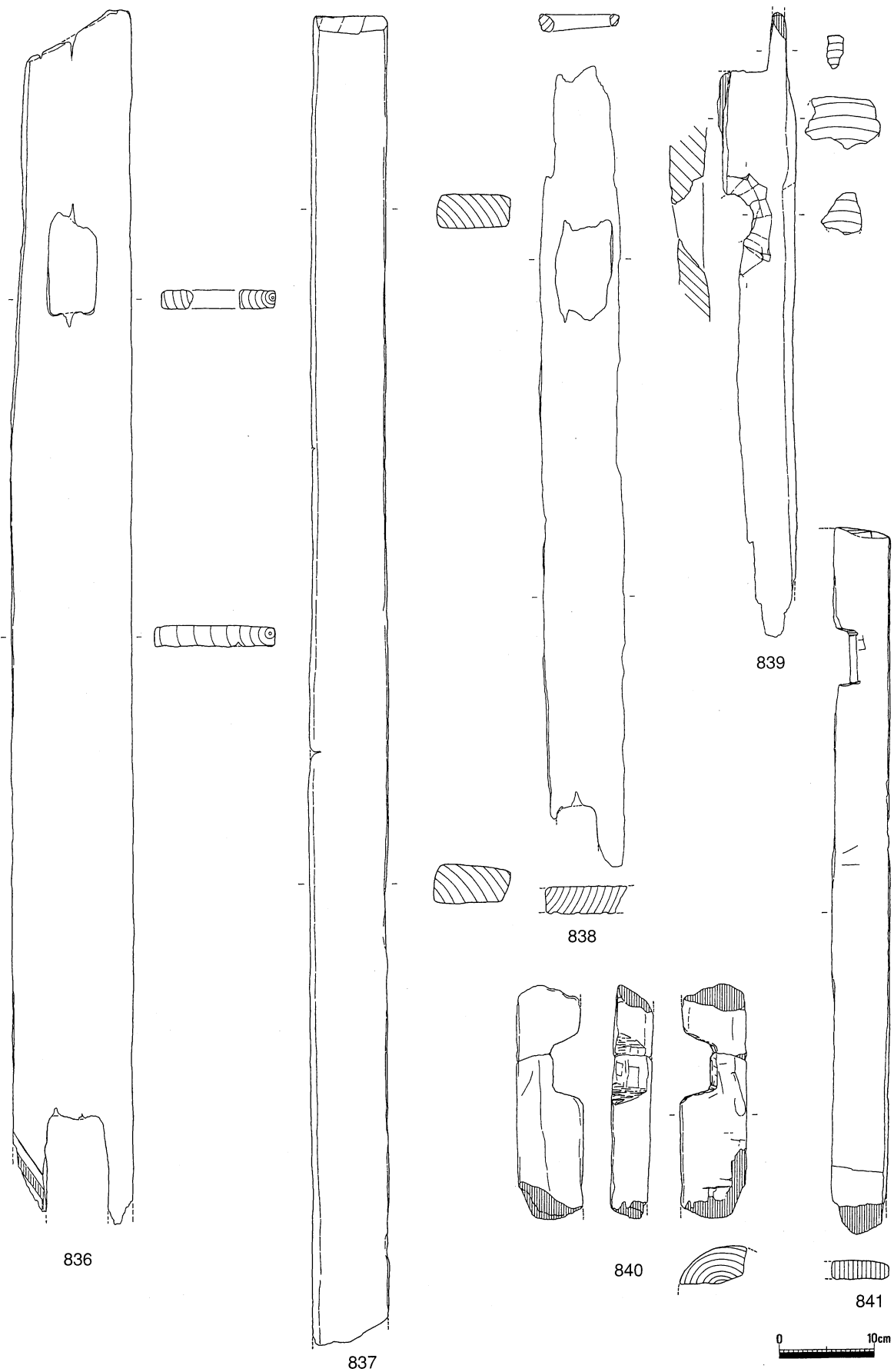
13. 建築部材



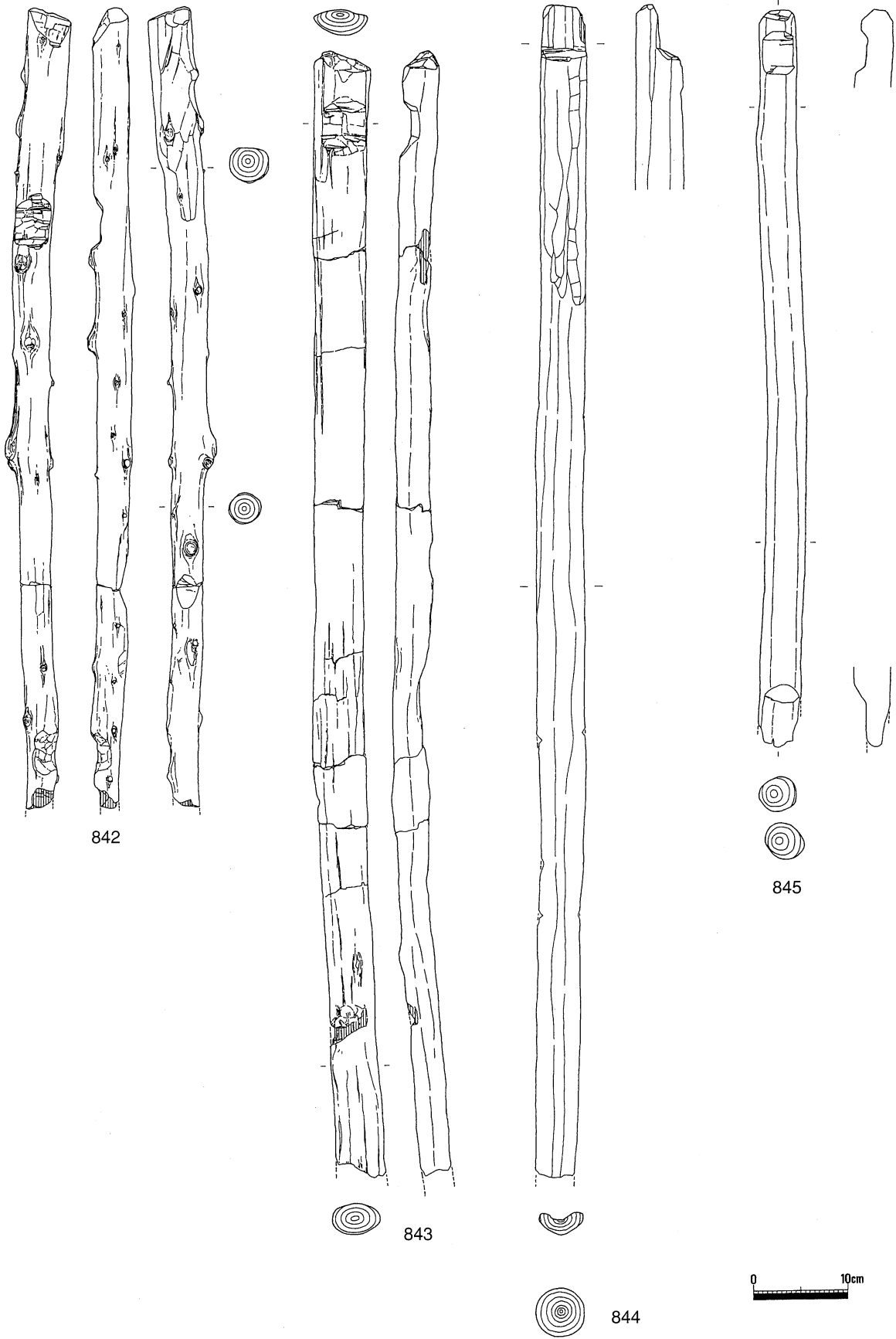
第133図 建築部材(3)



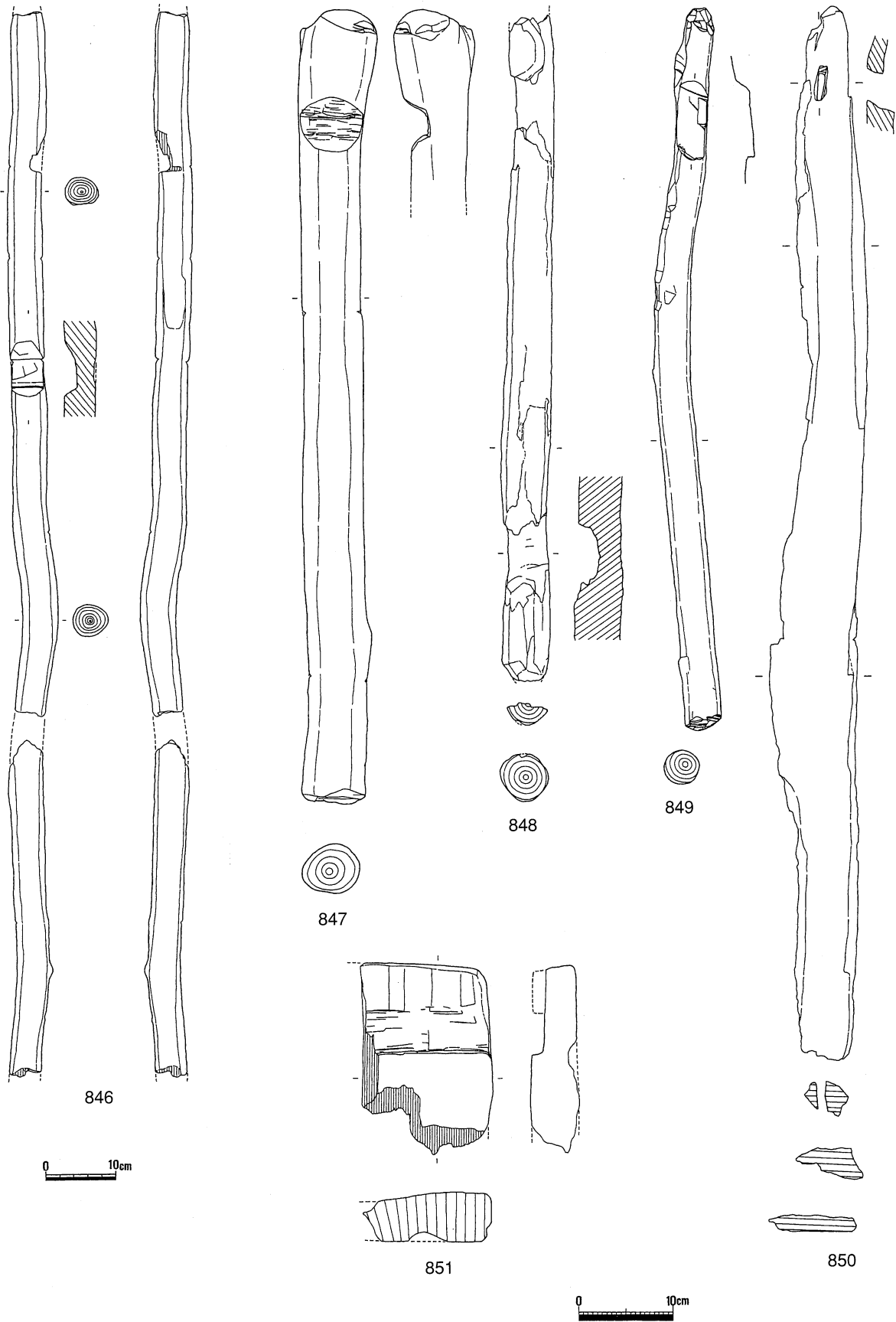
第134図 建築部材(4)



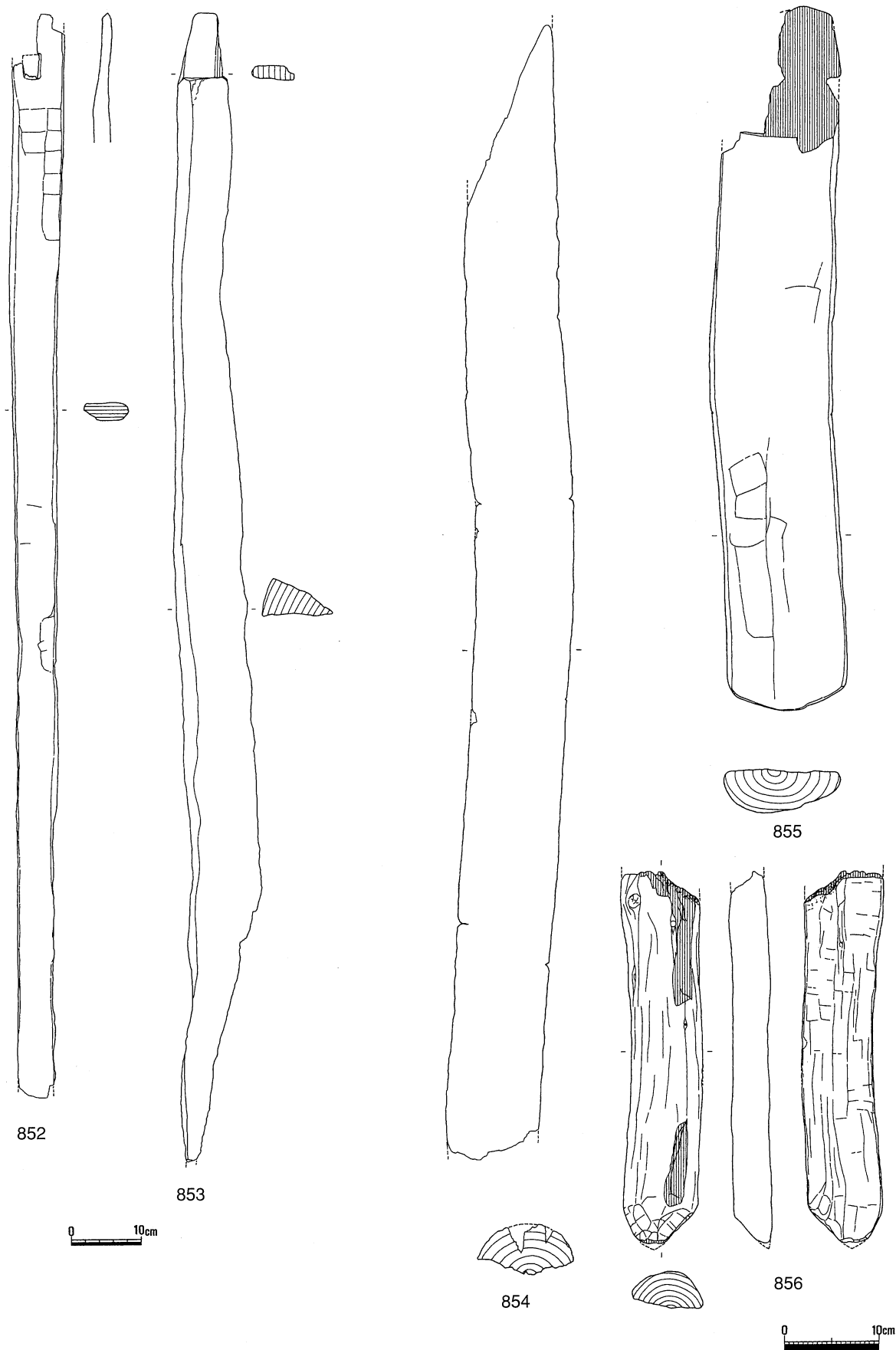
第135図 建築部材(5)



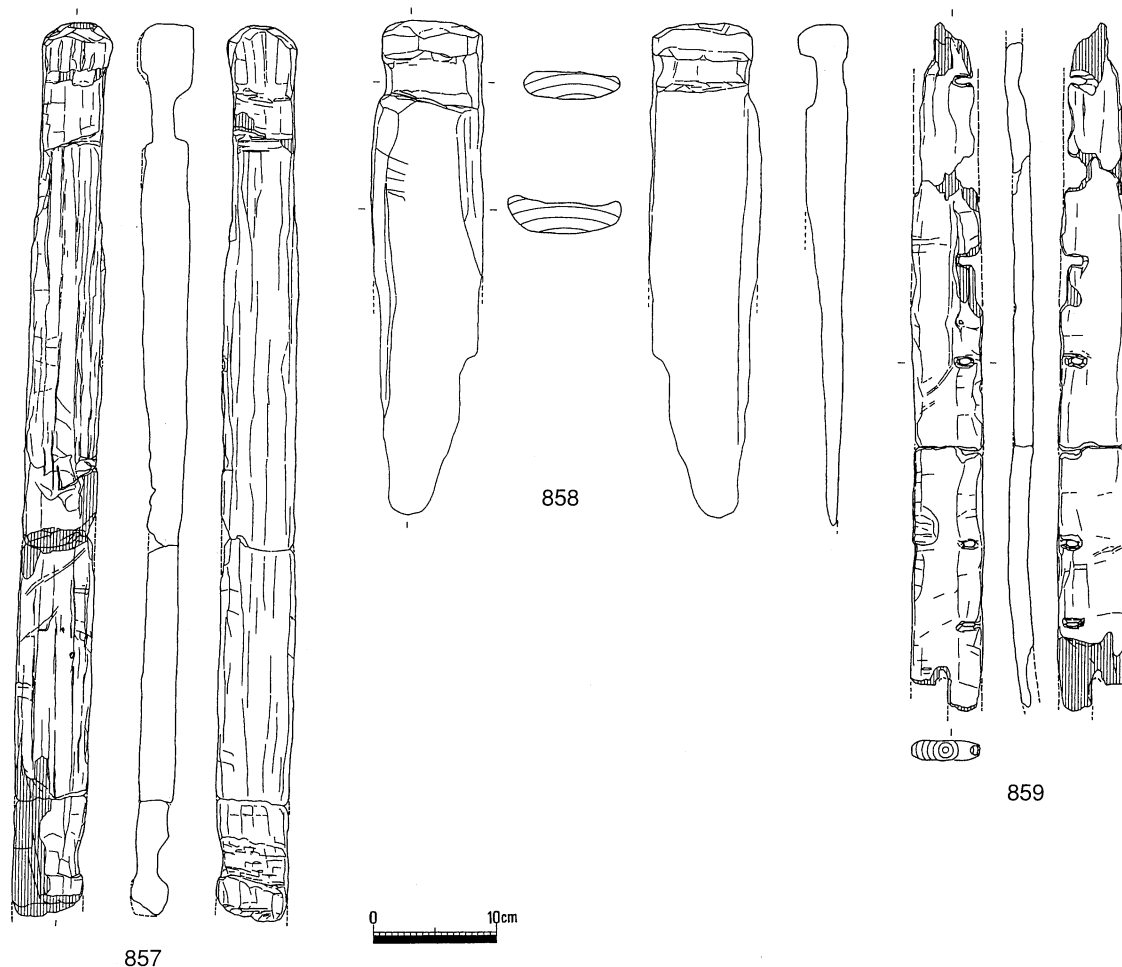
第136図 建築部材(6)



第137図 建築部材(7)



第138図 建築部材(8)



第139図 建築部材(9)

長さ4.5cm3.1cmのコの字状の欠込がある。直径約4cmの心持ち材で、長さ76.3cmが残存している。

846は直接接合しないが直径5cmの心持ち材で、端部からの位置は不明ながら中間部にコの字状の欠込が1つある。残存長141.7cm。847は直径8cmの心持ち材で、端部から10cmのところに幅6cm深さ3cmのコの字状の欠込がある。残存長82.9cm。848は残存状態が悪いが、両端に幅5cm深さ2.5cm欠込がある。直径5.2cmで長さ69.4cmが残存している。849には一端に斜め方向の欠込があつて、反対側の端部は切断されている。直径3.8cmの心持ち材で全長75.4cmである。850は片側の端部に斜めにあけた3.5×1cmの方形孔がある。板目材で残存長110.2cmである。851は厚さ5cm幅14cm以上の板の小口部分に幅4.5cm深さ1.3cmの溝状加工を施している。

852は長さ150cm以上幅7cmの板目材で、一端を長さ13cm以上にわたって厚さ2～1.5cmに薄く削り、その中央に縦3cm横2.2cmの方形孔をあけている。残存長150.9cm厚さ2.5cm。853は一端にほぞをつけている。残存長160.2cmで、横断面が三角形をしているので、転用のため割られた残りである。854～856は半裁材。857・858は端部の両面に細長い溝状加工を施している。857ではもう一方の端部にも溝状加工を施しているが、こちらは1面のみである。全長71.5cm幅6.3cm厚さ4cm。858は残存長39.5cm幅9cm厚さ5cmである。859には長辺沿いに楕円孔5つと残存端部側中央に円孔が1つ残っている。心持ち材で残存長55cm幅5.7cm厚さ1.6cmである。

有孔板材

860～895は方形孔・円孔を1～数箇所あけた板材である。860は全長91.1cm幅17cm厚さ3cmの板目材で、1長辺沿いの中央と両端に直径2cm程度の円形孔を持つ。861は長軸に対して斜め方向にあけた2孔1組の円孔がほぼ平行に47cm離れて2組ある。円孔間は約10cmである。板目材で残存長84.6cm幅11.5cm厚さ1.1cm。862は全長93.5cm幅8.2cm厚さ1.7cmの板目材で、1.7×1.3cmの方形孔が1つある。863は角の1つを斜めに切り落としていて、切り落とされた角に寄せて円孔を1つあけている。864は大きさは不明であるが長い孔の部分で折れている。865も小口部分の孔で折れている。

866は長辺沿いに円孔ないし方形孔がある。その中間で材中央に不整円孔をあげ、この円孔から長辺端部まで表裏両面とも溝を彫っている。一端はこの溝部分で折損。板目材で残存長88.8cm幅28.5cm厚さ2.8である。867は厚さ2.7cmの板目材で横断面は樹心側にやや湾曲している。不整方形孔が1箇所ある。残存長79.4cm幅15.1cm。868は元は大きな板材の一部とみられ、2.2×4.7cmの方形孔があって割れ口にも幅の広い方形孔が2つある。板目材で、残存長26.7cm幅24.3cm厚さ3.2cmである。

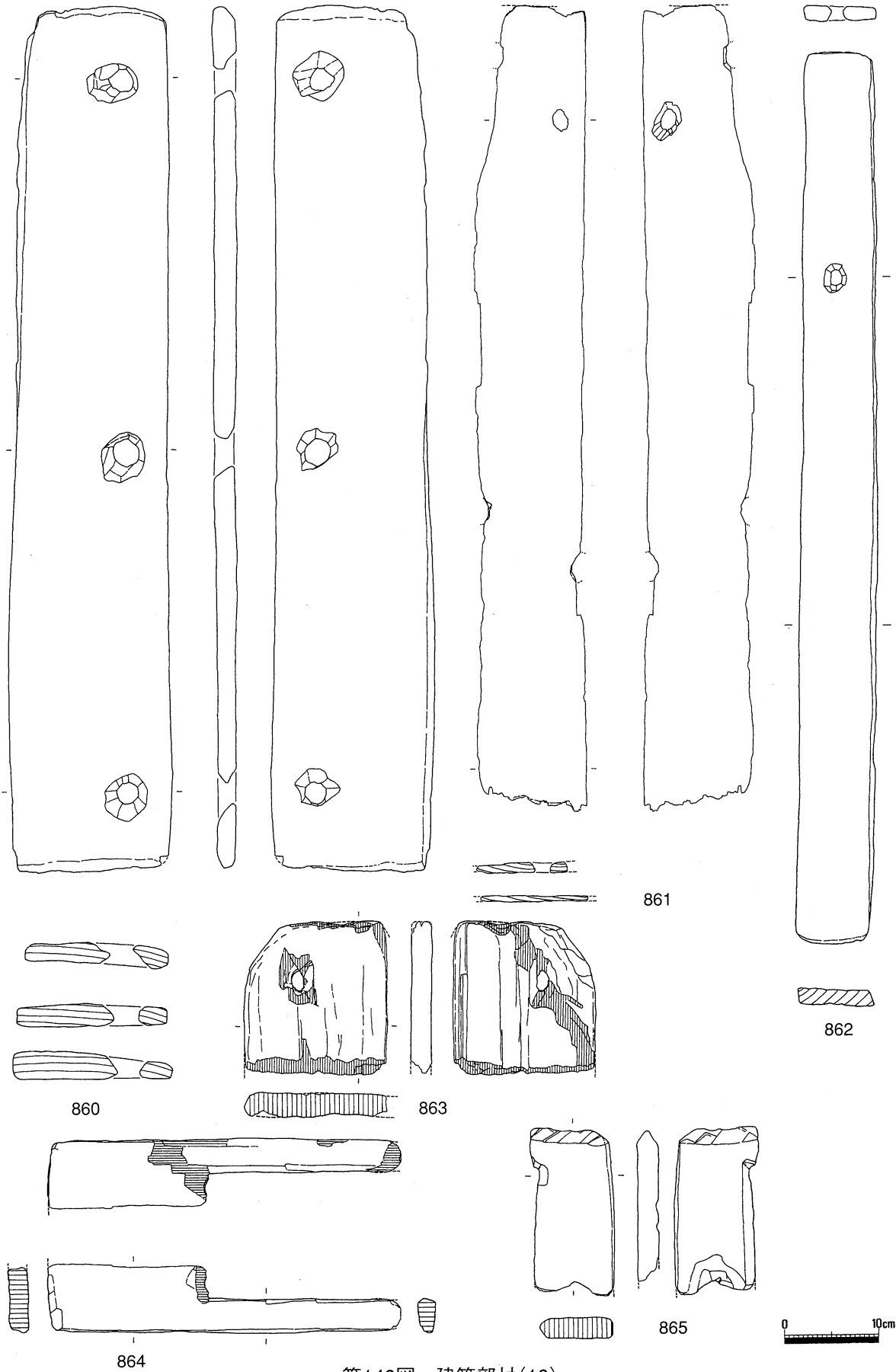
869は幅14.8cm厚さ2cmの板目材に3×2cm位の方形孔を4つあけている。幅3cm以上の加工痕が認められるが、明瞭には読みとりにくい。残存長86cmである。870は幅11cm厚さ1cmの板目材で、残存長は90.7cmある。871は成形段階の柁目材。片面は割裂き様の凹凸を削っている途中で、残存長84.9cm幅16.6cm厚さ1.8cmである。元は厚い板材を割り裂いて再加工している可能性もある。872も幅12cm厚さ3.2cmの柁目材の表面を平滑にしている段階で、残存長73.8cmである。873は全長111cm幅13.2cm厚さ3cmの柁目材で、表裏面の加工痕が顕著に残っている。874は一端には粗い切断痕があり、転用後の残材とみられる。不整円孔が1つ残っている。厚さ2.6cmの柁目材である。875は厚さ2.5cmの柁目材で小口側の一端は溝状加工の部分で折れている。他に大小の孔が1つずつあけられている。

876は長さ80cm以上幅9cm以上の板目材で、不整方形孔が1つある。全体的に炭化していて、残存長80.4cm幅9.4cm厚さ2.3cmである。877は厚さ1.7cmの板目材に2.5×5cmほどの方形孔が3つあけられている。残存長60.2cm幅13.8cmである。878は厚さ1.6cmの柁目材で、方形孔が5つあけられているが特に規則性は認められない。残存長39.3cm幅9.5cm。879は厚さ2cm幅12.9cmの柁目材で、方形孔が3箇所あけられている。小口面は一端は平坦で他端は両面から切断されており、材の転用がはかられたとみられる。全長38.8cm。880は中央に6.5×2.3cmの方形孔がある。板目材で、残存長27.2cm幅12cm厚さ2.2cmである。881は幅6.3cm厚さ1cmの柁目板の角に1cm角の方形孔が1つあけられている。長さ34.8cmが残存する。882は両端が方形孔の部分で折れている。他に方形孔1つと方形の削り込みが1ある。板目材で、残存長42.8cm幅9.8cm厚さ1.5cmである。883は幅9.1cm厚さ8mmの柁目板に円孔4つと非貫通孔1つを施している。残存長は52.8cmである。

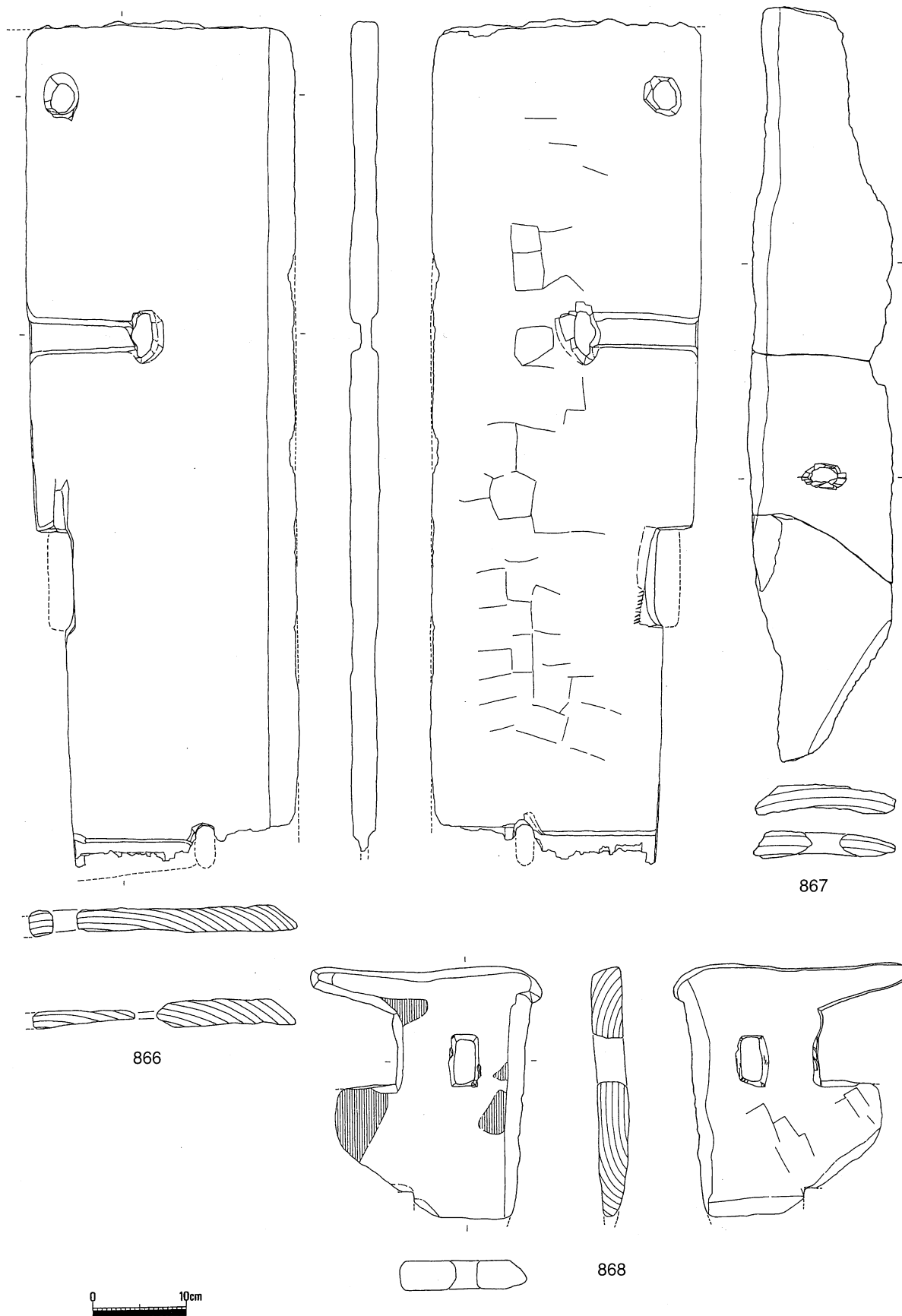
884は長辺の一方を長さ121cm幅5cm以上にわたり長いC字状に削り込んでいる。4×6.5cmの方形孔が1つ、2～3cmの方形孔が4つあって、表裏とも加工痕が観察されるが、表面の凹凸が著しく各々の単位を読みとりにくい。板目材で、全長205.3cm幅21.9cm厚さ2.5cmである。885は一端が幅9cm長さ8.5cm以上の方形孔の部分で折れている。887は小口側に幅11cmを厚さ1cmに薄く加工して段を設けている。方形孔は段の中央小口よりに1つと他に2つつけられている。板目材で、残存長53.1cm幅9cm厚さ1.5cmである。888はほぼ中軸に近く小口部分に寄せて方形孔を2つあけている。板目材で残存長40.9cm幅13.5cm厚さ1.6cmである。899は小口部分に設けられた5cm四方の方形孔で折れている。

890は長さ107.5cm幅12cm厚さ1.2cmの柁目材で、不整円孔が2つあけられている。891は一端を長軸

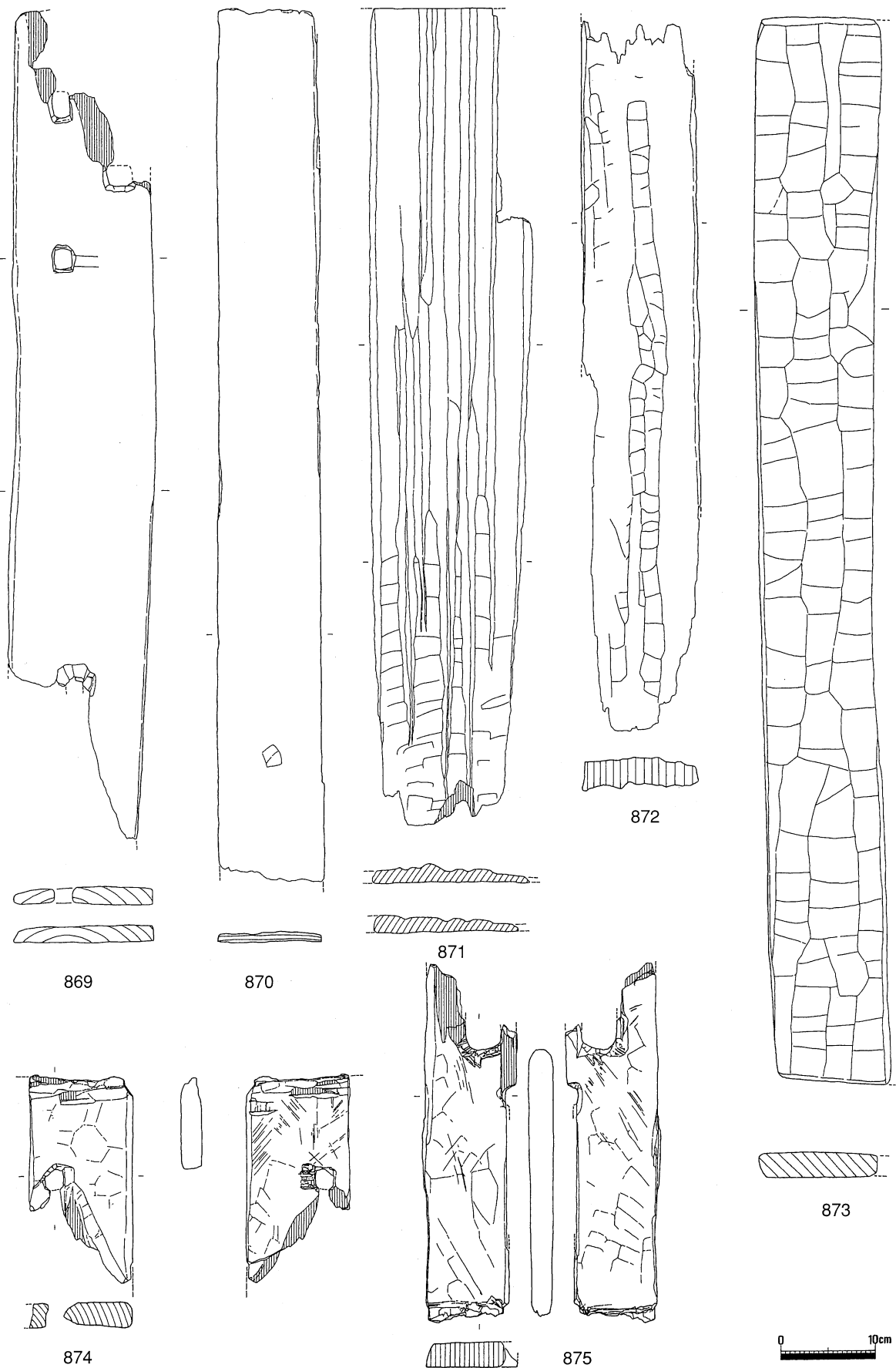
13. 建築部材



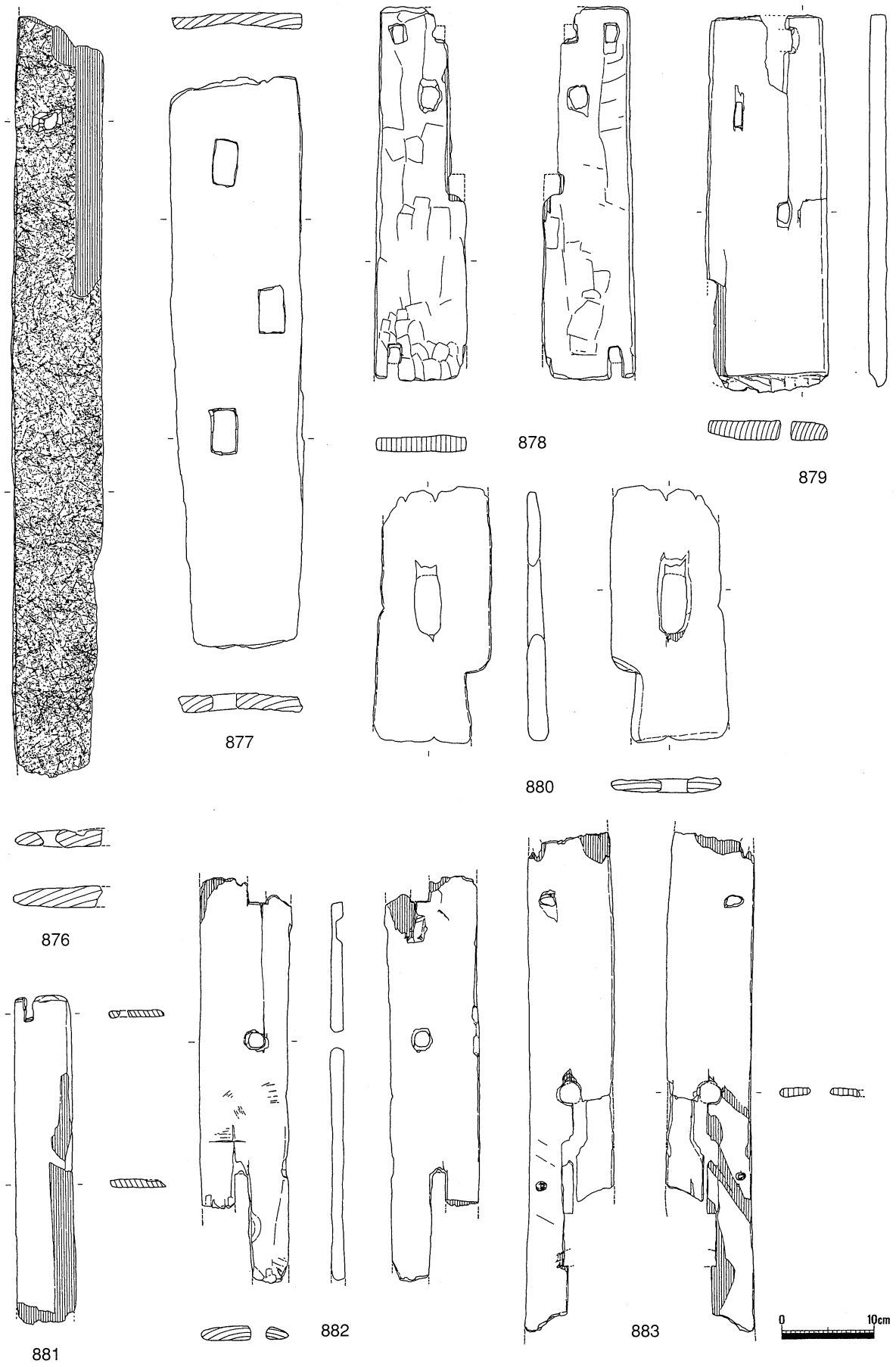
第140図 建築部材(10)



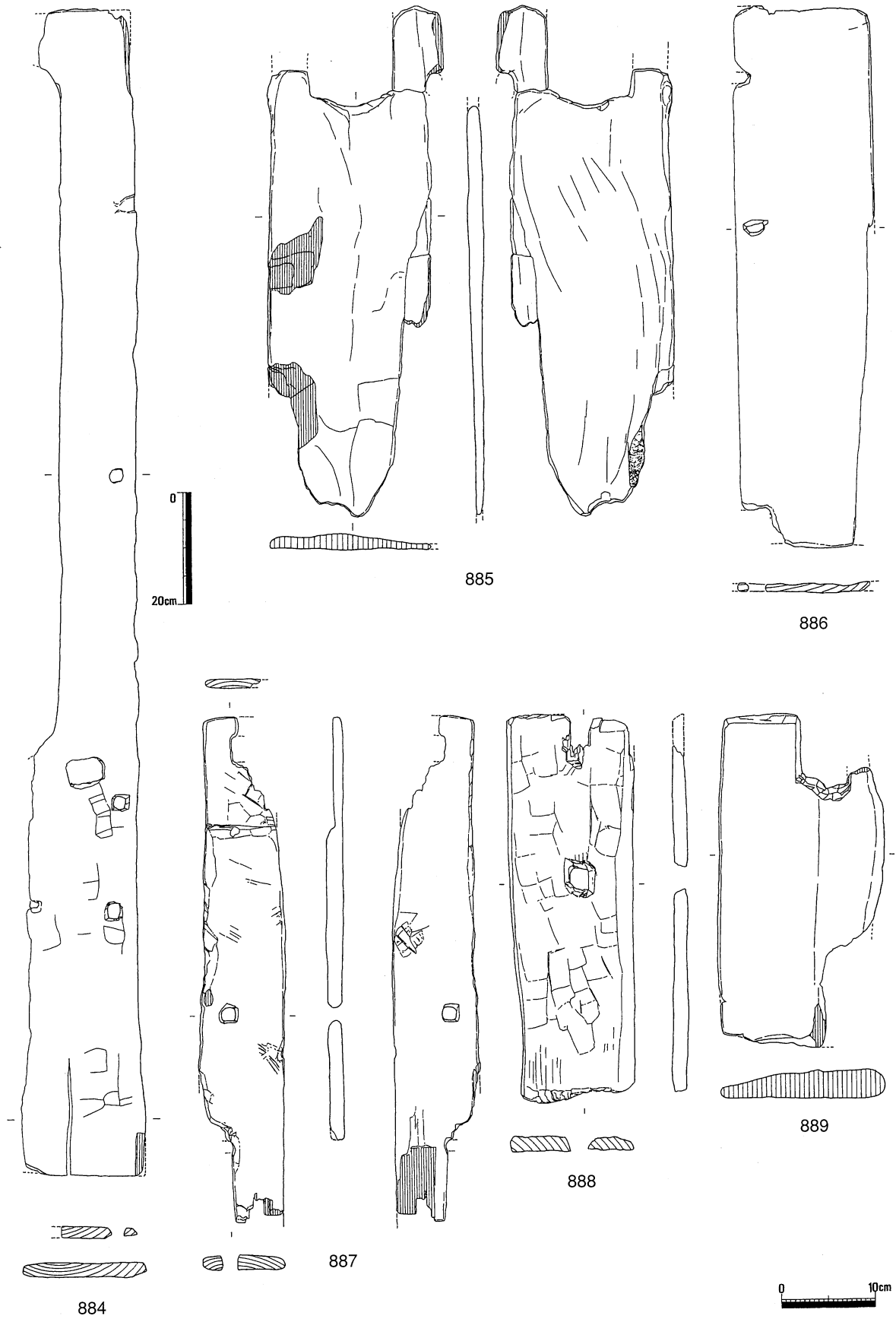
第141図 建築部材(11)



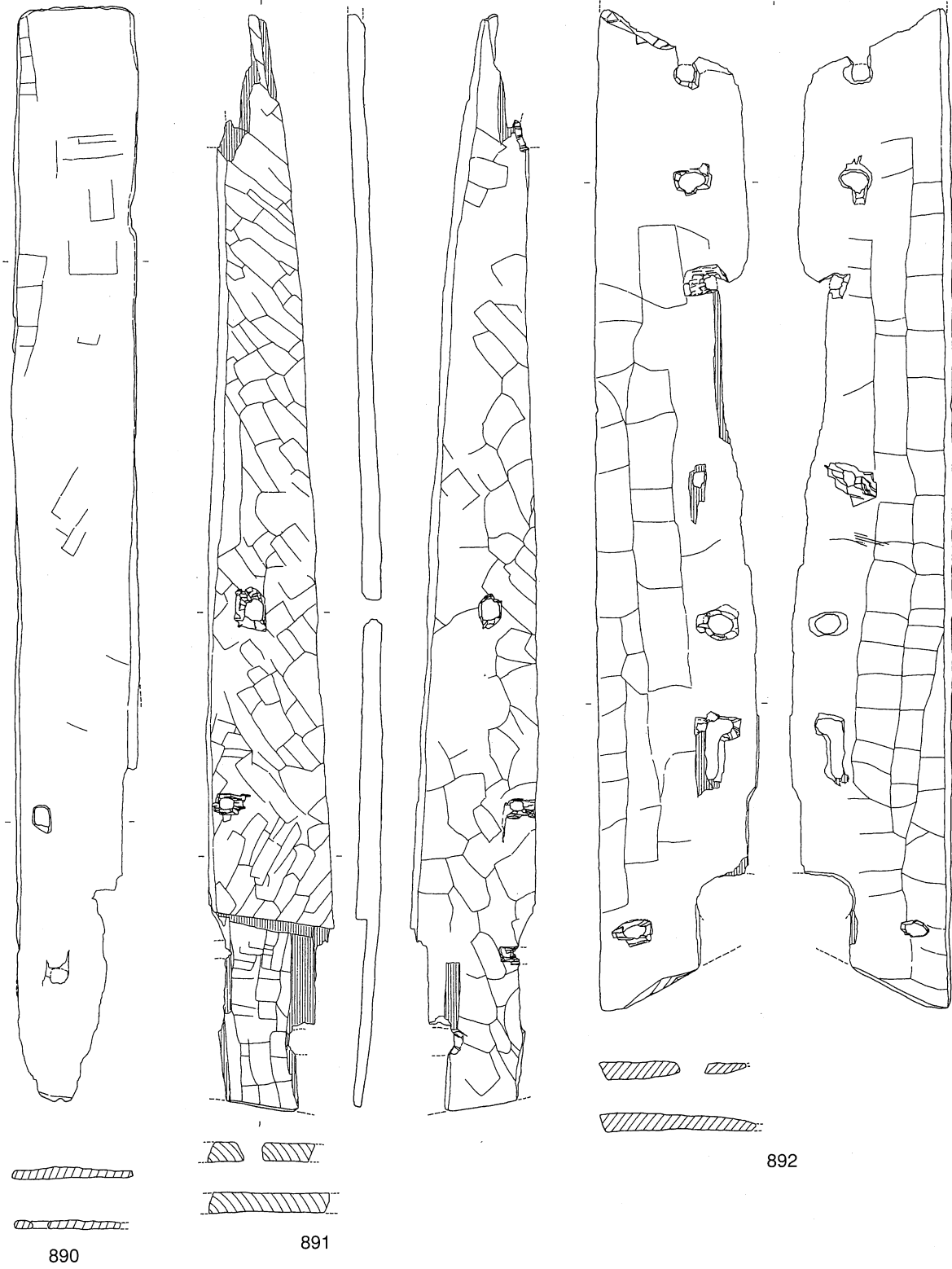
第142図 建築部材(12)



第143図 建築部材(13)



第144図 建築部材 (14)



第145図 建築部材(15)

13. 建築部材



第146図 建築部材(16)

方向に対し、幅18cmで斜めに段切りしている。段の中央部分に円孔が1つと、ほかに方形孔が5箇所にあけられている。表裏とも加工痕が顕著に残っている。樹心に近いところまで利用した柃目材で、残存長107.5cm幅12.1cm厚さ2.1cmである。892は一方の小口を斜めに切り落としている。残りの悪い長辺に沿って円孔が5、L字孔1楕円孔1があけられ、鋭角の角にも1つ円孔があけられている。表裏両面とも3～4cm程度の加工痕が残るが、表面の早材と晩材の遺存の差が顕著なので、加工痕の横端が早材部に当たると読みとれない。板目材で残存長98.2cm幅15.6cm厚さ1.9cmである。893は全長88.9cm幅28cm厚さ2.6cmの大形の板目材で、長辺沿いに楕円孔2つと方形孔2つがある。方形孔2つで隣の板との接合を補助する棒を緊縛するとみられる⁽²²⁾。895も方形孔を持つ長さ44cm幅43cm厚さ1.5cmの大形の板目材で、元は長い板を切断している。

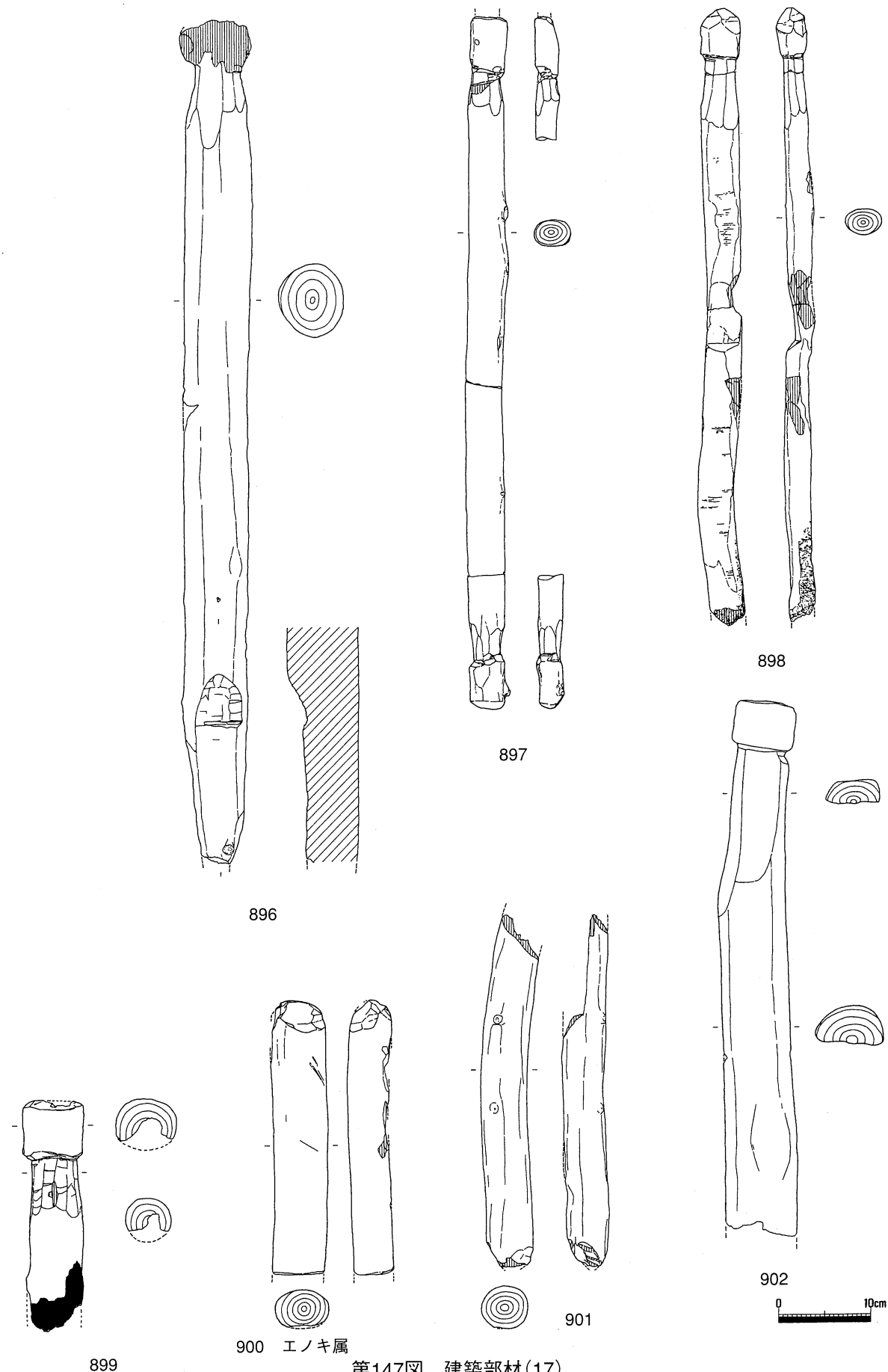
垂木

896～919は棒状・有頭棒状のもの内、特に長いもの太いものを垂木として取り扱った。平面方形の頭部を持って、鉛筆を削るようにしてその境をつけているものが多い。表面の加工痕が顕著で、丁寧に仕上げられている910・911・912・916・917などは垂木以外の製品の可能性もある。

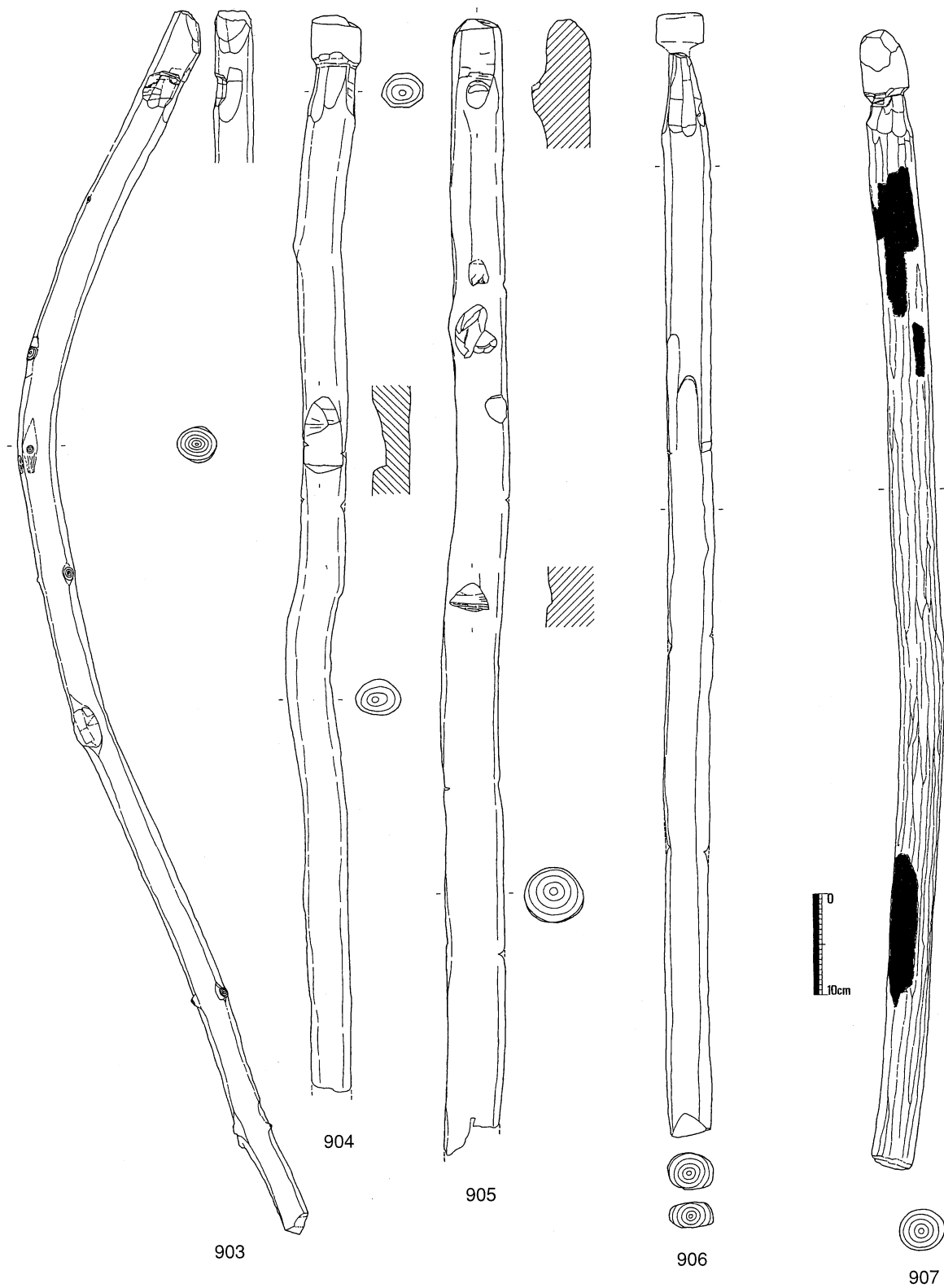
896は直径7.8cmの心持ち材を使い、平面方形の頭部を作っている。頭部から75cmのところのレの字形の加工を施していて、一部に炭化がみられる。残存長90.2cm。897は直径4.9cmの心持ち材を使い、一端は頭部状の加工の部分で折れている。長さ74cm。898は直径3.8cmの心持ち材を使って一部に樹皮が残る。残存長65.7cm。899は直径6.6cmの心持ち材で、大きめの方形頭部を持つ。一端は焼損している。900は端部に頭部を作らず丸く収めている。直径5.8cmでエノキ属の心持ち材。902は直径7.7cmの心持ち材を使って、長さ5cmの頭部を持つ。現状では半裁されている。残存長57.2cm。

903は直径5.3cm全長161.4cmの心持ち材で、弓なりに湾曲している。一端にレの字形の欠込がある。904は直径6.6cm残存長141.7cmの心持ち材で、頭部から60cmのところの長さ10cm幅6cm深さ1.8cmのレの字状の欠込がある。905は900と同じく頭部を作らない。直径7.7cmの心持ち材で、端部から8cmまでを幅4.5cmほどで平坦にしている。小さなレの字状の切れ込みを4箇所施す。残存長149.5cm。906は直径6.1cmの心持ち材で、一端はレの字形の欠込部分で折損している。残存長143.1cm。907は卵形の頭部を持つ。長軸方向の細かい加工痕が全体に残っているが、一部に樹皮がついている。直径5.5cmの心持ち材で、残存長112cmである。908は直径2.9cmの心持ち材で、半裁されている。残存長225.1cm。909は直径5.3cmの心持ち材で、端部付近には加工がみられるが、枝の根元は未加工である。残存長115.9cm。910は直径3.6cmの心持ち材で、全面に長軸方向の細かい加工痕が顕著に残っている。残存長122.5cm。

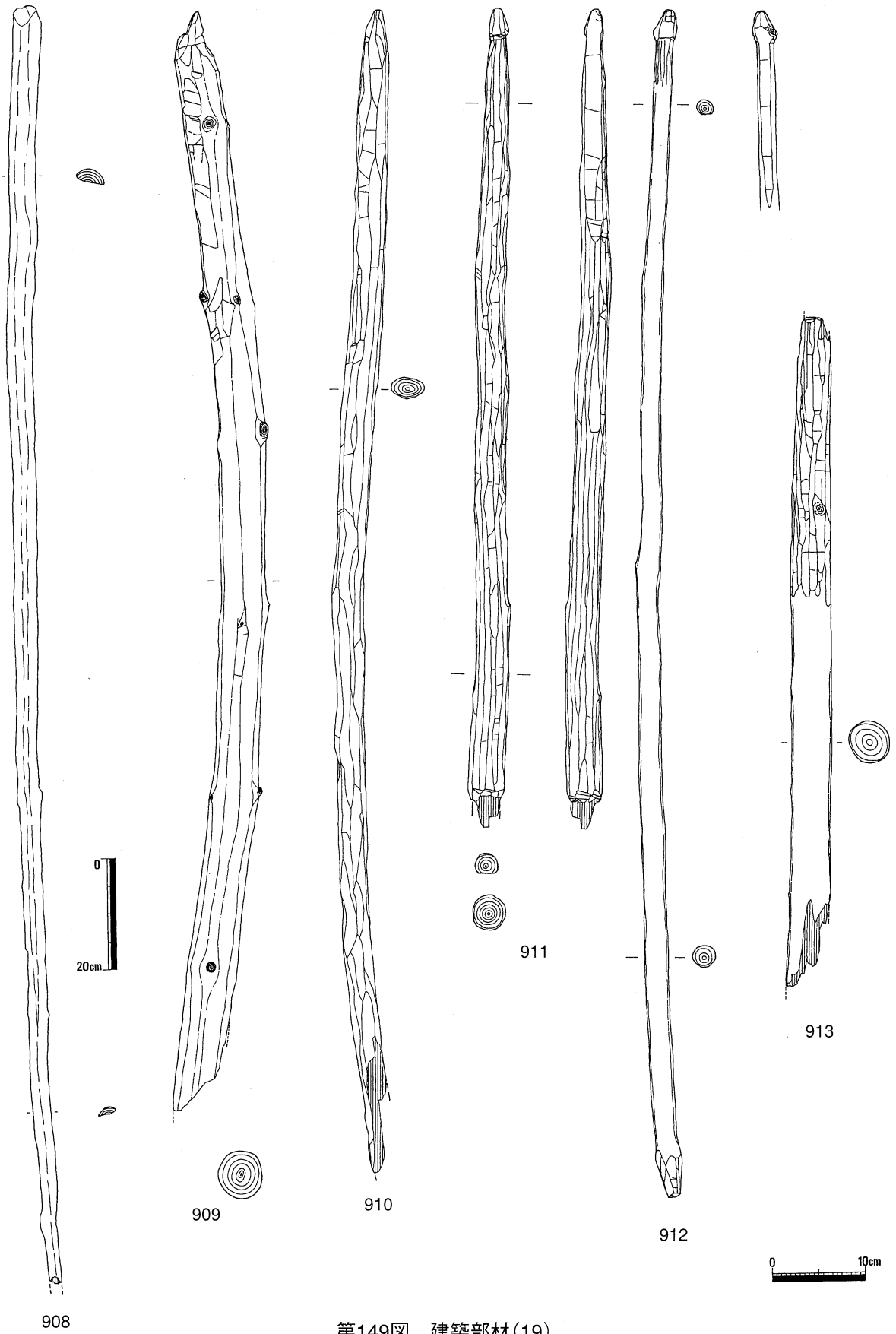
911は長三角形の頭部を持っていて、頭部側を長さ25cmにわたり平坦加工を施す。反対側の端部は縄かけ状の部分で折損している。表面の加工は丁寧に、長軸方向の幅の狭い加工痕が顕著である。直径3.8cmの心持ち材で、残存長86.2cmである。912は直径2.7cm長さ125.1cmの心持ち材を、一端は球形の頭部をつくり、他端は鉛筆状に尖らせている。913は直径4.5cmの心持ち材の一端をやや細く加工していて、加工痕がよく残っている。残存長70.8cm。914は直径6.8cm、915は直径5cm。916は直径4.2cmの心持ち材で、端部に向かいやや細く削っている。加工痕は顕著に残っていて、残存長117.7cmである。917は長さ約119cm直径3.8cmで、表面には細長い加工痕が顕著にみられる。919は900・905と同様に一端を丸く加工している。直径5.85cm。



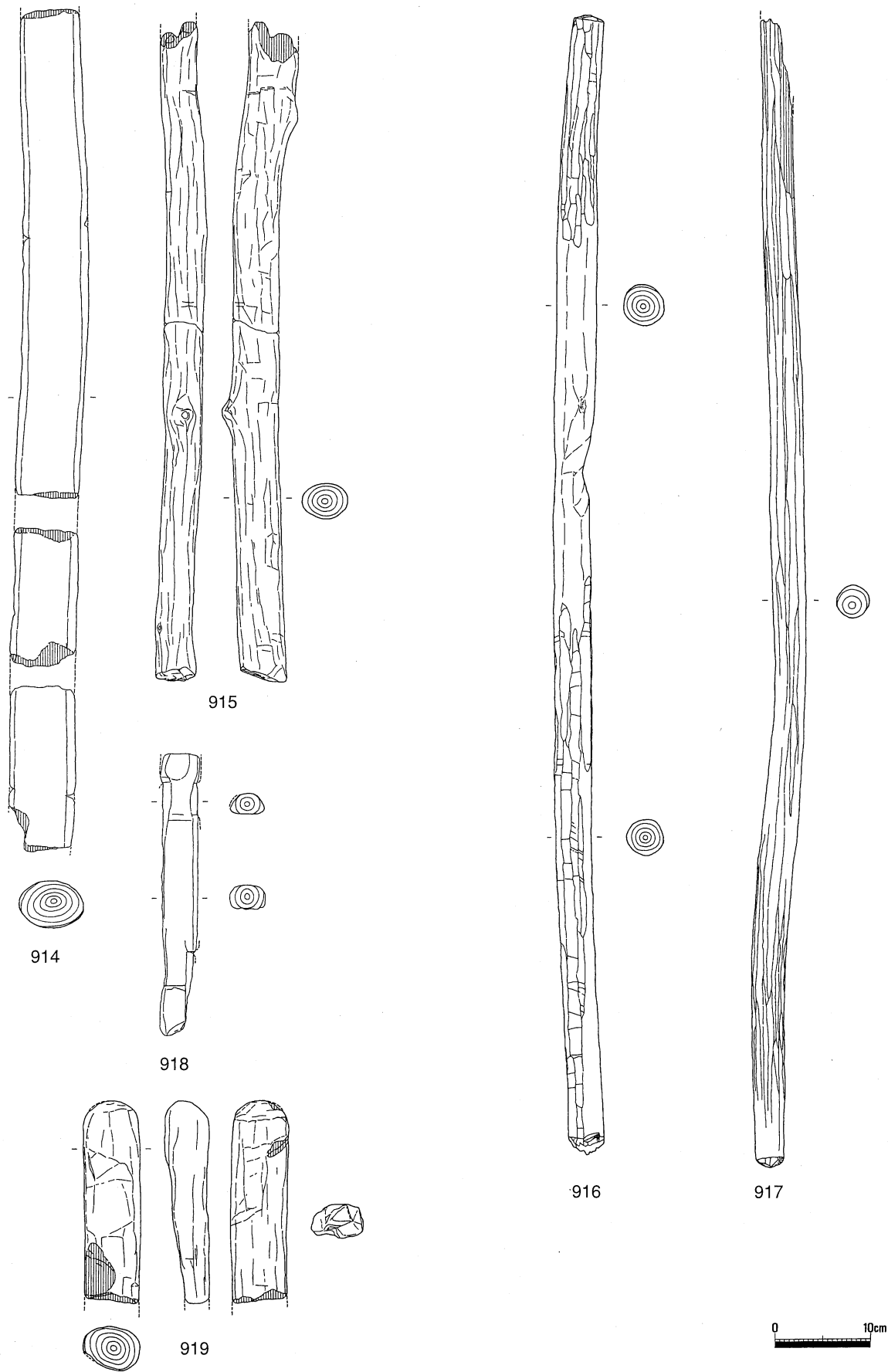
第147図 建築部材(17)



第148図 建築部材(18)



第149図 建築部材(19)



第150図 建築部材(20)

13. 建築部材

栓

920～939は平面方形の基部に長方形の組合せ部が付いていて、組合せ部には1ないし2のほぞ穴をあけている。心持ち材を使うもの割材を使うものの双方があって、小さな栓は建築物だけでなく器具にも用いられたと考えられるが、大きさでは区別が付かない。組合せ部の長さは小形品を除くと11～16cmで、ほぞ孔の大きさや数とは無関係である。

920は割材を使ったほぼ完形品で、組合せ部にはほぼ3.5cm四方のほぞ孔が2つあけられている。全長20.25cmで、組合せ部は長さ13cm幅6cmである。921は8.6×5cmの基部に16×5.6cmの組合せ部が付く。3.2×2.6cmのほぞ孔は組合せ部のほぼ中央にある。半裁材を使い、全長20.4cmである。922は平面方形の基部に先端を尖らせた組合せ部がつき、ほぞ孔は1cm四方と1×2.2cmの2つである。心持ち材を使った完形品で、全長17.0cm、組合せ部の長さ11cm幅4cmである。923は組合せ部の破片で、6.5×3.2cmの方形のほぞ孔がある。柱目材で、残存長13.6cm幅6.3cm厚さ2.6cmである。924はオニグルミの心持ち材製で、10.3×4.7cmの基部に15.7×6.7cmの組合せ部がつく。基部は土圧により少しつぶれている。組合せ部の中央やや先端よりには3.2×2.8cmのほぞ孔がある。全長22.9cm。925は割材を使ってほぞ孔で折れている。926は栓の基部を落としたもので、3.7×1.8cmのほぞ孔を持つ。全長10cm幅3.5cm厚さ2.6cm。

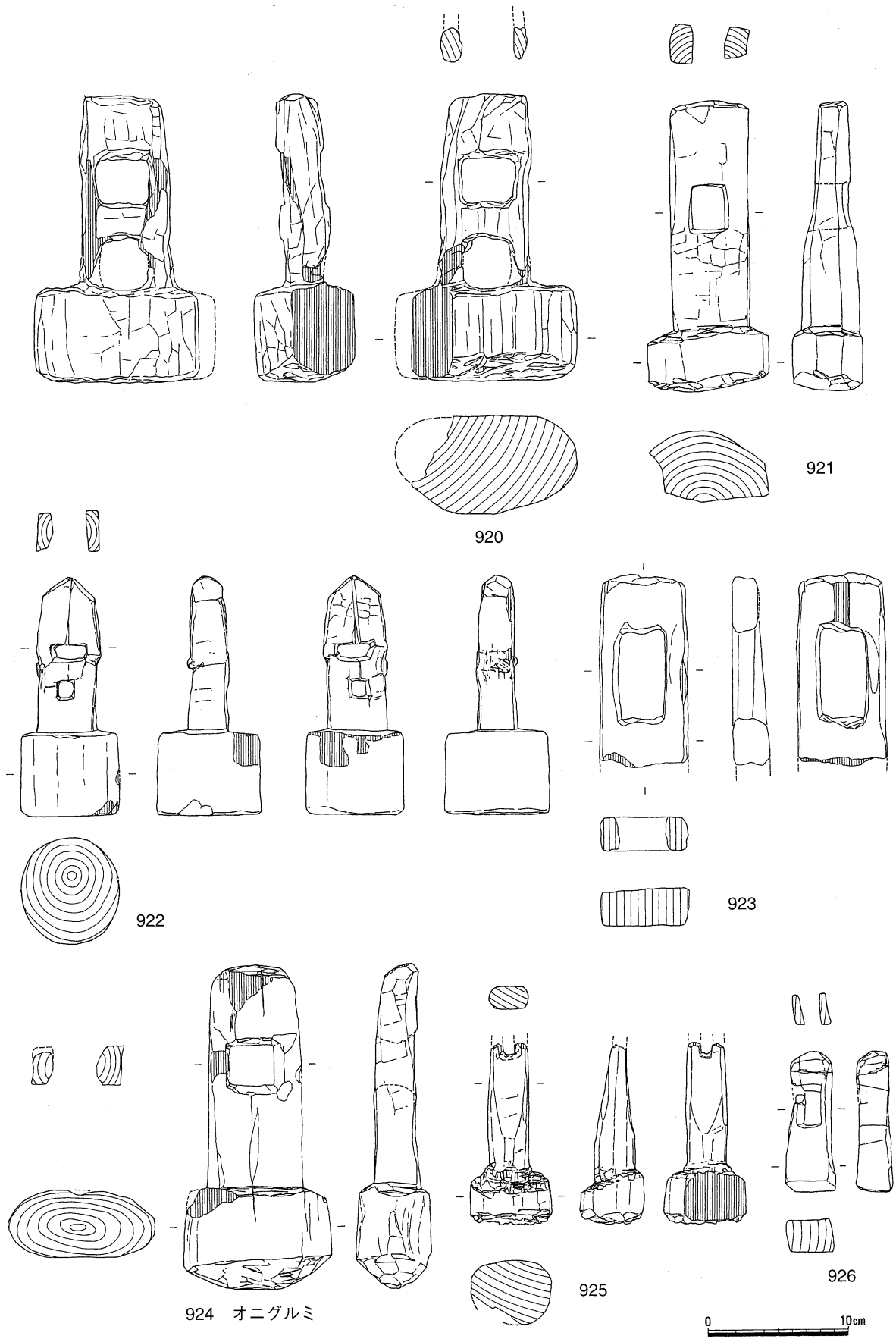
927は小さく方形の基部に長さ15.5cm幅4.6cm厚さ2.5cmの組合せ部がつく。基部と組合せ部の境はやや不明瞭。ほぞ孔は3×1.5cmの方形。割材を使って全長18.5cmである。928は心持ち材を使った全長19.2cmの完形品で、方形の基部に長さ13cm幅3.7cmの組合せ部がつく。ほぞ孔の大きさは1.7cm四方である。929は割材を使った全長17.6cmの完形品で、隅丸方形の基部に断面方形の組合せ部が付く。組合せ部中央付近には2×2.5cmほどのほぞ孔が1つある。930は基部が1/4ほど欠損している。組合せ部の先端側1/3の所に2×2.5cmのほぞ孔を持つ。半裁材を使い、全長19.6cmである。931は組合せ部がほぞ孔部分で欠損している。ほぞ孔から基部までが11cmあって特に長い。932は組合せ部にはほぞ孔がない。933・935はほぞ孔の部分で折れている。934は割材を使った全長9.3cmの小形品で、組合せ部先端をやや欠く。1.2cm四方のほぞ孔を持つ。938・939は組合せ部の破片で、ほぞ孔は938が1.3×2cm、939が1.5cm四方である。

不明部材

940～975は使用部位の特定できない建築材・施設材およびそれらの可能性のある加工品である。

940～942は巨大な栓状の木製品だが、どれにも組合せ部にほぞ孔をあけていない点が異なる。941・942では結合部が細長い点も異なっている。掛矢の可能性もあるが、その場合でも握部としては細い。ほぞを持った建築部材が転用のため切り捨てられた部分の可能性もある。ただ、その場合でも942は基部平面形が台形をしていて当てはまらないようにも思える。部分名称は栓に準じて用いることとする。940は完形品で、基部の平面形は方形をしていて組合せ部にほぞ孔を持たない。全長35.8cm組合せ部の長さ23cm幅8cm厚さ6.5cm、基部は直径14.5cm。941の組合せ部は長さ22.5cmで直接は接合しない。幅は2.5cmで、残存長44cm。942の組合せ部は断面2cm四方で長さ21.5cm。全長は45cmである。

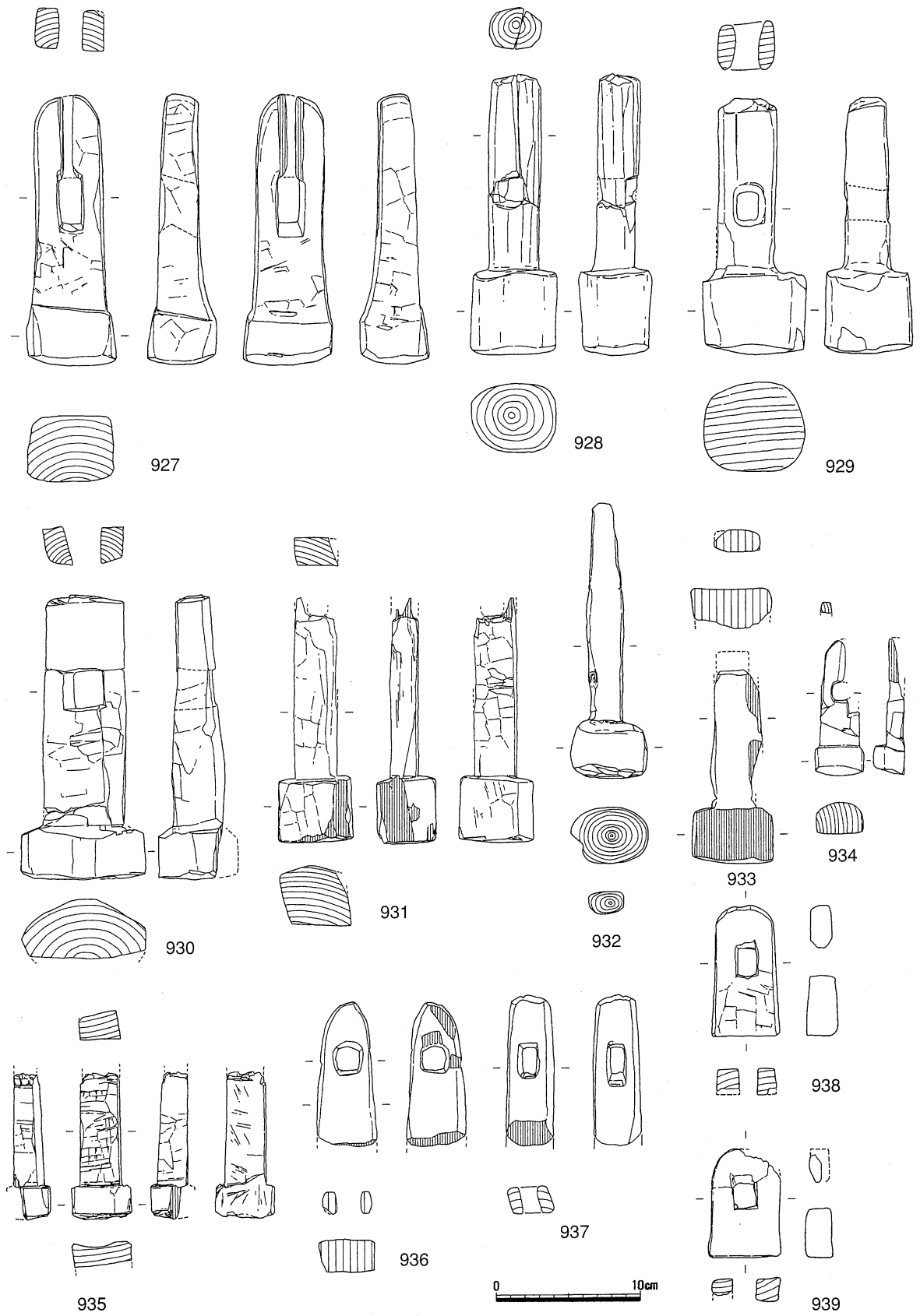
943は分枝部分に2.5×1.8×0.5cmの欠込があって、795の竿受けと似た点もあるが、縄かけが施されていないので別の用途として使われたと思われる。全長80.3cm直径4.4cmである。944は又部をコの字形に又繰り加工している。一方の枝は短く偏球形の頭部を持つ。幹の直径が3.7cmと細く大きく曲



924 オニグルミ

第151図 建築部材(21)

13. 建築部材



第152図 建築部材(22)

がっていることから、建物ではなく何らかの施設材として用いられたとみられる。残存長99.8cm。945は細長い心持ち材の一端を断面方形に削ってほぞ加工を施し中央に方形のほぞ穴をあけている。

946は板目材で樹心側に湾曲している。方形孔が角に1つあって、残存長52.3cm幅15.3cm厚さ3.1cmである。947も946と同様に樹心側に湾曲した板目材で、小さな方形孔や傷が見られる。残存長62.3cm幅17.3cm厚さ2.1cmである。948は全長48.5cm幅29cm厚さ3.9cmのほぼ完形の板材で、長軸方向には中央で山形となり短軸方向は長三角形の断面形である。949は粗い方形孔を持ち、一方の小口には両面からの切断痕が残る。柵目材で、全長25.9cm幅11.6cm厚さ2.1cmである。950は残存長27.5cm幅15.5cm厚さ2cmの柵目板。951は栓に形状が似るが、ほぞ孔がなく栓でいう組合せ部が41cmと長い。また、基部と組合せ部は約75度の角度を持つ。割材を使い全長67.9cmである。

952は全長99.9cm幅9cm厚さ5.9cmの柵目材で、側面中央にレの字状の欠込がある。953にもレの字状の欠込があるが、こちらは上面の小口から1/3の所に長さ11cmで施されている。板目材で、全長75.1cm幅12.9cm厚さ4.9cmである。954はほぼ完形品で、半月形の長辺中央に不整円孔が1つあけられている。板目材で全長31.2cm幅13.4cm厚さ1.8cmである。955には長さ21cm幅4cmの長楕円形の貫孔がある。半裁材で、残存長39.5cm幅12.8cm厚さ4.7cmである。

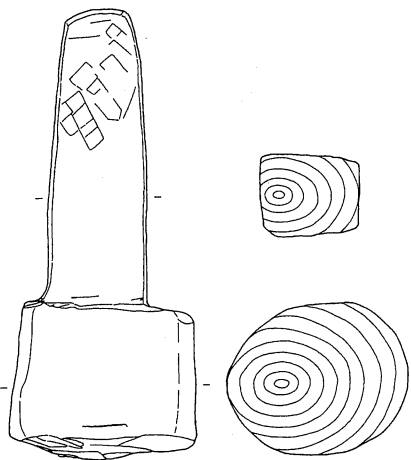
956ははしごにたとえると足かけの上部に円形のくぼみ加工がある。半裁材で残存長60.7cm幅6.5cm厚さ9cmである。957は樹心側の面を中心として長軸方向に段を作り、横断面形がL字状を呈する。半裁材で、全長72cm幅11.9cm厚さ6.2cmである。958・960は切断丸太材で両端に切断痕が残る。958は直径21.7cm、960は直径20cmである。959は柵目材だが、樹心をさけた1/4分割材に近い。表面は全体に炭化していて横杓子未成品の可能性もある。残存長36.8cm幅16.9cm厚さ18.8cmである。

961は直径2.8cmの心持ち材で、残存長127.4cmがある。切断痕の残る端部は約17cmほどにわたって炭化し、その部分には加工痕が残る。962は一端を切断しているが、枝が根元から残っているなど加工が粗い。心持ち材で直径2.7cm残存長103cm。963は直径5.5cmの柵目材を使っていて、全長102.7cmの完形品である。両端に半球形ないし方形の頭部がつく。長軸方向に幅の狭い加工痕が顕著に残っている。964は全長108.8cm直径4.3cmの完形品で、一端に向け徐々に細くなる。全体に加工痕が顕著である。心持ち材である。965は板目の細い割材で、残存長113.3cm幅2cm厚さ2.7cmである。966は直径6.3cmの心持ち材で端部付近を面取りしている。頭部を持たない垂木材に似る。残存長85.7cm。967は直径3.7cmの心持ち材で、一部に樹皮が残っている。残存長75.9cm。968は上面に6.8×4.3×1.7cmの欠込を施している。直径8.2cmの心持ち材で、残存長27.6cmである。

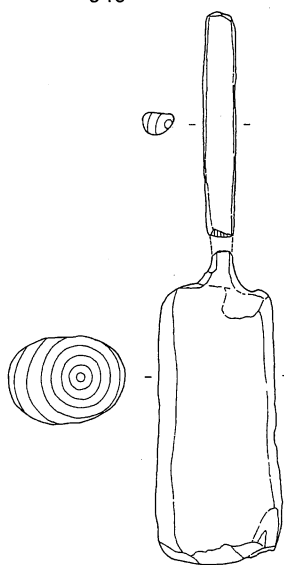
969・972・973は心持ち材を使って、両端を残し中央部分を薄く削りこんでいる。969・972では中央の削り込み部分に稜を持たせている。端部の裏面に方形の浅い穴を彫っていて、969では両端に973では一方にある。969は直径15.7cmの心持ち材を使っていて、全体に炭化している。全長95.8cm。972は長さ104.8cm直径16cmの心持ち材を使っている。973は中央の削り込みを縦断面かまぼこ形に行っていて、969・972がコの字形に行うのとは異なっている。一部に炭化がみられる。直径13.7cmの心持ち材を用いていて長さ93.5cmである。

970はクスノキの心持ち材を使った完形品。32.8×4.5cmの方形孔と1側部に25×0.7cmの細長い孔を持つ。全長49.1cm幅8.9cm厚さ5.2cmである。971はケヤキの柵目材の中央に幅8cm長さ5cm以上の方形の彫り込みを行う。一端を焼損していて残存長20.4cm幅10.3cm厚さ5.9cmである。974は直径4.7cmの心持ち材を使っていて、断面方形の棒状部分に頭部をつけている。975は3.7×2.6cmの方形孔と、長軸

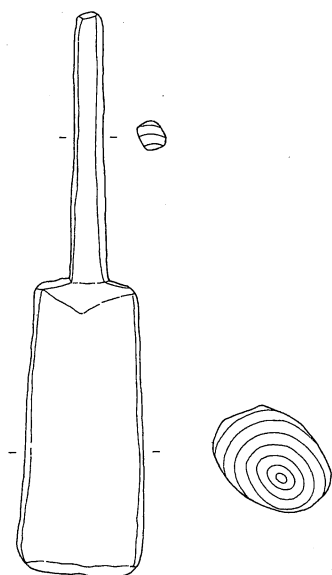
13. 建築部材



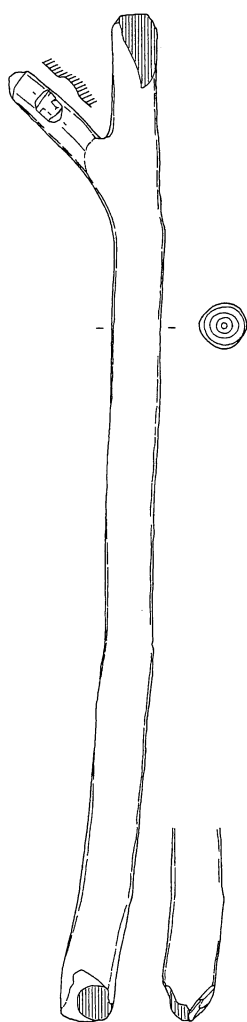
940



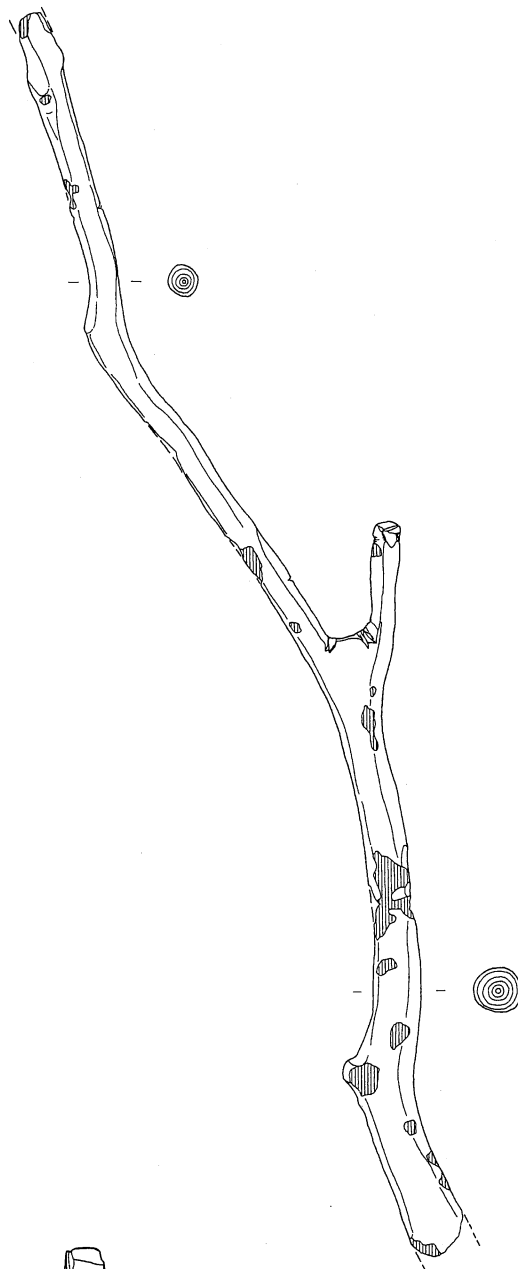
941



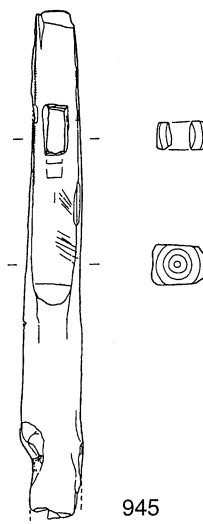
942



943



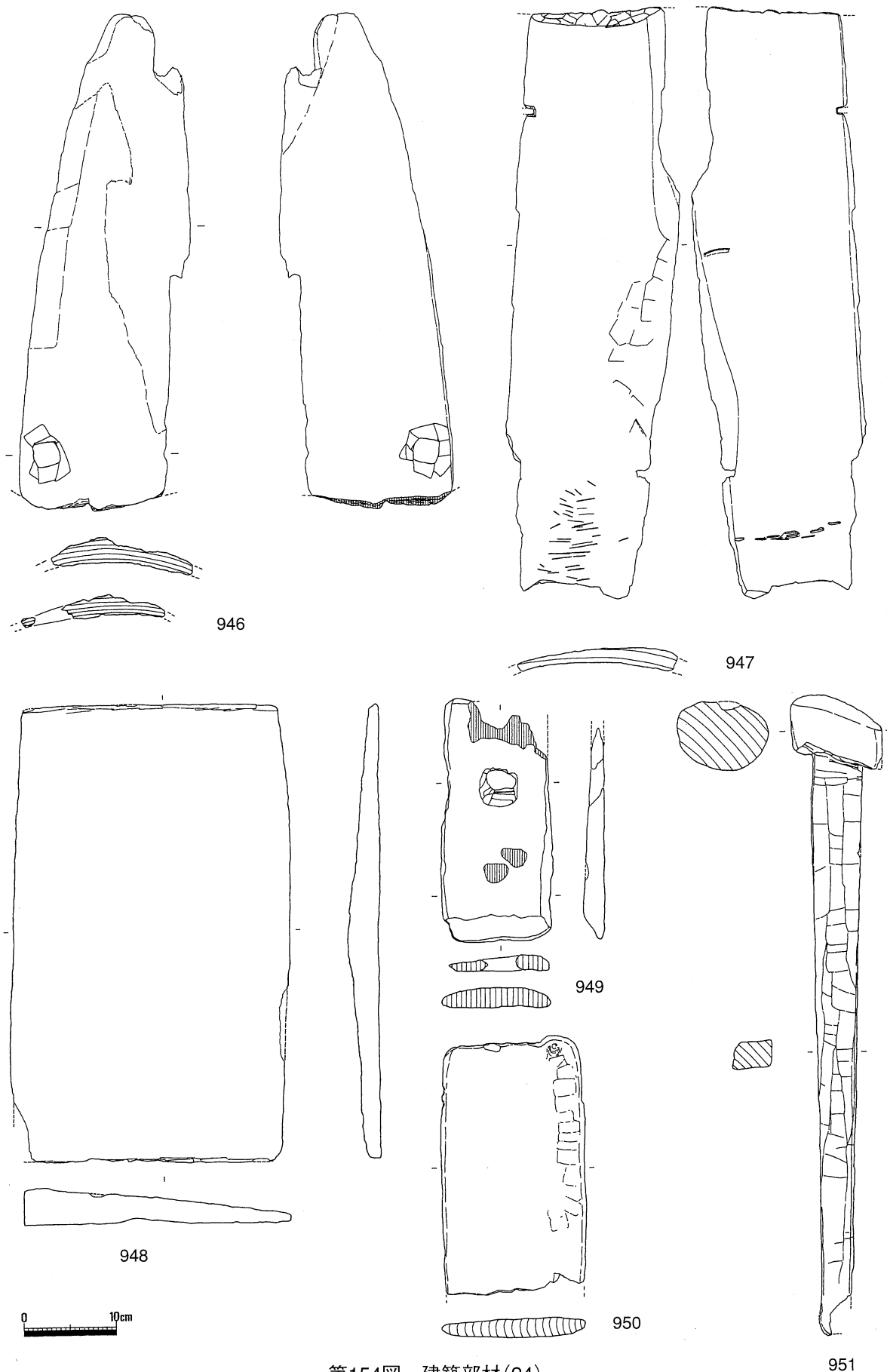
944



945



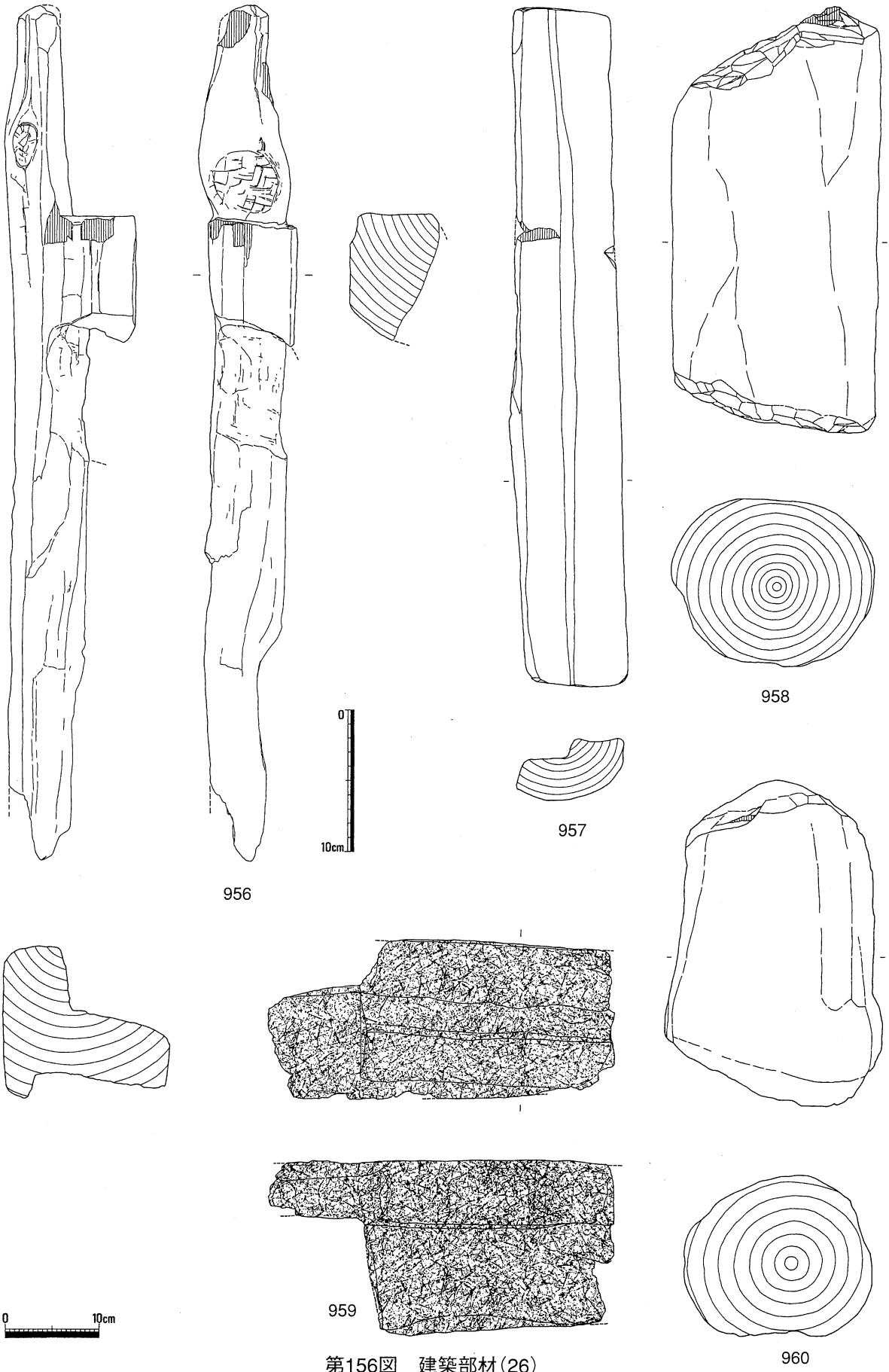
第153図 建築部材(23)



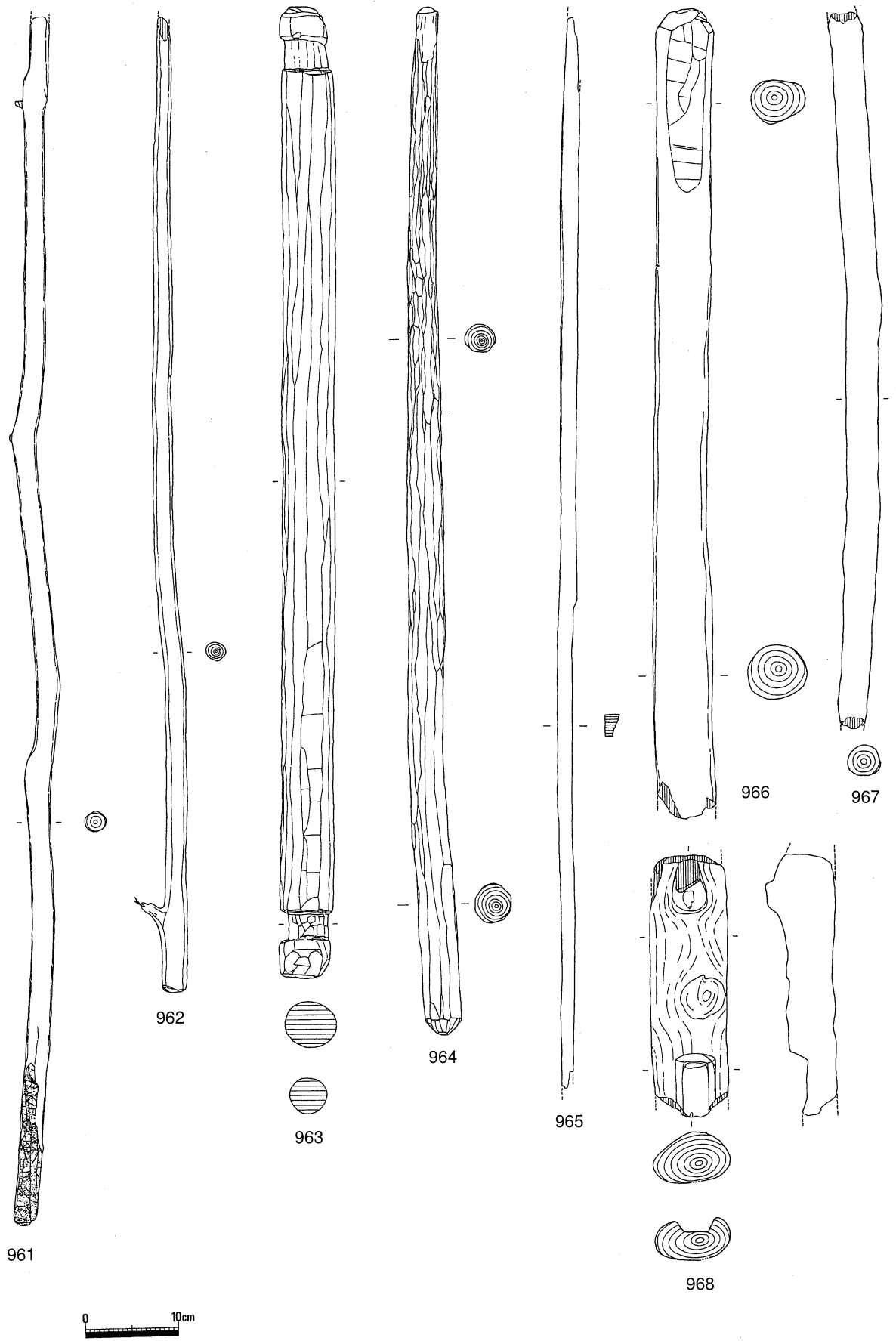
第154図 建築部材(24)



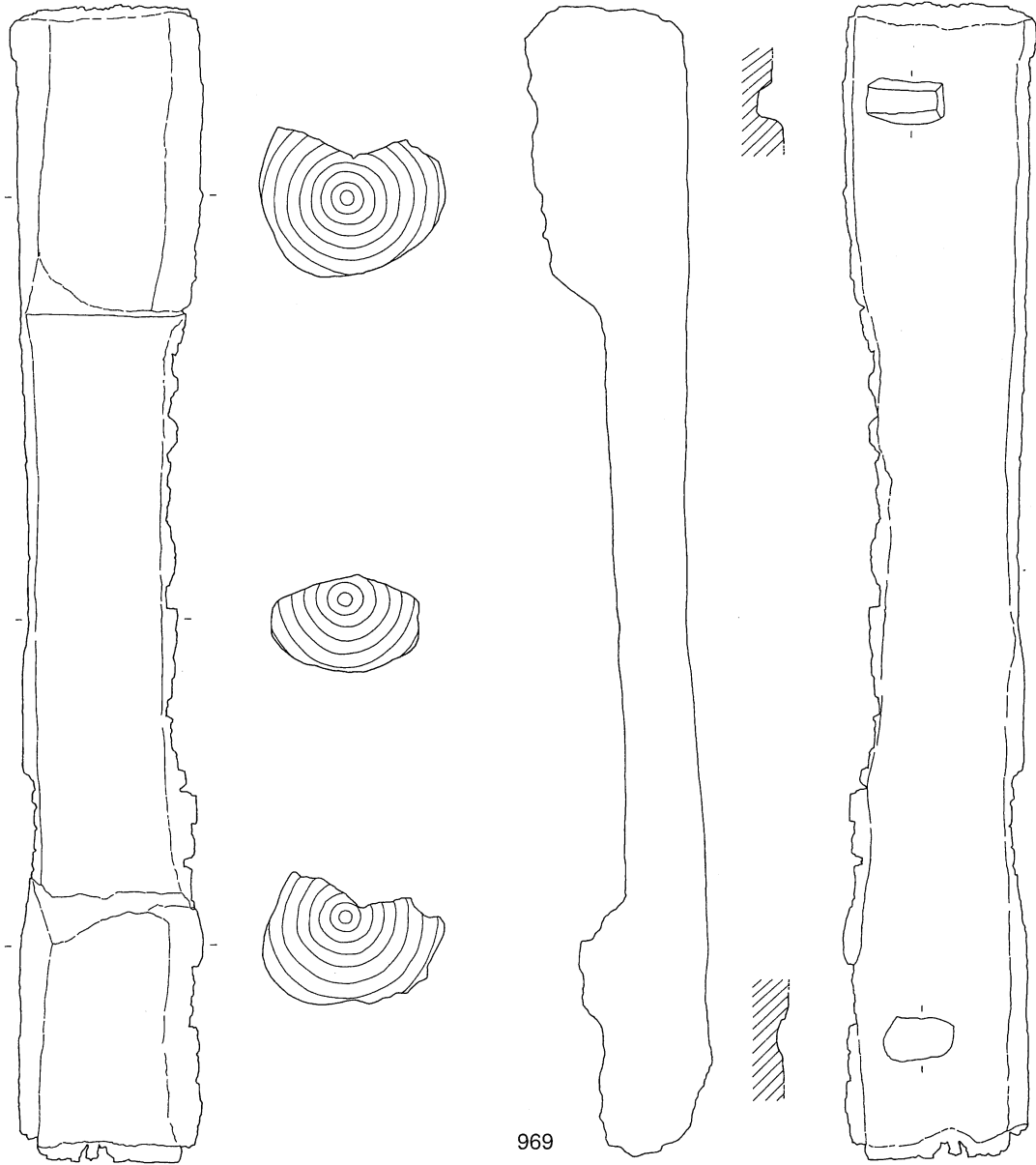
第155図 建築部材(25)



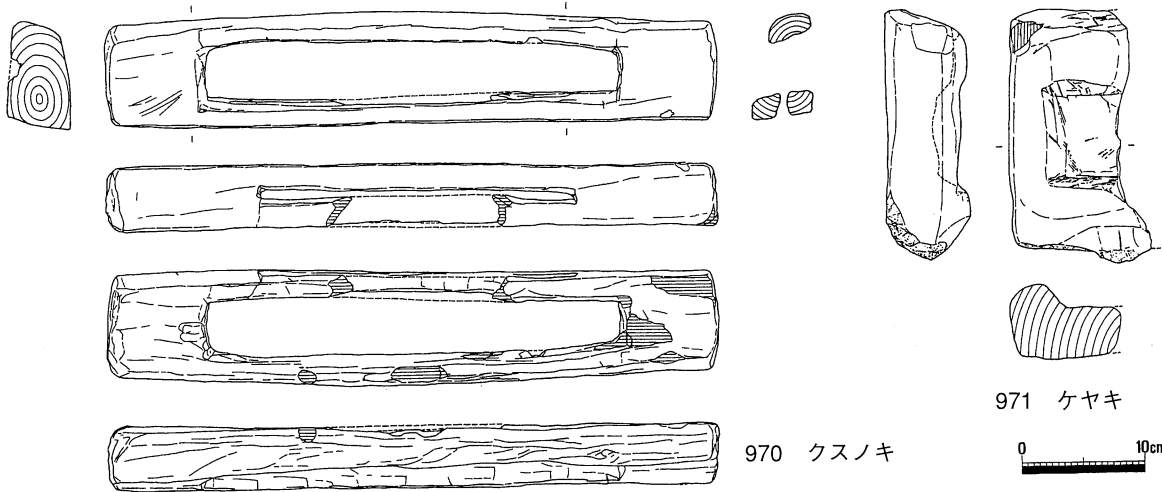
第156図 建築部材(26)



第157図 建築部材(27)



969



970 クスノキ

971 ケヤキ

0 10cm

第158図 建築部材(28)

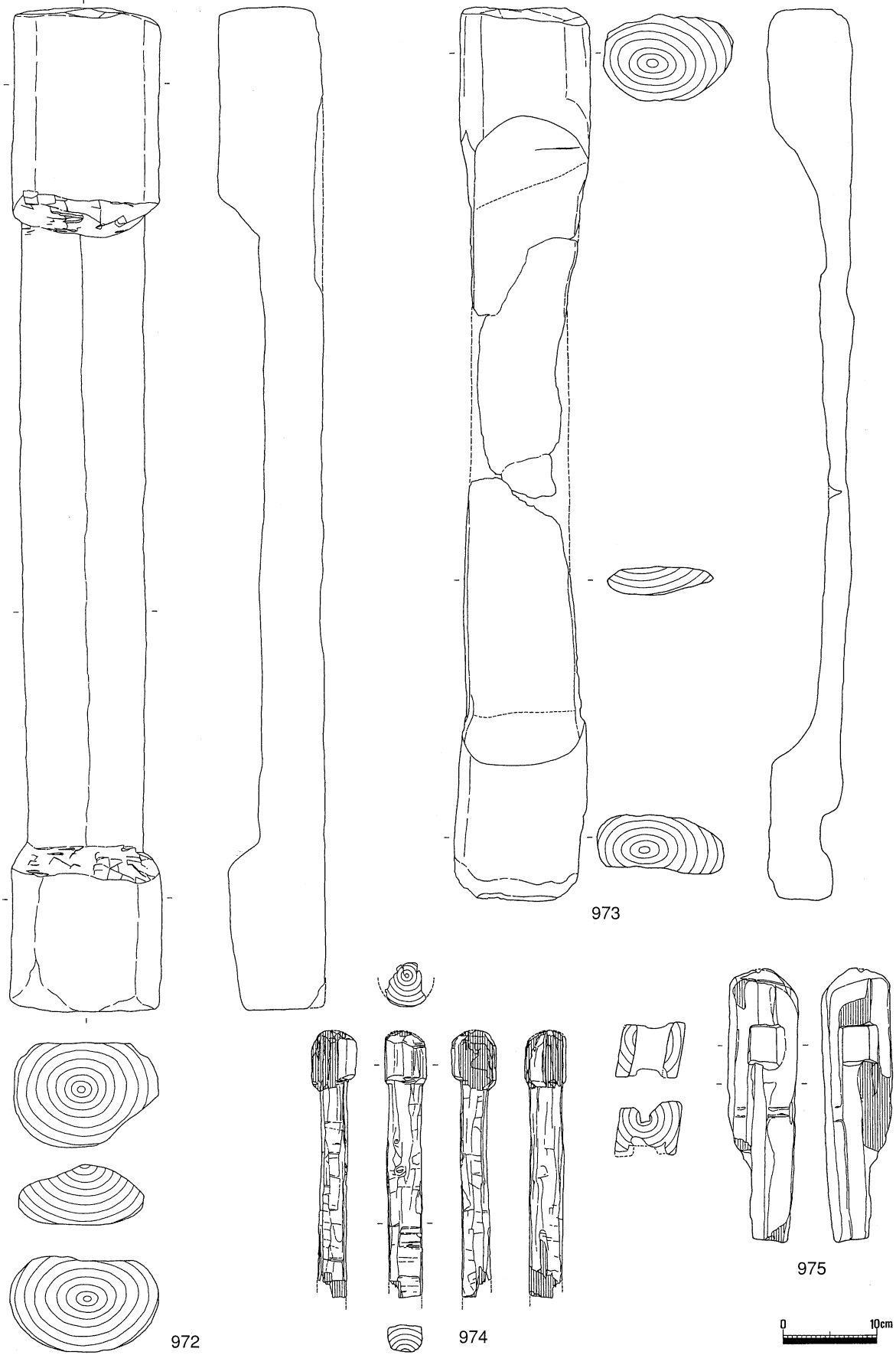
13. 建築部材

に沿って方形孔に連なる溝・方形孔の下5cmに横方向の溝を表裏両面に持つ。心持ち材で、残存長28.4cm幅7.1cm厚さ5.4cmである。

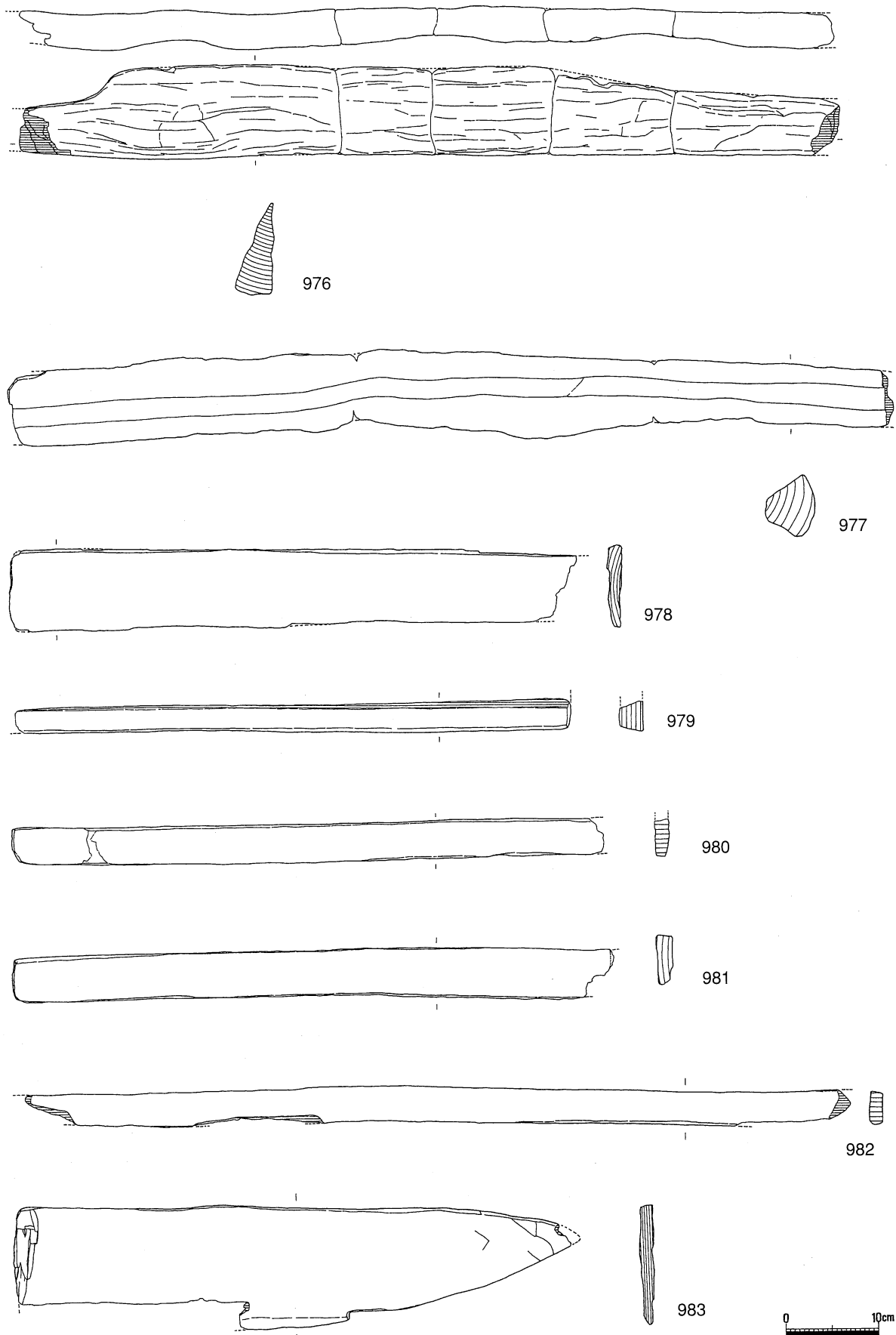
976～1013は板材である。976はミカン割材である。977は断面がミカン割材の樹心側を取った形。978は幅8.6cm厚さ1.7cmの板目材。980は幅4.1cm厚さ1.5cmの柁目材で、一端を薄く加工している。981は幅5.3cm厚さ1.8cmの板目材で、長さ63.8cmが残存している。982は柁目板の分割品で、一部炭化している。残存長87.5cm幅3.7cm厚さ1.5cm。983は幅2.9cm厚さ1.8cmの矢板状の形をしていて、板目材の一端を側面から尖らせている。残存長は59.2cm。984は幅14.1cm厚さ5.9cmの柁目材で、炭化が著しい。987は幅15.2cm厚さ7.3cmの板目の角材で、一部炭化している。990は幅18.4cm厚さ6.7cmの板目材で側面にも加工痕がある。

994は厚さ1.8cmの板目材で、表面を平滑にしている段階である。1003は残存長77.3cm幅21cm厚さ3.3cmの柁目材で、表裏ともに加工痕が観察されて全体に炭化している。1010は全長108cm幅15cm以上厚さ2.4cmの柁目材で、表裏とも幅4cm程度の加工痕跡が見える。1011は幅14cm厚さ2.4cmの板目材で、表面を平滑にしている段階。残存長は86.4cmである。1012は幅13.9cm厚さ1.5cmの板目材で、長さは92.6cmが残存している。1013は一端が細くなって先端を折損。広い方の小口をほぞ状に削りだして、細長い戈形をしている。板目材で、残存長79.4cm幅11.6cm厚さ6.2cmである。

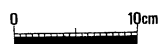
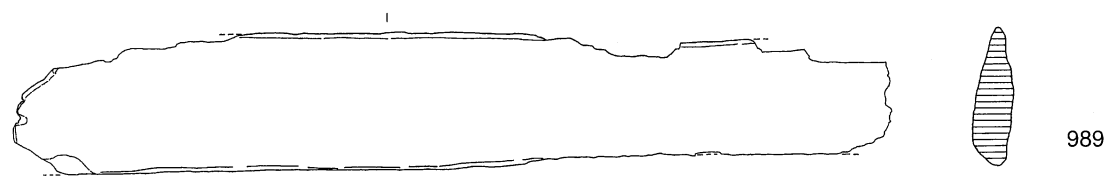
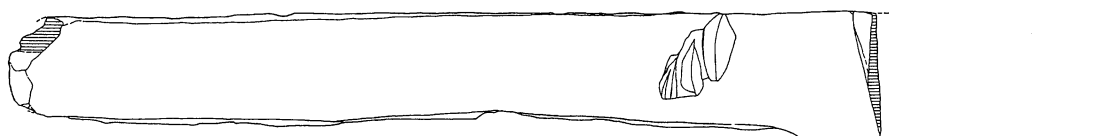
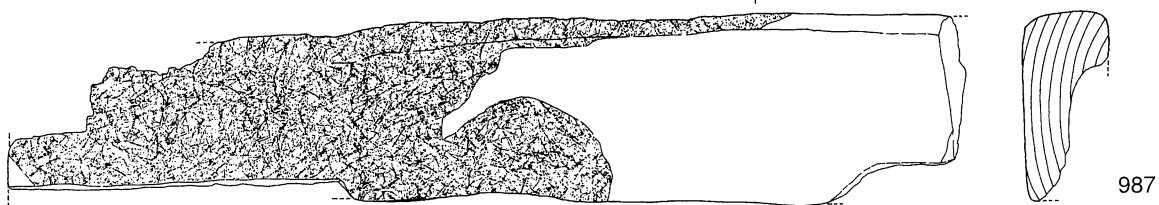
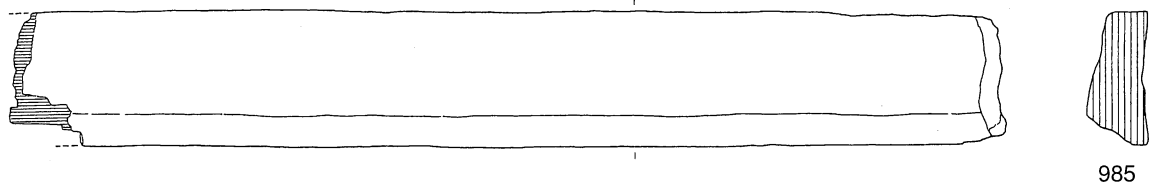
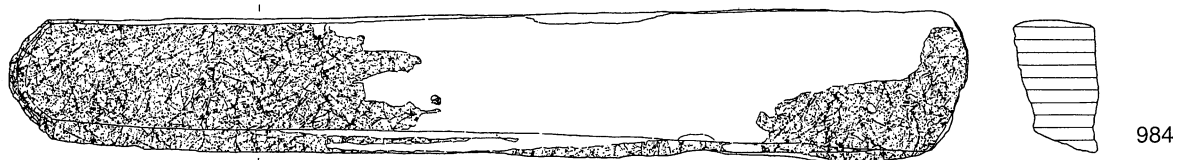
1014～1021は残材状のものである。1014には長辺沿いに幅6mm深さ1.3cmの溝がある。1016は一端の幅を狭くし側面をなで肩状に加工する。1017は長辺沿いに長さ13cm幅3cm高さ1.5cmの突起がある。一端から5cmの所を両面から切断しかけている。これと共に突起の角が斜めに削り落とされている。1018は完形品。五角形の頂部に横長の長方形の頭部を作る。1020は1面中央部に7条の線刻がある。



第159図 建築部材(29)

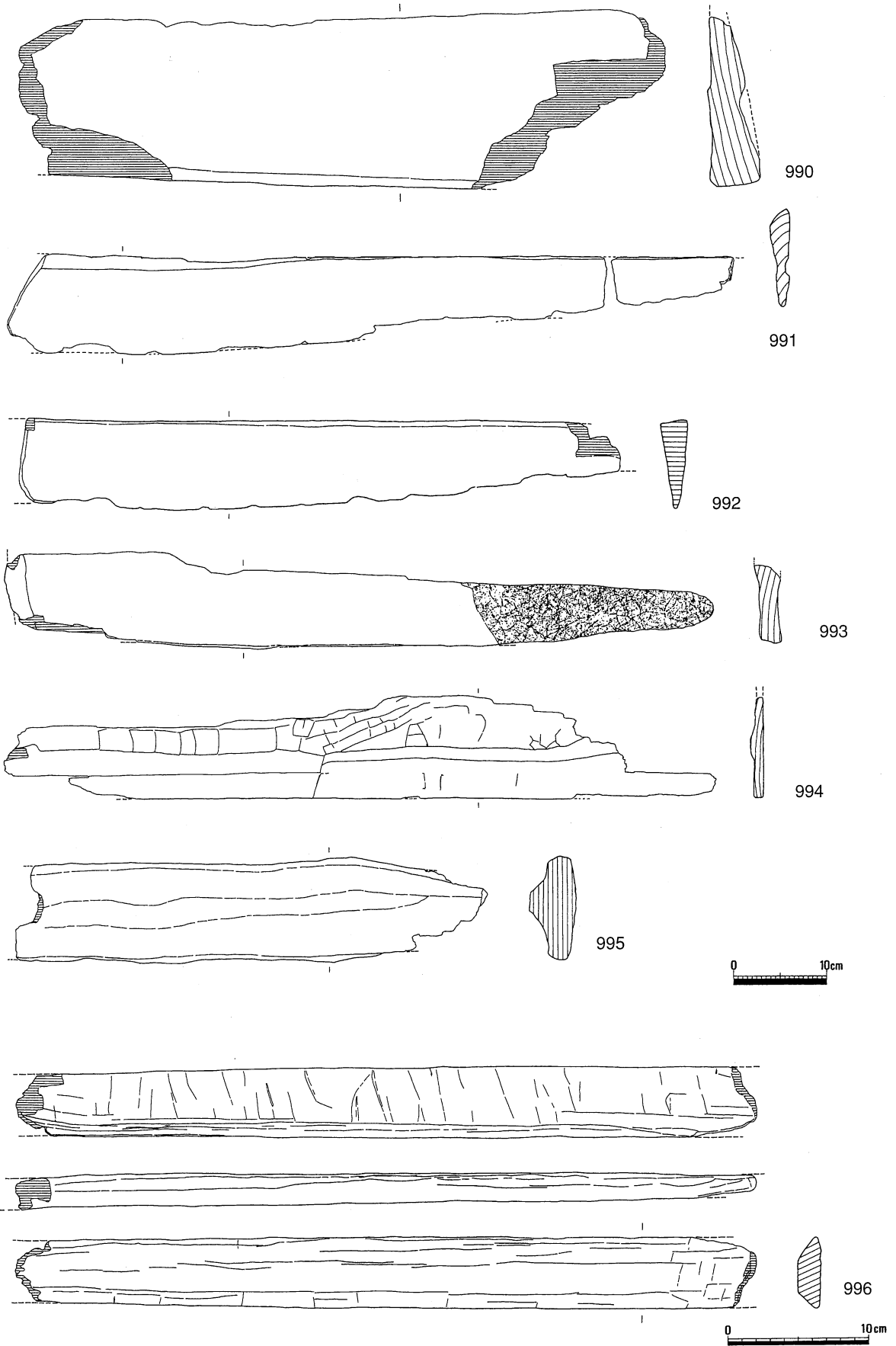


第160図 建築部材(30)

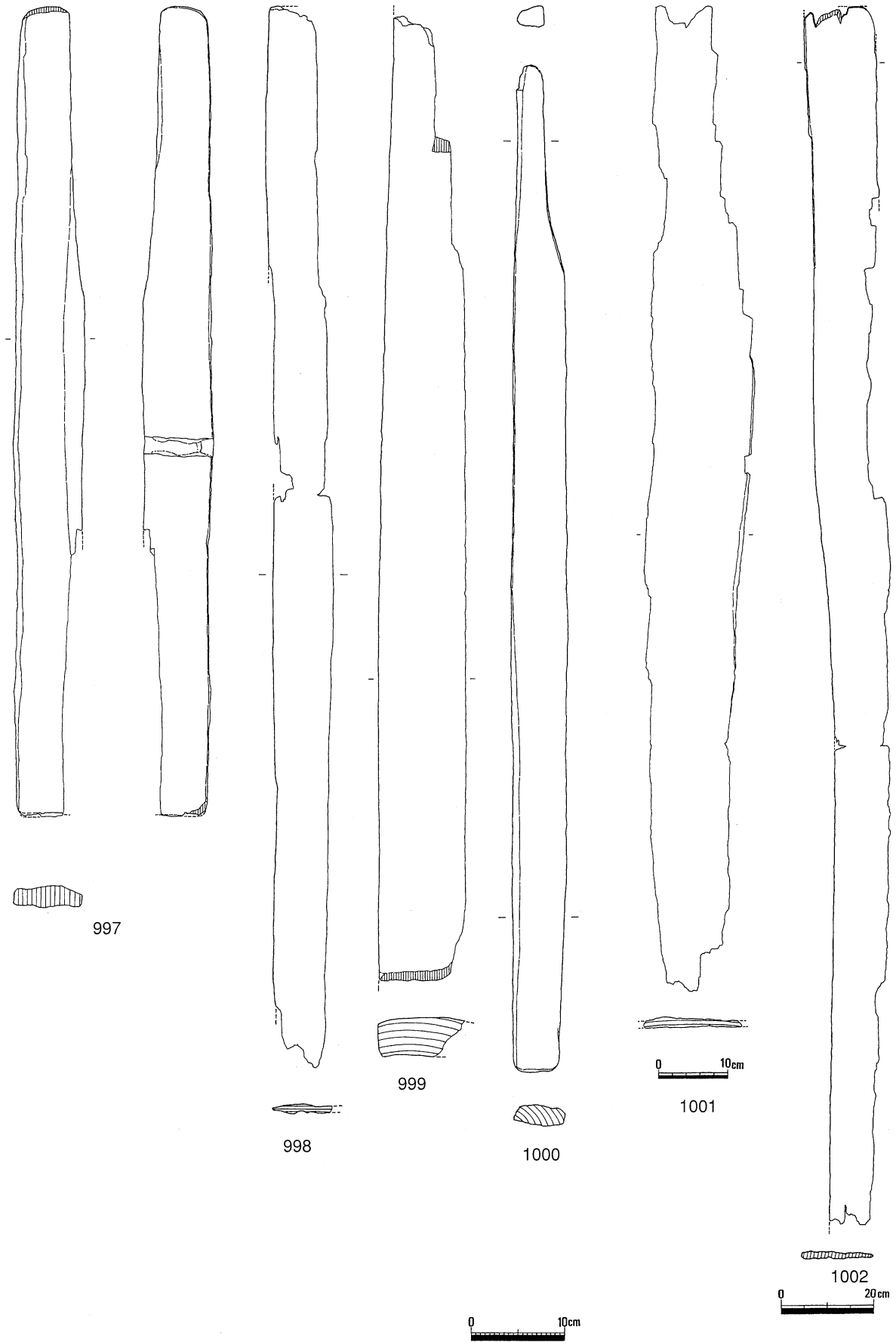


第161図 建築部材(31)

13. 建築部材

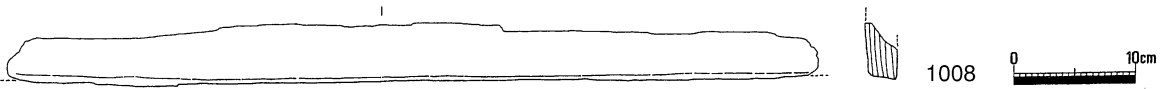
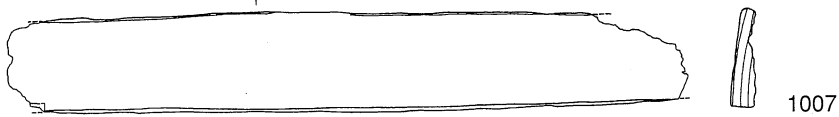
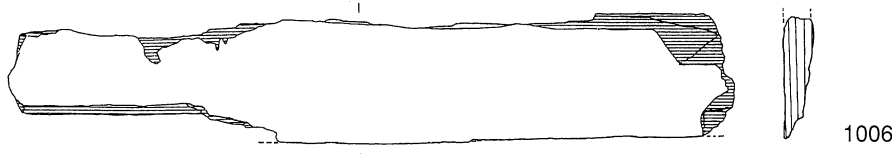
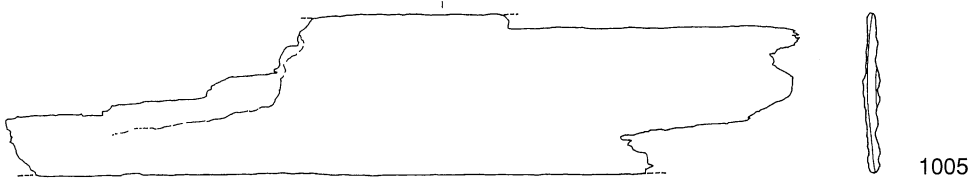
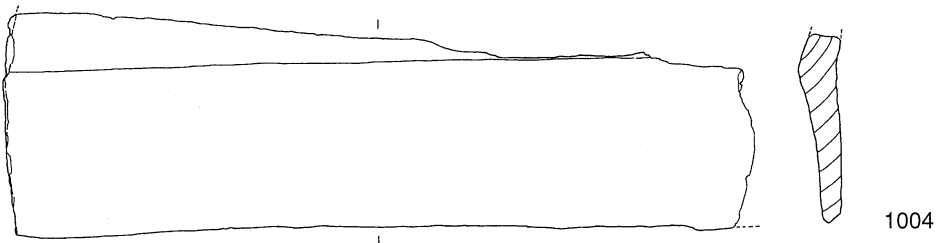
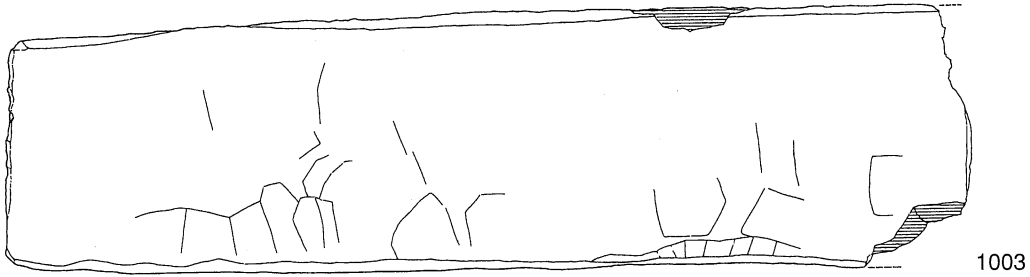
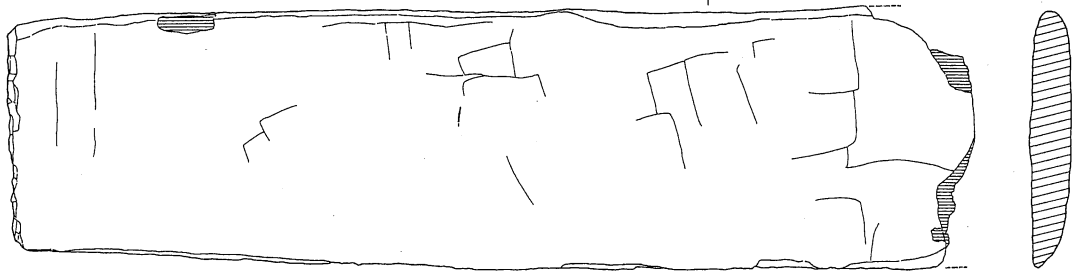


第162図 建築部材(32)

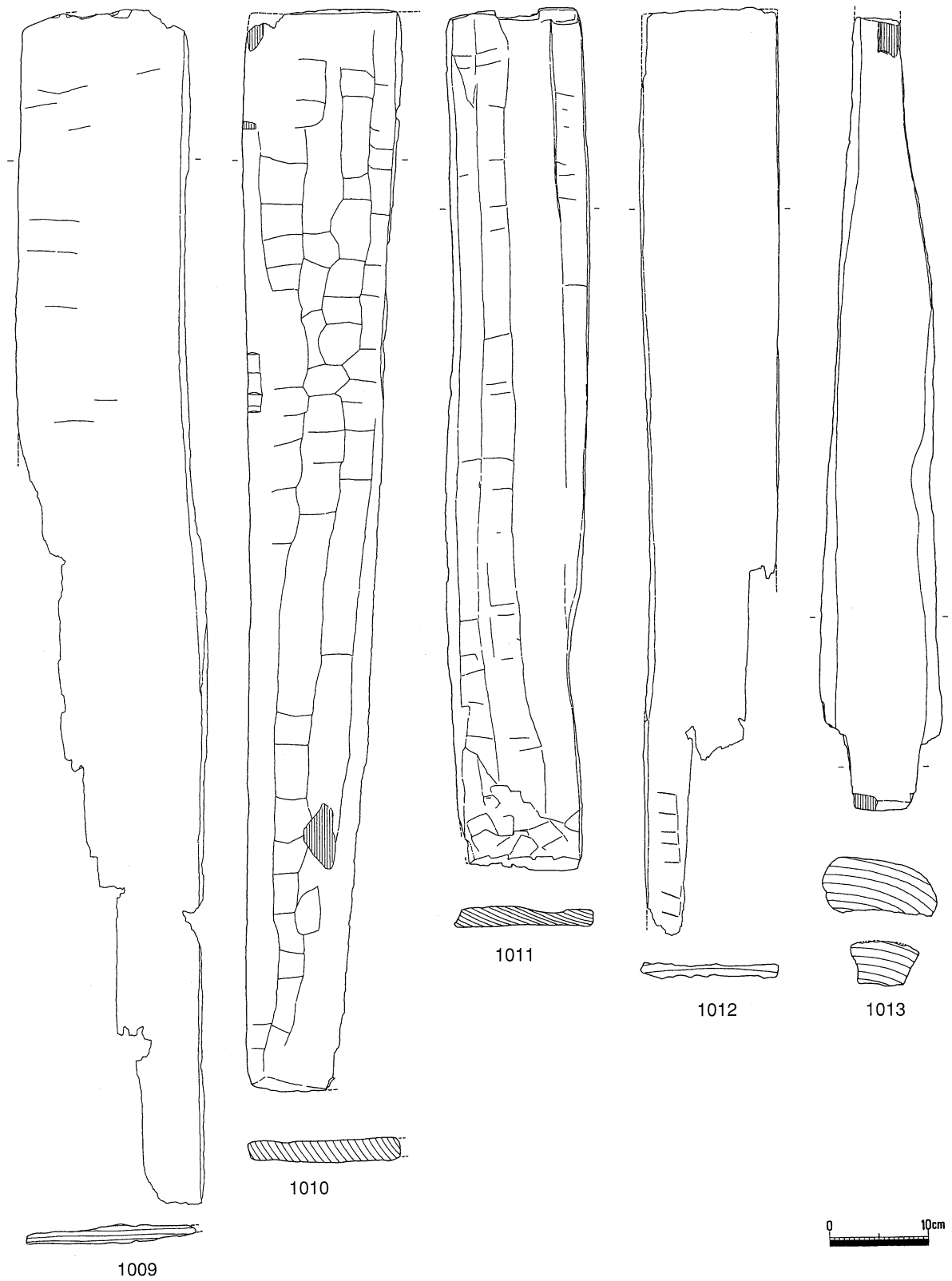


第163図 建築部材(33)

13. 建築部材

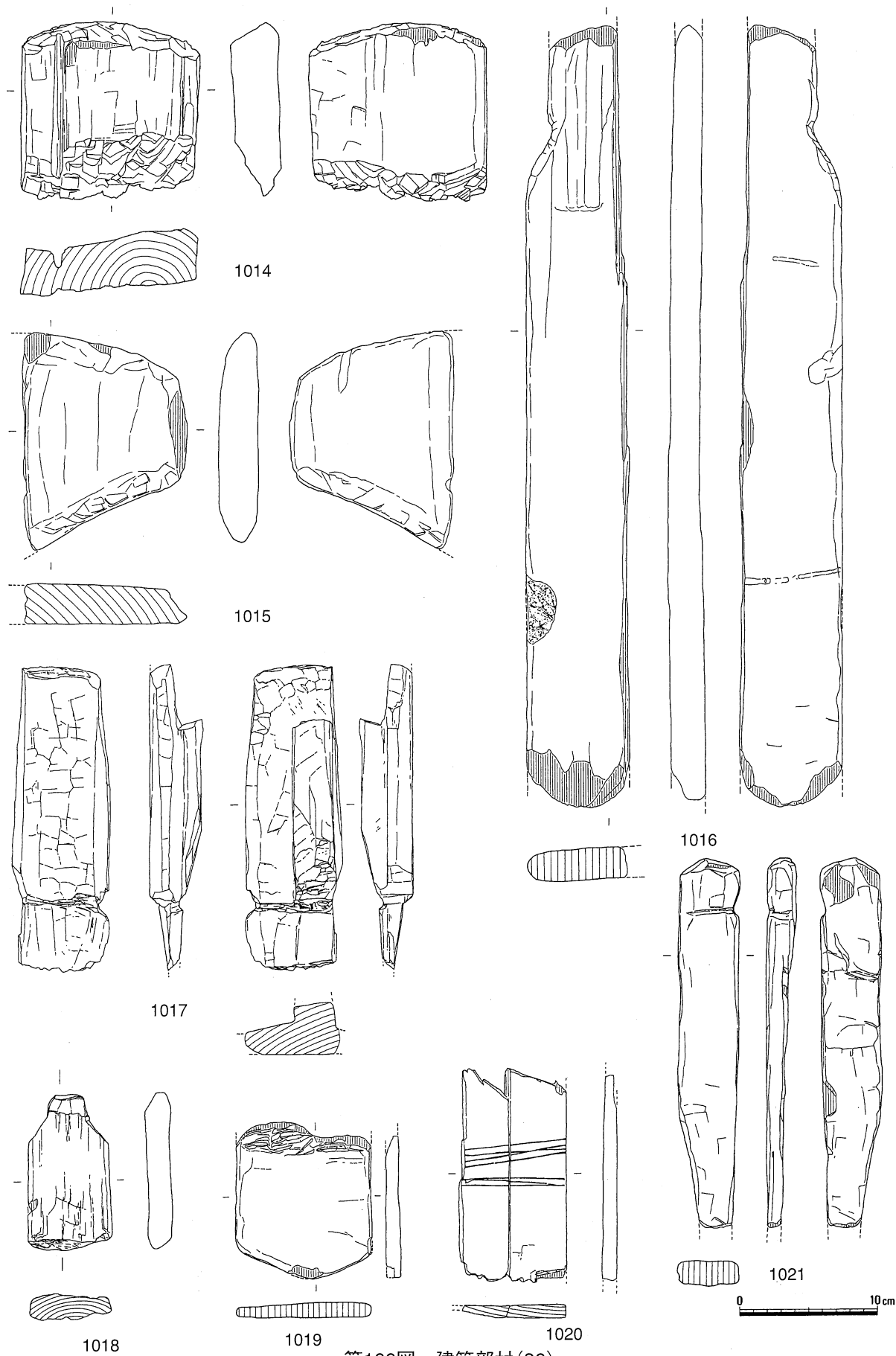


第164図 建築部材(34)



第165図 建築部材(35)

13. 建築部材



第166図 建築部材(36)

14. 用途不明品

用途不明品は何らかの意図を持って作られていて、たとえ完形品であっても現状ではその使い方がわからないものである。この中には組み合わせた状態で出土するなど良好な出土状態が得られて、将来的に用途が判明するものもある。ここで、用途不明品としてあげたものの中には、樋状木製品や透かし入り鋤状木製品・有孔板のようにある程度の数が出土し、その形態や特徴でとりまとめることができるものと、1点のみの出土でとりまとめるできないものがある。

樋状木製品

樋状木製品は直径10cm前後の心持ち材を使い、1面を平坦に削った後にコの字状の溝を長軸方向に小口端部まで彫った木製品である。樋の形状に似るが、小口面は上下両方から切り落としていて平滑に仕上げられていないので、複数の樋状木製品をつないで使用するには不向きである。1側面の一方ないし両方の小口近くに円孔をあけているものが多い。

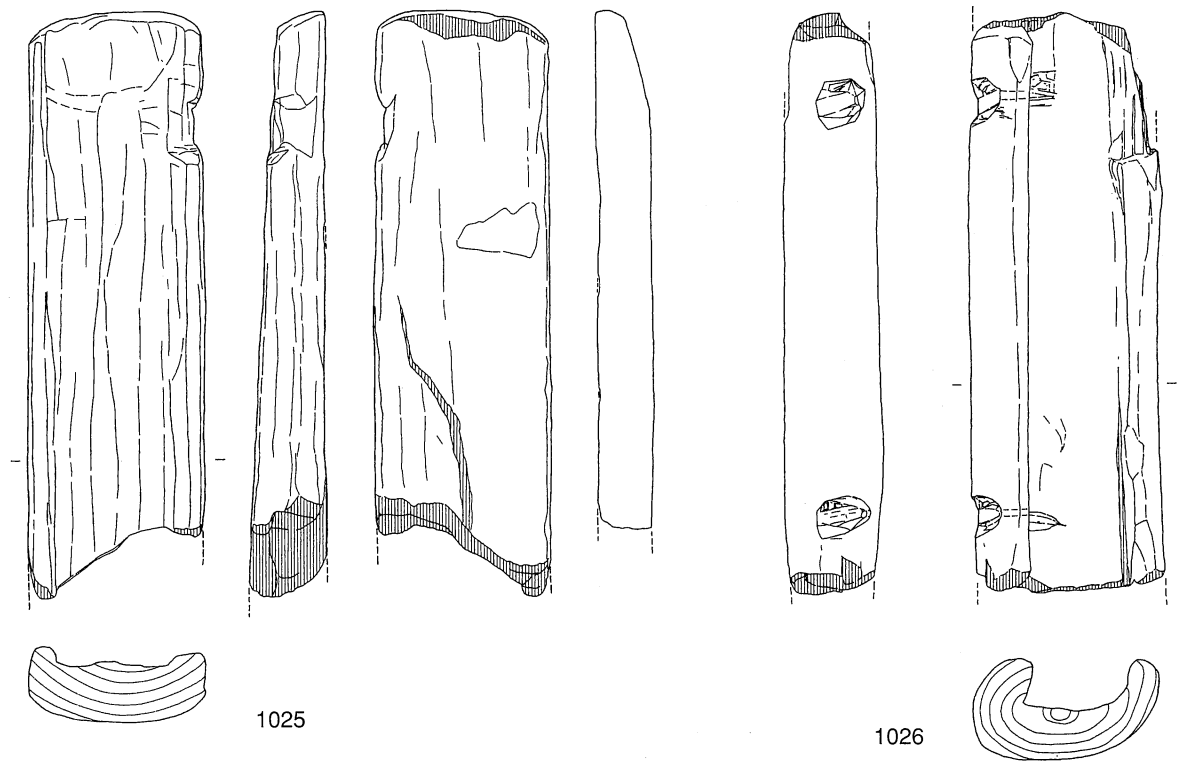
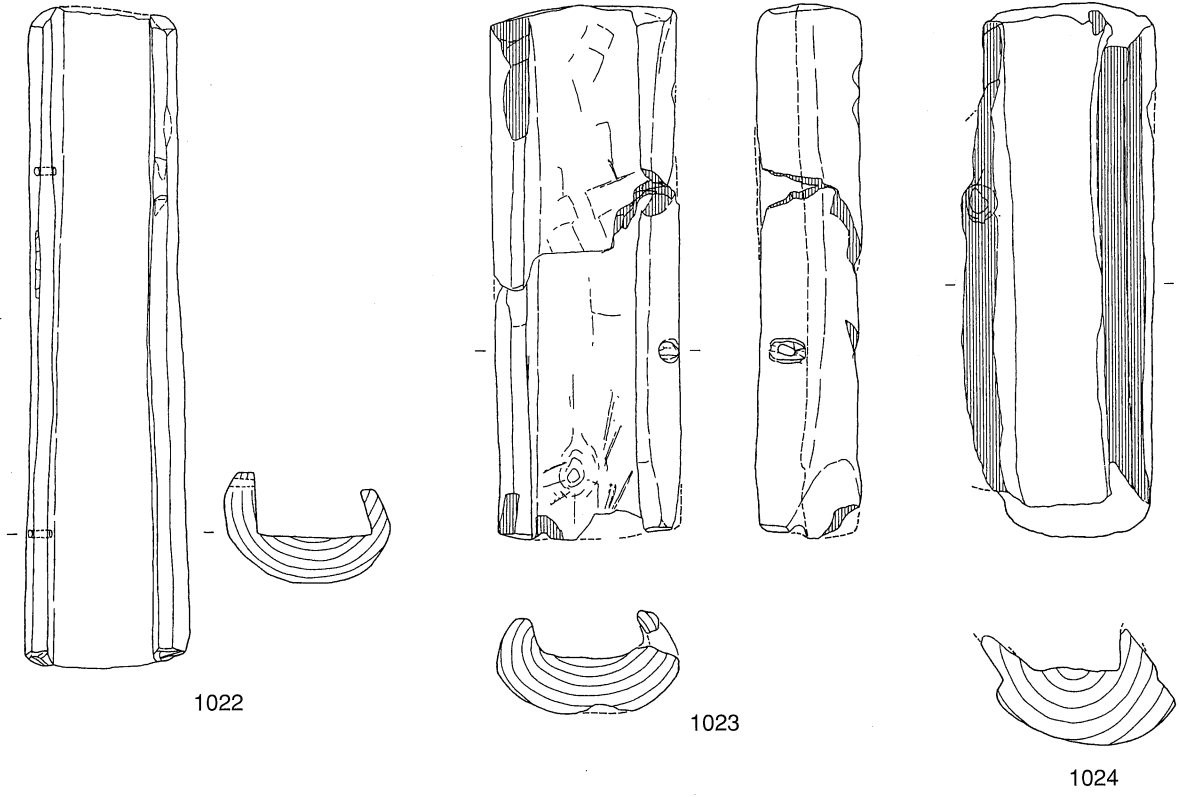
1022は全長35.5cm幅8.8cm高さ6cmで、幅6cm深さ3.3cmの溝を彫っている。一方の側面の上部には小孔が2つある。1023もほぼ完形品で、端部から1/3のところ側面に円孔がある。全長28.6cm幅10cm高さ5.5cm、溝は幅5cm深さ2cm。1024は側面が土圧により変形し、欠損がみられる。全長28.5cmで、溝幅4.5cm。1025は深さ1cm足らずの浅い樋状木製品で、端部近くの1側面に小さな欠込あり。残存長32cm幅9.2cm高さ4cm、溝幅6cmである。1026は溝幅5cm深さ2.5cmで、一方の外側面には小口から約3cmのところ欠込を行い上端に円孔をあけている。未成品の可能性もある。残存長31cm幅10cm高さ5.4cm。

1027は完形品である。溝幅5cm深さ3cmで、両小口は底部から上に向け削っている。全長44cm幅9.4cm高さ6.7cm。1028は完形品で、全長53.5cmともっとも長い、幅や高さはそれぞれ10.4cm・6cmで他と変わらない。溝は幅4cm深さ1.5cm。1029は全長22.6cmともっとも短い。側面の両小口近くに小孔があるのでこのまま使われたと思われる。幅8.2cm高さ5.3cm、溝幅4cm深さ2.5cm。1030は焼損の著しい底部の破片で、溝幅は5.5cmである。

透かし入り鋤状木製品

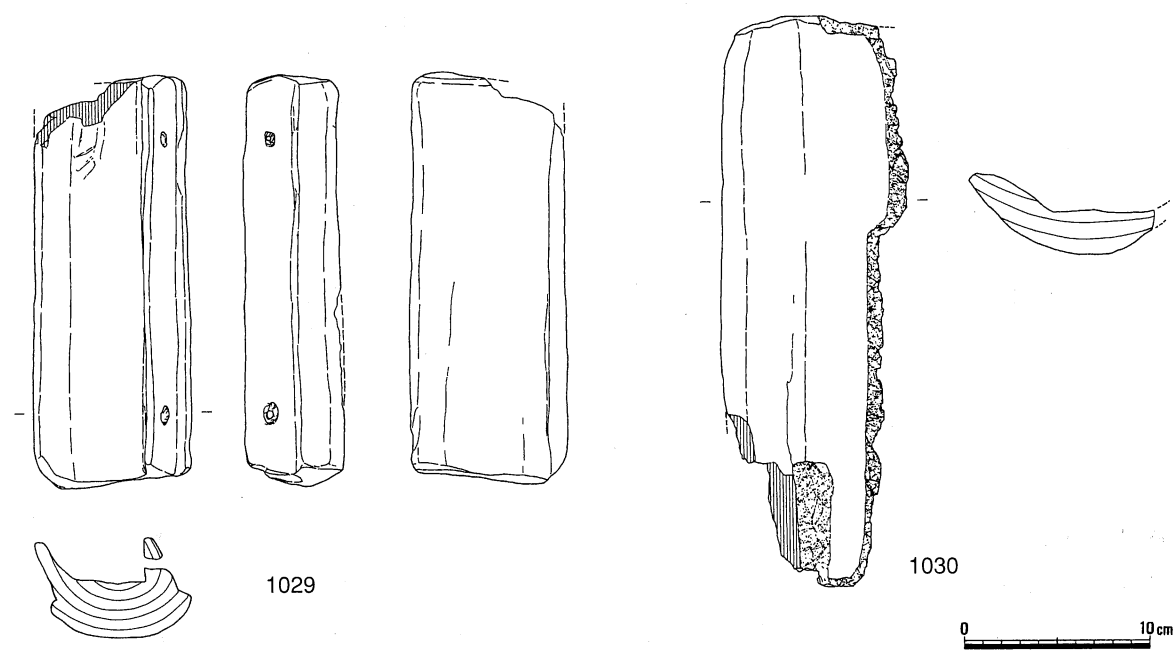
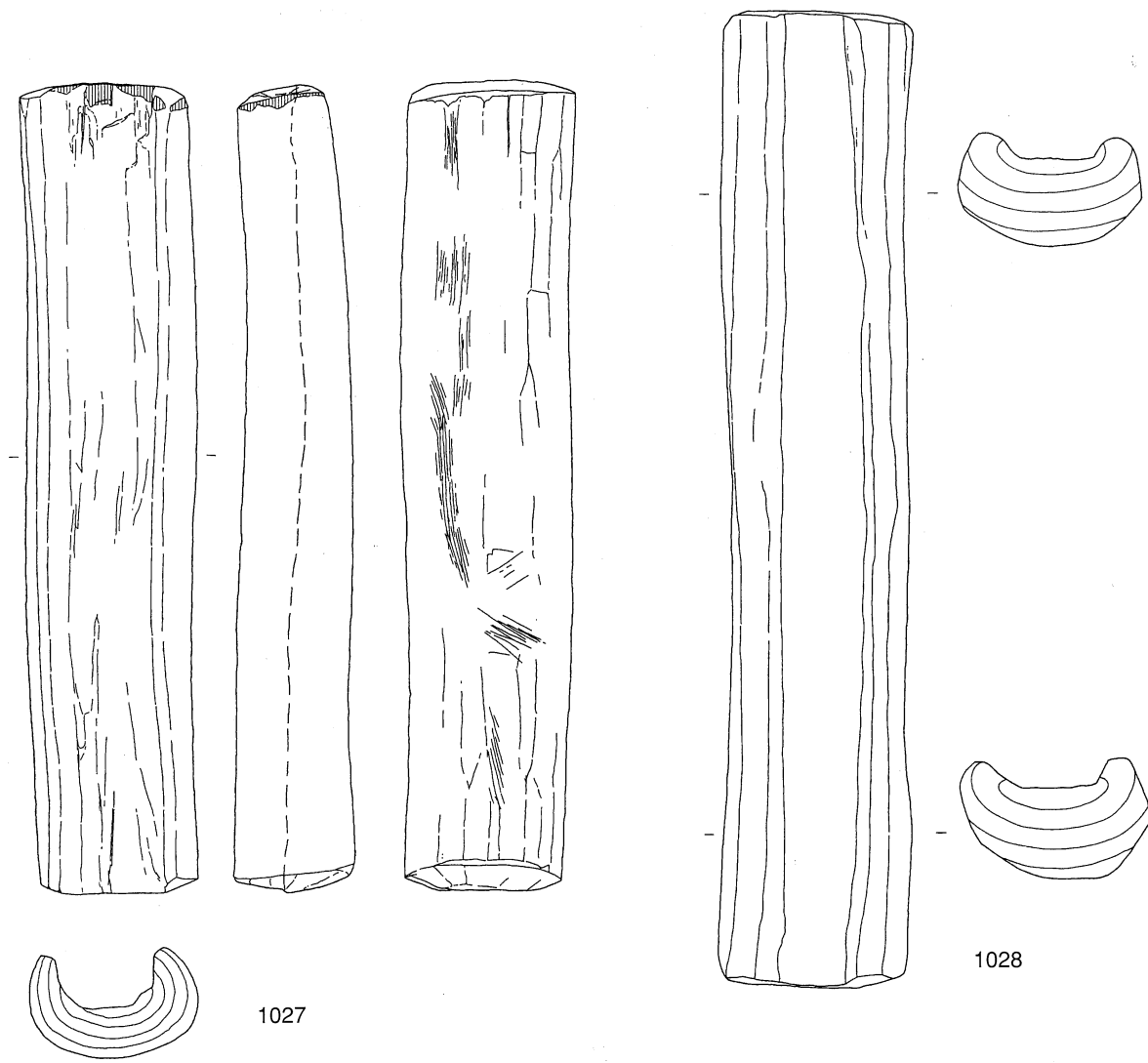
透かし入り鋤状木製品は、身の中央に相対する2つの透かし孔を持ち、透かし孔間の棧と軸とに柄を緊縛して使用するものである。75点を掲載したが完形品を含め全形を復原できるものは4点と少なく、大半が透かし孔の部分で折れている。透かし孔は三角形が大半であるが、半円形や隅丸方形のものもみられる。軸部の形状は様々で長さ1.5cmほどの縄かけ部に円形や三角形の頭部を明瞭に作り出すものと、不明瞭なものがあり、縄かけ部を作らず身に直接頭部がつくものがある。軸頭裏面が平坦である点は共通している。身の中央に明瞭な稜を持って横断面形が三角形となるものが針葉樹製に多くみられ、広葉樹製では稜の不鮮明なものが多い。身の幅は広いものと狭いものの両者がある。身の先端は尖ったもの・丸いもの・平たいものがあるが、いずれも厚みがあり薄く作られているものはない。かつては組合せ鋤の1つとされていたが、最近では針葉樹材が使われることが多いことから、鋤・鍬などの土掘り具とするのは否定的で、權⁽²³⁾・儀器⁽²⁴⁾・形代⁽²⁵⁾などの意見があげられている。現時点では適切な名称があげられないので透かし入り鋤状木製品と仮称して

14. 用途不明品



0 10cm

第167図 桶状木製品(1)



0 10 cm

第168図 槌状木製品(2)

14. 用途不明品

おく。なお、樹種が判明しているものはクスノキやエノキ属と広葉樹が多いが、未同定品の中に針葉樹が多く含まれているのは間違いない。ただ、8点あるクスノキ製の多さにも注意を止める必要があるかもしれない。

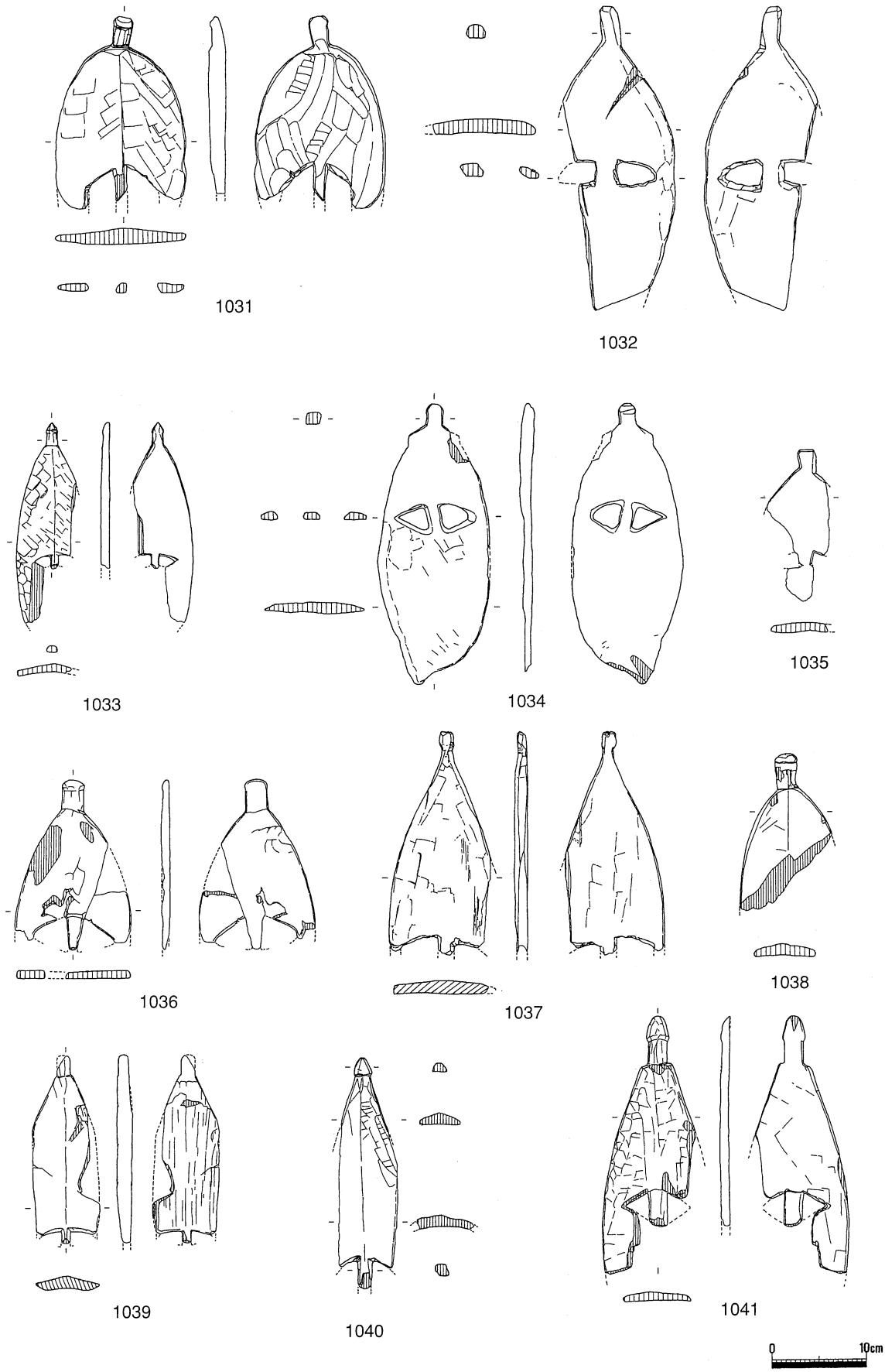
1031~1086は三角形の透かし孔をもつ。1031は透かし孔から上半の破片で、肩は丸みを持っている。表面中央に稜が走り、加工痕が両面とも顕著に残っている。柁目材を使っていて残存長20.5cm幅13cm厚さ1.4cmである。1032は先端部及び右側1/3欠損していて長さ3.8cm、幅1.9cmの軸がつく。身の断面は平板で表裏の区別が付きにくい。柁目材で残存長31.3cm厚さ1.5cm。1033は三角形の軸頭を持つ。加工痕は明瞭に残っていて、中央の稜は鮮明である。柁目材を用いていて残存長20.7cm厚さ9mm。1034は唯一のほぼ完形品である。先端の形状が定まらず、あるいは折れたのちさらなる使用により丸くなったものか。柁目材を使い全長29cm幅11.6cm厚さ1.2cmである。1036はやや幅広の軸部を持つ。柁目材で、残存長17.5cm幅12cm厚さ9mm。1037は徐々に細くなった肩の上に直接平面方形の頭部が付く。厚さ1.3cmで長さ23cmが残存している。1040も1037と同様に三角形の頭部が直接つく。柁目材を使い残存長23.8cm厚さ1.3cmである。1041は正三角形の透かし孔から上半部の破片で、頂部の丸い三角状の頭部を持つ。わずかだが肩に水平部分を持つのも特徴である。細かな加工痕が顕著にみられる。残存長26.6cmで厚さは9mmある。

1042は肩と軸部との境が明瞭でない。表面中央には稜があって、加工痕が顕著に残っている。柁目材を使い残存長37.7cm厚さ1.2cmである。1046はエノキ属の板目材製で軸を作らず直接偏球形の頭部が付く。表面中央に稜があり、裏面もそれに併せて削っている。残存長19.9cm厚さ1.2cm。1047は半月形の透かし孔から上部の破片で、横断面は表面側に緩く湾曲している。残存長27.2cm幅9.3cm厚さ1.5cmである。1048はクスノキの板目材を使っていて、残存長20.7cm幅10.9cm厚さ1.1cmである。1049はクスノキの柁目材製である。1050は透かし孔から上半の破片で、中央に稜が通り裏面は内湾する。1051は半球状の頭部が直接付いて中央に稜がある。1053はクスノキを使った三角形の透かし孔から上半の破片。1054には細かい加工痕が顕著に残っている。1055は柁目材を使った三角形の透かし孔から下の破片で、身の中央には稜が走る。表面の加工痕は顕著である。残存長23.2cm幅10cm厚さ1.5cmである。1056は三角形の透かし孔から下側1/2程度の破片で、先端は丸め。残存長21.7cmで幅10.7cm厚さ1.2cmである。1057はクスノキの柁目材製で、先端は丸く中央に稜が走る。残存長23.5cm幅10.8cm厚さ1.8cm。

1059~1061・1063~1065は先端がとがり気味であるが側部の面は持っている。1063の先端側1/2弱の側面は摩滅しており、特に先端部の摩滅が著しい。1062の先端は直線的でやや摩滅している。1065・1068・1069・1072の稜は特に顕著である。1074・1076・1086はクスノキ製である。

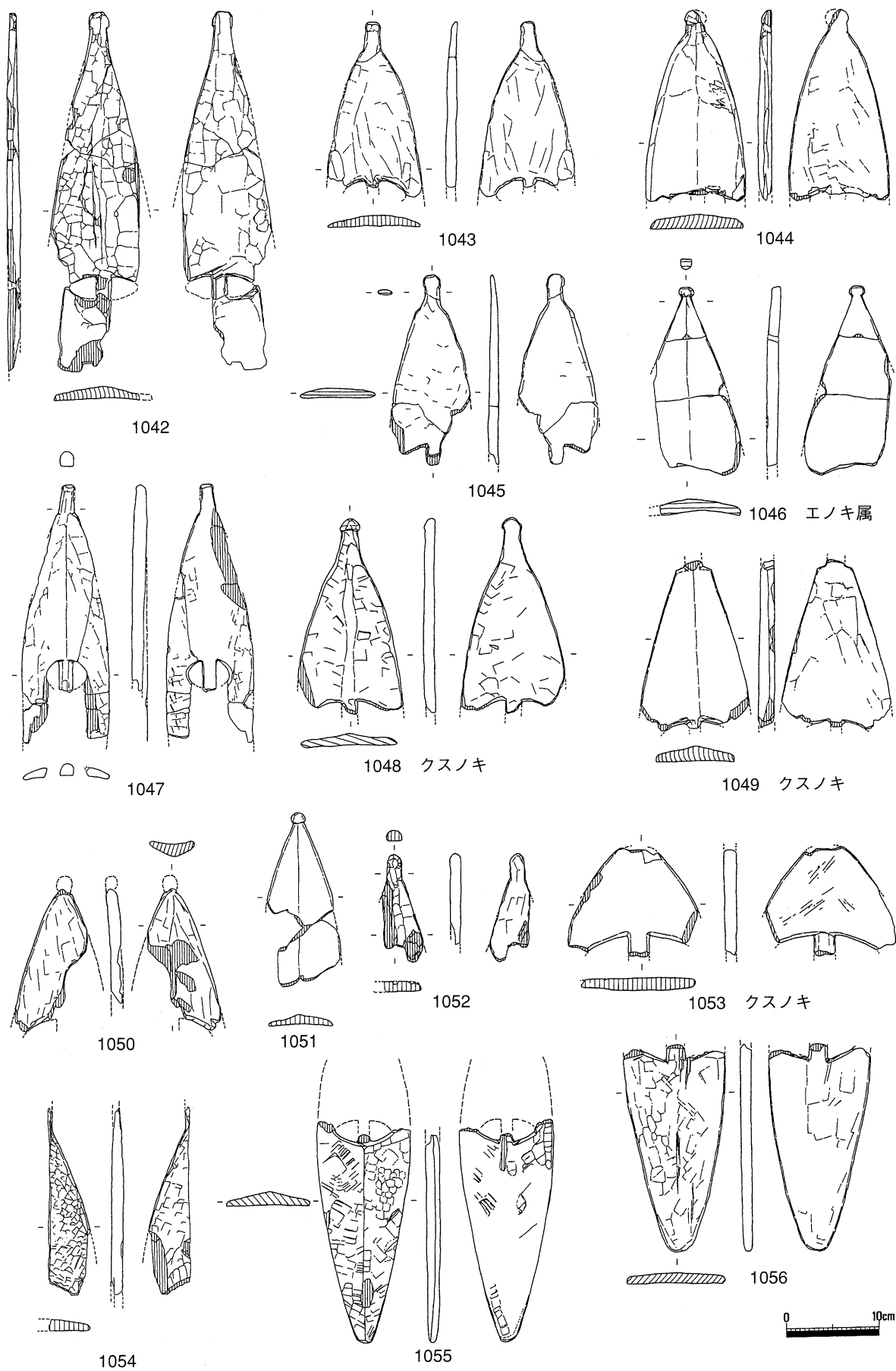
1095・1097は半円形の透かし孔を持つ。1095は軸部の根元付近で折れている。表面中央には稜があり、裏面はそれに対応して削られている。柁目材を使い、残存長50.4cm幅10.2cm厚さ1.4cmである。1097は縦置き半円形透かし孔の下に方形孔をもつ。板目材で、残存長35.9cm幅12.1cm厚さ1cmである。

1096・1098・1099は円形ないし楕円形の透かし孔を持つ。1096の軸頭は半球形で、身の中央に稜が走る。柁目材を用いていて、残存長34cm幅7.5cm厚さ7mmである。1098は板目材1099は柁目材を使っていて、1099では先端が摩滅している。1100~1103は方形の透かし孔を持つ。1100は先端が平たく、1101はとがっている。

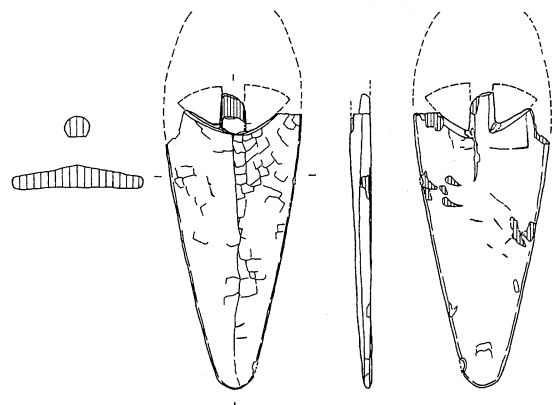


第169図 透かし入り鋤状(1)

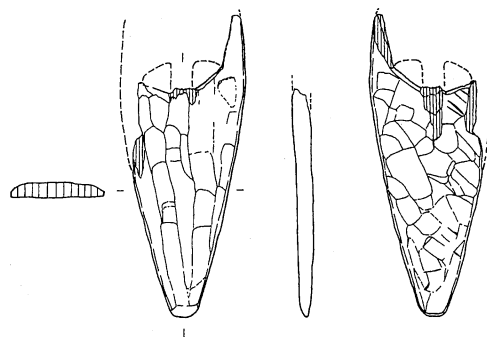
14. 用途不明品



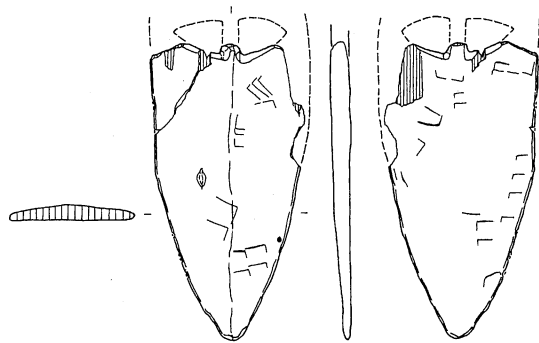
第170図 透かし入り鋤状(2)



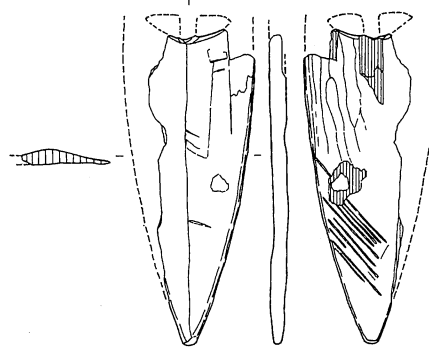
1057 クスノキ



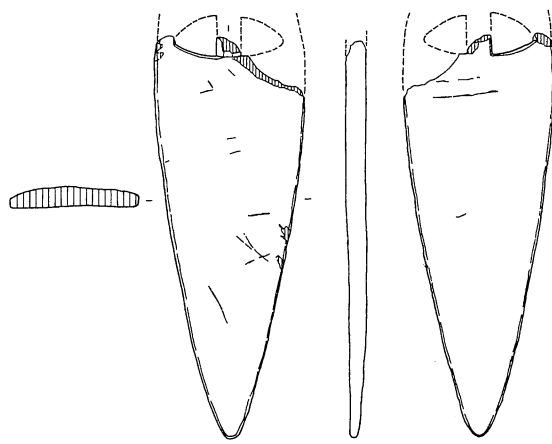
1058



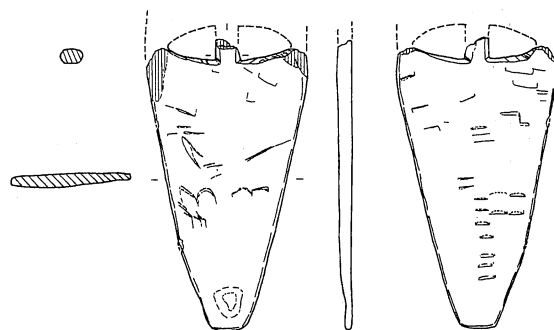
1059



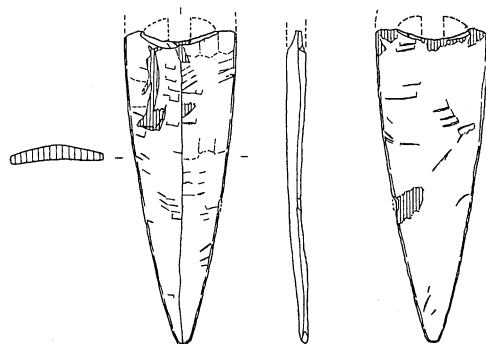
1060



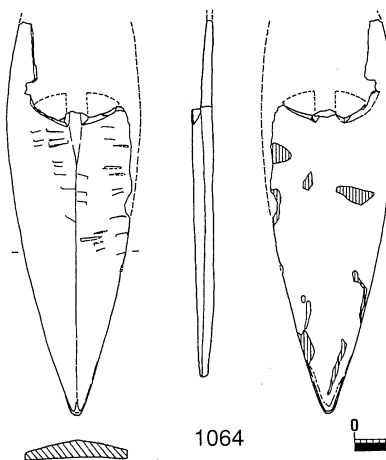
1061



1062



1063

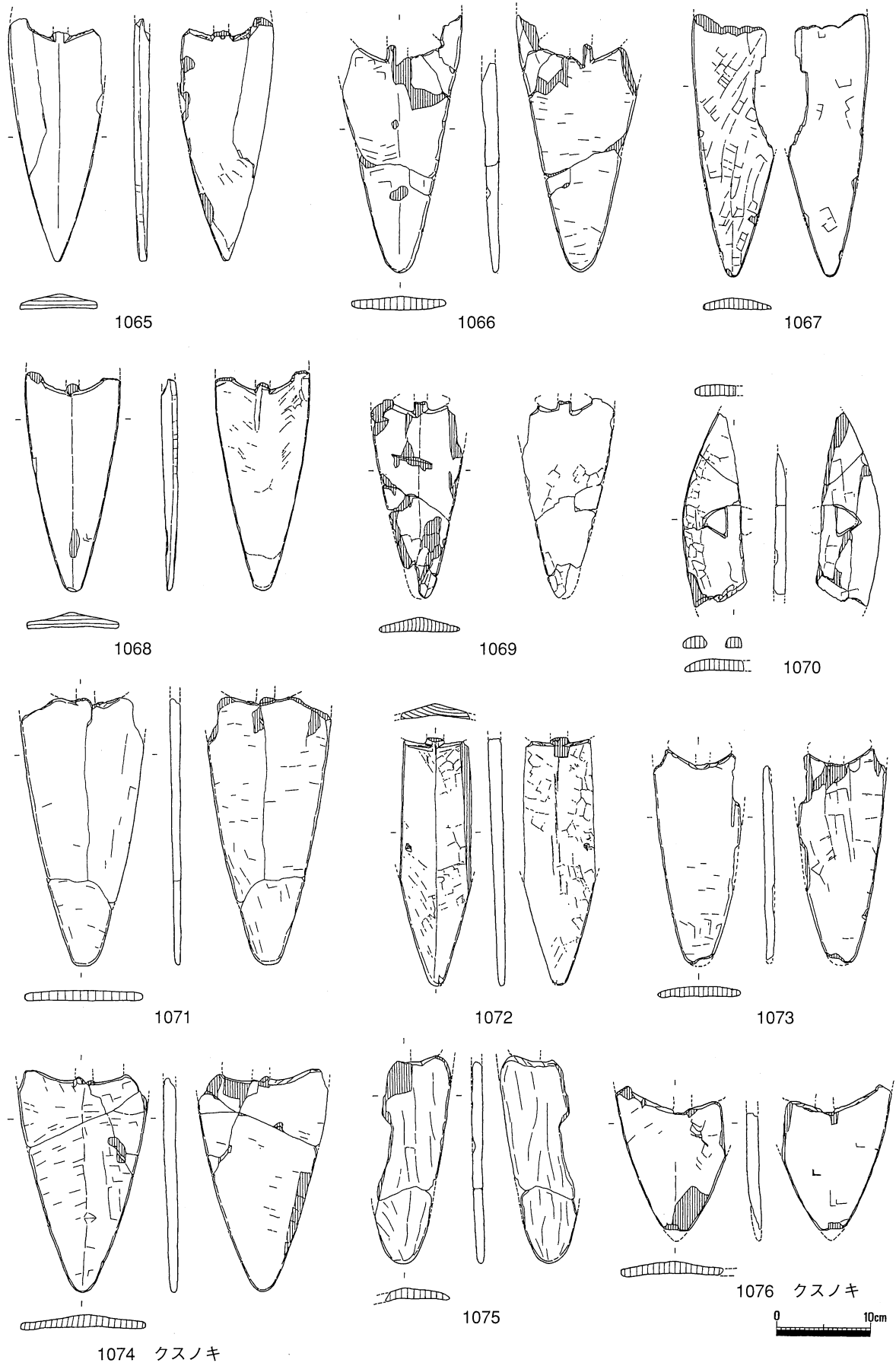


1064



第171図 透かし入り鋤状(3)

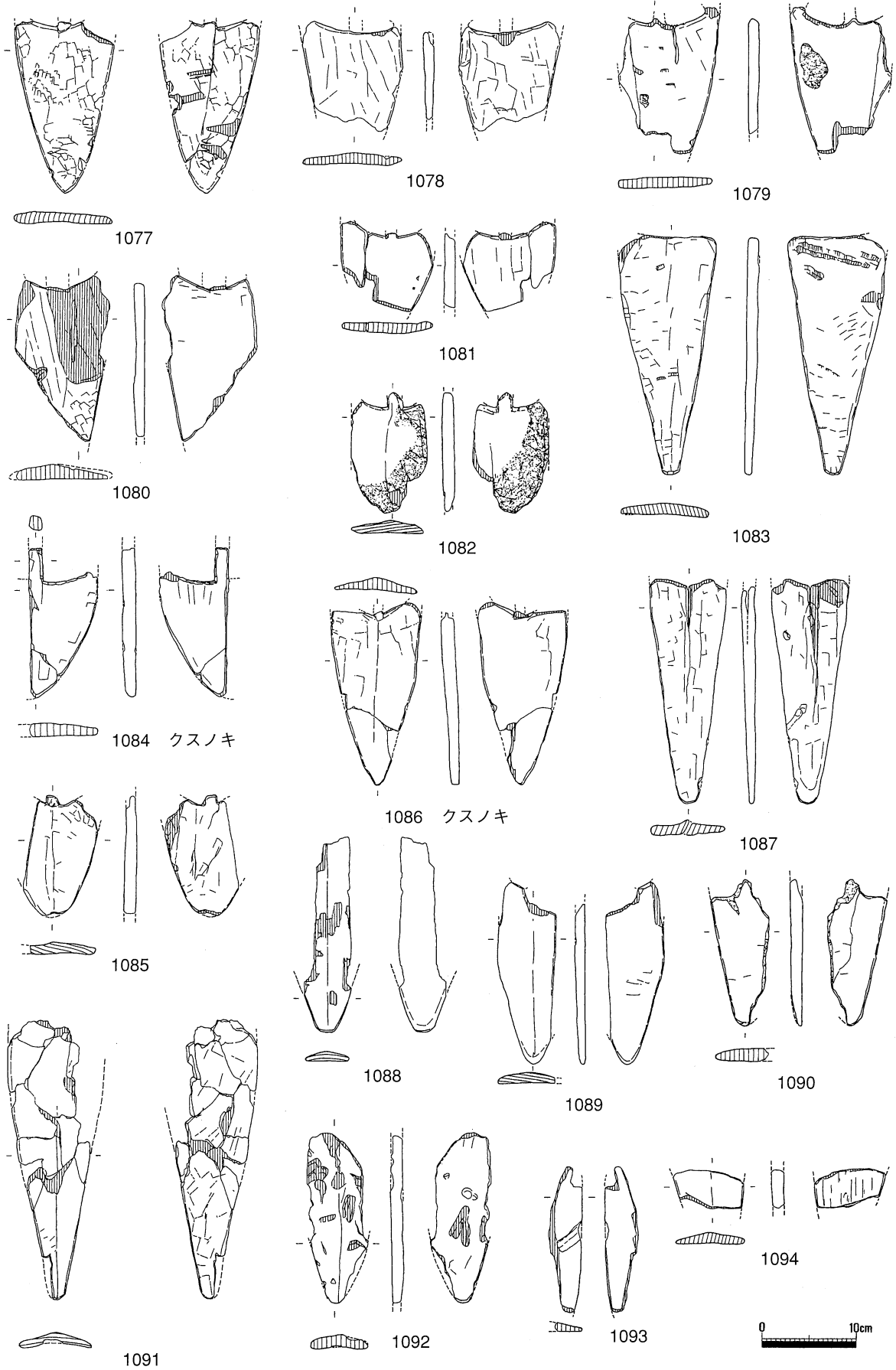
14. 用途不明品



1074 クスノキ

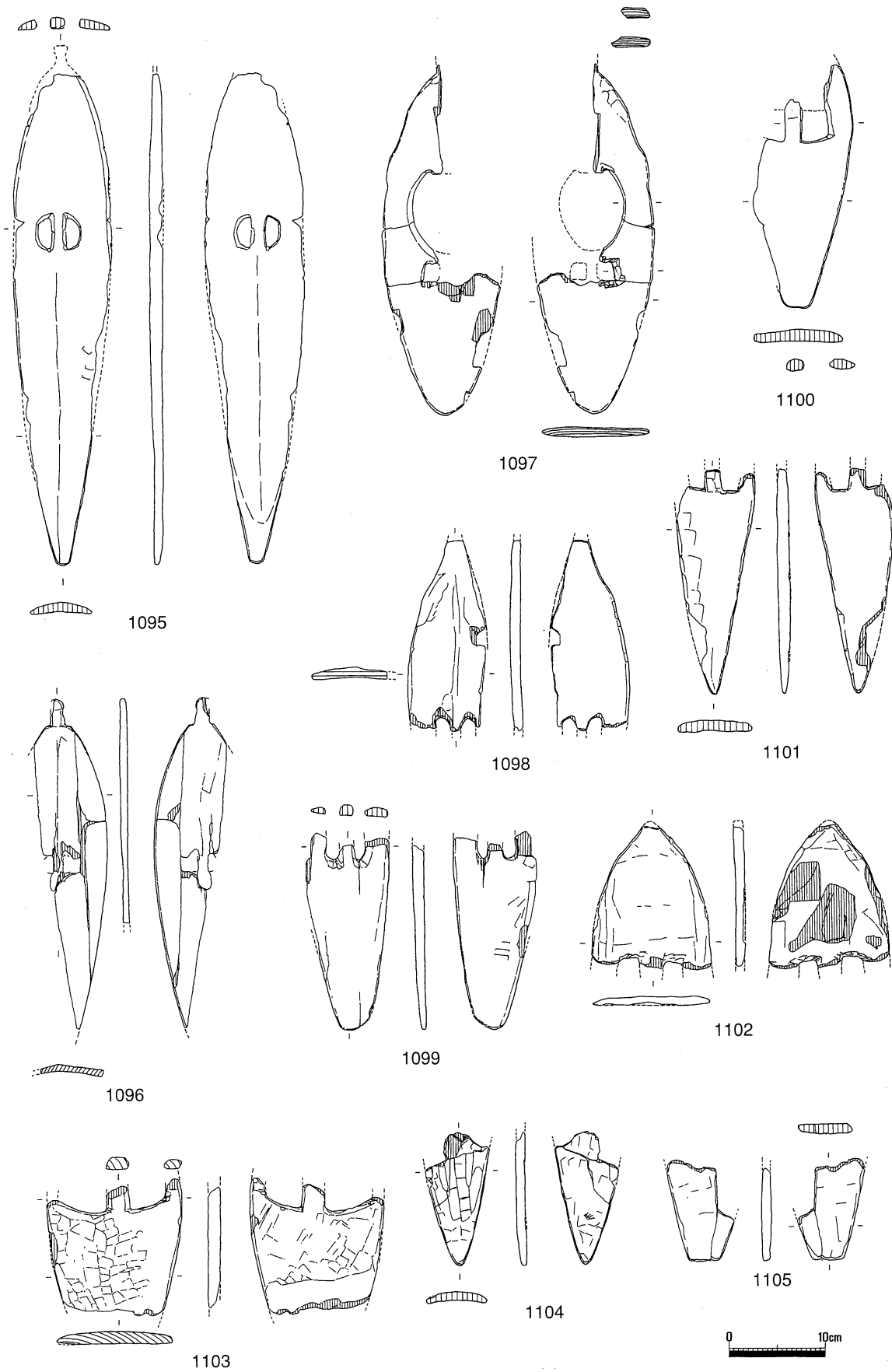
1076 クスノキ

第172図 透かし入り鋤状(4)



第173図 透かし入り鋤状(5)

14. 用途不明品



第174図 透かし入り鋤状(6)

有孔板

薄い板材に小円孔を1つないし複数あけているものを有孔板として取り上げた。1106・1107は大きさは異なるが、4隅と長辺中央に小孔をそれぞれ1つ、短辺中央に小孔を縦に2つあけている。1106は全長41.7cm幅10.1cm厚さ1cmの柁目材を使い、加工痕や刃物傷が明瞭に残っている。1107はほぼ完形品で、全長24.8cm幅8.4cm厚さ7mmの板目材を用いている。

1108は一方の長辺に沿って小孔が3つある。柁目材で、全長28.7cm幅12.8cm厚さ4mmである。1109は長さ9.6cm幅3.8cm厚さ5mmの板目材で、上下両辺にそれぞれ2つ小孔が残る。1111は全長25.1cm幅5.1cm厚さ1.1cmの板目材のほぼ完形品で、一方の小口近くに小孔3つを三角形に配置し、反対側の小口近くの長辺に沿って2つあけている。1112は1106や1107とよく似ているが、短辺中央の2孔がない。エノキ属の柁目材で、全長26.5cm幅7.7cm厚さ5mmである。

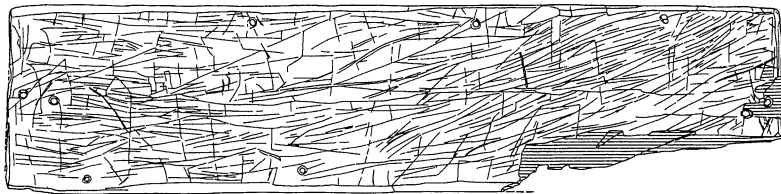
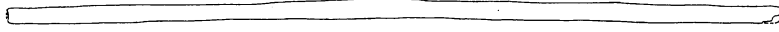
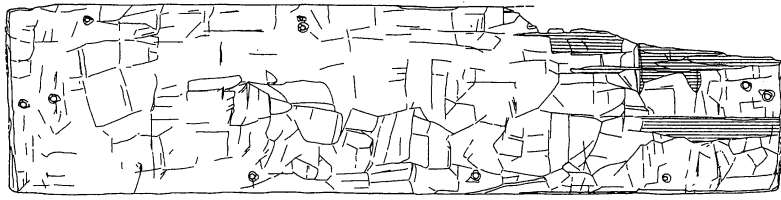
1113は長さ23.3cm幅5cm厚さ9mmの板目材で、片側の短辺に小孔を2つあけている。1114は長軸に沿って小孔が2つある。残存長20.1cm幅5.5cm厚さ1cmの板目材である。1115は残存長24.7cm幅8.9cm厚さ6mmの柁目材で、角に小孔が1つあけられている。1116は長さ19.8cm幅5.1cm厚さ6mmの板目材で、長軸方向に小孔3つが並んでいる。1118は小孔が中央よりに縦2つ、長辺よりに2つある。1122は半月形で、周縁に沿って円孔ないし楕円孔をあけている。このほか図の上部には別の方形孔がある。泥除の下半部ともよく似ているが、図上部の方形孔やその横の小孔は泥除にはみられないものである。有孔板とした。残存長28.1cm幅9.9cm厚さ6mmである。

不明

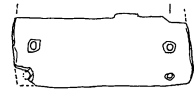
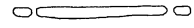
1120は一端を細くして側面から2段の紐かけ状の加工をしている。残存長34.3cm幅3.9cm厚さ6mmである。1121は幅11cm厚さ1cmほどの板状製品。柁目材で残存長48.3cmである。1123はアカガシ亜属の柁目材で全長33.7cm幅7.4cm厚さ1cmである。1124は1/4の分割材を使用していて、端部から11cmのあたりから厚さ1cmに平たくしている。残存長23.3cm幅6.6cm端部の厚さ5.2cmである。1125は矢板状に一端を両側からとがらせている。柁目材で残存長21.8cm幅7.5cmである。1126は平面形が細長い三角形で側面に面取りを行って丸くしている。板目材で残存長20.6cm幅4.7cm厚さ1.2cmである。1127は厚さ4mmの柁目材のとがった端部に頭部を作っている。1128は片側の長辺に沿って材の半分の幅で把手状に伸びたような形をしている。中央にごく浅い弧状の縁取りがあって、縁取りの内側がやや高くなっている。柁目材を用いて、残存長40.5cm幅7.3cm厚さ2.2cmである。1129は刳抜式箱の側部に似ているが、口縁部に小孔が5つあけられている。板目材で残存長41.7cm幅5.2cm厚さ1cmである。1130は2本の棒を植物の紐で縛り付けている部分のみが残っている。直径7mmの心持ち材を使っている。1131は端部にほぞ状の突起を持つ棒状の小片で、1.1cmの心持ち材で残存長5.2cmである。1132は幅1cm厚さ5mmの柁目材の1面を平坦加工し、端部に頭部を作っている。残存長は11.4cm。1133は枝分かれの部分を利用した製品と思われるが、枝わかれの付け根から折れている。1134は4cmほどの方形孔を持つ把手状の木製品の破片。加工は丁寧で、柁目材を使う。1135は有頭棒の頭だけを切ったようなもので、裏面全面を平滑に削っている。心持ち材で、長さ6.7cm幅2.2cm厚さ1.9cmである。

1137は長三角形の板材で、中央の楕円孔で折れていて接合しないが同一個体である。残存長56.7cm幅7cm厚さ8mmである。1138はほぼ完形で、一端に方形の頭部を作り反対側の端部を杭状にとがらせている。全長40.1cm幅4.5cm厚さ2.4cmである。1139は、断面が方形で木の葉形に近い頭部を持つ。

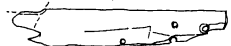
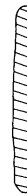
14. 用途不明品



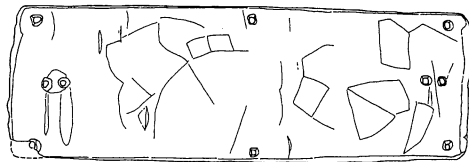
1106



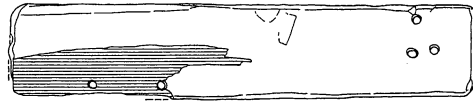
1109



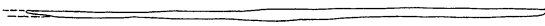
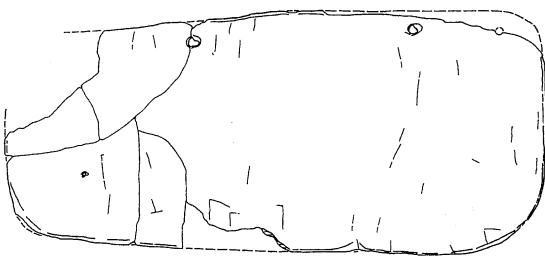
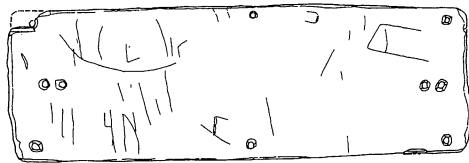
1110



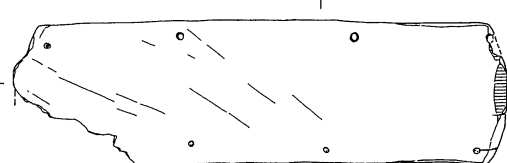
1107



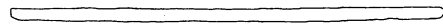
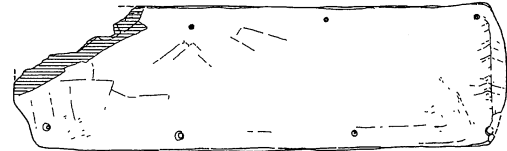
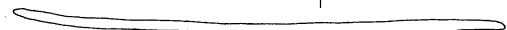
1111



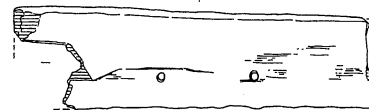
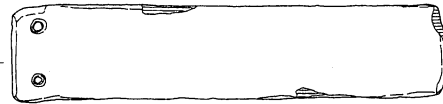
1108



1112 エノキ属



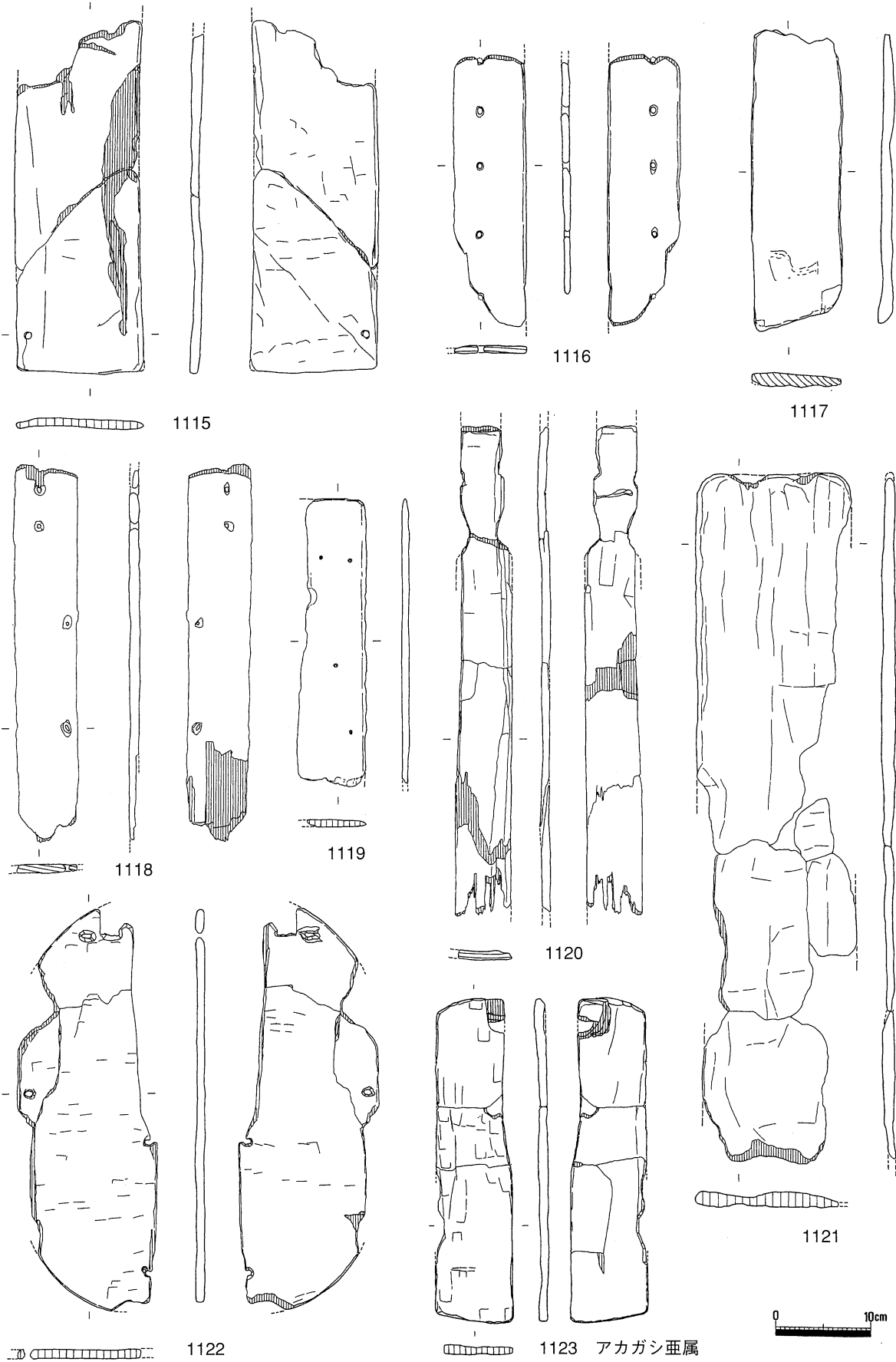
1113



1114

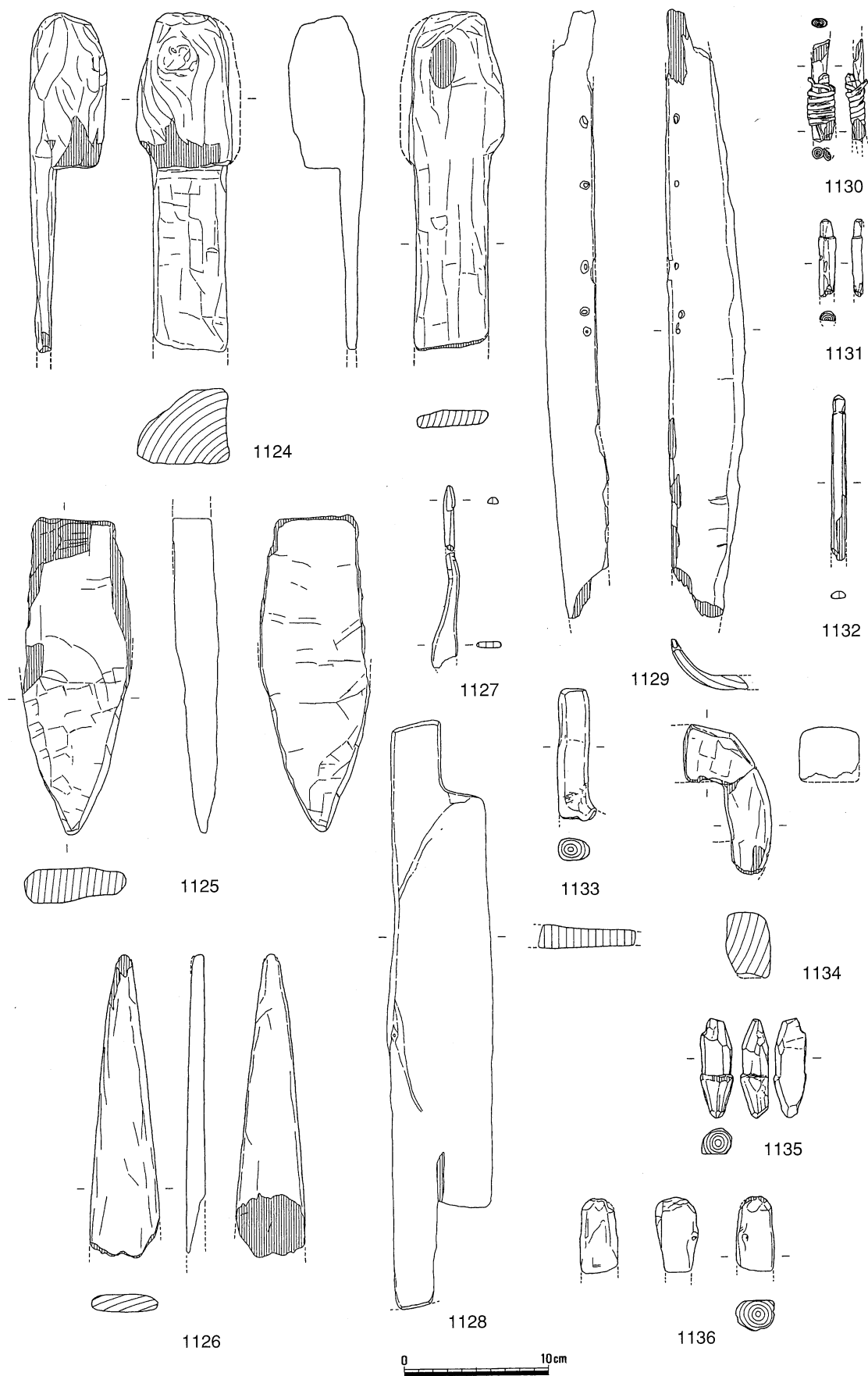


第175図 有孔板(1)

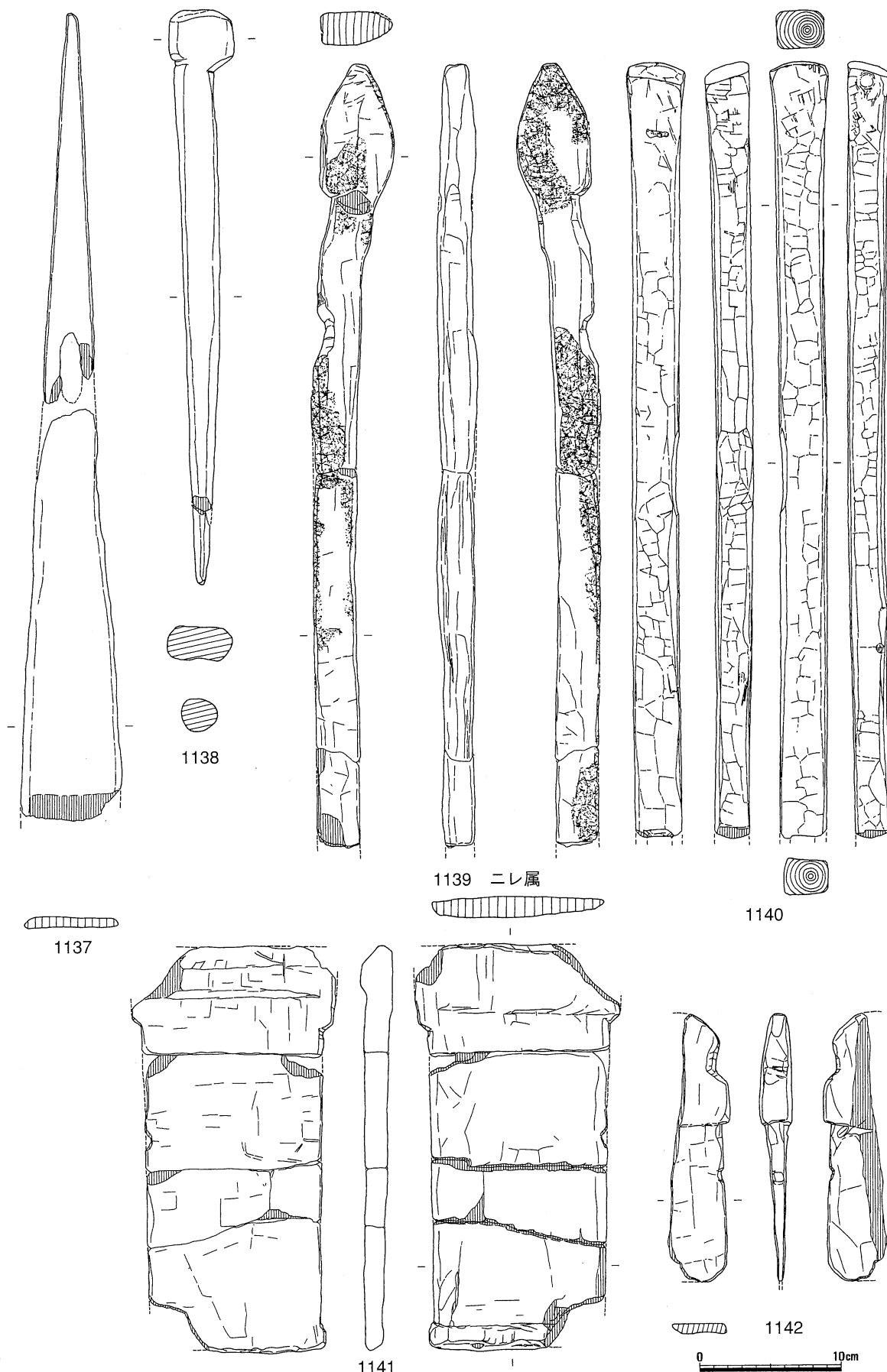


第176図 有孔板(2)ほか

14. 用途不明品



第177图 不明(1)



第178図 不明(2)

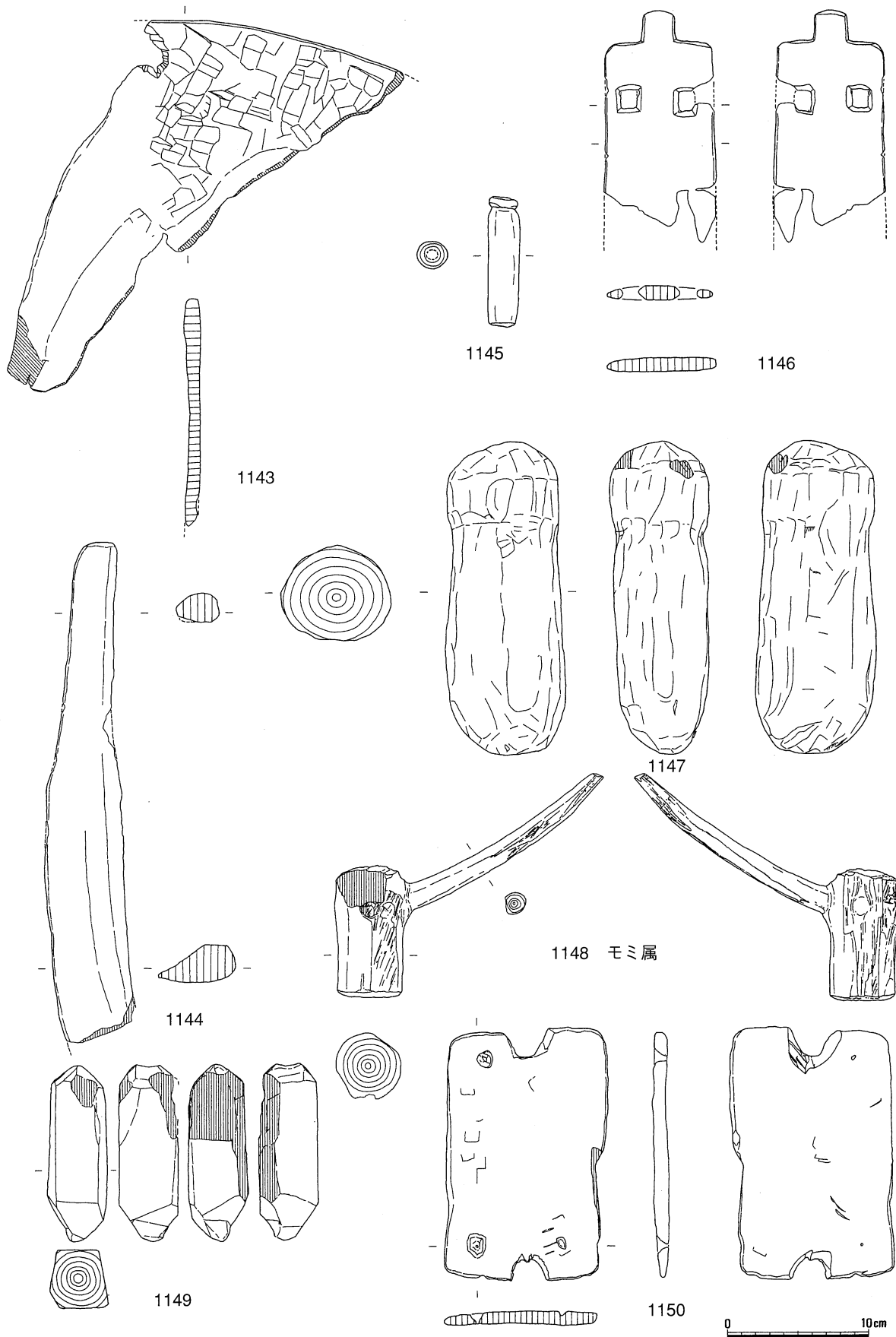
14. 用途不明品

全体に焼けている。ニレ属の柾目材を使い、残存長55.05cm頭部の幅5.15cm厚さ2.7cmである。1140は心持ち材を使っていて、断面方形で丁寧な加工を施している。図の下端は方形孔で折れている。残存長54.4cm幅3.3cm厚さ2.6cmである。1141は両端がやや広くなり片面に1.5～2cmの帯状の高まりがある。柾目材で、長さ28.6cm幅14.3cm厚さ1.5cmである。1142は一端を薄くしたこけし様の木製品。柾目材を用いていて残存長18.7cm厚さ2.2cmである。

1143は円盤状の木製品である。弧状の端部に孔が1つある。柾目材を使っていて残存長34.8cm幅18cm厚さ1.2cmである。1144はやや扁平な滴形の断面形で、一端は欠損し反対側の端部は茎状に細くして、刀形をしている。柾目材を使用し、残存長35.3cm幅5.6cm厚さ2.6cmである。1145は完形品。一端に紐かけを回して、中心には直径7mmの円孔を持っている。直径2.2cmの心持ち材で全長9.2cmである。1146は長方形の板の小口付近に1.2cm四方の方形孔を2つあけ、小口にはほぞを作る。柾目材を使用し、残存長15.1cm幅7.8cm厚さ1.0cm。1147は木錘か？頭部下のくびれには紐を縛ったような圧迫痕がある。心持ち材で、長さ22.2cm直径7.8cmである。1148はモミ属の枝分かれ部を利用している。直径4.6cmの幹を長さ9.3cmに切り、四方向に展開する枝の1本を残して払う。残した枝も長さ16cmに切って先端をとがらせている。1149は直径4.2cmの心持ちの短い棒材を断面四角形に削り、両端は四面から細くとがらせている。全長12.4cm。1150は両小口部に抉りあって3つの角には円孔がある。柾目材で全長17.8cm幅11.5cm厚さ1cmである。

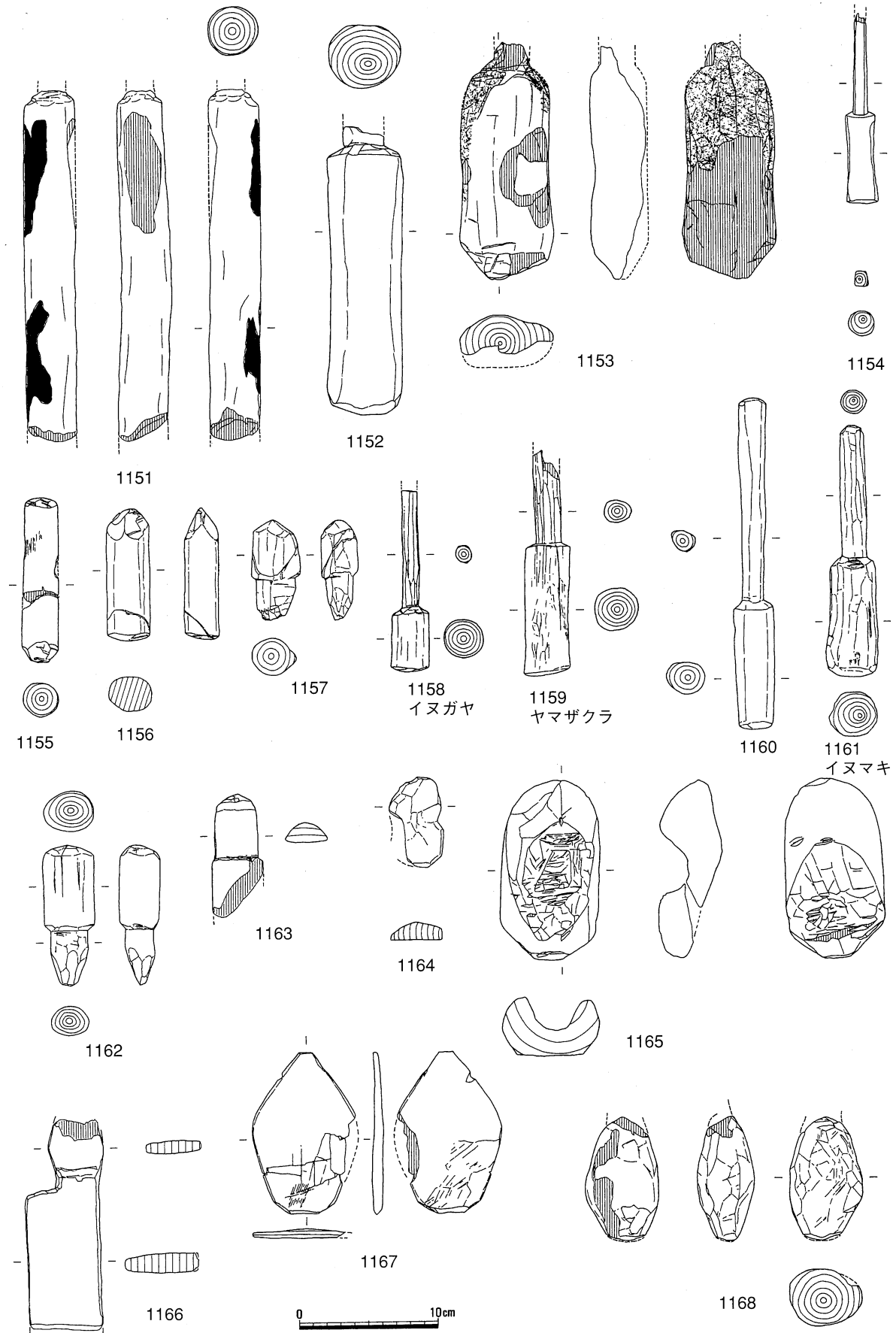
1151は両端を欠損しているが、一端は細く加工した部分で折れている。樹皮が一部に残っている。直径3.5cmの心持ち材で残存長は25cmである。1152～1154・1158～1161は横槌に形態が似ている。1152は直径5.1cm心持ち材を使い、横槌の握部に当たる部分は折れている。残存長20.4cm。1153は扁平な横槌状で握部に当たる部分を欠く。端部は三角状にとがり加工痕が残っている。炭化が著しく、残存長16.9cmである。1154は長さ6.5cm直径2cmの円筒部分に先がやや細くなる1cm角の方柱が付く。円筒は中央がやや細くなってこちらが握部かもしれない。何らかの工具の柄の可能性もある。心持ち材を使い残存長13.4cm。1158は直径2.7cmのイヌガヤの心持ち材を使っていて、搦き部が4.5cmと短く握部が8.4cm以上あって長い。搦き面の使用痕はあまり顕著ではない。全長12.9cm。1159は直径3.2cmのヤマザクラの心持ち材製で、搦き面には使用によるつぶれがある。小形臼に対応する小形杵に当たり、つぶし具のような使用法ではなかるうか。残存長16.1cm。1160は完形品で全長23.6cm、直径2.8cmの心持ち材を使っていて、加工痕は明瞭に残っているが、使用痕等は認められない。全長18cmで、直径3.4cmの心持ち材を用いている。

1155は直径2.5cmの心持ち材を長さ11.7cmに切った程度。1156は鉛筆形をした完形品。柾目材を断面楕円形に加工していて、全長9.4cm幅3.1cm厚さ2.5cm。1157・1162は有頭棒を頭部の根元から切り落としたような形状で、桶の栓に形が似る。第194図1258も同様の形態をしているが、1258には粗い切断痕がそのまま残っている。1157は直径3.5cmの心持ち材を使っていて全長7.1cmである。1162は直径3.7cmの心持ち材で全長10cm。1163は断面半月形のほぞの部分の破片で、裏面は平坦に加工している。1164は側面中央がくびれていて、浮きや糸巻きのように使われたものか。柾目材で全長6.4cm幅3.9cm厚さ1.2cmである。1165は直径7cmの棒を厚さ6cm程度に斜めに切り落として、上面から方形の穴をあけかけている。全長12.9cmである。1166は縦杓子の柄の端部に似ていて、頭部の根元を切断しようとしている。柾目材で、残存長14.8cm幅5.3cm厚さ9mmである。1167は縦杓子柄の頭部の形に似るが、杓子の柄にしては少し大きすぎるように思える。板目材で、残存長11.3cm幅7.4cm厚さ7mmである。



第179図 不明(3)

14. 用途不明品



第180図 不明(4)

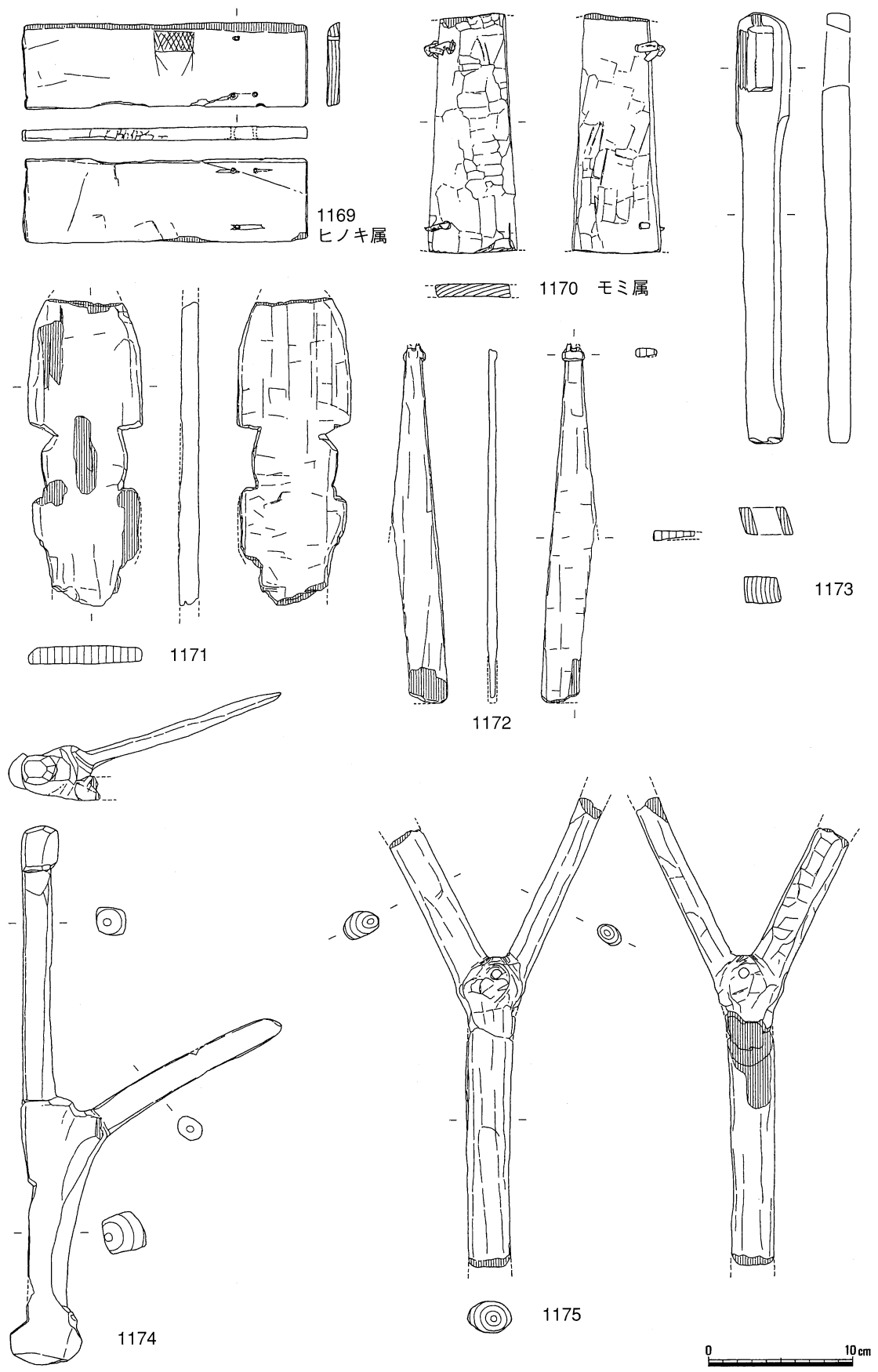
1169は絵画彫刻のある木製品である。長さ20cm幅5.8cm厚さ9mmのヒノキ属の板目材で、中央長辺より柱間1間四方の建物絵画が線刻されている。上屋は四角く、中を左右からの斜線でうめた網代状の表現をとる。柱は4本描かれているが、奥側の2本は内向きに斜めに描かれていて、縦方向の平行線で描く一般的な建物絵画の柱表現とは異なっている。もとは大きな板を再加工している可能性がある。円孔が4つあり、このうち2つが小口に平行し、3つが側縁に平行する。裏面の円孔上下には裂けて剥がれたようなあとがある。1170はモミ属を使ったやや台形に近い形状の板目材で、片側の長辺の上下に小孔をあけて縛った樹皮が残る。全長17.4cm幅6cm、厚さ9mmである。1171は中央に両側からM字状の切り込みを施している。柁目材を用いており残存長21.0cm幅が7.8cm厚さ1.4cmである。1172は厚さ6mmの柁目材を裾広がりにつくった体部の細い方の端部に横長の小さな頭部を作っている。その上に二つの爪状のものがついているが、円孔の破損部の可能性もある。残存長24.5cm幅3.8cmである。1173は厚さ2cmの柁目材を用いた完形品で、やや幅を広げた一端に4.5×1.8cmの方形孔をあける。全長29.3cm幅3.7cmである。1174は幹の部分を断面方形に加工して上下に縄かけを持つ。枝分かれから下部は握部のようにもとれる。小形の竿受けのようにも見えるが、又繰りは施されていない。ほぼ完形品で、全長36.6cm幅17.8cm厚さ3.5cmである。1175はV字に枝分かれした部分を利用して、端部はすべて欠損しているものの丁寧に加工されている。残存長32cmで、直径2cmの心持ち材を使っている。

1176は円形ないし楕円形の板が縦割れした破片で、中央に鋏の着柄隆起の端部のような隆起部分があって、隆起の左右に円孔をうがっている。板目材で残存長46.8cm幅12.2cm厚さ2.9cmである。1177も円形の板目材が縦割れした1/2の破片で、直径方向に幅2.2cm深さ1cmの溝がある。残存長27.7cm幅10cm厚さ2.2cmである。1178は全形不明の柁目材で、残存する端面は平面円弧状である。残存長25.4cm幅9.7cm厚さ1cmである。1179は長方形の柁目板の長辺側の角2つを三角形に切り落としている。全長13.6cm幅9.3cm厚さ6mmである。687の箱のように、刳抜式の箱の中には別材の小口板を組み合わせる箱もあるので、1179はそういった箱の大型品の小口板かもしれない。1180は1179と同様の形状で、長方形の板の長辺中央に1つ1.3×1cmの孔がある。柁目材を使い、全長11.5cm幅6.3cm厚さ1.2cmである。1179のように箱の小口板とするには円孔が大きすぎる。1181は両短辺に片側穿孔の円孔を1対持つ。柁目材で残存長25.5cm幅8.2cmである。

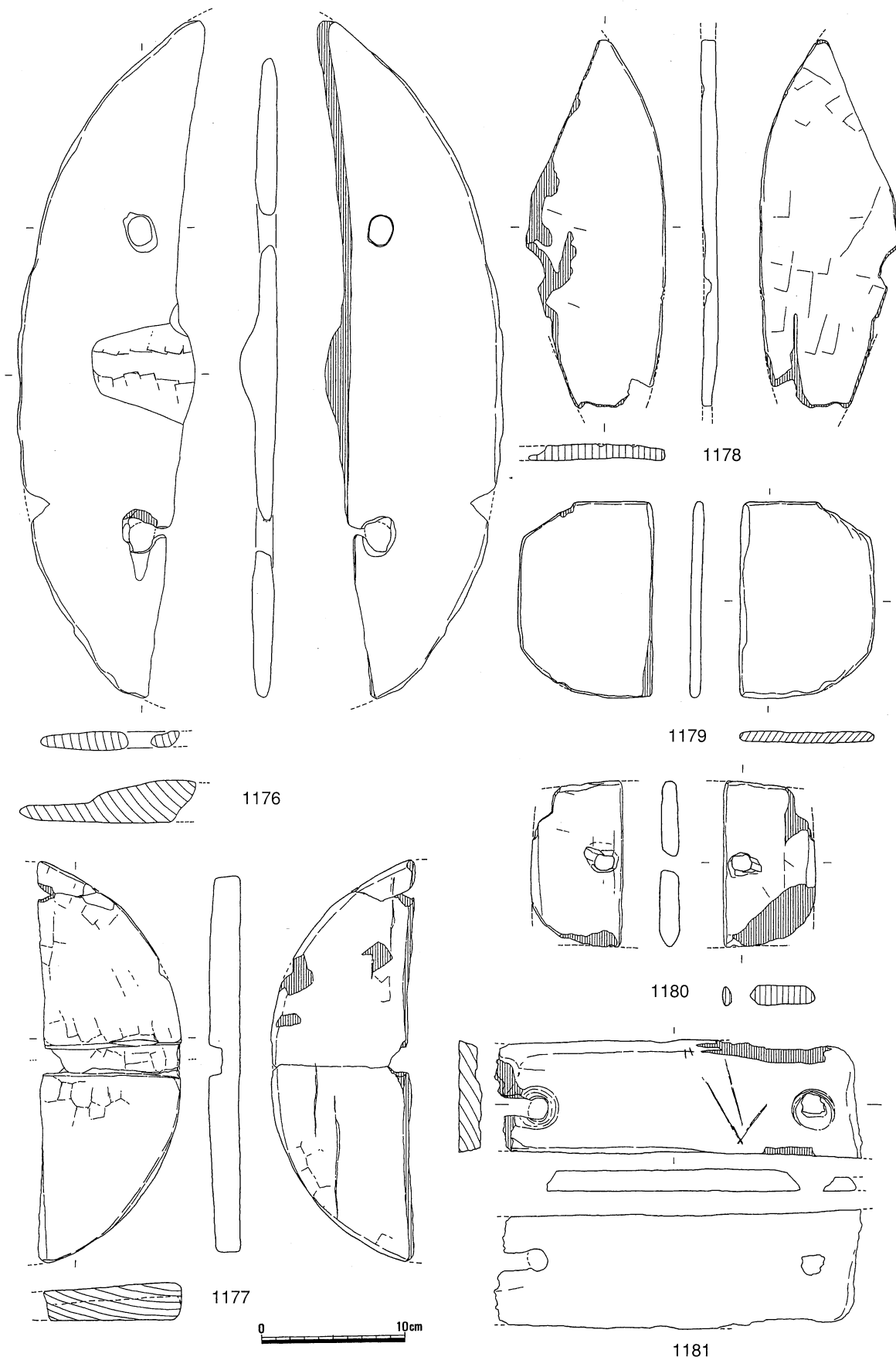
1182は両端を欠損しているが、片側でやや幅が狭くなる。幅の広い方には円孔2つが軸を少しずらして並んでいて、形は悪いが戈形の形状である。柁目材で残存長58.7cm幅13.2cm厚さ1.4cmである。1183は柁目材を使った板状製品で、残存長26.1cm幅11.95cm厚さ1.8cmである。1184は幅9.7cmの柁目材の中央にL型に3つの円孔があけてある。田下駄の足板にしては円孔が接近しすぎているので、別物とみられる。両端部は欠損していて残存長25.4cm厚さ9mmである。1185は枝の付け根を利用して、鳥の頭に似ている。小型の膝柄斧の未成品とも考えられる。残存長7.9cm幅7cm厚さ2.1cmである。1186は縦に長い台形状の板状製品。土圧による変形が見られる。柁目材で残存長32.9cm幅6.2cm厚さ0.9cmである。

1187は幅9.3cm厚さ1.3cmの柁目板の片側の短辺近くを両側面から削って幅6.2cmの頭部を作る。両短辺中央にはそれぞれ楕円孔をあける。全長53.9cmのほぼ完形品である。1188は一端が方形孔の部分で折れ、他端は又部状の部分で折れている。柁目材を用いて残存長11cm幅3.9cm厚さ8mmである。1189・1190・1192・1193は器種の特定はできないが何らかの柁板の破片とみられる。1189は1辺

14. 用途不明品

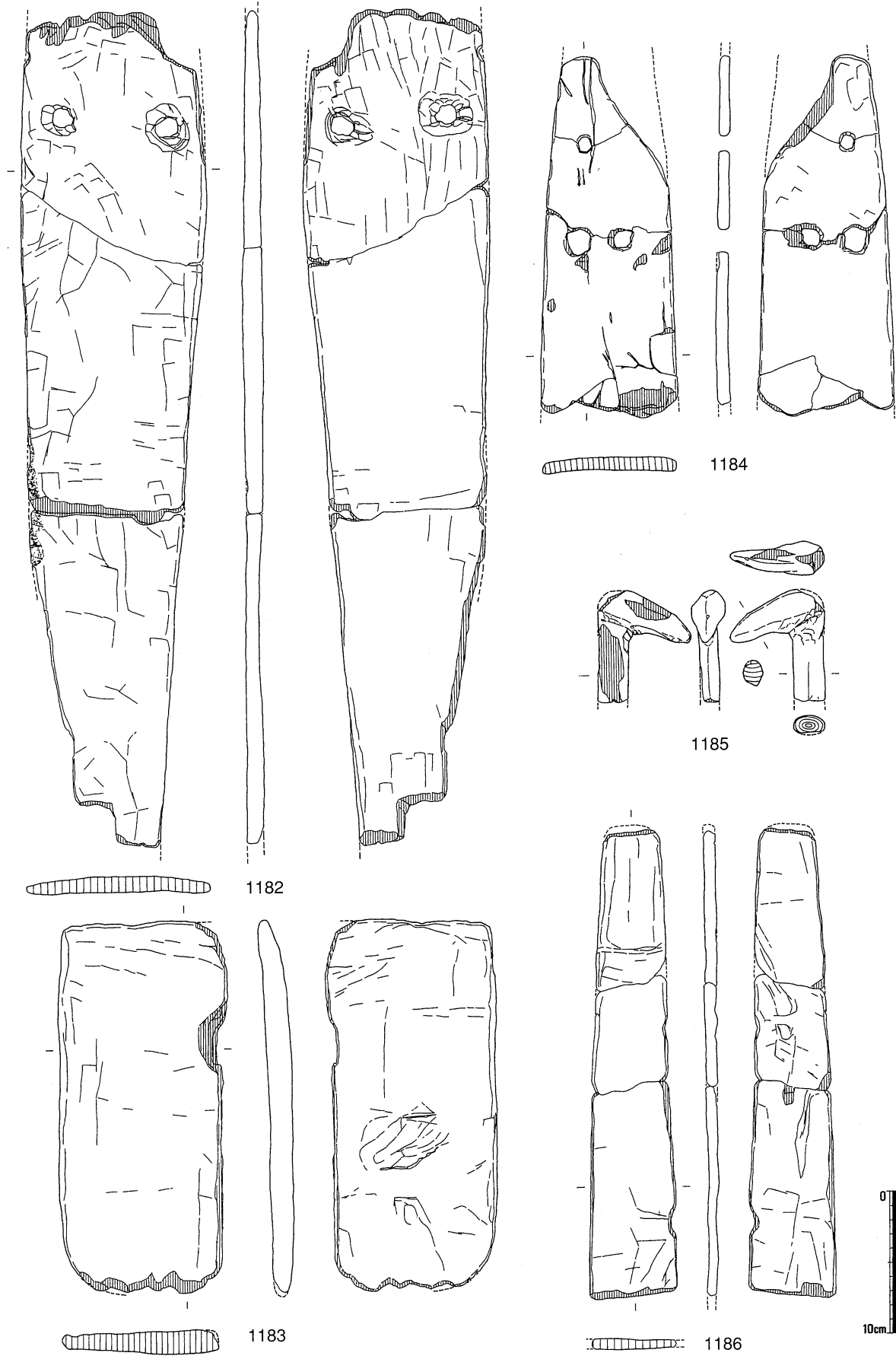


第181図 不明(5)

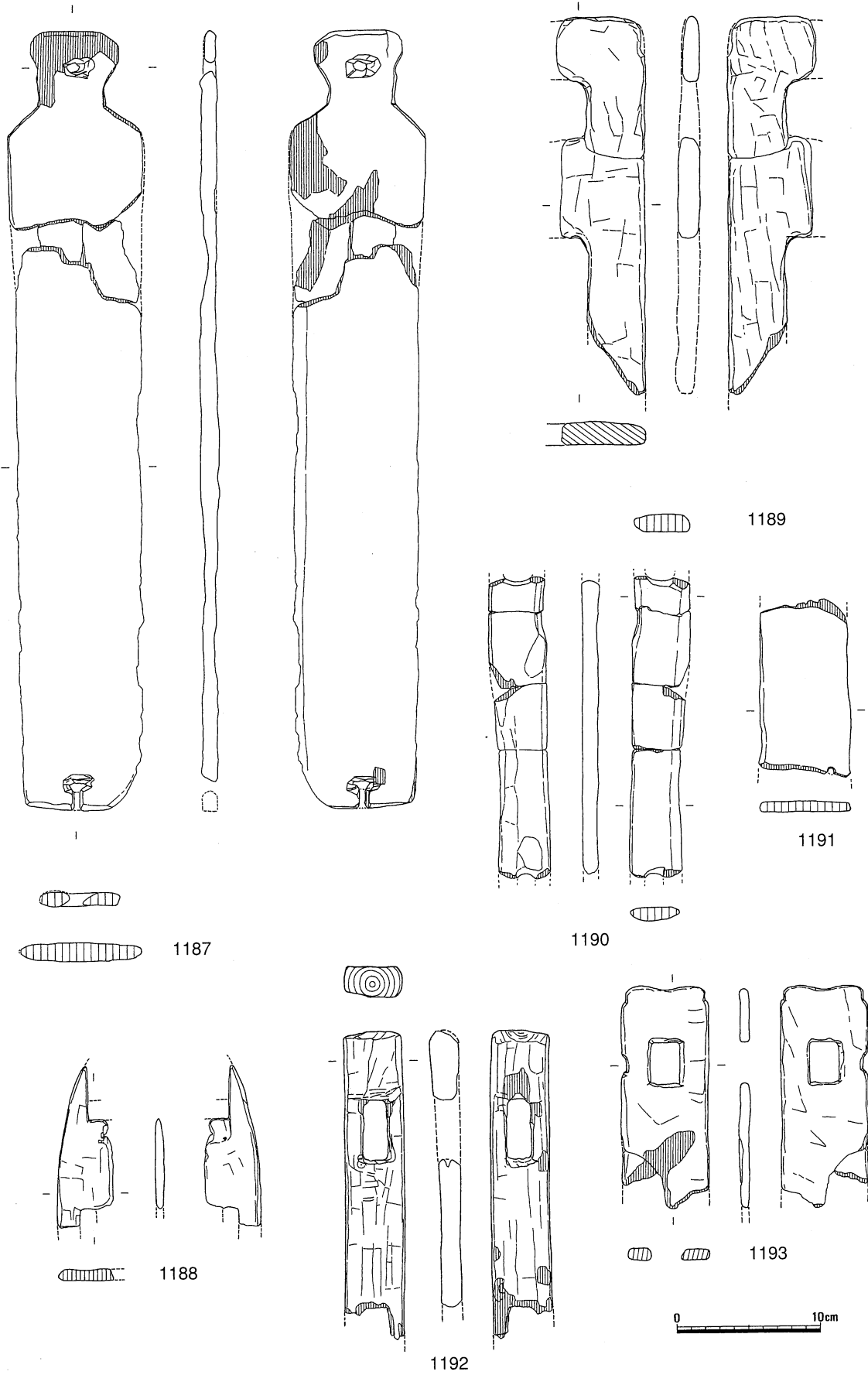


第182図 不明(6)

14. 用途不明品

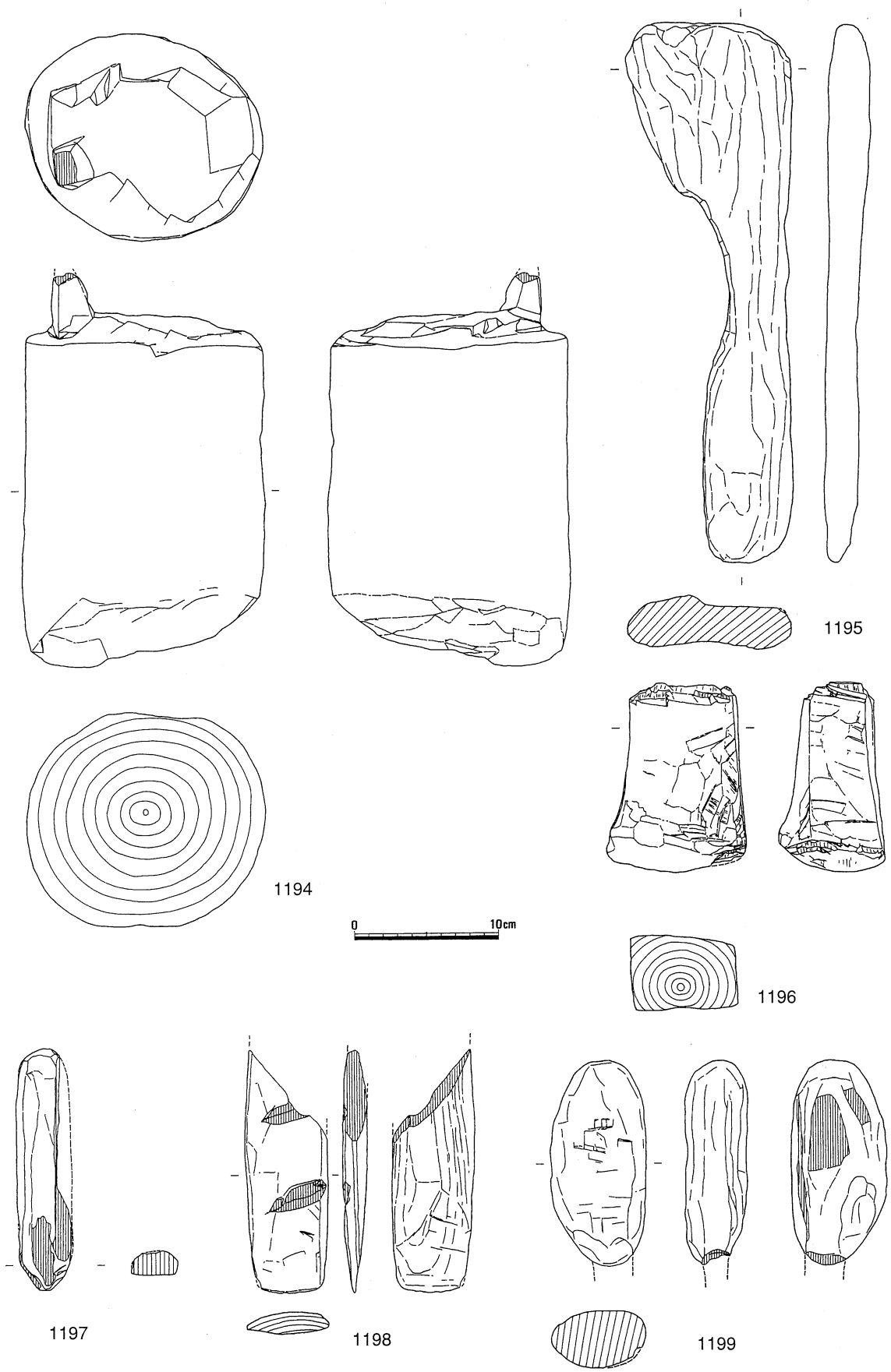


第183图 不明(7)



第184图 不明(8)

14. 用途不明品



第185図 不明(9)

4 cmの方形孔が6.5cmの間隔をあけて2つ残存していて、残存長26.0cm幅6.1cm厚さ1.6cmである。1190には20cmの間をおいて円孔が彫られていて、両端ともその円孔部分で折損している。柁目材で残存長20.9cm幅4 cm厚さ1.2cmである。1192は幅4 cm厚さ2 cmで断面長方形の心持ち材に、約10cmの間隔をあけて長方形孔を2つ設けている。1つは1.8×4.2cmで他方は途中で折れている。残存長21.3cmである。1193は残存長15.4cmのため2.9×2.1cmの方形孔が1つ残るのみである。短辺両角と方形孔横の側面に凹状の加工がある。柁目材を使っていて幅6.1cm厚さ8 mmである。1191は幅6.4cm厚さ7 mmの柁目板の破片で、割れ口に小孔が1つかかっている。両端が折れていて残存長は17.5cmである。

1194は丸太材の両端を切断しているが一端に断面方形の突起を残している。心持ち材で残存長27.1 cm幅16.6cm厚さ14.8cmである。片側の小口に突起を残した形状は、すくい具未成品741の前段階とも考えられるが、すくい具とするには把手となる突起が小さすぎる。むしろ、小突起を残した作り方は小形臼未成品261にも見られるので、理由はわからないが製作工程の中で何らかの必要性があるのであろう。1195は中央が細くなっているが、元々楕円孔がつけられていた板材の破片かもしれない。板目材で全長37.2cm幅11.4cm厚さ3.2cmである。1196は断面方形で一端は幅が広くかつ厚くなっていて端面を丸く加工している。反対側の端部は切断されている。表面の細かな加工痕が顕著に残っているので未成品というよりも、転用がはかられた残材と考えられる。心持ち材で全長13cm幅9.7cm厚さ7.2cmである。1197は断面かまぼこ形で、両端を側面から細くしている。柄の転用品か？柁目材で全長16.4cm幅3.6cm厚さ1.4cmである。1198は板目材を使ったくさび状の木製品。幅4.5cmの刃部は両面から薄く仕上げられている。残存長11.5cm幅5.8cm厚さ1.6cmである。1199は楕円形の残核状。柁目材で残存長14cm幅6.5cm厚さ4 cmである。

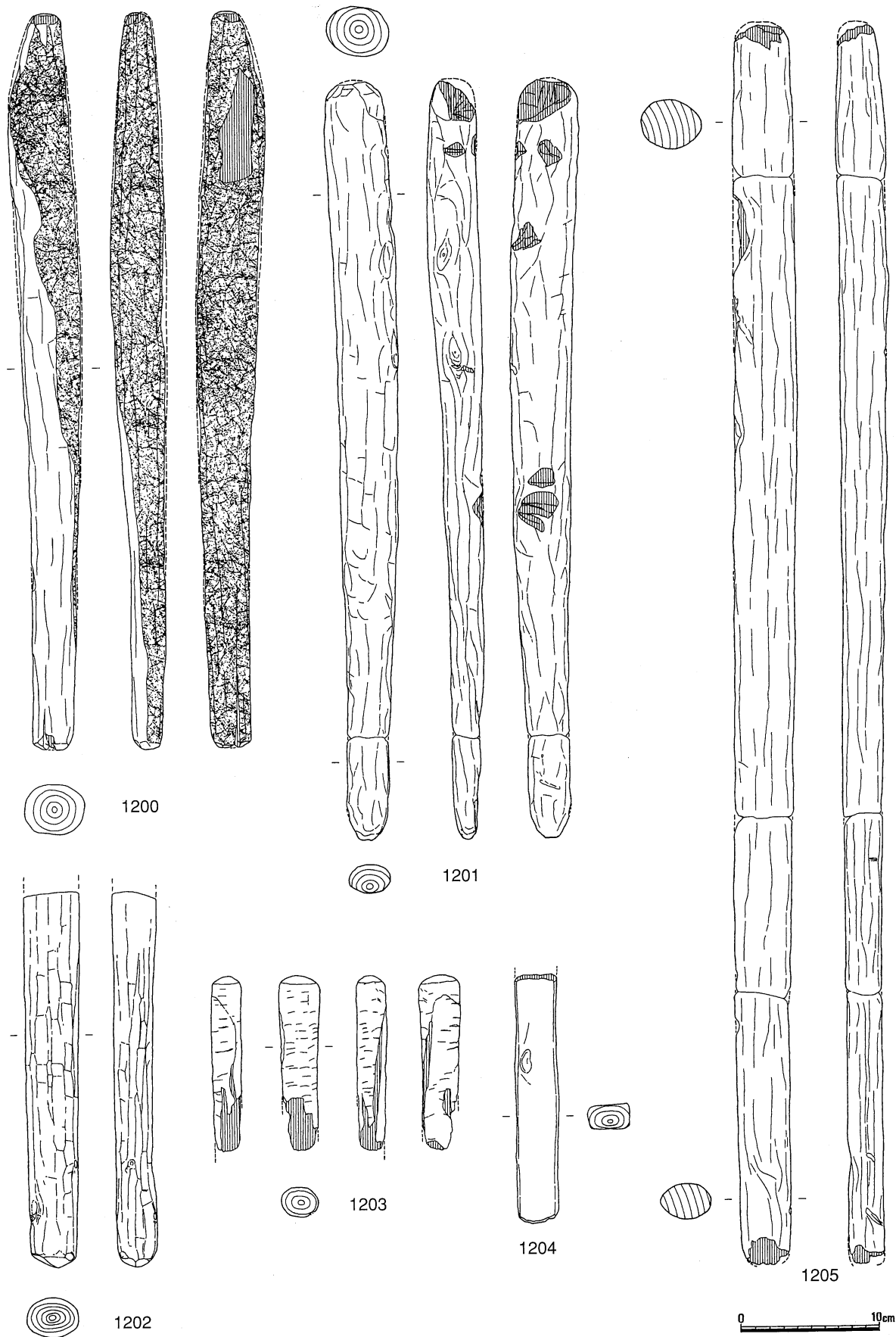
加工棒

何らかの加工を施した棒状製品を加工棒と一括している。端部に頭部を持たないもの、頭部を片側に作り出したいわゆる有頭棒、一端を細くとがらせた杭状のもの、縄かけ加工を施したもの、ほぞを作り出したものなどがある。鋏や斧などの柄・器具の部材・竿受けの破片などが含まれている可能性がある。

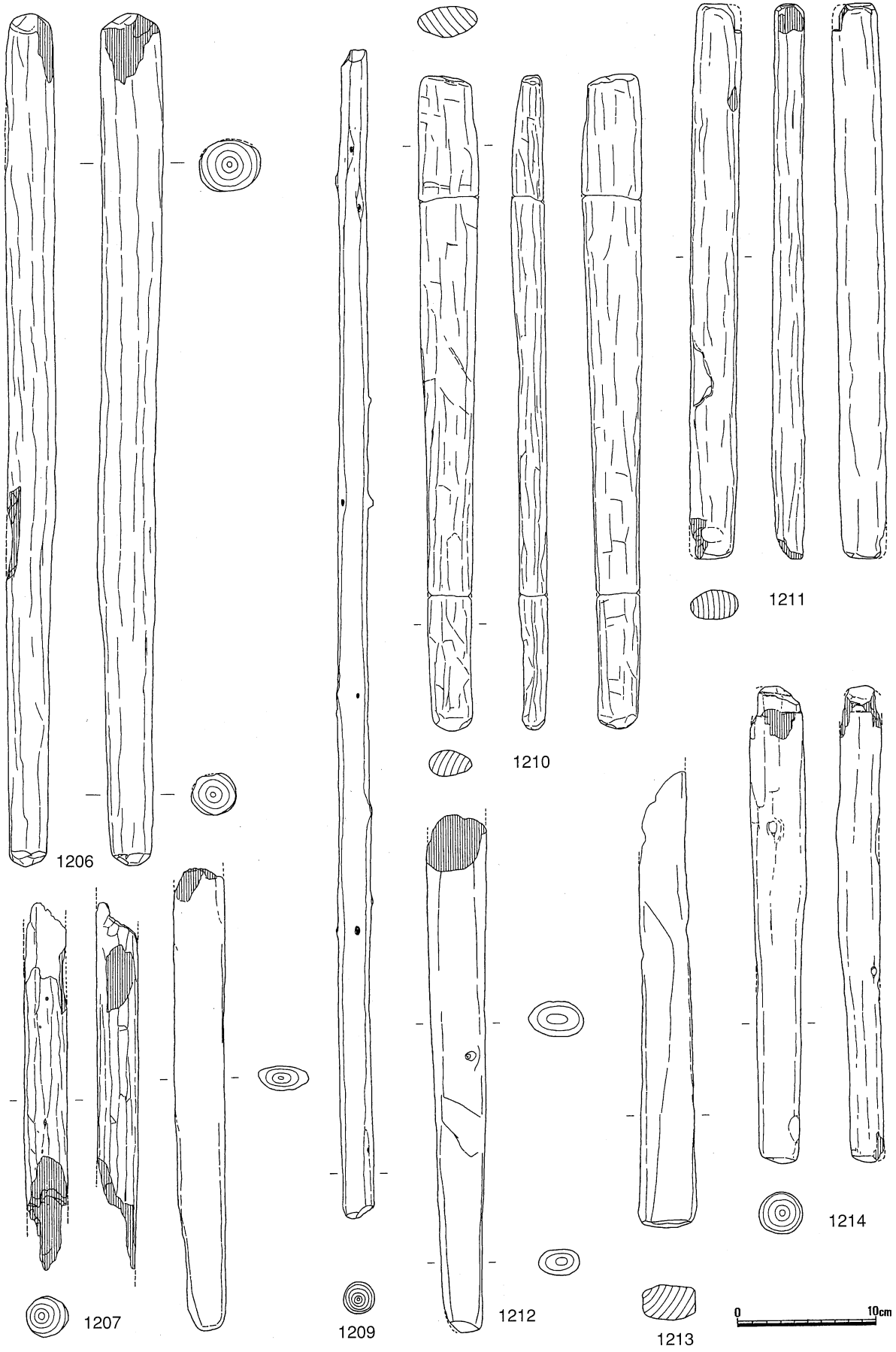
1200は全長52cmのほぼ完形だが全体の7割方が焼けている。直径4.5cmの心持ち材を使っていて一端をやや細くし、棍棒にも形が似ている。1201もほぼ完形で、全長53.5cmである。直径4.5cmの心持ち材の両端を丸く加工し、一端を細くしている。1202には長軸方向の幅の狭い加工痕が顕著に残っている。心持ち材製で残存長は26.3cmである。1203は端部を丸く加工した直径3 cmほどの棒の小片で、全体に細かい刃物の跡がみられる。一部に炭化した部分が残っていて、残存長12.3cmである。1204は心持ち材を断面長方形に加工した棒で、端部も丸く加工している。残存長17.5cm幅3.0cm厚さ1.8cmである。1205は割材を使った全長87.4cmのほぼ完形の棒で、横断面は4.45×3.5cmの楕円形である。直柄鋏の柄の可能性もあるが、全長のわかっている52・56・65では全長が95～102cmあって、それらに比べるとやや短い。

1206も直径4.3cmの心持ち材を使った全長60.7cmのほぼ完形品である。一端がやや細くなっていて、表面には縦方向の加工痕が残る。1207は直径3 cmの心持ち材に幅の狭い長軸方向の丁寧な加工を施した棒の破片で、一端は焼損している。残存長は26.5cmである。1208は直径3.7cmの心持ち材を使った残存長33cmの加工棒で、表面の状態はよくないが端部を丸く加工している。1209は直径2.4cmの心持ち材の棒で、残存長が83.2cmある。切り落とした枝の根元が高く残っていて全体に加工が粗い。

14. 用途不明品



第186图 加工棒(1)



第187图 加工棒(2)

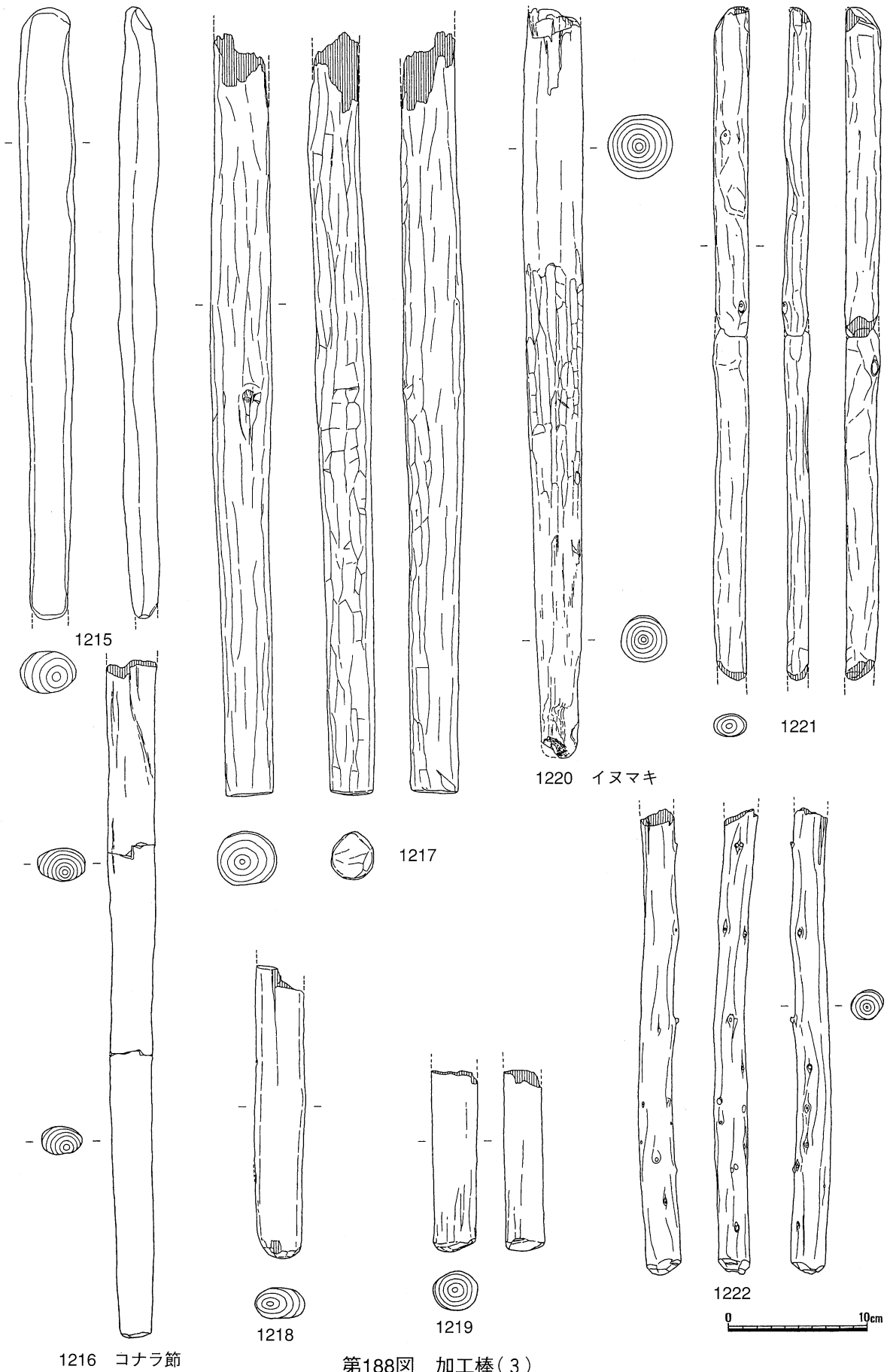
14. 用途不明品

1210は割材を使った全長46.6cmの完形品。横断面は4.25×2.35cmの楕円形で、一端に向けやや細くなっている。端面は広い方の端部を平たく狭い方を丸く加工している。1211も割材を使ったほぼ完形品で、全長が39.5cmあって、横断面は3.4×2.3cmの楕円形である。1206や1210と異なり太さはほとんど変わらない。1212は一端を細くして端面を丸く加工している。心持ち材を使っていて横断面は4.3c×2.8cmの楕円形で残存長は36.8cmである。1213は割材を幅4.1cm厚さ2.7cmの断面方形に加工した棒状品の端部で、端面も平たくしている。残存長は32.5cmである。1214は直径幅4cmの心持ち材を用いた全長34cmの加工棒のほぼ完形品である。片側の端部は1206と同様にやや細くして、端面を丸く加工している。

1215は心持ち材を使って横断面をやや扁平な円形に加工している。残存長は43.3cm幅4.1cm厚さ2.9cm。1216は直径4cmのコナラ節の心持ち材を加工した端部の破片で、残存長47.2cmである。端面を丸く加工している。1217は心持ち材を使って直径に4.2cm加工を施し、表面の細長い加工痕や端面を平坦にした加工痕が明瞭に残っている。残存長は54.2cmである。1218・1219は残存長は20.7cm・12.8cmと短い、両方とも端面を丸く加工した端部の破片で、1218は心持ち材を3.6×2.2cmの楕円形に、1219は直径3.2cmに加工している。1220はイヌマキの心持ち材を使って片側の端部を端面から35cmあたりから徐々に細くして、その加工痕が明瞭に残っている。残存長は53.4cm太いところで直径4.3cmである。1221は47.85cmが残存していて、一端を斜めに加工している。表面の加工も丁寧で、直径2.5cmの心持ち材を用いている。1222は一端に切断痕が残るだけの未成品で、切り取られた枝の根元も未処理である。心持ち材で残存長33.1cm直径2.4cmである。

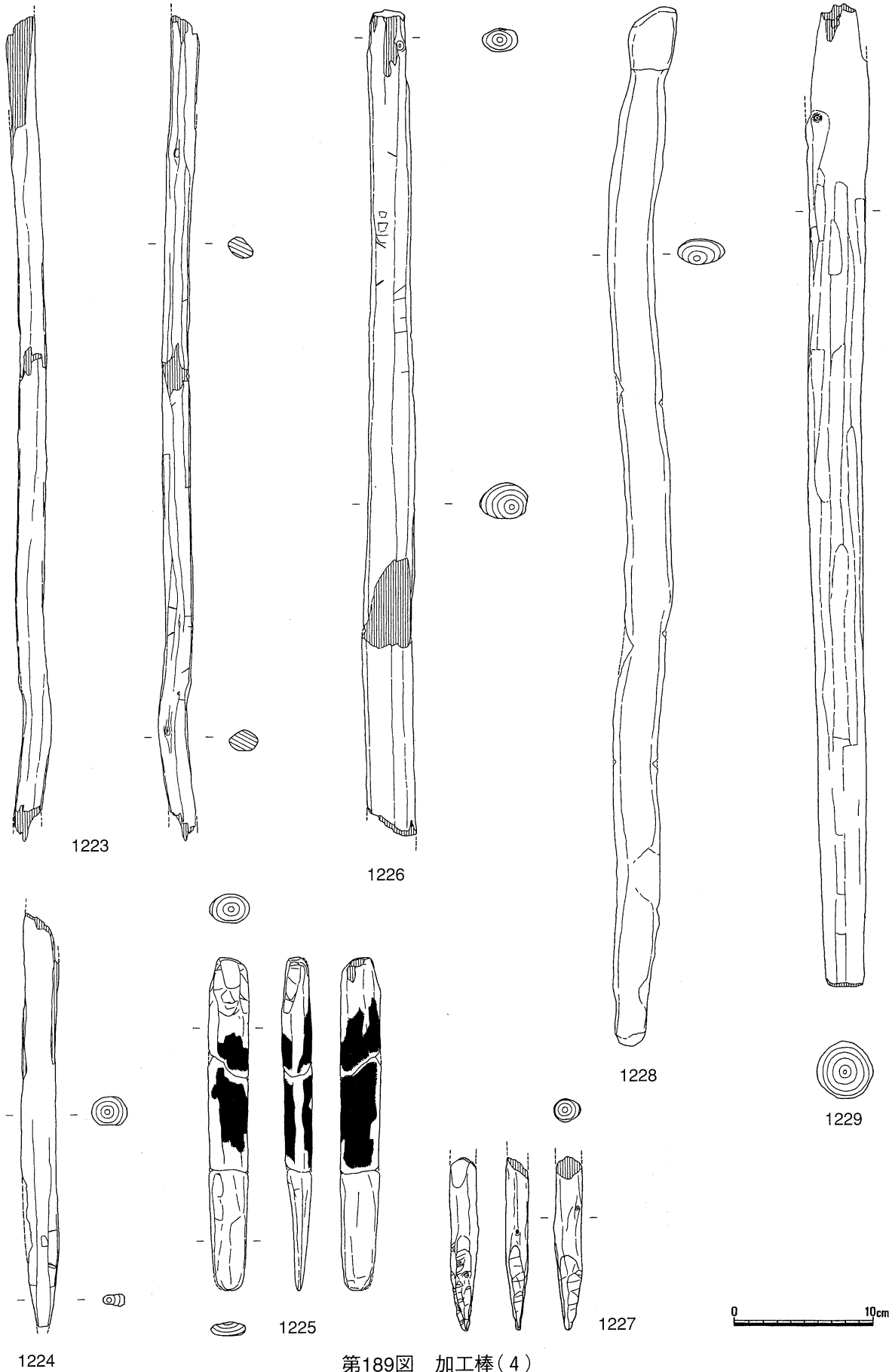
1223は残存長58.4cmで両端を欠損しているものの、横断面形は必ずしも整っていないが柾目材の全周を縦方向に長く面を作り加工している。幅2.1cm厚さ1.6cmである。1226も残存長58.5cmで両端を欠損しているが一端を細く加工している。直径3.5cmの心持ち材を使い、長軸方向に細長く面を持たせた加工をしている。1228は心持ち材を用いた全長74cmの完形品で、片側の端部には長さ4.5cmの頭部を作っている。横断面は3.6×2.6cmの扁平な円形である。1229は広い方の端部を欠損しているが69.7cmが残っていて、残存端面から55cmのあたりから長軸方向に幅の狭い加工を施して細くしていつている。端面は平らに加工している。4.5cmの心持ち材を使っている。

1224・1225・1227・1230～1234・1245は一端を細くとがらせていて杭状を呈する。ただし、1225については、先端を表裏2面から加工し、しかもやや内湾させているので、ヘラ状木製品として扱うべきものである。1224は両端を欠損しているが、先端は断面長方形に4面から細くしている。心持ち材を使っていて残存長29.2cm幅2.5cm厚さ2.1cmである。1225は心持ち材製で全長23.5cmのほぼ完形のヘラ状木製品である。刃部を2面から削り薄くした直線刃形で、刃部の側面形はやや内湾している。中央部には樹皮が残る。基部を3面から加工を加えて調整しており、樹種同定がされていないので定かではないが、村上由美子氏の分類による丸材型の楔⁽²⁶⁾に当たるかもしれない。幅2.8cm厚さ2.1cm。1227は先端を鉛筆状にとがらせている。心持ち材を使っていて加工痕が明瞭に残っている。1230は先端を鉛筆形に全周からとがらせていて、頭部は痛んでいるが小さい球形である。直径4.2cmのアカガシ亜属の心持ち材で樹皮を残している。全長は72.8cmである。1231は状態が悪いが先端を2面から細くした杭状の加工棒で、頭部下端を三方から削りだしている。中央付近に幅4cmの縄かけがあって、縄かけの反対側を面取りしている。先端側には枝の根元を2つこぶ状に残したままにしている。心持ち材を用いており、全長44cm直径4.1cmである。1232は先端を端面から22cmあた



第188図 加工棒(3)

14. 用途不明品



第189图 加工棒(4)

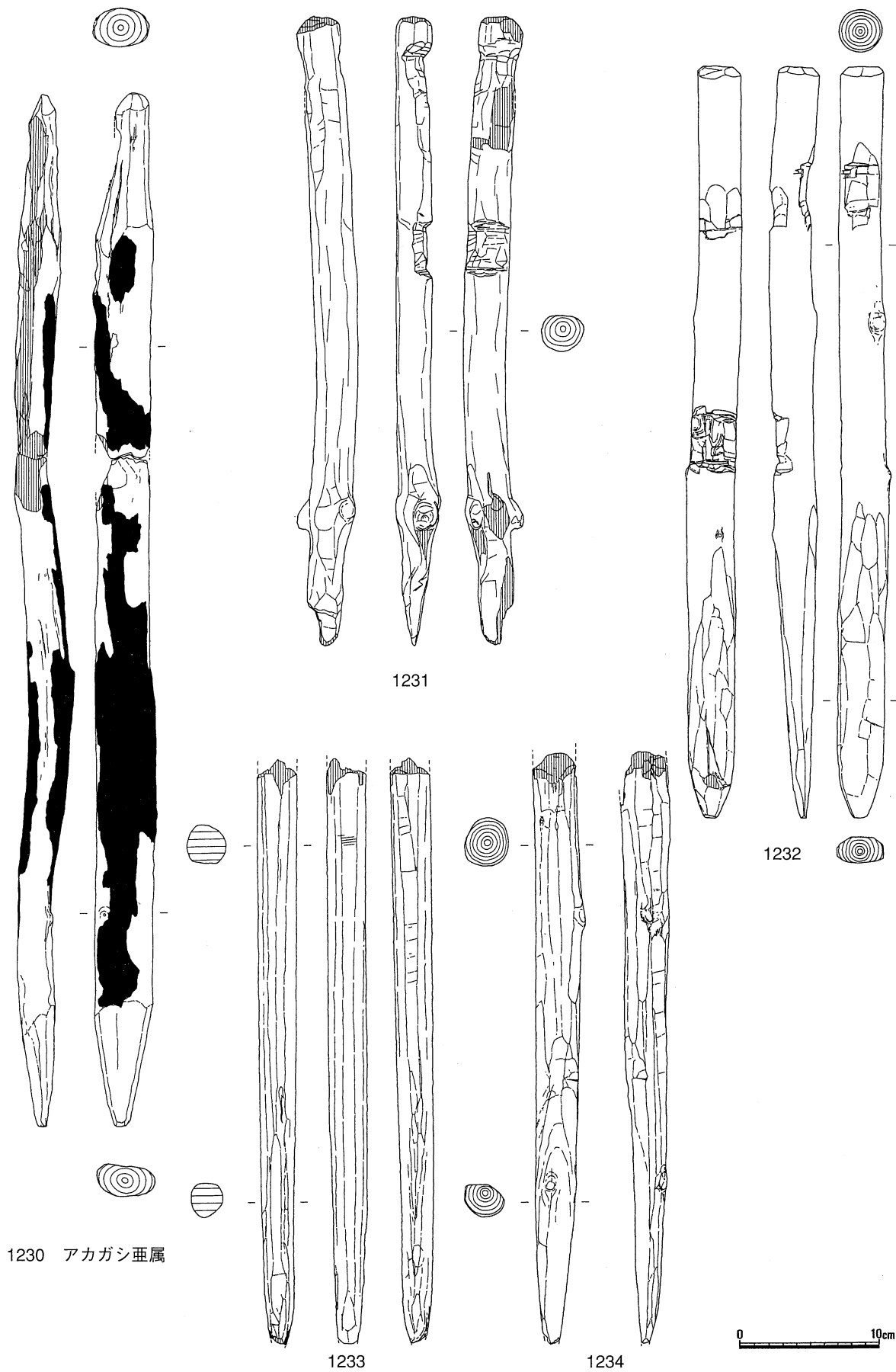
りから2面加工で細くしていき、端部間近になって4面加工している。12cmあけて縄かけを作っているが、下段が幅4cmで溝状になっているのに対し、上段は何回か手斧を当てた程度で加工途中かもしれない。上段には反対面にも雑な加工がある。直径3.3cmの心持ち材を用いていて全長52.9cmである。1233は残存長41.1cmで先端と基部を欠損しているが、柁目材を直径2.5cmに加工していて、長軸方向の仕上げ加工痕が顕著に残っている。1234には幅の狭い加工痕が顕著に残っていて、先端は片面から細くしている。直径3.1cmの心持ち材を使っていて残存長は41.5cmである。1245は長さ9cm直径4cmの平面長方形で太い頭部を持った杭状をしていて、頭部の下は直径2.5cmに細くしている。心持ち材で全長44.5cmである。

1235～1244・1246～1251は何らかの器具の部材の可能性もある。1235は柁目材を断面方形に加工した上、端部を鉤状にしている。それと反対面には幅1.5～2cmの縄かけを15cmの間をおいて2つ作っている。柵状の木製品の柁木で、縄かけ状の加工に柁木を組み合わせる事も考えたが、端部の鉤状と縄かけの方向が正反対である点が気がりである。1236は端部の紐かけを前面とすると、後面を端部から約11cmまで平坦に加工し、中央部は右側面を面取りしている。直径2.5cmの心持ち材を使っていて残存長は59.5cmである。1237は幅2cm厚さ7mmで断面長方形の柁目材を使って、端部に幅1.7cmの紐かけ溝を彫って頭部を作る。裏面には頭部を作らず紐かけ溝に対応する部分まで平らに削っている。残存長は35.2cmある。1238は柁目材を幅2.4cm厚さ2cmの方形に加工して、端部側面に幅3.5cmにコの字形に切れ込みを入れている。1239は18.5cmしか残っていないが、直径3cmの心持ち材の裏面を平坦に加工している。頭部は半球状で、全面に細かい加工痕が残っている。1240は直径4.7cmの心持ち材製の完形品で、全長は62.2cmある。両端に頭部を作り出すが、一端は端から約40cmのあたりから徐々に細くしていて、もう一方は幅3cmの紐掛け状にめぐらせている。全体に乾燥のため干割れや収縮がある。

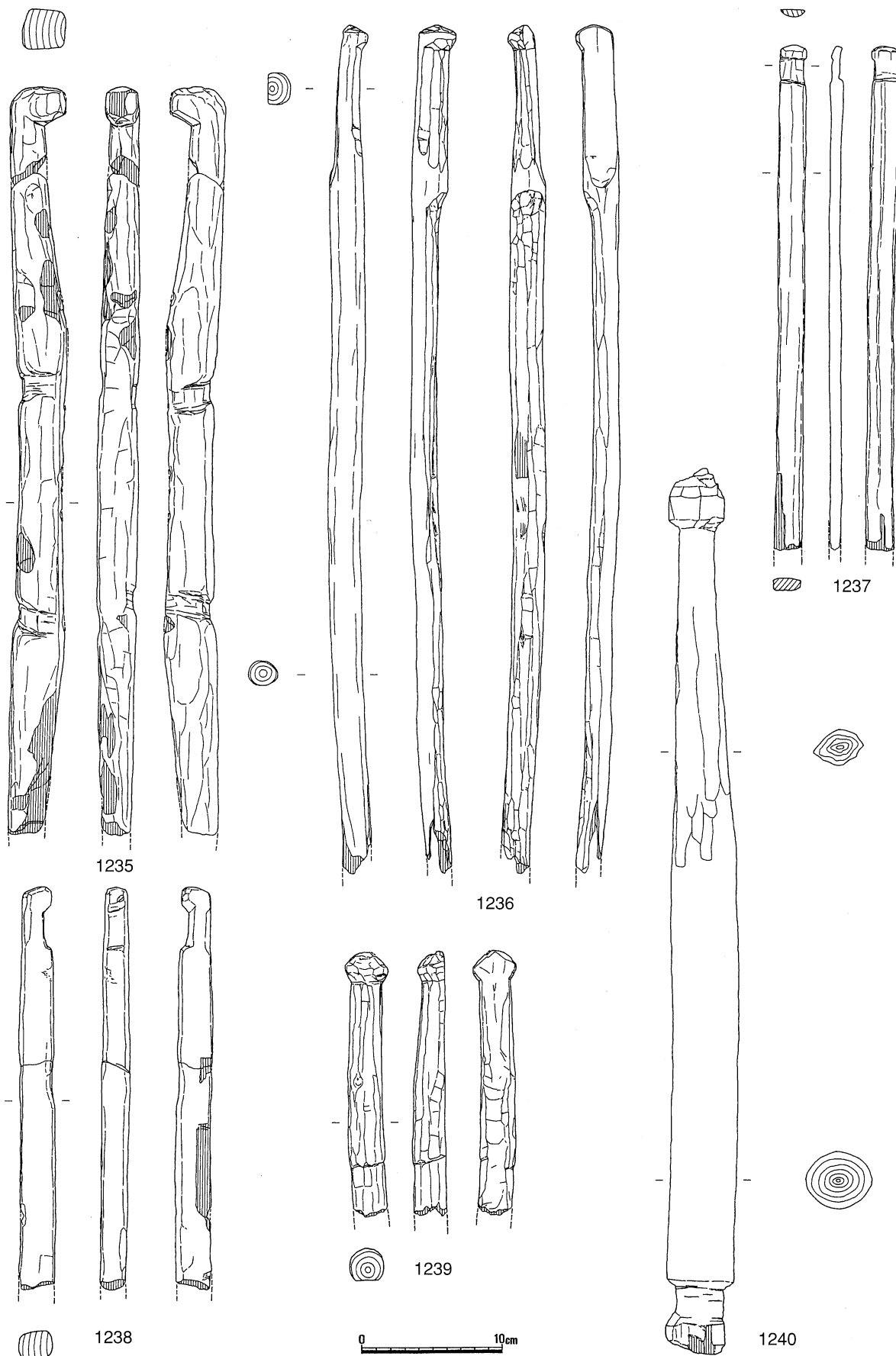
1241は割材を幅2.6cm厚さ1.3cmの断面方形に加工して一端に幅1.5cmの頭部を作る。2つの破片は直接接合しないが同一個体とみられる。1242は柁目材を直径3.1cmの断面円形に加工して、端部から10cmの所に境をつけて頭部状にしている。頭部状の部分は長さが10cmもあって、反対側の端部も欠損しているので握部となる可能性もある。全体に丁寧な加工がなされている。残存長35.9cmである。1243は縦半分に分かれている。1242と似ているが、頭部が6.4cmと1242に比べると短い。柁目材を4.1cmの断面円形にして細かく丁寧な加工を施す点は共通している。1244も柁目材を加工した有頭棒で、頭部は截頭円錐形である。断面形は楕円形に近く幅3.2cm厚さ2cmで、残存長が48.6cmある。1246は1240と同じく両端に頭部を持つ有頭棒の完形品で、ツバキ属の心持ち材製で全長は70.5cmある。頭部の長さは2～3cmで、一方は長さ7cmをかけ徐々に細くし、他方では幅2.5cmで紐掛けをめぐらす点も1240と共通している。太さは3.2cmで1240よりは細い。1247は割材を使った全長89.5cmの完形品で、一端に半球形の頭部を持つ。他端は丸く収めていて、何かの柄の可能性もある。断面は楕円形状で幅3.3cm厚さ2cmである。

1248は片側の端部にレの字状の加工を施して頭部を作っていて、反対側の端部は丸く収めている。直径2.8cmの心持ち材製で全長72.6cmのほぼ完形品である。1249は端部の側面から欠込を施して頭部を形成する。幅3.4cm厚さ1.5cmの断面長方形に平坦加工を行っている。一部に炭化がみられる。心持ち材を使っていて残存長49.6cmである。1250は柁目材を2.8×2.1cmの断面楕円形に加工し、端部には平面方形の頭部を作り出している。棒の部分は幅5mm～12mmで長軸方向に面を持たせて加工する。

14. 用途不明品

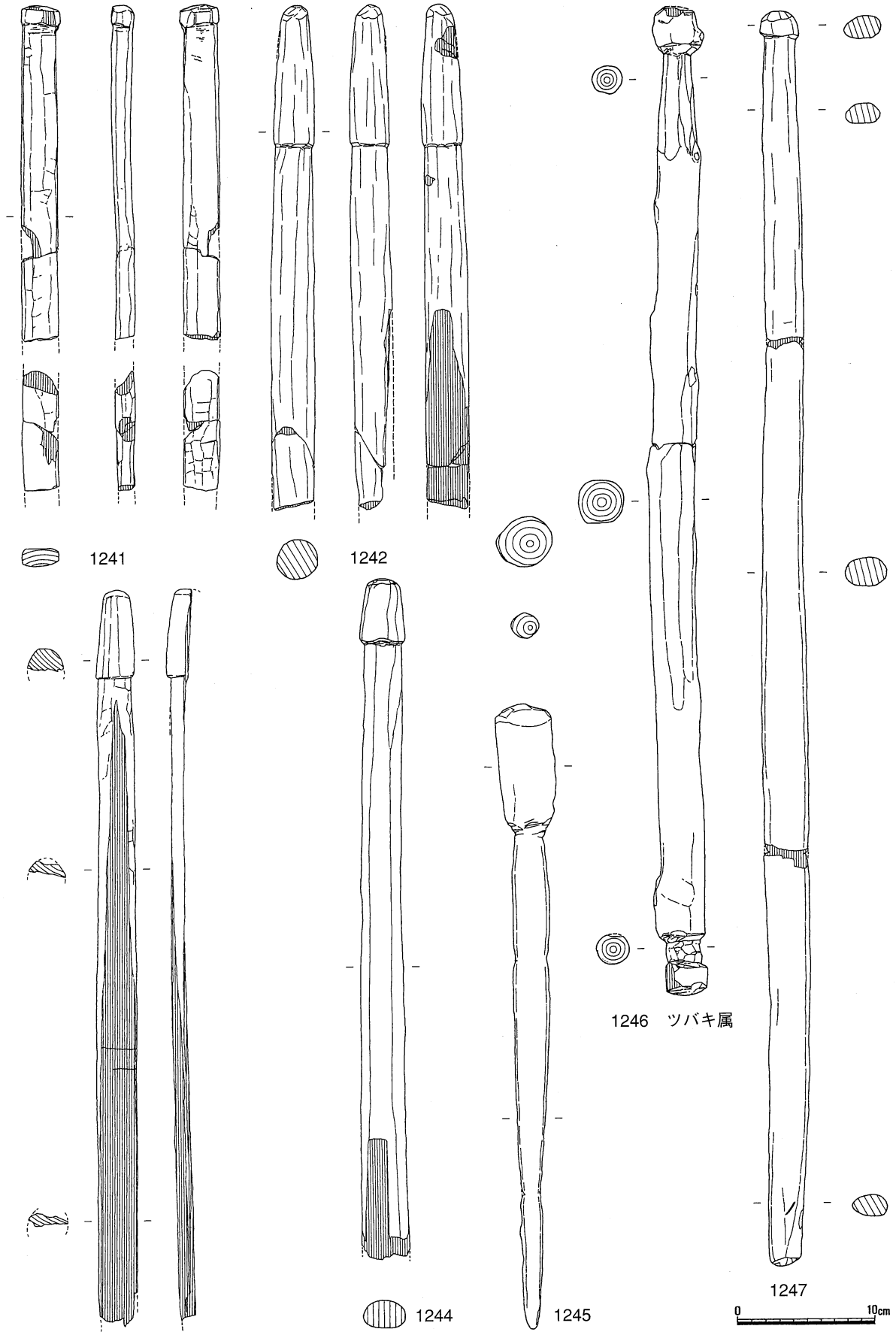


第190図 加工棒(5)

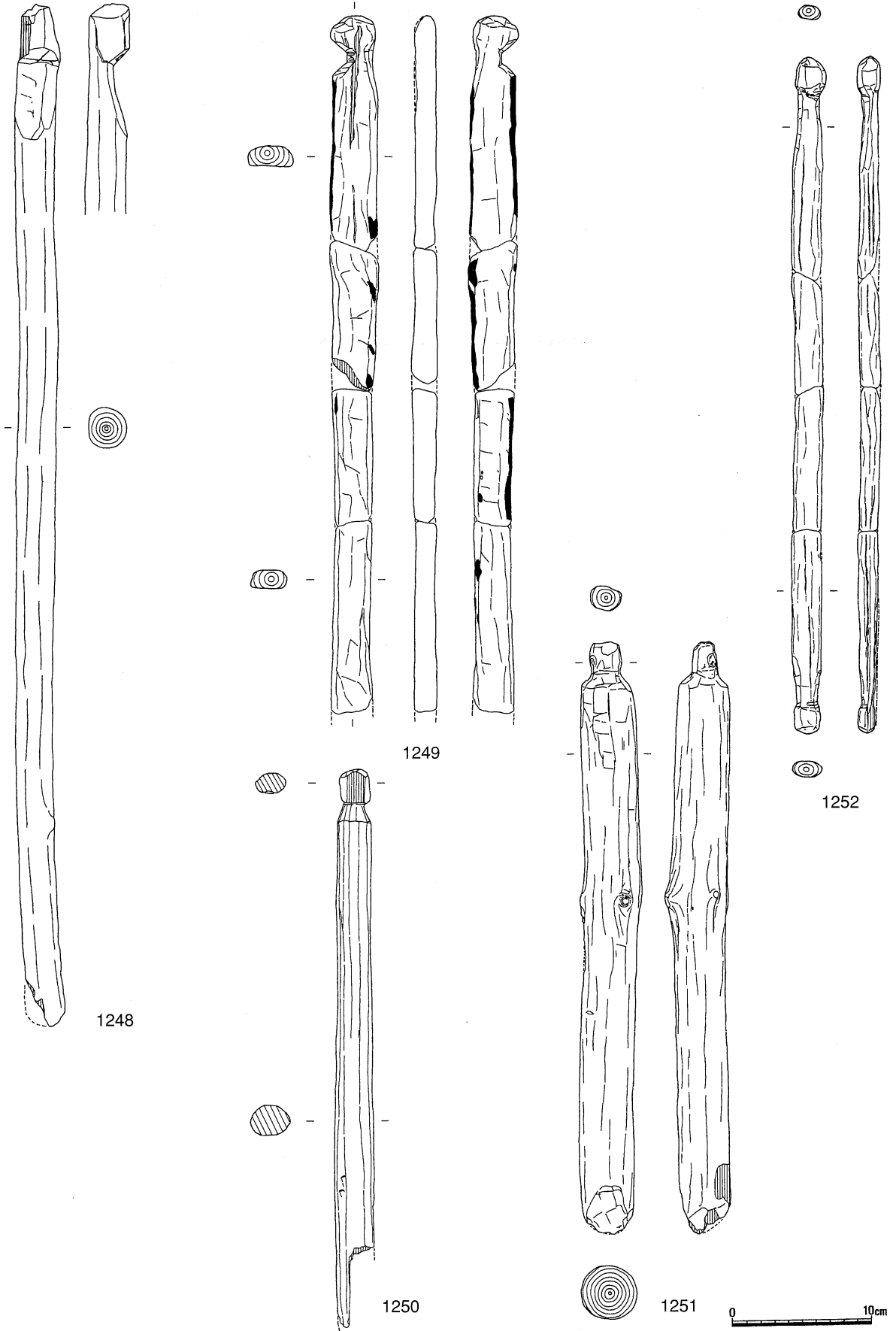


第191图 加工棒(6)

14. 用途不明品



第192図 加工棒(7)



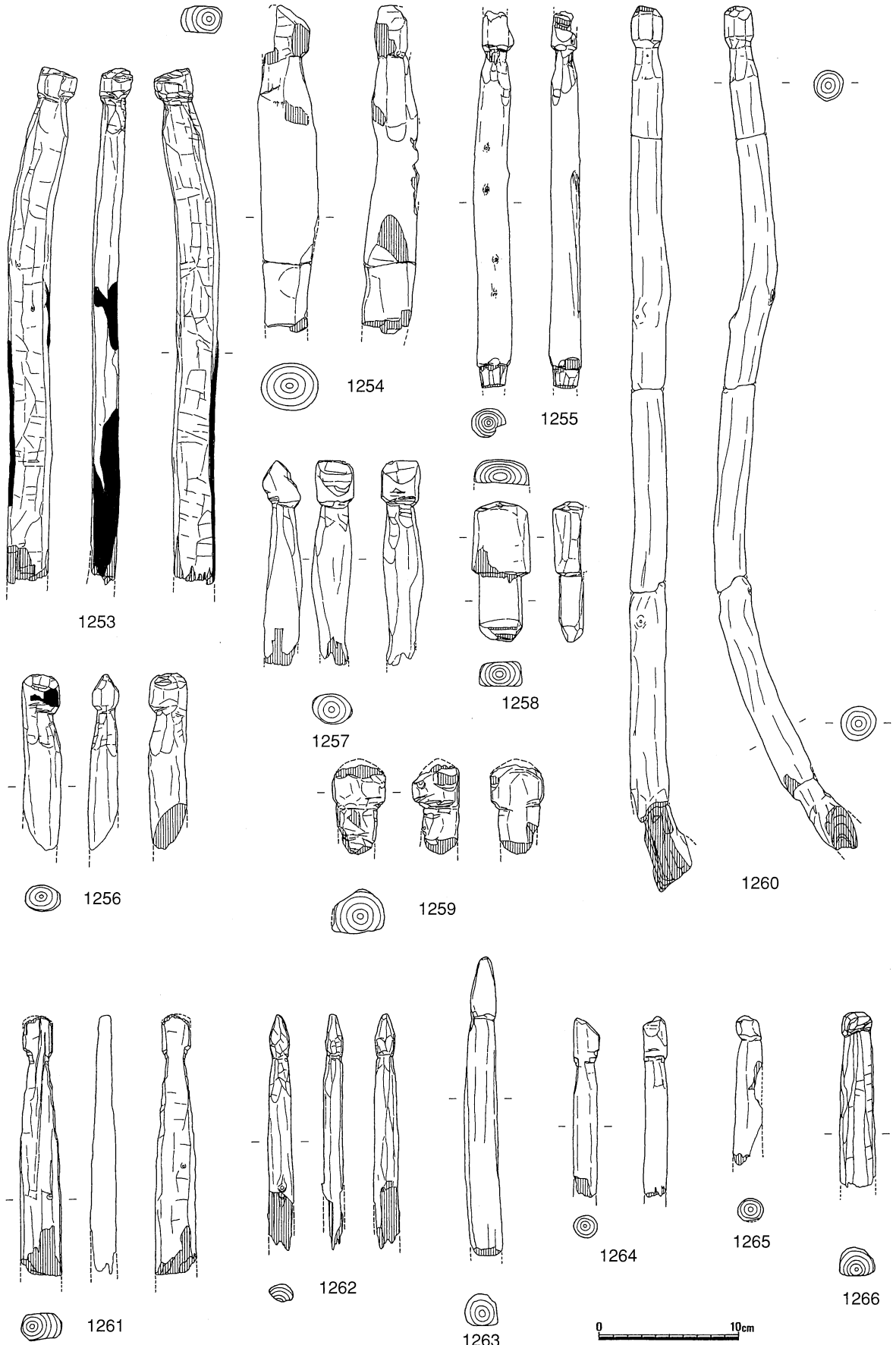
第193図 加工棒(8)

14. 用途不明品

1251は直径4.5cmの心持ち材の一端に長さ2.2cmで断面円形の短いほぞをつける。反対側の端部は斜めに端面が作られている。枝の付け根が少し残っていて加工はやや粗い。1252は細長い棒の両端に頭部を作っている。組合せの吊り棚のようなものの部材か？直径2.2cmの心持ち材で全長は48.2cmである。1253は心持ち材を使って1241と同じく断面長方形に加工して、端部平面長方形の頭部を作り出している。長軸方向の加工痕が顕著に残っている。残存長36.3cm幅2.95cm厚さ1.9cm。1260は曲がった心持ち材を使っていて、欠損部に幅2cmほどの縄かけがかかっている。

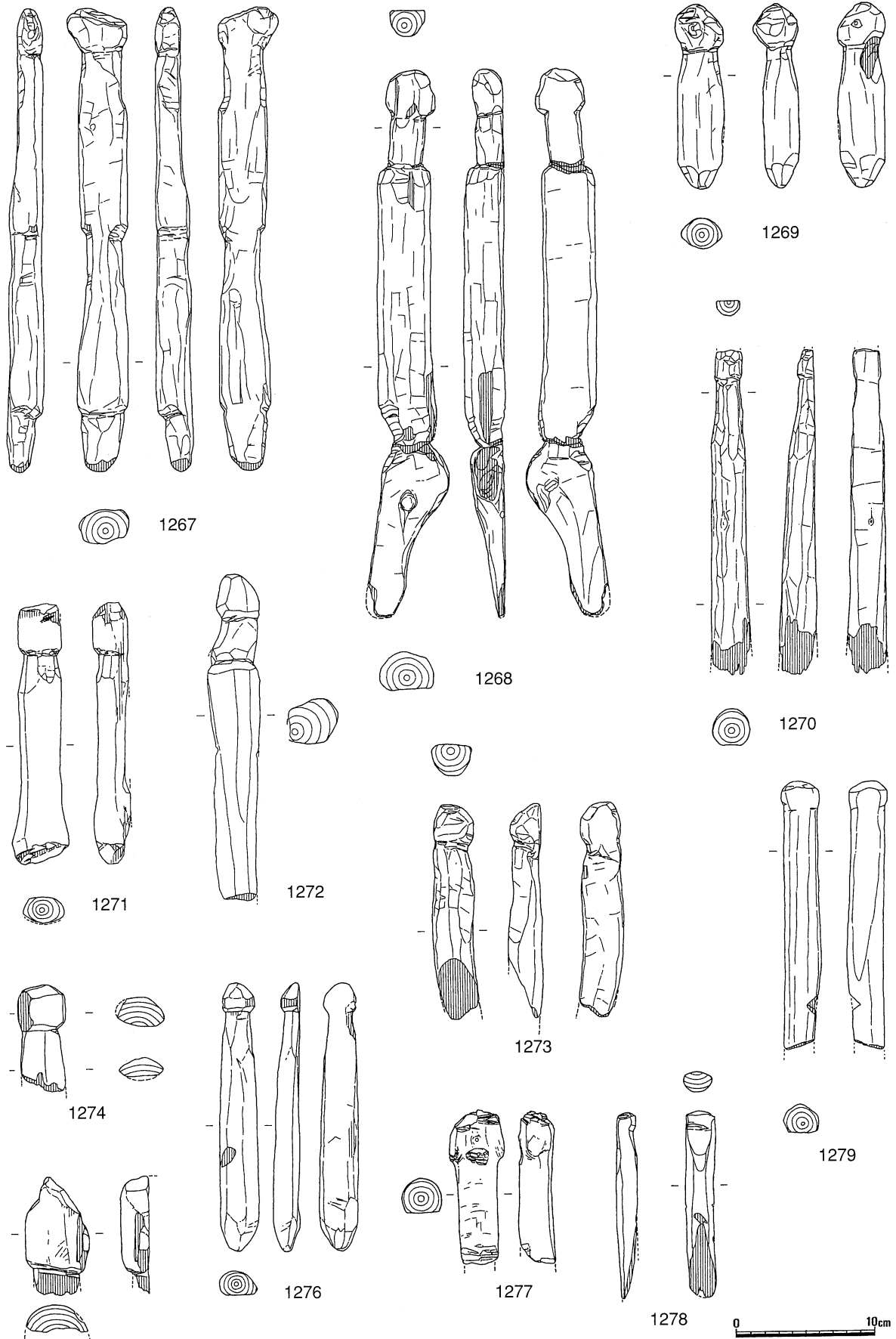
1254～1259・1261～1266・1270～1275・1277～1279は端部に頭部を作り出した様々な製品の一部ともみられる。1255は溝状の縄かけまたは頭部の付け根で折れている。1258は断面長方形の有頭棒の頭部から下5cmで切り離したもので、先述のとおり1157や1162のように栓状の形態であるが、切断痕がそのまま残っている点が異なる。全長9.9cm頭部の幅4.1cmである。1261は心持ち材を使った端部の破片で断面は横長の六角形を呈する。1263・1266・1270・1273・1279には1面を平坦加工している。1262・1263には長三角形の、1265・1266には偏球形の頭部が付く。1278はレの字の加工を施して頭部を作っている。1274・1278には割材を使っていて、1271・1277には切断痕が残る。1269・1276は心持ち材を加工した完形品で、片側の端部に球形の頭部を作り、反対側の端部は鉛筆状にとがらせているが、杭と異なりとがらせ方が急角度で短い。1269は直径3.2cmで全長13cm、1276は直径2.7cmで全長18.9cmである。

1267・1268・1280～1312は縄かけなどを施した加工棒の一部で、いずれも心持ち材が使われている。この中には竿受けの一部やその転用品が含まれている可能性もある。1267は全長32.8cmのほぼ完形品で、断面長方形に加工し、縄かけを3箇所作っている。1268も全長38.7cmの完形品で、片側の端部を表面から薄くしている。縄かけが2箇所あるが、1つは幅4cmの溝状で他方は3面から鋭角に削り込んでいる。1280は先端から5cmほどを1面から削りやや薄くしている。断面長方形に加工し、一部に炭化がみられる。枝は切断したままである。1281は図の上端部付近両面に溝状切り込みがあって、下部にもレの字状の加工を施している。後面を平坦に加工していて、直径4.7cmのやや太い材を使用している。1282はL字形にのびる枝の付け根部分が残っている。幅4cmほどの縄かけが1箇所あって、後面に平坦加工を施す。一部樹皮が残る。1283は完形品で、竿受けの又部から下の転用か。縄かけが1つある。全長39.4cm幅7.3cm厚さ3.6cmである。1284も竿受けの転用とみられる。竿受けの転用とすれば、枝部が切り落とされ、又部に接して新たに縄かけが1つ作られたことになる。背面に平坦加工を施し面を持たせている。図の上端は頭部の付け根で折れていると見られる。残存長55.4cmである。1285は図の上端が縄かけ部分で折損していて、後面を平坦に加工している。1292は半裁材を使い面を持たせている。図の下端に頭部を作り全面からも削って薄くしている。1294も1292と同様に頭部を全面から削っているが、1292よりも材に厚みがあるので斜めにとがらせる形になっている。後面は中央に稜を持つようにして平坦加工している。1297は1283と形状が似ていて杖のような形をしているが、1283よりも長くレの字に加工した段々がある点が異なる。図の上部では枝分かれの部分を利用して幅を広くとり、以下下端に向け細く加工している。全長64.3cm幅6.6cm厚さ2.8cmである。1301は端部の下にレ字状の欠込を施し頭部とする。1302は両端を欠損しているが、端部付近のみに加工を施しているが、枝の根元が残るなど加工が雑で、未成品の可能性もある。1303は図の上端がレ字状の加工部分で折れている。中間に3面から削り込んだ縄かけがあって、後面を平坦に加工している。



第194图 加工棒(9)

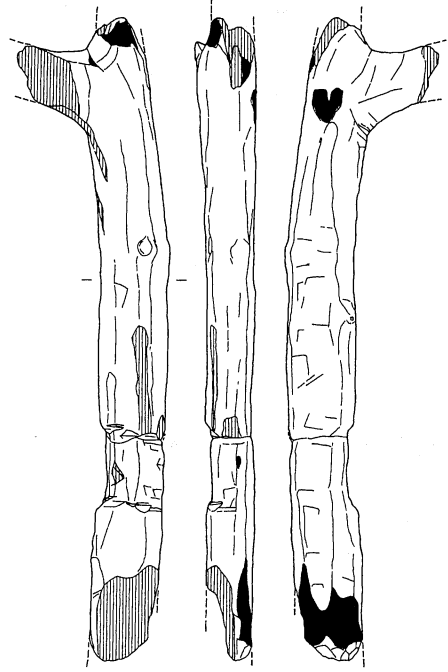
14. 用途不明品



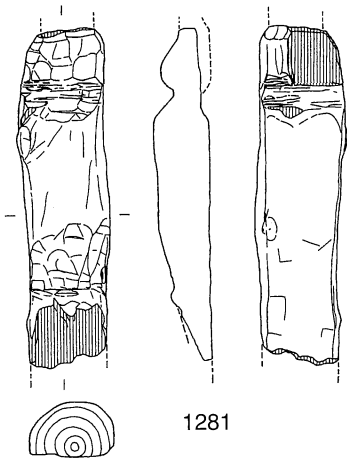
第195图 加工棒(10)



1280



1282



1281

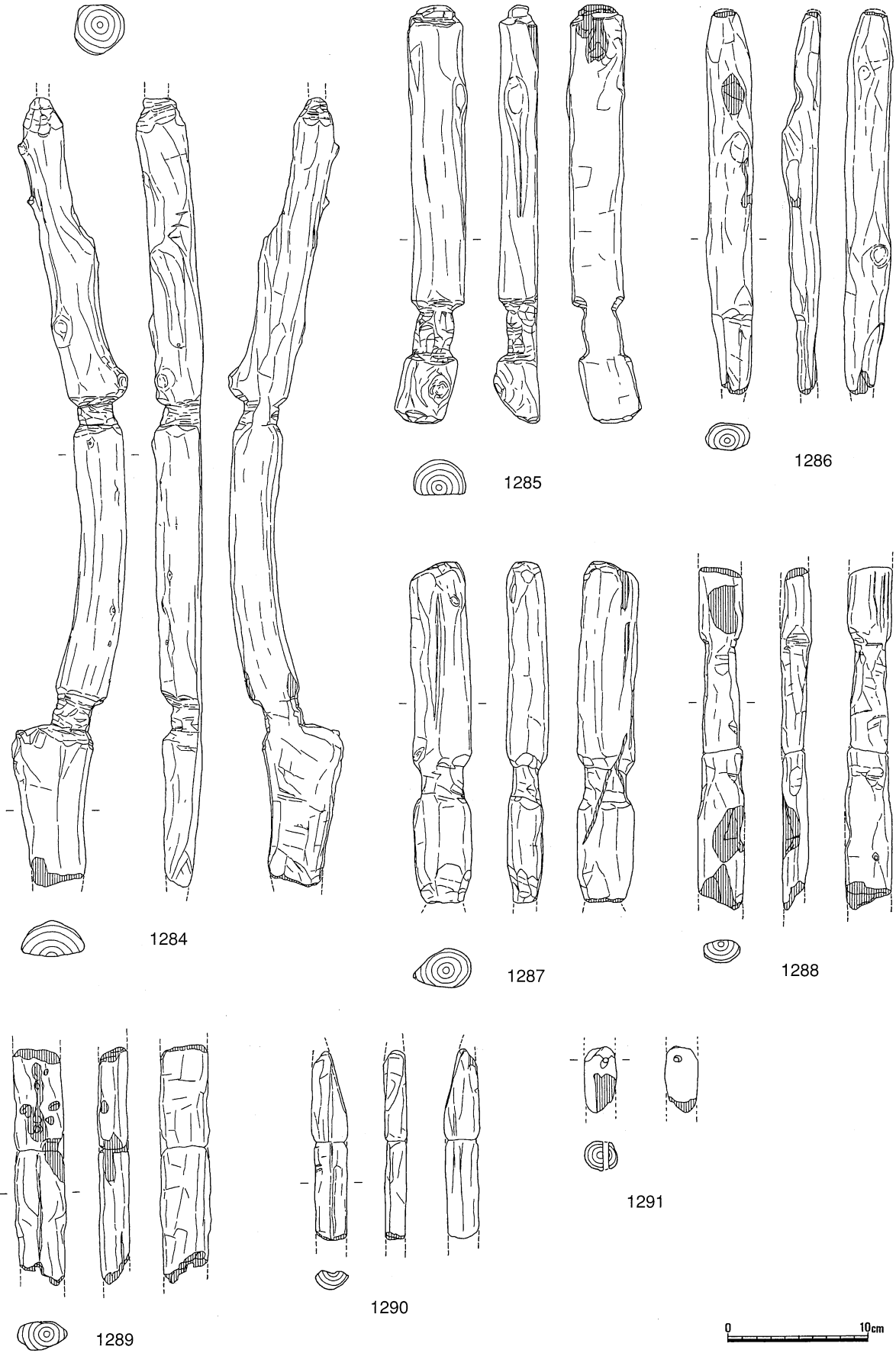


1283

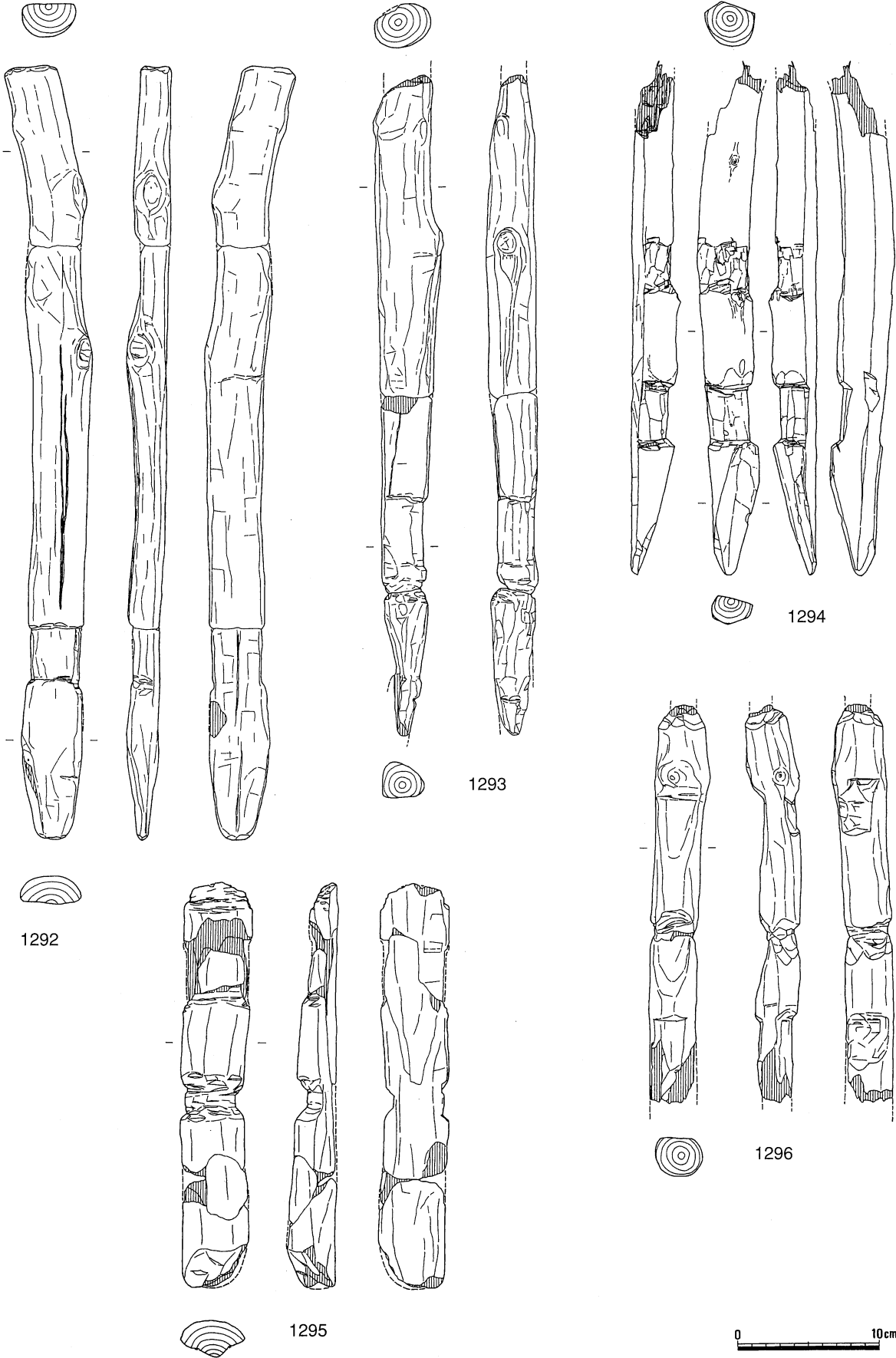


第196图 加工棒(11)

14. 用途不明品

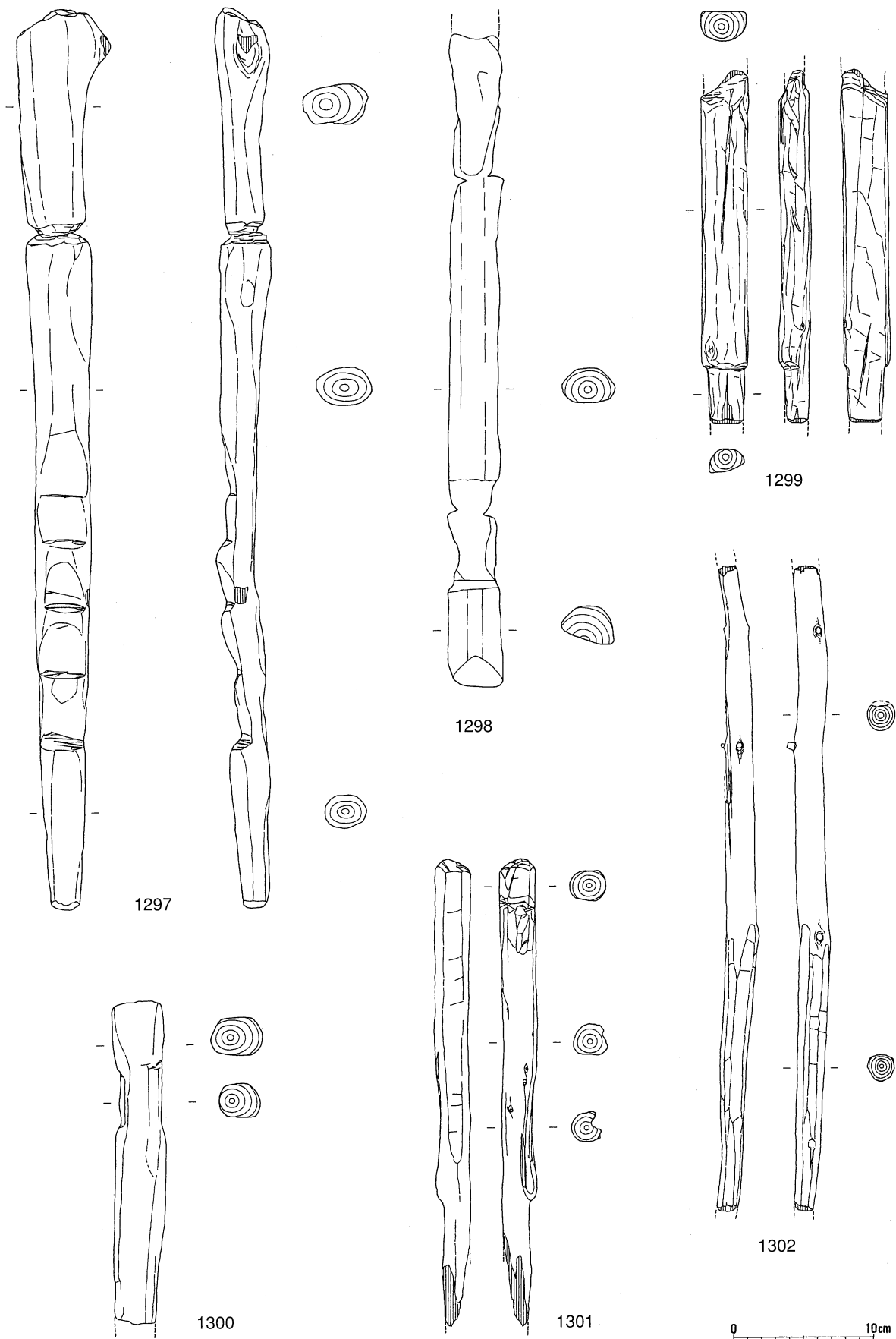


第197图 加工棒(12)

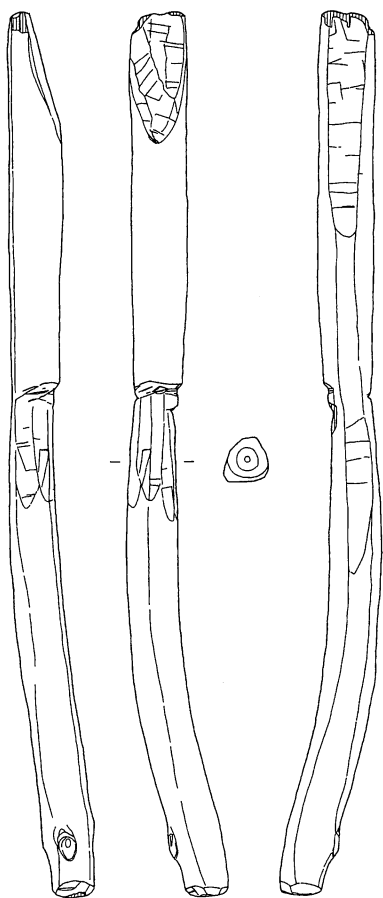


第198图 加工棒(13)

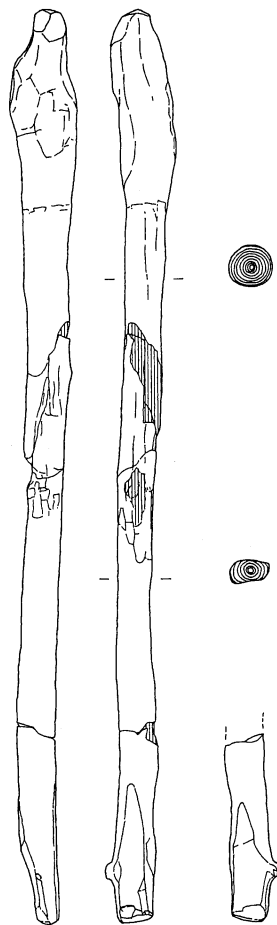
14. 用途不明品



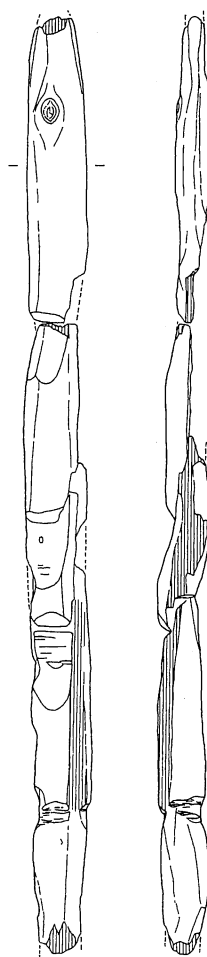
第199图 加工棒(14)



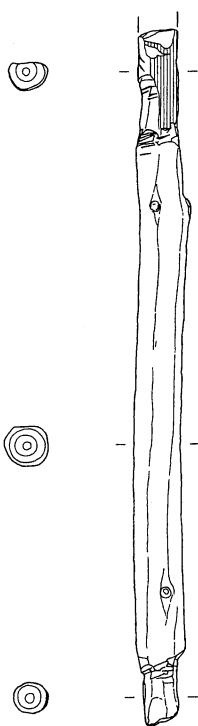
1303



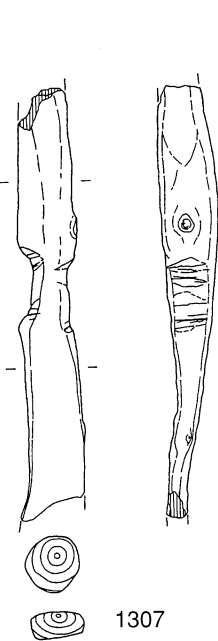
1304



1305



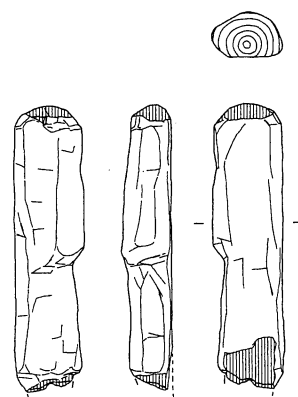
1306



1307



1308

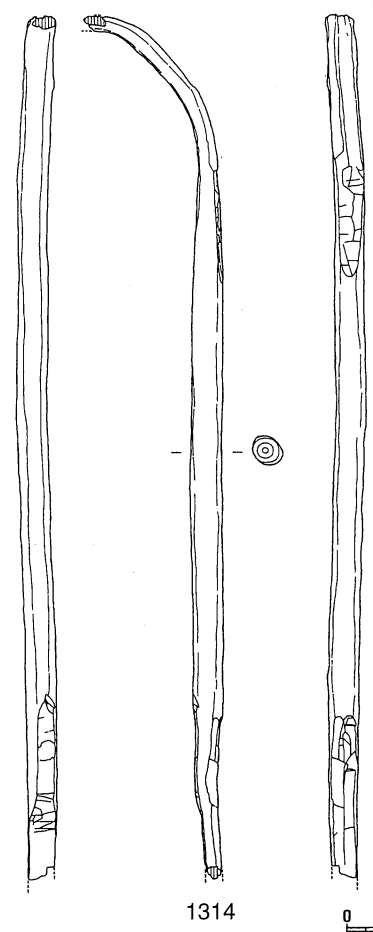
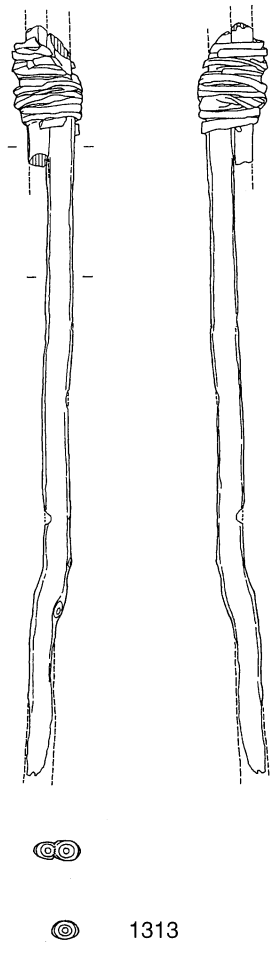
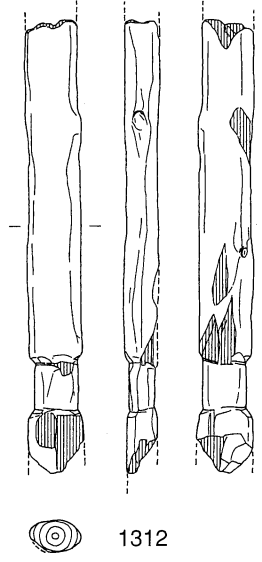
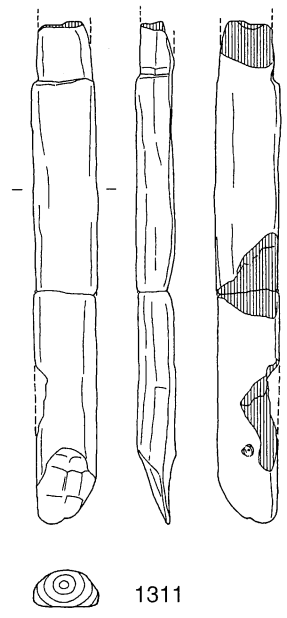


1309



第200图 加工棒(15)

14. 用途不明品

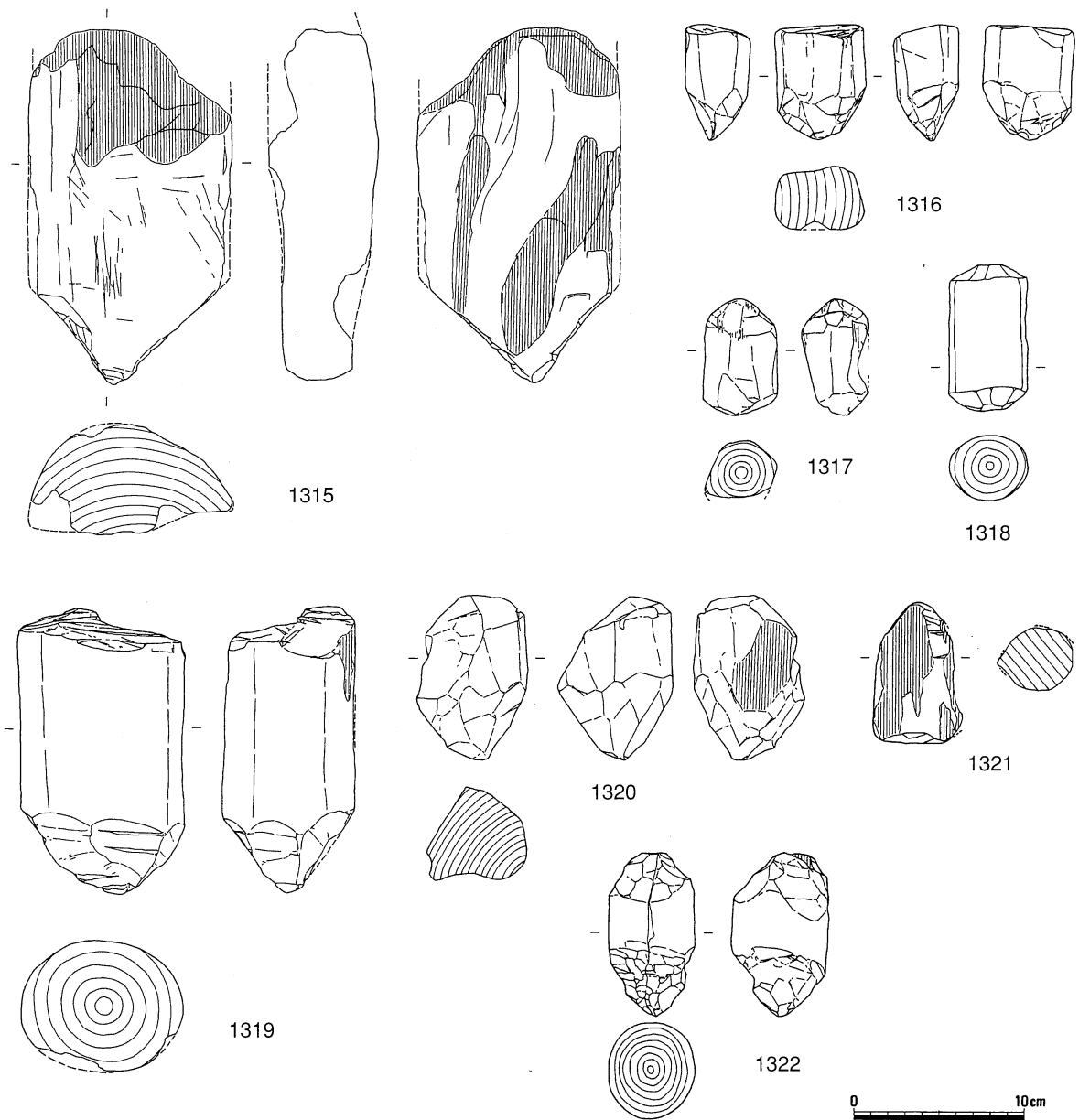


第201図 加工棒(16)

1310は下部の縄かけから下を細くしている。下端面は加工が雑で、切断痕がそのまま残る。樹皮が残存していて、後面を平坦加工している。1313は両端が折れているので全形は不明だが、あわせ面に平坦な加工を施し2本の棒をつる状の紐を巻き付けている。1314は端部を両側から薄く加工していて、片側はU字形に曲がった部分で折れている。心持ち材で残存長68.9cm幅2.6cm厚さ2cmである。

残核

両端に切断痕跡が残ったもので、片側が平坦で反対側が鉛筆状にとがったコマの形をしたものが多い。何らかの製品の未成品ともみられるが、見合う製品がわからず、必要部分を切り取った残核状の残材とみておきたい。



第202図 残核

14. 用途不明品

註

- (1) 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始編』 奈良国立文化財研究所史料第36冊
- (2) 山田昌久 2003 『考古資料大観8』 弥生・古墳時代 木・繊維製品
- (3) 町田 章 1985 「木製容器」『弥生文化の研究5』 道具と技術。
- (4) 岡山市教育委員会 1997 『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1995 (平成7年度)』
- (5) 瀬垣田佳男 1999 「伐採石斧の柄」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集』
- (6) 註5に同じ
- (7) 樋上 昇 2000 「「木製農耕具」ははたして「農耕具なのか」－新たな機能論的研究の展開を考える－」『考古学研究』第47巻第3号
- (8) 樋上 昇 1993 「木製農耕具研究の一視点」『考古学フォーラム』3 考古学フォーラム
- (9) 村上由美子 1996 「杵と臼の変遷について」『滋賀考古』15 滋賀考古学研究会
- (10) 兵庫県教育委員会 1996 『玉津田中遺跡』第5分冊
- (11) 小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡。』
- (12) 神谷正弘氏は「札甲」、橋本達也氏は「綴合せ式」を用いる。ここでは、「一木」に対する「組合せ」を採用する。
神谷正弘 1996 「襦褌式木甲について」『下田遺跡』 財団法人大阪府文化財調査研究センター
橋本達也 1996 「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』 雪野山古墳発掘調査団
- (12) 国立歴史民俗博物館により復原された。国立歴史民俗博物館 1996 『倭国乱る』
- (13) 調査時の見解は桑原久男氏に紹介していただいた。桑原久男 1999 「銅鐸と武器の祭り」『古代史の論点5 神と祭り』
- (14) 島根県土木部河川課 島根県教育委員会 1989 『西川津遺跡発掘調査報告書V』
- (15) 浅岡俊夫 1997 「多枝付木製品考－蓋骨の再検討－」『立命館大学考古学論集I』
- (16) 註11に同じ。
- (17) 財団法人鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4』
- (18) 福岡市教育委員会 1995 『雀居遺跡3』
- (19) 山田昌久氏は杓・さじ・釣瓶などの総称としてすくい具を用いている。本来用語の混乱はさけるべきであるが、他に適当な用語が見あたらないので、当面すくい具を用いることとする。山田昌久 註2文献
- (20) 芋本隆裕氏は民具との類似から「もみすくい」とされている。財団法人東大阪市文化財協会 1987 『鬼虎川の木質遺物』
- (21) 註15に同じ。
- (22) 宮城県中在家南遺跡から類例が出土している。仙台市教育委員会 1996 『中在家南遺跡他』
- (23) 上原真人氏が可能性を指摘されている。註1文献。
- (24) 山田昌久 2002 「組合せ式針葉樹製鋤の再検討」『月刊考古学ジャーナル』486号
- (25) 註17に同じ。
- (26) 村上由美子 2002 「木製楔の基礎的論考」『史林』85巻4号

木器観察表

() は残存値 cm

番号	登録番号	種類	横種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
1	W7139	斧直柄		柱目			(48.5)	7.3	-	3.5	未成品。柄の途中で折損。
2	W7141	斧直柄		柱目			76.9	9.2	-	3.7	未成品。頭部下面を加工中。
3	W5356	斧直柄	アカガシ亜属	柱目	F 5・6・sec 1	貝・中 3②	59.6	7.8	-	3.5	未成品。装着孔は未加工。柄の端部はわずかに隆起。
4	W0120	斧直柄	アカガシ亜属	柱目	河 3	砂中	(11.7)	7.0	-	4.9	装着孔から上の破片。
5	W5264	斧直柄		柱目	F	河・中付近	(20.9)	(5.6)	-	(2.4)	装着孔から下部の破片。
6	W5181	斧直柄		柱目	G・S D550		(21.5)	(8.9)	-	5.2	伐採用石斧柄の頭部の破片。全体に炭化。
7	W5578	斧直柄		柱目	E 3	河・中 5	(19.5)	6.2	-	4.4	装着孔は一方に細くなる。柄は焼損。
8	W0092	斧直柄	アカガシ亜属	柱目	河 1	14	(11.3)	6.7	-	(6.6)	装着孔から上の破片。
9	W5446	斧直柄	アカガシ亜属	柱目	B	14・下	(56.4)	(6.0)	-	(4.0)	装着孔から上部を欠損。
10	W0201	斧直柄		柱目	河 1	14	(42.3)	4.5	-	2.4	握りの基部側の破片。
11	W0095	斧直柄	アカガシ亜属	柱目	河 1	14	(46.9)	(5.4)	-	(4.2)	装着孔のやや下から握り基部の破片。
12	W0053	斧直柄	アカガシ亜属	柱目	河 1	14	(43)	7.5	-	6.2	伐採用石斧柄の頭部から中程までの破片。基部を欠く。
13	W5397	斧直柄		柱目	E 1~4	河・最下砂	(9.2)	(6.3)	-	-	頭部先端部の破片。
14	W0091	斧直柄		柱目	河 1	14	(12.6)	7.0	-	4.5	装着孔から上の破片。握り側の割れ口は再加工痕がある。
15	W5323	斧直柄		柱目	F 2	河・下・下	(26.6)	(4.3)	-	(4.1)	装着孔下端から柄にかけての破片。
16	W0094	斧直柄	アカガシ亜属	柱目	河 1	14	(51.7)	(6.3)	-	(3.6)	装着孔から握り部の破片。握り端は丸く加工している。
17	W0052	斧膝柄	アカガシ亜属	柱目	河 1	14	38.6	15.6	-	3.6	斧身と柄は別造り。樹種は同じ。
18	W6169	斧膝柄		枝分かれ	D・S D162	下	47.0	(8.5)	-	3.0	斧台はほとんど欠損。
19	W6349	斧膝柄		又部	B	14・下	(12.5)	(3.9)	-	2.2	柄を根元から欠損。装着面は残存長2.2cm幅2.2cmである。
20	W5396	斧膝柄		枝分かれ	E 1~4	河・最下砂	(30.7)	17.2	-	3.3	未成品。柄の一部に腐皮残存。加工痕明瞭。自在鉤の可能性もある。
21	W5395	斧膝柄		枝分かれ	E 1~4	河・最下砂	(24.3)	22.1	-	3.5	未成品。斧台の長さ22.2cm、装着面は長さ4.8cm幅4.5cm。
22	W5463	斧膝柄		枝分かれ	F 3・4	河・下・上	(6.4)	6.5	-	1.8	柄は欠損。斧台は長さ10.6cm幅2.2cm厚さ1.2cm。加工痕は明瞭。
23	W5102	斧膝柄	サカキ属	枝分かれ	F 3・4	河・下・下	(20)	5.8	-	0.9	細部加工用の手斧の柄。装着面は長さ1.8cm幅0.8cm。
24	W6114	斧膝柄		柱目	E 5	河・下・上 2	(10.8)	(2.8)	-	(2.1)	縦半分に割れ、装着部欠損。
25	W5632	斧膝柄		枝分かれ	F 1	河・下・上(東)	12.5	10.8	-	4.0	装着部は欠損。
26	W6080	斧膝柄		枝分かれ	B	14・下	(5.0)	(14.9)	-	3.4	斧台先端と柄を欠く。
27	W5103	斧膝柄	コナラ節	枝分かれ	E 3	河・中 5	21.6	9.0	-	2.0	やや縦長で卵形の斧台に長さ2cm幅1cmほどの装着部が付く。
28	W5208	斧膝柄		枝分かれ	C	14・下	(23.7)	(12.2)	-	2.0	柄の基部や斧台の先端欠損。装着部は現存長5cm幅2.5cm厚さ1.2cm。
29	W5104	斧直柄	サカキ属	枝分かれ	E~G	河道埋土	(21.7)	10.6	-	2.0	未成品？斧台の先端を欠損。装着部は幅2.8cm厚さ1.4cm。
30	W6053	斧膝柄		枝分かれ	F 8	河・中 4~5 対応・上	(33.7)	(5.5)	-	(1.0)	未成品？装着面を明瞭に作り出していない。
31	W5340	斧膝柄		枝分かれ	トレンチ 1・2	13~14	(17.1)	2.6	-	1.7	斧台は残りが悪く、装着部はやせている。
32	W5369	斧膝柄		枝分かれ	F 7・8	河・中 4 対応	(21.5)	18.9	-	2.1	柄を欠損。斧台は長さ19cm、装着部は長さ9.7cm幅5.3cm厚さ0.8cm。
33	W0054	斧直柄	サカキ	枝分かれ	河 1	14	(22.1)	(10.3)	-	3.7	握り基部を欠損。
34	W0027	のみ形	サカキ	心持ち	河 1	14	18.1	2.9	-	1.5	握り部は長さ9.6cmで2.8×2cmの楕円形。
35	W5308	直柄広鋏		柱目	E 5	貝・上	42.5	(18.4)	-	4.1	未成品。
36	W5526	直柄狭鋏		柱目	E 2	河・下・上	36.8	18.7	-	5.1	未成品。分割成形で厚さをそろえた段階。
37	W5444	直柄狭鋏	アカガシ亜属	柱目	B	14・下	42.8	14.6	-	3.0	未成品。柄孔未貫通。
38	W5307	直柄広鋏		柱目	E 5	貝・上	44.1	26.1	-	5.7	未成品。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
39	W7077	直柄広楎		板目			34.1 (34.1)	19.5 (6.8)	-	5.8	広楎分割成形未成品。
40	W5728	直柄諸手楎		板目	D	河3・上	(25.0)	(8.0)	-	2.2	縦割れした右側の破片。一方の刃部を欠く。内湾側に舟形隆起あり。
41	W5729	直柄諸手楎		板目	D	河3・上	(35.0)	(8.0)	-	5.0	中央部の破片。内湾側に舟形隆起あり。
42	W5494	直柄諸手楎		板目	トレンチ5	河道埋土	(33.0)	11.2	-	4.7	柄孔の下から焼損。舟形隆起あり。
43	W5374	直柄狭楎		板目	F 7・8	河・中4対心	33.0	9.0	-	2.8	ほぼ完形品。着柄孔の周囲は徐々に厚くなる。加工痕は比較的明瞭。
44	W0049	直柄狭楎	アカガシ亜属	板目	河1	14	32.0	(11.5)	-	1.0	柄付き。柄はクスノキ科クスノキ。復原幅13cm。
45	W0191	直柄狭楎		板目	河1	14	29.6	11.8	-	0.8	後面左肩部と右側部が炭化。柄孔は隅丸方形。
46	W5684	直柄狭楎		板目	F 7	河・中4~5	(24.95)	(6.7)	-	(2.15)	ほぼ完形。着柄孔は方形に近く、2.2cm四方。着柄隆起は緩い。
47	W0124	直柄狭楎		板目	河3	砂中	(27.3)	(8.6)	-	1.6	右1/3と刃部を欠損。
48	W6038	直柄狭楎		板目	F 8	河・中5	23.4	7.8	-	2.7	ほぼ完形品。平面は刃縁が狭くなる三角形。柄孔は方形。
49	W6203	直柄狭楎		板目	B	14・上	30.3	6.0	-	1.3	ほぼ完形品。着柄隆起は無し。
50	W5348	直柄狭楎		板目	F 6・sec 1	貝・中3①	26.1	9.2	-	2.2	柄孔は円形。着柄隆起は周囲から徐々に厚くなる。
51	W5924	直柄広楎		板目	B・北壁	14	19.3	(10.8)	-	2.2	ほぼ完形の狭楎。着柄隆起はごく緩い。
52	W5225	楎直柄	シイ属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	97.2	3.0	-	2.4	断面円形ではほぼ完形。
53	W5226	直柄広楎	アカガシ亜属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	25.4	14.4	-	3.6	上端には着柄隆起上方に方形突起を持つ。
54	W5227	泥除	アカガシ亜属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	(6.0)	(21.3)	-	0.8	鍍53に付属。上半部の破片。
55	W5362	直柄広楎		板目	F 3・4	貝・中3~4・有機	(23.2)	(4.0)	-	1.4	着柄孔周囲の破片。
56	W5228	楎直柄	アカガシ亜属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	102.8	2.9	-	2.0	断面楕円形で、ほぼ完形。57に付属。
57	W5229	直柄広楎	アカガシ亜属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	24.8	(11.8)	-	2.6	着柄隆起は刃部手前まで。着柄孔側方に方形孔を持つ。
58	W5230	泥除	アカガシ亜属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	(9.3)	(23)	-	1.3	57に付属。59と同一個体。基部側破片。
59	W5234	泥除	アカガシ亜属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	(19.8)	(28.4)	-	1.2	先端側の破片。58と同一個体。下端中央に小孔がある。
60	W6439	直柄広楎		板目		上	(19.3)	(7.2)	-	(1.3)	柄孔から下半部の破片。着柄隆起ははがれ落ちている。一部炭化。
61	W0168	直柄広楎		板目	河3	上	(15.3)	(15.5)	-	2.5	刃部端から1.6cmのところに段あり。
62	W5129	直柄広楎		板目	F	河・上	21.8	17.2	-	2.8	刃部には段を持つ。着柄隆起は刃部の段にまで及ぶ。
63	W5130	泥除		板目	F	河・上	(20.9)	(20.8)	-	0.4	62に付属する。
64	W5790	直柄広楎		板目	F	河・最下砂	(31.8)	(17.3)	-	(4.1)	着柄隆起から右側部は炭化が著しい。柄孔には柄が残存。
65	W5231	楎直柄	シイ属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	95.2	2.8	-	1.6	ほぼ完形。断面は楕円形。66に付属。
66	W5232	直柄広楎	アカガシ亜属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	23.1	12.5	-	3.1	左側1/3を欠損。横方向に変形。前面には泥除装着装置あり。
67	W5233	泥除	アカガシ亜属	板目	E 3	河・中2~3・集積1	(9.3)	(23.0)	-	1.3	鍍66に付属する。基部側の破片で、153と同一個体の可能性あり。
68	W0122	直柄広楎		板目	河3	砂中	(12.0)	(4.4)	-	(4.1)	着柄隆起部の破片。
69	W0057	直柄広楎		板目	河1	14	(10.7)	(5.1)	-	(2.0)	着柄隆起部の破片。
70	W5886	直柄広楎	エノキ属	板目	F 3・sec 1	貝・上2・B	(22.5)	17.0	-	0.9	上端は平坦で頭部側面内湾。着柄隆起はやや低め。柄孔右側方に円孔1。
71	W0050	直柄広楎		板目	河1	14	(25.5)	(6.6)	-	1.0	身の中央部の破片。両側部及び上端部を欠く。
72	W5077	直柄広楎	アカガシ亜属	板目	B	14・上	24.6	(13.5)	-	2.2	やや低い着柄隆起を持つ。前面には泥除装着装置を持つ。
73	W0071	直柄広楎	アカガシ亜属	板目	河1	14	25.8	(10.2)	-	0.7	縦割れした右半部の破片。着柄隆起剥落。肩部に緊縛孔あり。
74	W5330	直柄広楎	アカガシ亜属	板目	F 7	河・下	38.6	19.6	-	4.0	未成品。柄孔はない。刃縁中央は突起状に残存。泥除装着装置なし。
75	W5966	直柄広楎		板目	E・トレンチ6	河・中5~貝	27.3	(14.9)	-	2.7	上端に楕円形の孔。着柄隆起は刃縁付近に達する。泥除装着装置あり。
76	W5339	直柄広楎		板目	トレンチ1・2	13~14	26.0	(12.5)	-	1.9	泥除装着装置上下に方形孔。刃縁に段。
77	W5703	直柄広楎	アカガシ亜属	板目	E 1	河・中2・低上	24.4	18.9	-	1.0	完形品。上端面に着柄隆起に接する台形状の欠込。両肩欠き落し。刃縁に段。
78	W6040	直柄広楎	アカガシ亜属	板目	F 8	河・中5	(26.7)	(16.4)	-	(3.1)	上端中央に着柄隆起に接する幅1.8cmの切り込み。泥除装着装置なし。
79	W5418	直柄広楎		板目	F 2	河・下・上	(25.5)	(16.8)	-	(1.2)	柄孔から上部を欠損。柄孔横に円孔あり。刃部の加工痕明瞭。
80	W5131	直柄広楎		板目	トレンチ5	河道埋土	36.8	(18.2)	-	2.6	着柄隆起は上下に尖る舟形。泥除装着装置はない。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
81	W5417	直柄広楎	アカガシ亜属	柾目	F 2	河・下・上	35.8	16.7	-	3.1	完形。加工痕明瞭。泥除装着装置を持たない。
82	W6138	直柄広楎		柾目	F 7	河・中5	24.7	21.7	-	1.6	一方が細くのびる着柄隆起は短く低い。泥除装着装置あり。
83	W0167	直柄広楎		柾目	河 3	上	24.4	18.5	-	0.6	未成品。刃部端1.5cmの所に幅2.2cm高さ1cmの突起。泥除装着装置あり。
84	W5600	直柄横楎		柾目	G	河・中2・低下	(8.7)	(21.3)	-	(3.2)	方形孔があつて周囲の厚みが薄す。
85	W5283	直柄又楎		柾目	G	河・最下	(8.2)	(4.8)	-	1.6	方形の着柄孔を持つ。刃の根元は1つ残存。
86	W5201	直柄又楎		柾目	C	14・下	(7.2)	(6.9)	-	1.8	方形の着柄孔をもつ小型の又楎。刃部を欠いた1/2程度の破片。
87	W5241	えぶり		柾目	E 3	河・中2~3,集積1	7.9	(32.3)	-	1.5	両端欠損。一端は細く、山形の歯が3つ残る。
88	W5919	えぶり		柾目	B・北壁	14	(20.7)	4.8	-	1.5	低い山形の歯が残る。
89	W5200	えぶり		柾目	C	14・下	8.4	38.3	-	1.3	約1.5cm角の小さな方形柄孔が2つ付く。
90	W0051	直柄横楎	アカガシ亜属	柾目	河 1	14	17.9	18.8	-	1.9	完形。着柄孔は隅丸方形。
91	W0166	直柄横楎		柾目	河 3	上	(12.4)	(18.2)	-	3.2	刃部は欠損。後面中軸に稜を持つ。
92	W5690	曲柄平楎		柾目	F 7	河・中4~5	58.5	8.2	-	1.25	完形品。
93	W6416	曲柄平楎		柾目	B	14・下	(60.2)	(12.7)	-	0.6	軸頭を欠損。刃縁は丸。
94	W0064	曲柄平楎	アカガシ亜属	柾目	河 1	14	36.2	10.3	-	1.8	着柄軸中央部から頭部に向け徐々に幅を狭め、頭部に僅かな段をもつ。
95	W0194	曲柄楎		柾目	河 1	14	(15.5)	(6.0)	-	0.9	着柄軸部の破片。
96	W0078	曲柄楎		柾目	河 1	14	(11.9)	(5.6)	-	1.3	着柄軸部の破片。
97	W0076	曲柄楎		柾目	河 1	14	(10.5)	9.0	-	1.2	着柄軸部の破片。割れ口に加工あり。
98	W5483	曲柄楎		柾目	F 5	貝・下2	21.6	6.6	-	1.0	曲柄楎の肩部から上を再加工。
99	W5419	曲柄楎		柾目	F 2	河・下・上	(40.7)	(8.6)	-	1.5	軸頭下部・中位に紐かけ。肩部直上に緊縛痕。
100	W5456	曲柄楎		柾目	E 3・4	河・下・上	(34.4)	(11.8)	-	1.0	着柄軸頭部は平面算盤玉形。刃部を欠損。
101	W5416	曲柄平楎		柾目	F 2	河・中5	(34.6)	10.0	-	1.3	刃部の破片。加工痕残る。
102	W0062	曲柄平楎		柾目	河 1	14	45.9	(8.5)	-	1.4	着柄軸に段を2箇所持つ。身の右側部を欠く。
103	W5567	曲柄楎		柾目	E	河・上・右縁	(17.8)	7.8	-	1.1	先端及び柄を欠損。種や握り棒の可能性あり。
104	W6420	曲柄楎		柾目	B	14・最下	(44.1)	(6.4)	-	1.4	右側の破片。刃部先端を欠く。
105	W6326	ナスビ形楎		柾目	B	14・下	(41.45)	(10.75)	-	1.0	着柄軸先端と刃部先端を欠く。土圧による変形が見られる。
106	W5435	ナスビ形楎	アカガシ亜属	柾目	B	14・下	(41.4)	(12.0)	-	1.0	着柄軸上半を欠損。
107	W6056	ナスビ形楎		柾目	F 8	河・中4~5対芯上	(25.8)	(10.4)	-	(1.0)	着柄軸頭部と刃部の大半を欠く。
108	W0063	曲柄平楎		柾目	河 1	14	39.0	10.3	-	1.8	軸部には緊縛の段や挟り込みを持たない。加工痕明瞭。
109	W6039	曲柄平楎	アカガシ亜属	柾目	F 8	河・中5	(40.9)	(12.2)	-	(1.4)	着柄軸頭部は台形状態で紐かけなし。肩部上に紐かけ。
110	W5420	曲柄楎		柾目	F 2	河・下・上	(35.7)	(4.6)	-	1.2	縦割れした左側の破片。明瞭な紐かけなし。加工痕明瞭。
111	W0077	曲柄楎		柾目	河 1	14	15.4	(5.6)	-	1.3	着柄軸頭部の破片。割れ口加工あり。装着面は特に平滑。
112	W5324	曲柄楎		柾目	F 2	河・下・下	(23.9)	(5.0)	-	1.1	着柄軸は幅4cmで側面は直線的。紐かけはなし。
113	W5387	曲柄平楎		柾目	E 2	河・下・下	(23.2)	11.7	-	0.7	曲柄楎刃縁の破片。
114	W5329	曲柄平楎	アカガシ亜属	柾目	F 7	河・下	49.3	11.0	-	1.1	完形の未成品。軸部側面直線的で、頭部は台形状。紐かけはなし。
115	W0065	曲柄二又楎	アカガシ亜属	柾目	河 1	14	(42.0)	(13.2)	-	1.4	着柄軸頭部を欠く。
116	W5449	曲柄二又楎		柾目	F 7・8	河・最下砂	46.1	(6.2)	-	1.7	着柄軸には明瞭な紐かけを持たない。又部は尖形。
117	W0061	曲柄二又楎		柾目	河 1	14	(56.3)	(14.0)	-	0.9	軸頭には側面から削って幅を狭め紐かけとす。側面及び又部に加工痕あり。
118	W6071	曲柄二又楎		柾目	G 1・2	河・下・下	(34.6)	(5.4)	-	1.0	縦割れした右側の破片。刃部先端を欠く。
119	W5662	曲柄二又楎	アカガシ亜属	柾目	E 5	貝・中3・A	(41.8)	(6.0)	-	1.0	着柄軸から刃部の右側破片。ややなで肩。
120	W0072	曲柄二又楎		柾目	河 1	14	(32.5)	(7.8)	-	1.2	又部の破片。着柄軸部先端や刃部を欠く。
121	W6134	曲柄二又楎		柾目	F 7	河・中5	(48.5)	(5.1)	-	1.0	着柄軸は長い菱形状。縦割れした右半分の破片。
122	W0075	曲柄二又楎		柾目	河 1	14	(24.8)	(6.8)	-	1.0	着柄軸には突起を持たない。一部炭化。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴	
123	W5041	曲柄鋏		柱目	C	河3・上	(33.9)	(10.5)	-	1.0	頭部に紐かけ用の溝を作り、軸部下端側面には緊縛痕がある。	
124	W0241	曲柄二又鋏	アカガシ亜属	柱目	河3	下	(32.7)	(10.5)	-	1.2	着柄軸部にはほぞ孔と穿孔途中のものあり。又部の形状は角。	
125	W5083	ナスビ形二又鋏	アカガシ亜属	柱目	A	河4・下	51.5	13.6	-	1.0	左刃部先端を欠く。着柄軸頭部には紐かけなし。	
126	W5490	ナスビ形二又鋏		柱目	トレンチ5	河道埋土	(49.6)	12.5	-	1.0	基部と刃部先端を欠損。全体に表面の残りが悪い。	
127	W5529	ナスビ形二又鋏		柱目	F	12-1	(54.5)	13.1	-	1.3	基部欠損。又部から下42.5cmの長さ。	
128	W6417	ナスビ形二又鋏		柱目	B	14・最下	(42.35)	(6.9)	-	1.0	着柄部と刃部の境に横突起を持つ。	
129	W5973	ナスビ形二又鋏		柱目	E・トレンチ6	河・中5~具	(44.2)	(12.2)	-	(0.9)	着柄軸頭部を欠く。又部は丸型。	
130	W5975	曲柄二又鋏		柱目	E・トレンチ6	河・中5~具	(33.4)	(9.5)	-	(0.6)	着柄軸は先端に向け細くなる。端部は紐かけの浅い段あり。又部は角型。	
131	W5052	ナスビ形鋏		柱目	D	河3・下・有機	(29.1)	(4.6)	-	1.2	ナスビ形の曲柄鋏の軸部左1/2程度の破片。	
132	W6172	曲柄二又鋏		柱目	D・SD162	下	(32.5)	9.9	-	0.7	軸部から又部にかけての破片。	
133	W5799	ナスビ形二又鋏		柱目	F1	河・中2・低下	(33.3)	(4.5)	-	(1.3)	着柄軸頭部と左側半分を欠く。	
134	W0070	ナスビ形二又鋏		柱目	河1	14	(27.7)	(6.0)	-	1.0	着柄部から刃にかけての破片。	
135	W0073	曲柄二又鋏		柱目	河1	14	(21.6)	(7.8)	-	1.2	又部付近の破片。刃部及び基部を欠く。	
136	W5941	曲柄平鋏		柱目	F7	河・中4~5	(44.0)	5.0	-	1.0	長軸に沿って割れた破片。紐かけや肩を持たない。	
137	W6325	曲柄二又鋏		柱目	B	14・下	(48.8)	(5.4)	-	1.1	身の右側半分と着柄軸の頭部を欠く。着柄軸側面は直線的。なで肩。	
138	W0169	ナスビ形二又鋏		柱目	河3	上	(27.5)	(5.8)	-	1.0	ナスビ形の右半分の破片で、軸部と刃先を欠損。	
139	W0192	曲柄二又鋏		柱目	河1	14	(39.5)	(6.4)	-	0.9	左側の破片。	
140	W5341	曲柄二又鋏		柱目	トレンチ1・2	13~14	(29.2)	(5.1)	-	0.7	右側の破片。	
141	W0083	曲柄二又鋏		柱目	河1	14	(19.3)	(5.5)	-	0.8	又鋏の刃先の破片。先端部をわずかに欠損。	
142	W5552	曲柄鋏		柱目	F6・sec1	具・中3④	(14.9)	(10.6)	-	1.6	未成品。	
143	W6329	曲柄鋏		柱目	B	14・下	(13.9)	(5.25)	-	1.0	着柄軸上端の破片。中央に2cm角で貫通しない穴がある。	
144	W6328	曲柄鋏		柱目	B	14・下	(15.7)	(5.55)	-	1.1	着柄軸上端の破片。紐かけはなし。	
145	W5196	曲柄鋏		柱目	A	14・上	(18.4)	(5.9)	-	1.4	曲柄鋏軸部の破片。	
146	W0069	曲柄二又鋏		柱目	河1	14	(42.4)	(6.0)	-	1.0	着柄部と刃部の2破片だけが接合しない。	
147	W6336	曲柄鋏		柱目	B	14・下	(11.5)	(5.45)	-	1.2	着柄軸から刃部にかけての破片。	
148	W6207	ナスビ形鋏		柱目	B	14・上	(21.6)	(5.0)	-	1.1	着柄軸から刃部にかけての破片。	
149	W5945	曲柄二又鋏		柱目	F7	河・中4~5	(25.0)	(3.4)	-	1.0	曲柄又鋏の破片を再加工している。	
150	W0195	曲柄二又鋏		柱目	河1	14	(23.1)	(4.1)	-	1.3	二又か？左側部の破片。	
151	W5987	泥除	アカガシ亜属	柱目	F3・sec1	具・上2・B	(30.3)	35.0	-	1.5	未成品。柄孔なし。	
152	W5534	泥除	アカガシ亜属	柱目	E4	河・中2・有機	29.1	29.3	-	3.8	未成品。内面の粗い加工痕跡は明瞭。	
153	W5235	泥除	アカガシ亜属	柱目	E3	河・中2~3・集積1	(15.7)	(27.0)	-	1.0	先端側の破片。67と同一個体か。	
154	W5236	泥除	アカガシ亜属	柱目	E3	河・中2~3・集積1	(18.7)	26.2	-	0.7	先端側の破片。	
155	W5492	泥除		柱目	トレンチ5	河道埋土	(11.0)	(21.8)	-	1.0	基部側1/2程度の破片。木釘が残る。	
156	W5293	泥除		柱目	E4	河・中5・下	(24.0)	(12.1)	-	1.7	紐かけ孔が右上部に1つ左上部に2つある。柄孔から折損。	
157	W0199	泥除		柱目	河1	14	(11.5)	26.5	-	1.2	下半部欠損。下縁に補修孔2つ。外面の柄孔の上に紐を持つ。柄断面円形。	
158	W5027	泥除		柱目	横木取り	B	14・上	21.9	8.8	-	0.7	下半部欠損。両肩に円孔。下端に円孔3。
159	W5269	泥除		柱目	C	14・中	(8.8)	(11.0)	-	1.4	基部側の破片。	
160	W5544	泥除		柱目	F6	具・中2対応	(7.1)	(8.6)	-	1.1	破片。	
161	W5491	泥除		柱目	トレンチ5	河道埋土	(11.0)	(24.7)	-	1.3	基部側1/2程度の破片。	
162	W0200	泥除		柱目	横木取り	河1	(10.4)	28.5	-	1.3	外面柄孔上部には紐あり。柄の断面は方形か。	
163	W6397	泥除		柱目			18.7	(29.6)	-	1.2	柄孔から下半の部品。	
164	W7167	組合せ鋏		柱目			61.9	20.0	-	5.6	未成品。	

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
249	W5498	柄		心持ち	トレンチ5	河道埋土	(34.8)	2.4	-	2.3	丁寧な加工を施している。
250	W6356	柄		板目	B	14・下	(16.6)	(3.45)	-	2.2	一端に向け細くなっている。
251	W5295	柄		板目	E4	河・中5・下	(25.3)	3.4	-	2.4	両端欠損。一端は幅が広く断面方形、他端は幅が狭く断面円形。
252	W5702	白	クスノキ	心持ち	E1	河・中2・低上	-	(49.6)	46.8	(6.5)	棧を四方に持つと見られる。
253	W6195	白		板目	D	14・中	-	48.6	(19.7)	(6.7)	棧入り。256と同一個体の可能性あり。
254	W5766	白		板目	F1	河・中2・低下	-	(14.7)	(15.3)	(4.0)	底部の小片で、棧の基部が残る。全体が炭化している。
255	W5195	白		心持ち	A	14・上	-	(37.0)	(40.0)	5.5	接合しない3破片からの復原。棧がつく。
256	W6196	白		板目	D	14・中	-	48.8	(11.7)	(7.5)	棧入り。256と同一個体の可能性あり。
257	W5830	白		板目	B	14・上	-	44.4	(22.5)	(5.5)	上辺の一部と幅6.5cmの棧1本が残る。
258	W5923	白		板目	B・北壁	14	-	(14.5)	(26.6)	(7.5)	底部の小片。
259	W5360	白		板目	F3・4	貝・中3~4・有機	-	(34.2)	(24.3)	(6.5)	底部の破片。復原直径57cm。
260	W0228	小型白	クスノキ	板目	河1	14	-	(17.2)	(9.2)	4.7	直径は復元値、口縁部欠損。
261	W5361	小型白		心持ち	F3・4	貝・中3~4・有機	-	22.6	12.7	10.3	未成品。
262	W5539	小型白		板目	E4	河・中2・有機	-	(18.0)	11.0	4.5	復原口径19.5cm。全周の1/6~1/5の破片。
263	W0233	小型白		心持ち	河1	14	-	(14.0)	(15.7)	6.1	断面楕円形。外面の加工痕顕著。
264	W5193	小型白	ヤブニッケイ	心持ち	A	14・上	-	(20.3)	13.4	6.9	土圧によりやや変形している。
265	W5447	小型白	エノキ属		B	14・下	-	(27.5)	18.9	4.3	1/3程度の破片から復原。
266	W7011	小型白		心持ち	C	14・下	-	21.5	13.5	9.8	ほぼ完形品。
267	W7027	小型白		心持ち			-	(19.4)	12.8	9.0	上端部は欠損。
268	W0150	小型白		縦木取り	河3	下	-	(19.3)	13.4	2.5	口縁部欠損。ほぼ半裁品。底部はほぼ平坦。
269	W5631	小型白		心持ち	F1	河・下・上(東)	-	(15.4)	9.5	2.9	加工痕は内外面とも顕著。
270	W5320	小型白			F5・sec6	貝・中3・B	-	(15.2)	11.0	4.2	搦き面は平滑。土圧による変形あり。
271	W5582	小型白			E3	河・中5	-	(16.5)	6.4	2.2	直径は復原16.5cm。
272	W5284	小型白			G	河・最下	-	(13.0)	(5.0)	(4.0)	1/3程度の破片。
273	W0021	小型白	エノキ	心持ち	河1	14	-	(11.0)	6.7	(4.5)	搦き面の深さ1.6cmのごく浅いタイプ。
274	W0093	堅杵	ツゲ	板目	河1	14	(37.8)	5.0	-	(3.1)	小型品。
275	W5501	堅杵	ツバキ属	心持ち	トレンチ5	河道埋土	(39.1)	(5.0)	-	4.0	握部で折損。
276	W5039	堅杵		心持ち	C	河3・上	(42.2)	7.6	-	7.5	1/2弱の破片で握部を欠く。搦き部は平坦である。
277	W6188	堅杵		心持ち	D	14・中	(54.8)	5.6	-	4.7	握部なかばで折損。
278	W5394	堅杵		心持ち	E2	河・下・下	(41.5)	5.4	-	4.4	握部欠損。節帯を持たない可能性あり。
279	W0003	小型杵	ツバキ	心持ち	河1	14	20.8	2.6	-	2.8	ミニチュア杵の形状。握部には算盤玉形の節帯が付く。
280	W6434	堅杵	ツバキ属	心持ち	B	14・上	134.6	7.8	-	5.5	完形品。
281	W6433	堅杵	ツバキ属	心持ち	E1	河・中2・中	113.6	7.25	-	7.8	完形品。
282	W0001	堅杵	ツバキ	心持ち	河1	14	88.8	5.5	-	5.0	小型の完形品。
283	W0002	堅杵		心持ち	河1	14	(91.8)	7.8	-	6.8	片方の身の大半を欠く。広葉樹を使用。
284	W5784	堅杵		板目	F3	河・下・上	(153.7)	7.5	-	5.7	ほぼ完形品。握部で焼けて2つに別れ接合しない。
285	W5671	横槌	ツバキ属	心持ち	D	河3・上(13・下合)	39.9	7.6	-	7.5	ほぼ完形品。
286	W5243	横槌		心持ち	E3	河・中2~3・糞積1	37.1	7.5	-	5.1	完形品。握部端部は径を大きくする。
287	W0099	横槌	アカガシ亜属	板目	河1	13	30.0	7.0	-	3.0	握りは直径3cmで長さ15.5cm。身と柄の接点の大半を欠く。
288	W5173	横槌		心持ち	B・C	13・下	(22.1)	6.8	-	5.0	握部先端を欠損。
289	W5393	横槌		板目	E2	河・下・下	(24.1)	6.9	-	(2.5)	表面炭化。槌部面取り(割れ?)。
290	W0101	横槌		板目	河1	14	(40.2)	7.5	-	3.2	基部は欠損。身の中央に両面ともに使用痕状のへこみあり。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
291	W5485	横植		心持ち	F	河・上	(28.1)	7.0	-	(7.0)	握部欠損。全体の7割が炭化。
292	W5609	横植		心持ち	F 1	河・中2・低下	(31.0)	6.2	-	4.35	身はやや扁平で握部先端を欠く。
293	W0096	横植	クスノキ属	心持ち	河1	14	(34.1)	(6.0)	-	(4.6)	握部を欠く。
294	W6244	木鎌	アカガシ亜属	柁目	E 3	河・下・上	35.7	13.1	-	0.6	身の上部及び先端をわずかに欠くがほぼ完形。
295	W6428	木鎌		柁目	B	14・最下	(23.6)	(9.5)	-	0.7	柁の基部を欠損。
296	W5289	木鎌		柁目	G	河・最下	(15.6)	11.4	-	1.2	未成品。柁を折損。
297	W6015	木鎌		柁目	F 8	河・下	(12.3)	(8.6)	-	0.9	木鎌の身の破片。
298	W5489	木鎌		柁目	F	河・上	39.8	(3.9)	-	2.2	刃部を根元から欠損。
299	W6427	木鎌		柁目	B	14・最下	(9.8)	(3.9)	-	0.7	鉄鎌の先端状の木製品。
300	W6333	木鎌		板目	B	14・下	(23.5)	(4.8)	-	2.5	未成品。
301	W0100	鉄鎌柄	アカガシ亜属	柁目	河1	14	32.8	2.8	-	1.5	完形品。基部は鉤状に曲がる。
302	W5936	木鎌		柁目	F 7	河・中4~5	(41.4)	14.5	-	2.2	未成品。木鎌とは異なる可能性あり。
303	W5594	木鎌		柁目	D	河3・上	33.9	(10.6)	-	2.3	ほぼ完形品。加工痕は明瞭。柄の先端は内側の拡張。
304	W0037	木鎌	アカガシ亜属	板目	河1	14	34.5	12.3	-	1.6	ほぼ完形品。刃部は両刃で、やや歯こぼれあり。基部はまっすぐ。
305	W5288	木鎌		柁目	G	河・最下	38.8	13.5	-	0.6	完形品。
306	W0056	木鎌	アカガシ亜属	柁目	河1	14	32.2	(11.0)	-	1.0	基部は内側に曲折。
307	W5108	木鎌		柁目	E~G	河道埋土	(33.1)	11.8	-	1.2	刃部は両面から形成する。
308	W6243	コテ・ソリ		心持ち	E 3	河・下・上	50.1	(8.6)	-	(6.4)	把手の基部で破損。
309	W5282	作業台		柁目	G・西壁	河道埋土	(19.6)	(14.7)	-	(3.8)	刃物痕跡多数。
310	W5531	作業台		板目	F	12-1	(23.4)	(15.1)	-	7.0	周辺部が破損。刃物傷多数あり。
311	W5914	コテ・ソリ		板目	C・S・D163		(10.0)	7.0	-	3.0	4 cm四方の方形隆起を持つ。両端欠損。
312	W5182	コテ・ソリ		板目	G・S・D550		(15.4)	(6.5)	3.2	1.5	把手状の部分に2.6×2 cmの方形孔を持つ。
313	W5040	田下駄		板目	C	河3・上	(14.2)	7.0	-	3.4	厚みのある細長い板材に複数の穴をあけている。
314	W5099	織機		柁目	F 7・8	河・中4対芯	(63.5)	5.0	-	1.3	両端に刻み目模様あり。
315	W6272	織機		柁目	トレンチ4	河道埋土	(19.8)	(4.4)	-	(0.7)	一端欠損。端部側に細かな刻み目が施されている。
316	W0098	織機	モミ	板目	河1	14	41.3	3.1	-	1.4	完形品。加工痕明瞭。
317	W5652	かせ	アスナロ属	板目	F 1	河・下・砂堆上	(26.75)	2.6	-	1.25	握部付近の破片。
318	W0143	糸巻き		板目	河3	下	14.5	2.0	-	1.0	両短辺にえぐりをつくり、中央に糸通し穴あり。
319	W7031	手網		枝分かれ	F 1	河・下・上半	121.0	2.7	-	2.3	腕木の1本は先端まで残存。
320	W7078	網枠		心持ち			111.4	2.5	-	2.2	未成品。
321	W6323	網枠		心持ち	B	14・下	(60.8)	1.85	-	1.6	一端を欠損。
322	W0211	網枠		心持ち	河1	14	(26.7)	1.5	-	1.2	両端を切り落とす。
323	W0216	網枠		心持ち	河1	14	(35.5)	1.4	-	1.4	先端を周囲からとがらせるように切り落とす。
324	W0217	網枠		心持ち	河1	14	(34.3)	1.5	-	1.4	表面の痛みが激しい。一端を尖らせている。
325	W7118	網枠		心持ち	14	14	(66.6)	2.2	-	(1.7)	一端の断面を半円形状に削る。
326	W5579	網枠		心持ち	E 3	河・中5	(10.6)	1.3	-	1.2	組み物などの部材。
327	W6291	網枠		心持ち	トレンチ4	河道埋土	(75.0)	2.0	-	1.3	端部は側面から削り出す。接合しない破片あり。
328	W0213	網枠		心持ち	河1	14	(38.4)	1.7	-	1.3	前面と後面を面取り。両端部を欠く。
329	W0209	網枠		心持ち	河1	14	(42.8)	1.6	-	1.6	端部を切り落とす。枝の根が残り、加工は不十分。
330	W5210	網枠		半裁材	C	14・下	(35.2)	1.5	-	1.3	平面円形の頭部を作り、内湾面を平らに削る。
331	W5399	網枠		心持ち	E 1~4	河・最下砂層	(62.4)	1.5	-	1.3	両端欠損。湾曲の内面取り。
332	W0215	網枠		心持ち	河1	14	(10.7)	1.7	-	1.5	端部の破片。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
333	W0103	網杵		心持ち	河1	14	(57.4)	1.8	-	1.5	端部の加工は斜めに切り落とししたのみ。一端を欠く。
334	W5994	網杵		榎目	E3・4	河・下・上	(49.2)	1.8	-	1.3	両端欠損。削材を断面円形に加工する。
335	W6375	網杵		心持ち	F	河・中2・低下	(52.8)	2.65	-	1.7	枝を払った程度の加工。
336	W0210	網杵		心持ち	河1	14	(29.1)	1.4	-	1.0	両端欠損。
337	W5122	ヤス		榎目	F3・sec3	貝・上・A	8.6	0.6	-	0.6	身と茎との境には段を持たない。
338	W5123	ヤス		榎目	トレンチ4	河・埋土	10.9	0.8	-	0.6	身と茎との境には段を持つ。
339	W5566	ヤス		榎目	E	河・上・有機	(11.0)	0.7	-	0.6	ほぼ完形。
340	W5795	權		榎目	F1	河・中2・低下	(108.5)	10.7	-	3.2	身は肩の下方で一面から段を作り薄くする。反対面には稜が走る。
341	W7155	權		榎目			(98.3)	7.4	-	1.1	柄の端部を欠損。
342	W5384	權		榎目	E1	河・下・下	(73.4)	(6.7)	-	2.4	掘り棒の可能性あり。
343	W5653	權		榎目	F1	河・下・砂堆上	(62.3)	8.7	-	1.75	柄は3.5×2.2cmの楕円形。
344	W5617	權		榎目	F1	河・中2・低下	(27.8)	6.3	-	1.4	柄を欠く。
345	W6327	權		榎目	B	14・下	(42.55)	7.4	-	3.0	未完成品。身の厚さが不均衡。掘り棒などの可能性あり。
346	W6130	權		榎目	F7	河・中5	(34.7)	(8.0)	-	1.4	断面はレンズ状。
347	W5238	權	アカガシ亜属	榎目	E3	河・中2~3,集積1	151.3	9.2	-	2.6	完形品。
348	W5513	弓	マユミ	榎目	C	河3・上	(115.8)	2.3	-	2.0	両端部欠損。榎目あり。ほぼ全面に樹皮巻きあり。黒漆塗り。
349	W5512	弓	ヤマグワ	榎目	C	河3・上	(133.2)	2.3	-	2.1	片側端部欠損。樹皮巻きあり。榎目あり。
350	W5511	弓	エノキ	榎目	C	河3・上	159.2	2.2	-	2.2	完形品。樹皮巻きあり。榎目に骨格器が固定。
351	W5080	弓		榎目	C	河3・上	(93.9)	1.8	-	1.6	柄は両側面から方形に削りだす。
352	W5656	弓		心持ち	G	河・最下砂	(56.0)	1.85	-	1.9	一面を平坦加工しているもので、弓とは異なる可能性あり。
353	W5079	弓		榎目	C	河3・上	(85.2)	2.1	-	1.9	柄は両側面から方形に削りだす。
354	W6171	弓		心持ち	D・SD162	下	(75.7)	1.7	-	1.7	柄は端部から1cmを両側面から削り断面方形。
355	W5179	弓		榎目	B・C	13・下	(62.5)	2.3	-	1.5	樹皮巻きあり。榎目あり。両端欠損。
356	W5993	弓		心持ち	E3・4	河・下・上	(29.1)	2.5	-	1.2	端部の破片。両側面から方形に削り出す。
357	W0131	弓	イヌガヤ	心持ち	河3	上	(33.0)	1.6	-	0.8	柄は側面の2方から薄く削りだしている。
358	W6035	弓		心持ち	E3	河・中5・下	(23.2)	1.5	-	1.4	弮部分の中央に筋帯を1つ作り、弦かけを2つにする。
359	W0132	弓	クワ属	榎目	河3	上	(27.8)	2.2	-	1.8	弮の基部に樹皮巻き。
360	W0214	弓		心持ち	河1	14	(9.8)	1.0	-	0.7	弓弮の部分。
361	W5545	弓		榎目	F6	貝・中2対応	(11.5)	1.3	-	(0.9)	柄は欠損?小片。
362	W5085	弓		心持ち	B	14・最下	(53.5)	1.5	-	1.2	針葉樹の心持ち材を用いた短弓。
363	W0128	弓	イヌガヤ	心持ち	河3	上	(46.3)	2.5	-	2.2	柄は側面の2方から削り出す。
364	W0156	弓		心持ち	河3	下	(35.8)	1.2	-	1.2	未弮の部分と考えられる。
365	W5316	弓		榎目	F5・6	河・下・下	(36.4)	1.8	-	1.8	榎目あり。
366	W0130	弓	イヌガヤ	心持ち	河3	上	(37.0)	1.9	-	1.5	炭化部分あり。
367	W0127	弓	イヌガヤ	心持ち	河3	上	(62.8)	1.4	-	1.4	柄が片方あり。
368	W0129	弓	ムラサキシキブ属	心持ち	河3	上	(8.8)	1.0	-	0.9	枝に樹皮を巻き付けている。
369	W0032	木甲	クワ属	榎目	河1	14	18.7	6.3	-	0.4	方形の甲片の左半分部分。表面は黒漆塗り。
370	W5002	木甲	クワ科	榎目	C	14・下	17.5	(6.5)	-	0.5	左胸から脇にかけての部分。外面は黒漆塗り。
371	W0033	木甲	アカガシ亜属	榎目	河1	14	6.9	5.4	-	0.3	上に開く台形。表面は黒漆塗りであるが、下辺は露胎している。
372	W0031	木甲	アカガシ亜属	榎目	河1	14	(12.1)	8.0	-	0.5	表面は黒漆塗り。両長辺に小孔あり。
373	W5018	木甲	クワ属	榎目	A	14・下	13.0	(5.0)	-	0.5	外面黒漆塗り。内面に粗い加工痕あり。
374	W5149	木甲	サクラ属	榎目	E3	河・中3対応	6.1	(5.1)	-	0.4	外面黒漆塗り。平面は上が広い台形。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
375	W5155	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	6.2	(4.6)	-	0.4	外面黒漆塗り。平面逆台形。
376	W5154	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	6.1	(5.1)	-	0.4	外面黒漆塗り。平面逆台形。縦継ぎ孔の他にランダムに小孔多数。
377	W5150	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	6.0	(3.8)	-	0.5	外面黒漆塗り。平面が逆台形。斜め継ぎ孔あり。
378	W5143	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	5.9	3.2	-	0.4	外面黒漆塗り。ほぼ完形。小孔は短辺に 2 と 1、別に角よりに 1 つあり。
379	W5151	木甲	アカガシ亜属	柁目	E 3	河・中 3 対応	9.6	4.7	-	0.4	外面黒漆塗り。内面は木胎のまま。
380	W5152	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.4	6.3	-	0.4	外面黒漆塗り。縦継ぎ孔は右下端に 6 つ。右長辺中央に小孔 1 つ。
381	W5165	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	(6.6)	(1.6)	-	0.3	外面黒漆塗り。小片。
382	W5157	木甲	ニレ科	柁目	E 3	河・中 5	10.5	7.2	-	0.4	外面黒漆塗り。
383	W5153	木甲	ニレ科?	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.5	6.7	-	0.5	外面黒漆塗り。
384	W5144	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.4	5.2	-	0.3	外面黒漆塗り。ほぼ完形品。
385	W5139	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	(11.9)	(6.7)	-	0.3	外面黒漆塗り。
386	W5156	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	6.2	6.4	-	0.5	外面黒漆塗り。縦継ぎ孔とは別の小孔あり。
387	W5164	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	(9.0)	(1.6)	-	0.2	外面黒漆塗り。小片。
388	W5163	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	(3.6)	(2.2)	-	0.3	外面黒漆塗り。小片。
389	W5166	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	(3.2)	(1.6)	-	0.1	外面黒漆塗り。小片。
390	W5161	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.5	(5.5)	-	0.4	外面黒漆塗り。
391	W5141	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.3	(4.4)	-	0.4	外面黒漆塗り。
392	W5142	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.2	(4.1)	-	0.4	外面黒漆塗り。
393	W5140	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	(10.8)	6.6	-	0.5	外面黒漆塗り。横割れしている。
394	W5145	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	(11.9)	5.7	-	0.2	外面黒漆塗り。左下側部には方形に 4 孔あり。
395	W5146	木甲	アカガシ亜属	柁目	E 3	河・中 3 対応	(10.7)	(5.9)	-	0.2	外面黒漆塗り。上端欠損。
396	W5147	木甲	アカガシ亜属	柁目	E 3	河・中 3 対応	(11.9)	(6.0)	-	0.2	外面黒漆塗り。
397	W5148	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.4	3.2	-	0.3	外面黒漆塗り。
398	W5158	木甲	サクラ属	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.5	(8.4)	-	0.5	外面黒漆塗り。
399	W5162	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	12.3	(3.2)	-	0.3	外面は黒漆塗り。縦半分くらいに割れた破片か?
400	W5167	木甲	ムクロジ	柁目	A・北壁	14・最下	(12.5)	(5.3)	-	0.4	接合しない 2 片。
401	W5159	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	(7.4)	(4.8)	-	0.4	外面黒漆塗り。縦継ぎ孔が 2 列ある。
402	W5160	木甲	ムクロジ	柁目	E 3	河・中 3 対応	(10.0)	(2.1)	-	0.3	外面黒漆塗り。小片。
403	W6394	木甲	ムクロジ	柁目	B・北壁	14	(9.05)	(4.45)	-	0.45	外面黒漆塗り。小孔 2 つ残存。
404	W0047	木甲	アカガシ亜属	板目	河 3	下	(15.8)	(6.7)	-	0.35	下縁の小片。横縞形あり。無紋線部分に赤色顔料つき。
405	W6193	楕	板目	板目	D	14・中	(61.9)	(8.2)	-	1.2	小口内には蔓が 1・2 本残り、横の小孔間は、表裏面とも紐痕跡あり。
406	W0034	楕	モミ属	板目	河 1	14	(20.8)	(6.8)	-	0.8	小口内には蔓が 1・2 本残り、横の小孔間は、表裏面とも紐痕跡あり。
407	W5092	楕	モミ属	板目	B	14・下	(7.48)	(15.0)	-	0.8	列間 4 cm の小孔列 17 残存。
408	W5091	楕	モミ属	板目	B	14・下	(87.4)	(5.1)	-	0.8	小孔はまばらである。
409	W6206	楕	モミ属	板目	B	14・上	(40.3)	(11.3)	-	1.2	小孔内にはつる状の紐が残存。
410	W5979	楕	板目	板目	E 5	河・下・上	(40.8)	(9.5)	-	1.0	小口側には 2.5cm 間隔で小孔列 2 つ。
411	W6250	楕	板目	板目	F 1	河・下・上	(26.5)	(7.3)	-	1.0	小孔列 7 列が残る。
412	W5549	楕	板目	板目	F 6	貝・中 2 対応	(21.7)	(2.8)	-	0.9	小孔が縦に 3 つ残存。
413	W5299	楕	板目	板目	E 4	河・中 5・下	(22.4)	(4.5)	-	0.7	W5298 と同一個体? 上部部の下 5 cm に小孔列。
414	W6289	楕	板目	板目	トレンチ 4	河遺埋土	(58.6)	(6.2)	-	0.8	上端は弧状で、2 小孔列が近接。4 列目と 5 列目は 16.5cm 間隔。
415	W5992	楕	板目	板目	E 3・4	河・下・上	(27.1)	(5.8)	-	0.9	小孔列 8 つが残存。裏面には加工痕が明瞭に残る。
416	W5624	楕	モミ属	板目	C・D	河 3・上か	(21.5)	(11.5)	-	1.0	小孔列 7 つが残存。小孔列には裏面に 2 本をねじった紐が残存。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
417	W5870	楯		板目	E 2	河・中2・低上	(14.1)	(3.5)	-	0.8	小孔3つあり。
418	W5991	楯		板目	E 3・4	河・下・上	(100)	(5.1)	-	0.9	小片。小孔列1つ残る。
419	W6065	楯		板目	F 8	河・中4~5対応上	-	-	-	(0.7)	小片多数、接合状態不明。一部に赤色顔料が見られる。
420	W5577	楯		板目	E 3	河・中5	(58.4)	(7.3)	-	0.9	3.5cm間隔の小孔列が13列残るが、中央は15cm間隔があく。一部焼損。
421	W5298	楯		板目	E 4	河・中5・下	(46.4)	(12.3)	-	0.7	小孔の縦方向は互い違いにしている。
422	W5548	楯		板目	F 6	河・中2対応	(20.6)	(6.7)	-	0.8	小孔2つあり。
423	W6339	楯		板目	B	貝・下	(32.2)	(4.45)	-	0.9	小孔列が7列残存。
424	W5920	楯		板目	B・北壁	14	(27.6)	(6.0)	-	0.8	端部付近は小孔列をやや密に配置し、つる状のものが2本残る。
425	W5772	楯		板目	F 1	河・中2・低下	(48.0)	(11.8)	-	(0.7)	小孔を画面から薄くし、数mmの刻みを密に施す。小孔列間は密。紐痕跡。
426	W5522	楯		板目	E 2	河・下・上	(16.8)	(5.2)	-	0.9	列間3.5から4cmの小孔列4つが残存。
427	W5565	楯		板目	E	河・上・有機	(19.9)	(4.7)	-	1.0	一端は小孔列で折れ、他に3列残存。小孔列間は5cm。
428	W6338	楯		板目	B	14・下	(31.9)	(6.9)	-	0.9	縦4~8cm横2.5~3.5cmで小孔列が6列。小孔につるが2本残存。
429	W6340	楯		板目	B	14・下	(30.15)	(3.4)	-	0.5	小孔列7列残存。
430	W5939	楯		板目	F 7	河・中4~5	(16.8)	(7.5)	-	0.7	小孔列がややまばらにあげられている。
431	W5677	楯	モミ属	板目	D	河3・上(0.3・下含)	(43.15)	(6.2)	-	1.0	小孔列13。上辺の2列は接近し、他は3.5~4cm間隔でほぼ均等。
432	W5413	楯		板目	F 2	河・中5	(16.0)	(9.7)	-	1.0	端部の破片。角に小孔4を方形に配置。小孔列は9cmの間隔で2列。
433	W6154	楯		板目	G 1・2	河・中4~5	(17.9)	(3.6)	-	(0.6)	小孔列が4列残存。裏面に加工痕顕著。
434	W5107	楯		板目	E~F・北壁	河邊埋土	(22.7)	(4.3)	-	0.8	5cm間隔の小孔列が4条ある。打製石鏃が刺さっている。
435	W5276	楯		板目	C	14・中	(17.8)	(6.4)	-	1.1	小孔列は5列残り、間隔は3~4cm。
436	W5300	楯		板目	E 4	河・中5・下	(19.5)	(4.2)	-	0.8	小片。W5298と同一個体？小孔列間は5cm。
437	W6345	板		板目	B	14・下	(11.7)	(5.75)	-	0.6	短辺の両角と長辺沿いに小孔あり。短辺角の小孔の1つに紐が残存。
438	W5921	楯		板目	B	14	(26.5)	(4.3)	-	0.8	小孔はまばら。
439	W5735	楯		板目	E 2	河・中2・低上	(23.1)	(4.4)	-	1.0	小孔が多数あけられているが、縦横どちらの方向にも列をなさない。
440	W5170	楯		板目	E 2	河・中2・低上	(7.2)	(2.0)	-	0.7	厚さ7mmの縦の小片で、表面には赤色顔料塗布。
441	W5171	楯		板目	E	河・中2・低下	(9.5)	(2.0)	-	0.9	接合しない縦の小片が2片で表面には赤色顔料が塗布されている。
442	W0036	戈形	クスノキ	板目	河1	14	(91.6)	14.5	-	3.8	巨大な木戈。基部がわずかに左右非対称のため戈と考えられる。
443	W5101	戈の柄		板目	E 3	河・中2・低上	(57.2)	3.0	-	2.3	黒漆塗り。装着部に縷紗紋などの織りと、木の葉状と鹿の彫刻がある。
444	W5100	銅形	ヒノキ	板目	A	14・最下	(58.3)	6.5	-	2.3	柄は付け根部分のみ残る。
445	W5832	槍形	アスナロ属	板目	E	河・中2・低上	(34.1)	3.4	-	1.4	両面に鋸齒紋・縷紗紋などの織りと、木の葉状と鹿の彫刻がある。
446	W5065	鉄銅形	ヒノキ属	板目	D	13・下・有機	(27.5)	2.9	-	2.0	身の断面は菱形、長さ1.3cmの茎には中央に目釘が残る。
447	W5105	刀形	クスノキ	心持ち	E 3・4	河・下・下	(26.4)	3.0	-	2.0	筋帯を3つ持つ把がつく。中央の筋帯の頂部には沈線が2条刻まれる。
448	W0035	木鏃	ヒノキ	板目	河1	14	(13.0)	1.9	-	1.1	鋒及び左側部を欠くが、身の断面は菱形である。
449	W5005	鞘	カヤ属	板目	A	14・下	7.5	4.0	-	0.4	2枚を組み合わせて使用すると思われる。
450	W6443	刀形	サクラ属	板目	D14	中	(42.5)	4.5	-	3.0	楕円形の鏢を持つ。黒漆塗りだが、鏢上面は漆がはがれている。
451	W5114	銅銅形	モミ属	板目	F 1・北御溝	河・下	26.5	3.9	-	1.9	細形銅銅形。細部まで銅剣を忠実に模倣している。鋒はやや痛んでいる。
452	W6131	銅銅形	アカガシ垂属	板目	F 7	河・中5	(15.8)	4.0	-	0.6	扁平な銅銅形。胴部に円孔2を持つ。茎は長さ1.5cm。
453	W5115	銅銅形	スギ	板目	G	河・中2・低上	(17.4)	3.2	-	0.8	身・茎とも扁平できわめて簡素。胴上部に1対の円孔を持つ。
454	W5116	銅銅形	モミ属	板目	F 7	河・中5	(15.6)	3.1	-	1.3	鋒身の断面は菱形。剣方や脊の表現を欠く。
455	W5026	銅銅形	マツ類	板目	B	14・最下	(17.2)	4.1	-	1.2	細形銅銅形。鋒を欠き基部に2孔を穿つ。身と剣方の境を意識する。
456	W5480	剣把		心持ち	F 3・sec 1	貝・中1・C	(12.4)	3.1	-	2.0	未成品。把の木製品。
457	W5117	剣把	イスガヤ	心持ち	F 6	河・下・下	9.7	2.5	-	2.6	未成品。両端と中央に低い筋帯。一方の小口中央には直径1.2cm深さ1.5cmの穴。
458	W0022	剣把	イスガヤ	心持ち	河1	14	8.3	2.6	-	2.4	完形品。中央くびれ部に貫穴あり。茎孔、深さ1.7cm、直径1.5×1.7cm。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
459	W0154	棍棒	アカガシ亜属	柵目	河3	下	41.2	7.2	-	5.0	完形品。基部に縄かけを持つ。
460	W5475	棍棒		心持ち	F 3・sec 1	貝・中3・A	(44.4)	3.9	-	3.6	握部の加工痕は顕著。
461	W0134	棍棒	クワ属	柵目	河3	上	42.3	3.8	-	2.8	完形品。太い部分を握りとするは指挿棒の様な形状。
462	W0155	棍棒		柵目	河3	下	(20.2)	(6.9)	-	(6.1)	縦方斧柄が装着孔から折れた基部を利用。装着孔の部分は面取り加工。
463	W5503	棍棒		柵目	トレンチ5	河道埋土	(20.3)	4.8	-	4.2	断面方形で、四方の角に刻みあり。両端欠損。
464	W5111	棍棒	アカガシ亜属	心持ち	F 4	河・中4~5	63.2	7.1	-	5.0	ほぼ完形品。
465	W0111	棍棒	アカガシ亜属	柵目	河1	14	63.8	4.1	-	3.1	完形品。基部に紐をくくりつけるための溝を1周切つてある。
466	W5112	かんざし	アカガシ亜属	柵目	E 3・4	河・下・下	(20.5)	4.0	-	0.6	頭部と軸部の境には棘突起が両側につく。
467	W5060	かんざし		柵目	B	14・下	(24.6)	2.4	-	1.4	直径1.5cmの軸部にやや扁平な半円形の頭部を持つ。
468	W5014	かんざし	採取不能	柵目	トレンチ3	14	(5.0)	3.3	-	0.5	2本歯。頭部は乳房を2つ連ねた様な形状。
469	W5017	かんざし	採取不能	柵目	C	14・下	(12.3)	1.9	-	0.3	先端は折れている。方形の突起がつく。
470	W5120	かんざし		柵目	F 6・sec 4	貝・下35	9.9	1.4	-	0.4	円形の軸部と扁平で不正形の頭部を持つ。
471	W5366	かんざし	ケヤキ	柵目	C	14・下	11.5	0.2	-	0.3	円形の軸部には2つの角あり。
472	W5016	かんざし	採取不能	柵目	トレンチ3	14・下	18.0	1.1	-	0.4	完形品。頭部には2つの角あり。
473	W5015	かんざし	採取不能	柵目	トレンチ3	14	(12.0)	0.2	-	0.2	1本歯のかんざし。頭部を欠損。
474	W6145	かんざし		柵目	F 7	河・中5	(15.7)	1.0	-	0.2	頭部を欠く。
475	W5318	かんざし		柵目	F 5・6	河・下・下	(10.4)	0.4	-	0.3	歯の部分。両端欠損。
476	W6019	かんざし		柵目	F 8	河・下	(8.9)	0.7	-	(1.0)	両端欠損。
477	W5367	かんざし	ヒノキ属	柵目	14・下	14	8.3	0.3	-	0.3	円形の軸部と扁平でやや方形に近い頭部からなる。
478	W5121	かんざし		柵目	E 5	貝・中3・B	8.1	0.9	-	0.3	中心から均等に分岐する枝を利用。
479	W0219	きぬがさ		心持ち	河1	14	(6.0)	(5.1)	-	0.9	完形品。しゃもじ状の木製品。
480	W5616	杓子形		柵目	F 1	河・中2・低下	29.3	6.2	-	1.1	先端および左側部を欠く。
481	W5024	さじ	イヌガヤ	柵目	B	14・上	(28.4)	(8.8)	-	0.7	未完成品か。基部を欠損している。
482	W5218	さじ	アカガシ亜属	柵目	F 5	貝中3、(河、下、下)	(25.5)	4.3	-	2.0	未完成品。身の内縁り開始の状態か？
483	W5638	さじ		心持ち	F 1	河・下・上(東)	24.6	6.0	-	5.1	身の先端と柄の基部欠損
484	W5215	さじ	ツバキ属	柵目	E 3	河・中2~3,集積1	(12.2)	4.9	-	1.5	身の先端と柄の短いさじ。
485	W0007	さじ	カヤ	柵目	河1	14	(14.3)	5.4	-	0.8	小型の横杓子状。
486	W5001	さじ	スタジイ	柵目	B	14・上	(12.8)	5.2	-	1.0	小形のさじか。身は時に炭化している。
487	W0139	さじ		柵目	河3	下	(9.0)	(2.9)	-	0.5	内面に樹脂が残る。ほぼ完形。
488	W0141	さじ	ツバキ属	柵目	河3	下	(15.5)	(5.3)	-	0.4	完形品。側面観はゆるくS字状にカーブ。
489	W5133	さじ	ヤマグワ属	柵目	B	14・上	31.2	7.2	-	2.0	柄の付け根に上部・側部とも身と段差あり。
490	W5118	さじ	シキミ	柵目	F 7・8	河・中4対応	28.8	3.8	-	1.8	ほぼ完形。柄は短い。樹脂付着。
491	W0140	さじ	サカキ属	柵目	河3	下	17.8	3.8	-	0.4	基部欠損。
492	W5216	さじ	サカキ	柵目	F 7・8	河・中4対応	(20.0)	5.2	-	0.6	ほぼ完形。先端部をやや欠損。
493	W0004	さじ	ヤマグワ	柵目	河1	14	(20.8)	(4.5)	-	0.6	未完成品。身の内部を削っていない。
494	W5134	さじ	サカキ	心持ち	F 1	河・中2・低下	(20.8)	5.2	-	1.6	完形品。柄の基部に突起あり。
495	W0006	さじ	ツゲ	柵目	河1	14	(22.7)	3.6	-	0.9	3本歯。身は柄の付け根部分から先端にかけて湾曲。
496	W5110	フォーク	ムラサキシキブ属	柵目	トレンチ4	河道埋土	(13.4)	2.1	-	0.6	先端・基部欠損。
497	W5217	さじ	クワ属	柵目	F 3・4	河・下・下	(18.7)	6.2	-	1.6	接合しない柄あり。
498	W5250	さじ		柵目	E 3	河・中2~3,集積1	(9.5)	(6.0)	-	0.9	基部および身部の大半を欠損。
499	W0005	さじ	シャシヤンボ	柵目	河1	14	(18.8)	(3.5)	-	0.6	浅い楕円形の容器の可能性あり。内面に樹脂を塗付か。刃線痕は明瞭。
500	W0016	さじ	イヌガヤ	柵目	河1	14	(12.4)	(3.8)	-	0.6	

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
501	W5477	さじ		根目	F 3・sec 1	貝・中1・A	(10.4)	(4.2)	-	0.4	身の1/4の破片。
502	W0138	さじ		根目	河3	下	(22.5)	7.2	-	0.8	身の長いさじ。表面には樹脂が塗られておるもよう。
503	W0010	さじ	ケヤキ	根目	河1	14	(14.9)	(3.6)	-	0.3	柄の付け根と口縁との段差はごくわずか。一部炭化。
504	W0009	さじ	サカキ	板目	河1	14	(16.0)	2.4	-	0.4	柄の先端・上面および基部を欠く。身の浅いタイプか？
505	W5126	さじ		根目	トレんチ4	河道埋土	(6.1)	(3.1)	-	0.5	さじの身の破片で全形は不明であるが、身はやや大きめと推測される。
506	W0011	さじ	カヤ	板目	河1	14	(12.9)	(2.9)	-	0.5	身の内外面に加工痕が残り、刃縁痕も明瞭。樹脂を塗込んでおるか？
507	W5125	さじ		根目	トレんチ4	河道埋土	(11.2)	(4.6)	-	0.8	身はやや大きめで少し外湾。柄も少し外湾しながらの破片。
508	W5303	さじ		根目	E 4	河・中5・下	(6.8)	(6.0)	-	0.5	身の半分から柄にかけての破片。
509	W6392	さじ		板目	F	河・中2・低上	(7.65)	(3.2)	-	0.5	一端を弧状に加工。
510	W6044	さじ		根目	F 8	河・中5	(11.0)	(6.8)	-	(0.5)	身の底部片。
511	W6290	さじ		根目	トレんチ4	河道埋土	(13.5)	(3.9)	-	(0.6)	身から柄にかけての破片。
512	W0008	さじ	シヤシヤンボ	根目	河1	14	(8.4)	(4.6)	-	0.6	先端および基部欠損。やや炭化。
513	W6132	さじ		根目	F 7	河・中5	(13.2)	(3.2)	-	1.1	身から柄にかけての破片。
514	W0012	さじ		根目	河1	14	(7.2)	(2.0)	-	0.4	身の一部か？樹脂塗付。
515	W5740	横杓子		根目	E 2	河・中2・低上	(36.3)	(8.0)	-	2.8	細長い横杓子。
516	W5354	横杓子		根目	南壁	河・27	(17.1)	(9.2)	-	3.0	身の大半を欠く。柄の端部の中央に円孔。
517	W5033	横杓子		横木取り	C	河3・上	(19.7)	(10.2)	-	1.3	円形で浅めの身。1/2程度の破片。
518	W5177	横杓子		根目	B・C	13・下	(17.0)	(4.8)	-	1.8	柄の一部。基部は環状で半分に折れている。一端は炭化。
519	W5013	横杓子	クスノキ	根目	トレんチ3	14	(11.0)	3.3	-	1.4	柄の一部。
520	W0013	横杓子	ヤマグワ	根目	河1	14	(18.0)	10.9	-	2.1	全体を丁寧に仕上げているため加工痕を顕察できなない。
521	W0014	縦杓子	クスノキ	根目	河1	14	(17.5)	10.5	-	1.1	柄が締め上方にのびる横杓子。コブの利用か？
522	W6282	横杓子		根目	トレんチ4	河道埋土	(4.2)	(2.3)	-	1.0	環状に湾曲した柄の基部の破片。先端側部にわずかに突起を持つ。
523	W5032	横杓子	ネムノキ属	横木取り	B	14・上	(17.8)	(11.8)	-	1.6	身の半分ほどの破片。把手の付け根から折れている。
524	W0136	横杓子		根目	河3	下	(13.6)	(9.0)	-	0.2	ごく薄い剝物。
525	W5311	縦杓子	イヌマキ	心持ち	S K 562(北)		47.3	10.9	-	1.3	ほぼ完形品。身の内面は未成品。加工痕顕著。
526	W5012	縦杓子	ケヤキ	縦木取り	トレんチ3	14・下	(31.3)	(7.0)	-	1.0	柄の一部。生漆を塗布しているか？精巧品。
527	W5674	縦杓子	クスノキ		D	河3・上(13・下舎)	(27.85)	(12.7)	-	1.3	柄の基部を欠損。身は土圧により変形。
528	W6094	縦杓子			B	14・下	(6.4)	(6.5)	-	(1.2)	底部の破片。
529	W5342	縦杓子		根目	トレんチ1・2	13-14	(8.3)	7.0	-	1.7	柄を根元から欠損。土圧により変形。
530	W0137	縦杓子		縦木取り	河3	下	(10.7)	(9.9)	-	0.6	縦杓子の身あるいは柄。
531	W0226	縦杓子		根目	河1	14	(8.7)	(4.2)	-	1.9	底部の破片。
532	W5132	縦杓子	ケヤキ属	根目	G 2	河・下・下	(21.6)	(13.6)	-	2.1	黒漆地に赤漆で縞菌紋・直線紋・重弧紋・列点紋などを反転させて描く。
533	W6395	縦杓子		縦木取り			(9.2)	6.8	-	3.1	全周の1/4ほどの破片。
534	W6111	縦杓子		心持ち	E 5		(11.3)	(10.1)	-	2.7	柄を欠く。柄の可能性もある。
535	W5343	縦杓子		心持ち	トレんチ1・2	13-14	9.7	6.5	-	1.7	柄は欠損。土圧により変形。
536	W5536	縦杓子		心持ち	E 4	河・中2・有機	(11.1)	9.4	-	2.2	内底面に加工痕顕著。丸底で柄の可能性あり。
537	W6396	縦杓子		板目	C	河3・上	(10.7)	(6.25)	-	0.65	木の葉形の縦杓子柄の頭部。
538	W5275	縦杓子		板目	C	14・中	(13.8)	5.9	-	1.2	人形状の端部を持つ柄の破片。
539	W5734	縦杓子		心持ち	E	河・中2	(10.2)	9.9	-	5.8	土圧によりやや扁平になっている。口縁部に3.5×3cmの切り込みあり。
540	W5174	縦杓子		根目	B・C	13・下	11.5	8.3	-	3.0	土圧で変形しているが平面はほぼ円形。口縁部がわずかに残存。
541	W0147	縦杓子		縦木取り	河3	下	(7.9)	4.6	-	0.9	柄の可能性あり。
542	W0227	縦杓子	アカガシ亜属	根目	河1	14	(6.5)	(3.6)	-	1.0	口縁部の破片、柄を欠損。柄の可能性あり。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
543	W5199	縦杓子		板目	A	14・上	(3.3)	(8.4)	-	(2.2)	碗の破片の可能性あり。
544	W5247	縦杓子		板目	E 3	河・中2~3、集積1	(3.3)	(4.3)	-	(1.3)	底部の小破片。
545	W5020	ジョッキ	ケヤキ属	縦木取り	A	14・下	-	14.3	22.6	1.0	外面及び内面上半に黒漆。4脚。精巧品。
546	W5124	ジョッキ	クワ属	縦木取り	A~D	河道埋土	-	11.8	(18.3)	3.4	脚(4脚)はやや小さめのものがつく。底部内外面に加工痕が残る。
547	W5274	ジョッキ	クワ属	板目	C	14・中	-	(16.3)	(13.2)	0.7	口縁部の破片。把手の上半が残存。
548	W5287	ジョッキ	クワ属	板目	F 7	河・中4~5	-	6.4	7.95	4.75	把手の破片。基部側面に縞形紋を刻む。
549	W5010	ジョッキ		縦木取り	G	14・上	-	(5.5)	(23.0)	0.7	外面・内面上半に黒漆。
550	W6076	ジョッキ		板目	G 1・2	河・下・下	-	15.6	23.3	4.5	把手を欠く。脚はつかない。
551	W0256	コップ		板目	河1	14	-	10.8	16.5	13.5	未成品。縞刺れしている。
552	W5742	コップ	クスノキ	板目	E 2	河・中2・低上	-	7.5	19.3	7.5	未成品。上部から5cmほど内縁りを始めている。
553	W5537	コップ	クワ属	板目	E 4	河・中2・有機	-	9.1	(6.2)	1.3	小型合子の可能性あり。
554	W0250	ジョッキ	サクラ属	板目	河1	14	-	(5.4)	(21.3)	0.7	体部の破片。
555	W5538	ジョッキ	クワ属	板目	E 4	河・中2・有機	-	(13.0)	(16.7)	1.2	4脚のうち1脚を欠損。把手も欠損。
556	W5737	ジョッキ		板目	E 2	河・中2・低上	-	(9.0)	(13.6)	1.0	ジョッキの破片。胴部の厚さは4.5mm。コップの可能性あり。
557	W0151	異形杓子	ツバキ属	縦木取り	河3	下	-	(11.5)	(20.4)	0.6	身の一方に真上に延びる柄がつく。
558	W5811	ジョッキ		板目	E 3・トレンチ6	河・中4~5	-	(15.0)	(7.0)	3.1	底部の破片。やや扁平な4脚を持つ。2脚残存。胴部の厚さは5mm。
559	W5543	コップ	クワ属	板目	E 1	河・中2・中	-	(7.5)	17.0	2.3	ほぼ完形品。上部は土圧により変形。表面黒色。
560	W5119	脚付カップ形	センダン属	縦木取り	E 3	河・中4	-	(4.5)	19.9	1.2	脚付。一本作り。
561	W5730	コップ	クワ属	板目	E	河・中2・中	-	9.0	19.5	1.9	丸底のコップ。
562	W0019	コップ	イチイ	心持ち	河1	14	-	9.6	16.0	1.7	底部外面に刃線痕あり。
563	W5551	コップ	イヌガヤ	板目	E 1	河・中2・低上	-	9.0	13.8	2.0	ほぼ完形品。加工痕には刃こぼれ痕が見られる。一部炭化している。
564	W5028	赤形紋高杯	ケヤキ	横木取り	トレンチ3	14・下	-	(34.0)	10.4	1.3	黒漆地に赤漆紋様。
565	W5088	高杯		板目	C	河3・上	-	(43.0)	10.5	1.5	口径は復原値。やや肥厚した水平口縁を持つ。
566	W5109	高杯		板目	E 5	具・下3	-	(22.0)	(5.0)	1.5	高杯の杯部の破片。
567	W0108	高杯		横木取り	河1	14	-	(30.5)	(5.8)	1.3	口縁部分の小破片。
568	W5809	高杯		板目	E 3・トレンチ6	河・中4~5	-	14.5	(5.5)	1.8	小型高杯の杯部。軸上部で折損。
569	W0230	高杯	クワ属	横木取り	河1	14	-	(18.0)	(3.5)	1.1	口縁部小片。
570	W0229	高杯	ケヤキ	板目	河1	14	-	(26.6)	(3.6)	0.6	口縁部の破片で、直径は復原値。
571	W6147	高杯	サクラ属	板目	G 1・2	河・中4~5	-	28.5	(14.7)	-	脚部の破片。
572	W5187	高杯		板目	S P 559	-	-	(33.0)	(2.5)	(1.5)	口縁部の破片。全周の1/5程度の破片からの復原。
573	W5304	高杯		板目	E 4	河・中5・下	-	(13.3)	(4.5)	1.3	水平口縁の杯部の破片。
574	W5185	高杯		板目	G・S D 550	-	-	(23.0)	(12.0)	2.0	3分制作りの高杯脚部の破片。
575	W5186	高杯		板目	G・S D 550	-	-	(6.2)	(5.3)	-	高杯軸部中央の破片。
576	W5885	高杯		板目	F 5	河・下・下	-	(10.5)	(9.3)	-	脚部の破片。表面黒色。沈線3条。
577	W5692	高杯		板目	B・S D 162	-	-	(28.8)	(3.9)	1.2	復原口径40cmの大形高杯の口縁部の破片。
578	W5815	高杯	クワ属	横木取り	G	河・中2・低上	-	(15.8)	(12.9)	-	脚部。内面は炭化している。
579	W5262	高杯	サクラ属	板目	D	14・中上部集積2	-	(17.3)	(6.1)	2.1	組合せ式高杯の脚部。
580	W0135	高杯		板目	河3	下	-	(8.9)	(3.6)	1.6	脚部1/4の破片。復原径21cm。
581	W5098	合子	バラ科	板目	F 1	河・中2・低下	-	19.2	13.6	2.5	4脚の四角い合子。
582	W5055	合子		板目	B	14・下	-	(17.5)	(4.5)	(0.8)	口縁部の破片。
583	W5188	合子	クワ属	縦木取り	F	脚台部に三角形の透かし孔を持つ。	-	(16.3)	19.4	(2.2)	脚台部に三角形の透かし孔を持つ。
584	W5022	合子蓋	ケヤキ	板目	A	14・下	-	(16.3)	2.0	0.6	円形ないし楕円形。1/3程度の破片。加工痕顕著で仕上げ未調整。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
585	W5023	合子	ケヤキ	柵目	B	14・下	-	17.0	20.0	2.2	全周の1/8程度の精巧品。高さ1cmの脚を作りつけている。
586	W0146	合子		横木取り	河3	下	-	(18.2)	(4.4)	1.1	口縁部の破片。補修孔あり。
587	W5874	合子蓋	センダン	柵目	F	河・中2・低上	-	17.3	2.6	1.2	甲盛りのある方形合子の蓋。長辺はやや外湾。
588	W6068	合子		柵目	G1・2	河・下・下	-	21.4	13.5	2.0	1.5cm四方の小さな脚が3つ残存。
589	W5935	合子蓋		板目	F7	河・中4~5	-	24.7	(1.2)	1.1	長軸に沿った1/2の破片。
590	W5081	尖底容器	モミ属	柵目	B	14・下	-	15.8	26.8	7.3	未成品。尖底気味の丸底の深形容器。
591	W6152	尖底容器		柵目	G1・2	河・中4~5	-	(22.2)	(4.6)	(2.4)	コップの底部の加工性もある。
592	W5071	深形容器		柵目	B	14・最下	-	(22.3)	(5.5)	(1.1)	上部1/4の破片。平板な小口と湾曲した側面を持つ槽か？
593	W5054	鉢形容器		柵目	D	13・下・有機	-	(19.8)	(6.4)	1.0	波状口縁となる深い皿か鉢状の容器。
594	W5441	鉢形容器	クスノキ	柵目	B	14・下	-	(18.0)	(13.7)	(1.1)	深いボール形で楕円形の容器。
595	W5431	鉢形容器		柵目	F7・8	河・中4対応	-	(19.2)	(7.7)	0.9	鉢形。平面楕円形ないし隅丸方形。
596	W5244	鉢形容器		柵目	E3	河・中2~3・集積1	-	(27.6)	(11.0)	(1.0)	底部欠損。復原口径27.4cmで全周の1/3残る。
597	W6393	皿		心持ち	F8	河・中4~5対応上	-	(15.6)	(7.5)	(7.5)	未成品。二方向に脚を持つ浅い鉢形と見られる。
598	W6060	皿		柵目	F8	河・中4~5対応上	-	(14.1)	(2.0)	(1.4)	楕円形の浅い皿の底部片。
599	W5590	皿		柵目	F・S D550	河・下・上	-	(18.6)	(6.8)	2.3	円形のやや深い皿で、外面の焼損が著しい。
600	W5128	皿		柵目	E2	河・下・上	-	(17.3)	4.8	1.3	円形の皿形で1/2程度の破片。
601	W5183	皿		柵目	G・S D550	13・下	-	(15.6)	(4.4)	1.4	ごく浅い円形の高台を持つ皿ないし鉢形の容器の底部の破片。
602	W5178	鉢形容器		柵目	B・C	河3・上(13・下含)	-	(16.0)	8.8	1.0	深さ7.8cmの円形ないし楕円形の鉢形容器。こぶを利用か？
603	W5678	皿	サカキ	柵目	D	河3・上(13・下含)	-	(14.6)	3.1	1.0	4脚がつく小型の方形の皿。
604	W5245	皿		柵目	E3	河・中2~3・集積1	-	14.2	3.8	0.8	縦割れした1/2程度の破片。細長の2脚を持つ。
605	W5370	皿		柵目	F7・8	河・中4対応	-	(5.0)	(1.5)	(0.9)	長方形の4脚の容器だが、1脚のみ残存。
606	W5560	皿		柵目	E	河・上・有機	-	23.5	(4.5)	0.9	上に開く角形。ほぼ完形。
607	W0018	皿	サカキ	板目	河1	14	-	22.8	4.2	2.4	ほぼ完形の未成品。浅い皿。
608	W0017	皿	クスノキ	横木取り	河1	14	-	(26.9)	6.5	1.4	隅丸方形のやや深い皿形。4脚。
609	W5260	皿	ケヤキ	柵目	D	14・下・上面集積1	-	30.5	7.8	1.4	長軸方向脚が2本付く。縦約1/2が残存。
610	W5127	皿	ケヤキ	柵目	F2	河・下・上	-	(19.5)	(3.6)	0.8	楕円形の皿の一部。
611	W0223	皿		縦木取り	河1	14	-	26.7	4.0	0.9	ほぼ完形。
612	W6205	皿	アカガシ亜属	柵目	B	14・上	-	(21.5)	4.1	2.7	楕円形の皿の破片。
613	W5038	皿		横木取り	C	河3・上	-	(19.7)	2.7	0.6	楕円形の深い皿の破片。
614	W5222	皿		柵目	C	14・下	-	32.6	2.6	1.4	方形ないし隅丸方形の皿。高さ1mmほどの高台を持つ。
615	W5755	皿		柵目	E	河・上	-	34.6	5.4	1.0	長方形の皿。側部は土庄により変形。
616	W5575	皿		柵目	E4	河・中5・上	-	(31.5)	4.3	0.4	楕円形ないし隅丸方形の皿。
617	W5172	皿		柵目	B・C	13・下	-	(12.0)	(3.0)	0.7	鉢の可能性あり。
618	W5302	容器		柵目	E4	河・中5・下	-	27.0	4.4	1.3	鉢の側面を欠損。
619	W5644	皿	アカガシ亜属	柵目	F5	河・中5・下	-	28.7	7.6	2.7	方形ないし長方形の皿形。
620	W0149	皿	クスノキ	横木取り	河3	下	-	(14.8)	(3.7)	1.3	楕円形ないし隅丸方形の皿。1/4以下の破片。
621	W5564	皿		柵目	E	河・上・有機	-	(11.8)	(3.2)	1.2	やや胴張りのする長方形の深皿の小口片。外面炭化。
622	W0173	皿		横木取り	河1	14	-	(11.2)	(3.2)	1.0	小片。
623	W6226	皿		柵目	A・S D162	河・上	-	(20.6)	(3.9)	(1.0)	断面三角形の高台を持つ皿の破片。
624	W5753	皿		柵目	E	河・上	-	(12.6)	4.5	0.8	楕円形で、丸みを帯びた底を持つ皿。内面はすすが付着。
625	W0148	皿		横木取り	河3	下	-	(47.25)	4.2	1.2	円形の皿1/2の破片。
626	W6438	大皿	ハルニレ	横木取り			-				

登録番号	種 類	樹 種	木取り	出土地点	層 位	全 長	全 幅	高 さ	厚 さ	特 徴
627	皿		榎目	A・S D162		-	(28.5)	(4.3)	(2.1)	円形ないし隅丸方形の皿。
628	大皿	クスノキ属	榎目			-	(51.8)	7.4	1.2	円柱状の脚4を持つ。楕円形の大皿。
629	赤彩紋皿	ケヤキ属	横木取り	D	13・上	-	(30.6)	9.5	1.2	外面には黒漆地に赤漆紋様を施すが、剥落が著しく詳細は不明。
630	赤彩紋容器		榎目	D	13・上	-	(5.5)	(2.6)	1.0	赤と黒漆で直線紋を施す。
631	皿		榎目	F 7・8	河・中4対応	-	(22.7)	(6.0)	10.7	身は平面円形ないし楕円形。柄は欠損。
632	皿	アカガシ亜属	榎目	B	14・下	-	(25.0)	(4.5)	0.7	平面木の葉形の皿。接合しない複数の破片から復原。
633	皿		榎目	F 5	貝・上2・B	-	(20.8)	(3.4)	2.1	4本の棧を持つ。
634	盤	サクラ属	榎目	F 5・トレンチ6		-	(18.6)	7.0	1.8	脚の大半を欠失している。身は楕円形の浅い皿形。
635	容器	クスノキ	榎目	河1	14	-	(21.7)	(4.9)	1.3	身部の1/2~1/3程度。平面楕円形で丸底気味。
636	容器		板目	F 5・6	河・下・下	-	(14.0)	(3.1)	(1.4)	楕円形、浅い鉢形。
637	皿	ハリギリ	榎目	F 2	河・中5	-	(26.3)	5.7	1.5	丁寧な仕上げ。縦割れした1/2の破片。
638	皿	イヌガヤ	横木取り	E 3	河・下・上	-	(25.8)	(5.1)	1.2	精製品。脚付の皿と考えられる。
639	皿		板目	A	14・上	-	(13.5)	(3.7)	0.9	皿か横杓子の破片。
640	皿	ハリギリ	榎目	河1	14	-	(16.8)	(1.5)	(0.9)	底部の小片。
641	皿		榎目	B	14・下	-	(17.6)	(1.7)	(1.1)	小片。
642	舟形容器		板目	E 3	河・中5・下	-	17.8	(2.8)	(1.4)	底部の破片。
643	皿		心持ち	E 2	河・下・上	-	(12.6)	(1.5)	0.8	さじの身の部分の破片か？
644	舟形容器	クスノキ	板目	河1	14	-	(10.2)	(2.4)	(1.8)	一部に樹皮が残る。
645	皿		榎目	河1	14	-	(10.5)	(2.1)	0.8	容器の小片。
646	皿		榎目	C	14・中	-	(7.7)	(2.2)	(1.0)	小片。
647	皿	クワ属	榎目	B	14・下	-	(35.6)	(8.5)	2.9	縦割れした1/2の破片。4脚のうち2つ残存。平面は長方形。
648	槽		板目	F 5・6	貝・中3・A⑧	-	(15.8)	8.5	4.4	大形槽の小口の破片。
649	槽		榎目	河1	14	-	(11.2)	(1.7)	(1.8)	大型の器の底部の破片か？
650	槽		板目	トレンチ4	河道埋土	-	(13.8)	(5.5)	(4.5)	小口部分の小片。接合しない破片あり。
651	盤		板目	F 5・6	貝・上2・B	-	(40.0)	10.7	4.0	短辺の立ち上がり傾斜のやや緩い長方形の槽。
652	槽		板目	E	河・中2	-	(85.3)	(5.5)	2.5	大形盤ないし槽の底部の破片。
653	槽		半裁材	B	14・下	-	(17.8)	(12.3)	6.6	大形槽の把手の破片。
654	槽		板目	G	河・上	-	(11.1)	(10.1)	2.6	小口部分の小片。
655	盤	ケヤキ	心持ち	河1	14	-	(31.8)	(10.9)	3.7	外側面は大型の工具で削っている。
656	大皿		榎目	S D162		-	(24.8)	11.4	1.9	大形槽の小口の破片。
657	大皿		板目	河1	14	-	(42.5)	(4.9)	1.7	大形の皿の底部の一部。
658	盤		板目	E	河・上	-	(32.5)	(8.1)	(5.5)	小口部分の破片。全体に炭化。
659	底	ニレ属	榎目	E 1	河・中2・低上	-	14.8	(2.7)	1.5	胴部が繩物となる容器の底部と見られる。
660	台		榎目	E 3	河・中2~3,集積1	-	(8.9)	(1.0)	(0.9)	方形の低い脚を持つ台形の木製品。
661	容器	アカガシ亜属	榎目	F 3・sec 3	貝・上2・B	-	21.5	7.0	7.0	未成品。やや弧状の長辺に小突起がつく。
662	台		榎目	D	河3・上(13下含)	-	15.3	2.5	2.5	2個1対を中央で分割した4脚を持つ。
663	蓋		榎目	B	14・上	-	9.2	0.5	0.5	中心に小孔あり。表裏とも薄く加工痕が残る。
664	皿		榎目	F 8	河・中4~5対応上	-	12.2	1.1	0.7	縦断面はわずかに湾曲する。
665	皿		榎目	C	14・下	-	(7.7)	2.1	1.0	長方形の浅い皿形容器の破片か？
666	台		板目	A	14・下	(51.6)	(18.7)	-	3.9	一端欠損。
667	琴		板目	G 2	河・下・上	63.3	(6.9)	-	1.2	ほぼ中央で縦割れになっている。孔には木釘が残っている。
668	琴	クスノキ	榎目	G 2	河・下・上	(39.5)	(6.4)	-	1.3	截頭円錐形の突起が2つ残る。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
669	W6151	琴	アスナロ属	柱目	G1・2	河・中4~5	(26.0)	(5.1)	-	0.8	截頭円錐形の突起が3つ残る。
670	W5136	琴	スギ	柱目	F1	河・中2・低上	(15.2)	9.4	-	1.0	5つの突起を持つ板作りの琴。
671	W5043	琴	アスナロ属	板目	B	14・最下	(40.5)	4.5	-	1.5	一端に円錐形の突起を持つ。
672	W0030	威儀具	イヌガヤ	板目	河1	14	(23.0)	(5.3)	-	0.6	長方形、菱形、三角形の透かし彫りや彫刻を施す。
673	W5021	威儀具	イヌガヤ	柱目	B	14・最下	(29.3)	3.2	-	3.0	精巧品。菱部下端にT字型の孔あり。
674	W6435	威儀具	イヌガヤ	心持ち	G2	河・中4~5	(39.3)	(16.2)	-	1.7	下端に凹形突起あり。
675	W0029	威儀具	イヌガヤ	心持ち	河1	14	(23.7)	2.8	-	0.6	身はやや内湾。頭部はやや主頭状で炭化。
676	W0206	祭祀具	イイギリ属	柱目	河1	14	(12.2)	(4.5)	-	(4.1)	三角形を互い違いに配した装飾的彫刻あり。
677	W0104	陽物形	イイギリ属	心持ち	河1	14	8.6	2.9	-	2.8	加工痕顯著、一部に刃先の食い込みあり。基部には刃こぼれ痕あり。
678	W0105	陽物形	クスノキ属	柱目	河1	14	(16.6)	1.7	-	2.6	転用品か？
679	W6167	陽物形		柱目	D・S・D162	下	11.3	4.8	-	2.3	ほぼ完形。
680	W5691	劔拔式箱	タブノキ	心持ち	F7	河・中4~5	83.1	9.5	5.4	5.3	側部内面の蓋溝なし。
681	W6202	劔拔式箱		板目	B	14・上	(9.0)	(14.0)	5.5	5.6	大形のくり抜き式箱の小口部分の小片。
682	W5406	劔拔式箱		板目	F2	河・中5	(19.8)	(7.5)	(4.6)	(2.5)	小口部分の破片。
683	W5025	蓋	カヤ属	板目	B	14・下	38.0	9.0	-	1.5	短辺の片方に2.5×2.8cmのつまみをつける。
684	W5096	劔拔式箱	マキ属	心持ち	B	14・下	42.5	11.4	7.8	1.6	ほぼ完形品。一方の小口から蓋を差し入れる。
685	W5086	劔拔式箱		心持ち	C	河3・上	(40.5)	(4.2)	(5.8)	(1.8)	劔拔式箱の長辺口縁部の破片。
686	W5746	劔拔式箱		心持ち	F2・3	河・中2・有機	60.2	8.85	7.6	2.2	土圧により横に変形している。内側面上部の溝は無し。
687	W6181	劔拔式箱	イヌマキ	板目	B	14・下	(59.7)	(7.8)	(5.2)	(3.0)	底部の破片。
688	W5213	劔拔式箱		心持ち	C	14・下	14.3	6.4	4.4	1.8	小型の劔拔式箱。蓋は重ね合わせ式。
689	W5246	劔拔式箱	オニグルミ	半裁材	E3	河・中2~3,集積1	49.8	26.5	6.1	5.0	中広形の箱。
690	W5917	劔拔式箱		板目	B・北壁	14	43.4	(5.5)	(2.7)	2.65	底部の破片。
691	W5068	劔拔式箱	イヌガヤ属	心持ち	A	14・下	14.5	(6.2)	4.9	3.2	未成品。小型。
692	W6066	劔拔式箱		板目	G1・2	河・下・下	(18.0)	(9.0)	5.8	1.8	小口部分の小片。
693	W5460	劔拔式箱		心持ち	E3・4	河・下・上	15.9	5.4	4.5	4.2	未成品。小型。
694	W5286	劔拔式箱	サカキ	半裁材	G	河・最下	18.7	6.2	3.9	3.5	未成品。舟形容器の可能性もある。
695	W5090	箱底板	モミ属	板目	C	河3・上	38.4	9.5	-	1.5	小口板とは2本の木釘で、底板とは3本の木釘で留める。
696	W5089	箱底板	モミ属	板目	C	河3・上	38.9	(10.9)	-	1.5	小口板とは2本の木釘で、側板とは3本の木釘で留める。
697	W5743	箱小口板		板目	E2	河・中2・低上	(8.3)	(8.7)	-	1.2	短辺と長辺にそれぞれ釘孔2あり。
698	W5886	箱小口板	モミ属	板目	F・トレンチ6	河道埋土	7.6	7.9	-	1.0	ほぼ完形品。各辺の中央付近と1つの角に円孔を持つ。
699	W5135	箱底板	ヒノキ属	柱目	B	14・上	42.8	13.7	-	1.4	完形品。小口溝あり。木釘孔が残る。
700	W5137	箱側板		柱目	F1	河・中2・低下	31.6	6.2	-	0.8	小口溝・木釘孔あり。槽作りの琴の側板の可能性もある。
701	W5580	箱側板		板目	E3	河・中5	(37.5)	(3.6)	-	1.1	木釘3つ残存。
702	W5249	箱側板		柱目	E3	河・中2~3,集積1	(24.4)	(5.3)	-	1.3	長端面には木釘が3つ残存。
703	W5009	箱側板		柱目	C	河3・上	(27.6)	(4.5)	-	1.2	円孔のある長辺に木釘2つ残存。本来2枚合わせか？補修か？
704	W5595	箱側板		柱目	D	河3・上	(24.5)	(1.5)	-	0.7	内外面ともに黒漆塗り。方形孔あり。
705	W5468	腰掛け		板目	E3・4	河・下・上	(27.1)	(11.8)	6.2	2.5	縦割れした破片で、小口側の一端も欠く。
706	W5670	腰掛け		半裁材	D	河3・上(13・下含)	(31.6)	(11.0)	7.0	3.5	1/2に縦割れしている。
707	W7172	机		板目		14	(80.0)	(11.9)	-	(5.3)	机の天板。
708	W7063	机		柱目	B	14・上	(74.9)	(10.4)	-	3.9	机の一部か？
709	W5496	腰掛け		柱目	トレンチ5	河道埋土	(15.7)	(12.7)	-	2.2	はぞ孔で切断。
710	W0055	ハケ状		柱目	河1	14	(30.3)	2.7	-	1.0	柄の中ほどを欠損している。

番号	登録番号	種類	樹種	木取り	出土地点	層位	全長	全幅	高さ	厚さ	特徴
711	W0142	ハケ状		板目	河3	下	(21.3)	2.8	-	1.9	2.5×1.8cmの楕円形の軸部に8×4.7cmの方形の頭部がつく。
712	W0133	ハケ状	コウヤマキ	柁目	河3	上	(25.6)	3.5	-	1.0	幅2.3cm厚さ9mmの方形の柄に8×3.5cmの方形の頭部がつく。
713	W5328	ハラ状		板目	F3・4	河・下・下	33.3	3.7	-	2.2	完形品。先端は両面から削って薄くする。両刃形。
714	W5554	ハラ状		心持ち	E1	河・中2・低上	25.5	2.7	-	1.8	一端を両面から薄くしてとがらせる。両刃形。
715	W6022	ハラ状		柁目	E3	河・中5・下	(39.2)	1.5	-	1.0	棒状。直線形。
716	W0025	ハラ状	アカガシ亜属	柁目	河1	14	28.6	6.2	-	0.5	鈍形の基部を首首にかけて固定し、調整に用いる物と考えられる。片刃形。
717	W5371	ハラ状		柁目	F7・8	河・中4対応	28.1	2.1	-	1.3	完形品。ごく僅かな段を作り頭部とし先端は片面を削る。杭状直線形。
718	W5064	ハラ状		柁目	B	14・最下	20.3	2.0	-	0.9	先端は両側から均等に狭まってとがり、形態は竹べらに近似する。
719	W5875	ハラ状		板目	F	河・中2・低上	(14.2)	2.9	-	0.7	身は断面長方形で、柄は扁平な円形。
720	W0026	ハラ状	カヤ	柁目	河1	14	(12.9)	2.7	-	1.2	小型のハラ形木製品で、刃部はやや鈍く両刃。
721	W0188	ハラ状		柁目	河1	14	(8.6)	3.5	-	0.8	先端を丸くし、裏から薄く削っている。
722	W5871	ハラ状		柁目	E2	河・中2・低上	(9.1)	2.3	-	0.5	先端部の破片。両刃形。
723	W5675	ハラ状	アカガシ亜属	柁目	D	河3・上(13・下含)	(13.95)	1.35	-	0.85	先端は稜を持たず弧状。
724	W5203	ハラ状		柁目	C	14・下	27.1	7.4	-	1.0	刃部側に3cm角の欠込がある。片刃形。
725	W5056	ハラ状		柁目	D	13・下・有機	31.6	2.6	-	0.5	完形品。両刃形。
726	W0247	ハラ状	アカガシ亜属	柁目	河3	下	38.7	7.4	-	1.0	スリットのある曲柄平鍔の転用再加工作品か？片刃形。
727	W0174	叩き板状		板目	河1	14	46.7	9.0	-	2.4	一部炭化。
728	W0119	叩き板状		柁目	河3	砂中	(48.7)	13.8	-	1.5	叩き板状の木製品。
729	W6014	叩き板状		柁目	F8	河・下	(36.1)	(8.0)	-	2.4	両端欠損。一方の残存端部付近は片側から幅を減じる。
730	W0125	叩き板状		板目	河3	砂中	(24.1)	(9.7)	-	1.4	形態的には錐状木製品に似る。一部炭化。
731	W0107	叩き板状		板目	河1	14	(18.4)	6.8	-	1.2	身の破片。
732	W5556	叩き板状		柁目	E1	河・中2・低上	(40.6)	(11.2)	-	2.7	縦割れした右1/4の破片。
733	W5771	叩き板状		柁目	F1	河・中2・低下	(23.5)	(5.3)	-	(0.8)	身の端部を欠損。
734	W5353	叩き板状		柁目	F5・トレンチ4 sec 餘71	(21.0)	(5.7)	-	1.5	縦割れした左1/4の破片。把手端部に頭部を作る。	
735	W5645	火きり臼		心持ち	F5	河・中5・下	(8.2)	1.5	-	1.3	両端欠損。火きり穴は中央に1つのみ。
736	W0144	火きり杵		心持ち	河3	下	(4.4)	1.0	-	0.9	端部は炭化している。
737	W5066	火きり臼	ブナ属	板目	D	13・下・有機	18.8	1.6	-	1.7	長さ18.8cm幅1.7cmの四角い棒材を利用し、火きり穴を2箇所持つ。
738	W5739	把手		板目	E2	河・中2・低上	(22.0)	(5.5)	-	1.3	一方の基部を欠く。基部には紐かけを作る。
739	W5375	把手		柁目	F5・6	河・下・上	(15.4)	(3.6)	-	(3.55)	下半を折損。付け根には紐かけあり。
740	W5375	把手		柁目	F7・8	河・中4対応	(21.5)	(4.4)	-	2.5	基部両方とも方形？孔の部分で折損。握部と基部の角度は鈍角。
741	W7106	すくい具		心持ち			39.0	24.8	-	16.4	未成品。
742	W5058	すくい具		板目	C	河3・上	(11.0)	(10.4)	-	3.2	前端部の破片。
743	W0020	すくい具	クスノキ	横木取り	河1	14	(17.5)	(9.8)	2.6	0.6	身の半分および握り部を欠く。
744	W5807	すくい具		柁目	E3・トレンチ6	河・中4～5	35.3	13.9	-	5.8	未成品。外形の粗い成形段階。
745	W5808	すくい具		柁目	E3・トレンチ6	河・中4～5	28.8	13.5	-	6.2	未成品。外形を粗く成形した段階。柄の端部と身の先端に切断痕あり。
746	W5224	すくい具	クスノキ	板目	C	14・下	28.5	(20.9)	-	(1.0)	端部に方形孔あり。
747	W5097	すくい具	クワ属	柁目	E2	河・中2・低上	28.5	16.4	-	1.3	団体のすくい具。
748	W5265	すくい具		柁目	F	河・中付近	16.0	12.3	5.2	1.5	把手を持たない。
749	W5070	すくい具	クスノキ属	横木取り	A	14・下	(16.5)	(7.0)	-	2.0	身の基部から柄にかけての破片。アカトリの可能性もある。
750	W0248	すくい具		縦木取り	河1	14	(13.3)	(5.7)	-	1.0	左側部の破片。把手を欠く。
751	W0152	すくい具		縦木取り	河3	下	31.9	13.0	-	1.6	ほぼ完形品。身の先端が炭化。
752	W5082	すくい具	クスノキ属	縦木取り	A	14・下	20.5	11.8	3.8	3.5	完形品。身は浅い。